
交差する世界

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交差する世界

【Nコード】

N2780L

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

日本と様々な異世界（主にラノベの中）の国々が、突然の転移現象に見舞われ彼らがいた世界とは全く違う異世界に飛ばされてしまう。全く違う世界同士で、果たして共に生きていけるのか。

（*当作品は作者の思い付きを書いたものなので、更新するかしないかはわかりません。また自己中心的かつ御都合主義な内容です）

（*涼宮ハルヒの憂鬱とふいふい、ジパング、超空自衛隊が原作に入っていますが、世界観はクロスしません）

pixivの方にも転載しております。

全ての始まり

ある日の日本

その日も日本は平和だった。もちろん、極一部の人間にとっては平和ではなかったが、大多数の人間にとっては何事もなく、日の出を迎えて起き、昼は仕事場や学校に行ってそれぞれの務めを果たし、そして日の入りと前後して帰宅し、家族との時間を過ごしたりしながら床に入る。

普段と何一つ変わらない日であった。否その筈であった。そう、その日が次の日との変わり目の時を迎えるまで。時計の針が午後2時59分59秒を指し、そして翌日の午前0時0分0秒となった瞬間、まだ起きていた人々はそれに気づいた。

カタ・・・

地面が軽く揺れた。注意しなければわからないくらい小さな揺れであった。

「地震かな？」

と、大方の人々は気にも留めなかった。所が、この時衛星放送を見ていた人々と、GPSを使っていた人々が最初の異変を体験することとなる。地震が起きた途端、衛星放送は突然画面が映らなくなり、さらにGPSも機能しなくなった。

「なんだ？故障か？」

多くの人は、単なる一時的な故障か電波障害程度にしか考えなかった。だが、その後それらが復旧することはいになかった。もちろん、人々は我慢の限界に達すると、放送局や管理会社に文句の電話を入れたが、それらもまた混乱のどん底に突き落とされていた。

さらに、異変はそれ以外の場所にも波及していた。衛星を含む海外からの電波は一切途絶え、送信しても相手は一切答えない。さらに、国境近くの地域や海上を走っていた艦船に飛行中の航空機は、直接的な異変に遭遇することとなる。

日本全体がその異変全てに気づくのに残されていた時間は、極僅かであった。

トリステイン王国ラドグリアン湖湖畔

トリステインとガリアの国境にある湖ラドグリアン湖。その湖畔にある村の漁師は、まだ日の出前の早朝に起きるといつものように漁のために湖へと向かった。水の精霊が住むとされるこの湖は、付近の住民にとって豊かな漁場でもあった。

ところが、漁師は船を置いた浜辺まで来た所で異変に気づいた。

「何だ！？今日はえらく波が高いな。」

普段は波の穏やかなラドグリアン湖の水面に、いつになく高い波が立っていた。そして漁師はさらに気づいた、その波から香ってくるする筈のない香りに。

「え!？」

漁師は波打ち際まで行くと、湖の水を救って口に入れて味わった。途端に口の中がこれまでに無い程塩辛くなり、漁師は水を吐いた。

「ゲホゲホ・・・こいつは塩水だ!んなバカな!」

漁師の絶叫を他所に、日の出が近付いたのか空がどんどん明るくなっていく。そして夜明けとなり、日の光がラドグリアン湖を照らし出した。

「な!？」

漁師は今度こそ言葉に詰まった。本来なら漁師の目には対岸、すなわち隣国ガリア側の山々の稜線が見えるはずであった。ところが、彼に目に映ったのはどこまでも続く蒼い水のみであった。ラドグリアン湖で生まれ育った彼は見たことなかったが、それはこれまで彼が聞いてきた「海」そのものであった。

「一体何がどうしたって言うんだ!？」

この時漁師はまだ知らなかったが、この時トリスティンの隣国であるガリアやゲルマニア、グルテンホルフなどの国境地帯に住んでいる住民たちもまた、同じセリフを口にしていた。

本来なら地続きであるはずの国境地帯。その向こう側に広がっていた陸地は一切消え去り、広がっていたのは広大な海原だけであった。このあり得ない事態は、比較的早い段階で王都トリスタリアに伝えられることとなる。

フォルティアース大陸東部・連合帝国首都サクラス

「あら？」

修道院の一角にある天体観測施設の屋上にて、深夜にも関わらず星の観察を続けていた女性が首を傾げた。

「どうかしたの？アステル。」

もう1人の少女が声をかける。

「おかしいわね。さっき観察した時と星座が全然違うのよ。」

アステルと呼ばれた女性が、望遠鏡を覗きながら首を傾げる。

「何を言ってるのよ。そんなことある筈無いでしょう？」

星座が変わるなど有り得る話ではなかった。もちろん、星は自転するし天候が悪くなるなどして違うように見えることはありえる。しかし、30分程度の時間差では変わる範囲はタカが知れているし、また空も相変わらず晴れ渡っていた。

「だったらあなたも見てみなさいよ。ほら、これが30分前に観察したときの星の配置よ。」

「はいはい。わかったわよ。」

アステルは彼女に望遠鏡を勧めた。もう1人の女性は気乗りしないようだったが、望遠鏡を渋々覗く。そして星の配置を確認するとアステルが渡した観察図と照らし合わせる。そして、すぐに彼女も首を傾げた。

「あら？本当だ。全然違うわね。」

「ほら、言ったとおりでしょ。」

アステルがそう言うが、女性はまだ信じられないらしく首を傾げている。

「けど、こっちの方が見間違えてことも有り得るんじゃない？」

そう言って先ほどアステルが観察した図をピラピラと揺らす。もちろん、当の観察者であるアステルにしてみれば承服できることはない。

「そんなことないわよ。ちゃんとやったんだから。だったら、昨日の観察図と比べて見ましよう。私取って来るから待ってて。」

5分後、昨日の記録紙を持ってきたアステルは今現在見える星座との照合を行う。

「嘘……」

「全然違うわ。まるで別の星へ移動したみたいね。」

「まさか。そんなこと有り得ないわよ。」

アステルの発言を否定する女性であったが、アステルの発言こそ正しかったと知るのはいずれからしばらく後のこと。

ロクシアーク（ロクシエ）連邦首都 同国鉄運転指令所

ロクシエ国内を走る国鉄線の運転指令を行う指令所。平常運転の監視を行うと共に、万が一路線上でトラブルが起きた場合にはここから対策を講じて、指令を出す。壁には各路線の線形を模した電光式の掲示板が取り付けられており、列車がどこを走っているかが電球の点滅でわかる仕組みになっている。またトラブル発生時には別の電球が点滅する仕組みだ。

「あれ？」

1人の指令員が声を上げた。それは先ほど感じられるかられないかわからない位に小さな地震が起きた直後であった。

「どうした？」

最近前任者から交代したばかりの指令長が、指令員に尋ねる。

「ルト二河の鉄橋にトラブルが起きたようです。」

この星には楕円形の大陸が一つだけあり、そのど真ん中を突っ切っているのがルト二河だ。この河を越えたとお隣のベゼル・イルトア王国連合、通称スー・バー・イルだ。現在ロクシエ国鉄はルト二河に架かる鉄橋を介して、スーバー・イルとの間に大陸横断特急を初めとする国際列車を運行している。

ルト二河の鉄橋はそういう意味で重要だ。しかし、今回そこで何らかのトラブルが起きたらしい。信号が赤になったまま変わらなくなってしまったのだ。しかし、列車が立ち往生しているわけでもないし、天候不順でもない。信号トラブルのようだ。

「仕方がないな。一端全ての列車を止めて、保線員を派遣しろ。それからスーバー・イルの司令室に連絡だ。・・・全く、前任者から引き継いだばかりの時に、国境でトラブルなんて起きなくてもいいじゃないか。」

指令長は、着任後直に起きた厄介ことにぼやいた。

連絡橋でのトラブルは、河の中間を挟んで半分を所有しているスーバー・イルにとっても問題である。橋上で何らかのトラブルが起きた場合は、すぐに双方共に連絡を入れなければならない。ところが、その連絡用電話を取った職員が首を傾げる。

「変ですね。ウンともスンとも言いません。」

「何？まさか、電話も故障か？」

「多分。」

指令員は受話器を叩いたり、何度か取り直して通じないか試したが、全くだめであった。

「おい、電話線もすぐに調べるんだ。」

「了解です。」

「まったく、とことん付いてないな。」

この時は、その程度にしか認識していなかった。しかし、それから1時間後に掛かってきたルト二河鉄橋の袂にある保線事務所からの電話に、彼らは驚愕することとなる。

「大変です！橋が！橋が途中からなくなっています！！」

ある日の早朝の日本

その日は平日であった。人々は勤め先へと出勤し、さらに学生たちは学び舎へと登校し始める。しかしながら、既に多くの人々は騒ぎ始めていた。

「国際電話が通じない！どうなってるんだ！これじゃあ海外の支社との連絡が取れないし、交渉も行えない！早くなんとかしてくれ！」

「衛星放送が復旧しないってどう言うことだ！」

「海外のサイトに繋がらない！一体いつになったら直るんだ！？」

電話会社やインターネット会社、放送局に苦情が殺到していた。もちろん、職員は全力で対処していたが、彼ら自身大混乱だった。何せ、彼らの方から海外に連絡を試みても一切通じないし、衛星の電波自体が全く探知できなかったからだ。

こうした海外との連絡途絶と衛星との通信途絶は、その他の面にも影響が大きかった。気象庁は衛星からのデータが一切入らない。つまりまともな気象観測が出来ない。東証は海外における取引情報が入手できず開けない。

もっとも、こうした障害は間接的なものでしかなかった。既に異変を肌で感じている人が多数出ていた。例えば、日本海側にあるリーダーサイトや、艦船からは以下のような報告が引つ切り無しに挙げられていた。

「朝鮮半島がない！」

「竹島を探知できない！どうなっているんだ！？」

「海外へ向かっていた航空機や艦船が消失！」

当初は「何をたわけたことを。」と連絡を受けた警察や海保は考えていたが、その件数は膨大であり、さらに自分たちの巡視艇からも同じ報告が及ぶに至り、ただならぬ事態が起きたのがわかった。

一方、各自衛隊は最も早くこの以上に気づいた。そりや当然である。リーダーからいきなり国境を接している島や半島が消失すれば、誰だって何か起きたとわかる。もっとも、当初は電波妨害や機器の故障も疑われたが、すぐにそれは否定され、異変が起きた1時間後

には内閣にもその異常が伝えられた。

そして海外との連絡が全て絶たれ、電波の受信も不可能になったことも明らかとなり、夜明けと共に各自衛隊基地や海上保安庁の基地から続々と航空機や艦艇が出港し、日本周辺の調査に当たった。

全ての始まり（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。なお、当作品は思い付きを文にしたものです。また作者自身多忙で更新できるか出来ないかわからない状況です。ただせつかく思いついたから書いて文にいただけです。その点に関する批判は一切受け付けませんので、悪しからず。

接触（前書き）

意外と読者数が多いので、取り敢えず5話程度まで更新していきたいと思います。

なお竹島についてですが、これはあくまで作者の私見であり、この点に関する抗議は受け付けません。

接触

1日目午前10時前 日本・東京

この日起きた混乱は、時を追うごとに広がっていった。海外との連絡が絶たれたことで、海外との貿易を行っている企業は軒並み開店休業を強いられた。また東京証券取引所を始めとする株の売買なども、海外からの取引どころか一切の情報が入らないために、事実上機能を停止していた。

国外を結ぶ航空便や各種航路も、目的地との連絡が一切取れないと言つ異常事態に見舞われてしまい、欠航を余儀なくされた。

こんな状況であるから、国民が不安を持って当然（何せ万単位の人間が影響を受けた）である。悪いことに、日本ではメディアが発達しているため情報の巡りも早かった。朝のニュースはこの異常事態を大々的に報じていた。さらにデマや不確かな情報まで飛び交つてしまい、混乱に拍車をかけることとなった。

警察や各種官公庁の電話は朝から鳴りっぱなしで、職員がその対応に追われた。もつとも、対応と言つても「現時点では何もわかりません。」以外言いようがなかった。

一方政府は、既に早朝の段階でこの異常事態に対して閣僚たちを招集していた。日本政府は、長く続いた自公政権による政治の腐敗、さらにその後決断力のない民主党政府の迷走と、政治的に不安定な状況が続いていた。だが、先日の総選挙で自民・民主を始めとする既存政党や既存政治家への失望からか主に新規新鋭若手の政治家が当選し、現在は民主党から立候補した若干30歳の春川響ハルカウキョウが首相と

なっている。

ちなみに、この春川首相は普段はやる気のないどこにでもいそうな男であったが、言うことは非常に単純明快論理的であり、人間的にも面倒見が良いので本人が望まぬ内に首相になったという変り種だった。

その春川首相率いる内閣が命じたこと、それは極々当たり前かつ重要なことであった。まず無線その他あらゆる連絡手段を持って諸外国との連絡を付ける様全力で努力すること。さらに、自衛隊や海上保安庁などの哨戒機や偵察機で日本の周辺の状況を今一度確認することであった。

海保はともかく、自衛隊を無闇に動かすのは野党あたりが過敏に反応しそうなことであるが、あまりに有り得ない異常事態であることから首相らは決断していた。実際には、今回の事態は後に一種の災害であるとされたから、特に問題とはならなかった。

この命令を受けて、各地の基地から艦艇や航空機が出動した。沖縄の那覇飛行場や硫黄島^{いおうとう}飛行場からは海自のP3C哨戒機が。小松や三沢基地からはRF4EJをはじめとする空自保有機が夜明けを待って出動した。

そうして朝9時を回る頃には、段々と状況が掴めて来た。まず、日本に属する領土とは連絡が全て付いた。また日本の領域に囲まれている海域を走っていた艦船や航空機とも連絡が付いた。

逆に朝鮮半島、千島列島、樺太、竹島、台湾の消失が正式に確認された。さらにその後、小笠原の先にあるマリアナ諸島と日本海を挟んだ大陸であるロシア沿海州の消失も確認され、日本周辺の国々

の消失が正式に確認された。

もちろん、これによってもたらされた波紋は大きかった。しかし、何故か政府内における混乱は小さかった。特に春川首相は、まるでこのような有り得ない事態に慣れきっているかのごとく、あまりにも冷静であった。

「とにかく、記者会見の準備だ。色々難しいことは後で考えよう。今は国民のパニックを抑える方が先だ。」

春川首相はそう言うと、記者会見の準備を始めた。

「さすが春川首相、有り得ない事態を前にしても全く動じていない。」

「まあ奥さん……春日^{ハルヒ}さんがあれだからな。」

「ああ、高校以来の付き合いらしいが、確かにあんな癖のある人相手じゃ、どんなことにも冷静になるよな。」

閣僚たちは、首相の奥さんの姿を思い出しながらそんなことを言い合っていた。

1日目正午前 トリステイン王国・トリスタニア

隣国が突如して消失し、国境沿いは全て海になっているという俄かに信じがたい事態は、意外に早く王都へと伝わった。科学力は低

いが、『ガーゴイル』や伝書フクロウと言った手段を活用することで、それが可能となっていた。

もつとも、情報が早く届くとそれが有効に活用されるかは別問題である。当初この報告は、あまりにもバカバカしいものとされたからだ。

「そんなバカなことがあるか！寝言はベッドの中でも言っている！」

普段は温厚な性格として知られているマザリーニ枢機卿も送られてきた報告を聞いて怒ったくらいである。それほどまでに有り得ない事態であった。だから最初この情報は性質の悪いデマか冗談と受け止められた。

状況が変わったのは、午前中に各地の国境周辺の領主からなされた報告である。いずれも名のある領主たちの直筆とサインがしたためられたそれらの報告も、同様の内容が書かれていた。

「これは、一体どういうことだ？ヴァリエール公爵まで気が変になったと言うのか！？」

最後に送られてきた手紙を読んだマザリーニは、手をワナワナ震わせながらそう零した。ヴァリエール公爵は王家の遠縁に当たる名家である。その当主までもが同様の報告を送ってきたのである。

「枢機卿、冷静になりなさい。」

マザリーニそう諭すのはこの国の真の主、アンリエッタ女王であった。若干18歳という若い王でありながら、最近の彼女には王に

しかない威厳が芽生えていた。

「しかし陛下、有り得ません。隣国が全て消え、国境の向こう側が海になっっているなど。」

それはあまりにも信じられない事態だった。まだアルビオンのように浮き上がったという方が説得力がある。

「確かに信じられません。しかし、ヴァリエール公爵たちが嘘を言うとも思えません。少なくとも何か大変なことが起きたのでしよう。」

「戦争を経験し、政治家として女王として成長してきたアンリエッタもまた、比較的冷静だった。」

「こうしてはられません。枢機卿、至急船か馬車の手配を。国境地帯へ向かいます。この目で事実を確かめます。」

「はあ、わかりました陛下。直ちに。」

「アニエス、護衛をよろしくお願いします。」

アンリエッタは部屋の隅で待機していた、銃士隊隊長にも声を掛けた。

「は。」

こうしてアンリエッタの緊急地方視察の準備が始められようとした時、彼らの耳に聞きなれない音が聞こえてきた。

「「「？」」」」

「何かしら？」

「さあ、わかりません。」

3人は窓に駆け寄った。

同時刻トリスタニア上空高度1000m

硫黄島飛行場には、本土の厚木基地より派遣されたP3C哨戒機が配備されており、その内稼動する全機が朝から偵察活動に出動していた。飛び立ったのは計3機で、内1機はマリアナ諸島へ、もう1機は西へ、そして最後の1機は北へ向かって発進した。

本来西と北へ向かへば、何もない大海原があるばかりで、見えるのはその海域を航行する船舶くらいの筈であった。だから乗員たちは何事もないフライトを行い、予定地点で引き返すだけと思っていた。

GPSが使えない点は不便といえたが、それ以外にもレーダーや各種航法機器を備えている優秀なP3Cであるから、乗員たちが不安に感じることは何もなかった。

そう、不安は感じなかったが、彼らはそれ以上の驚愕を味わうこととなった。出発してから2時間ほどして、突如レーダーが進路上

に島影らしき物を捉えたのである。

レーダー員は最初レーダーの故障を疑ったが、いくらレーダーをいじっても島影らしきものは消えず、徐々に近づいているのだけがわかった。そして、しばらくすると本当に大きな島が確認できた。

「おいおい、俺たちは夢でも見ているのか？」

機長でベテランパイロットの太田一尉も、目の前に広がった光景に唖然としてしまった。早朝から信じられない事態が続いているとは言え、実際に自分自身で目にすれば実感は全く違ったものとなる。

「どうしますか？引き返しますか？」

副操縦席の小原三尉が不安げに尋ねた。

「いや、命令に変更はない。このまま偵察を続行する。」

P3Cはそのまま謎の島の上空に侵入した。もちろん、大田は部下に基地への報告と眼下に広がる光景の写真撮影とビデオ撮影を命令している。また通信機を使い、反応がないか探った。しかし通信機への返信どころか、レーダー波など電波らしき物は一切感知できない。

そしてP3Cは何事もないまま島の内部へと進入していく。途中で集落や村らしき物を確認したが、そこからも電波の発信は一切認められなかった。さらに信じられないことに、地上を撮影すると馬車らしきものやたら古臭い建物が写りこんでいた。

有り得ない事態が連続する。そして土地が開け、一際大きな街の

上空に出た所で、彼らはこの日最大の驚愕を覚えることとなった。

「こいつは・・・ヨーロッパか？」

街並みや街の外縁にあるお城の姿から見て、街は日本やアジアのそれではなかった。映画や童話で見るような、昔のヨーロッパのそれであった。

さらに彼らを驚かせたのは、地上から上昇してくる物体だった。

「な、なんだありや!？」

それはどう見ても、ドラゴンであった。

「ドラゴン・・・もとい、謎の飛行物体接近！」

「エンジン出力を上げる。一旦離脱する。」

「了解!！」

追跡を受けたため、P3Cは4基のターボプロップエンジンを全開にして加速・上昇した。追ってきたドラゴンらしき物体は、それに付いていけず取り残された。

「今の、写真に収めたか？」

太田は部下に確認した。

「はい。」

「一体どうなっているんでしょうね？」

小原が太田に尋ねる。しかし彼にできる返答は限られていた。

「知るか。」

それからしばらくして、P3Cは平原にポツンと立つ大きな建物の上空を通過した。その姿を、ジッと信じられない目で見つめる1人の少年がいた。

「う、嘘だろ!？」

彼は慌てて走り出した。

「ちょっと！才人どこへ行くのよ!？」

その彼を追う1人の少女。

「決まってるだろ！ゼロ戦の格納庫だよ!！」

5分後、エンジンの爆音も高らかに、1機の戦闘機が急上昇していった。

接触（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

と言うわけで、最初の接触はゼロ魔です。作中の日本は2012年頃を想定しています。ちなみに首相とその奥さんはある作品のキアラがモデルです。

なお時系列ですが。ゼロ魔はアルビオン戦争後でガリアとの戦いの前くらい。くじびき勇者はメイベルが大陸統一をした頃、つまりドラゴン戦役直前。そしてアリソンとリリアはトレイズとリリアがダンスした直後です。

各国の状況

1日目昼 トリステイン王国・魔法学院上空

その光景はP3Cの乗員たちにとって信じられない物だった。突然下方から上昇してきたのは、レシプロ式の戦闘機だった。しかもなんとそれは、日本人なら誰もが一度は名前を聞いたことがあるはずの、太平洋戦争中の主力戦闘機ゼロ戦だった。さらに驚くべきは、コックピットに乗り込んでいる2人の人影だった。

「一体どうなっているんだ！？何でゼロ戦が！？それにコックピットに乗っているのは少年と少女だぞ。もう訳がわからん。」

副操縦主の小山三尉はパニック寸前だった。それに対して、機長の太田一尉は内心驚いていたものの、小山よりは冷静だった。

「とにかく、交信を試みよう。無線で呼びかけてみる。それからあのゼロ戦も撮影しておけ！」

だが、各周波数で発信した無線には相手は一切応答しなかった。ただ相手の少年はしきりに手を振っているのが見えた。

「取り敢えず、こっちも手を振ってやろう。」

「はい。しかし機長、あの少年。どう見ても日本人に見えるのですか？」

窓越しに手を振りながら、小山は言う。

「ああ。だが話すことが出来ない以上、どうにもならん。」

その後ゼロ戦はしばらく並んで飛んでいたが、燃料の関係か最後にパイロットの少年が大きく手を振ると、翼を翻し、引き返していった。そしてP3Cは、そのまま再び海上に出た。

「一体何だったんですかね？さっきのは？夢でも見ていたんでしょ
うか。」

「わからん。だが夢じゃない。そして、これだけはいえるぞ。どう
やらとんでもないことになっているようだ。」

「撮影したビデオや写真を見て、上の人たちはどう思いますかね。」

小山の言葉に、大田は返す。

「ユーモアがわかる人間じゃなきゃ、簡単に信じてはくれんだろう
な。」

一方P3Cを見送ったゼロ戦の機上では。

「ねえ才人、さっきのは一体何なのよ？」

ルイズが先ほど見た飛行機の正体を才人から聞いていた。

「あれはP3Cで言う、自衛隊の飛行機だよ。」

「自衛隊？」

「俺の国の、軍隊みたいなものかな？あの飛行機は、その自衛隊の飛行機なんだ。」

自衛隊は一応軍隊ではないが、軍隊に近いものなのでそう答えておいた。

「なんでそんなのがトリステインを飛んでたのよ！？」

「わからない。俺やシエスタの爺ちゃんみたいに飛ばされてきたのか・・・無線機が積んであればな。」

才人のゼロ戦の無線機は、ルイズが乗るためのスペース確保のため現在は降ろしている。そのため、交信する手段は一切なかった。もともと、積んでいても才人に扱えたかや使えたかと言う疑問は残るが。

「取り敢えず、学院に戻ろう。」

才人はルイズとともに、魔法学院へと戻った。彼が王宮から急な呼び出しを受け、ルイズと共にトリスタニアの応急へ向かうのはそれから2時間後のことであった。

一方竜騎士の追跡を振り切り、ゼロ戦との邂逅に仰天した太田一尉らのP3Cは同じ頃に硫黄島基地に帰還し、自分たちが見たことを報告すると共に、撮影した写真やビデオを引き渡した。それらは直ちに本土へと運ばれ、夕方には首相官邸にも届くこととなる。

異変に遭った国の内、経緯度の関係から最も早く朝を迎えたのはロクシエであった。

早朝、突如として起きたスー・ベール・イルの消失（実際はロクシエの方が元の世界から消失していた）は、日本ほどの衝撃を与えていなかった。この世界の科学レベルは日本から見て1940年代前後のそれであり、情報化社会には程遠い。つまり、一般人の生活への影響が小さかった。

さらに言えばつい20年前まで両国はそれぞれ国内自己完結型の経済であり、現在も多少は影響が出るにせよ相手が消失しても経済を成り立たせることが可能だった。

また政府もあまりの異常事態に、しばし報道を見合わせた。これによって国民が知るまでの時間を稼いでいた。

それでも政府やスー・ベール・イルとの貿易を行っている企業や大使館、さらにはロクシエ在住のスー・ベール・イル人には大問題であった。それが表面化するまで時間はあまり残されていなかったし、実際にその予兆は現れていた。

お金持ちの子息が多く通う上級学校。首都郊外に建てられた校舎の廊下を、ブレザー姿の少女が走りぬけていく。

「ふう、間に合った。」

1人の黒髪の女子生徒が、教室へと滑り込んだ。息を荒げながら席に座る彼女に、近くに座る茶髪の女子生徒と黒髪の男子生徒が声をかける。

「おはようメグ。」

「メグミカさん、おはよう。」

「おはよう、リリアにトレイズ君。」

リリア、リリアーヌ・シュルツとトレイズ、トレイズ・ベインはメグの親しい友人であった。

「珍しいわね、メグがギリギリだなんて。」

「うん、ちょっと朝から家の方がバタバタしちゃって。」

「何かあったの?」

トレイズが尋ねる。

「うん。実はお父さんが、朝早くに会社へ呼び出されて。スー・ペー・イルとの連絡が取れなくなっちゃったらしくて。」

メグはロクシエ人ではなくスー・ペー・イル人だ。父親が貿易会社に勤めており、その関係でロクシエに住んでいる。メグも愛称であり、本名はシュトラスキー・メグミカである。

「さあ?私にも詳しいことはわからないんだけど。お母さんも大使

館に問い合わせたりしたんだけど、大使館の方にも電話が中々繋がらなくて。」

「テレビじゃ何も言ってなかったけど。」

「新聞にも、何も載ってなかったし。」

リリアの言葉に、トレイズも続ける。

「何もなければ良いんだけど。」

心配そうに言うメグに、リリアが明るく言う。

「大丈夫よ。心配しなくても、多分何か軽いアクシデントがあっただけよ。メグが心配することは絶対じゃないって。」

「うん。そっだよな。」

リリアに励まされ、メグは表情を明るくした。

「ところで、セロン君は？」

彼女は同じクラスのもう1人の親しい友達がいらないことに気づき、今日室内を見回した。彼女の疑問にはトレイズが答えた。

「セロンなら図書室へ行ってるよ。多分、直に戻って来るよ。」

すると、噂のセロンが教室に戻ってきた。

「おはようメグミカさん。」

「おはようセロン君。」

こうして彼らの何気ない、いつもと変わらぬ日常が始まる筈であった。まさか、自分たちが以前いた世界から完全に切り離され、異世界に飛ばされているなど想像すら出来なかった。

まもなく始業のチャイムがなり、担任である茶髪に眼鏡の男性教師が入ってきた。

1日目昼 フォルティアース大陸東部・連合帝国首都サクラス

異変に遭った国で、フォルティアース大陸に付随する国々も異変に気づくまでに時間が掛かっていた。この国では別に政府が情報を制限したわけではなく、元々大陸の外との交易がなかったのが原因である。そのため経済その他は全て国内における自己完結型で、やはり元の世界から切り離されても支障を来たすことはなく、国民の大部分は何が起きたか知らなかった。

一応、大陸の端などでは陸地が分断されて海になってしまふなどの現象が起きていたが、いずれも境界の無人地域での出来事だったため、気づくのが遅れていた。

しかしながら、若い聖女兼君主様の耳には既にその片鱗の情報が入ってきていた。

「星座が一晩で変わったなんてありえないわ・・・けど、アステル先輩が嘘を報告するはずがないし。」

帝国議会の自分の部屋で考え込んでいる少女は、メイベル・ヴァイス。若干18歳の少女でありながら、南アルテース共和国連邦大統領にして、西アルテース帝国公王である。しかも、数々の発明でフォルティアース大陸の発展を牽引していることから、議会議員ではないものの個室を与えられていることでもわかるとおり、有力な人物である。

そのため、最近の彼女は南へ西へ、さらには首都へと移動を繰り返している。今日はたまたま首都へ戻ってきていた。そして彼女は昨日の天体観測係の修道女アステルの後輩であり、親友だ。その親友からの情報に接して、メイベルは言いようのない不安に襲われていた。

「星座が変わって何か問題があるのか？メイベル？」

軽い口調で問いかけてくるのは、ナバル・フェオール。元救世の勇者であり、現在はメイベルの護衛兼出納係である。メイベルとは、恐ろしい感染症デスペランの解決の旅以来のコンビだ。ただし、メイベルが博識かつ理論家であるのに対して、ナバルは考えるのが嫌いで手が先に出るタイプだ。

「大有りよ！一日で見える星座がガラツと変わるなんて有り得ないわ。何かとんでもないことが起きたに違いないわ！」

「ふーん。けど、今日もサクラスは平和だぞ。国内からも何か起きたなんて報告は来てないし。」

「ナバル、もつと深刻に考えてよ。これは宇宙全体に関わるような大きな問題かもしれないのよ！もしそうだったとしたら、サクラスやこの大陸なんか問題じゃないわ！」

と、メイベルは訴えるが、深く考えるのが苦手、と言うか嫌いなナバルにはそもそも宇宙を想像することすら億劫なことだった。

「うーん、俺にはさっぱりわからん。」

情けない答えに、メイベルも苛立つ。

「もっ！」

「悪い。考えるのは苦手だ。もつと簡単に言ってくれ！」

「簡単に・・・そうね、一番手っ取り早く言えば、この星自体が危機に瀕しているかもしれないってことよ。星座が変わったってことは、星がこれまでとは違うコースで公転しているとしか考えられないわ。そうなったら、とんでもない天変地異が来るわ。飢饉、大寒波、大津波・・・世界の終わりってことかしら。」

「て、そりゃ大変じゃないか!？」

「だからさっきからそう言ってるじゃない!」

「で、なんとかする方法はあるのか?」

「え!?!いや・・・無いわね。」

さすがの聖女様も、宇宙規模での天変地異を止める力など持ち合

わせている筈が無かった。

「そうだろうな。さすがのメイベルも、世界の終わりを止めることはできないよな。」

「ちよつとナバル！何でそんな平然としてられるのよ。世界の終わりってことは死ぬのよ！」

「それも運命だよ。どうしようもないんなら、俺はその運命を受け入れるだけだ。」

メイベルとナバルにはもう一つ大きな違いがある。メイベルは修道女でありながら、この国の宗教であるソルティス教が嫌いであるのだ。ソルティス教は重要な行動をくじびきで決める慣習がある。ナバルはこのくじびきを神聖なものであると思っていたし、運命と言う物を信じていた。対してメイベルは、自分の運命は自分で開くが心情で、例え宗教的なくじびきでも、それを嫌がると宗教人として有り得ない姿勢を採っていた。

「私はそんなの信じないわ。もしかしたら何か出来るかもしれない。この世界の終わりが来るなら、何が何でも立ち向かってやるうじやない！」

そう言つと彼女は立ち上がり、部屋から出て行く。

「おい！どこへ行く？」

「どこへって、決まってるでしょ！大司卿やクリプトン卿に相談するのよ！」

「書類仕事はまだあるんだぞ！」

「そんなのは後！」

「やれやれ。」

ナバルも手を止めると、彼女の後を追った。

メイベルはあんなことを言っていたが、実際に起きていたのは世界の終わりではなく、新たな世界の始まりであった。そして彼女は先ほど言ったとおり、その新たな世界に立ち向かう役目を負うこととなる。

1日目夕方 日本・首相官邸

この日正午前に春川首相が発表した驚愕の事実、テレビやラジオを通して瞬く間に日本中に広がっていた。春川は国民に冷静に対応するよう呼びかけたが、日本以外の国が全て消えたと言う事実、冷静でいられるほど、日本人は大人ではなかった。いや、むしろ問題だったのは国民よりマスコミだった。

国民の大多数は、今回の問題があまりにも大きく理解不能だったところ、その直後からマスコミが日本以外の世界が消えた場合について、安易な情報を流し始めた。

これによって起きた問題は、容易に想像が付く所であった。

「各地で買占めや、暴動に近い事態が頻発しています。このまま行きますと、警察だけでは対処出来ない可能性があります。」

閣僚からの報告に、首相は頭を抱える。

「日本人って言うのはどうしてこうも簡単にマスコミに扇動されるかな・・・」

「しかし首相、実際問題あらゆる資源の輸入が閉ざされたのは大問題です。」

そう言うのは、副首相の小泉樹副首相兼国家戦略担当大臣だ。彼は首相の高校の同級生にして、冷静な副官格の人物であった。議員ではなく、民間から内閣に抜擢された。

「だよな。」

日本以外の世界が消えたことで、日本にとって必要な資源や食料の輸入が完全に途絶えてしまった。日本の領海内を航行していた船は無事だったが、これらから物資を降ろしたらそれで終わりであった。

現在の日本の食糧自給率は最近の向上策で50%まで伸びたが、依然半分だ。主食である米はなんとかなるが、肉や魚、野菜や米以外の穀物類は大幅に不足すること間違いなしであった。実際には、ある程度備蓄されているから、すぐに国民が飢えることはない。しかし、マスコミに踊らされた国民は躊躇することなく商店に殺到している。

加えて、石油や鉄などの鉱物資源は日本国内では全く出ないから、最悪明日からでも電力統制や配給制度に切り替えねばならない。国民の反発は必至だが、そうしないと国自体が滅んでしまう。もっとも、こちらにも既にガソリンスタンドでの買占めが起きているらしい。

「それだけではありません。第3種産業は軒並み壊滅するでしょうし、第2種にしても輸出先が消えてしまったのでは……」

最後には消え入りそうな声で言うのは、経済産業大臣だ。海外での生産や輸入に国家経済を大きく依存している日本にとって、それらの国が消えたのは死活問題だった。既に経済界や各企業の重役たちからの面会依頼が殺到していた。

他にも在日米軍問題や、在日外国人の問題もある。考えただけで頭がおかしくなりそうなほど、問題は山積していた。

だが、そんな大混乱の異常事態下にあつて首相は本当に冷静だった。まるでこんな事態を何度も体験したかのように。

「とにかく、今は国民に冷静になってくれるよう呼びかけるしかない。それから、農水大臣と経産大臣は当面の対応策を急いで作ってくれ。それで、日本周辺の様子についてはどうなんだ防衛大臣？」

春川は防衛大臣である石川を呼んだ。彼は元自衛官で、防衛には明るい。折りしも彼の就任時は日本海や黄海、東シナ海での武力衝突が頻発していた時期だった。防衛に関する知識がほとんどなかった春川にとっては得がたい人材だった。

彼は今、海上幕僚長を伴って閣議に参加していた。

「現在海上保安庁と各自衛隊が全力で付近一帯を捜索中です。しかし、発見されたのは先ほど見せた島だけです。」

「そうか・・・それにしても、ドラゴンにゼロ戦とは。」

春川は先ほど見た硫黄島基地より送られてきた画像と映像をのこを思い出した。

「あの少年については？」

「現在警察庁が全国の警察に命じて、全力調査中です。」

国家公安委員会会長が答える。

「急いでくれ。それから、防衛大臣と海上幕僚長は発見された島の勢力との連絡、何が起きるかわからないから十分に気をつけてやってくれ。」

「わかっております。」

全く知らない未知の勢力、しかも国と思しきそれとの接触。戦後始まって以来のことであるが、やらなければならないことであった。既に前の会議で、周辺海域捜索に出動した海上自衛隊第一護衛隊群所属の1個護衛隊と海上保安庁の巡視船2隻が現地に向かっていた。また外務省から特使が派遣されていた。

春川が彼らに期待するところ大であった。

その時、新たな報告がもたらされた。

「総理、新潟と秋田から連絡が。」

「？」

各国の状況（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

動き出す世界

1日目夜 トリステイン王国・トリスタニア トリステイン王室王宮

「月が1つだけだ。」

急な呼び出しを受け王宮へやってきた才人。彼は今、夕方から始まったアンリエッタ女王との話をようやく終えて、用意された部屋へ向かう途中であった。

話の内容は突如トリステイン上空に現れたP3Cについてであった。才人は知っている限りの説明をしたが、元よりタダの高校生だった彼の知識は大したことなかったし、どうして現れたかもわからなかった。それでも、色々な質問をされたために、時間が掛かってしまった。

ようやく解放され、休憩を得られるとホッとしながら歩きつつ、何気なく廊下の窓から彼は空を見上げた。そしてそこで、才人は久しぶりに見る1つだけの月を見ていた。月齢の関係で、昨日は月を見るとことが出来なかった。しかし今日の夜の空は晴れ渡り、空には白く光る月が1つだけ出ていた。

才人にとっては懐かしいとしか言いようがないその光景。しかし、ハルケギニア出身者からしてみれば信じられない光景だった。何故なら、ハルケギニアの月は2つだからだ。

「う、嘘!？」

才人の隣では、ルイズが呆然自失の状態で月を眺めていた。そし

てしばしの沈黙の後、大声で叫んだ。

「何で月が1つだけなのよ!？」

その声に驚き、王宮内の使用人や終いにはアンリエッタやマザリ―二枢機卿たちまでやってきた。そして、揃って空を見上げ、ルイズと同じく呆然となってしまう。

「これは……」

アンリエッタもあまりのことに言葉が出なかった。

その場にいる人間たちが、ただただ驚いてばかりいる状況で、人の脳裏に思い浮かんだことがあった。

「まさか……」

「まさかって、才人何かわかるの？」

周りの人間が一斉に才人の方へ振り向いた。

「いや。あくまで推測だけだ。」

「推測でも構いません。言って下さい。」

アンリエッタが才人に詰め寄った。

「はい。その、とても信じられないと思うけど。多分トリスティン
は……」

2日目早朝 日本・東京 首相官邸

「違う世界か。・・・あいつが聞いたら、飛び跳ねて喜びそうなネタだな。」

春川首相は、妻の姿を思い浮かべながら苦笑した。

「首相？」

春川首相の言葉に、説明していた学者先生の1人が反応した。

「ああ、すまない。なんでもない。説明を続けてくれ。」

「それでは。」

首相官邸の会議室で、春川ら閣僚たちは学者先生方の説明を受けていた。色々と小難しい話も出てきたが、その学者先生方が出した結論と言うのが、先ほど春川が漏らした言葉だった。原因は一切わからないが、日本は地球ではない別の星へと移動してしまっていた。

信じ難い事態だが、証拠はいくつもある。日本以外の諸外国の消失もそうだが、人工衛星が1つ残らず消失しているし、観測された星座や月の模様も全く違った物になっていた。さらに、先ほど届いた連絡によれば秋田や新潟、静岡の古い油田地帯で、原油が自然に湧き出していると言う。しかも、未確認情報だがその原油は粘度の

低い、質の良いものらしい。

ただし、幸か不幸か日本が現れたこの星は地球と同じ大きさ、同じ自転速度であるらしく、さらに経緯度もほぼ同じであった。そのお陰で、いきなり日本列島が氷河期に突入したり、熱帯になるということはなかった。

「それで、我々が地球に戻れる可能性はあるのかね？」

1人の閣僚が聞くと、学者らはいずれも答えに窮した。

「まあ、原因がわからないんだから、何とも言えないだろうな。」

春川が学者らの言葉を代弁した。

「首相の仰るとおりです。我々は日本がどこか別の場所に移動したと言うことは確信しています。しかし、どうしてこんなことが起こったかについては、全く見当が付きません。原因がわからなければ、今後どうなるかを予想するなど不可能です。明日いきなり戻るかもしれませんし、永遠にこのままかもしれません。」

「なんてことだ・・・」

学者の言葉に、年配組の閣僚は頭を抱えた。

「まあ、なってしまったものは仕方ありません。今出来る対策を打っておきましょう。それも、最悪のケースを想定して。」

副首相の小泉がいつもどおりに淡々と言う。彼の言う最悪のケースとは、当然地球には戻れないと言う前程だ。

「そうなるتماず問題になるのは食料です。」

農林水産大臣が言う。彼は昨日の命令を受けて、大雑把ではあるが今後予想される事態と対応策を報告した。

「米はなんとかなるでしょう。しかし、それ以外の食料品はすぐに不足を来たす筈です。」

日本の食料自給率で、なんとか自給できるのは主食である米くらいだ。しかしながら、例えば小麦の場合は10%にも満たない。同様に大豆や塩もそうである。

資本主義の原理に則り、安い方へと突っ走ってきたこれまでの行いのツケが、噴出する形となった。

「すぐに対処できるのは、せいぜい魚位です。あとは、休耕田を至急田畑へ戻す以外にありません。畜産業などに関しましても、時間は掛かりますが今すぐに増産しなければなりません。何れも、採算を度外視しての話ですが。」

「頼れるのは魚か・・・異世界の魚は食えるのかな？」

春川の言葉に、農水大臣はギョツとした。

「さあ？しかし、今のところ各漁協から何も報告は入っていないので、大丈夫だと思います。」

「そう願うよ。」

「とにかく、早急に食料を得られる方法を見つけないといけません。でなければ、国民が飢え死にしていまいます。」

続いて経済産業大臣が発言する。

「石油を始めとする燃料や資源の備蓄も心許ない範囲でしかありません。秋田や新潟で出ている石油も満足行くものかわりません。ですから、明日にでも燃料統制を行うようお願いいたします。」

「そうなるかと経団連や石油会社に要請しきやいけないな。面倒だな。」

「それだけでは済みません。燃料の消費を抑える必要もあります。ガソリンは配給制として、電力も抑える必要から停電の実施が必要になるかと。」

「戦時中に逆戻りかよ。国民は黙っていないだろうが、なんとか押さえつけるしかないか・・・」

現在の日本人は、平和で物が余る生活にどっぷりと浸っている。それがいきなり、物不足で70年近く逆行した生活を強いられるとなれば、黙っていないだろう。

ガソリンが配給制となれば、車を自由に動かすのは無理となるであろうし、電力の制限も様々な面で電化された現代日本に与える影響はかなり大きいと見込まれる。

春川は本気で頭を抱えた。そうした物理的な問題もあるが、そうなった場合の各種補償問題も後々尾を引く可能性大だった。

「それでも、やらなきゃならないな。」

続いて石川防衛大臣が発言する。

「我が国周辺の状況がわからないため、各自衛隊には万が一に備えさせています。ただ今のところ、我が国に対して脅威となる存在は発見されておりません。」

「そうか。なら、自衛隊には引き続き付近の搜索をお願いします。」

「わかっております。それから、在日米軍なのですが・・・」

「やっぱりその問題になるか。」

「はい。」

「昨日はまだ状況把握中だったし、こっちも忙しかったから面会を断ったが、さすがに向こうもそろそろ真実に気づいているだろうしな。それに、あれだけの兵力を野放しにも出来ないし。」

現在日本に展開している在日米軍は約5万名だ。そして相変わらず沖縄にその戦力は集中している。しかしながら、総司令部は東京近郊の横田飛行場にあるし、世界最強の第7艦隊は横須賀を母港としている。旗艦「ジョージ・ワシントン」以下ほぼ全艦艇が横須賀に揃っていた。

これらの兵力は、陸軍を除けば自衛隊でも相手になるかどうかわからない規模の戦力である。また、核を隠し持っている可能性が高い。それらが暴れたしたら悪夢である。

「今日中にアメリカ大使と在日米軍司令官と会談しよう。あちらも母国を失って困っている筈だ。」

春川は多くの困難な問題一つ一つに、真正面から向き合わねばならなかった。

続いて、発言は国家公安委員長に移った。

2日目早朝　ロクシエ東端ファークス共和国東方700km地点

ロクシエ船籍の貨客船「ステラ」号は前日の午後ロクシエ東端の港の1つから出港、一路スー・ベール・イルに向かって走っていた。

ロクシエとスー・ベール・イルは楕円形の大陸のルト二河で国境が接し、現在は鉄道により連絡が行われている。しかしながら、海路も存在しないわけではない。大陸を囲む大洋を通して鉄道や飛行機では運搬不能な物が、このルートで運ばれていた。

「ステラ」号はロクシエ東端を出港し、惑星をぐるりと半周してスー・ベール・イル西端にある各地の港を結ぶ航路に配船された中型貨客船であった。この日も、スー・ベール・イルへの旅行者やロクシエの特産品をどっさりと積んで一路東を目指していた。

既に彼らの目指すスー・ベール・イルはなくなっていたのだが、「ステラ」号にはまだその連絡が伝わっていなかった。

実際の所ロクシエ連邦政府は、スー・バー・イルの消失や国内での異常事態（日本とは逆で資源が突然出なくなった場所が出た）、さらには星の変容などから薄々はここが自分たちのいた世界ではないことに気づいていた。しかし、日本政府ほどユーモアがあったわけではないらしく、まだ正確に認めてはいなかった。

「ステラ」号は、ロクシエ政府にそれを認めさせる存在となる。

まず「ステラ」号の無線室の電信機が突如謎の信号を捉えた。この時点で「ステラ」号に搭載されていたのは、地球で言う所のモールス信号機だけであった。それが信号を受けたものの、やたら出力が大きいだけで解読不能だった。

船長はそれを、なんらかの故障が突発的な自然現象と片付けた。

「ステラ」号が進んでいると、突如として前方に複数の艦船が現れた。この航路では珍しいことである。さらに、近づいてくるに連れてそれが貨物船や客船ではないこともわかった。

「スー・バー・イルの艦隊でも出て来たのかな？」

ところが、船長はその船の細部までわかる距離になった所で驚愕した。

「何だあれは!？」

前からやってきたのは6隻の艦艇だった。4隻は軍艦のようであったが、やたら高いマストに角ばった艦橋が印象的で、武装も少ない巡洋艦なのか駆逐艦なのかよくわからない艦であった。残る2隻は真っ白な船体にブルーの帯、そして見たことのない文字と煙突の

コンパスが特徴的であった。

さらに艦首と艦尾に掲揚している旗も、スー・バー・イルの曲げ短刀ではなく、太陽を模したと思われる赤い丸と赤い線が入ったものだった。

呆然とする「ステラ」号乗員の前で、艦隊内の1隻から突如発光信号が行われた。ところが、その信号も「ステラ」号の使っている物とは全く違い、解読出来なかった。

そして、相手の艦艇は信号がダメとわかると、軍艦と白色の船からそれぞれ1隻ずつ内火艇を降ろしたのが見えた。そのスピードはやたら早く、船長たちを再び驚かせた。

それを見て、取り敢えず船長は機関停止を命じた。無視して進んでも良かったが、相手が軍艦であるためそうした。

ボートが横付けし、見慣れぬ格好の男たちが降ろしたラッターが上がってきた。

「我々は日本国海上自衛隊と海上保安庁です・・・我々の言葉わかりますか？」

言葉はわかったが、意味不明な単語の連発に「ステラ」号の船員たちは顔を見合わせた。

これこそが、日本とロクシエの最初の接触であった。

2日目早朝　フォルティアス大陸東部・帝国連邦首都サクラス
帝国議会

ジリリリ・・・

メイベルの部屋の電話が鳴った。

「メイベル、電話ですよ。」

ちょうど部屋にいたメイベルの親友パセラ・アヴィシスが、隣の部屋にいる彼女を呼んだ。

「はい！」

すぐにメイベルが部屋に入り、受話器を取った。

「もしもし、メイベルです・・・ああ、ブルーノさん。おはようございます。実はちょっと今忙しくて、手短にお願ひするわ・・・え！？本当ですか？・・・何かの見間違いとかじゃ？・・・あ、確かにそれは気になりますね。・・・とにかく情報を集めて下さい。私も大司卿たちに伝えます・・・はい・・・わかりました。それじゃあ。」

メイベルは会話を終わると、電話を切った。その表情は深刻そうなものだった。

「どうかしましたか、メイベル？今の電話は、ブルーノさんからで

すよね？」

ブルーノ・アサツシニオ。大陸内部でソルティス教と並ぶドラゴン教の若き指導者です。依然はメイベルたちの敵であったが現在は同盟が成立し、メイベルにとっては盟友となっていた。

「うん。実はおかしな情報が入ったらしいのよ。大陸の西側がなくなっているとか・・・」

「はい？」

パセラは訳がわからず首を傾げた。

「私にもわからないんだけど、山脈のずっと向こうの地帯が突然海になっちゃったらしいのよ。人は住んでいない地域だからすぐにはわからなかったらしいんだけど、マウント・ドラゴンからの連絡でわかったらしいの。」

「どういふことなんでしょうか？」

「わからないわ。とにかく、私は昨日のことと合わせて今日の会議で皆に伝えるわ。」

「わかりました。ところで、そろそろ時間じゃ。」

「あ、しまった。」

メイベルが時計を眺める。

「いけない、外でナバルを待たせてるんだった。それじゃあパセラ、

また後で。」

メイベルは用意した書類を抱えて、慌てて部屋から出た。もちろん、廊下で待っていたナバルに謝る羽目になったのは言うまでもない。

フォルティアース大陸でも、異世界に飛ばされた兆候が大きく出始めていた。しかしながら、彼らがそのことを適格に把握するには、まだ時間が必要だった。

動き出す世界（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

と言うわけで、日本とロクシエが接触です。ちなみに位置の関係で日本とフォルティアス大陸の接触が一番遅くなり、フォルティアスにはロクシエが先に接触します。

今回は、日本の自衛隊が才人にメッセージを送る予定です。

出会いと試み

2日目早朝 日本・東京首相官邸

「昨日P3Cが確認したゼロ戦に乗っていた少年ですが、2004年に秋葉原で行方不明になった平賀才人と言う、当時17歳の少年である可能性が高いです。」

国家公安委員長の発言に、閣僚たちがざわめく。

「間違いないのか？それは？」

「こちらが当時の平賀少年。そしてこちらが、引き伸ばしたゼロ戦に乗っていた少年です。」

春川首相は、平賀少年の写真とゼロ戦の操縦席に座っている少年の顔を見比べた。

「確かにそっくりだ。同一人物と言っても過言ではないな。」

「しかし、なんで秋葉原で10年近くも前に行方不明になった少年がゼロ戦に乗っているんだ？しかも、見たところ当時と全く変わってないじゃないか？」

1人の大臣の質問に、公安委員長も困った表情をする。

「そう言われましても、実際に鑑定した人間の話では間違いないそうです。」

「ま、ここは異世界だ。今更何が起きてても不思議じゃないだろう？
で、我々は今後どうするべきだと思う？」

すると、外務大臣の木戸孝一が答える。

「早急に連絡をつけるべきです。我が国の国民であるなら保護の必要がありますし、現地の勢力と連絡をつけてもらう仲介者としても期待できます。」

「子供だろ？そんなこと期待できるのかな？」

1人の閣僚が言うが、木戸は続けた。

「たとえ子供でも、現地の情勢に少しでも精通しているなら悪い話ではありません。我々は現地に関して、何もわかっていないと言うことをお忘れなく。」

春川は彼に言葉に頷くと、改めて木戸と防衛大臣の石川に問うた。

「外務大臣と防衛大臣、彼と何とかして連絡を取る方法はないかな？」

「無線には反応していませんし、現在推測される現地の科学レベルは相当に低いと思われる。当然電信などもない筈です。ですから現地との交信は、事実上不可能と思われる。」

「外務大臣の言うとおりです。それに、現在発見された島には、昨日横須賀を緊急出港した護衛艦「ひゅうが」を旗艦とする第一護衛隊と海上保安庁の巡視船「しきしま」、「いず」が急行中です。しかし硫黄島の北方、正確には北東に近いのですが、そこからでも1

000kmもありますから。どんなに急がせても到着予定時刻は明日昼ごろの見込みです。もし護衛隊よりも早く連絡を付けるならば、硫黄島のP3C哨戒機を使うのがベストかと。」

「よし、では防衛大臣は至急海上幕僚長に命じて硫黄島からのP3C派遣を準備させてくれ。手紙、出来るなら映像も交えて現地にメッセージを送りたい。出来るかな？」

「やってみましょう。」

こうして、平賀少年と現地勢力との連絡を付けるための作戦がスタートし、硫黄島で本日も哨戒に発信する予定だったP3Cの1機が、手紙や嚴重に梱包されたメッセージ付きDVDとパソコン、充電器などを搭載して発信することとなった。

もっとも、春川はすぐに別の仕事に移らなければならない。今日から緊急で行われるガソリンの販売制限や在日米軍司令官との協議など、やらなければならないことは山ほどあった。

だがそんな忙しい彼に、新たな報告がもたらされた。

「首相、先ほど佐世保を出港した護衛艦と巡視船が国籍不明の貨物船と遭遇したそうです。」

「何!？」

2日目昼 対馬北西750km地点

護衛艦「いせ」を旗艦とする第2護衛隊が政府からの命令を受けて佐世保軍港を緊急出港したのは前日の午前10時のことであった。部隊はイージス艦「あしがら」と「ゆきかぜ」「あまぎり」から編成されている。

4隻は途中同じく緊急出港してきた第10管区保安本部の巡視船「おおすみ」、「はやと」と合流し、急ごしらえの6隻の艦隊を組んで北西へと針路を取った。その任務は、消失した朝鮮半島や中国大陸方面の様子を探ることであった。

以前であつたら海自と海保が合同部隊を編成するのは稀であつたが、現在は度重なる朝鮮半島近海や尖閣諸島近海でのニアミス事件の戦訓と、そしてあまりに理解できない異常事態下であるため、このような編成が取られている。

出港した同部隊は玄界灘を越え、本来なら黄海であるはずの海へと向かった。しかし、日本領に属する島以外の存在を確認することは出来ず、ただひたすら燃料の限界点まで北上するだけであつた。

動きがあつたのは朝のことで、イージス艦「あしがら」のレーダーが艦船らしき光点を捉えた。第2護衛隊はこれと接触するべく急行、そして目視で確認して驚いた。

現れたのは、旧式の貨客船であつた。横浜港で保存されている「氷川丸」か船の博物館で保存されている「宗谷」を思わせるそのシルエットを見て、海自隊員も海保隊員も揃って啞然となつてしまった。また船尾の旗も、槍のマークをあしらつた見たことのないデザインのものだつた。

無線で交信を試みるが応答はなく、仕方がなく発光信号での交信

を試みた。しかしこれにも返答はなく、護衛隊と巡視船はそれぞれ搭載ボートを降ろして、その船に乗員を近づけようとした。

ここでようやく相手の船も停船した。すかさず、派遣されたボートは同船に近寄り、乗員たちは降ろされたタラップで船上へと上がった。

甲板に上がると、部隊の中で最上級の3等海佐が待ち構えていた船員たちに向かって言った。

「我々は日本国海上自衛隊と海上保安庁です……我々の言葉、わかりますか？」

すると、すぐに一目で高級船員とわかる男が前へ出た。

「本船「ステラ」号船長のジョン・ランサムだ。あんたたちはスー・ベール・イル海軍じゃないのか？」

そう問われた3佐は驚いた。相手がわけのわからない単語を發したこともあるが、それ以上の日本語を喋ったことに。

「日本語がお出来になるんですか？」

「日本語？私はロクシエ語をしゃべっているが？」

両者とも相手が何を言っているのか全く理解できない。そのため3佐は質問を変えた。

「この船の国籍はどこですか？」

「ロクシエだよ。」

「ロクシエ？」

「ロクシアー又連邦だよ。」

「そのロクシエって国はどこにあるのですか？」

「あんたそんなことも知らないのか？」

ランサムがバカにしたように言う。

「だいたいあんた一体なんだね？ニホンとかカイジヨウジエイタイとか訳の判らないことを言っつて。いきなり乗り組んでくるし。」

「我々は日本国、海上自衛隊の自衛隊員と海上保安庁の職員です。私は護衛艦「いせ」砲雷長の宇多田3等海佐です。日本を知らないんですね？」

「ああ。」

すると後ろにいた隊員たちにざわめきが起きる。

「首相の言っていたことは本当だったんだ。」

「ここは異世界ってことか。」

「これから俺たちどうなるんだろう？」

「おい、静かにしろ。部下が失礼しました。我々は昨日、佐世保港

を出港しレーダーにて貴船を捕捉し、接触を試みました。無線や信号で交信を試みても返答がないので、やむなくあのような手段に出ました。その点に関してはお詫びする。」

「ああ、それよりも二ホンとかサセボとかどう言うことだね？」

「ですから、私たちが出港したのは日本と言う国の佐世保と呼ばれる港です。」

そう言うと、宇多田は地図を取り出し指差した。

「ここです。」

すると船長は目を剥いた。

「こんな地図見たことないぞ。あんたら俺をバカにしているのか！？」

「そんなつもりはありませんよ。我々だって訳がわからなくて困っているのです。」

そんな感じで押し問答が続くこと30分。話が全く進展しないので、宇多田はトランシーバーで「いせ」の上官に指示を仰いだ。

結局、海上自衛隊と保安庁共にそれ以上「ステラ」号を拘束する理由も根拠もないので、行きたいように行かせることにした。ただし、護衛艦と巡視船を1隻ずつ追求させることにしたが。

残る4隻はそのまま「ステラ」号から得た情報を元に、西へと進んだ。

2日目昼 トリステイン王国・魔法学院

王宮から帰ってきた才人とルイズは重苦しい沈黙の中にいた。

「・・・」

「・・・」

昨日才人が唱えた説。それはハルケギニアが異世界地球に飛ばされたと言う突拍子のないものだった。もちろん、多くの大臣はその説を一笑に付したが、アンリエッタ女王とマザリーニ枢機卿はその言葉を重く受け止めた。

確かに突拍子のない説だが、一方で現在トリステインを取り巻いている現状は少なくともトリステイン王国がハルケギニアではないどこかに飛ばされたことを思わせるものだった。

その後2人は学院へ戻ることを許され、戻ってきたのだがそれぞれ心の中に抱いた大きな不安によって一言も言葉を発せなかった。

才人は本当にここは地球なのかと言うことに対して、ルイズはトリステインがどこか別の世界に飛ばされてしまったということに対して。そして2人にとって最大の不安は、もしかして別れ別れになるのではという不安だった。

「・・・」

2人とも、お互いに何も発しないまま時間だけが過ぎていった。その沈黙を破ったのは、唐突に聞こえてきたエンジン音だった。

「え!?!」

才人は窓の外を眺めた。そして空に現れた一つの影に気づいた。

「あれは!?!」

才人は部屋から飛び出した。

「ちよつとどうしたのよ才人?」

才人はルイズの言葉も聴かず、そのまま女子寮の外へと飛び出した。既にそこには、空を見上げる生徒や教員の姿があった。その視線の先を飛ぶのは、間違いなく昨日現れたP3C哨戒機だった。

そのP3Cの機上では、昨日と同じく太田機長率いるクルーたちが積んできた荷物の投下準備に掛かっていた。

「見つけました。目標の少年です!」

才人は他の人物と違い青いパーカーを着ていた。双眼鏡で容易に確認できた。

「ようし、荷物を投下するぞ。兵装庫扉開け!」

一旦上昇して安全な高度へと上がる。そして胴体下の扉が開かれ、苦心して搭載したコンテナが姿を見せる。

「建物の外へ投下する。投下用意！・・・投下！」

P3Cの胴体下から数個のコンテナが地上目掛けて落とされた。

「任務終了！帰還する！」

仕事を終わると、P3Cは長居は無用とばかりに離脱した。

「何だあれ！？」

生徒の1人が空を指差す。その先では、数個の箱状の物が白い花のような物にぶら下がりながら降りてくる。

「何か落としたぞ！」

「なんだあれ！？」

「綺麗。」

それを初めて見るハルケギニアの人間たちが口々に言うが、才人にはその正体がもちろんわかった。

「パラシュートだ！」

才人はすかさず、その箱が落ちる方へと走り始めた。わけがわからない他の生徒や教師も、彼の後を追った。箱はいずれも学院の外
の草原へと落ちていった。

ドガ！

落とされた箱が次々と地面に着いた。才人はその内の1個に近づいた。箱は金属製の小型コンテナだった。才人は絡まっているパラシュートを払いのけ、箱の表面を見る。

「う、嘘だろ」

そこには、白いインクでこう書かれていた。

「日本政府より平賀才人君へ」

出会いと試み（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

揺らぐ世界

2日目夕方 トリステイン王国・トリスタニア王宮

朝魔法学院に戻ったルイズと才人は、とんぼ返りに近い形で再び王宮のアンリエッタ女王のもとを訪れていた。その目的は、昼間P3C哨戒機が落としていった荷物に関してであった。

P3C哨戒機が落としたコンテナの中には、クッション材で嚴重に梱包されたパソコンとDVD数枚、それから長距離用の無線機であった。早速才人はDVDの中身をパソコンを使って観たのであるが、その時の才人の衝撃はとてつもない物であった。

才人は当初、トリステインが地球に現れたと予測していた。ところが、入っていたDVDに記録されたメッセージ（春川首相からのもの）によれば、ここは地球とも違う異世界であり、日本も地球から切り離されて現れたらしい。しかもその日本は2014年の日本らしい。つまり、才人がこの世界に呼び出される前の日本から見て10年後と言うことだ。

「嘘だろ。」

DVDを見ていた才人は、思わずそう呟いた。

もう1つ才人にとっての驚きは、DVDを一緒に見ていたルイズをはじめとするハルケギニアの友人たちが、春川首相の言葉を直に理解できたことだった。もっとも、異世界云々の部分は信用していなかったようで、ただDVDに記録されている春川首相の画像や、東京を始めとする日本の映像を興味津々で見ていた。

そして一同を驚かせたのは、日本より派遣された艦隊が明日にもトリスティン近海に現れると言ったことだった。才人の場合は、自衛隊の船が来るんだな程度に軽く考えたが、ルイズやギーシュと言った人間たちは別の見方をした。

「軍艦が来るですって！」

「これはすぐに女王陛下にお伝えしないと。」

何せ得たいの知れない国の艦隊がいきなりやってくるのである。日本で言えば、黒船がやって来た時くらいのインパクトがあるだろう。オスマンやコルベールと言った魔法学院関係者も、その重要性に逸早く気づいた。相手が敵意を持ってないと公言しても、いきなり来られては王政府や地方の領主が侵略と早合点し、間違いを起しかねない。

そう言うわけで才人はパソコンとDVDを持って、ルイズと一緒に再び王宮へと取って返す形で参内することとなった。

訪問されたアンリエッタはと言うと、今朝方帰ったばかりの2人が慌てて戻ってきたことに驚きはしたものの、2人とすぐに面談した。これは彼女が相談役を欲していたのも理由であった。

転移して2日しか経っていないが、その影響はジワジワとトリスティン王国内に出始めていた。例えばこれまで国境沿いの土地であったにも関わらず、突然海に接することとなった土地では、地盤が弱いとか海拔が低いなどの理由で冠水や崩落事故が起きていた。さらに、井戸水が出なくなったり川の水が塩水になって使い物にならなくなると言った被害も起きていた。他にも飛行艦船の事故など

の報告が舞い込んでいた。

アンリエッタは女王として重臣たちと協議せねばならなかったが、あまりにも有り得ない事態であるためその対処に四苦八苦していた。

そんなところへ、気軽に相談できる二人が来たのであるから、少しばかり話を聞いてもらおうと思ったわけだ。しかしながら、二人はさらに厄介な問題を持ってきてしまった。

「・・・これは、本当なのでしょうか？ここがハルケギニアでも、才人さんのいた世界とも違う世界だと言うのは？」

DVDを見せられたアンリエッタが才人に尋ねる。

「正直、俺にも本当かはわからなくて。」

才人の自信のない言葉に、一部の重臣が嘸み付く。

「何だその答えは！？陛下の御前だぞ！もっとはっきりした答えを言わんか！」

「これだから平民上がりは」

と、露骨に才人の出身を非難する人間もいる。それに対して怒ったのは当の才人ではなく、アンリエッタだった。

「お止めなさい！あなたたちこそ、そのような発言をして恥ずかしくないのですか！？」

「・・・」

「申し訳ありません才人さん。」

「い、いいえ。気にしてませんから。」

結局異世界云々と言う話題は、才人の理解の範疇を超えており、さらにこのDVDだけではどこまで信用できるかわからないものだった。

「姫様、それよりも目の前に迫っている問題に対応するべきだと思います。」

ルイズが意見を言う。

「そうですね。才人さんの国の船が来ると言うのなら、相応の準備をしなければなりません。才人さんの国は、魔法は無いようですが、すごい国のようですし。」

こうして、トリステイン政府は明日到着するであろう護衛艦隊に対する協議を、当の日本人である才人も交えて行うこととなった。

2日目夕方 日本・東京首相公邸

春川首相は疲れて自室の椅子に座り込んでいた。僅かな仮眠を除いて不眠不休で働いてきただけに、もや彼の体はクタクタであった。

この日春川は懸案事項の1つであった在日米軍の問題について、在日米軍司令官と第七艦隊司令官らと交えて会談を行った。何せ国家の命運を懸けかねない問題だっただけに、春川と言えども大いに不安を感じた。

この会談で春川自身実感したことだが、何故か通訳無しで話が出来た。なんと、日本人と外国人が通訳無しで話が出来るようになっていた。既にそんな話はチラホラと春川の下にも報告されていたが、春川は混乱の中で生まれた噂話程度にしか考えていなかっただけに、相手共々驚いた。

もっとも、そのお陰で話がし易くなったのは間違いない。

この日の会談の結果、取り敢えず在日米軍は現状待機と決められた。アメリカ軍側は本国を失い、指揮する最高司令官がいなくなってしまったが、取り敢えず在日米軍総司令官が最高司令官として代行することとした。

またアメリカ側は、本国からの補給が途絶したので、食料などの生命維持に必要な物資の補給を依頼した。そのために空母「ジョージ・ワシントン」を日本に譲渡しても良いとまで発言した。が、当の日本人自身が食糧不足を懸念して大騒ぎしている状況では、確約などできるはずが無い。仕方が無く、春川は「善処する」としか言えなかった。

加えてアメリカ軍側からは、在日米軍を一種の傭兵として日本政府がその指揮下に置いて、雇う案まで飛び出した。以前だったら考えられない状況であったが、アメリカ本国がなくなった現状では、在日米軍がする相手は日本政府しかなかった。

どっちにしろ、日米安保条約や日米地位協定の見直しと言った多大な問題が横たわっているのです、即決は無理であった。結局、春川は在日米軍が暴走しないよう嚴重なる処置を取ることを確約させ、万が一の場合は自衛隊による制圧もすると伝えた。

そうして会談を終わらせた春川は、短い時間ながら休憩時間を貰い、公邸の自室で休んでいた。このわずかばかりの休憩が終わったら、また首相官邸に缶詰になること間違い無しだった。

「ああ、平凡な日常が懐かしい。」

と愚痴を零しながらも、頭の中では今抱えている問題への対応策を巡らしていた。

2日目夕方 ロクシエ・首都特別地域郊外シユルツ家

ロクシエでは、お隣スー・ベー・イルの消失を当初政府が国民の混乱を恐れて隠していた。しかしながら、大陸の半分が消失したことをそう長い時間隠し通せられる訳が無く、この日の午前中にはついに新聞によりすっぱ抜かれ、夕方には連邦大統領自らこのあらままと、情報隠蔽を陳謝することとなった。

そのニュースを、リアとトレイズは白黒テレビ越しに見ていた。

「大変なことになったわね。メグ大丈夫かしら？」

リリアはスー・ベー・イル人の親友のことを心配した。

「本当なら、相当ショックを受けるだろうね。自分の故郷が消えちゃったんだから。けど、大陸が半分丸々消えちゃうなんて、信じられないな。」

トレイズもスー・ベー・イルの知人を心配していたが、一方で今回の事件がまだ信じられなかった。

「実際に軍の飛行機が偵察した所じゃ、スー・ベー・イルが消えたのは間違いないようよ。お陰で今じゃ軍内も上へ下への大騒ぎよ。」

と言うのは、リリアの母親で空軍少佐をやっているアリソン・ウィッティングトン・シュルツだ。30代後半とは思えない若々しくも美しい顔は、憂いに染まっていた。

「ラディアさんも大丈夫かしら？」

アリソンは自分の後ろに立っている男に聞く。

「大丈夫と信じたいよ。」

寂しそうな男の言葉に、リリアが振り向く。

「パパ。」

男はリリアの父親であるヴィルヘルム・シュルツ。リリアは子供の頃から彼は事故死したと聞かされてきたが、実際の所は隣国スー・ベー・イルの軍人、しかもスパイとして活動していた。

春休み中に起きたリリアとトレイズ、アリソンをも巻き込んだ事件の解決によりスー・ベール・イル王家から多額の褒賞とお暇を出され、17年ぶりに家族の元へと帰ってきていた。

当初リリアは死んだはずの父親が戻ってきたことに大いに困惑したが、その後少しずつ親子としての感情を作り出し、今では極普通の家族として暮らしていた。

現在ヴィルは軍の仕事から完全に離れ、リリアたちの通う学校の歴史の教師をしていた。人当たりもよく、教えるのが上手なヴィルは今や学校でもトップを争う人気の教師で、リリアにとっても自慢の父親だった。

そんな彼も、今回の事件を大いに心配していた。実はスー・ベールにいたところ、彼はトラヴァース・ラディアという貴族の女性と養子縁組をしていた。実際彼は母親として彼女を慕っていた。

彼がロクシエへ戻る際、一緒に暮らさないかと提案したが、「ありがとうヴィル。けど私は今の生活に不自由してないから。またアリソンやあなたの娘と一緒に顔を見せに来て。」と笑顔で言われた。

その後1回だけリリアと共に彼女を訪問したが、その時はまさかこんなことになるとは予想も出来なかった。今回のことは、ある意味死別よりも酷である。

悲しそうな表情をする夫に、アリソンは静かに言う。

「ヴィル、信じましょう。ラディアさんとまた会えるって。」

「ああ。そうだね。」

だがヴィルは、心の中で漠然とではあるが、それが有り得ないと思えてならなかった。

揺らぐ世界（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

すいません。メイベルを登場させられませんでした。と言っか導
入部分だけで長々となっています。

首相と聖女の憂鬱

2日目昼 フォルティアース大陸東部・帝国連邦首都サクラス

メイベルは頭を悩ませていた。切欠は、早朝に西部地域から送られてきた報告である。その報告とは、大陸の西側が消失し、海になつていると言う信じられないものだった。

「いくらなんでも、そんなことは・・・」

とメイベルは信じたくない気持ちで一杯だったが、昨日から起きている異常現象を考えると、有り得ないとは言い切れなかった。

メイベルは理論家である。修道女でありながらソルティス教の根幹であるくじびきを否定し、様々な学問への造詣が深い。いきおい科学的にありえないことなど信じたくないのであるが、現実はそのようなメイベルをあざ笑うかのようなものであった。

さらに報告によれば、一部の地域で井戸水が塩水になってしまつたり、突如川の水が枯れるなどの異常事態も立て続けに報告されていた。

「もう!どうなってるのよ!?!」

と執務室内でメイベルは叫んだが、それでどうこうなる問題ではなかった。

「落ち着けよ。」

ナバルが突っ込む。

「だって・・・有り得ないわよ！星が変わったり、突然大陸が消えたり。これは本当に何かとんでもないことが起きているに違いないわ。けど大司卿たちの動きも遅いし。」

メイベルは今回の事件について、事の大きさを大司卿や議会の面々に伝えた。しかしながら、あまりにも突飛過ぎる（何せメイベル自身信じられない事態）ことであるため、取り敢えず情報集めをするに留まってしまう、完全に政府や議会は受身の態勢であった。

「こうなったら、自分でなんとかするしかないわ！百聞は一見に如かずよ！ナバル、直に西すぐへ向かいますよ！この目で直じかに確かめて調べる！これしかないわ！」

と、いきなり言い出す聖女様に、ナバルは呆れ顔になる。

「溜まっている書類仕事はどうするんだ？」

「そんなの後よ！ナバル、至急大統領専用機を用意させて。」

既にこの世界には飛行機がある。つい2年ほど前まではグライダーしかなかったのだが、南と西の戦争とメイベルの活躍により、間もなくラム・ジェット式のジェットも登場する予定だった。メイベルは現在南アルテース大統領と、西アルテース公王の肩書きがあり、そのため長距離移動にも使える双発の大統領専用機が宛がわれていた。

さらに言えば、パイロットは護衛も兼任するナバルである。彼は飛行機の操縦が出来る稀有な騎士である。そんなナバルはメイベル

の思いつきに嫌そうな顔をしたが、メイベルの強い態度を見るや素直に従った。

「はあー。どうなっても知らないからな。」

ナバルは飛行場へと電話をするため、机の上の電話機を取った。

30分後、議員の一人がメイベルの部屋へとやってきた。

「聖女様、どこでどうやって知ったかは知りませんが、ソロリエン又新聞がさつそく今回のことを騒ぎ立て始めまして、聖女様のコメントも欲しいとか言い出しました。いかがいたしましたでしょうか・・・で、あれ？」

部屋の中は蛻の殻だった。ナバルやパセラの姿も見当たらなかった。

「聖女様はどこへ？勇者様もない。・・・うん、これは？」

メイベルの執務机の上には書置きが残されていた。

「ちょっと西へ行ってきました！メイベルより。追伸 書類仕

事はしばらく勘弁してください。ハート」

その書置きを見た議員が叫ぶ。

「せ、聖女様が書類仕事に嫌気を差されて、勇者様と一緒に逃亡されたー！」

それは一面的な事実であったが、正解ではない。まあ、それはと

もかくとして「メイベル（聖女様）逃亡す！」このニュースは未だ大陸の異常事態に気づいていない国民たちの関心を寄せる切欠となった。

2日目夜 日本・東京首相官邸

「そうか、無事に届いたか。」

春川首相は、防衛大臣によりもたらされた硫黄島基地からの報告にホッと一息ついた。

「ですが、それで相手とコンタクト出来るかはわかりません。送り届けた無線機も、明日まで待ちませんと使えませんし。そのため、引き続き護衛艦隊には厳重なる警戒を取るように命じています。」

石川防衛大臣が言う。

「それは止むを得ないな。万が一の時は、降りかかった火の粉は払わなきゃならないからな。」

以前の自衛隊だったら、小銃を撃つことだけでも大事であった。しかしながら、異世界に飛ばされた異常事態の中にあつては、火器の使用も柔軟に対応する必要があつた。幸い、今回の事態が発生する前に一部自衛隊法などが改正され、火器の使用制限が大分緩和されている。

ただし、日本の法律には当然ながら異世界でどうしたら良いなどと言う文は一切無い。そんなこと想定される筈もなかったからだ。そして地球での外交の基礎であった国際法も通じない。

今日の昼、在日米軍司令官との会談後に行われた緊急の国会では、燃料の緊急統制法案とともに派遣中の自衛隊や保安庁の艦船が相手から攻撃を受けた場合についても論議された。これらの法案は、内閣の支持の下で法務省など関係省庁が不眠不休で作り上げたものだった。

本来なら、日本の国会における法律の審議と制定には本当に時間が掛かる。しかしながら、春川らはあまりにも緊急性が高いということで、強行採決に打って出た。

燃料の緊急統制法については、特に問題も出なかった。このまま行けば日本が干上がってしまうのは目に見えている。普段は五月蠅い野党も賛成した。

しかしながら、自衛隊・保安庁艦船の武器使用や今回発見された勢力への対応については、やはりと言おうか左派系野党から「どんなことがあると、平和国家日本としての姿勢を崩すべきではない！」すなわち地球における国際法に則り、しかも武器も一切使うべきではないという意見が出された。ただしこれは少数意見であり、しかもテレビやラジオでこの発言が出された途端、その党の事務所や国会、政府機関の電話に抗議が殺到した。

逆に自民党や民主党の保守派からは「相手から攻撃を受けたら徹底的に反撃するのが筋だ！」とか、中には現在得られている情報から相手を見下して「いっそ日本が占領する意気込みで行け！」言う強硬論まで出てきた。

春川は右派・左派双方の意見に頭が痛くなつたが、取り敢えずそれぞれの論を持ち前の論理的かつ単純明快な説明で論破し、政府案を採決へと持ち込んだ。ちなみに政府案では先制攻撃は厳禁、ただし攻撃を受けた場合は即座の反撃が許可されたし、明らかに相手が敵意を向けた場合、また不当な行為に出た場合についても現地司令官の裁量に任せられることが許可されるとなつた。

もちろん、侵略行為の禁止やまずはコンタクトを試みること、また出来る限り映像や音声での記録を取り、後にその判断が正しかつたかを審査することが付随された。ただし、これはどちらかというところと反対派への建前だつた。

ちなみに、これらの法律は即時施行でされている。

「ま、同胞がやられるのを諦観するほど日本人がお人よしじゃないことを祈るよ。」

そう言つて、春川はこの件に関しての話を打ち切つた。

春川にとつては、忙しかつたが取り敢えずこの日は収穫が多かつた。また良い報せも来た。秋田や新潟の石油は採掘可能まで1ヶ月ほど掛かるが、自然に湧き出している量から見てかなりの埋蔵量が期待できると言つ。雀の涙にしかならないだろうが、それでも自前で石油が得られるのは喜ばしい。

また焼津や気仙沼の各漁港からは、水揚げの量がこれまでより多くなつたと言つ。どうやらこの世界の水産資源は豊富なようだ。加えて魚も見たことのない種類は混じっているが、いずれも地球にある種類と似ており、食用に出来るとのことだつた。

魚で全ての食糧不足が解決できるとは思っていないが、ある程度の時間稼ぎが出来るとわかったので、取り敢えず一安心であった。

しかしながら、問題は未だ山積している。むしろ解決しても次から次に湧いて来ると言った方が正解だった。

「ああ、体が3つ欲しい。」

思わずそんなことを呟く。

「キヨンさんらしくないですね。」

小泉副首相に突っ込まれた。

3日目早朝 フォルティアース大陸西部上空

「本当に何も無いわね。」

メイベルは目の前に広がる異様な光景に目を丸くしていた。彼女の眼下に、まるで包丁で切られたようにザックリと半分消失した山と、本来ならそこには無いはずの青い海が広がっていた。

昨日の正午前、サクラスを飛行機で出発した彼女は、途中給油のために数箇所の飛行場に寄ったものの、その他は一切の寄り道をせずにノンストップの飛行で、大陸で一番西方の飛行場へとやって来

た。

ちなみに、大統領専用機は無茶なノンストップ飛行が祟ってエンジントラブルを起こしており、現在は借りた別の双発機に乗り換えでの飛行である。

そして夜が明けると、さっそくさらに西へ向かって飛び立った。なお、時差の関係でメイベルたちの飛んでいる地域はサクラスよりも2時間ほどの時差がある。

それはともかくとして、彼女たちは昨日寄せられた大陸の西側が消失しているという情報が嘘ではないことを、自分たちの目で確認し、実感していた。

「綺麗サツパリ消えてなくなってるな。」

操縦桿を握るナバルもそう言う。

「一体何が起きたのでしょうか？」

パセラもその光景を見て啞然としている。

「もう訳がわかんないわね。大陸が消えるなんて……」

もはや持ち前の知識では何もいえないメイベルであった。

「とにかく、写真を撮っておかなくちゃ。ナバル、一旦飛行場へ戻って。カメラを持ってこなくちゃ。」

「わかった……うん？」

ナバルが何かに気づいた。

「どうしたの？」

「飛行機だ。対向して来るぞ。」

「え？ 私たち以外にも飛んでいる人が？」

本来ここは未開の地で、飛行機など飛ぶ筈が無かった。そのため、メイベルは首を傾げた。その間にも未確認の飛行機は接近してきた。

「見たことのない形だ。新しい飛行機かな？」

その飛行機は、ナバルもメイベルも知らない型の飛行機だった。レシプロの3人乗りで単葉、特徴的なのは翼の下に大きな板のような物を抱えていることだった。

「近づいてくるわ。」

その飛行機はメイベルたちの飛行機に並ぶように近づいてきた。そして、翼と胴体に描かれているマークまではつきりと視認出来た。

「槍のマーク？ ナバル知ってる？」

「いや、知らない。それに、翼にも見たことのない文字が描いてあるぞ。あ、何か言ってる。」

相手のパイロットは、何かを言ってるようだった。手を振ったり、耳の辺りを指差したりしている。何か言いたいのはわかるが、ナバ

ルたちにはその内容までは当然わからない。

「一体何がしたいんだ・・・あ、発光信号だ。」

相手のパイロットは、今度は発光信号を送ってくる。

「読める？」

メイベルの問いに、信号を見ていたナバルが首を振る。

「ダメだ。全く読めない。俺たちの使ってる信号じゃない・・・メイベル、そろそろ戻らないと燃料がヤバイ。」

「わかったわ。」

「取り敢えず、私たちも手を振っておきましょうよ。」

「そうね。」

パセラの言葉に、メイベルは2人で笑顔で相手に手を振った。そして、ナバルは機を引き返させた。相手もそのまま離脱して行った。

「一体あの飛行機はどこから来たんだろう？」

「さあ？」

2人は気づかなかつたが、これがフォルティアース大陸とロクシエとの初接触であった。

首相と聖女の憂鬱（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日本政府から才人に届けた物品に無線機追加。ただ、作者無線には詳しくないので、どんな型があつて、どれくらいの距離で交信可能なかがわからない。ちなみに、衛星は消失してありません。

接近と拒絶

3日目早朝　ロクシエ連邦・首都特別地域郊外シユルツ家

リリアは突然耳に飛び込んできた車のエンジン音に目を覚ました。

「？」

眠い眼を擦りながら、彼女は時計を見た。針は、普段起きる時間より早い時間を指している。当然、両親や下宿しているトレイズもまだ寝ている筈だった。

「一体何なの？こんな時間に？」

そして、その物音が車庫の方から聞こえてきているのに気づいた彼女は、部屋から出る。

彼女の父親のヴィルがスー・ベー・イルから帰り、その際一緒に持って帰ってきたお金で買ったのが今彼女が住んでいる家だ。生まれてからずっと住んでいたアパートから出た時は少しばかり寂しさを感じたものの、移り住んで2ヶ月ほど経った現在はそれにも慣れてしまっている。

リリアの部屋の向かい側には両親の寝室があるが、その扉は開いており、中で寝ているはずの両親はいなかった。リリアは慌てて階段を下りる。

案の定、下の階には既にえんじ色の空軍の制服に着替えた母親のアリソンと、まだ寝巻き姿のヴィルがいた。

「あ、リリアちゃん。ごめん、起こしちゃった？」

アリソンがリリアに気づいた。

「どうしたのよ？何かあったの？」

「それが緊急の召集命令が出て。急いで基地に行かなきゃいけないの・・・よし、荷造り終わり。それじゃあヴィル、リリアちゃんとトレイズ君のこと、お願いね。」

「ああ。」

かつてリリアと2人暮らした時代、アリソンが頼れる人間は少なかった。しかし、いまは夫であり頼れる相棒が彼女にはいた。

「アリソンさん、エンジン掛けて起きました。あれ、リリアも起きたの？」

車のエンジンを掛けてきたトレイズが、リリアを見て言う。

「うん。」

そんな2人を見ながら、アリソンはクスリと笑った。

「私がない間、2人とも仲良くね。それじゃあ行つてきます！」

彼女は朝早いにも関わらず、元気に家を飛び出していった。そしてそのまま愛車のスポーツカーに飛び乗り、颯爽と走って行った。

3日目早朝 ロクシエ連邦ファーカス共和国東方10km洋上 海上自衛隊護衛艦「いせ」

「間違いなく大陸だな。」

「いせ」の重厚な艦橋でそう漏らすのは、海上自衛隊第二護衛隊群司令官の前原まえはらかずなり一成海将補だ。

2日前の朝、上からの命令に従い朝鮮半島ならびに中国大陸方面の搜索を命じられた彼らは、昨日船籍不明の旧式貨客船と遭遇した。ロクシアーヌ連邦と言う聞きなれない国名所属と名乗ったその船を拿捕するわけにも行かず、前原は護衛艦と巡視船各1隻に命じて（巡視船には要請）その船を追跡させると同時に、その船から得た情報に従い北進した。

その結果、情報どおり大陸へとぶち当たった。レーダーで既に何時間も前から探知はしていたが、本来あるはずの大陸の位置よりもズれており、地形も全く違っていただけに最初は信じられなかった。

「どうします？へりを飛ばして搜索しますか？」

そう意見具申するのは、艦長の仲瀬昇一等海佐だ。

「いせ」は3年前に竣工した「ひゅうが」型ヘリコプター搭載護衛艦の2番艦である。海上自衛隊最大の護衛艦であり、艦首から艦尾

まで全通飛行甲板とその直下に格納庫を持った空母型の艦体をしている。

艦載機は最大11機まで搭載可能だが、現在搭載されているのは対潜ヘリコプター4機、掃海ヘリコプター1機、偏向翼哨戒機2機の計7機だ。これらを用いれば、偵察範囲は飛躍的に広がる。

また随伴する護衛艦の内「あしがら」と「ゆきかぜ」もそれぞれ対潜ヘリコプター、偏向翼機を2機ずつ搭載している。

「そうだな。危険だがやってみるか。」

3日前からの異常な状況の連続に、前原らは慎重になっていた。しかしながら、実際に大陸をその目で確認した以上、何もしないわけにはいかなかった。なにせ彼らの任務は搜索なのである。

「各艦に偵察機の発進準備を下令！」

「アイ・サー！」

ところが、その命令を下した直後にレーダーから報告が入った。

「こちらCIC、対空目標探知。方位330度。距離90マイル。対地速度200km!」あしがら「ならば」ゆきかぜ「も目標を探知!目標の針路我が艦隊の針路と交差。接触まで約50分!」

「何!?!」

「対地速度200kmだと?そうになると、ジェット機やミサイルではないようだな。」

「どうしますか？」

「念のためだ。総員対空戦闘用意！」あしから「ならびに」ゆきか
ぜ「にも通達！」

「アイ・サー！」

まもなく、3隻の護衛艦内に対空戦闘用意が下令され、ミサイル
や主砲、バルカン砲がいつでも撃てるようにされる。

そして45分後。

「目標視認！・・・あれは！？」

「うん？」

見張り員が絶句したのを見て、前原も双眼鏡でそれを確認した。

「ほお・・・こりやまた古風な。」

彼らの目の前に現れたのは、第二次大戦時を思われるスタイルを
纏った双発の機影であった。

「何と言つことをしてくれたのです!!」

朝っぱらから怒鳴っているのは、この国の王であるアンリエッタ女王であった。彼女が激怒している理由、それは一部の貴族の独断専行に対してであった。

昨日、才人の国の軍艦（つまりは日本の護衛艦）がやってくると聞いたアンリエッタは、彼らを丁重に出迎えるように命令した。

異世界云々と言う話は彼女にとっても信じ難い物であったが、才人から見せられたメッセージや日本を紹介するDVDによって、取り敢えず彼女はそう命じた。

人が動き喋っている姿が見えるのも驚きであったが、それ以上に日本の東京などを映した映像や、今回自分たちの国に派遣されてくる艦船の映像を見て、彼女は一種の戦慄さえ覚えた。

確かに才人の国には魔法が無いようだった。しかしながら、彼らは魔法すら通じないトンデモナイ力を持っているのは理解できた。

アンリエッタは、取り敢えず才人の母国であるニホンと平和的に協議する方針を固めた。幸いにもメッセージによれば、ニホンもこちらとの争いは微塵も考えていないと言ったことだった。そして才人も、アンリエッタに協力する意向を示していた。

ところが、その動きに反発する輩がいた。それが才人のことを快く思わない保守派の貴族連中であった。彼らはメイジでないにも関わらず、貴族位に就き国家英雄となっている才人の存在を危険視していた。

そんな彼らにとって、平民しかいない国など侮蔑の対象以外の何物でもなかった。そして何より問題だったのは、才人が持ってきたパソコンやDVDという実物を目にしても、一向にその考えを改めないどころか、より憎悪の感情を高めたことだった。

彼らにとって、魔法も使わず魔法以上のことを平民が成し遂げるのは我慢ならないことであり、始祖ブリミルに対するこれ以上にならない侮辱と映ったのであった。

ただし、そうした保守派貴族の意見は尽くアンリエッタによって撥ねられてしまった。また才人を狙おうにも、公爵家のルイズ画側におり、彼自身が王宮内にいる以上下手なことは出来ない。

そこで保守派貴族が採った方法は、アンリエッタに諮ることなくラ・ロシエールの空軍艦隊を出撃させるという強硬手段であった。もちろん、アンリエッタに気づかれないように、彼ら自身のコネクションをフルに活用してである。

また、今回才人に送られてきた無線機の設置に対しても妨害を行った。また、今回才人に送られてきた無線機の設置に対しても妨害を行った。

才人は王宮にパソコンと並んで、送られてきた短波使用の軍用無線機を持ち込んでいた。これで直接護衛艦隊と連絡できると説明したのだが、才人自身が無線に詳しいわけではないので説明に難航し、さらに貴族の妨害や不慣れなアンテナ設置に時間を取られ、未だに開通していない始末であった。

その間に空軍艦隊は必要な『風石』や補給物資、さらには陸戦用の兵隊や竜騎士を掻き集め、短時間の内に出撃して行った。しかも

夜が明けきらない内にある。

深夜まで長引いた会議の後仮眠に近い睡眠をとっていたアンリエッタの元に、ようやく空軍艦隊出撃の報が届いたのは、夜が明けて2時間も経ってからであった。もちろん、艦隊は既に出撃した後だった。

もちろん、自分の確認も取らずに艦隊を動かしたことに、アンリエッタは激怒した。そして事の元凶である保守派貴族のリーダー格と言つべきゴンドランを呼び出した。

呼び出された彼は、冒頭のアンリエッタの言葉を受けたのであるが、本人はしれっとしていた。

「女王陛下、何をそこまでお怒りになつて居るのです？我々は陛下の丁重に出迎えるようにと言つ命令を履行したに過ぎません。艦隊が出迎えるのは極自然なことでしょう？」

確かに、軍艦を軍艦で出迎えるのは別に珍しいことではない。しかし、アンリエッタはそんな言葉に騙される程愚かではなかった。

「見え透いたことを。では、何故各艦に陸兵と竜騎士を満載させたのですか！？出迎えるだけならそのような戦力は必要ないと思いませんか？」

「陛下は甘いですね。相手は平民ですよ。礼儀を知っているかもわからん連中です。そんな連中が相手では、どのようなことが起きるかわかりません。もしかしたら、偶発的な衝突が起こるやもしれません。そのための対策です。御安心を、例え衝突が起きたとしてもあのような貧弱な武装で海の上を走るだけの船に恐れることなどあ

りません。」

その言葉に、アンリエッタは彼らの本心を悟った。

「元から出迎えなどするつもりはないのでしょうか？ 才人さんの国の艦隊……いいえ、二ホン艦隊を攻撃するつもりだったのですね！？」

「だったらどうだと言つのです？ 相手は平民ですよ。始祖ブリミルに選ばれた我々が平民相手になぜ下手に出なければならぬのです？ ……陛下は平民に優しすぎる。この世界を統べるべきは我々貴族であり、メイジであると言つことをもっと自覚なさるべきです。平民に対して容赦など不要。そして、対等に交渉する必要もね。」

ゴンドランの言葉に、アンリエッタは心の中が怒りで満たされていくのを感じた。おそらく彼らは、艦隊に先制攻撃を命じたに違いない。かつてレコン・キスタ艦隊がトリステイン艦隊に為したように。

「あなたたちは、なんて汚いの！？」

「陛下、すぐに我々こそが正しいとわかりますよ。」

ゴンドランは自信たっぷりであった。何せ艦隊には奇襲を加えるよう命じた（もちろん秘密裏に）のみならず、乗せた兵士や竜騎士もラ・ロシエールの防衛に就いていた粒よりを揃えていた。これだけの戦力を揃えれば、負けるはずがないと本気で信じていた。

彼らが二ホンを侮ったのは、平民だけと言うこともあるが、見せられた映像に今回やってくる海自と海保の艦船の物があったことだ。

それらは何れも砲や機銃が少数しか設置されていない。数十門の砲をもつ戦列艦で十分事足りると彼らは考えたのだ。

しかしながら、ゴンドランの自信はそれからもの30秒後に完膚なきまでに叩きのめされることとなった。

「大変です陛下！」

30秒後、侍従の一人が血相を変えて部屋に入ってきた。

「どうしました？」

「ラ・ロシエールより出撃した艦隊が・・・全滅した模様です。」

「ええ！？」

「そ、そんなバカな！？誤報ではないのか！？」

ゴンドランが顔を真っ青にしながら、侍従に詰め寄る。

「間違いありません。ただ1隻生き残った駆逐艦「バンケルト」が確認したそうです。」

侍従の言葉を聞いたゴンドランは、あまりの衝撃に地面に膝を付いた。

接近と拒絶（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに、今回のトリスティン艦隊全滅の原因は・・・あ、ネタバレだから言わないほうが良いか。とりあえず、大きな意味を持っています。

悩み多き女王

3日目早朝 トリステイン王国・ラ・ロシエール沖合60km地点
海上自衛隊護衛艦「ひゅうが」

「アンリエッタ女王が艦隊全滅の報を聞いたのと同じ頃、トリステインへと向かっていた海上自衛隊第一護衛隊群第一護衛隊の護衛艦4隻と、随伴する2隻の巡視船は海上に停船し、内火艇を降ろしていた。

旗艦であるヘリコプター搭載護衛艦「ひゅうが」の艦橋から、護衛隊群司令官の高杉栄作たかすぎえいさく海将補はその作業の様子を見守っていた。

「一体何が起きたんだろうな？」

彼は傍らに立つ「ひゅうが」艦長、海野重蔵一佐に漏らす。

「さあ？」

海野一佐も目の前で起きた光景を、よく理解できていなかった。

この数時間前、護衛艦各艦に搭載したレーダーが、複数の飛行物体を確認した。速度はかなり遅かったが、大きさから見てかなり巨大な物体と推察され、高杉は対空戦闘用意を命令した。ところが、艦隊の遙か手前でそれらの反応はレーダーから次々と消滅してしまつた。わずかに残つた1つも、元来た道を引き返したのが確認された。

不可思議なことであつたが、取り敢えず護衛隊群は反応が消滅し

た地点へと向かった。万が一航空機か何かの墜落であつたら、救難の必要があつたからだ。

そして彼らがその海域に到達すると、見つかったのは辺り一面に浮かぶ様々な木製の残骸であつた。しかも原型を留めない程に破壊され、凄まじい量であつた。そんな残骸の中にあつて、帆柱やフィギュアヘッドらしき物が確認されたことから、帆船が沈没したと思われた。

ただし、そうなると対空レーダーに映つたことやバラバラになつているのが腑に落ちない話ではあつた。

そうした謎はともかくとして、生存者らしい人影が確認されたことから彼らは救助活動を開始した。特に、それが本業である2隻の巡視船はヘリコプターまで出動させていた。

「まったく、本当にわからないことだらけだ。異世界に来たなんて最初は信じられなかったが。こつも立て続けにおかしなことが起ると、信じざるをえないよな。本当に、どう対処したら良いのか困つて仕方が無いよ。」

「私も同じです。まあ、防大じゃ異世界に来た場合の対処なんて教えてくれませんか。」

「だな。もつとも、そんなことを教えても誰もまともに取り合わなかっただろうが・・・だが、もう冗談とは言っていられないな。情報欲が欲しい。例の少年との連絡は？」

「まだ何も受信できておりません。こちらから呼びかけてもいるのですが、返答は来ていません。」

「引き続き呼びかけてくれ。」

そう言うのと、高杉は盛大に溜息を吐いた。全くわけのわからない事態への対処に、ホトホト疲れていたのだ。

「これなら北朝鮮や中国と戦うほうがよっぽど気が楽だ。」

そんな物騒な事をいう彼の元に、朗報がもたらされる。

「司令、本艦の内火艇が生存者1名を救出。意識があるそうです。」

「おお、でかした。早速収容して治療を、可能なら話したい。」

これまで収容した生存者の多くは重傷の意識不明者ばかりで、とても話を聞ける状況ではなかった。ようやく情報を聞きだせる道が見えてきたことに、高杉は喜んだ。

30分後、高杉はその人物と対面することが出来た。そして驚いた。何故ならその人物がどう見ても少年だったからだ。骨折したらしく左腕と右足が固定され、顔にも数箇所痣が見られたが、意識ははっきりしていた。

彼はやってきた高杉に気づいた。

「ええと、あなたは？」

少年に聞かれ、高杉は我に帰った。そして敬礼しながら答えた。

「ああ、ようこそ護衛艦「ひゅうが」へ。私は日本国海上自衛隊第一護衛隊群司令官の高杉栄作海将補だ。」

「し、司令官！？失礼しました！自分はトリスティン空軍艦隊戦列艦「レドウタブル」号乗組みの少年兵ジュリアンであります。救助していただきありがとうございます。」

(若いのに随分と礼儀正しいんだな)

と筋違いな感想を抱きつつ、高杉は話を早速本題へ向けた。

「うん。それでジュリアン君。色々と話を聞きたいのだが良いかな？」

「はい！」

こうして第一護衛隊群は、ジュリアンから限られてこそいたが、有力な情報を手に入れることが出来た。

護衛艦と巡視船共同による救助作業は2時間ほど行われたが、最終的に収容できたのはジュリアンを含めてわずか11名であった。その中で、意識がはっきりしていたのはジュリアン1名だけで、実質的に第一護衛隊群が初めてコンタクトしたのは、なんと日本人の血を引く少年であった。

3日目早朝 トリステイン王国・王都トリスタニア王宮

「その者たちから杖を取り上げ、即刻牢に入れなさい!!」

親しい友人たちの前にも関わらず、アンリエッタは叫びにも近い怒声で命令を下した。

「は!!」

アニエスは命令どおりに、杖を取り上げたゴンドランらを連行して行った。

アンリエッタは呼び出したアニエス率いる銃士隊に命じて、今回の艦隊出動と日本艦隊攻撃を画策したゴンドラン以下保守派貴族たちを逮捕させた。もちろん、この場にはいない者も魔法衛士隊などに命じて捕縛させる気であった。

だが、そうしたにも関わらずアンリエッタの表情は浮かないもの、むしろ絶望すら感じさせる暗いものであった。

「ああ、どうしましょう!」

彼女は顔を手で覆い、うな垂れた。

「姫様、お気を確かに。」

ルイズが駆け寄る。

「ありがとうルイズ。しかし、私が不甲斐ないせいで・・・」

出撃したトリステイン艦隊の全滅は、トリステインの国防を揺るがす事態であった。何せ、それらはレコン・キスタによる奇襲と、アルビオン戦争後に整備したなけなしの艦隊であった。しかも、乗せていた竜騎士や兵士もその多くはラ・ロシエールの軍港や要塞地帯を守る王室所属の正規軍であった。そのどちらともが、一朝一夕では作ることなど出来ない精鋭であった。

すなわち、トリステイン王室直轄軍が大打撃を被ったわけだ。こうなると、今後国外からの侵攻どころか、国内における反乱にすら対処できない。

さらにマズイのは、才人の母国である日本を怒らせたかもしれないことだ。交渉のめに向かっていた艦隊を奇襲と言う卑劣な方法で攻撃したとなれば、もはや弁解のしようがない。しかも、日本の軍事力が凄まじいことを、アンリエッタらは、呼び出した才人から聞きだし、今になってようやく理解したくらいだった。

才人の説明は一般人故に簡単な物であったが、それでもアンリエッタらにはインパクト十分であった。数百km先の目標を寸分たがわず狙うミサイル、音よりも早く飛べる飛行機、自分たちが保有している銃や大砲とは比較にならない程近代的な兵器で武装した兵士。

昨日の話し合いでは、日本と言う国がどうであるかと彼らをどう迎えるかに話し合いが終始してしまった。送られてきたDVDにも軍事力についての説明はなかったし（これは現代地球とハルケギニアとの軍事力に対する認識のズレ）才人自身も一般人故に軍事力については話さなかった。

「このままでは、我が国は・・・」

「しっかりしろよ姫様。まだ諦めちゃいけないって。大丈夫、俺がちゃんと話しますから。」

「そうですよ。謝罪すればなんとかなるかもしれません。」

才人とルイズが随分楽天的なことを言うが、こうでも言わないとアンリエッタは本当に心を折ってしまいそうであった。

「無線機の設置はもうすぐ終わる。そうすれば、何とかなるって。」

「お願いします才人さん。あなただけが頼りです。」

アンリエッタは藁にもすがる思いで、と言うか実際に才人にすがって懇願した。その光景に、ルイズは眉をひそめるが、時と場所を考えて我慢する。

「う・・・さ、才人！あんにトリスティンの命運が掛かってるかもしれないんだらね！」

「・・・ああ。」

この20分後、駆逐艦「バンケルト」からの続報が届くと共に、ようやく設置が完了した無線機で護衛艦隊との連絡に成功した才人たちは、少しばかりではあるが胸を撫で下ろすこととなる。

3日目朝 日本・東京首相官邸

春川響首相は、2日ぶりに家へと電話を掛けていた。ずっと官邸に詰めていたので、帰るところか電話すら出来ていなかった。

日本が異世界に飛ばされたと言う異常事態と、それに付随する諸々の問題を片付けることは、正直頭の痛い問題であった。そして少しでもその悩みを分かち合ってもらいたいのに、電話に出た彼の妻はまるでこの事態を喜んでいるようであった。

「・・・もう、キョン！もっと喜びなさいよ！異世界よ！しかもフアンタジーよ！20年越しに夢が叶ったのよ！それなのに、何疲労感にじませたように喋るのよ！？」

「実際に疲れてるんだよ！こっちは3日間も厄介ごとと関わってるんだぞ！」

電話越しに妻のはしゃぐ声を聞いた春川は、すこしばかりカチンと来ていた。

「ふーん。まあ、あんたは昔からそう言う役回りをする運命だから諦めることね。」

「春日^{ハルヒ}・・・お前のその軽さの100分の1でも良いから分けて欲しいよ。」

もう1回溜息を吐くと、春川は話題を変えた。

「春彦と響子は？」

「2人ともさつき学校に行ったわ。春彦も響子^{キョン}も元気よ。さすが私

の子！」

「俺の子でもあるがな。それから、娘のことをあだ名で呼ぶのはいい加減止めてやれ！と言うか、明らかに親としてどうかと思うぞ！」

「いいじゃない。昔のアンタみたいで。人間あだ名の1つや2つ持つのが常識なんだから。その常識に従って呼んで何が悪いのよ？」

春川はそれ以上言うのを止めた。

「もういい・・・生活の方はどうだ？電気や食料の統制が始まったけど。」

「そっちは上手くやるわ。大丈夫、任せておいて。」

「じゃあしつかり頼むぞ。悪いな、迷惑掛けて。」

「いいのよ。それよりも、帰ったら今回の話ちゃんと聞かせなさいね。」

「ああ。」

春川は電話を切った。

「やれやれ。本当に変わらないな、春日は。」

「それはキョンさんも同じでしょ？」

いつの間に来て来たのか、小泉副首相がそこにいた。

「かな。小泉も大変だな、こんな頼りない男の下で働かされて。」

実際の所、春川の外見はパツとせず頼りないと言える。

「いえいえ。むしろ私としては、期待していますよ。」

「過大な期待をしてもらっても困るけどな・・・とにかく、頼むぞ。」

「はい。早速ですが、護衛艦隊から連絡が入ったそうです。防衛大臣と海上幕僚長が至急会いたいそうです。」

「わかった。」

悩み多き女王（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

と言うわけで、トリステイン艦隊は護衛艦の攻撃を受けていません。ごめんなさい。

そして、春川首相はもうおわかりのように「涼宮ハルヒ」シリーズのキヨンがモデルで、奥さんはハルヒ、その子供たちは出ては来ませんが一応ハルヒ性転換シリーズの2人です。

それから、この作品では現在3作品の世界が混じり合っています。書く前の構想（と言うか妄想）では以下の作品も候補に挙げていました。

「ソ・ラ・ノ・ヲ・ト」のヘルベチア共和国、「北海の墮天使」のトルステイン公国、「飛龍空戦記」のメルクワット王国。

実際の所、数が多ければ良いという問題ではないですし、その他に原作本が手元になかったり、しかも他国とネタが被るので止めました。

それぞれの出会い

3日目朝　　フォルティアース大陸西部　カラーヤ村郊外飛行場

大陸が分断された地点を確認してきたメイベルたちは、一番近く
の飛行場へと戻って燃料の補給とカメラの搭載を行っていた。とこ
ろが、元々この地域はほとんど未開拓の土地であったため、飛行場
の設備も貧弱であった。そのため、それらの搭載も一苦勞であった。

このカラーヤ村の飛行場も、今後大陸西部の観測用に便利という
観点から急造されたもので、滑走路1本と格納庫1棟があるだけの
簡易飛行場だ。

昨晩は、そんな辺鄙な場所へいきなり大統領専用機に乗ったメイ
ベルとナバルがやってきたのだから、本当に大騒ぎであった。そし
て飛行場関係者も大騒ぎであった。

メイベルとナバルは昨晩、無理を言って整備と補給をお願いし、
朝一番で大陸西部の分断地点を確認したのであるが、帰ってきてか
らも大変だった。カメラはこのような辺境の飛行場にはまだなく、
一旦後方の飛行場へと戻る必要があった。そのため燃料搭載や工
ンジンの整備も、整備員の数が不十分のため中々進まなかった。

「申し訳ありません聖女様。このような御迷惑をお掛けして。」

飛行場の責任者はただただ平謝りするだけであった。

「あ、別にそこまで謝っていただく必要はありませんから。押しか
けてきたのはこちらですし。」

「とんでもない。聖女様に来ていただけするなど、我々にとってはむしろ光栄なことですよ。」

自分の4倍近くは生きているであろう、村の村長から尊敬の眼差しで見られ、メイベルは少しばかり恥ずかしかった。

「それにしても、この村にはまだ電話が来ていないんですね。」

メイベルがこの村にきて驚いたのは、まだ電話が引かれていないことであつた。当然鉄道も来ていない。電報はあるが、それさえもかなり旧式の機械で行つていた。つまり村人たちは旧態依然とした生活を送つていた。

日々機械が進歩し、環境が移り変わつていく中で生きているメイベルからすれば、ある意味新鮮ですらあつた。

「何分辺境の辺鄙な村ですから。外との連絡も、週1で馬車がやってくるだけです。それでも、畑で採れる野菜と湖で採れる魚で十分生きていけますし、教会もありますから。」

そう言つて笑う老村長は幸せそうであつた。

と、その時爆音が聞こえてきた。

「あら？飛行機みたいね。誰かが私を追いかけて来たのかしら？」

いい加減な置手紙を置いたということ、メイベルも少しはわかっているようだった。実際、この時サクラスの帝国議会は大パニックの下にあつたのだが、メイベルはさすがに知る由もなかった。

そんなメイベルに近づいてきたナバルが、それを否定した。

「いや、この音は帝国の飛行機のエンジン音じゃないな。しかも西から聞こえてくるぞ。」

「ナバルよく判るわね。」

メイベルが珍しく関心したように言う。

「伊達に飛行機乗ってないからな。」

ナバルが少しばかり得意げな表情をする。それがメイベルには、格好良く見えた。

まあ、それはともかくとして間もなく爆音の正体が確認できた。

「ありや、さつき見た飛行機だ！」

「本当だ。」

現れたのは、先ほどメイベルたちが接触した翼の下に大きな板のような物を取り付けた飛行機だった。その飛行機はグルグルしばらく飛行場の上空を旋回したが、まもなく行動を下げた。

「降りるみたいだぞ。」

「あっちは湖です。」

老村長が言う。

「行ってみましょう!!」

メイベルたちは、その飛行機が降りていった方向へと走った。

メイベルたちが湖に着いた時、その飛行機は既に着水した後で、エンジンの回転を下げて岸边へと滑走していた。その光景に、メイベルは目を輝かせる。

「なるほど、あの翼に付いている板みたいなのは水の上に浮くための浮きだったのね。あれなら滑走路がない湖とか海でも使えるわ。」

メイベルの発明家魂が疼いているようだった。しかし、そこへナバルが冷静に突っ込む。

「確かにあの飛行機は気になるけど、それよりもあの飛行機がどこから来たかが問題じゃないか？」

「あ、そうだった。」

メイベルたちはその飛行機が向かう方へと移動した。

間もなく、飛行機は浅瀬に着いたのか止まり、エンジンを完全に停止した。メイベルたちは恐る恐る近づいたが、その前に飛行機の風防が開き、見慣れない格好をした2人の男が顔をだした。その内の1人が翼を伝って降りてきた。そして、足元を水に濡らしながら、メイベルたちの方へとやってきた。

「ええと・・・私の言葉がわかりますか？」

男の一声はそれであった。予想外の質問にメイベルは戸惑ったが、直に返事をする。

「はい。わかります。」

「そいつは助かった。言葉が通じないんじゃないかと冷や冷やしたぜ。自分はロクシアーヌク連邦海軍北洋艦隊所属巡洋艦「ゲパール」艦載機パイロットのジーク・フェルディナンド少尉だ。」

とフェルディナンドと名乗る男は紹介したが、メイベルを含む誰もが理解できない単語を連発したため、一瞬静まり返ってしまう。そして数秒後、メイベルがなんとか言葉を紡いだ。

「ええと、メイベル・ヴァイスです。あの、ロクシアーヌク連邦とはどう言う事でしょうか？」

フォルティアース大陸の人間と、ロクシエの人間との初めての会話であった。しかしながら、それはどうも締まらない形の物となってしまう。

3日目朝　ロクシアーヌク連邦・ファーカーカス共和国フリベール港
海上自衛隊護衛艦「いせ」

「一時はどうなることかと思いましたよ。」

「いせ」艦長の仲瀬一等海佐がホツとしたように言う。

「取り敢えず、双方が傷つかない形で収まったのは何よりだ。」

護衛隊群司令官の前原海将補の声も、心なしか弾んでいた。

「しかし、司令も大胆なことをなさる。こっちとしては冷や汗ものでしたよ。」

「相手が話のわかる人間で助かったよ。」

この3時間ほど前双発機の接触を受けた直後、護衛隊群は今度は駆逐艦2隻の接触を受けた。第二次大戦中のドイツ海軍の駆逐艦に似ていたその艦に、護衛艦と巡視船は無線機での連絡を試みた。

幸いにも連絡は取れたものの、お互い相手の国について知らないものだから、話し合いは難航した。終いには話がこじれかけ、双方が砲を向け合う(護衛艦はミサイルの照準をロックした)事態にまで至った。

そこで、前原は大胆にも外務省の役員と共に内火艇を下ろして直接相手の艦へと乗りつける方法を探った。その結果、とにかく戦闘だけは回避した。前原が言った言葉の内どこまでを信用してもらえたかはわからないが、取り敢えず戦闘の意思がないことは理解してもらえた。

そしてロクシエとの外交折衝を求める3隻の護衛艦と1隻の巡視船は、ロクシエ海軍の駆逐艦2隻の監視の下、一番最寄りのこの港

へと寄港したのであった。

もつとも、直接付ける棧橋がないので、沖合への停泊となったが、ロクシエ駆逐艦の艦長は、取り敢えず上層部に知らせるから待機しろと言ってきた。その間も駆逐艦が護衛艦と巡視船を挟み込むように停泊するが砲は向けず、あくまで乗員が目で見確認しているだけだ。

「ま、荒木君の働きも大きかったがな。」

そう言つと、前原はこの場に場違いとしか思えない背広姿の男の方へ振り向いた。

「お褒めの言葉ありがとうございます。しかし問題はここからです。」

そう言つのは、今回同乗してきた外務省役員の荒木仁だ。若干25歳と言つ若さにも関わらず、豊富な海外訪問経験を買われて派遣されてきた。昨日の「ステラ」号との接触では、あくまで臨検ということだったので出番がなかったが、今後外交交渉を行うとなると、彼が代表者になる。

「そうだな。日本の未来・・・もしかしたらこの世界の未来を決めかねんからね。あちらさんも、こちらに相当興味があるようだし。」

彼は港の方を双眼鏡で見る。既に噂が広まってしまったのか、埠頭や波止場にたくさんの人間が集まっているのが見えた。また停泊中の船舶や、監視中の駆逐艦を見ると、やはり乗組員が興味深げにこちらを注視しているのがわかる。

「見た所この国、ロクシエの科学力は1940年代から50年代のそれだ。我々から見て半世紀前の技術力しか持っていないようだ。そんな国と付き合っていくとなると、かなり難しいぞ。我々自衛官に出来るのはここまでだ。ここから先は君の双肩にかかっている。しっかりと頼むぞ。」

「わかってますって。」

その時、艦橋右舷側で双眼鏡を見ていた海士が叫ぶ。

「本艦に接近する短艇あり！！距離300！！」

前原と仲瀬、さらに双眼鏡を借りた荒木がそちらを見る。

接近してくるのは確かに短艇だった。ただし、弓に錨を合わせたロクシエ海軍旗を挙げている。こうすると、短艇と言えど正規の艦船と同じ扱いを受ける。

その艇の上には、ロクシエ海軍の人間に交じって、荒木のような背広を着込んだ人間が混ざっていた。外交関係者かはわからないが、なんらかの交渉を行いに来たと見て間違いないだろう。

「出番のようだな。」

「ええ。」

「タラップを降ろせ。出迎えの準備だ！」

こうして、ここでも大きな動きが起きようとしていた。

3日目朝 トリステイン王国・王都トリスタニア王宮

「そうですか、日本艦隊と我艦隊は交戦したわけではなかったのですか……」

その報告に、アンリエッタは複雑そうな表情を浮かべた。日本との衝突は一先ず避けられるだろうが、国防の要が失われたことに変わりはないからだ。

「それでも、連絡が取れて本当に良かったです。」

アンリエッタは、才人を通じて護衛艦からの連絡を知らされた。その結果、ニホン艦隊とトリステイン艦隊が交戦していないことと、艦隊の乗員がわずかではあるが救助されたことを知ることが出来た。

「しかし、23隻の艦船が突如墜落したとは、信じられません。」

駆逐艦「バンケルト」が送ってきた報告に、マザリーニが首を傾げていた。報告によれば、23隻の艦艇は、突如として飛行不能になり、真つ逆さまに海上へと墜落してしまったそうだ。唯一慌てて引き返した「バンケルト」のみが助かった。1隻だけが墜落するなから事故と思えるが、23隻が一遍に落ちるなどあり得なかった。

だがアンリエッタとしては、それよりも目の前の問題の方が大切であった。

「事故の原因追究も大切ですが、今は日本艦隊を出迎えなくてはいい

けません。枢機卿、すぐに竜籠の準備を。ラ・ロシエールへ向かいます。」

「承知しました。」

「アニエス、護衛をお願いします。」

「は！」

最後にアンリエッタは、隅にいる才人の方へ顔を向けた。

「それから、才人さん。」

「はい。」

才人は先ほどまで、護衛艦「ひゅうが」と交信を行っていた。そして、トリステイン政府からの指示で、こちらから歓迎役として竜騎士を1騎送ることを「ひゅうが」に告げた。

才人はこちらの世界の常識と、日本の常識のズレを伝えるのに四苦八苦したが、それでもなんとか要点だけは伝えられた。

交信を終えた才人は、再びアンリエッタに呼び出された。

「あなたに仲介役をお願いします。私たちは日本について何も知らないのです。」

「わかりました。」

それぞれの出会い（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

異文化交流 1

3日目朝 日本

この日から、燃料をはじめとする様々な物資に対する緊急統制が始まった。もちろん、国民に対する影響はかなり大きい。

例えば自動車用のガソリンは完全に配給制となり、しかもそれも消防車やパトカー、救急車と言った公用車、さらに公共交通機関車両、商用車と言う順番に優先順位がつけられた。自家用車の配給はわずかな量で、東京や大阪などの都市部においてはほぼゼロと言う地域さえあった。

これによって大きな打撃を被ったのが、山梨や北海道、沖縄と言った公共交通が著しく少ない地域で、交通の大部分を自家用車に依存していたため、市民の日常生活は立ち行かなくなってしまった。その他の地域でも、公共交通機関が無い地域の生活は大きな不自由を強いられることとなった。

一応こう言う地域へは優先的なガソリンの配給を行うが、それでも雀の涙の量でしかなかった。本当に最低限の買物に出かけるのが精一杯と言う有様だった。

1990年代、新自由主義の御旗の下で規制を緩和し続けて、公共交通機関を次々と廃止してしまったツケを、人々はここで支払うこととなった。

また公共交通機関もこれまで通り動くかと言えば、決してそうではなかった。例えば電車の場合は電力統制から運転本数が大幅に減

じられた。さらに、かつての太平洋戦争中と同じくブレーキや加速による電力消費を抑えるため、停車駅の少ない列車が増やされ、結果それまで2分間隔で列車が来ていたのが、東京でも場所によっては30分に1本となってしまった。

もつとも、都心にある商社をはじめとする企業の多くが取引先の消失で休業状態に陥り、多くのサラリーマンは自宅待機を余儀なくされ、出勤者自体が減った。とは言え、学校は通常通りの授業を行っているから、通学の学生にはたまらない。

影響はメディアにも出ていた。電力統制によりテレビやラジオの放映時間が大幅に制限され、緊急放送を行うNHK以外の民放放送は朝6時から夜9時までの放送となった。当然テレビ関係者や出演者は仕事を失い、ここでも失業者が溢れることとなった。

またこうした政策をネタに、普段は政府や政治家を批判する新聞社や雑誌社も窮地に立たされていた。紙やインクの不足から、それらの発行自体が難しくなってしまったからだ。当然ライターや作家にも影響が出る。

食料も米以外の食料品はほぼ全てが配給制となった。特に日本人にとって必要不可欠な味噌や醤油は原料の大豆自体が国産自給率10%以下のため、備蓄分を消費したら手に入れられる可能性が限りなくゼロに近いと言う悲惨な状況となった。

加えて、食料品をあつかっていたスーパーや外食チェーンも原料が手に入らないのでは話にならず、軒並み休業に追い込まれた。当然ここでも失業者が大量に出た。

こうした資源の不足に対する対策も当然ながら動いている。復活

した秋田や新潟の油田における探掘の準備が進んでいるし、海底にある資源探索も優先順位上位に挙げられている。また閉山していた炭鉱の一部の復活も検討されていた。

食料に関しては、耕作放棄地の復活を急がせると共に大量に生産可能な農産物を優先的に作ること、代用品の開発を進めること、さらに現在手に入る米や魚の生産量を増やすことで急場を凌ぐこととなった。

これらは氷山の一角に過ぎない。何せ日本には固有の人口だけで1億2千万近い人間が暮らし、さらに万単位で在日韓国・朝鮮人、華僑、日系ブラジル人、アメリカ人と言った定住外国人、さらには旅行中に巻き込まれた旅行者もおり、それら全ての人々への対策を、日本政府は行わなければならなかった。

「ああ、頭が痛い・・・」

春川首相らは、押し寄せる報告書の波に押しつぶされそうであった。

そんな中で、トリステインならびにロクシエとの接触成功と外交交渉開始の報告は、日本に一筋の希望の光が差したように感じられるものだった。

「頼むぞ！なんとしても成功させてくれ。」

春川は、外交交渉が成功し、資源の入手と製造物の輸出先に目処が建つことを祈った。

3日目朝　ロクシエ連邦首都特別地域・第4上級学校

スー・ベール・イル消失と言う異常事態はあったものの、それが市民に与える影響が小さかったため、この日も朝からロクシエの人々はそれぞれの勤め先や学校へと出かけていった。

早朝、軍の呼び出しを受けたアリソンが慌てて出かけるというアクシデントこそあったが、リリアとトレイズの2人も、いつもどおりに登校していた。

2人が教室に入ると、先に登校した生徒たちが話しに花を咲かせていた。もちろん、その話題はスー・ベール・イル消失である。

「やっぱり皆注目してるみたいだね。」

荷物を置きながらトレイズが呟く。

「そりゃそうよ。スー・ベール・イルがなくなっちゃうなんて、私だって今も信じられないわ。」

リリアはそう言うと、親友の席を見る。

「メグはやっぱり休むのかな？」

「だろうね。」

別の声が会話に割り込む。

「ああ、おはようセロン。」

「おはようトレイズ、それにリリアさん。」

やって来たのは黒髪の少年、セロンだった。

「セロンの言うとおりだな。自分の祖国が消えたと聞いたたら、普通にはいられないだろうからね。俺だって、イクストーヴァが消えたなんてことになったら、落ち込むどころじゃ済まないだろうな。」

「そうよね。メグ大丈夫かしら？」

「彼女は案外強いから、僕は大丈夫だと思うけど、ショックは当然受けているだろうね。」

セロンと言う少年は、感情を表に出さないタイプだ。そのため、普段と同じ口調で喋っている。しかしながら、彼女がメグを本気で好きなことを知っているトレイズは、彼が心の中でメグの心配をしているのを知っていた。

「このままどうなっちゃうのかな？」

リリアが素朴かつ重要な問いを漏らす。

「さあね。神様じゃなきゃわからないわよ。きっと。」

その時、教室に駆け込んでくる者がいた。1人は金髪のがっちりとした体格の少年、もう1人は赤毛の小柄な少女だった。

「おいセロン！」

「やあらリー、それにジェニー、おはよう。」

やって来たのはセロンが所属する新聞部のメンバーであるラリー・ヘップバーンとジェニー・ジョーンズであった。

「おはようセロン。それにリリアとトレイズも。」

「「おはよう。」」

リリアとトレイズもジェニーと挨拶を交わす。

「で、暢気に挨拶をしている場合じゃないんだよセロン！」

「何か起きたのかい？スー・ベー・イルが消えたことならとっくに知っているよ。」

「まあ、それも重大なニュースではあるがな。それでメグはお休みつてわけね。」

ジェニーが誰もいないメグの席を見る。しかしすぐに視線をセロンの方へ向けると、得意げに話始めた。

「まあ安心して、私が入手したニュースはそんな世間に知れ渡っているような物じゃないから。」

「一体どんなニュースなの？」

リリアが問う。

「ファークス共和国で知ってるわよね？」

「確か、ロクシエで一番東にある国だよ？時計産業で有名な。」

「そう言えば、去年新聞部がその出身の娘むすめについて記事にしたわね。」

トレイズとリリアが答える。

「そのファークス共和国に軍艦が現れたらしいのよ。私たちが全く知らない国の。」

「……な、何だって!?!?」「」

リリア、トレイズ、そしてセロンは思わず叫んだ。

3日目昼 フォルティアース大陸西部・カラーヤ村

「それじゃあフェルディナントさんの乗っていた軍艦は、こっちに向かっているってことですね?」「」

「その通りだ……あ、いやその通りです。」

カラーヤ村の集会場にて、メイベルは先ほど降りてきたフェルディナント少尉と話し合いを行っていた。最初は、お互い相手の言っていることが全く理解できずに苦労した。

取り敢えず立ち話もなんなので、村の集会場へと移動して仕切りなおした。言葉が通じるのは本当に双方にとつてありがたいことであった。その際、フェルディナントは2人の部下の内の一入、ウィスラーと言つ名の下士官を伴っている。

こうして仕切り直し、再び話し合いが始まった。まずは、お互いの国と身分についてもう一度紹介しあった。ここでようやく、メイベルとフェルディナントは、互いの国が全くの未知なる国であることを理解した。言葉こそ通じるが、服装は全く違う。持っている物に書かれた文字はそれぞれ見たこともない異国の文字、持っている地図も全く違うものであった。文化が全く違うのだ。

もっとも、フェルディナントはそれ以上メイベルが大統領と公王であると言われた事の方が驚いた。

「本当ですか？」

と勘繰ってしまったが、周りにいた全員が肯定をしたのと嘘とは思えない態度であったので、認めざるを得なかった。もちろん、彼は敬礼をし直して、口調も直している。

普通ならここで話し合いが決裂してしまいそうなものだが、幸いにもお互い有り得ない事態ばかりにあつてきたので、そうはならなかった。そしてメイベルはある結論を出した。

「自分が狂つたようにしか思えないけど、もしかしてフォルティア

「ス大陸の東半分とそのスー・バー・イルって国が入れ換わってしまっただのかしら？」

このメイベルの予測は、半分当たりで半分外れであったが、この点では一番説得力ある答えであった。

「そんなことありえるのでしょうか？」

パセラが素直な質問をした。

「私にも正直自信はないわ。けど、大陸の西側がなくなって、見たこともない国が現れたとなれば、そうでも言わないと説明できないわ。」

考え込むメイベル。それに対して、フェルディナントは言う。

「原因はともかくとして、我々としてはこの国のことを艦隊に伝え、引いては本国に伝えたいと思います。」

「それに関しては構いません。あなた方が友好を望むのなら、私たちは歓迎します。」

「私は一介の軍人ですから、それに関しては何とも。ただこれだけは言えます。我が国は貴国との敵対は望まないでしょう。」

こうして、話し合いは取り敢えず終了した。しかしながら、雑談はその後も続くこととなった。いや、雑談と言うよりはメイベルがフェルディナントを質問攻めにしたのである。

切欠は、メイベルがフェルディナントに付いて水上機の所まで戻

つてきたことにはじまる。ここでメイベルは、ロクシエ海軍の三座水上機をじっくり観察することが出来た。さらにフェルディナントは相手が女王ということで、エンジンや操縦席まで見せてくれた。

既にフォルティアース大陸にも飛行機はあり、まもなくジェット機の開発も始まるうとしている。しかしながらフラップを持っていないなど、その技術の進化に関してはロクシエとは異なる。

メイベルは航空機に施された高い工作技術や、電装の精巧さに驚いた。その結果、彼女の悪い癖が出てフェルディナントを質問攻めにしてしまった。

「あーあ、あの人可愛そうに。」

「メイベルも、あれがなければ完全なんですが。」

やたら専門的な言葉を捲くし立てるメイベルを見て、ウイスラーともう一人のフェルディナントの部下は目を丸くした。

「本当に、あの人が女王様で大統領なんですか？」

「認めたくないだろうが、そうだ。」

ナバルはしみじみとそう言った。

異文化交流 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

次回はゼロ魔を出します。日本側外交官のキャラを考え中。もちろんネタありです。もち

異文化交流 2

3日目昼 ロクシエ連邦・ファークス共和国フリーベル港 海上自衛隊護衛艦「いせ」

「それじゃあ行ってくる！」

ローターを回すヘリコプターの扉から、前原海将補が甲板に立って自分たちを見送る仲瀬艦長に向かって叫ぶ。

「お気をつけて。」

仲瀬は前原に敬礼を送る。前原も仲瀬に向かって答礼を送ると、機体内に入る。すかさずヘリの乗員が扉を閉める。そして前原はパイロットに命じた。

「よし、出してくれ。」

「了解！」

エンジンの出力が上げられ、ローターの回転数が上昇する。それとともに、SH60Kヘリの機体も空へと舞い上がる。

現在機内にはヘリの乗員以外に、彼と外務省から派遣された荒木陣、保安庁の人間が1人。そしてロクシエ側の人間が2人乗り込んでいた。日本側の3人は礼装とスーツに身を包んでいる。

「どうですか？ヘリコプターの乗り心地は？」

前原はインカム越しに、ロクシエの人間に聞く。

「思ったよりも悪くありません。それにしても、本当に真上に飛びたてるとは驚きです。」

ロクシエ側からの反応は悪くなかった。

この日の朝、小型艇で「いせ」に乗り込んできたのは、ロクシエの軍人と急遽駆けつけたファーカーカス共和国の役人2人だった。彼らは、取り敢えず日本側との交渉を行いたい旨を伝えてきた。前原にも荒木にも依存などあるはずがなく、すぐにその打ち合わせに掛かった。

ロクシエ側の提案により、場所は郊外の市庁舎で行われることになったが、少しばかり港からは距離があり、移動するのに時間が掛かりそうであった。船や車を乗り継ぐのも面倒である。また、荒木としては日本に関しての説明をし易いように、プロジェクターやパソコンを運びたかった。そうになると、尚更安全に運びたい。

そこで、前原はロクシエ側に対してヘリコプターの使用許可を求めた。ところが、ロクシエ側は他国の飛行機を自国内で飛ばすことも問題にしたが、それ以上にヘリコプターを知らなかったため、前原らはまずヘリコプターに関して説明することとなった。

結局この問題は、ヘリコプターには一切の武装を施さず、その飛行はロクシエ空軍の監視下で行うことで決着した。そのため現在、上空には近くの空軍基地から飛び立ったレシプロ式の戦闘機が2機、ヘリの監視を行っていた。

ファーカーカス共和国から派遣された役人の話に寄れば、連邦政府よ

り人が派遣されてくるのは明日以降なので、今日の交渉はあくまでそのための予備交渉や、寄港している自衛艦と乗り込んでいる乗員に対する扱いをどうするかに留まるはずだった。

もつとも、双方共に相手を全く知らない。それに加えて、元いた世界のルールや慣習も知らない。恐らくそれを知るだけで今日は消費されてしまうだろう。交渉には入れないかもしれない。

「全く、厄介なことだな。」

前原はふとそう漏らした。

「やるしかないでしょ。」

隣に座る荒木はそう返した。

20分ほどで、へりは着陸場所として指定された学校のグラウンドに着陸した。前原や荒木がへりから降りると、そこには少しばかり驚きの光景が広がっていた。

「ほう。物好きなマスコミはこの国にもいるらしいな。」

グラウンドから少しばかり離れた場所で、フラッシュを絶え間なく焚いているカメラマンや、かなり旧式のようながテレビカメラの姿も散見された。

「ま、俺たちには関係ありませんよ。」

と荒木は言ったが、実際には自分たちの動静が既にラジオで生放送されており、さらにこの日の夕方の新聞やテレビのニュースのト

ツプを飾るとは知る由もなく、「いせ」に帰艦後乗員たちに教えられて、初めて驚くこととなる。

3日目昼 トリステイン王国 ラ・ロシエール沖合 護衛艦「ひゅうが」

「それじゃあ、後のことを頼むぞ。」

ロクシエで交渉が始まろうとしていたその頃、遠くトリステインでも動きが見られた。護衛艦「ひゅうが」から高杉海将補と、やはり外務省から派遣されてきた役人が一人へりに乗って飛び立とうとしていた。

「テイク・オフ！」

「ひゅうが」から発進したへりは、トリステイン政府より派遣された竜騎士に誘導されてラ・ロシエールへと向かう。本来なら、艦隊自体がラ・ロシエールへ向かいたいのだが、港湾施設が整っていないということなので、やむなく高杉らがへりで先発することにした。

竜騎士が艦隊上空に現れた時、乗員たちが啞然としてしまったのは言うまでもない、元より平賀才人を通して連絡を受けていた高杉や海野と言った幹部も軒並み驚いたくらいである。

「まさか本当にドラゴンがいるなんてな。」

自分たちの前方を飛ぶドラゴンの姿を見ながら、高杉はそう呟かずにはいられなかった。

「ここは異世界なんですよ。今更何を言っているのですか、ククク・・・」

と、高杉の隣に座る人物が不気味に笑う。

「ああ、本多君。何でそこでクククなんだね？」

高杉の隣に座っているのは、ロクシエに派遣された荒木と同年代の女性であった。名前は本多聡子。眼鏡を掛け、女性用スーツに身を固めた姿は、どこにでもいそうなOLに見えなくも無いが、その体からは得たいの知れない雰囲気を発散していた。

「口癖なんです。気にしないで下さい。ククク・・・」

（本当にこんな娘が交渉役で大丈夫か？）

外務省がどうしてこんな人間を派遣してきたのか、高杉には正直な所理解に苦しむものがあった。

「それよりも、今は今後のことを考えるのが先決では？」

「ああ、そうだな。」

「平賀少年からの報告によれば、これからいくトリスティンと言う王国は、魔法使いが魔法を使えない人間を支配している世界だそうですね。これまで得たデータから推察して、地球のヨーロッパに似ているようですが、魔法やドラゴンが存在するなんて、まさしくフ

アンタジーです。ククク……」

「そんなファンタジーな国と、どうやって交渉する気なんだい、君としては？」

「そうですね。平賀少年の報告と我々の世界の中世ヨーロッパの状況を考えれば、魔法を使えない人間を人間とは見ないかもしれませんがね。そうになると、交渉すら出来ないかもしれませんね。ククク……」

(おい！)

高杉は内心そう突っ込むと共に、目の前の少女の洞察力に一定の評価をした。交渉が元より出来ないかもしれないと言う発言はいささか問題だが、それでも少ない情報を組み立ててよく推理していた。

実を言うと、才人から送られてきた情報はそんなに多くはなかった。才人は元々高校生であり、成績が良いかと言えばそうではない。論理的に様々な情報をスラスラと伝えられるタイプの人間ではなかった。そのため、情報は限定的かつ抽象的な物に限られていた。

その情報とP3Cなどが偵察で得た断片的な情報から、聡子は自分なりに先ほどの推察を組み立てていた。

(なるほど、頭は悪くないようだな。)

「ですが、交渉を行うことが上からの命令ですからね。我が国としては、早く資源の輸入先と製品の輸出先を見つけないと、国民がミイラになっちゃいますからね。ククク……」

「何か策はあるのかい？」

「まだ何とも。まずトリステインと言う国自体が、我が国にとって有益な存在なのかわかりませんしね。ククク……。」

確かに、資源もないし自国の製品の有望な市場となりえないならば、あまり価値はないと言える。それどころか、明らかな階級社会で、魔法使いがそうでない者を虐げている世界であるならば、左派政党あたりが国交締結に反対する可能性大だった。

「だが、やるしかない。」

高杉は心に強く誓う。

3日目昼過ぎ トリステイン王国 ラ・ロシエール市街練兵場

平賀才人は、今まさに自分の目の前に降りたとうとしているヘリコプターに視線を釘付けにしていた。久しぶりに聞くヘリコプター独特のエンジン音とヘリコプター独特の風圧が襲い掛かってくるが、そんな物は今の彼には全く関係なかった。

鼠色に塗装されたその機体には、小さくではあるが感じて海上自衛隊と描かれ、またやはりかなり小さいが日本国籍であることを示す赤い丸のマークが描き込まれていた。

「あれが、才人さんの国の乗り物ですか？」

アンリエッタが少しばかり大きな声で尋ねてくる。そうでもしないと、声が届かないからだ。

「そう。正確にはヘリコプターって言うんだけど。」

そのヘリコプターは、今まさに彼らの目の前に降りたとうとしていた。着陸表示も無線による誘導もない中、才人が手を振って合図し、ここに降りるよう誘導した。

そしてヘリコプターは無事に着陸し、ローターの回転数を落としたり。間もなく側面の扉が開き、制服姿の男が2人と、スーツ姿の女性が1人降り立った。

才人は彼らの前に出る。

「平賀才人君だね？」

「はい、平賀才人です。」

「出迎えありがとう。私は海上自衛隊第一護衛隊群司令官の高杉海将補だ。会えて嬉しいよ。」

「海上保安庁第3管区一等海上保安監の笹井だ。よろしく。」

制服組の2人が才人と挨拶を交わす。そして、最後に本多が挨拶をする。

「外務省の本多聡子です。よろしく。ククク・・・」

その言葉と、不気味な笑みに、才人は少しばかり引いてしまおうが、すぐに気を取り直して挨拶した。

「アンリエッタ女王がお待ちです。」

才人は3人をアンリエッタとマザリーニが待つ方へと案内した。

「遠路遙々トリスティンへようこそ。私が女王のアンリエッタです。こちらはマザリーニ枢機卿。日本の皆様を歓迎いたします。」

アンリエッタに出迎えられた3人は、それぞれ才人の時と同じく挨拶を交わした。

「それでは、場所を移動しますので。」

「ああ、その前に女王陛下。1つお願いが。」

突然高杉が言う。

「何でしょう?」

「我が艦隊には、貴艦隊の生存者11名が收容されています。彼らの身柄をどうするか決めていただきたいのですが。」

その言葉に、アンリエッタは内心ドキッとしたが、表情には何と出さずに返答する。

「そうでしたね。では、すぐにこちらに引渡しをお願いします。」

「わかりました。それではへり、すなわち我々が乗ってきた乗り物で運びますので、その飛行の安全の保証をお願いします。」

「わかりました。」

生存者の引渡しが決定的になると、高杉はへりの乗員に艦隊へその旨を伝えるように命令した。

「お手をかけて申し訳ありません。」

「いいえ。こちらこそ、我が艦隊の将兵を助けていただき感謝します。それでは、改めてこちらへ。」

アンリエッタは3人を、待たせている馬車へと案内した。もちろん、トリステイン側の仲介役として才人も付いて行くし、その御主人であるルイズも付いて行った。

異文化交流 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

荒木と本多両外務省役人の名前とキャラはいずれもあるラノベ作品のキャラです。いずれ発表しようと思えます。

異文化交流 3

3日目昼過ぎ トリステイン王国 ラ・ロシエール迎賓館

日本とトリステインの歴史的な初交渉は、正午を回ってからスタートした。トリステインの代表は当然ながら女王であるアンリエッタだ。日本側代表は、外務省の人間である本多聡子である。

トリステイン側の人間は、日本側の代表も若い女性であることに驚いたが、そんなことに構うことなく会談はスタートした。最初は杓子定期的な挨拶であったが、すぐにお互いの国の説明となっている。

まずはトリステイン側が、地図などを用いて自国の説明を行った。今回の会談においては、ゴンドランら保守強行派が一掃されていたため、日本側に対して真正面から無礼な態度を取る人間はいなかった。

それでも所々で自国の優越性、特に魔法や貴族の存在を鼻に掛けた発言があった。それに対して、本多は特に反応するわけでもなく、ただ黙って聞いていた。

トリステイン側の説明が終わると、今度は日本側の説明である。こちらはパソコンやプロジェクターを使った映像による説明を行ったが、昨日才人がアンリエッタに見せたそれよりも遥かに濃い内容の物であった。さらに、今回の映像にはわざわざ自衛隊の広報用ビデオまで混ぜていた。

ただし、この日本側の説明では日本の窮状（資源不足と食糧不足）

は一切語られていなかったし、本多らもそれについては何も言わなかった。

これにはアンリエッタ以下トリスティン側参加者全員（才人は除く）を昨日以上に驚かせた。ちなみにオブザーバーとして参加した才人であったが、発言する機会はなかった。

「これが我が国の現状です。どうですか？ククク・・・」

本多の言葉は淡々としたものだが、その口癖と怖いくらいまでの冷静な声と表情がトリスティンの参加者に言い知れぬ恐怖を与えた。

（外務省がどうして彼女を寄越したか納得出来る。）

今回は日本側のオブザーバーに終始する高杉海将補は心の中でそう呟いた。彼女は存在するだけで、相手に無言の圧力を掛けられるような人物だった。

「日本という国については良くわかりました。ですが、日本としては我が国にどうして欲しいのでしょうか？」

「まずはお互いの承認です。それぞれの領土と領海を明確にし、国として認め合う。そのために必要な条約を結ぶ。」

「領土と領海を明確にするとは？」

「あ、そう言えば中世では国境線概念が明確ではありませんでしたね。どうやらこちらと同じようです。」

中世においては国境や主権に関する概念が生まれておらず、ハル

ケギニアにおいても「だいたいこのあたりが境界」というかなり曖昧な国境概念しかなかった。だから本多は地球で使われていた国境と領海、領空の概念、それに関する国際法規に関して話した。

説明後、彼女は付け加えた。

「しかし、現在の所こちらの世界でそれが確定するかは未知数なので、取り敢えず現状で行うべきは双方の国家、突き詰めれば政府の承認でしょう。」

すると、トリステイン政府の閣僚たちは顔を見合わせ、ヒソヒソと話し合った。本多たちには聞こえなかったが、平民しかいない国を承認するべきかを話し合っていたのだ。

アンリエッタはしばらく目を閉じて何かを考えていた。そして彼女はそれらの意見に惑わされることなく、自分の意思で尋ねた。

「本多特使、もし我が国が貴国を承認した場合、我が国にはどのような利益があるのでしょうか？」

すると、本多は不気味に笑って言った。

「なるほど、そう来ますか。そうですね、もしかしたらあなたの方にとっては言ばしくないことばかりかもしれませんがね。ククク・・・」

「「「「「!?!?」「」「」

彼女の思わぬ発言に、参加者全員が凍りついた。

3日目夕方 フォルティアース大陸西部 カラーヤ村

「終わりました聖女様。」

電報を打ち終えた電信手がメイベル方に振り向き言った。

「よし！取り敢えずサクラスに連絡は完了と。」

メイベルは村で唯一の外部との連絡手段である電信を使って、今日自分が体験した報告を帝都サクラスに向けて送った。電報だと、送れる情報量にどうしても限界がある。そのため、色々と要約して送ったのであるが、それでも相当な量となり、打ってもらうのに時間が掛かった。別に飛行機で最寄の街まで飛んで行き、電話をすれば済む話なのだが、それも行かない事情があった。

「さてと、ナバルの方はどうかしら？」

彼女は電信手に礼を言うと、飛行場へと向かった。

「ナバル！どう？」

「ああ、メイベル。何とか燃料は入れ終わった。機体の点検ももうすぐ終わる。明日の朝には出発できると思うぞ。」

飛行場では、ナバルが油まみれになりながら大統領専用機の整備と補給を行っていた。

「結局今日は飛べなかったわね。」

フォルティアース大陸の飛行機には夜間飛行できる航法装置は付いていない。従って、これから飛ぶのは無理だった。

「まあ、昼間があんなだったからな。」

ナバルの言うあんなのと言うのは、昼間現れたロクシエ海軍の水陸機だった。その搭乗員とメイベルの会談は、フォルティアース大陸の人間が異世界人とコンタクトした記念すべきことではあった。しかしながら、ナバルを含む村にいたほぼ全員がそれに注視してしまっただために、飛行機の整備と給油が止まってしまった。

ロクシエ機が引き上げてから慌てて再開したものの、元々整備能力が貧弱な飛行場なのだ。整備の人間やナバルも汗だくになりながらがんばったが、結局今日中の出発は無理となってしまった。

「申し訳ありません。聖女様、勇者様。」

飛行場の責任者は何度目になるかわからない謝罪の言葉を述べる。

「ああ、気にしないで下さい。それにこれは地方の開発を疎かにした私たちにも責任があります。サクラスに帰ったら辺境の開発についても提議しなきゃいけないわね。」

思ったよりも辺境における開発速度が遅い現状を見て、メイベルはそう考えざるを得なかった。これでは都市部との格差が開いてしまっばかりだ。

「けど、今はそれよりも今日のことをサクラスに伝えなくちゃ。でも、まさか大陸の半分が別の世界に飛ばされちゃうなんて・・・」

メイベルは頭を抱えた。ここまで見てきた様々な事態から、メイベルは今フォルティアース大陸（東半分）が置かれている事実をそう推理していた。

「そう落ち込むなよ。別にメイベルのせいってわけじゃないし、メイベルが落ち込んだ所でどうこうなるわけじゃないだろ。」

「そうですよ。メイベル1人だけが悩んでも仕方ありません。もっと前向きに行きましょうよ。」

ナバルとパセラが慰める。

「そりゃ、そうだけど。」

「とにかく、今日はもう何も出来ないんだ。だったら、明日に備えて今晚はしっかり休んでおけ。お前は大統領であり公王なんだぞ。そんな弱気な姿を見たら、国民が動揺するだろうが。もっと気を大きく持て。」

ナバルにそう言われると、メイベルも自然とやる気が出てくる。

「そうよね。こんな所で挫けちゃいけないわね。」

彼女は自分にそう言い聞かせた。

昼過ぎより始まった日本とロクシエの会談は、トリステインと同じく日本側は外務省より派遣された荒木が代表となって進めた。ただし、ロクシエ側はファークス共和国政府閣僚は間に合ったが、さすがに連邦政府関係者は地方在住の文官に留まった。

こちらも初めは双方の国についての紹介となった。ロクシエ側も小型の映写機を使うなどして自国について紹介したが、やはり日本側のパソコンやプロジェクターと言った類には驚きの目を向けていた。

ロクシエの科学力は地球で言えば1940年代から50年代前後のレベルだ。すなわち、科学技術がある程度発展している世界だ。その分、日本側の技術力がどのように凄いかを具体的な形で理解することが出来る。

トリステインの場合は、「とんでもなく凄い」と言う認識で終わってしまうが、ロクシエの場合は何がどのような観点から凄いかを理解できる。この違いは大きい。

また法概念に関しても、ロクシエの場合は既に主権や領土と言った概念は持っていたし、国際法と言う概念もちゃんと持っていた。しかも、さらに幸運だったのは日本が元いた世界で持っていたそれとかなり近いものを持っていたことだった。そのため、当初時間が掛かると思われた法律面でのすり合わせが予想以上にスムーズに行った。

もちろん今後詰めるべき細かい点は多々あるから、決して楽観できるものではないが、それでも会談は終始和やかに進めることが出来た。

取り敢えず、この日の会談では双方の現状把握と今回ロクシエへやって来た護衛艦隊に対する今後の処置の決定で終わり、会談は翌日に持ち越された。しかしながらロクシエ側は日本との国交正常化と貿易に前向きであるように、荒木以下日本側参加者には感じられた。

交渉終了後、日本側代表団は再びヘリで護衛艦「いせ」へと戻った。

「なんとか1日目は終わったな。」

「ですね。しかし、問題は明日からです。ロクシエ連邦の大統領との直接会談です。それを考えると、今日の比じゃないでしょ。」

荒木の言葉に、前原海将補も表情を厳しくする。

「確かに。明日も上手く行くとは限らんからな。」

「とにかく、今日の結果を早急に日本に送って指示を仰がないと。」

交渉自体は荒木ら現場の人間に任されているが、その前提となる交渉の方針に関しては日本本土の外務省、引いては内閣から出ることとなっている。そのため、荒木は帰還したら早速日本本土に報告を行う義務があった。

「そうだね。そう言えば、トリスティンでも交渉が始まったそうだね。」

「ええ。あつちは本多が向かったはずです。」

荒木の表情が、複雑な物になる。

「知っているのかね？向こうの派遣外交官を。」

「ええ。あいつ頭は切れるんですが、恐ろしい女で。戦争の種を撒いてなきやいいんですが。」

「そんなに危ない人間なのかね？」

「はい。」

前原の質問に、荒木は断言した。

10分後、彼らの乗ったヘリは何事もなく「いせ」へと着艦した。

異文化交流 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

と言うわけで交渉スタートですが、トリステイン方は少しばかり暗雲が垂れ込めています。どうなるかは楽しみみです。

ちなみに、外交官の荒木ならびに本多の2名は「ぷいぷい」シリーズの新木陣と本田聡子がモデルになっています。双方共に、外交官だったら優秀な人材になると思って出してみました。

さて、作者はニコニコ動画を見るのですが、先日色々なアニメのOPの外国語版のページを発見しました。この内ドイツ語版には「空気の読める国ドイツ」というタグが引っ付いているのですが、実際に聞いてみると納得。特に名探偵コナンは日本の曲そのままにドイツ語に振り返られていました。逆に、イタリアと昔の韓国は笑ってしまいました。特に韓国語版の「銀河鉄道999」とか。

比較文化論を習った身としては、中々興味深いです。

異文化交流 4 (前書き)

すいません、本当はロクシエのシーンも書きたかったのに調子に乗って書いたらずっとトリステインのターンになってしまいました。ごめんなさい。

異文化交流 4

3日目夜 トリステイン王国 ラ・ロシエール沖合 護衛艦「ひゅうが」

「ふう、一時はどうなるかと思ったぞ。」

「ええ、綱渡り物でしたね。ククク・・・」

「ひゅうが」の甲板に高杉海将補が降り立ち、続いて本多が降り立った。

「元凶である君が言うんじゃない！それからそのクククはいい加減やめれ！君のおかげで、交渉が破綻しかねなかったんだぞ！」

「いいじゃないですか。最後に勝てば官軍なんですから。ククク・・・」

「君のような外交官が日本にいたなんて・・・本当に驚きだよ。」

目の前で不気味に笑う女性外交官を見て、高杉はそう言わずにはいられなかった。

数時間前、トリステイン政府との交渉の場で彼女が放った爆弾発言は、当然ながらトリステイン側を刺激した。

「それは一体どういうことでしょうか？」

「言った通りのままです。我が国と関係を結べば、あなた達には悪いことばかりしか起きないかもしれない。そう申し上げたんです。ククク……」

すると、トリステイン側の人間が何人が立ち上がった。

「ふざけるな！！」

「無礼にも程があるぞ！」

だが、それをアンリエッタが制した。

「そう言うだけの根拠はおありなのですか？」

「もちろんです。まず、我が国とあなた方の国との考え方の根本的な違いです。我が国は国の最高法規たる憲法で、出身、門地、人種、性別などによる差別を禁止しています。国民も、不当な理由で他人を虐げることが許しはしないでしょう。ですから、あなた方の行っているような魔法使いによるそうでない人間に対する支配体制や、極端な身分制などは、我が国から見れば時代遅れの野蛮な文化として映らないでしょうね。ククク……」

自国の文化と慣習を野蛮と言われ、再びトリステイン貴族は激昂する。

「貴様！無礼にも程があるぞ！我々メイジは神によって選ばれた民なのだぞ！そうでない人間を下に置いて何が悪い！！」

「そうだ！それに、いきなり現れたお前たちに我々の国の文化や慣習をとやかく言われる筋あいなどはない！」

「そうです。本来相手の文化や慣習に他人がとやかく言うべきではないでしょうね。その国の運命は国民自身が決めるべき物なのですから。しかしながら、我が国の国民全員がそれを理解するとも思えません。それに、仮に我が国の政府があなた方の支配体制を認めたとしましょう。例えそうしたしても、必ずやあなた方の国民に我が国の考え方が伝わります。そうなれば、絶対にあなた方の国の国民を焚き付けるでしょうね。つまり、あなた方の支配体制が我が国との関係を持つことで、急速な崩壊を起こす可能性があるのですよ。」

「だったら、到底関係など持てないじゃないですか。我が国に危険な思想を持ち込むような国と、関係を持つなんて、仮に私が許しても臣下が認めないでしょうね。」

このアンリエッタの発言を、臣下の多くはあくまで例えとしか捉えなかったが、実際にはアンリエッタの本心があらわれたものだった。しかし、それに構うことなく本多は続けた。

「そうですね。普通だったらそうですね。しかし、あなた方が我が国と国交を持たないと、それはそれでマズイのです。」

「どづいことですか？」

「我が国は憲法で国としての交戦権を否定しています。しかしながら、相手が国でないならば・・・言わずもがなです。国交を結ばず、承認しなければ国じゃありませんからね。むしろ、我が国近海に現れた危険なテロリスト集団になってしまいますよ。」

さらに彼女は、冷たく言い放つ。

「それに、我が国は現在国家存亡の淵に立っています。さすがにこんな事態に陥れば、平和ボケした我が国の国民も、多少手荒な真似をして資源を手に入れる道を探っても認めるでしょうね。自分が生きるか死ぬか掛かっているのですから。」

(自国の国民をそう扱き下ろすか、君は！)

片割れで見ていた高杉は思わず、心の中でそう突っ込んだ。もっとも、少しばかり賛成もしていたが。

「それは脅迫ですか？」

「そう取るか取らないかは、そちらの自由です。ただ念のため言っておきますと、我が国の国民は1億2千万人で、常備兵力は20万人近いです。その全てが先ほど映像で見せたように、強力な武装を施されています。例えば我々が乗ってきた軍艦には、沖合50kmからあなた方の王都の城をピンポイントで狙えるだけの武器があります。あ、あくまで例え話ですから、聞き流してもらっても結構ですよ。ククク……」

(もう完全に脅しじゃないか……)

するとアンリエッタはオブザーバーである才人を呼んだ。

「才人さん、彼女の言ったことは本当ですか？」

「ええと、多分間違いはないと。確か一番遠くまで届くミサイルなら、1万km先の物を正確に吹き飛ばすって言うし。」

才人は弾道弾の事を言ったようだが、日本は弾道弾を持ってはいない。一番長い射程を誇るミサイルは、黄海海戦後に導入を開始し始めたトマホークだ。

「言っておきますけど、我が国は別にそちらを攻める気なんてさらさらないんですよ。お互いを認め合って、貿易を開始したいと言っているのです。ただ、そのためにそれ相応の覚悟をして欲しいと言っているのです。ククク・・・」

彼女の口調は恐ろしいまでに平静を保っている、それがまるで刃のように、トリステイン政府の面々に襲い掛かる。

「・・・」

「結局、交渉は継続となったけど、あれじゃ絶対に相手に悪印象を与えたぞ。」

「好印象を与えても、相手に弱いと思われ、舐められるよりは1万倍よいのでは？それに課程なんてどうでも良いのですよ。世の中全ては結果です。最後に勝てば良いんです。ククク・・・」

「・・・君、絶対ラスボスだろ。」

「ククク・・・よく言われます。ちなみに、最近じゃ「外務省の白い悪魔」とも呼ばれてます。ククク・・・」

彼女のもう1つのあだ名の意味を、高杉は直に理解した。悪魔は

彼女のこの性格のことだろう。白いと言うのは、おそらく外見だ。彼女の肌の色は真つ白なのだ。綺麗と言うより、まるで病人だ。血の気が感じられない。

と、そこで彼はあることを思い出した。

「それは誇るべきことなのかね？それに外務省じゃなくて、交通局の間違いじゃないのかい？」

「別に私は浅草線を騒音撒き散らしながら走っているわけじゃありません。というか、司令官は意外と鉄ちゃんだったんですね。」

「君こそ。鉄分濃そうだな。そっちの方がビツクリだよ。」

「まあ、友人がそうなので。」

話がどんどん脱線していた。それに気づいた高杉は、話題を元に戻した。

「話を戻すが、平賀少年の言っていた少女と海軍少尉についてだが、

「ええ、もちろんすぐに本国へ紹介して下さい。まあ、後者の方については厚生労働省に任せるしかないでしょうが。しかし、この世界に無理やり呼ばれた人間が2人ですか。拉致2人と言うことでもっと強請れるかも。ククク・・・」

彼女は無理やりの部分を強調した。

「じらー」

「冗談ですよ。それはさて置いても、あの時の平賀少年の顔は傑作でしたね。ククク・・・」

再び薄気味悪い笑みを浮かべる本多に、高杉が突っ込む。

「やっぱり君、ラスボスだろ！」

同時刻 ラ・ロシエール迎賓館

結局日本とトリステインの交渉は明日以降も継続と言う形になり、アンリエッタらはここで1泊となった。もちろん、仲介役の才人もだ。

その才人は、自分に宛がわれた部屋で1人物思いに耽っていた。

「どうしたんだ相棒？せつかく自分の国の人間に会えたっていうのに。何かあったのか？」

壁に立てかけておいたインテリジェンス・ソードの『デルフリンガー』が尋ねる。

「まあね。」

久しぶりに会った自分の国の人間のキャラクターにも驚かされ、冷たい物を感じたが、それ以上のショックを、彼はその後の話し合いで聞かされていた。

その時、ノックがされる。

「どうぞ。」

「才人。」

ルイズが部屋に入ってきた。

「何だ？」

「さっき、日本側の人たちと一緒に何を話したの？」

才人は会議の終了後、5分ほどだが日本側交渉団とだけでの話す時間を貰った。その時の会話の内容を、ルイズは知らない。

「うん。話したと言うより、話を聞かされたんだ。家族について。」

その瞬間、ルイズがハツとする。

「……そう。そうよね、才人の家族は才人のことを心配しているでしょうからね……」

「別にルイズを責めてるわけじゃないぞ。そりゃ家族に会えるならそれはそれで嬉しいけど、俺はお前に呼ばれたことを後悔はしていない。それに、家族とお前のどっちかを取れって言われれば、お前を取る。」

「……あ、当たり前じゃないの！あんたは私の『使い魔』なんだから。けど、やっぱり家族のことは気になるんですよ。」

「うん。2人とも元気だつて。住んでる場所も変わってない。むしろは10年経ってるけど、正真正銘俺の家族だ。」

「そう、よかつたじゃない。それにしちゃ元気ないわね。」

「実はさ・・・俺がいない間に妹が生まれたらしいんだ。」

「え？」

「だから、俺が消えた後に妹が生まれたらしいんだ。」

「た、確かにそれは大変なことね。」

自分の知らない間に兄弟が増えていれば、そりゃ誰だつて驚くだろう。

「相棒も大変だね。」

「もう7歳らしいんだけど、会ったら何て言えば良いんだろう？」

「うーん・・・私にもわからないわ。取り敢えず、挨拶じゃないかしら？」

と、そこでルイズは気づく。

「て、やっぱりあなたは日本に帰るの？」

ルイズは才人が自分を置いて日本に帰るのではと疑った。

「当たり前だろ。ずっと会ってないんだから、親に無事な顔を見せ

たいのは誰だっけそうだろう？」

「う……」

「それに……」

「それに何よ？」

「お前のことを紹介しなくちゃいけないしな。」

「あ……」

言った才人も、言われたルイズも途端に顔を真っ赤にした。そしてしばしの沈黙。

「……」

数分後、ようやくルイズが口を開く。

「ええと、それはつまり……」

と続きを言おうとした所で、扉がノックされた。

「え！？あ、どうぞ。」

ルイズはせっかくの所を邪魔され、憤りを感じるが、部屋に入ってきた人物を見て今度は驚く。

「姫様！？」

「ルイズも一緒だったんですね。良かった。」

「どうしたんですか？俺に何のようですか？」

「はい、実はお2人にお話したいことが。」

「「？」」

アンリエッタの真剣な表情に、才人とルイズはただならぬ物を感じた。

異文化交流 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

と言うわけで、腹黒い本多外交官の活躍でした。まあ、外交なんて腹黒い人たちの騙しあいなんでしょうね。多分。

それから、色々な作者の趣味全開ネタを出しまくりました。すいませんね。

今回はこそはロクシエに行きます。それから、日本も書かないと。

悩める日本政府

3日目夕方 ロクシエ・首都特別地域郊外 シュルツ家

上級学校から帰ったリリアとトレイズ、さらにヴィルはテレビのニュースに釘付けだった。テレビニュースのトップを飾っているのは、ロクシエ東端のファークス共和国に現れたニホンと名乗る国の艦隊と、その使節に関してのものだった。

ロクシエ連邦政府は、未だ公式な発表を数回行っただけであるが、既に多くのテレビ局やラジオ局は艦隊が停泊しているフリーベル港にカメラマンやレポーターを派遣して、中継を送っていた。

そのため、ニホンの軍艦や使節が移動に使った見たことのない航空機の姿が既にカメラによって収められ、ニュースでその画像が何回も流れていた。

リリアとトレイズはそれぞれ飛行機を操縦できる。だから、今回現れた機体の上でプロペラを回すオート・ジャイロ（彼らはヘリコプターと言う単語を知らない。）に大いに興味を引かれた。

「へえ、垂直に離着陸できるのか。」

軍艦から発進し、グラウンドへ降りる姿を見ながらトレイズは感嘆の声を上げた。

「どうやって操縦するのかしら？私も一度操縦してみたいな。」

「リリアもトレイズ君も、本当に飛行機には目がないね。」

ヴィルが苦笑しながら言う。

「それにしても、素晴らしい性能だ。確かロクシエやスー・ベールでも似たようなオート・ジャイロを製作中とは聞いたけど、まだ試験段階だからね。あんな風に軍艦に搭載しているとすると、我が国よりも優れた技術を持っているかもしれない。」

「けど、変な形の軍艦ですよ。」

「あれ、本当に軍艦なの？とてもそんな風には見えないけど。」

ニユースでは、白黒の画像ではあるがニホンという国の軍艦が映し出されていた。しかしながら、トレイズたちロクシエの人間には、それが軍艦にはとても見えなかった。

ロクシエで軍艦と言えば、大砲や機関銃、魚雷発射管を多数積んでいる艦だ。ところが、映し出されているニホンの軍艦は、オート・ジャイロの母艦と思われる艦はともかくとして、護衛艦と思われる他の2隻にはほとんど武装らしきものが見当たらない。前甲板にある1門の小口径砲らしき物だけが武装と呼べそうな物で、後は巨大な構造物しか見当たらない。

ニユースに出ている軍事評論家たちも、これらの艦艇が何に使われるものか全く持って理解できないらしい。好き勝手に予測しているが、どれも要領を得ない。

地球で言う所の1940年代前後の科学力しかもたないロクシエ人にとって、ミサイルや高性能な誘導弾、レーダーによる戦闘など想像すら出来なかった。当然、護衛艦が艦内に埋め込む形で多数の

ミサイルを収納しているなどわかる筈もなかった。

「けど、政府はどうするんでしょうね？」

「さあね。こんなことはこれまでになかったことだから。まあ、お互いに合意に達すれば国交が結ばれるんじゃないかな。とにかく、戦争のような事態にならないことだけを祈るよ。」

トレイズの質問に、ヴィルはそう答えた。

3日目夜 日本・東京首相官邸

首相官邸にはトリスティンとロクシエからの情報が届けられていた。その情報に接して、春川首相はとりあえず安堵した。

「とりあえず交渉には持ち込めたか。」

「ですが問題はここからです。」

小泉副首相が適格な言葉を言う。

「わかってるよ小泉。外務省は引き続き両国と交渉を続けるように。くれぐれも相手国と関係がこじれてしまうようなことだけを避けるように。」

「わかっております。」

と木戸外務大臣は答えたが、もし彼らがトリスティンでの交渉の様子を知ったら頭を抱えてしまったかもしれない。本多は自分にとって不利になるような情報は日本に送ってはいなかった。

「しかし、まさかトリスティンに他にも日本人がいたとはな。そっちについてはどうなっている？」

トリスティンから送られてきた情報は再び首相以下閣僚たちを驚かせた。平賀少年からの情報であったが、春川は早速調査を命じている。ただし1人は平賀少年と同年代の少女であったが、もう1名は70年近く前の軍人であるため、調査するのは国家公安委員会（警察）と厚生労働省の2つの役所となる。

まず国家公安委員会委員長が答えた。

「その少女、高風春名さんについては現在警察庁の行方不明者リストを紹介中です。おそらく明日の朝までにはわかるかと。」

「出来るだけ急いでくれ。家族がいるなら一刻も早く報せたほうがいいからな。」

「わかりました。」

続いて厚生労働大臣が答えた。

「佐々木武雄海軍少尉についてですが、こちら目下戦死軍人のリストから探しております。ただし、何分70年近く前のことなので、判明するのはやはり明日以降と思われるです。」

「わかった。そちらも全力を尽くしてくれ。」

取り敢えず、高凧春名と言う少女と佐々木海軍少尉についての話はそこで一旦打ち切った。

「ところで首相。」

「何かな石川防衛大臣？」

「海上幕僚長によれば護衛艦隊を現地に留め続けますと、燃料などに不足を生じる可能性があります。そこで補給艦の派遣を考えているのですが。」

「燃料が不足している時に、外に持ち出さなきゃいけないか。ま、自衛官に死ねって言うわけにも行かないし。許可する。計画は防衛省と海自に任せる。くれぐれも無駄に燃料を使わないようにしてくれ。」

春川は石川防衛大臣に釘を刺した。

「わかっております。」

「燃料と言えば、資源の調査についてはどうなっている？」

春川は関係者に尋ねる。先日秋田や新潟の油田跡で石油が再び湧き出したことから（しかもすごい量で）、他にも復活した資源がなにかどうか調べることが閣議で決定した。徒労で終わる可能性も大きいが、とにかく少しでも不足している資源の穴埋め方法を、日本政府は真剣に考える必要があった。

「現在調査チームを編成中です。早い所では、明日から調査を開始します。ただし、何分何十年も前に閉鎖した所もありますから。安全を考えると時間が掛かると思っています。」

「出来るだけ急がせてくれ。ただし、無理はしないように。犠牲者を出すのだけは避けたいからな。」

そこまで言った所で、春川は目元を手で押さえた。

「首相、少しお休みになつては？今日も朝から働きつ放しでしょ？」

「そうは言うが。今日本はとんでもない事態の真っ只中だし、皆だつて休んでいないだろ？」

「首相に倒れられては、それこそ政治がストップしてしまいます。我々だつて休んでいますよ。首相もここらで少しお休み下さい。」

さらに小泉が言う。

「お休みの間は、僕がしっかり代行しますから。御安心下さい。」

「そうか。じゃあお言葉に甘えさせてもらおう。少し仮眠を取る。何かあつたら直に起こしてくれ。」

翌日（4日目） 早朝

国家公安委員長が、昨日の少女に関する情報を持ってきた。

「高凧春名という少女についてですが、行方不明者リストに確かにありました。平賀才人少年の同級生ですね。失踪したのは、彼が失踪した2週間後です。」

「そうか、もう1人いたのか。で、その少女の家族は？」

「両親共に健在です。ちなみに、平賀少年のように家族が増えたり、ドラマのように子がいなくなつて離婚みたいなことにはなっていないので御安心を。」

その言葉に、春川は少しばかり安心する。

「家族の仲が壊れたり、複雑なことになったりするのはこちらとしてもいたたまれないからね。佐々木とか言う海軍軍人についてはどうなった？」

厚生労働大臣が答える。

「なんとか見つけ出しました。佐々木武雄海軍中尉。戦死後1階級特進していますね。昭和19年10月25日のレイテ沖海戦において機動艦隊より出撃して、戦死となっています。当時息子が1人いて、現在も健在です。さらに孫が1人。その孫は都内在住で、曾孫にあたる娘が2人います。」

「そうか。だったら、そちらにも伝えておくように。」

「それにしても、これはちょっと問題ですね。」

そう言うのは、民間の弁護士出身の勢田せだ法務大臣だ。

「何が問題なんですか？法務大臣。」

「平賀少年と高風嬢が向こうに行った時の状況です。報告では召喚となつていますが、これを単なる事故と取るべきか、それとも誘拐事件と取るべきなのか。」

「確かにそれは問題ですね。国民は北朝鮮の拉致事件を忘れてはいません。3年前はそれで偉いことになりましたからね。」

小泉副首相の言葉に、閣僚全員の表情が強張る。

3年前の2011年、黄海における韓国と北朝鮮の軍事衝突の解決と、さらに周辺諸国との関係改善のため行われた6力国協議。その会議上で、北朝鮮はさらなる日本人の拉致被害者を認定し、再調査の結果生存者がいるということで日本に帰国させる旨を伝えた。

そして当然と言おうか、それは日本国民を激怒させた。もっとも、国民自らが激怒したと言うよりも、煽ったマスコミが原因とも言えたが。

それはともかくとして、ようやく新政権へと移行して、関係改善が見られると思った日朝関係はこのせいで再び冷え切ってしまった。

春川内閣はその後始末をしたので、記憶に新しい所である。

「今は状況が状況だけに、そうした事態は強硬派に勢いを与えかねんな。」

今の日本は、食糧と資源の面で危機的状況にある。平和ボケしていた国民も、生きるためなら何でもやります的な空気に包まれつつある。そんな時に戦争の口実を与えたならば、どうなるかわかったものではない。

「かと言って、既に平賀少年に関してはニュースで流しちゃってますからね。」

政府は異世界に移した後も、定期的に政府発表を行っているし、春川も会見を行っている。そのため、既にトリスティンやロクシエの存在、さらに才人のことも放送済みであった。今更下手に隠そうとすれば、それこそマズイ。

「法務大臣の所見はどうです？」

「そうですね・・・召喚と言う事例をどう取るかが鍵ですが、こんなことこれまでありませんでしたからね・・・ただ、その召喚した相手が平賀少年を最初から攫うつもりであったのなら、立派な誘拐で立件できるでしょう。しかし、そうではない偶発的なことでしたら、多分事故になると思います。」

「やれやれ。また問題が出るか。木戸外務大臣。悪いが現地の外交官に連絡を頼む。」

「わかりました。」

「この件に関する報道は少し待て。責任は私が負う。」

こうして日本政府は、頭の痛い問題をまた1つ抱え込んだ。

悩める日本政府（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

進む世界

4日目朝 ロクシエ連邦・ファーカーカス共和国フリーベル近郊ロクシエ空軍基地

日本とロクシエの会談二日目の会場は、昨日の会場であったフリーベル市の市庁舎から郊外の空軍基地にある司令部の建物へと変更になった。

昨日はファーカーカス共和国の代表と連邦政府の派遣文官との話し合いであったが、今日は連邦首都から飛行機で飛んできたロクシエ大統領との直接会談となる。そのため集合に便利な空軍の飛行場が選ばれた。

早朝、「いせ」から飛び立った外交官荒木と護衛隊群司令官高杉を乗せたSH60Kヘリは途中でロクシエ空軍の出迎えを受け、その誘導を受けながら飛行場へと着陸した。もちろん、待ち受けていたロクシエの軍人たちが物珍しげに彼らを見ていたのは言うまでもない。

日本側の到着に遅れること数分、護衛戦闘機に守られた大統領専用機が着陸した。専用機、護衛機ともに古めかしいプロペラ機であった。

しかし大統領が乗っているとだけあって、飛行場の軍人たちは総出で出迎えていた。

その着陸の様子を、日本側一行も見ていた。

「本当に大昔の映画でも見ている見たいですね。」

荒木の言葉に高杉が頷く。

「だな。あの戦闘機は第二次大戦中のドイツの戦闘機にそっくりだ。向こうの旅客機はまんま第二次大戦前後にダグラスが作った旅客機だ。リーダーもないようだし、少なく見積もって科学力は40〜50年くらい開きがあるぞ……。だが、それを鼻にかけないようにな。相手は大統領だそうだ。失礼の無いように。」

「わかってますよ。」

一方、そんな彼らの方を空から見る目もあつた。

「あれが昨日テレビに出ていたオート・ジャイロね。面白い形をしているわね。垂直に離着陸できるみたいだし。一度操縦してみたいわ。」

護衛戦闘機小隊小隊長であるアリソン・ウィッティングトン・シユルツ少佐は思わずそんなセリフを零した。様々な機体を乗りこなしてきた彼女にとって、未知の機体であるオート・ジャイロ（ヘリコプターと言う単語がない）は魅力的に映った。そして、その気持ちは昨日娘が言ったセリフとほぼ同じセリフを彼女に言わせていた。

「シユルツ少佐、着陸許可が出ました。着陸してください。」

ボンヤリしていた所に、部下からの通信が入る。

「あ、了解。」

彼女は乗機を着陸させるべく、降下体制に入った。彼女はベテランパイロットらしく、鮮やかに3点式着陸を決め、滑走を終えるとそのまま機体を誘導された駐機スペースにいった。

その間に飛行場の滑走路脇では、先に降りた大統領専用機が着陸を終えて、大統領が地上へと降り立ちついていた。そして、先に到着していた日本側代表と握手していた。

4日目昼 トリステイン王国・ラ・ロシエール迎賓館

「それではここに、日本とトリステイン間に今後の国交正常化に向けての覚書が交わされたことを、そして今後日本政府を交渉の相手とすることをトリステイン女王として正式に宣言いたします。」

「同じく日本側代表として、同様に覚書の手交とトリステイン王政府を今後の交渉相手として認めることを宣言いたします。アンリエッタ女王陛下の素早い決断に感謝するとともに、今後両国が良き友人となれるよう祈ります。」

文書を取り交わしたアンリエッタ女王と本多外交官はそう宣言すると、握手を交わした。2人は笑顔でそうしたが、双方の随員は釈然としない表情をしていた。

この日の朝から、再び日本とトリステイン間での交渉が持たれた。

「さて、今日はどんな感じで行きましょうかね、ククク・・・」

自分でその種を蒔いておいてよく言えたものであったが、こうした部分が彼女にとつての強みかもしれない。

「正直私としてはここであなた方の提案に乗ることは、脅しに屈したようで気持ちの良いものではありません。しかしながら、こちらとしてはあなた方の提案に乗らないとマズイ事態に陥る可能性が出てきたのです。」

アンリエッタの説明によれば、国内における問題が徐々にトリステインでも表面化してきたらしい。情報伝達速度（主に平民間）が遅いため、トリステインが異世界に飛ばされたことはまだ国民が周知したわけではない。

しかしながら、矢面に立たされた国境線の住民や海外との貿易を行っていた商人などはすぐにこの異常事態を察知したし、そうした所を震源地として徐々に広がりつつあった。

そして異常事態による弊害は既に少なからず起きていた。農業や漁業への悪影響や、貿易の途絶による経済への影響などである。トリステイン自体は単独で国を養っていくことは出来るが、そうしたことで影響を受ける貴族や平民はかなり出る。

さらに、日本側からここは完全な異世界であると聞かされたことで、マザリーニ枢機卿が危惧したことがあった。それは王権の失墜である。

これまでハルケギニアの王権は他国からの承認やブリミル教ガリアやアルピオンからの承認、すなわち宗教的に認められている面が大きかった。ところがその他国が全て消失し、宗教の面においても総本山のロマリアが

消えてしまった。

すなわち、トリステイン王室を認める根拠が薄弱になってしまった。さすがにすぐに王権を転覆させるような事態にはならないだろうが、王軍の要たる艦隊と精鋭部隊が壊滅的な打撃を負った今、軍事的に見ればラ・ヴァリエールなど諸侯軍の方が力があると言う非情な現実が生み出されていた。

このまま行くと、最悪トリステインは支配権争いによる内戦が起きかねない。そうになると、現王室の存在を保証する存在が必要不可欠となる。ついでに言えば、軍の再建や国家の建て直しを支援してくれる存在であることが望ましいが、アンリエッタはさすがにそこまで高望みはしなかった。

とにかく、こうした理由によりアンリエッタは日本との国交正常化交渉を進展させることに合意した。政府の重臣たちも、万が一の事態を考え、不承不承ながら了承した。交渉の経緯はともかくとして、あれだけの力を持っている国に認めてもらえば、現政権は安泰だろうと考えたからだ。

もつとも、昨日本多に言われた様々な変革の嵐を覚悟しなければならぬが。

4日目昼 フォルティアース大陸連合帝国首都サクラス

「いやはや、まさか大陸の東半分が異世界に飛ばされたとは。容易

には信じ難い。」

「しかし、聖女メイベルが言っていることですし、証拠ともいえる写真もある。」

「だが、そうなる今後我が国はどうするべきか。」

「そのロクシアークと言う連邦が友好を求めてきたのなら、素直に国交を結べば良いだけの話では？」

「得体の知れない相手にそんなことをいきなりするべきでしょうか？」

「ですが、要らぬ戦いを引きこすようなマネは出来ませんぞ。ようやく西アルテースの情勢も一段落したばかりなのですぞ。再び争いをぶり返すなどしては溜まりません。」

サクラスの帝国議会では、メイベルとナバルが持ち帰った情報を元に、議員たちが喧々諤々の議論を繰り返していた。

「案の定大変なことになったわね。」

議場の様子を見ながらメイベルが言う。

「まあ、異世界に飛ばされるなんて普通有り得ないことだからな。」

ナバルが当たり前なことを言う。

2人は先ほどサクラスに戻ってきた。2日間も勝手に出かけていたことに、議員たちはお冠であったが、2人はそれに構わず見えてき

たことを包み隠さず報告した。その結果が、2人の目の前に広がる光景であった。

「で、メイベルとしてはどうする気だ？このまま議会に任せてもいい案は出そうに無いぞ。どうせ、最後にはお前の意見を聞いてくるだろうな。」

これは議会を侮辱しているとも思える発言だが、実際に議場を見た限りでは良い意見が出る可能性は限りなくゼロに近かった。そうになると、メイベルにお鉢が回ってくる可能性大だった。

東大陸を収める帝国議会を任された議員がただか小娘1人に頼るなど、あきらかに常軌を逸しているが、今やメイベルはそれだけの存在となっていた。

「そうね。取り敢えず国内の状況把握ね。今のところ大規模な被害は出てないけど、大陸全体を見れば何か問題が起きているかもしれないわ。ブルーノさんカームさんたちにも協力してもらわないと。出来れば調査団を編成するべきね。」

「あのロクシエと言う国にはどうする？」

「取り敢えず、また接触してきたら交渉することね。まさかいきなり大砲撃って撃ち払うわけにもいかないし。相手が平和的な外交を求めてくるなら、それに対応するのが一番ね・・・やっぱり甘いかしら。」

「いいや、俺はお前の言ったことなら信じるぞ。もっと自信を持って。」

「あ、ありがとう。」

ナバルの言葉に、メイベルは頬を染める。その様子を見ていたパセラはクスクス笑っていた。

だがそんな平和な時間はすぐに破られた。

「大変です！」

1人の役人が血相を変えて議場に飛び込んできた。

「どうしたんだね？騒々しいぞ。」

議員の1人がとがめるが、それに構わず役人は告げた。

「アルゴン海に複数の軍艦が表れました！」

進む世界（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

一難去ってまた一難

4日目昼 日本・東京首相官邸

「トリステインからの報告では、取り敢えず女王との間で今後の国交正常化に向けての交渉を開始すること、そして双方の政府を暫定的に中央政府として承認する覚書を無事交わしたそうです。」

「そうか。よくやってくれたな。しかし、今後外務省にはしばらく苦勞をかけることになるだろうから、よろしく頼むよ。」

木戸外務大臣の報告に、春川首相はそう返した。

「わかっております。それからロクシエの方ですが、今のところ朝送られてきた交渉が始まったと言う報告しか入ってきておりません。交渉の結果についてはもう少し時間が掛かりそうです。」

「まあ、そうだろうな。トリステインの方が早く纏りすぎたんだ。それにしても、現在の所確認された国は2つだけか。」

この時点において、日本政府はフォルティアース大陸の存在は把握していなかった。

「ええ。転移したその日から海上自衛隊、海上保安庁などの航空機と艦船を動員して日本列島周辺の状況を確認しておりますが、今のところ確認されたのはその2カ国だけです。もっと搜索範囲を広げたい所ですが、現有の艦船と航空機だけでは限界があります。やはり、衛星がないのが痛いです。」

石川防衛大臣が答える。地球から別の星へと移動したお陰で、衛星は全部消失してしまった、偵察衛星も商業用衛星も気象衛星も全てである。お陰で、日本周辺の捜索は困難を極めていた。またGPSも使えないので、そうした面でも不便が大きい。

そのため、春川内閣では至急大体衛星の打ち上げを命じた。命じたのであるが。

「新しい衛星の打ち上げにはどれ位掛かる？」

春川の問いに、文部科学大臣が答える。

「現在愛知県の飛鳥村の工場から種子島の宇宙センターへ運び出しに入ったばかりです。少なくとも2ヶ月は掛かりますよ。」

「そうになると、しばらく宛にならない天気予報が続くわけだな。」

春川の冗談に、何人かが笑った。気象衛星が消えたため、天気予報的中率は大きく下がっていた。気象庁では、とつくの昔にお蔵入りした道具を引っ張り出して、観測に使っている位である。

「とうにかくそうになると、国民には悪いが、まだまだ不自由な生活に我慢してもらう必要があるな。」

「そうですね。例え食料と石油が手に入っても、根本的な解決には程遠いですから。」

小泉副首相の言葉は正鵠を射ていた。

確かに食料と石油さえ手に入れば「生きる上」では何の問題もな

くなるだろう。しかしながら、現代日本の生活に必要な不可欠な資源は他にもたくさんある。銅やボーキサイト、木材、タンタルなどの各種レアメタル等々。さらに経済上の理由から、逆に輸出先も見つけなければならぬ。

元々日本は加工貿易の国である。生産した物資を国内の需要分で賄える状態とは程遠い。

現在日本はトリステインとロクシエと言う2カ国と接触し、交渉中である。しかしながら、仮に今後両国が貿易相手になったとしても、今のところ以前の貿易分の穴埋めを出来るかは未知数であった。

「取り敢えず、今は両国との交渉が上手く行くことを祈ろう。我々は国内の混乱を收拾することに全力を尽くそう。」

国内に山積している問題はまだまだ多い。春川内閣はそれらに俄然と立ち向かって行かなければならなかった。

4日目昼 ロクシエ連邦・ファークス共和国フリーベル市郊外空軍基地駐機場

「へえ。」

日本側の交渉団を運んできた「いせ」搭載のヘリコプターは、飛行場の駐機場で休んでいた。一方で、4人の搭乗員たちは機体の整備を行っていた。短距離飛行とは言え、やはり出来る限りの点検は欠かせない。

ロクシエ側の人間たちは、興味深くヘリコプターを見ていたが、やはり得体の知れない相手ゆえか近寄ろうとはしなかった。しかしながら、その機体に大胆にも1人で近寄る女性がいた。

「うん？あなたは？」

機体の点検を行っていたパイロットがその女性に気づいた。ロングにした金髪のプロンド、スラットした体型。十分に美人の部類に入る人間であった。しかし、ロクシエの軍服と軍用ブーツを付けているから、軍事であることが一目でわかる。

「あら、失礼。」

「いいえ、構いませんよ。見たところ、軍人のようですか？」

「はい。ロクシエ空軍のアリソン・ウィットティングトン・シュルツ少佐です。」

すると、そのパイロットは姿勢を正し敬礼した。

「失礼しました。海上自衛隊第211航空隊所属の円谷英助一尉（大尉）です。」

アリソンも答礼するとともに、疑問の表情を浮かべた。

「近くで見ても良いかしら？」

「はあ？・・・中をお見せするのはダメですが、機体を外から眺めるのなら構いませんよ。ただし、触ったりするのもだめですよ。そ

れが守れないならお引き取り下さい。よろしいですか？」

円谷が出した条件に、アリソンはあっさりと承諾した。

「ええ、構いませんよ。」

アリソンはまるで子供のように目を輝かせながらSH60Kを見始めた。もちろん、彼女が変な行動を起こさないように円谷が後ろから付いていく。残りの乗員は、そんな2人を気にしつつも整備の手を止めず作業を続けた。

「この飛行機はなんと言うのですが？」

「ヘリコプターと言います。難しい言い方をすれば、回転翼機でしょうか。ヘリコプターを見るのは初めてですか？」

「ええ。ですから非情に興味深いです。特に垂直に離着陸するのなんて、私たちが保有している飛行機には真似できません。」

「そうですか。」

「・・・操縦してみたいな。」

「はい？」

「私こう見えても普段は軍のテストパイロットをしているんです。今日は急の召集で、大統領専用機護衛なんてやっていますけど。でも、本業は新しい飛行機の操縦をすることなので。ですから、こう見た見たこともない機体を見ると、つい操縦してみたくなんなんです。」

「なるほど。しかし固定翼機とヘリコプターとでは操縦特性が違いますから、訓練をしたならいざ知らず、いきなりお乗せするわけにはいきません。」

「それは残念。ところで、この飛行機は輸送専門ですか？」

「まさか。さすがに空中戦は出来ませんが、対艦・対地攻撃だって出来ます。他にも遭難者の救助なんかにも使われます。しかしながらこいつの場合、本来は対潜用の機体です。」

ところが、アリソンは円谷の言った言葉に、首を捻った。

「タイセン？」

「潜水艦を退治することです。」

「センスイカン？」

アリソンは知らない単語が連発されたので、さらに首を捻った。

「もしかして、潜水艦がないんですか？」

その問いに、アリソンは頷いた。

「ええ。潜水艦とは何のことでしょうか？」

実は日本とロクシエの間には、文化の違いもあったが、軍事理論や軍事技術にも大きな隔たりがあった。例えばロクシエには潜水艦や空母が存在していなかった。

だが、アリソンにはまだそこまで深いことに考えが及ばなかった。

4日目昼過ぎ トリステイン王国 ラ・ロシエール

取り敢えず日本とトリステインの覚書が交わされ、交渉は一段落した。今後の交渉予定はまだ未定であるが、日ト共に早期の交渉を望んでいるので、日本側が正式な交渉団を編成次第、トリステインに派遣して行うと言うことになった。

そして才人については、すぐにでも両親に会わすのが筋と言うものであるが、彼の戸籍の復活などの日本側の受け入れ体性、公爵家令嬢の『使い魔』で貴族という立場上、トリステイン側の送り出し体制が整ってからと言うことに成った。それに加えて、現在国内のどこかにいる筈の高凧春名にも連絡をつけなくてはいけない。

だから、才人の貴国はしばらくお預けとなった。

これで日本側は一旦日本へと引き上げるだけとなった。ところが、ここで騒動が起きた。

切欠は才人の元に送られてきた伝書用のガーゴイルによる手紙であった。

「誰からのの？」

才人に速達での手紙など珍しい。ルイズが首を傾げている。

「キュルケからだ。一体何だろう？」

才人は手紙の封を開いて中身を読み始めた。そして読み終わった時の彼の表情は厳しい物になっていた。

「どうしたのよ？」

「・・・タバサが自殺未遂を起こしたらしい。」

「ええ！？何で!？」

「タバサの奴、トリスティンが異世界に飛ばされたことに気づいたらしいんだ。それであいつ、おふくろさんに会えなくなったことにショックを受けて。」

「あ・・・」

事情を悟ったルイズの表情が哀しみを帯びたものになる。

そんな空気を敏感に感じながら、読む気のない女が1人彼らの元へと近づいてきた。

「どうかしたんですか、お2人ととも？」

本多だった。

「あ、いや魔法学院の友人に問題が発生したらしくて。」

「何やら大変な事が起きたみたいですね。お2人とも相当深刻な表情をされていますよ。」

「……」

すると、さらに2人の尋常ならざる様子に気づいた人物が1人いた。

「ルイズ、才人さん。どうしたのですか？御気分でも悪いんですか？」

アンリエッタ女王であった。

「あ、姫様……ええと、本多さん。すいません、ちょっと向こう言って貰えますか？」

さすがにこのような重要な話に首を突っ込んでもらいたくはなかった。

「ええ、構いませんよ。ククク……」

本多はあの不気味な笑い声を残して3人から離れた。

「……」

3人は無言でその姿を見送ると、気を取り直して再び話し合った。才人からタバサのことを教えられたアンリエッタも、血相を変えた。

「タバサさんで、確か先日攫われたガリアの姫君でしたよね。」

「はい。そのガリアがなくなっちゃったもんね……」

「あいつにとっては、それ以上におふくろさんに会えなくなった方がショックだ。」

「そうよね。けど、自殺しようとするなんて。とにかく才人、早く魔法学院に戻りましょう。」

「ああ。けど、遠いな。」

「どんなに速い竜籠でも、ここから魔法学院までは丸1日は掛かりますね。とにかく、すぐに手配いたします。」

「お願いします姫様。」

と、才人は離れた場所で自分たちの姿を見ていた本多と高杉海将補に気づいた。

「どうかしたの才人？」

「……」

才人は無言のまま本多たちの方へと向かった。

一難去ってまた一難（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

そして歴史は動く

4日目昼過ぎ フォルティアース大陸西部・アルゴン内海沿岸アル
タワ

フォルティアース大陸は通常東と西で分かれているとされるが、
実際は1つの大陸である。しかしながら。そのど真ん中を広大な内
海であるアルゴン海や山脈、永久凍土地帯が走っており、これが陸
上における東西の交流を分断していた。

そのアルゴン内海では、日本の琵琶湖や霞ヶ浦等と同様漁業をは
じめとする水産業が当然あり、そのため沿岸には漁村が幾つもある。
アルタワの街はそれら漁村の中でも街道の交差点にあることから、
比較的発展した街である。

転移によってアルゴン内海は完全に外海と繋がってしまっており、
水が淡水から海水になり、採れる魚の種類が全く別のものになって
しまったなど変化が起きていた。当然市民は戸惑い、サクラスに通
報した。ただし、アルゴン内海沿岸部とサクラスとでは最も離れた
地域の1つであり、連絡が届くまでに時間が掛かってしまった。し
かも、サクラスに届いた頃には異常現象が各地から通報され出した
時だったので、その中に埋没してしまった。

そんなこんなの中に4日目を迎えたのだが、人々はさらに仰天す
ることとなった。沖合いに軍艦が3隻現れたからである。

実はこの3隻、ロクシエ海軍の艦隊であった、ルト二河河口の基
地を出撃し、消失したスー・ベー・イルの搜索に当たっていたのだ
が、途中で任務がスー・ベー・イル搜索から付近海上の哨戒に切り

替えられ、そして前日の偵察機からの報告で大陸の存在を確認し、西進して来たのだった。

艦隊はアルタワの沖合いに停泊すると、早速幹部士官の一部を降ろして接触を図った。もちろん、アルタワ側からすれば驚天動地の出来事だったが、ロクシエ艦隊側は昨日の偵察機の活動で多少サクラス帝国側の情報を仕入れていたので、多少の混乱はあったものの、衝突と言う事態には陥らなかった。

見たことも聞いたこともない国からやってきた軍艦への対応に苦慮しつつ、国家的な重大事態のためアルタワの市関係者はただちに緊急の電文でサクラスに通報した。そして今度は素早くサクラスに情報が届いた。

結果、どういふことになったかと言うと。

「たく、さっき戻ったばかりなのに。」

エンジンを掛けた大統領専用機の操縦席で、ナバルがブツクサ呟いている。

「ごめんナバル。」

「いいよ。これも聖女としての仕事なんだろう？ 気にするな。俺はお前の護衛なんだから。」

「ありがとう。」

そんな2人の会話に、割り込む人物が1人いた。

「2人とも近い！もつと離れて下さい！」

「あつ！」

「クラウ、何でお前まで乗っているんだ？お前は帝都近衛隊の小隊長だろ？」

ナバルが振り返ると、そこには金髪の若い男が1人いた。

「今回はクリプトン卿の護衛です。」

「だったらクリプトン卿の方に乗れよ。」

「あつちは既に定員オーバーなんですよ。」

喧しく叫んでいる少年の名前はロード・クラウ・アスピス・リ・フローレス・ド・アキロキヤバス・ユーベラス。通称クラウ。ナバルの親友で、帝国連合の構成国の1つであるユーベラス公国の三男坊だ。魔法も使えて近衛隊の小隊長と言うエリートのだが、メイベルに熱を上げている。しかも所構わず。

ちなみに、彼のいうクリプトン卿と言うのは帝国議会の幹部の1人で、3人にとっても親しい人物だ。かつて戦争を回避する功績を立てた英雄として誉れ高いが、現在は超肥満で飛行機に乗ると体重で機体が偏るほどだ。ただし、政治的能力ははずば抜けており、そのため今回も交渉役に選ばれていた。

「ああ、わかった。わかった。もうすぐ出発だぞ。兎に角座れ！」

「そうよクラウ。いい加減にしなさい。」

と後ろからクラウドを引つ張るのは、レジーナ・テルル。やはりナバルとメイベルの友人だが、彼女も東アルテースの公女である。

ようやく機内が落ち着いた所で、ナバルはクリプトン卿の乗った機体に合図を送る。

「じゃあ出発！」

こうして大統領専用機はサクラスを再び飛び立った。アルタワ到着予定は、途中給油と整備の着陸を行うので、翌日昼の予定であった。

4日目昼過ぎ トリスティン王国上空

トリスティン王国の科学力は地球で言えば中世レベルのそれだ。当然近代的な産業など無きに等しい。だから自動車も鉄道も、ましてや飛行機もない。

そのトリスティンの上空を、灰色の塗装をしたヘリコプターが1機飛んでいく。そして機内では、第一護衛隊群司令官の高杉海将補は頭を抱えていた。

「これ帰ったら解任だろうな。」

「あらあら、今更何を言っているんですか？ククク・・・」

うな垂れる高杉に対して、腹黒外交官本多は元気だ。と言うかこの状況を楽しんでいる。

「君が言うんじゃない！」

高杉は自分の子供ほどの目の前の少女に殺意を抱く。この女はどうしてこつも平然としていられるんだろうか。

「あの、高杉さん。大丈夫ですか？」

大声を上げたせいだろうが、才人が声を掛けてきた。

「え！？ああ、大丈夫だ。」

「本当に良かったんですか？へりを飛ばしてもらって？」

「うーん・・・」

遡ること1時間ほど前、才人が高杉ら日本側代表にお願いしたのは、へりで魔法学院に向かうことだった。もちろん、普通だったらそつそつ簡単に許されることではない。

ところが、ここで登場したのが本多だった。「面白そうな匂いがありますね。」と、彼女は話に食いついた。そして渋る前原ら自衛官たちを得意の話術と脅し・・・モトイ少しばかり力の入れた説得をして、あれよあれよと言う間にへりを用意させてしまった。

ちなみに、乗っているへりはSH60Kではなく、掃海用のMC

H101だ。大型で人も多く乗れるし、何より航続距離が長い。「ひゅうが」に1機だけ搭載されている機体だ。

そのMCH101に乗っているのは才人、ルイズは当然であるが、何と女王であるアンリエッタと銃士隊隊長のアニエスも乗っている。

実は海上自衛官たちが断り難かったのが、本多の腹黒い説得もあるが、彼女からも「要請」を受けたからだ。何でも今回の事態が外交的にかなり問題であるらしい。そのため、至急魔法学院に向かいたいと。実際、竜籠よりヘリの方が2倍ほど速い。しかも人数も多く乗れる。急ぐのだったら便利である。

それに加えて、高杉には今回トリスティンに対して「脅迫」のような交渉を行った負い目（彼自身の責任ではありません）があつた。

そう言うわけで、半ば場の雰囲気の流れされる形でヘリを仕立てたのだが、やっぱり実際に飛び立つと色々と不安になるわけである。

「そつだよな。もう飛び立ったもんな・・・」

「そうですよ。今更後戻りは出来ませんよ。大丈夫です、真実なんて後でどうとでもなりますよ。最後に勝てば良いのです。歴史なんて物は勝者が作るものなんですよ。ククク・・・」

本多がまた恐ろしいことを言う。しかも、彼女の場合決してそれが冗談ではなく本気であるから余計恐ろしい。今回の件に関しても彼女は前原に上手い言い訳・・・もとい報告書の文面を考えて彼に伝えていた。

「君やっぱりラスボスだろ？しかし、どうして君は今回のことに深

く首を突っ込むことにしたんだ？」

「・・・感でしょうか。それに、ここでトリスティン政府に恩を売っておくのも不味くはないでしょう。」

「やっぱりそう言う打算が働いているわけか。」

「私は損な事をする気はありませんよ。それに、今回はどうやらトリスティンだけの問題ではないみたいですね。」

「・・・だな。」

一方離れて座っている才人やルイズたちはと言つと。

「速いですね。」

後方へと流れていく地上の風景を見ながら、アンリエッタが言う。それに対して、ルイズの感想は違っていた。

「そうですか？ 私には別にそこまで速くは感じられません。まだ『風竜』の方が速く感じられますけど。」

「まあ、こいつはヘリコプターだからな。飛行機としては遅い部類に入るな。」

才人が説明する。

「そう言えば、昨日見せられたエイゾウでしたか、あれには違う形の飛行機械が映っていましたね。」

「あれはジェット機だな。あつちは確かマツハ以上で飛べるからな。」

「マツハて何よ？」

ルイズが聞きなれない単語に首をかしげる。

「音速のことだよ。つまり、音より速いスピードで飛べるってこと。」

「うーん、実感湧かないわね。」

「簡単に言えば1000リーグ以上の速さで飛べるってことかな。」

ちなみにハルケギニアにおいてはリーグがだいたい地球で言う1kmである。

「はあ？幾らなんでもそんなこと出来るわけないでしょ！？」

「それが出来るんだよ。お前だって無線機やパソコンを見ただろ。俺たちの世界じゃ魔法はないけど、科学技術は進んでるんだよ。」

「確かに。私も少しばかり見たが、連発できる銃や、あの鉄の塊・センシャだったな。あんな物を作り出す力はトリスティンどころかガリアにだってないだろう。ニホンと言う国の技術が恐ろしく高いのは間違いない。」

アニエスがそう言うと、アンリエッタが口を開いた。

「そんな国と我が国は危うく衝突してしまう所でした。恐ろしいこ

とです。」

「けど、あの外交官の態度は気に入らないわ。あれじゃあ脅迫よ。あんたの国の人間はどうなってるのよ!？」

ルイズは本多のことを非難した。

「俺に言うなよ。俺だって、あんなことする人初めて見たぜ。」

「全く、あんたの国の良識を疑うわ。」

「けどルイズ、それに才人さん。外交とは決して綺麗ごとでは済まされないのです。あなたたちも先日のガリアの件でわかったでしょう?」

「……」

「我が国が全く見知らぬ世界に放りだされてしまったのなら、それ相応の対策を立てなければなりません。でなければ、トリステインと言う国自体を維持出来ません。いえ、我が国は既に崩壊の兆しを見せています。彼らだってそうなんでしょう。」

もつとも、実際には脅迫に近い外交が本多の独断に近い物と知ったら、彼女はどう思っただろうか。日本を挟んで反対側のロクシェとの間では、比較的温和に交渉が行われていたのだ。ただし、日本も日本で必死であるのは間違いない。

「近い内に、私直々に二ホンと言う国を見に行く必要があるそうですね。才人さんの里帰りもありますし……けど、今はタバサさんのことですね。」

そんな彼らに、声が掛けられる。

「間もなく到着です。」

そして歴史は動く(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

前進

4日目昼過ぎ トリスティン王国・魔法学院上空

トリステイン王国が異世界に飛ばされたと言う情報は、ようやく魔法学院の生徒たちの耳にも2日目頃から入っていた。もちろん、誰もが最初は耳を疑ったが、国境沿いに住む領主の子息たちは、親からの連絡でそれが事実であることを知らされた。

しかも、先日から起きている異常事態の連続がその情報に信憑性を与え、2日目には噂となって学院全体に広まってしまった。そして3日目には、ほぼ事実であることがわかった。オスマン院長は混乱を防ぐためコメントを差し控えていたが、もはや隠しようがなかった。

そしてこの事態に誰よりも衝撃を受けたのは、『雪風』の2つ名を持つタバサであった。彼女はトリステインの隣のガリア生まれ。つまりは祖国と完全に切り離されてしまった。これによって彼女は生活のための基盤を一切失ってしまった。

しかしそれ以上に彼女にとって心に響いたのは、母親と会えなくなってしまうことだった。彼女の母親は長年叔父であるガリア国王ジョゼフに飲まされた薬で精神異常を来たし、加えて幽閉されていた。先日才人らの助けでようやく助け出し、ゲルマニアに匿ったのだが、そのゲルマニアとも完全に離れ離れになってしまった。

彼女は生きていく上での支えを完全に失った。そして彼女が取った道は、自殺であった。

3日目の夜、『使い魔』であるシルフィードに眠り薬入りの餌を与えて大人しくさせ、遺書を書いた彼女は部屋に鍵と『ロック』の魔法を掛けて、用意したナイフで手首を切ろうとした。

しかしながら、結局それは未遂に終わった。朝から一向に部屋から出てこない彼女を不審に思った友人のキュルケとモンモランシー、そしてメイドのシエスタが扉を破って入ってきたのである。もちろん、彼女は急いで死のうとしたが、焦ってしまい失敗。その間にキュルケに取り押さえられ、モンモランシーの魔法薬で眠らされてしまった。

まさに危機一髪であった。しかしながら、これは問題を先送りしただけに過ぎない。

「どうすれば良いのかしら？」

タバサの事情を知っているだけに、キュルケとしては彼女が目覚ませば再び自殺しかねないとわかっていた。彼女も今や祖国を失った身であるが、タバサの辛さが自分以上の物である事は、想像に難くなかった。

「こんな時に才人がいてくれればね。」

タバサを救い出し、今また彼女を助け出せるであろう『イーヴァルデイの勇者』は生憎と不在だった。そこで彼女は、無理を承知で最速の伝書『ガーゴイル』でトリスタニアに向かった彼を呼び出すことにした。

「お願い。届いて！」

とキュルケやモンモランシーの想いが託された手紙は、トリスタニアの王城へと向かった。もつとも、実際の所この時才人は既にラロシエールへと向かったため、タッチの差で届かず、そこからさらに転送されることとなった。そのため、才人の手元に手紙が届いたのは翌日になってからだだった。

また手紙を出したキュルケたちも、才人がすぐに戻ってくるという甘い期待はしていなかった。そのため、タバサが目覚めた時に備えて、交代で彼女を見張った。

タバサが自殺を図った翌日の昼、彼女はようやく目を覚ました。

「お目覚めのようね、タバサ。」

「キュルケ……」

彼女は起き上がると、何かを探し始めた。

「悪いけど、杖は隠させてもらったわ。タバサ、辛いのは判るけど自殺なんてやめなさい。」

「キュルケ、私はお母様と一緒に暮らすためだけに戦ってきた。そのお母様と会えなくなつた。もう、生きている意味はない。お願い、死なせて！」

「親友として、そんなこと許せるわけないでしょ。悪いけど、あなたにはもう一度……で、しまった！」

キュルケが言い終わる前に、タバサは飛び起きると机に向かって走った。そしてそこには、彼女が使おうとしたナイフがあった。

タバサはナイフを握ろうとした。しかし、間一髪キュルケが彼女に飛びついて転倒させ、阻止した。

「タバサ！自殺なんてバカな真似はやめなさい！」

「離して！お願い！死なせて！」

2人は取っ組み合う。キュルケは親友を失いたくなかったので、全力を出してタバサを止めようとする。一方のタバサも既に失うものなどなく、自暴自棄と成っているので文字通り死に物狂いだ。

そんな2人の衝突は、突如響いてきた音で中断する。

「？」

「何かしら？」

2人が音のする方、窓の外を見た。すると。

「何あれ！？」

「……ちあっ？」

「へりだところという時便利だよな。」

MCH101へりから降り立った才人が言う。

「けど、学院のど真ん中にいきなり降りて大丈夫かしら？」

続いて降りたルイズが心配そうな表情で言う。

「時間がないから仕方が無いよ。それにお姫様も乗っているから大丈夫だよ。それよりも、すぐにタバサの部屋に行かないと。」

「才人君！」

1人の男が才人とルイズに駆け寄ってきた。

「「コルベール先生！」」

「一体何だねこれは！？それに何で君達が？」

「ええと、すいません。俺はタバサの所に行きますので、姫様にでも聞いて下さい。」

「あ、待ちなさいよ！」

「え？姫様？」

驚くコルベールを放って、才人とルイズは女子寮の方へと走って行った。そしてコルベールが空から降り立った物体のほうを見ると。

「アンリエッタ女王陛下！？」

アンリエッタ女王がアニエスを伴って、機体から降りてきた。さらに、見たことのない服を着た男女が2人それに続いた。

4日目昼過ぎ　ロクシエ連邦・ファークス共和国フリーベル市郊外
空軍基地

「ただ今を持って、日本とロクシエ間に今後の国交樹立に向けての交渉をスタートさせる覚書が交わされたことをここに宣言いたします。」

日本側代表である荒木が宣言した。続いてロクシエ大統領も同様の宣言をして、荒木と握手をした。この瞬間はロクシエ側の報道陣に公開されていたため、歴史にしっかりと記録された。

約半日に渡る交渉の末、日本とロクシエ連邦は今後の国交樹立に向けての交渉を開始することを正式に決定した。両国の運命を左右する交渉にも関わらず、こつも早く進んだのは一重に両国が急いだからだ。既に日本もロクシエもこの世界が異世界であるとしつかりと認識しており、この世界で生きていく上で、新たな国際関係を作る重要性をわかっていたからだ。

「このような異常事態下でありながら、我が国と早急に交渉を開始していただいたロクシエ連邦ならびに大統領閣下には感謝いたします。」

す。今後の国交樹立に向けての交渉においても、双方に有益な結果になることを願っています。」

トリスティンと同じく、日本とロクシエが結んだのはあくまで覚書だ。正式な条約の締結などは今後正式な交渉団同士の交渉に任せられるだろう。ただし、なるべく早い開始を双方共に望んだため、来週にもお互いに視察団を派遣することとなった。

随分と急な話であるが、それ程までに急がなければならなかった。特に日本は。

ロクシエ連邦の方は科学力こそ日本より大幅に遅れているが、幸いなことに法概念などは大分発達しており、また地球のような植民地主義や、軍事力至上主義でもなかった。そうした面もあり、相互理解は早かった。

「こちらこそ。そちらから学ぶことは随分と多そうですし、お互い右も左もわからぬ異世界ですので、協力は不可欠です。」

ロクシエ大統領は日本との協力を積極的に進めようとしているようだった。自給自足はロクシエだけでも可能だが、日本の高度な技術取り入れや、スー・ベー・イルに代わる貿易先としての関係作りを目論んでいた。

日本側はしつかりと知らされていなかったが、転移の影響がロクシエ内でもじわじわと広がっていた。

「ええ、お互い既に別の国に接触していますが、今後さらに別の国を発見することになるかもしれません。そうした国々と友好関係を作り、共に生きていくのは重要なことですから。」

日本とロクシエはそれぞれが接触した国（トリステイン王国とサクラス帝国）に関して情報を交換していた。

「それでは荒木特使、またお会いできることを願っています。」

「はい大統領。今後の視察団の派遣、よろしく願います。」

挨拶を終えると、荒木は空港で待機していたSH60Kへりに乗り込み、随員として付いてきた前原海将補とともに港で待つ護衛艦「いせ」へと帰還の途についた。

「御苦労様。何とか交渉は上手く行ったようだね。」

前原が労いの言葉を掛ける。

「ええ、だけど本当の始まりはここからです。今後の交渉如何で、国交正常化が決まりますから。まあ、問題は色々ありますけど。」

「そつだな国内の問題も山積みだからな。その問題を片付けるために貿易をする必要があるが、そのためにまた新たな問題とぶつかる難儀なもんだな。」

今後ロクシエとの交渉が上手く行き、貿易が開始されるにしても両国間で解決しなければならぬ問題は腐るほどある。例えば双方の通貨の為替レート（固定変動に関わらず）を設けなければならぬいし、言葉は通じるものの文字は違うため、新たに辞書を作らなければならぬ。

しかしそうした問題を早急に解決しなければ、日本という国が死

んでしまう。今は統制で凌いでいるが、いつまで続けられるかわかったものではない。

「仕方がありません。簡単に解決できるなら誰も苦労しませんよ。本土に帰っても、しばらくは家に帰れそうもありませんよ。紫シエラの奴怒るだろうな。」

「奥さんかい？」

「ええ。高校の時の同級生です。猫かぶりで我侷な性格なんですけど、根はいい奴ですよ。」

「そうか。」

「前原さんは？」

「妻と子供2人。佐世保の官舎にいるが、今回の出勤で休暇が延期になってしまったよ。全く、妻には迷惑ばかりかけるよ。」

「俺だってそうです。結構海外へ出かけるもので。」

「そうかい。お互い一段落したら、家族サービスをしなきゃならんね。」

「ええ。」

2人に乗せたSH60Kへリはその後無事に「いせ」へと着艦し、荒木は交渉成功を日本の外務省に打電した。そして第2護衛隊群は帰国を急ぐため、夕方には抜錨して日本への帰途についた。

とりあえず、日本とロクシェ間の最初の交渉は平和裏に終わった。しかしながら、荒木が言った通り本番はこれからであった。この交渉の行方を、両国の国民は注視することとなる。

前進（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日本の防衛

4日目夕方 日本・東京首相官邸

「そうか、両方とも取り合えず上手くいったか」

春川首相は、ロクシェとトリステインよりそれぞれ交渉が成功したと言う連絡を受けた。久しぶりの明るい話題であったので、彼の表情には笑みが浮かんでいた。

「ですが、問題はこれからですよ首相」

小泉副首相が冷静に言う。

「ああ、小泉の言うとおりだ。木戸大臣、今後の交渉だがどのようになっている？」

「両国とも早期の国交樹立に向けて前向きだそうです。ただし、外務省としましては両国の内情がそこまで深くわかっていないわけではありません。今回の暫定取り決めで、両国とも1週間後を目処に視察団を派遣することも決まりました。外務省としては視察団の受け入れ準備と、送り出す視察団の編成に全力を注ぎます」

木戸外務大臣の言葉に、経済産業大臣が異議を挟む。

「しかし、国内の情勢を考えればあまり裕著にはやってられないのではないか？」

「経産大臣の言葉ももつともですが、両国のこともよく知らずに条

約を結んで、余計な荷物を抱え込むような事態になったら、それこそ取り返しがつきません。もちろん、状況が状況だけに急がせるつもりですが、一方で拙速な行動も慎むべきだと思います」

「外務大臣の言葉ももつともだ。外務省は今木戸大臣が言ったことに全力を傾注してくれ。それから、新たに確認されたサクラス帝国に關しての対応策も頼む」

「わかりました」

木戸との会話を終えると、春川は話題を変えた。

「自衛隊や海上保安庁は、新たに何か見つけたか？」

春川はそちらの担当者に顔を向ける。

「残念ですが、今のところまだ何も見つかっておりません」

「何せ、海は広いですから。限られた航空機と艦船では自ずと限界があります。他にも農水省の船なども出てはいるのですが・・・成果は何も出ていません」

文部科学大臣と防衛大臣がそれぞれ答える。

「ま、俺もそう都合よく何かが見つかるなんて思っていないけどね。逆に、怪物とかの類が見つからないのは僥倖かな？ゴラヤモラ見たいな怪獣がいては堪らないからな」

日本という国は、映画の中ではとにかく怪獣に襲われまくっている国と言える。東京や大阪が破壊されたことなど数知れない。もち

ろんそれは映画の中の話に過ぎず、これまでは真剣に考える必要などなかった。そう、これまでは。

「現在の所、そのような危険な生物の確認はされていません。本土周辺で捕獲・確認された生物も毒を含んだ新種らしき物はいますが、いずれも地球の魚と変わりません。人間に害を及ぼすような生物の存在は確認されておりません。ただし、今のところですが」

農林水産大臣が笑いながら答える。と、ここで春川はふと思ったことを口にしてみた。

「防衛大臣。仮にだが、そのような生物が現れた場合、自衛隊の出勤は有り得るかな？」

何年か前に時の防衛大臣が怪獣やUFOに対して自衛隊がどう動くかについての持論を展開し話題となったが、今やそれを真剣に考えざるを得ない状況に、日本は置かれていた。

「それは有り得ますね。かつて航空自衛隊が、北海道における海獣駆除に実弾を使用した例があります。生物の場合は以前言われていたように、おそらく災害派遣と言う形になるかと思えますよ。まあ、ここは異世界ですから、そのような事態が起きても不思議だとは思えませんかね。もつとも、私としてはやはり現在接触中の国に關しての方が気になります。万が一軍事衝突になったら、最前線に立つのは自衛隊なんですから」

軍事衝突は春川としては最も考えたくないことであるが、一方で考えないわけにもいかない問題だった。国家として最悪の事態を想定するのも政府の義務である。

「あまり考えたくはないが、もしそうなった場合自衛隊はどれくらい戦える？」

「そうですね。後先考えなければ、少なくとも現在確認されているトリステインとロクシエの侵攻は防げるでしょう。現在確認されている情報では、ロクシエの科学力は1950年代程度、トリステインに至っては中世ヨーロッパ程度と言います。仮にその2カ国が侵攻してきたとしても、海上自衛隊と航空自衛隊で防げるでしょう。ここ数年で装備の改変も始まりまし」

日本が世界に誇る（と言って良いかは微妙だが）自衛隊は4年前すなわち2010年夏に起きた黄海事件により大幅な装備改編を開始している。

2010年3月に黄海において韓国海軍のコルベット「天安」が沈没する事件が発生し、韓国と北朝鮮の緊張が高まった。そして8月17日に黄海の北方限界線付近において、再び両国の衝突が発生しかも、この時は北朝鮮も韓国も互いに挑発しあって緊張が頂点に達していた。結果、小競り合いどころか大規模な海戦となった。

北朝鮮側は北方限界線を越えた（と北朝鮮は主張した）韓国海軍を全力迎撃、多数の小型潜水艇やミサイル艇、地对艦ミサイル、さらには航空機による飽和攻撃を試みた。対する韓国は、韓国海軍が誇るイージス艦「世宗大王」をはじめとする主力艦隊で挑んだ。

結果は、北朝鮮側は出撃した戦力の9割喪失と言う文字通りの全滅となった。対して韓国側も旗艦でありイージス艦の「世宗大王」が大破後自沈処分、さらにその他に2隻を失うと言う大損害を被った。あまりに多数のミサイルと魚雷を同時飽和的に受けたため、ついに防御の壁を破られた結果だった。

最終的に、それ以上の紛争拡大を望まない日米中露の介入で戦闘は終結し、これが引き金となって金正日総書記は引退を余儀なくされた。もっとも、独裁体制は息子に引き継がれて変わらなかつたが、逆に韓国は大統領が辞任に追い込まれた。

この軍事衝突に各国は衝撃を受けた。日本も例外ではなく、北朝鮮の予想外の善戦に驚き、防衛計画が大幅に見直された。特に海自と空自はその筆頭であつた。

海自では5500t級護衛艦の建造計画が拡大・促進され、退役が近づいている「しらね」級の後継艦である19500t級の設計も大幅に改められた。また装備としてもトマホークミサイルや、予定を前倒ししてRAMミサイルシステムが正式導入された。またイージス艦「あたご」の衝突事件以来問題視されていた乗員の増員も認められた。

空自では一向にF4戦闘機の後継機が決まらないので、ついにF2の改良型戦闘機の生産を再開し、さらに空中給油機の増備やC2輸送機の配備を促進した。ちょうどMRJ旅客機やB787旅客機の量産開始で航空産業が元気を取り戻したのに便乗した形となつた。

逆に割を食つたのが陸自で、10式戦車をはじめとする新型装備の導入数が大幅に削減された。

はっきり言ってこれは大幅な軍拡であつたが、ちょうど黄海事件後のドタバタが抜け切つていない時期であつたため、諸外国で非難声明を發した国はなく、逆にインドなどの中国の勢力拡大を危惧する国は消極的な賛辞を送つた位だ。国内でも戦争に対する警戒感が強まつたので、世論も認めた。黄海事件がメディアを通して伝えら

れたのも大きかった。

この防衛予算増加による費用は、消費税引き上げと合わせて法人税引き下げの中止で賄った。

もつとも、面白いことに当時与野党ともに進めていた改憲だけは行われなかった。そのため、未だに憲法9条はそのままである。武器は揃えた方がよいが、やっぱり戦争をやらないに越したことはないと言う、日本人の微妙な心理が働いたのだろう。

保守陣営は齒噛みしたが、この点は海外からも高い評価を貰った。

その代わり武器輸出三原則は大幅に緩和され、日本お得意の飛行艇や輸送機、練習機や旧式化した艦艇・車両の売却などが行われた。ちょうどアフリカや中南米の新興国市場が盛り上がり上がってきたので、これは大いに受けた。

それはともかくとして、計画がスタートしてまだ3年しか経っていないが、すでにF2改良のF2C戦闘機の配備が開始されるなど、部隊への配備が始まった装備もある。そのため、自衛隊の実力は以前よりも増している。

これだけの兵力があれば、確かにロクシエやトリステインが攻めてきても対応できる。日本の遙か手前で殲滅できてしまうだろう。

「しかしながら、今も申したとおりそれは後先考えずにやればの話です。」

「わかってる。」

ただし石川防衛大臣が答えたとおり、それは後先考えずに行つての話だ。戦闘で消耗した燃料や弾薬の補充の見通しが全くないのだから、戦争をしたらしたで日本が確実に干上がる。艦船とジェット機は特に燃料を喰つてしまうからだ。それ以前に日本周辺の搜索にさえ相当な燃料を割いている現状では、とても不可能であつた。

「日本の防衛すらそんな感じですから、武力でどこかを侵攻して資源を得ようなんて言う、バカなことは考えないで下さいね」

「わかつてるよ、それくらい。やっぱり戦争なんかするもんじゃないな」

「当たり前ですよ。戦争をすれば人が死ぬんですから。軽々しくやるなんて言わないでくださいよ」

小泉が言う。

「そうなると外務省には、より努力してもらわなきゃならないな」

春川が木戸に顔を向ける。

「わかつています。必ずや御期待に答えて見せます。国民も注視していますし」

既にトリスティンとロクシエ、さらに両国との交渉に関しては全国ニュースで流されている。国民はこの交渉に注視していた。何せ、自分たちの生活が掛かっているのだから。

「早い所この状況から抜け出さないと、本当に国民が爆発する。」

まだ統制が始まって数日しか経っていないが、それでも国民の不満は大きくなりつつある。贅沢品どころか、日常生活に必要な物品すら不足しているのでは仕方が無いと言えよう。

「まあ、たでさえ働きすぎと言われていたのですから、いい骨休めと考えてもらうしかないですよ」

小泉がそんなことを言うが、春川としてもこればかりはどうしようもなかった。何か劇的な状況変化が起きない限り無理であった。

「おかげでこちらは、普段の数十倍は忙しくなったが。」

「仕方がありません。それが我々政治家の義務です」

「そうだな。こういう時こそしっかりと働くのが、政治家や公僕の義務なんだろうな」

その義務をこれまでの政治家や公僕たちはどれ程深く考えていただろうか。

「そうですね。それに逆境こそチャンスとも言えます」

「とにかく、今が正念場なことだな。皆にはいましばらく苦勞をかけるが、よろしく頼むよ」

「」「はい」「」

各大臣たちが力強く答えた。

日本の防衛（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ようやく投稿出来ました。就職活動や二コ動のアイマス架空戦記各種に嵌っている内に時間が過ぎてしまい、本当にすいません。

次のステップへ

4日目夕方　ロクシエ連邦・首都特別地域郊外シユルツ邸

リリアとヴィル、そしてトレイズの3人はお茶を飲みながら、夕方のニュースで流されたニホンとの会談に関する一報を見ていた。

「本当にあのニホンとか言う国と国交を結ぶのかしら？」

「どうだろう？けど、相手が平和的な関係を求めているなら、それはそれでいいんじゃないかな？」

リリアの問いに、トレイズが答える。

「ヴィルさんはどう思います？」

「僕も君と同じ意見だよ。ただ、ロクシエにとっては難しい舵取りを迫られるだろうね。これまでのスー・ベー・イル一辺倒の外交とは全く違うからね。それに、あのオートジャイローつを取っても、ニホンと言う国の凄さがわかる。政府はそんな国と、どう付き合っていく気なのやら。」

そう言つと、ヴィルは紅茶を一口口にする。

「それに、もう一つのサクラス帝国との関係作りもある。おそらく政府は、しばらくの間忙しくなるだろうね。もちろん、軍隊も。」

「それじゃあ、ママはしばらく帰ってこれないのかしら？」

「多分ね。」

とヴィルが言った時。

「ああ!!」

突然トレイズが声を上げた。もちろん、リアもヴィルもビックリした。ヴィルに至っては、丁度再びカップに口を付けた所だったので、危うく吐きそうになった。そうはならなかったが、気管にお茶が入りむせた。

「ゲホゲホ・・・どうしたんだい？トレイズ君？」

「何よトレイズ!？いきなり大声上げないでよ。驚いたじゃない。」

「それよりも、見てよ。テレビの右の隅の方!」

「「え?」」

2人はトレイズの言う、テレビの画面の右隅を見ていた。ちょうど画面は、フリーベルの空軍基地からニホンのオートジャイロが飛び立つ瞬間を捉えており、オートジャイロの後ろには見送る大統領をはじめとするロクシエ側の人間の姿が見える。

その端に立つ空軍の制服を着込んだ人間は、3人にとって大いに見覚えのある人物だった。

「アリソン!？」

「ママだわ!何であんな所に!？」

予想外の人物の姿を見つけ、2人もまたビックリした。ちなみに、3人ともアリソンが空軍の緊急任務で呼ばれたのは知っているが、どこへ向かったかまでは知らない。

「まさか空軍の任務で、大統領の護衛？」

「どうやらそのようだね……つくづくアリソンは歴史を変える瞬間に立ち会っらしいね。」

「ですね。」

トレイズとヴィルは顔を見合わせた。

4日目夕方 トリステイン王国・魔法学院中庭

「それでは平賀君、くれぐれも体に気をつけて。」

前原海将補が敬礼して才人に別れの挨拶をする。彼と外交官である本多は、これからアンリエッタらを乗せてラ・ロシエールまでへりで戻るのだ。

「はい。母さんと父さんによろしくお願いします。」

才人はそう答えるが、その口調にはどこか困惑が含まれていた。

それも当然である。何故なら、彼の腕にはタバサがしがみついているからだ。そして彼の隣ではルイズが、また向かい側ではアンリエッタがそれぞれどこか危なげな視線を送っていた。

そんな彼の姿を、本多が携帯の写メで写していた。「両親に御友人たちとの元気な姿を見せるためです。ククク・・・」と言つのが当人の談だが、後半の笑いからしてかなり疑わしい。

さらに、彼女はこんなセリフまで言った。

「それについては、任せて置いて下さい。それにしても、色々面白いものが見れましたよ。ククク・・・」

本多が不気味に笑う。その姿に、才人は戦慄を感じざるを得なかった。

彼女の言う面白いものが何だったのかと言えば、それはこの数時間前、才人に抱きついたタバサの姿を見たことであつた。

精神的に追い詰められた彼女の前に現れたイーヴァルディの勇者は、彼女に自殺を思い止まらせ、生きる希望を与える存在となつていた。

しかしながら、それは同時に新たな修羅場を作り出したのであつた。さすがに女王陛下と外国の特使の前とすることもあり、ルイズはひたすら耐えていたが、明らかにその全身に黒いオーラが纏つていた。またアンリエッタも、ルイズ程ではないが、嫉妬の感情を垣間見せていた。

ちなみに、上記の光景は女子寮のタバサの部屋で起きた光景であ

る。外来者である本多や前原が許可を貰ってアンリエッタらと一緒にタバサの部屋に入ったのは、才人とルイズに遅れること10分ほどで、才人がどのようにタバサを説得したかまでは見ていない。

もつとも、本多にしてみれば彼がどうタバサを説得したかはあまり興味のないことで、彼が随分と多人数の女の子とから好かれていくことの方が、よっぽど面白いネタであった。

「まるで昼ドラですね。ククク・・・」

出発直前まで、そのネタを出して脅す(?) 本多を見て、前原は窘める。

「本多君。その辺においてしてあげなさい。平賀君が困っているじゃないか。」

「あら、ごめんなさい。それでは平賀君、御機嫌よう。今後のトリステインとの交渉においては、よろしくお願いしますよ。ククク・・・」

「はあ。」

才人は目の前の外交官の言葉が今一つ信じられないらしい。当然である。

「それから、今回は随分と御迷惑をお掛けしたようで、申し訳ありませんでした。」

前原が声を掛けたのは、見送りにやってきた人間たちの先頭に立っているオスマン院長である。へりで突然乗りつけ、しかも中庭に

強行着陸したものだから、学院は一時騒然となった。

しかしながら、アンリエッタがアニエスと共に乗っていたので助かった。さすがに近衛騎士隊隊長を連れた女王陛下の姿を見れば、魔法学院の人間たちも無闇に攻撃など出来なかった。

また、当のオスマン院長は前原に笑顔で返した。

「何、女王陛下の要請に応えて飛んでこられたとあれば、仕方があるまい。まあ、何はともあれ、おかげで1人の生徒の命を助けることが出来た。その点に関しては感謝しておりますので、気になさらず。」

「そう言っただけだと、救われます・・・」

(こつちとしては下手すりゃ首掛かっていますしね。)

「それに、サイト殿の母国の方で特使となれば、無碍に扱うわけにも行きますまい。貴国とトリステインが友好関係を結べることを、この老いばれも強く願っておりますぞ。」

「ありがとうございます。」

すると、本多が首を突っ込んできた。

「その節は、どうかよろしくお願いします。」

「こら！それでは、失礼します。」

前原はオスマンに向けて敬礼した。そして彼は本多たちと共にへりに乗って、飛び立っていった。

「むう、まさかこのトリステインが本当に異世界に飛ばされるとは
のう。」

へりを見送りながら、オスマンが呟いた。

「俄かには信じがたいことですが、女王陛下もお認めになり、あんな物を実際に見てしまえばそう言わざるを得ませんね。先日物といい、あのような飛行機械、とてもハルケギニアの技術では真似できません。才人君の国が相当進んだ国であるのは疑いありません。」

「さてさて。陛下はちゃんと国を纏められるかのう。才人君の話では、彼の国は平民しかおらんそうじゃないか。陛下はともかく、益暗貴族のことだから何をしでかすかわからんぞ。」

「全くです。」

2人は知らなかったが、既に益暗貴族がその何かをしでかして、トリステインの防衛を崩壊させてしまっていた。

「どうやら、しばらく暇をせんで済みそうだ。才人君！」

彼は才人を呼んだ。

「はい？」

「後で院長室へ来てくれ。君の国についてもっと知りたい。この老いぼれも、国に対して何らかの役に立ちたいからな。」

「わかりました。」

「はあ・・・全く、生徒のことも考えなければならんし、困ったものじゃ。」

と言うオスマンの表情は、文字通り憂鬱そうであった。

「私も出来る限りお手伝いさせていただきます。」

「うむ。よろしく頼むぞ、ミスタ・コルベール。」

と、ここで終わればめでたしめでたしであったが、そうならないのが世の常。

オスマンに付いて行こうとした才人には、以前タバサがくっ付いたままだった。

「あのさ、タバサ。そろそろ離れて欲しいんだけど。」

「・・・やだ。一人にしないで。」

「いや、あのそれはちょっとマズイ。そろそろルイズの堪忍袋の緒が・・・」

「もう手遅れよ。」

「!?!?」

才人が振り返ると、そこには嫉妬の炎に身を焦がすルイズの姿があった。

「このエロ犬!!」

「俺は何も悪くない!!」

「才人は私が守る!!」

「タバサ! ことを余計ややこしくするな!」

突如として、魔法学院の中庭に修羅場出現した。付近で野次馬として集まっていた生徒や教師たちが慌てて逃げ始めた。

それに対して、オスマンとコルベールは逸早く退避して遠巻きにその光景を見ていた。

「ホホホ・・・彼らはどんな状況でも変わらんのだ。彼らのためにも、ワシらもがんばらねばならん。」

「はい。」

と2人が決意を固めた向こう側では、盛大は爆発音と才人や巻き込まれた人間たちの悲鳴が上がっていた。

一方魔法学院から飛び立ったヘリは、無事にラ・ロシエールに到着し、アンリエッタとアニエスを現地に降ろした。そしてそのまま再び飛んで、護衛艦「ひゅうが」へと着艦した。

「さて、日本へ帰るぞ。あとは君たちの仕事だ。」

トリスティン出港直後、前原は本多の方を向きながらそう言った。

「ええ、あとはお任せ下さい。ククク・・・」

相変わらず冷たい笑みを浮かべながら、不気味な笑い声を立てる本多。

「ああ、よろしく頼むぞ。」

（とつと帰還したい。そうすれば、この白い悪魔ともおさらば出来る。）

本音としては、さっさとこの女と離れたいと心底思う前原だった。

しかしながら、その願いは断ち切られることとなる。この2日後第一護衛隊群は無事に母港である横須賀に寄港し、本多を降ろした。前原はこれで彼女と永遠におさらば出来ると確信した。ところが、「ひゆうが」と第一護衛隊群はその後のトリスティンへの訪問団派遣艦隊として再び使われることとなる。

そして・・・

「よろしくお願いしますね。ククク・・・」

訪問団団長として乗り込んできたのは、外務省の白い悪魔であった。

「どつしてこうなった!？」

前原海将補はそう叫ばずにはいられなかった。

次のステップへ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、まずはごめんなさい。今回端折りましたが、当初はタバサを思いとどまらせるシーンを考えていました。そこであの本多を出す気だったのですが、結局面倒になったので切りました。本当にごめんなさい。その代わり、オスマンとコルベールの遣り取りを入れました。

最後？の接触と次なる動き

5日目昼 サクラス帝国西部・サンウーヌス

サクラス帝国の西の端にあるアルゴン内海沿岸部は、もともと人口が少ない地域で、一応人が住んでいる村や町が幾つかあるものの、元々開発が遅れている地域なので飛行場を備えた街はなく、ロクシエ側との会談には不向きとされた。

そこでサクラス帝国側は、当初の予定を変更してロクシエ艦隊にパイロット（水先案内人）を乗せて大陸からアルゴン内海に流れ込んでいるプラシド川を遡上してもらい、飛行場があり規模も大きな川沿いの都市であるサンウーヌスまで来てもらった。

もちろん、サンウーヌスの港に入港したロクシエ艦隊は市民たちから大いに注目された。

一方、サクラスから飛行機でやってきたメイベルらサクラス帝国の代表者は、一足先にサンウーヌスの街に入り、ロクシエ艦隊を出迎えた。

「あれがロクシエの軍艦ね。」

入港してきた3隻の軍艦を見ながらメイベルが呟いた。現在彼女はナバルや他のメンバー、そして護衛の人間と共に栈橋上にいる。そして栈橋が見える河岸や建物には、記者や市民が鈴なりの人だかりを作り、彼女らや入港してきた軍艦を見守っていた。

「結構大きな船だな。」

「私たちの国にはあんな大きな軍艦ないからね。」

ナバルの言葉に、メイベルが答えた。サクラス帝国はこれまで、海を越えて外的に襲われたことがなく、戦争と言えば国内の陸地で行われてきた。そのため、河川を動く船舶はあるが、組織としての海軍は今のところ存在せず、軍艦もなかった。

「この大陸が異世界に飛ばされたなど、最初は信じられなかったが、満更ではなかったようだな。」

メイベルたちの後ろに立つクリプトン卿が言う。卵のようなでっぴりした体であるが、その目は老練な政治家らしい、真剣その物であった。

「しかし、軍艦か。相手が友好的であれば良いが。いきなり撃たれてはかなわんからな。」

「一昨日会った人を見た限りでは、悪い人たちとは思えませんでしたが……」

「うむ。まあ、メイベルがそう言うなら大丈夫そうだな。」

そんな感じでサクラス帝国側の一行が話し合っている間に、ロクシエ軍の軍艦は棧橋に横付けし、艦からタラップが降ろされた。甲板には白い制服を着込んだ乗員たちが整列していた。

「規則正しいですね。どうやら、軍隊としては一流の様です。」

クリプトン卿の護衛役として付いてきたクラウが、巡洋艦の乗員

の姿を観察して言う。

そしてタラップを伝い、数人の男が降りてきた。降りてきた男たちは、出迎えのメイベルたちの前に建つと敬礼した。

「お出迎え感謝します。私はロクシアーク連邦海軍、北洋艦隊第二戦隊戦隊司令官のエーリヒ・マルシャル准将であります。後ろにいるのは参謀長と艦長です。」

司令官を筆頭に、ハンスと言う名の参謀長とドランシーという名の艦長が名乗った。

「サクラス帝国へようこそ。私が今回、連合議会を代表して参りましたクリプトンです。そして、こちらが今回私と共に代表を務める聖女メイベルと、勇者ナバルです。」

「メイベル・ヴァイスです。よろしく。」

「ナバル・フェオールだ。よろしく。」

マルシャル准将は紹介された2人を一瞥する。

「ほう。水偵（水上偵察機の略）の搭乗員から話を聞いていたが、それではあなたが女王と大統領を兼ねている聖女様と言っわけですな。」

「ええ、まあ、そうです。」

「いや、まさか本当にこんなお若い娘さんとは。」

「言っておきますが、彼女は若い物のその職に相応の功績を挙げております。」

マルシャルが見下したのかと思い、クリプトン卿が言う。

「ああ、不快に思ったのなら謝ります。ただ、あなたのような若い国家元首は今のロクシエにはおりませんので。」

「私も、偶然この地位を得たような物なので。お気になさらず。」

これはメイベルの気恥ずかしさから出た言葉だったが、途端に周りの人間が否定した。

「何言ってるんだ？クリプトン卿も言ったとおり、お前は聖女の名に恥じない事をしてきたじゃないか。」

「そうですよ、ナバルさんの言うとおりです。」

「ちょっと、ナバルもパセラも止めてよ。恥ずかしいじゃない。」

そんな若者たちの光景を、クリプトン卿は微笑みながら見つつ、マルシャルに言った。

「何はさて置き、ここで話し続けるわけにも行きません。馬車を用意しましたので、どうぞこちらへ。マルシャル提督。」

こうしてアルテース大陸においても、外の世界との外交交渉がようやくスタートした。なお、メイベルやクリプトン卿は知らなかったが、ロクシエ側は前日までの日本との交渉を踏まえて、既に今後接触する国との外交方針（平和的かつ今後の国交締結を見据えたも

の)を決めていた。

また、対するサクラス帝国側もメイベルやクリプトン卿は基本的に平和主義者であった。そのため終始会談は和やかに進むこととなる。そしてこの翌日には、日本の時と同じく国交締結に向けての交渉を行うことと、使節団の派遣が取り決められる事となる。

それはまだこの世界にこの時点で飛ばされてきた国々が、ようやく友好関係を築く為のスタート位置に立ったことを意味していた。

10日目 世界

時はそれから少し流れて、各国がこの世界に現れてから10日目。この日までの世界の動きをしてみる。

まず日本。日本では接触した2国への使節団の派遣準備と、相手国からの使節団の受け入れ準備を進めると共に、新たに確認されたサクラス帝国への使節派遣が計画された。そして、それらと並行する形で国内の問題の解決に全力で務めた。

春川内閣は10日間の間に様々な法律を作成し、衆議院に提出した。そしてそれらのほとんどが短時間の審議の上で、可決していた。

これは非常に稀なことであるが、与野党入り混じった衆議院もそうしなればならないほど事態が切迫していたのだ。物資の不足もそうだが、それによる経済や生活の大混乱を抑える為に、様々な統

制法や保護法が成立した。

もちろん、これらの法律の中には内閣以外からの発案の物もあったし、廃案になったものもあった。

こうすることで、物資が入るまでの時間稼ぎを図った。もちろん、これによって春川首相以下内閣閣僚の肉体的、精神的ダメージは大きかったが、取り敢えずしばらくはこれでなんとかかなりそうであった。

そうした中で面白い話題もあった。まず、日本国内の資源産地では軒並み鉱脈が復活したり、激増したりしていることが確認された。そのため石油や石炭に関しては、掘り出し始めれば、充分日本国内の消費分は賄えるという試算が立った。

また、日本周辺の海域を調べていた調査船が南鳥島の東300kmと魚釣島の西800kmに諸島群を発見していた。政府はさつき前者に、島、後者に、島の仮称を付けて、調査隊の派遣が計画された。ただし、後にこの両島において問題が発生することとなる。

続いてトリステイン王国。トリステインでも、やはり日本からの新たな使節受け入れと、自国からの使節団派遣準備を進めた。一方で、国内を纏めるのに四苦八苦していた。案の定と言うべきか、王軍の戦力低下と諸外国の消失と言う事態に、一部の貴族に不穏な空気が漂っていた。

しかしながら、アンリエッタにとっての幸運は早々とする友人のルイズの実家であるヴァリエール公爵家や魔法学院が王家全面支援に回ったことであった。このインパクトは大きく、なんとか内戦は防げた。

ただ、それ以上に厄介な問題も浮上していた。転移の影響によって気候が少しばかり変わったことで、作物に影響が出始めていたこと。そして、『風石』などの地下資源が軒並み消えてしまったことだった。

「ど、どうでしょう・・・」

報告を受けたアンリエッタは途方に暮れた。後に、新世界においてトリステインを一流国にしたアンリエッタも、転移当初は大変であった。

ちなみに才人はと言うと、ルイズと共にヴァリエール家に行つて公爵と話し合つたり、王城へ行つて使節団へのアドバイスをしたり、国内のどこかにいる筈の高風春名を探したりと、彼なりに忙しく動き回っていた。

続いてロクシエ。ロクシエでも、やはり転移の影響で気候の変化や鉱物資源の消滅などの事態が起きていた。ただし、元々広い大陸ごとの転移であったため、全てが消滅したわけではないし、日本と同じく新しい資源地帯が現れたり、古い資源地帯が復活するなどで差し引きゼロだった。

政治的な混乱も、元々自活可能だったため比較的小さく、せいぜい国内に残っていたスー・バー・イル人の保護問題と同国との貿易の代替をどこに求めるか位であった。もっとも、それは日本やサクラス帝国との接触で解決しつつあったが。

なお、ロクシエは日本に遅れること2日後に大陸周辺の捜索に出ている海軍艦艇が 島を確認した。

また、主人公たち（リリアとトレイズ）への影響もほとんどなかった。彼らへの影響が出るのはもう少し先である。

最後にサクラス帝国についてはと言うと、こちらも大陸であるおかげで資源などの面では全く問題無しであった。そしてこちらはロクシエ以上、日本未満の勢いで海外との貿易を求めている。原因は聖女メイベルであった。

研究者志向の強い彼女は、ロクシエとの接触で見た新しい技術に興味津々であった。だから、ロクシエ側から伝えられた二ホンと言う国にも興味津々であった。

ただし、元々大陸内で生きてきて外部との繋がりがなかっただけに、サクラス帝国から友好を求めるには時間が必要であった。また、今回の転移の説明を国民（異教徒やドラゴン含む）にする必要もあったので、メイベルは多忙であった。

有線放送に出演するだけでは不十分と言う議会の要請を受けて、聖都サクラスをはじめとして、彼女は国中を飛び回って国民に対して演説を行わなければならなかった。

「遊説なんか大キライー！」

とある日叫んだらしい。

こんな感じで、この5日間はあっと言う間に過ぎていった。そして、各国がこの世界に転移して10日目、再び大きな動きが起きることとなる。

最後？の接触と次なる動き（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

と言うわけで、5日目から10日目までは大まかな動きを書くだけに留めました間。ちなみに、新たに発見された2島は作者のオリジナルですが、取り敢えずどちらともトンドEMONアイ島になる予定です。

暗雲 1

10日目昼 日本・東京首相官邸

「・・・で、発見した 群島に大量の資源が眠っているのがわかったわけだな？」

春川首相が報告にやって来た石川防衛大臣に尋ねる。

「はい。空中からの写真撮影だけでも、金や銀、鉄鉱石にプラチナ、果てはムウ帝国の遺跡らしき物まで、それこそ掘れば何でも出てきそうな感じですよ。調査隊を派遣した小島では、石油が自然に湧出しているくらいです。そして、現在までの所人が住んでいる痕跡はありません。」

石川の報告に、他の大臣たちは色めき立った。

日本の資源問題は、ここ数日で明るい話題が次々と出ていた。例えば、秋田や新潟の油田跡から湧き出した石油は、非常に良質な石油であり、しかも相当な埋蔵量がありそうであった。また静岡の油田跡でも新たに湧出が確認されており、一部の研究者は日本列島自体が大規模な油田埋蔵地域に出現した可能性が高いと予測していた。また他にも石炭や金山、銀山で鉱脈の復活が確認され、いずれも調査が始まったばかりだが、現状では良質で大量な埋蔵量が期待できるとされていた。

取り敢えず、石油と石炭は当座はなんとかかなりそうであった。既に春川内閣はそれらの採掘を全力できるように命令していた。

そして3日前に発見された 島群は、南鳥島の東方300km付近にあり、大小30以上の島からなっていた。その内一番大きな島は大分県程の大きさで、相当な資源の埋蔵が期待されていた。

他国が発見した兆候はないし、そして人が住んでいないと来れば、早い者勝ちである。日本がいの一番に上陸し、日の丸を立ててしまえば日本の物だ。

しかし、閣僚たちが喜ぶ中で春川は浮かない顔をしていた。

「それは大変結構だが、海上幕僚長だけじゃなくて陸上幕僚長も来ている所を見ると、何か訳ありだな？」

「ええ。実はですね。この一番大きな島において、こんな物が発見されました。」

と、彼が一枚の写真を見せた。そこには、1匹の動物が写っていた。そして春川には、その動物に見覚えがあった。

「確か、こりゃインドネシアにいた肉食トカゲじゃないか？」

「はい。専門家に見てもらった所、外見は完全にコモドオオトカゲです。」

コモドオオトカゲとは、その名の通りインドネシアのコモド島に生息するオオトカゲのことである。肉食で、人を襲撃した事例も報告されている。

そのトカゲにそっくりのトカゲが、この島にはいるらしい。

「けど、別にインドネシアじゃ人と一緒に暮らしているんだろう？
何が問題なんだ？」

「はい、確かに地球の個体と同じなら問題ありません。しかしながら、今回発見されたのは大きさが異常です。」

「何!？」

春川は今一度写真を覗き込んだ。そのトカゲの横には椰子らしき木が一本生えている。それとトカゲの体を比べてみると、どう見ても椰子の木がトカゲの体よりかなり小さいのがわかる。

「まさかとは思うが・・・」

「ええ。このオオトカゲは、全長が20mはあります。」

「「「・・・」」」

閣僚たちの間を沈黙が支配する。

「しかも確認されたのは数体ですが、もっといる可能性の方が高いです。」

「そんな化け物があるんじゃ、調査隊を送ることさえ困難だぞ？」

人を喰う可能性の高い巨大生物が歩き回っているような危険な土地に、人を派遣するなど言語道断だった。しかし、石川防衛大臣はちゃんと答えを用意していた。

「はい。ですから、陸上自衛隊の派遣を許可して欲しいのです。」

「陸自を？」

すると陸上幕僚長が言う。

「いくら大きいと言えど、相手は生き物です。銃ではさすがに無理でしょうが、戦車やミサイルを投入すれば何とかなる筈です。」

「出勤名目はどうするんだ？ゴジラみたいに東京へ上陸したわけじゃないんだぞ？」

すると石川が自信満々に言う。

「相手を害獣と認定すれば、災害派遣名目で送れなくはありません。過去に前例があります。それに、今の状況ならば、国民は賛成してくれるはずです。さすがに生きるか死ぬかの瀬戸際とあれば、動物愛護などと言っている余裕もないでしょう。」

「うーん。しかし、海自はどうなんだ？まさか陸自だけ丸裸で送り出すわけにも行かない。それなりに艦隊を出すんだろ？」

「その予定です。」

「それで国の防衛は大丈夫なのか？トリステインとロクシエ、それにサクラス帝国にも使節を乗せた艦隊を派遣するんだ。我が国に十分な戦力が残らない可能性がなくないか？」

すると海上幕僚長が言う。

「そこで首相。是非とも、お願いがあるのですが。」

「何だ？」

「在日米軍に支援を要請して欲しいのです。」

「米軍にだと？」

「在日米軍には世界最強の第7艦隊が含まれています。一部の艦は転移時にハワイやグアムにいたので今はいませんが、それでも空母「ジョージ・ワシントン」をはじめとする主力艦隊と輸送艦隊のほとんどは横須賀、佐世保、沖縄に在泊したままです。これを使わない手はありません。」

しかし、一部の大臣から反対が起きる。

「いくら同盟国とは言え、アメリカを全面的に信頼してよいものかね？」

「もし裏切られてもしたらことだぞ。」

一方で、賛成も起きる。

「彼らだって補給を今は日本に一任しているんです。裏切れるはずがない。」

「使えるものは、この際何でも使うべきでは？」

賛成、反対、慎重などの意見が出るが、一番多いのは慎重であった。やっぱり外国人に全てを任せることに不安があるようだった。

「どうしますか首相？」

小泉副首相が、黙ったままの春川に尋ねる。

「どの意見を取るにしろ、すぐには決められない。かと言って、決定を延ばしている時間もない・・・とにかく、彼らに頼む、頼まな
いに関わらず在日米軍の現況について知りたい。明日にでも在日米
軍総司令官を呼び出そう。」

そう言つと、彼は溜息を付いた。

「全く、まだまだ休ませてもらえそうにないな。ようやく今日の朝、
ロクシエとトリスティンに使節団を派遣したばかりだと言つのに。」

「仕方が無いですよ。」

春川の顔を見て、小泉が苦笑しながら言つた。

と、その時新たな情報が齎された。

「大変です！」

走りこんできたのは国土交通省の職員だった。

「どうした？」

「先日発見された 諸島近海で、海上保安庁の巡視船が消息を絶ち
ました！」

「何!？」

同時刻 島東150km海域 海上自衛隊護衛艦「おおなみ」

島は2日前に、日本周辺海域を調査中の巡視船が尖閣諸島の西300km地点に発見した島で、正確には 島と同じく幾つかの島からなる群島であった。

海上自衛隊の護衛艦「おおなみ」は佐世保を母港とする第二護衛隊群所属艦である。今回命令を受けて、同島周辺海域の調査を、島を発見した巡視船「りゅうきゆう」と共に行う予定であった。それと同時に、「りゅうきゆう」がレーダーで捉えた艦船に対する監視任務も行う予定だった。

「おおなみ」は海上自衛隊の汎用護衛艦である「たかなみ」型の1隻で、イージス艦程ではないが対空、対艦、対潜全てにおいてバランスの良い性能を誇り、さらにヘリコプターを1機搭載している。現在は最新の「ゆきかぜ」級汎用護衛艦が竣工しているが、数の上では未だ主力である。

実は、この艦艇はロクシエ軍の艦艇であったのだが、この時点で日本側はそれを知る由もなかった。

そして、つい先ほど突如として「りゅうきゅう」は救援を求める信号を発して、そのまま連絡が途絶してしまった。

「攻撃を受けたのでしょうか？」

「まだわからん。その可能性もあるし、そうでないかもしれない。とにかく、具体的な情報が何一つ入ってこないのだからさっぱりわからん。」

「おおなみ」艦長の坂本良馬一佐は部下の疑問に対してそう答えた。

「りゅうきゅう」からは救助を求める信号こそ送られたが、一体何が起きたかを知らせる連絡は一切なかった。いや、送ろうとしたようだが、その前に無線の方が切れてしまったと言った方が正しい。通信兵の言葉によれば、「か！」と言う言葉を読み取るのが限界だったらしい。

「とにかく、今我々がやるべきことは現場海域へ急行して、一刻も早く「りゅうきゅう」の安否確認、もしくは生存者の救助を行うことだ。ただし、万が一の場合もあるので対水上、対潜、対空警戒は厳にするように。」

そう命令を出すと、坂本は艦橋から見える海原を見た。

（一体「りゅうきゅう」に何が起きたんだ？もし沈んだとすれば轟沈だが、「りゅうきゅう」は曲がりなりにも大型巡視船だぞ。仮に攻撃を受けたとすれば、何らかの報告を行ってくるはず。しかしその報告はなかった。それに、途中で途切れた電文も気になる。）

通信を突然絶って沈んだ船に関しては、これまでも全くなかつ

たわけではない。1952年に明神礁での火山爆発に巻き込まれた海上保安庁の船もあるし、攻撃に気づかず轟沈したのならば連絡する暇もなかっただろう。

しかしながら、坂本には漠然とした不安があった。

「「りゅうきゆう」遭難地点に近づいたら、先にへりを発艦させて偵察させる。それから、あまり考えたくはないが、奇襲攻撃を受けて沈んだ可能性もある。総員気を引き締めてくれ。」

艦長席に座った坂本は、見渡す限りの大海原に、何かが潜んでいるように感じられて仕方が無かった。

それから3時間後、坂本の命令どおりに「おおなみ」からSH6 OKへりコプターが発艦し、「りゅうきゆう」が最後の信号を発信した地点へと向かって飛び立った。

へりが発進して1時間後、「りゅうきゆう」沈没海域においておびただしい船の残骸や漂流物を発見したと言う報告が入った。この時点で、「りゅうきゆう」の沈没は確実なものとなった。

「生存者を探せ！1人でもいい！とにかく探し出せ！」

と坂本は厳命した。しかし運命は残酷で、燃料がなくなるまでへりは現場海域に止まって捜索したものの、結局生存者は発見できなかった。

「本艦も急ぐぞ！」

「おおなみ」も現場海域へと急いだ。

ところが、ここでまたも予想外の事態が起きた。レーダーが2隻の艦影を150km先の海上に捉えたのである。

暗雲 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

本当だったらゼロ戦才人の方を更新するつもりでしたが、こちらの方が先に考えがまとまったので更新しました。

暗雲 2

10日目夕方 島近海 巡視船「りゅうきゅう」遭難地点

巡視船「りゅうきゅう」が消息を絶った地点には、多数の船の残骸や装備品と思われる物が浮いていた。現場に到着した護衛艦「おなみ」は機関を停止させると、付近海上の捜索にあたる。

「どうだ？生存者はいそうか？」

坂本艦長が双眼鏡を構えて辺りを捜索する部下に尋ねる。

「いいえ。その気配はありません。」

坂本も双眼鏡で辺りを見るが、漂流物こそ見えるものの筏や救命ボート、そして生存者の姿は見つけられない。夕暮れが近づき、茜色に染まる海上には、波が「おなみ」の船体を叩く音以外なものもない。

「そうか・・・」

捜索はしばらく続けるつもりであったが、状況から考えて「りゅうきゅう」乗員は全員殉職した可能性が高かった。坂本としては海自と海保と言う組織の違いはあれど、同じ船乗りとして哀悼の意を禁じえない。

「とにかく、捜索を続けてくれ。日本への報告はその後だ。」

坂本は艦橋にはいると、CICとの回線を開いた。

「CIC艦橋。接近中の艦艇の様子はまだ掴めているか？」

先にへりが発見した艦艇は、徐々に「おおなみ」との距離を詰めつつあった。この時点では、既に中型艦と小型艦が1隻ずつという構成までわかっていた。

「はい艦長。現在本艦の西方50kmまで接近。後1時間もすれば接触します。時折定時信号らしい無電をモールズで発進しています。が、解読不能です。それから、相変わらずレーダー電波は全く探知できません。」

現代地球の常識からして、レーダー電波を全く発信しない艦船など有り得ない。漁船にだってレーダーや魚群探知機ソナーが付いている位なのだ。となると、ロクシエかサクラス、さらにはそれ以外のどこかの艦船である可能性が高い。

「わかった。引き続き監視を続けてくれ。」

彼はそこで通信を切り、再び艦橋横の張り出しに出て救助作業の様子を見守った。

その後「おおなみ」は内火艇まで出して付近を搜索したが、結局生存者は見つけれなかった。その代わり、かなり恐ろしい物を幾つか拾い上げた。バラバラになった救命艇の破片や、ボロボロに引き裂かれた救命筏やライフジャケットの破片、さらには人体片等々。普通であれば、見るのさえ嫌になる物ばかりだった。

だが引き上げられたそれらを、坂本は冷静に観察した。

「妙だな。轟沈したにしても、この引き裂かれ方や壊れ方は異常だ。」

「少なくとも、爆発じゃないようですね。」

坂本ら検分した幹部らが首を傾げる中、CICからの報告がもたらされた。

「不明艦艇接近！まもなく目視圏内に入るそうです。」

「わかった。俺も一度艦橋に戻る。」

それから15分後、「おおなみ」の目の前に現れたのは2隻の古めかしい艦艇だった。ミサイルやCIWSは見当たらず、大砲や旧式の機関銃、魚雷発射管を装備した巡洋艦と駆逐艦だった。マストには矢と錨のマークが描かれた旗がはためいていた。

2隻は速度を落とすと、「おおなみ」に近づいてきた。

「ロクシエ軍だな。先日通知された旗と同じだ。」

「それにしても、随分と時代遅れの艦ですね。まるで太平洋戦争を描いた映画に出てくるようなシルエットです。」

隣に立つ副長が言った。

「ロクシエの科学力は実際その程度らしいからな。しかし信号は通じない、無線連絡を試みよ。確か周波数は通知されていたな。それから、マストに白旗を掲げて敵意がないことを「艦橋CIC!!！」

命令を遮るように、CICから通信が入る。

「どうした？」

「ソナーより報告、海中を急速に浮上、接近する物体アリ。距離1万、速力40ノット！！正確な大きさはわかりませんが、かなり大きいです！一直線にロクシエ艦に向かっています！」

「何！？機関始動！！対潜戦闘用意！！ロクシエ艦にも信号！！」

「了解！」

通信室から指定周波数での連絡が試みられると共に、「おおなみ」艦内には警報が鳴り響き機関始動用意と、対潜戦闘配置が行われた。

後に 島沖事件と呼ばれる戦闘の始まりであった。

「ロクシエ艦はどうだ？回避運動を行っているか？」

「それが、全く気づいていないようです。」

「何！？」

双眼鏡でロクシエ軍の艦艇を見た坂本は目を疑った。自分たちに向かつて、海中を一直線に接近中の物体があるのに、巡洋艦も駆逐艦も相変わらず低速で動いていた。

実はロクシエ軍には潜水艦がないため、まともなソナーを持っていなかった。そのため、海中を動く物体を捉えられる筈が無かった。

「バカな！無線はどうした!？」

「現在呼びかけています。しかし、相手が全く理解できないようです。」

「回線をこつちに回せ！」

「艦橋CIC！目標急浮上を開始！ロクシエ駆逐艦に向かいます！」

「!？」

次の瞬間、巡洋艦の後ろを走っていた駆逐艦に異変が起きた。突然艦尾が持ち上がり、そこから巨大な水柱が現れた。いや、厳密には何かが海中から飛び出したのであった。

「な、何だあれは!？」

坂本だけではなく、その光景を見ていた全ての人間が目を疑った。何故なら、海中から飛び出した物体は恐ろしく巨大な生き物であったからだ。

「信じられん。全長は50mは超えていたぞ。潜水艦並みの大きさの生き物があるなんて。」

「「りゅうきゆう」はあれにやられたのでしょうか？」

「かもしれん。あんなのが襲い掛かれたら、対潜装備なんか持たん巡視船では一たまりもなかっただろうな。ロクシエ軍の駆逐艦は大丈夫かな？」

坂本はロクシエ軍の駆逐艦に双眼鏡を向ける。外見はまだ何ともなさそうであったが、盛んに発光信号を点滅させ、さらに通信室では救助信号らしい同一信号の連続発信が確認されたので、被害を受けたのは間違いなさそうだった。

「大丈夫ではないようです。スピードがガクンと落ちましたし、巡洋艦の動きに全く追従出来ていません。おそらく、舵とスクリューをやられたのだと思います。」

副長の言葉に、艦橋にいた人間は青ざめる。今度は自分たちの番かもしれないからだ。

「CIC艦橋。さっきの化け物の動きはちゃんと追えているか？」

「はい！一旦離脱中・・・待ってください、本艦前方距離2000でターンしています。本艦を襲うようです。」

その時、待ちに待った報告が入る。

「機関始動準備良し！！！」

「機関緊急始動！！軸ブレーキ脱！最大船速！！！」

「ようそろつ！最大船速！！！」

「たかなみ」のガスタービン機関が緊急始動し、2基のスクリューが回り始める。

「目標！ターンして向かってきます！距離1500！速力40ノット！！！」

「取り舵一杯！対潜戦闘！右舷対潜魚雷発射用意！」

坂本は躊躇無く反撃を決意した。「たかなみ」には対潜装備としてロケットと魚雷を合わせたアスロック対潜ミサイルと対潜魚雷が搭載されている。しかもいずれも、ロシアや中国の強力な原潜に対しても考慮された、最新式の11式魚雷だ。

「よろしいのですか？」

「目の前で軍艦に体当たりして、今まさにこちらにも牙を向けている相手だぞ！何を躊躇する必要がある！！それに、明らかに危険な武器使用は許可されている。今の首相が物分りの良い人で良かったぜ。」

自衛隊のお題目となっている専守防衛。とあるアニメで「明確な侵略を受けて、初めて行使できる権利・・・侵略と判断した時点で、既に致命傷を受けている可能性もある。」と言うように、致命的な欠点を抱えている。

しかし、ここは異世界。しかも今は非常事態。そのため、自衛隊や海保には明らかに危険と判断した場合には、上記の場合でなくても武器使用が許可されている。もちろん、後でその判断は精査されるだろうが、とにかく武器は使い易くなっている。

それが坂本を強気にさせ、彼は現段階における武器使用を決断した。

「たかなみ」は既に取り舵へと舵を切り、そのため左に旋回を始めていた。そして右舷に設置された3連装の対潜魚雷発射管が旋回し

て海上に指向する。

「魚雷発射準備完了!!」

「撃て!!」

CICから遠隔操作され、発射管から魚雷が1本海上へと放たれる。既に怪物との距離は1000m程度にまで縮まっていたが、なんとか行ける距離だった。

11式魚雷は着水すると、探信音を放ちながら超高速で敵へと向かってまっしぐらに進んだ。「たかなみ」のCICでは、乗員たちが画面上に映し出される魚雷と怪物の動きに注視していた。

「相手は40ノットの高速だが、こっちも60ノットの雷速だ。行ける筈。」

「魚雷命中まで5、4、3、2、1、今！」

ズドーン!!

水中で魚雷が爆発し、海上には巨大な水柱が出現した。

「やったか!？」

11年式魚雷は頑丈な原子力潜水艦を撃沈できるよう設計された新型魚雷だ。炸薬量も多いし、何より成型炸薬を使用している。相手がゴジラでもない限りは、大丈夫と思われた。

だが。

数秒後、怪物は水上へと再び姿を現した。

「魚雷1本喰らって平気なのか!？」

「いえ艦長、ダメージは与えたようです。」

部下に指摘されて良く見ると、確かに首筋らしいところから盛大に出血しているのがわかった。そしてようやく、相手の姿もあらわになった。

「ありや海蛇の化け物・・・大昔船乗りを恐れさせたシー・サーペントその物だな。」

「全長は50mどころじゃありません。70mはあります。」

「あんなのに体当たりされたら、本艦でも一溜まり無かったな。」

怪物はその大きさに見合う頑丈さを持っているらしく、大怪我をしておお「たかなみ」に向かってくる。

「怪物が動き始めました。速力20ノットで本艦へ向かってきます。」

「ようし、止めを刺すぞ。主砲、CIWS撃ち方初め!!」

「アイ・サー！」

「たかなみ」には対艦・対空用に127mm速射砲1門と20mmバルカン砲が2基搭載されている。それらが一斉に怪物を指向し、

砲門を開いた。

バン！バン！バン！

バババババ・・・

速射砲とバルカン砲の掃射は凄まじく、怪物周辺の海上に水柱が立つ。そしてこれにはさすがのシー・サーペントも、手負いであるため適わず、まもなく絶命して海の底へと消えていった。

「これで「りゅうきゆう」の仇は取れましたね」

副長のその言葉に、坂本は返事をしなかった。

「ロクシエ艦はどうした？」

「駆逐艦はどうやら沈没を免れん様です。傾いています。」

「だったら本艦も救助作業をする。内火艇降ろし方用意だ！」

「了解です。」

副長が命令を伝達するため自分の元を離れると、坂本はボソリと呟いた。

「これで良かったのかね。」

暗雲 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

使節団 1

10日目夜 日本・東京首相官邸

「巨大トカゲの次は、巨大海蛇か。しかも巡視船が沈没して、生存者無しとは。遺族や野党が騒ぐだろうな。」

春川首相は、防衛省を通じて護衛艦「おおなみ」よりもたらされた情報に頭を抱えた。巡視船「りゅうきゆう」が沈没、生存者なしということだけでも大事件なのに、このような事態が立て続けに起これば頭も痛くなる。

「「おおなみ」は海蛇を撃破して無事です。しかしながら、付近にいたロクシエ駆逐艦が沈没し、死傷者多数のことです。「おおなみ」も救助作業に参加中とのことです。」

石川防衛大臣が入ってきた情報を伝える。

「全く、ロクシエへ使節団を送ったばかりなのに。取り敢えず、全力で救助してくれ。」

「はあ。それなんです。救助したロクシエ艦の乗員をどうするかが問題です。」

「何でだ？近くに別の巡洋艦がいるんだろ？そのまま受け渡せば良いんじゃないのか？」

ところが、ことはそう簡単には行かないようだ。

「救助した人間の中には重傷者もいるそうで、海上での引渡しが大変だそうですね。」

「「おおなみ」側はどう言ってきたらいいんだ？」

「一番近いロクシエの港まで、生存者を送り届けることを意見具申しています。「おおなみ」自体の燃料の残量はまだ充分なので、不可能ではありません。どうしますか？」

「しょうがないな。日本に連れてこれば、それはそれで面倒だからな。それに相手の感情を刺激するわけにも行かないし。仕方が無い。許可すると伝えてくれ。」

春川が防衛大臣にそう言うと、今度は国土交通大臣が前に出た。海上保安庁の管轄は国交省であるので、彼も一緒に来ていた。

「それから首相、国土交通大臣としましては、すぐに今回の件を発表して、航行中の船舶に注意を促したいのですが。」

「わかってる。この後直緊急の記者会見をやるよ。新聞社もネタに困らなくて助かるんじゃないか。」

「その新聞社は、紙とインクの値段が高騰しているのです。どころじゃないですよ。既にかかなりの数の出版社が潰れたらしいですし。」

新潟や秋田の油田復活、さらに資源を大量に埋蔵していると思われる島の発見などで、石油や石炭に関しては明るい見通しが見えてきた。しかしながら、現代日本を支えるには他にも様々な物資が必要であった。

「燃料の確保はなんとかかなりそうだが、それ以外の物資の確保も早い所目処をつけなくちゃな・・・ま、その前に記者会見だけだな。ああ、憂鬱だ。」

そう言つと、春川は深々と溜息を吐いた。

12日目 世界

この日、日本から出発した使節団が相次いでトリステインとロクシエに到着した。日本が突貫で編成して派遣した使節団ではあつたが、もちろん正規の外交団なので、それぞれの国では到着後に歓迎を受けた。

なお、この使節団の団長は前回暫定的に交渉役を務めた外務省職員が勤めた。すなわち、トリステインは本多外交官、ロクシエは荒木外交官である。また彼らを運んだ艦隊も、以前と同じく第一護衛隊群と第二護衛隊群から分派された部隊である。

ただし、ロクシエに関しては彼らとほぼ同時に護衛艦「おおなみ」がロクシエ海軍の巡洋艦による誘導を受けて、使節団が入港した所とは別の港に入港している。

実は、今回の護衛艦「おおなみ」の行動はロクシエの大きな注目を集めることとなつた。まず巨大海蛇との戦闘では、その運動性や水中の敵を叩く誘導魚雷の性能、さらに速射砲やCIWSの発射シーン、救助に際しての迅速な行動がロクシエ軍の興味を引く物とな

った。

いずれも日本の海上自衛隊の装備や錬度を端的にはあるが、ロクシエ側に知らしめることとなったからだ。

また、「おおなみ」が救助した駆逐艦乗組員へ行った医療行為もロクシエの興味を引く物となる。何故なら、ロクシエ側の医師や看護師が「おおなみ」から負傷者を受け取った際、あまりにも次元が違う医療設備に目を丸くしたからだ。

そのロクシエも既に外交使節団を派遣しており、この日日本側使節団と入れ替わる形で艦隊に守られた客船に乗り込んだロクシエ使節団が博多港に上陸している。またロクシエは既に接触済みのサクラス帝国へ向けても使節団を派遣しており、この翌日にサクラス帝国南部のサンウーヌスに到着している。

一方で、この日サクラス帝国も使節団をようやくロクシエへ向けて送り出した。この使節団派遣に、聖女メイベルは自ら同行することを言ったそうだが、議会や周りの人間によってさすがに却下されている。

サクラス帝国使節団の代表は、メイベルが指名した彼女の先輩であるアステルとなった。実際には議会や外務省から派遣された人間も使節団内にいたが、メイベルから直に代理人とされた彼女が、実質的な代表であった。

彼女らはこの時点で日本の存在を伝聞としてしか聞いておらず。この数日後、ロクシエ連邦首都特別地域における会談で、日本側代表団と交渉することで、初めて互いに認知することとなる。

そして、トリステイン王国も轉移してきた国の中で最悪の条件下に置かれながらも、地道に行動を開始していた。未だに国内の混乱は収まらず、寧ろ徐々に拡大しつつあったが、そんな状況下でありながらも使節団を編成して派遣しようとしていた。

しかしながら、トリステインの場合は既に自力で国外へ使節団を派遣できる状況ではなかった。手持ちの艦隊はほぼ全滅したのに加えて、空中艦船の多くが轉移後に墜落して失われていた。また、これまでの歴史的経緯から洋上航行の技術を十分に持ち合わせていないのが原因だった。

そのため、トリステイン使節団は海上自衛隊の艦艇に乗せてもらって日本へ向かうこととなっていた。

トリステイン使節団の代表は当初ラ・ヴァリエール公爵があてられる予定であった。ところが、彼が国内強硬派の抑えとしてなくてはならない存在であったため、結局手が空いていたモンモランシ伯爵が任命されている。またこの代表団には、アカデミーを代表してヴァリエール公爵の長女でルイズの姉であるエレオノールが加わっていた。

エレオノールは後に、トリステインから一定の距離を離れると魔法が一切利かなくなることとを最初に確認し、トリステイン艦隊全滅の謎を突き止めることとなる。また日本における1週間の視察で、彼女はそれまでの魔法優越主義を180度転換して周囲を驚かせることともなる。

12日目 トリステイン 北部海岸

「お出迎えありがとうございますアンリエッタ女王陛下。今次使節団代表を勤めさせていただく本多聡子です。よろしくお願いしますね。ククク・・・」

外務省の白い悪魔はそう言って不気味に笑った。

「・・・」

出迎えたアンリエッタ以下のトリステインの面々（才人も含む）は、先日の交渉において脅しに近い交渉を行った彼女が再び現れたことに、言葉が出なかった。一方、本多の後ろにいる随員たちは、そんなトリステインの人々に同情の視線を送っていた。

なんで人物的に最悪な彼女を代表に選んだかと言えば、これは外務省の他の人間が尻込みしてしまったからだ。トリステインと言う国の内情が日本に知らされたことで、ただでさえ行きたいと思う人間などいない状況に拍車が掛かってしまったのだ。

加えて、彼女が唯一トリステインに上陸した外交官であり、先日の声明発表を成功させたのも原因の一つだった。

このお陰で、アンリエッタや前原と言った彼女に苦しめられた人々は、再び彼女と付き合わねば成らない状況に置かれてしまった。

ちなみに、今回の使節団は外務省から2人に農林水産省や経済産業省、法務省から1人ずつ、さらに自衛隊から2人（空自と陸自）

の計8人だ。

「・・・ええと、ようこそトリスティンへ。皆様を歓迎いたします。」

「いえいえ、こちらこそ。わざわざここまで出迎えていただけるなど、望外のことです。」

現在彼らがいるのは、前回と違って近くに鄙びた漁村しかない砂浜だった。そこへ本多らは先ほどヘリを使って上陸したのであった。何でわざわざ日本の使節団がここに上陸したかと言えば、それにはちゃんとした理由があった。

まもなく、海の方から大きなプロペラ音を響かしたホバークラフトが浜辺へとやってきた。海上自衛隊の「おおすみ」型輸送艦に搭載されているLCCだった。

「うわあ。すげえ。ニュースで見たことあったけど、やっぱり本物はでっかいな。」

才人は暢気にそんな声を上げていたが、アンリエッタらは海から止まることなく陸地へと乗り上げたLCCの姿に度肝を抜かれていた。

上陸してきたLCCは、停止すると搭載してきた車両を下ろし始めた。戦車や装甲車も搭載可能であるが、今回はそうした車両は積まれておらず、いずれもF3式の小型トラックや軽装甲車、さらには高機動車やトラックと言った自衛隊の小型車両であった。

上陸した車両には自衛隊員が乗り込み、迷彩塗装や武装もそのま

まだだった。実はこれ、使節団の移動用と護衛用を兼ねて派遣された部隊であった。

前回の交流で、ロクシエ側は曲がりなりにも近代的な国家であり、国際法などに対する概念も地球のそれと変わりなかった。

ところが、トリステインの場合は中世ヨーロッパのそれと同じであり、治安があまりよろしくない可能性がすぐに指摘された。さらに、ドラゴンをはじめとする幻獣の存在もあり、安全が確保されるかわからなかった。

そこで、日本政府は再び才人を通してトリステイン政府に対して、最低限の護衛戦力（1個小隊30名と車両）の派遣を申し込んだ。

日本側としては、他国に部隊を派遣すること自体怖いこと（後で外交問題に発展するかもしれない）であったが、翌日送られてきた返答はあっさりOKであった。

トリステインとしては、別に外交団が自前で騎士等を護衛に付けるのは当たり前だし、むしろ重要な使節団の護衛がたった30人程度（しかも日本側は歩兵だけと予め伝えていた）で大丈夫なのかと言っことさえ考えた。

こういう感覚の違いもあってあっさりトリステインは受け入れたが、今回の陸自部隊は小銃、拳銃、手榴弾はもちろんのこと、対戦車無反動砲や迫撃砲も装備していた。だから戦闘力は決して侮れない。

「まあ、とにかくよろしくお願いします。ククク・・・」

本多はそう言つと、不気味に笑つた。

使節団 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

先日DVDを整理していたら、昨年録画した「坂の上の雲」を見つけたので久しぶりに観てみました。そのなかで、伊藤博文がこんな会話をしているシーンが。うる覚えなので、間違っているかもしれませんが。

「・・・力の裏づけのない外交など、絵に描いた餅です首相！」

「武力を背景にした外交など、最早外交ではない！」

「・・・人間て本当に愚かな生き物だと思っていました。」

明日から船の博物館と防衛省戦史資料室へ出かける予定なので、また更新間隔が間延びすると思います。御迷惑をお掛けします。

使節団 2

11日目～12日目 日本

石油をはじめとする一部の資源の確保に目処がつき、さらに自分たちと同じくこの世界に飛ばされてきた各国との交流を始めた矢先に起きた巡視船の遭難と、乗員の全員殉職事件は当然ながら日本国内に混乱を巻き起こした。

そりゃそうである。ようやく少し安心できるかと思っただけに、危険な生物が住んでいると知れたとなれば、誰だって不安になる。このニュースが流された日には、全国の3分の2に及ぶ漁船が出漁を取りやめるか、それまでより沿岸よりの漁場での操業を行っている。

ただし、転移直後に海自や海保が周辺海域を調査した結果、特に危険な生物の存在は確認されなかった。それにそれから10日間に渡って、日本近海では普段より多い漁船が操業しており、その中で遭難した船は1隻も出ていない。

そのため、翌日には再び出漁する船は増えた。しかしながら、やはり安全が確認されないから比較的近場で操業する船が増え、水産資源の急激な減少に繋がる可能性がある（現在肉類の輸入の目処が立たないため、蛋白源の多くは魚に頼っている）ため、政府（特に防衛省と農水省）は対応に追われることとなった。

ちなみに、現在日本周辺で操業している漁船は日本籍の漁船が大半だが、中には韓国籍やロシア籍の船なども混じっている。これらは、転移時日本領海内で操業していたため、一緒に付いて来てしま

ったものだ。

外国籍の漁船は、当初最寄の港に寄港して待機となっていたが、日本国内での食糧事情悪化が見込まれ、1隻でも多くの漁船が必要となったため、日本政府から補給を受けて再度出漁している。言葉が通じるのは大きく、命令の伝達を素早くすることができた。

なお余談だが、防衛省では太平洋戦争中の特設艦船を真似して、これらの漁船の中でも比較的大型の漁船を徴用して、簡単な砲や機銃、対潜魚雷か対潜ロケットを取り付け、ソナーを強化して特設哨戒艇にする案を出している。これは広大な海域において、シー・サーペントなどから漁船をはじめとする自国船舶や人命を保護するための方策であった。

これは後に、徴用ではなく全国の造船所に対する支援策として新規建造と言う形で実施され、その任務の中心は漁業監視・保護となった。そのため海自・海保とも別個の新組織が設立されることとなる。

こうした謎の巨大生物による脅威が本格的な物となったが、日本政府としては発見した 島と 島をなんとかしても手に入れない所であった。と言うか、手に入れないと本当に日本としてはマズイ。

しかし 島には巨大トカゲ、そして 島には巨大海蛇と言う危険生物が確認されており、これでは採掘どころか調査隊を送り込むことさえ危険である。かと言って、投入するべき戦力は既に枯渇を来たしている。各国に派遣した使節団の輸送に海上自衛隊は艦艇を割いており、既に戦力の余裕はない。

そこで日本政府が目をつけたのは、本国の消失により横須賀をは

じめとして各地で遊兵となっていた在日米軍であった。在日米軍は陸軍こそ弱小だが、世界最強の第7艦隊、強力な空軍、そしてやはり世界最強を自負する海兵隊を要しており、島一つを確保する位なら十分な戦力を要していた。それどころか、この世界を支配するに足るだけの戦力も有していた。核とか・・・

それはさておき、色々問題はあったが春川首相はさっそく在日米軍司令官を首相官邸に呼び出して、島への海兵隊と艦隊の一部派遣要請を出した。これに対して、在日アメリカ軍司令官は比較的前向きな返答をした。

ただし、案の定と言おうか、在日米軍司令官は次のような注文をつけてきた。

「今回の出兵の代償として、近い将来に諸島の一部を自治領でも良いので我々が在日アメリカ人のために譲渡して欲しい。」

これには春川首相も困った。

「取り敢えず、検討します。」

としか返せなかった。

何故これが困る問題かと言うと、単に領土を一部分け与えると言う問題で留まらないのが必定だからだ。

現在日本には様々な外国人が暮らしている。代表的な例を挙げれば第二次大戦以来オールド・カマーとして存在する在日朝鮮・韓国人。近年急激に数を増やした日系ブラジル人。世界中にそのコミュニティを築いていた華僑（中国人）等である。

他に現在日本船籍の外航貨物船の乗員として大量に働いているフィリピン人やベトナム人もいるし、日本海側には貿易目的で移民したロシア人だっている。

これらの人々は日本全体から見れば微々たる存在だが、それでも集まれば万や千単位になるし、影響力もそれなりになる。グローバル化が進展していた地球においては、人の流れも活発になっていたが、日本もその例外ではなかったわけだ。

こうした様々な国籍・民族を内包している状況で、例え一つとは言え自治領などを与えた民族を出したと成れば、他の民族からも独立運動が起きるのは目に見えていた。特に民族教育に熱心で、民族意識が強い朝鮮・韓国人、そして文化的な差から中々日本に溶け込めないブラジル人は要注意である。

「どうしたもんかな？」

春川首相は頭を抱えてしまった。

この問題、後に意外な方向に向かうこととなる。

12日目 昼 日本・横須賀港 輸送艦「おおすみ」艦上

「ここが日本!？」

トリステインより派遣された使節団の一員であるエレオノール・

アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール（以後エレオノール）は、輸送艦「おおすみ」の甲板上から横須賀の港を見て感嘆の声を上げた。

「おおすみ」に乗り込む前の彼女は、正直日本と言う国を見下していた。やはり平民だけの国と言う事情が、トリステイン貴族たる彼女にそうした感情を抱かせたのだ。

しかしながら、トリステインを出港してからの体験は彼女をはじめとする使節団の面々に一生分の驚愕を抱かせていた。

まず出港して3時間もすると一切の魔法が使えなくなった。当初は単なる不調か何かかと考えたエレオノールだったが、全員がいつぱんに使えなくなったことから、すぐにトリステインから離れると魔法がダメになるという答えに行き着いた。

これによって、エレオノールたちは『メイジ』としての存在意義を失ったと言ってよかった。それでも、トリステイン貴族としての矜持だけは保とうとした。

だがそれもほんの短時間だけであった。間もなく始まった日本に関する講習において、彼らは改めて日本と言う国とトリステインの格の差を思い知らされることとなった。

国力、科学力、あらゆる面でトリステインと日本ではお話にならない差が存在していた。唯一のアドバンテージは魔法の存在だが、それもトリステイン国内でしか通用しないのでは、全く意味がないこと位、彼女らも認識できた。

またそれ以外の部分、艦内での生活を通して見ても日本と言う国

が尋常ではない事くらいすぐにわかる。例えばLED電灯一つとっても、ランプしか知らない彼女らにとっては驚愕のないの何物でもないのだ。

「我が国はとんでもない国と出会ってしまったものだ。」

代表を勤めるモンモランシ伯爵は、そう言っただけでトリスティンの前途に絶望してしまった位だった。

そんな一行を乗せて、輸送艦「おおすみ」と護衛艦「むらさめ」、
「あけぼの」は母港であり、首都東京に一番近い軍港である横須賀軍港に帰港した。

横須賀軍港の光景はエレオノールらトリスティンからの一行を再び驚愕の渦中に置いた。確かに空飛ぶ船は1隻もないが、大小停泊している船の全てが鋼鉄の船体を持ち、帆を掲げることなく自由自在に動き回っている。また軍港の規模も、自国のラ・ロシエールなどとは比較にならない程大規模であった。付属する設備も、トリスティンにはない巨大な物ばかりだ。

「すごい。これが本当に平民だけの国だって言うの……」

「我々が元いた世界には、確かに魔法はありませんでした。その分人間は科学技術を発展させて、生活を豊かにしてきました。もちろん、一概に良いことばかりではありませんが、その結果が目の前に広がる光景であることには間違いありません。」

案内役として随行してきた外務省の職員である津軽慧次がエレオノールに言う。

「確かここ、ヨコスカは地方都市よね？と言うことは首都のトウキョウだったかしら？そのトウキョウはもつと凄いつてこと？」

「それは御自分の目で確かめると良いでしょう。予定では、我々はこの後車で横須賀駅へ向かい、そこから列車で東京へと向かいます。」

その後音楽隊の吹奏が響き渡る中を、「おおすみ」は岸壁へと着岸した。モンモランシ伯爵ら一行は、津軽に先導されてタラップを使って岸壁へと降り立った。すると、1人の男が彼を出迎えた。

ちなみに、岸壁にいるのは出迎えの外務省職員、そして自衛隊員だけでマスコミなどは一切シャットアウトしている。これは無用な刺激をトリステイン側に与えないためだ。

なお、こう言う時に出てきそうな人権団体や右翼団体は予想に反して一切現われなかった。理由は簡単。燃料統制で移動手段を奪われて集まれなかったからだ。何が幸いするかはわからないものだ。

「ようこそ日本国へ。私は外務大臣の木戸孝允です。遠路遙々御苦労様でした。日本国民を代表して、皆様を歓迎いたします。」

「今次使節団代表を勤めるモンモランシ伯爵です。歓迎感謝しますぞ、キド大臣。」

2人は堅く握手をした。

「既にお聞きかと思いますが、これから我々は首都である東京へと向かいます。我が国の代表たる春川首相との会談は明日昼過ぎからなので、今日はゆっくりとホテルで長旅の疲れを癒して下さい。」

「ありがとうございます。」

「それでは、車を用意しましたので、お乗り下さい。」

こうして、トリステイン使節団は日本への第一歩を記した。

またほぼ同時刻、九州の博多港にはロクシエからの使節団が到着。彼らは東海道・山陽新幹線経由で東京入りする予定となっていた。そしてまた、日本から出発した使節団も、それぞれの国で活動を開始していた。

日本と共に異世界へと飛ばされた各国は、それぞれの運命を交錯させて行く。

使節団 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

1週間も更新止めてしまいました。来週の土曜日からは帰省する予定なので、また更新止まるかもしれません。御迷惑をお掛けします。

使節団 3 (前書き)

すいません。リアルの方が忙しくなってしまうました。更新がおぼつかない状況です。本当にごめんなさい。

使節団 3

12日目 日本・東京駅

「ここが東京!？」

「すごい!なんと高い建物ばかりなんだ!！」

トリスティン使節団は降り立った東京駅のホームで思わず呻いていた。彼は横須賀線の横須賀駅から、用意された特別列車に乗り込んで、東京駅までやって来ていた。

列車に乗る前、駅までの送迎用に用意された自動車に乗った時点から、トリスティンの使節団は驚きっぱなしだった。話には聞いていたが、やはり馬無しで動く車や、その快適な乗り心地、またその車内から見えた横須賀の近代的な街並みは、充分に驚愕に値するものだった。

しかし、横須賀駅で列車に乗り込んだ所でさらにその驚きは大きくなった。自動車も充分馬車より快適で素晴らしい乗り物であったが、今回用意された特急車両はさらにその上を行く乗り物であったからだ。リクライニングを備え、自動車よりも空間的に広く、揺れも少ない。さらに速いと来ている。驚かない方がおかしいだろう。

また車内に装備されている液晶式の案内表示機や、綺麗に整備された水洗トイレ（これ自体は既に輸送艦で体験済み）や洗面所などもトリスティン使節団の関心を誘った。

さらに、横須賀線は複線であるため時々対向列車とすれ違ふ。最初にすれ違つた時は、使節団の面々が驚きのあまりギョツとした。

ちなみに、使節団の乗つた列車は横須賀を出発すると、鎌倉を通つて横須賀線を北上し、東京都内へと入り、途中で東海道線へと針路を変更している。これは横須賀線の場合は地下へと潜つてしまふからだ。地下区間を見せることも、それなりのインパクトを与えたであろうが、地上線を走つたことでトリステイン使節団は並走して走る新幹線や山手線、さらには品川から続く高層ビル街を、間近に見ることとなつた。

この移動の時間だけで、トリステイン使節団の面々は一生分の驚きを使い果たしたと言つても過言ではなかつた。

そんな驚愕しきりのトリステイン使節団に対して、横須賀から随行してきた木戸外務大臣が言つた。

「それでは皆様、ホテルまで案内しますのでこちらへどうぞ。」

「う、うむ。」

モンモランシ伯爵以下使節団の一行は、それこそ狐に包まれたような表情をしながら、東京駅ホームから移動していった。もちろん、彼らが広い東京駅構内や駅からでて広がる丸の内のビル街に再び度肝を抜かれたのは言うまでもない。

そして、彼らより1時間ばかり送れてロクシアーク連邦の使節団がはるばる九州の博多から新幹線で到着した。新幹線を使つて約5時間の旅であつた。日本人からすれば、かなりの長旅であつたが、大陸国家であるロクシアーク側からすればそんなに長いものではなかつ

た。

むしろ彼らは新幹線の技術力のすごさに驚かされた。ロクシエにも鉄道はあり、日本の物より大型の車両を使っている。しかしながら、スピードや走行性能では日本の新幹線の方が段違いに良かったのは言うまでもない。また食堂車こそないが、車内の艤装に關してもロクシエ側を驚かすには充分だった。

さらにロクシエ側を驚かせたのは、新幹線のダイヤが非常に正確であったことだ。出発から到着まで、日本側からダイヤについて通達を受けていたが、わずか1分の遅延で終点の東京へと到着した。

ちなみにロクシエ使節団が乗った新幹線は、専用列車ではなく通常運行している「のぞみ」号の車両の一部を貸し切ったものであった。新幹線を丸々1本用意するだけの余裕は、今の日本にはなかった。

それはともかくとして、わずか1分の遅れで到着したことはロクシエ側にとって驚異的であった。ロクシエでは鉄道の遅れ、特に長距離列車では日常茶飯事だったからだ。

最も、それ以上に彼らが驚いたのは日本側の関係者が言ったこの言葉だった。

「現在は節電のために運行本数を削っていますが、通常なら現在の3倍の本数の列車が走っています。」

そう言われた時、ロクシエの担当者は開いた口が塞がらなくなつた。ロクシエでは、このような高速鉄道をそれだけ短い間隔で動かすのは技術的に不可能であった。

「いやはや。日本の技術は我が国のものとは比べ物にならないほど優れているようですね。」

ロクシエ側の担当者は、心の底からそう思い、日本側の随員に告げた。

新幹線から下車した彼らも、トリステイン側の使節団と同様日本政府が用意したホテルへと向かった。ちなみに、ロクシエ使節団にはトリステイン使節団と違って、数人の記者が含まれており、彼らがこの時撮影した様々な物はその後ロクシエの新聞紙上をにぎわすことと成る。

14日目午前中 トリステイン中部

本多聡子を団長とする日本国使節団は、順調にトリステイン国内を回っていた。使節団は輸送艦「おおすみ」で送り込まれた自衛隊の車両で移動しているが、随行するアンリエッタ以下トリステイン側の代表はもちろん最初は馬車で移動していた。

ところが、途中からアンリエッタをはじめとする数人が自衛隊の73式小型トラックと高機動車に乗り換えている。

何故かと言えば、理由は至極簡単。この両車種にはそれぞれ冷房が装備されているからだ。実はトリステインは転移した場所の関係で、気温がグンと高くなっていた。一気に真夏近くになってしまっていた。

突然の気温上昇に、トリステイン側の代表は皆移動だけで汗だくになってしまった。それに対し、日本側の使節団はさすがに自衛隊員は冷房なしの車両で我慢していたが、本多をはじめとするその他の省庁の役員には冷房付き車両を提供していた。

視察開始翌日、その車内に本多がアンリエッタを案内した。もちろん、アンリエッタが涼しく快適に保たれた環境に驚き、さらに冷房付き車両での移動を暗に希望したのは言うまでもない。

こうして、アンリエッタとルイズ、才人、そしてアンリエッタの護衛であるアニエス銃士隊長の4人は日本側の好意によりそれぞれ73式小型トラックと高機動車に分乗した。

もちろん、日ト双方から異議が出た。日本側からすれば戦闘車両にお姫様を乗せることに不安を感じたし（加えてスペースを譲って冷房なし車両に乗り換えなければならない隊員は、当然嫌であった）、トリステイン側はお姫様を得体の知れない乗り物（しかも軍人と一緒）に乗せる事に不服であった。

結局、この点に関してはアンリエッタの強い希望とアニエスが同乗することでトリステイン側が妥協した。

そう言うわけで、アンリエッタは今、護衛のアニエスを連れて本多と一緒に高機動車に乗っていた。

「それにしても、本当にこのジドウシャと言う乗り物は快適ですね。馬車より遥かに快適です。しかも、魔法を全く使わずに動いているなんて信じられません。」

アンリエッタはいたく自動車を気に入ったようだった。まあ、冷

房つきで馬車よりも安定性などで優れているのだから、当然といえは当然である。

「何度も言いますが、私たちのいた世界には魔法がありませんから。」

「しかも習えば誰でも運転できると言うのがすごい。我が軍に配備すれば、戦力は飛躍的にあっぷします。私としてはあのバイクと言う乗り物には是非とも乗ってみたい。」

と軍人視点から言うのは、護衛として乗り込んでいるアニエスだ。そして彼女の視点は、外を並行して走る自衛隊のバイクに向けられていた。馬よりも早く戦場を移動できる機動力に、彼女は心底感心していた。

彼女らの乗る高機動車の後ろには、才人とルイズが乗り込んだ73式小型トラック（新型）が走っている。

「へえ、平賀君は本当にアニメか漫画のキャラクターのような大冒険をしてきたと言うことか？」

「まあ、そんな所です。」

才人は運転をしている自衛隊員とお喋りを楽しんでいた。

「だがエルフもいるなんて、本当にこの世界はファンタジーに溢れているんだね。」

「俺も最初の頃はつくづくそう思いましたよ。まあ、今は慣れましたけど。」

久しぶりに日本人と会話しているせいか、才人の声は心なしか弾んでいた。もつとも、隣に座るルイズにしてみればあまり面白いことではないが。だから彼女は少しばかり不機嫌そうな表情をしていた。

「ねえ才人、自分ばかり喋っていないで、ちょっとは私にも話し振りなさいよ。」

「ああ、ごめん。けど、話を振るって言っても、何を話せば良いんだよ?」

「う……」

そう言われると、ルイズとしても言葉が出なかった。

「よろしければ我々が相手をしましょうか?」

困っている2人に対して、自衛隊員が助け舟を出した。

「じゃあ、日本について教えて欲しいんだけど。才人の話だけじゃ分からない所も多いから。」

「いいですよ。」

それからしばらく、ルイズは自衛隊員たちから日本についての話を聞いていた。

また他の車両ではこんな会話もされていた。

「あのお姫様、本当に綺麗ですよね。」

若い隊員（未婚）が、先輩の隊員（既婚）とアンリエッタの品定めをしていた。

「そうだな。」

「特に、胸があんなにあるなんてけしからんですよねwww」

「お前、それ絶対に言うなよ。両国の友好に絶対にヒビ入れるからな。」

「わかってますって。ここだけの話ですよ。それからあの使い魔として呼ばれた平賀君。彼も不憫ですよ。あんな、まな板の胸の娘が御主人様じゃ。」

「だから、そう言うことは言うな。」

「へーい。」

この会話は自衛隊員だけが話している車両の中で交わされており、当然当の2人どころか外の人間にはわからないはずである。しかし。

「.....」

「どうかされましたか？陛下。」

「いいえ。何か悪寒が.....」

「冷房がきつ過ぎましたか？それとも、誰かがよからぬ噂でもして

いるのかもしれないね、ククク・・・取り敢えず、少し冷房の出
力下げてもらいましょう。」

1台後ろの車両でも。

「・・・」

「どうしたルイズ？何か表情がさつき以上に険しいぞ！？」

「何か悪意ある発言をされたような気がして。」

「気のせいじゃないか？」

「・・・そうね、気のせいよね。まあ、もし気のせいじゃなかったら、吹き飛ばしてやるだけだから。」

そう言うのと、ルイズはまるで獣のような目をして不敵な笑みを浮かべた。

((女って怖いなあ!!))

14日目昼過ぎ ロクシエ連邦・首都特別地域の高級ホテル

この日、首都特別地域の二画にある高級ホテルで、また一つ歴史的な出会いがなされようとしていた。とある男女が話し合いの場を持ったのである。もちろん、それぞれ重要な地位にある人間同士で

ある。

1人はスーツを身に纏った20代前半の男性。もう1人は白を基調としたソルティス教の修道女服を纏った女性だった。

「初めまして、日本側使節団代表の荒木陣です。」

「こちらこそ、サクラス連合帝国使節団代表のアステル・ラガナンです。」

2人は挨拶を行い、握手を交わした。

「お若いですね？」

20歳代である荒木も充分若すぎるが、目の前にいる少女はどうみても20代前半か10代後半であった。

「18です。歳不相応と言われそうですが、これもメイ・・・じゃなくて聖女様の命令なので。と言っても、わからないでしょうが。」

「その点に関してもじっくりお聞きしたいです。何せ、私は貴国について何も知らないも同然なので。」

「それはこちらと同じです。ただ、ロクシエ側からの話では技術がかなり発達しているとか。だから大変興味があります。」

「それは良かった。我々としては見知らぬ世界で友好国が一つでも多く増えることは歓迎するべきことなので。」

「同感です。それじゃあ、早速話し合いと参りましょうか。時間も

限られていますし。」

この日、ロクシエ連邦を訪問していた日本とサクラス帝国の代表団は、ロクシエ首都において初めての会談を行う運びとなった。急なことであつたため、両国代表同士の正式な話し合いは1時間と短めである。その後はロクシエ主催の晩餐会が行われる予定だった。

「ああ、その前に今回の会談は音声と筆記で記録させていただきますがよろしいですね？」

「ええ。構いませんよ。こちらと同じことを考えていましたので。」
ところが、これがある意味厄介な事態を生む。

荒木は同意を取り付けると、随員を呼んで音声記録用のICレコーダーを持ってこさせた。ところが、アステルはそれを見て興味津々となった。

「な、何ですかそれは？」

「何って？録音機ですよ。正式にはICレコーダーと言います。」

「そんな小さな機械で本当に録音できるのですか？」

「もちろんですよ。サクラス帝国にはまだ無いのですか？」

「我が国でも確かに録音機材はありますが、このように小型の物はありません。すごい。」

サクラス帝国の録音機は、開発されてからまだ間がなく、大型で

しかも録音時間も短い。だから掌より少し大きい程度のICレコーダーは、彼女にとって驚き以外の何物でもなかった。

「良かったら見ます？」

「ええ。」

荒木はレコーダーを手渡した。

「すごい・・・これ、何で出来ているのですか？」

彼女は小ささや軽さにも驚いたが、レコーダーの材質にも驚いた。

「プラスチックと言う石油から作った合成樹脂です。」

「石油？」

「おや？あなたの国には石油はないのですか？地下から組み上げる油ですよ。」

「さあ？」

アステルは首を傾げた。

実はアルテースにも石油はある。しかしながら、それは地下から組み上げるのではなくそれは南部の人口湖にあるプラントで藻から製造されるものだ。そのため、後に日本語に訳された際も石油ではなく珪油と言う新語が充てられている。

「すごいすごい。我が国の技術レベルとは比較にならないわ。他に

「も何かありませんか？」

「そうですね・・・今は使えませんが、これとか。」

荒木はスーツから携帯を出して見せた。

「それは？」

「携帯電話と言います。本来は電話機なんですけど・・・」

「それが電話機！？ええ！！だって線も何も付いていないじゃないですか？」

サクラス帝国ではようやく有線電話が整備されたばかりである。ついでに言えば、ラジオも無線ではなく有線放送だ。

「ええ。そりゃ線があったら携帯なんか出来ませんから。それに、この国じゃアンテナがないんで電話としては使えません。」

「アンテナ・・・ああ、つまり電波を飛ばすってことね。へえ、ロクシエの無線機を見たときも驚いたけど・・・」

「それにこれは電話だけじゃありませんよ。例えば。」

荒木はアステルの方へと携帯のレンズを向けた。

カシヤ！

「このように写真も撮れます。」

「すごい!」

アステルはもうそれ以外の言葉が出なかった。

「ねえ、日本には他にどんなものがあるんですか？教えてください。」

「ええ、構いませんよ。ただ、話し合いもしないと。」

「教えてくれたら、話し合いを始めても良いですよ。」

結局、荒木はその後1時間、延々と日本の科学技術について語る
こととなり、外交的な話し合いはほとんど出来なかった。

荒木自身は科学が専門ではないので、話せる範囲もタカが知れて
いたが、それでも人工衛星やコンピューター、新幹線、自動車など
の話は彼女の興味を大いに掻き立てた。

一方荒木はこの話し合いから、アルテースの技術を多少推し量れ
ることが出来たのみならず、同国が持つ独自のテクノロジーについ
ても聞くことが出来、互いに全く無益と言っわけではなかった。

使節団 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

使節団 4 (前書き)

何とか書きましたが、いつもより短めです。ごめんなさい。

使節団 4

13日目午前 日本・首相官邸

この日首相官邸は緊張に包まれていた。春川首相以下内閣の面々はピシッとスーツを着こんで、ある人物たちの到着を待っていた。

官邸の周りには大勢の警察官が配置され、厳重な警戒を敷いていた。また報道の記者やカメラマンたちは、そんな警戒など気にしないばかりに、これから起きるであろう歴史的瞬間を収めようと、カメラを官邸の玄関に向けていた。

彼らが待っているのは、トリステイン王国からの使節団である。今日は午前中にトリステイン、午後にロクシアーク連邦の使節団との会談が持たれる予定であった。

ちなみに、それぞれの使節団はもう1つの使節団が会談中は東京各所を視察する予定であった。会談の順番は公平を期すためくじびきで決められ、最初にトリステイン、次にロクシエの順番となった。

そして、この3日後には3国での共同会談を行う予定であった。

内閣の面々が玄関に出てから間もなして、トリステインの代表団を乗せてきた車列が首相官邸の玄関前へと到着した。扉が開かれ、中からモンモランシ伯爵を中心とするトリステイン使節団の面々が降り立つ。

この時、一斉にテレビカメラが使節団の方へ向けられて全国のお

茶の間に中継が行われ、あるいは新聞記者のカメラマンたちがカメラのシャッターを切った。

そして出迎えた人間たちの中で、春川首相が一步前へ出た。

「ようこそ、日本国内閣総理大臣の春川響です。」

「お出迎え感謝致します。トリステイン王国使節団代表のモンモラ
ンシです。」

「遠路遙々御苦勞様でした。昨夜は良くお休みになれましたか？」

「お陰様で。」

「それは良かった。それでは、どうぞこちらへ。既に準備は済んでいますので。」

「では。」

トリステイン使節団一行は首相官邸内へと案内された。

15日目午後 ロクシアーク連邦 首都特別地域郊外 第4上級
学校

日本において、トリステインとロクシエからの使節団との交渉が行われている頃、日本からロクシエへ派遣された使節団は、サクラ

又帝国使節団の面々と共に首都郊外の学校を案内されていた。何で学校かと言えば教育施設の視察である。

当初の予定では、両国の使節団はそれぞれ別々にロクシエ政府の案内の下で、各地を回る予定であったが、サクラス帝国側の強い希望によって、合同で回ることとなった。

日本側使節団にしても、別に問題ではなかったし、むしろまだ知らないことだらけのサクラス帝国を知る良い機会であった。それにサクラス側団長のアステルがかなり強く望んだらしい。

さて、そんなわけでサクラスと日本の合同視察となったわけだが、聖女メイベルがもう一人いると言われるアステルは、ここでも昨日同様元気いっぱいであった。

「ここがロクシエの学校ですか！？私達の国とはやはり違いますね。」

「日本とも違いますよ。」

日本使節団代表の荒木がアステルに言う。

国の教育体制は、やはりお国柄が出るのか？カ国とも違う。日本の場合は小中学校の9年の義務教育プラス、高校と大学における7年の高等教育だ。その他に専門学校や大学院もあるが、オーソドックスな社会に出るまでの流れは上記した物である。

対してサクラス帝国の場合は、教育の中心は修道院である。一般常識から専門分野まで全て修道院で学ぶ。研究機関はあるが、少なくとも地球のような大学にあたる物はない。

そしてロクシエの場合は、幼年学校、上級学校、職業訓練学校、大学が存在していると荒木たちは事前に説明を受けていた。

今荒木とアステルのいる上級学校は、日本で言えば中学と高校を合わせた6年制の学校で、大学への進学を目指す比較的裕福な家庭、もしくは成績の良い学生が通う所だ。これに対して、職業訓練学校は日本で言えば専門学校に当る学校で、幼年学校は小学校にあたる組織だ。

ロクシエの場合はサクラスに比べて日本の教育制度に近いが、それでも全く同一ではない。

こうした他国（特に今回は未知の国）の文化や慣習、法律を一通り理解できなければ、とてもではないが交流など出来ない。まずは相手のことを少しでも良いから、知らなければならぬ。

「それでは、皆様こちらへどうぞ。」

ロクシエ側の担当者が荒木らを促した。

「じゃあ、行きますか。」

「そうですね。」

2人はロクシエ外務省の役人、それから上級学校の関係者の案内を受けて学校内へと入っていった。

一方、そんな日本とサクラスの使節団の様子を、窓から見ていた生徒たちもいた。実は、この日普通に授業が行われていた。確かに、平日に学校として機能している姿を見なければ分からないことも多い。

そう言うわけで、日本とロクシエの使節団は平日の生徒がいる学校の視察を行うこととなった。もちろん、授業の妨げをするわけにはいかないのです、見るのは午後の最後の授業で、しかも教室の外から遠巻きに見るだけだ。

また入校する人数も、大人数だと目立ってしまうので、それぞれ2人ずつだ。日本側の場合は代表である荒木と、文科省から派遣された1人だけである。同様にサクラス側もアステル他1名だけである。

ちなみに、この人数制限はロクシエ側ではなく日本側の提案による物であった。

それはさて置き、例え少人数とは言えやはり目立った。特に日本側はスーツ姿であったが、サクラス側は伝統的なソルティス教の服に実を包んでいたために特に目立った。

さすがに授業中であつたために、声を上げたりする者はいなかったが、視線を向けた者はたくさんいた。そしてそのまま、授業終わりの鐘になると、口々にお喋りを始めた。

その中でも特に元気を有り余らせている人間がいた。授業が終わった直後、1人の少女がリア、トレイズ、メグ、そしてセロンのいる教室へと走り込んで来た。

「メグミカ！セロン！」

そう言ってリリアとトレイズの教室に駆け込んできたのは、新聞部部長のジェニー・ジョーンズだ。

「どうしたんですかジェニー？」

「あなた達は見た？異世界人！」

異世界人とは、もちろん日本とサクラスの使節団のことだ。

「ああ、チラツとだけどね。教室の様子を見ていったようだったけど。」

「それがどうかしたんですか？」

「どうかしたじゃないわよ！異世界人がすぐ側にいるのよ！これは大スクープよ！我等が新聞部の出番よ！！と言うわけで、すぐに部屋に来なさい！！まだ学校のどこかにいる筈だから、写真の一枚位撮らなきゃね。」

好奇心旺盛な彼女らしい発言だった。

一方、常に冷静なセロンはジェニーに質問した。

「僕たちだけでか？ラリーやニックは？」

彼は他の新聞部のメンバーについて訪ねた。すると、ジェニーは両手を広げて言った。

「ちよつと今は無理そう。だから、あんたたちだけでも来なさい。あ、待てよ。だったら、リリアにトレイズ！」

「「え！？」「」

「暇だったら手伝って。特にトレイズはカメラ扱えたでしょ？」

「まあ、別に良いけど。リリアはどうする？」

「そうね。私も異世界の国の人を見てみたいし。いいわ、手伝ってあげる。」

「ありがとう。」

10分後、5人はカメラ片手に使節団がどこに行ったのか探していた。

「どこ行っちゃったのかしら？」

「もしかして、もう帰ってしまったのでは？」

メグが言う。

「ええ！」

「まあ、こんな学校の視察にそう大した時間を取る筈もないしね。メグミカさんの言ったとおりかも。」

トレイズまでそんな事を言う。

「せつかくスクープが撮れると思ったのに。」

ジェニーが顔を膨らませる。

「まあまあ、もしかしたらまだいるかもしれないわ。とにかく、もう少し探して見ましょう。」

「そうです。リアの言うとおりです。」

メグも笑顔で言う。

「だそうだよ。トレイズ。」

「わかったよ。」

セロンに言われ、トレイズは苦笑いした。

「それじゃあ、がんばって探すわよ。」

「ちょっと！危ないわよ。」

前を良く見ず、角を曲がろうとしたジェニーにリアが言った。しかし、手遅れだった。

ドンー！

「キャー！」

ジェニーは角の向こう側にいた誰かにぶつかり、転んでしまった。

「いたたた・・・」

「大丈夫かい？」

当った相手がジェニーに言う。

「ええ。大丈夫・・・」

ジェニーは立ち上がろうとし、相手の姿を見たが、驚きのあまり言葉が途切れてしまった。そこにいたのは、スーツを着た若い男だった。別にそれだけなら教師の可能性もなくはないが、そのすぐ側に見慣れぬ格好をした女性や、彼女も良く知る歴史の教師、そして役人と思われる男性が立っていた。これを見て、目の前の人物が誰であるのか、彼女は直に悟った。

そこへ、リリアたちが追いついてきた。

「ジェニー、大丈夫？・・・え？」

「どうしたんですか？・・・ええ？」

「メグミカさん、どうかしました・・・て、ああ！」

「何？・・・て、あ！」

5人は目を丸くした。

「ええと、こちらの生徒さんですか？」

ジェニーとぶつかった相手は、側にいた教師、ヴィルヘルム・シユルツに尋ねた。

「ええ・・・そうです。」

「じゃあ、初めまして。ロクシエの学生の皆さん。日本国使節団団長の荒木陣です。」

さらに、側にいた女性が名乗った。

「サクラス帝国使節団団長のアステル・ラガナンです。」

使節団 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

さて、実は本来だったらトリスティンで自衛隊が戦闘を行うシー
ンを書くつもりでした。ところがリアルが忙しくて構想がまとまら
ず、さらにいくつかの設定を考え迷ってしまい、結局今回はパスし
ました。

本当にごめんなさい。

使節団 5 (前書き)

とにかくこのシーンだけは書いておきたかったので、余った時間を総動員して書きました。ちなみに作者はそこまでカメラに詳しくないので、変な描写があったらごめんなさい。

使節団 5

15日目午後 ロクシアーク連邦・首都特別地域郊外 第四上級
学校

リリア、トレイズ、メグ、セロン、そしてぶつかつたジェニーも
啞然としてしまった。探していた異世界人とこの様な形で出会った
こともそうだが、相手が非常に若く、しかも気さくに挨拶してきた
のだから尚更であつた。

「ええと、つまりあなた達が異世界人さん？」

ようやくリリアが言葉を紡いだ。

「そう言うことかな。それよりも君たちは、カメラを持っているけ
ど、どうして？」

「彼らは新聞部の部員ですよ。あ、違う人も混じってますけど。」

荒木の質問に、教師であるヴィルが答える。

「新聞部ね。ちゃんと部活もあるんですね。そう言う所は日本と変
わりませんね。」

「そうですか。おっと、君たちお客様の前だ。ちゃんと挨拶しなさい。」

ヴィルが5人に促す。

「あ、はい。3年生のリリアーナ・シユルツです。初めまして。」

「同じくトレイズ・ベインです。よろしく。」

「シユトラスキー・メグミカです。初めまして。」

「セロン・マクスウエルです。よろしく。」

「新聞部部長のジェニー・ジョーンズよ。初めまして、異世界人さん。」

5人がそれぞれ自己紹介した。

「それで、カメラ片手に新聞部という事は、さしずめ私たちのことを撮ろうとしていたって所かな？」

荒木が言う。凶星であった。

「まあ、そんな所です・・・あ！？カメラ大丈夫かな？」

ジェニーが手に持ったカメラを確認する。さっきぶつかった際に壊れたか気にしているようだ。

「ふーん。また随分古臭い型のカメラだね。」

と荒木が何気なく言うが、ジェニーが不満をぶつける。

「失礼を承知で言いますが、これ最新式のカメラなんです。」

「ああ、そうか。この国じゃ、まだフィルム式が全盛だった筈だね。」

「じめんじめん。」

荒木がそう言うと、アステルとヴィルがクスリと笑った。

「パパ、どうしたの？」

それに気づいたリリアがヴィルに尋ねる。

「いや、ちょっとね。」

「パパ？あ、娘さんだったんですか？」

荒木がそこに反応した。

「ええ、そうです。リリアは僕の娘です。」

「あ、だから名字が同じシュルツだったんですね。」

親子が同じ学校に教師と生徒でいる事例は別に珍しいことでも何でもない。彼はリリアとヴィルを見比べた。

「確かに、目元や髪の色がそっくりだ。長い髪も可愛いですね。」

「ありがとうございます。それよりも、パパはどうしてさっき笑ったの？」

「僕も君たちと同じ様なことを言われたからだよ。」

「「「え！？」」」

「私の国じゃフィルム式のカメラは廃れちゃってね、君達の持っているようなカメラを使う人はいるにはいるけど、極稀なんだ。」

「じゃああなたの国、日本ではどんなカメラを使っているんですか？」

トレイズが訪ねる。彼は母親がカメラ好きであるため、それなりに興味があるようであった。

「今はこんなのしか持ってないんだけど。」

荒木はスーツのポケットから小型のデジタルカメラを出した。もちろん、リリアたちにはそれが何であるのかわからない。

「それがカメラなんですか？」

「うん。安物だけだね。デジタルカメラて言うんだ。」

「安物？そんなに小さいのに！？」

ジェニーが素っ頓狂な声を上げる。

確かにロクシエにも小型カメラはある。しかしながら、それは特殊な用途に限られ、当然値段も高価だ。それに対して、日本の小型カメラは安物だと言う。

「信じられない。」

ジェニーの驚きの声に、アステルが同意する。

「私も最初驚きました。しかし、事実ですよ。日本の技術力はすごいものです。」

「いえいえ、聞けばサクラス帝国にも誇れる物は沢山あるじゃないですか。我が国よりも先を行っている部分だってありますし。」

「いえいえ、日本に比べればまだまだですよ。」

「あの、それどうやって使うんですか？」

興味を持ったジェニーが聞く。

「うん？使う時はまず電源を入れて。」

荒木はデジタルカメラの電源を入れる。すると電子音と共にカメラの電源が入った。

日本人からしてみれば見慣れた光景だが、リリアやアステルからして見れば新鮮な光景だ。電源が入り、読み込みが終わって写せるようになったのを確認した荒木は、ジェニーを呼ぶ。

「これでは被写体に向けるだけ。」

そう言うと彼は、カメラの後ろに付いているディスプレイを彼女に見せる。

「な、何これ!？」

再び驚きの声を上げるジェニー。小さなディスプレイとそこに映るカラーの動画は、驚愕以外の何者でもなかった。

そんな彼女を余所に、荒木はシャッターを切った。デジカメからシャッター音が鳴り、今撮った写真がディスプレイに現れる。

「う、嘘！？カラーだ！？しかも綺麗！？」

再び驚きの声を上げるジェニー。小さなディスプレイとそこに映るカラーの動画は、驚愕以外の何者でもなかった。

そこに写っていたのは、適当に被写体として選ばれたリアの姿だ。他の4人もディスプレイを覗き込んだ。

「うわあ！」

「綺麗です！」

「すごい！」

「へえ。」

「すごい！？…あれ、けど焦点やシャッタースピードの調整は？」

ジェニーが首を傾げた。ロクシエのカメラはオートフォーカス機能がないため、シャッタースピードなどは全て手動で調整しなければならぬ。だから荒木が何もせず、シャッターを切ったことに彼女は違和感を感じたのだ。

そしてまたも、荒木は彼女にとって驚くべき発言をする。

「それはカメラが自動的にやってくれるから。まあ、手動で調整出

来るカメラもあるけど、私はそこまでこだわらないから。」

「自動で！？すごいすごい！！そんなカメラがあるなんて！是非とも1台欲しいわ。」

ジェニーは感嘆の声を挙げた。また、この時トレイズは小声で「母上も欲しがりそうだな。」と呟いていた。

「そうだね。さすがにこれをあげる事は出来ないけど、国交が結ばれれば君たち1人に1台くらいプレゼントしても良いかもね。」

「私たちにもですか？」

「ああ。ここであつたのも何かの縁かもしれないし。一期一会という言葉もあるしね。」

「それはどう言う意味ですか？」

本好きなセロンが反応した。

「簡単に言うと、今あなたと出会えたこの瞬間は一生に一度しかない大切なことだから、この瞬間に出来る限りのことを相手にすることかな・・・あ、けどカメラだけ渡しても意味無いな。充電器やプリンターも必要になるしな。そもそも電圧が違うだろうから、簡単には使えないだろうな。」

「それにしても、日本はすごい技術を持っているのね。」

「他にもどこでも持ち運べる電話とか、人工の月（人工衛星のこと）とか、掌サイズの録音機とか、音速で飛べるジェット機なんてもの

もあるらしいわ。」

先に話を聞いていたアステルが言う。

「そんな物が本当にあるんですか!？」

今度はトレイズが驚愕する。

「まあね。」

「音より早く飛べる飛行機なんて、信じられないわ!」

飛行機好きのリリアはそこに喰いついた。

「けど、日本がもといた世界では音速超えなんて60年近くも昔に成し遂げられていたことだしね。まあ、プロペラ機しかない国と比べるのが、そもそもの間違えか。そう言えば飛行機と言えば、ちょっと挨拶しただけだったけど、先日首都までの護衛を勤めてくれた空軍の女性パイロットも、シュルツと言う名字だったよな・・・」

「え!？」

ヴィルとリリアが反応した。

「確か、少佐で名前はアリソンだったよな。もしかしてお2人の知り合いですか？」

「妻(母)です。」

さすがにその答えに、荒木も固まってしまった。

「・・・世間は狭いな。」

荒木は笑いながらそう答えるしかなかった。

その後、少しばかりアステルも交えてそれぞれの国についての情報を交換したが、時間が来てしまい荒木たちは上級学校を後にした。

「それじゃあ皆さん、楽しい学生ライフを。それから、いつになるかわかりませんが、国交が結ばれたら、是非とも日本に招待しますよ。」

と、彼は言い残していった。

この言葉を、リアアやトレイズたちはあくまで社交儀礼の言葉だと思った。

使節団 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

使節団 6

16日目昼 トリステイン王国中部 とある寒村の郊外

「3時方向に敵だ！！火力を集中しろ！！」

ダダダ・・・

ババババ・・・

指揮官が叫ぶと、自衛隊員が命令された方角に小銃や機関銃を指向させる。そして、引き金を引いて発砲する。辺りには発砲音が響き渡り、さらに発砲による硝煙が立ち込めている。

「さ、皆さんはこちらへ。」

攻撃を行う自衛隊員がいる一方で、非戦闘員を逃がそうとする自衛隊員もいた。そしてその非戦闘員と言うのは、アンリエッタ女王たちと日本の使節団の面々だ。

「全く、どこのどいつだ！陛下を襲うなどという蛮行に及んだのは！！！」

アニエス銃士隊隊長が激昂する。彼女は現在銃士隊の先頭に立って迎撃戦闘中だった。

「全く、誰よこんなことをするのは！？」

ルイズも頭に血を昇らせていた。こうした事態はこれまでも何

度があつたが、それでも慣れれるものではなかつた。

「今はそんなことよりも、早くこの場から逃げる方が先決ですよ。流れ弾でも受けたら堪りませんから。ククク・・・」

と比較的冷静に話すのは、日本側使節団代表の本多だ。

「あなた本当に嫌になるくらい冷静ね。」

ルイズが言う。

「どんな時でも冷静になれなければ、とてもやっていけませんからね。ククク・・・それに、どうやら自衛隊の方々になんとか鎮圧できそうですし。」

本多が少しばかり振り返りながら言う。確かに、自衛隊員たちはその火力を持って襲ってきた連中を押し返しつつあつた。

今回女王と日本使節団一行に襲い掛かつたのは、メイジと平民の連合と思われる50人程度のグループであつた。彼らはまず道を丸太で塞いで車列を止め、そして最後尾の王室専用馬車、続いて護衛の銃士隊の順に襲い掛かつた。

当初自衛隊側は、戦闘に巻き込まれることを警戒して遠巻きに戦闘を見ているしかなかったが、相手はその内自衛隊や日本使節団の方へも攻撃し始めた。こうなっても、戦わざるを得なかつた。幸い、この部隊は明らかな敵に対しては積極的な防衛を許可されていた。

「止むを得ん!!!反撃せよ!!!全火器使用自由!!!兎に角敵を寄せ付けるな!!!」

こうして自衛隊による全力反撃が開始された。隊員たちが持つ89式小銃、車載の12.7mm重機関銃やMINIMIが一齐に火を吹いた。

もちろん、小銃や機関銃による弾幕は相手を怯ませるに充分だった。と言うより、そんな物を知らない敵は伏せるなどの対抗策を取らなかったもので、まともに銃弾を喰らうこととなり、バタバタと倒れた。

敵の中には甲冑を着けている物もいたが、そんな物では小銃に抗することさえ出来なかった。他の人間同様蜂の巣にされてしまう。

その後、自衛隊は一時的に敵の攻撃が小康状態になった所を見計らって、戦闘に関係ない人間を離脱させた。そして才人やルイズ、アンリエッタたちは無事に避難し、遠巻きに戦闘を眺めた。

「やっぱりすげえな、自衛隊は。俺の出る幕がなかったぜ。さすがだな。」

才人が関心しながら言う。才人もこれまで幾多の死線を潜り抜けてきた戦士だが、本職でしかも近代装備に身を固めた自衛隊の戦闘には、やはり一目置かざるを得なかった。

「あれが才人さんの国、ニホンの軍隊の実力・・・恐ろしいです。」
アンリエッタは自衛隊の実力を見て啞然としていた。

「あ！敵が『ゴーレム』を出してきたわ！」

戦闘を観察していたルイズが叫ぶ。敵にはどうやら『土』系統のメイジがいるらしく、数体の『ゴーレム』の姿が見えた。

「多分、あれ位なら大丈夫だよ。」

才人が気楽に答える。

彼の言うとおり、自衛隊に向かって襲い掛かった『ゴーレム』はあっと言つ間に重機関銃などによって破壊され、全滅してしまった。さらに、拳句敵は竜を出してきた。

「ちよつと！竜騎士はさすがに・・・」

とルイズは言いかけた所で、彼女はかつて見たのと同じ光景を目にした。自衛隊員は目の前に竜が現われた途端、躊躇することなく携帯無反動砲を発射して、一撃で竜を乗っていた人間ごと爆砕してしまった。

「は、『破壊の杖』!？」

「いや、ありやそれよりも新型だから、もっと威力があるはずだな。それにしても、グロイ光景だな。」

戦闘になれた才人が冷静に突っ込む。ちなみに、彼の後ろでは本多を除く日本使節団の面々が凄惨な光景に吐いていた。

一方、無反動砲を撃った側はと言つと。

「ありや!？案外あつけなかつたな。」

「どこかの小説で、竜の鱗がトンでもなく硬くて、対戦車ミサイルでも歯が立たないとか書いてあったのに、これじゃあ拍子抜けだ。」

無反動砲を受けて文字通り爆砕してしまった竜を見て、自衛隊員たちはそんな会話を交わした。

ハルケギニアの竜はそこまで頑丈ではない。何せ、ゼロ戦の7.7mm機銃でも落とせるレベルなのだ。だから12.7mm重機銃でも充分に対抗出来る。だから対戦車無反動砲などは、この場合過剰でしかなかった。

そしてそれから間もなくして、戦闘は終わり、銃声が止んだ。ここまでの戦闘の様子を、アンリエッタからトリスティン人の面々は啞然もしくは呆然とした表情で見ていた。まあ、メイジや竜まで含んでいた敵を、魔法も使わず短時間で撃退してしまったのだから、当然と言えば当然である。

ちなみに、才人は自衛隊の実力に感心した表情、本多は相変わらずの冷静に笑みを浮かべたままで、そして他の日本側使節団の面々は、初めて味遭う戦場の空気に恐怖しながら一連の戦闘を眺めていた。

銃声が止んでからしばらくして、才人らの所に自衛隊員がやって来て言った。

「敵は撃退しました。もう安全です。どうぞこちらへ。」

自衛隊員に案内されて、一行は隠れていた場所から街道上へと戻る。

自衛隊の車列は彼らが逃げる前と変わらないように見えたが、どの車両も硝煙で煤け、辺りには薬莖が散乱している。

また車列の一番後方にいた王室専用馬車は炎上し、さらに銃士隊には死傷者が発生していた。

「これはまた、手ひどくやられましたね。」

アンリエッタが呟く。慣れたと言うわけではないが、彼女は目の前の凄惨な光景に最早臆する人間ではなかった。すると彼女の元へアニエスが走ってきた。

「陛下。どうやら襲って来た連中は陛下の暗殺を凶ったようです。現在部下の一部を分派して追跡させています。」

「でしょうね。王室専用馬車がいの一に狙われたようですから。」

冷静な本多が、激しく炎上もはや燃え尽きる寸前の王室専用馬車に目をやる。

「どうやら相手は、女王陛下が馬車から自衛隊の車両に乗り換えているのを知らなかったようですね。」

本多の言葉にアニエスも頷く。

「不幸中の幸いです。しかし、負傷者が多数発生しています。」

「でしたら、私が治療します。」

アンリエッタが杖を取り出して言う。さらに、自衛隊員も応える。

「我々も出来る限りのことをしましょう。」

こうして負傷者に対する治療が始まった。ちなみに、ここで自衛隊員は『水魔法』のすごさに感嘆することとなる。逆にアンリエッタやアリエスは、自衛隊員が使う様々な治療器具や薬、治療法に驚くこととなる。特に心肺停止に陥った銃士隊隊員をAEDと人工呼吸で蘇生させたのは、先ほどの戦闘並みにアンリエッタらを驚かせた。

「日本と言う国のすごさと恐ろしさを垣間見た気がします。」

一連の作業を終えた時、アンリエッタはそう零した。

負傷者の治療と、遺体の収容、さらに倒木の除去を完了させると車列は再び動き始めた。この後一行は予定を変更する。まず、女王と使節団は陸自が無線で呼び寄せた海上自衛隊のヘリでトリスタニアの王城へと送り、その身の安全を図った。

一方残された自衛隊と銃士隊、さらには才人とルイズたちはこの日は野営して一晚を過ごすこととなる。

この日女王に対する襲撃を行ったのは、この近くに領地を持つ領主の1人であった。その目的は、案の定アンリエッタが行う外交策への反発と、彼女の影響力の低下を見計らったの反乱であった。

この事実は捕まった捕虜の口からその日の夜には明らかとなり、翌朝その領主は急行した銃士隊（さらに才人とルイズ）らの手で捕まることとなる。

なお、その際偶然にも近くに居合わせた自衛隊が、偶発的に戦闘に巻き込まれ、領主の捕縛に一役買ったと言う。

しかしこの女王襲撃事件と、それに巻き込まれる形で自衛隊が戦闘を行ったことは、当然ながら後々課題をもたらすこととなる。

使節団 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

問題、問題。さらに問題。(前書き)

なんとか、ノリで書きました。短くてすみません。

問題、問題。さらに問題。

18日目朝 日本・東京 首相公邸

「戦闘を行ったって！？それで被害は？」

防衛大臣が持ってきた情報に、春川首相が声を荒げて問いたです。彼のセリフにあるとおり、その情報とはトリスティンにおいて、現地へ派遣した陸上自衛隊1個小隊が戦闘を行ったと言う物だった。

ちなみに、今はまだ閣議が始まる前で、春川は公邸の自分の部屋におり、部屋の中には防衛大臣と外務大臣、そして春川と幼馴染である小泉副首相の3人だけいる。

「まだ断片的な情報しか入ってきておりませんが、現在の所死傷者は確認されておりません。」

石川防衛大臣も情報を受け取って時間が経過していないのか、少々焦り気味であった。

「全く、ようやく落ち着いてきたかと思ったら、また問題発生かよ。」

「まあ、発生してしまったものは仕方ありません。取り敢えず、より詳しい情報を待ちましょう。それから、今回の件が外に漏れないようにしなければいけません。」

小泉副首相が冷静に言う。

「だな。防衛大臣と外務大臣、より詳しい情報の収集を急いでくれ、くれぐれも今回の件が漏れないように。万が一野党の連中にもバレたら後が厄介だからな。」

「心得ています。」

石川が神妙な面持ちで返す。

「で、ロクシエの方でも問題が発生したのか？」

石川との会話を打ち切り、春川は木戸外務大臣の方へと顔を向ける。

「問題と言うよりも、現地へ派遣した使節団長の荒木特使より要請が来ています。例のサクラス帝国への早急なる特使派遣を求めています。」

サクラス帝国に関する情報は、既にこれ以前にも荒木特使らから外務省を経由し、春川ら内閣のメンバーにも伝えられていた。最初は同国に関する情報だけであったが、昨夜あたりから特使の派遣を求める嘆願が入り始めた。

実は、これはロクシエ訪問中の荒木と行動を共にしているサクラス側得しアステルが強く希望したためであった。彼女としては、逸早く日本のことを本国に伝え、さらに国交を結ぶ方向へ行って行きたいのだった。

もちろん、春川らはそんな事情知らない。

なお、日本政府としてはサクラス帝国への特使派遣の計画は一応

立案されてはいたが、目の前の問題や足元の問題の解決が優先されているため、まだ具体的な話し合いには入っていなかった。

「うーん。どっちにしろ俺一人で決められる問題じゃないな。これから行われる閣議で話し合おう。ただ、これは個人的な意見だが、向こうから交流を求めてきているのなら、出来るだけ早いうちにパイプを作っておくのは悪くないことだと思う。だから荒木特使の要請にも応えてやりたいところだが、外務省としては可能か？」

「もちろん、不可能ではありません。若い外交官の中には、見たことも無い国に日本人として初めて赴くことを光栄に感じている者も多いようですから。人選には困らんでしょう。荒木特使が知らせてきたところによれば、サクラス帝国は非常に友好的みたいです。」

「しかし、そんな推測の情報だけでは不十分だ。外交官の身の安全を考えるなら、せめて移動には自衛隊を出すべきだろう？」

そう言うのは石川だ。

「それはそうだが。」

木戸の表情が少しばかり面白くなさそうなものとなる。

「そうした細かい点についても閣議で話し合おう。やれやれ、トリステインとロクシエからの使節団を上手く持て成せたと思ったら、次から次へと・・・」

春川は一瞬頭を抱えなくなった。彼が率いる日本政府が解決すべき問題は、まだまだ山のようにあるのであった。ちなみに、先日から日本を訪れているトリステインとロクシエの使節団は、この日は

東京から新幹線に乗り、新青森・青函トンネル経由で北海道へと出向いており、東京にはいなかった。

この1時間後、この日の閣議が始まるのであるが、その最中のお昼前にトリステインからの続報がもたらされた。そこに書かれていたのは、あくまで自衛隊はアンリエッタ女王を襲おうとし、自分たちにも襲い掛かってきた武装集団に自衛戦闘を行った旨と、トリステイン政府からの軍事援助の要請であった。

「トリステインの政情はそんなに不安定なのか!？」

春川も思わず声を上げてしまった。

「現地使節団の報告に拠れば、女王直卒の軍隊が弱体化しているのが原因だとのこと。かの国は中世ヨーロッパの領邦制をそのまま採用していますから、中央政府の力が弱いようですよ。」

木戸がレポートを捲りながら報告する。

「それで軍事援助の要請か・・・防衛大臣、あなたの意見を聞きたい。」

「はつきり言えば軍事援助などすぐには無理です。確かに武器輸出はここ数年で緩和されましたが、トリステインがどんな兵器を求めているかわかりませんし、承知の通り、大規模な支援となりますと法改正が必要です。さらに言えば、中世の科学力しかもたない人間に近代兵器を渡したところで、役にはたたんでしょう。兵士の教育から必要です。」

確かに、現状で武器を渡した所で猫に小判、豚に真珠にしかなら

ないのは素人にだってわかる。

「それに、現在我が国で造っている兵器をそのままの値段で買える国なんてないと思いますよ。特に、これまで確認された中で最も小国のトリステインの場合は。」

よく知られているとおり、日本製の兵器は調達価格がべらぼうに高い。生産量が少ないためや、パテント料が高くつくためだ。これによって億単位の損失が出て、メーカーと防衛省の間でトラブルになった位だ。

ちなみに、後にこの世界に現われた国の調査が全て済むと自衛隊の使っている兵器がいずれもオーバースペックであるとわかり、自衛隊はスペックダウンした廉価版の新たな兵器の開発を行うことになる。

「ようするに、どっちにしろ直には応えられないってことだな。」

春川の言葉に、石川が頷く。

「あとは安全保障条約を結び、自衛隊を進出させる手もありますが、野党が黙ってはいないでしょう。ただし、現状から見れば世論は指示するでしょうし、文官で言う私が言うのも何ですが、日陰者扱いされてきた自衛隊としても、喜び勇んで出動するでしょう。」

「ですが、他国への進駐はその他の国や在日米軍などを刺激します。それに、現在進んでいるロクシエやサクラス帝国との関係を壊すことになりかねません。慎重に行くべきです。」

石川の言葉に、木戸が慎重論を唱える。さらに財務大臣が続ける。

「私も外務大臣に賛成です。予算の観点から言っても他国への自衛隊出動となれば、相当な予算を喰います。既に各種統制への補償や資源開発に臨時予算を計上しているのです。ロクシエのように見返りが見込めなければ、そんなこと許されるわけがありません。」

「だがね、親日的な政権がせっかく出来たのにそれを倒されては国防上マズイ。」

そんな3人を見て、小泉が宥める。

「まあまあ。この問題に関してはすぐに決められる話ではありませんし、現地の情報も不足しています。ですから、いざと言う時に備えて計画だけは練っておいては如何ですか？ 具体的にどうすすめるかについては、使節団が戻ってからでも良いでしょう。」

「副首相の言うとおりだ。各大臣の言葉はわかるが、今の日本には出来ない事もある。とにかく、防衛大臣は軍事援助に関する研究を。法務大臣は法改正に関する研究。外務大臣は情報収集につとめ、国際関係の観点からの研究を頼む。財務大臣は、予算の試算をとりあえず行ってくれ。ただし、あくまで研究であることを忘れないように。」

結局、午前中の閣議は結局それで終了となった。

「やれやれ。これじゃあ気が休まる時がないや。」

昼食後小泉副首相ともわかれた春川は、久々にわずかではあるが1人静かな時間を過ごそうとしていた。しかしながら、その希望は直に打ち碎かれることとなった。ポケットに入っていた電話が振動

する。

「うん？春日かな？」

妻からの電話かと思い、ポケットから携帯を出してディスプレイを見る。

「あれ？珍しいな、この人から電話が掛かってくるなんて。」

春川はボタンを押して、電話に出た。

その直前、彼の携帯のディスプレイには1人の人物の名前が出ていた。日高舞。

問題、問題。さらに問題。(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たなる（物語への）参戦者

18日目録 日本・東京首相官邸

春川は携帯電話を取った。

「もしもし？春川ですが？」

「ヤッホー！元気してるキヨン君？ああ、今は春川首相閣下か。」

電話の向こうから聞こえてきたのは、同年代の女性の声だ。春川はその声を聞いて内心少しばかり喜ぶと同時に、苦笑していた。

「冗談はよして下さいよ、舞さん。」

「ごめんごめん。ちょっとからかってみたくなってね。」

相手がクスクス笑う声が聞こえてきた。しかし、春川はそれを不快には感じなかった。むしろ心地よさを感じた。

電話の相手は日高舞。春川から見て1歳年下で、かつてトップアイドルであったと言う変わった経歴を持っている女性だった。春川とは10年ほど前に、アルバイトを通して知り合った仲だ。

「全く変わりませんね、あなたも。それで、いきなりなんですか？突然電話してきたりして。」

「うん？そうね、まずは応援かな。お仕事お疲れ様。キヨン君も大変ね、こんなことになっちゃって。体の方は大丈夫？毎日官邸に缶

詰みたいけど?」

「お陰様で、何とかやっています。休みがないのはつらいですけど、今政府の機能が止まれば冗談抜きで日本が死んでしまいますので。まあ、やれる範囲でがんばっています。」

「そう・・・けど、まあ。あなたなら、なんとかしてくれるでしょうね。」

舞の楽観的な言葉に、春川はまたも苦笑する。

「何でそう言い切れるんですか?」

「だってあなた、10年前私とアルバイトしていた時だって色々厄介なことに巻き込まれていたけど、なんとか切り抜けていたじゃない。だから今回も大丈夫でしょう。それに、あのハチャメチャな春日さんを嫁にした図太い神経を持っているし。」

(ハチャメチャはあなたもですけどね。トップアイドルになったのに16歳で娘産んで、電撃引退しかと思ったら、29歳で娘のアイドルデビューに合わせてアイドルに復帰したんだから)

心の中で溜息を吐きながら、春川は会話を進める。

「とにかくがんばりますよ。そちらこそどうですか?確かアイドルに復帰して、そのまま今も愛ちゃんと一緒に活動を続けているんですよね?」

愛ちゃんとは舞の娘の日高愛のことだ。

「一応ね。けど今日日本がこんなことになっちゃったでしょ。おかげで私も娘も、知り合いのアイドルも含めて皆開店休業状態よ。テレビやラジオの仕事はほとんどないし、ライブとか公演も出来なくなっちゃったからね」

「ああ、それは申し訳ありません」

現在日本は資源節約のため様々な面で統制が働いている。テレビやラジオは電力の使用削減目的で大幅に放送時間を短縮しているし、また自動車の燃料も配給制になっている。その配給量も、公用車や公共交通機関車両を優先している結果、極端に減らされていた。

電力削減によるテレビの放送時間削減は、バラエティーなどの放送枠が減らされる要因となる。そうになると、そうした番組に出演する芸能人は職に炙れることとなる。

また後者に関して言えば、ライブや公演のために必要な機器や人員の輸送・運搬手段が絶たれてしまったことを意味している。

加えて言うならば、明日もわからない状況では、どこも積極的な策を行う筈などなかった。

「別にキヨン君が謝ることないわよ。これは災害みたいなものなんだから。」

「それはそうですが。俺は曲がりなりにも首相ですから・・・それで、今回の電話はそんな応援ためだけに掛けて来たんですか？」

「もちろん、それだけじゃないわよ。実はお願い、と言うか提案が2つあるんだけど」

「やっぱりそうですか。ま、先日の政府広報のCM作りに協力していただいた恩もありますから、出来る範囲でなら聞いてあげますよ」

「ありがとうございます。さすがキヨン君。じゃあまず一つ目ね。もう1回政府広報のCM作れないかしら？」

「もう1回ですか？」

転移の少し前、春川は舞に協力してもらって政府広報のCMを作ってもらったことがある。

「こんな国民が不安になっている時こそ、政府が国民を元気にするべきだと思うの。前回のCMだって評判良かったんでしょ？」

「ええ。何せ765プロと876プロのアイドルが総出演でしたから。お陰で内閣支持率が20%もアップしましたよ。それにしても舞さんの底力には驚かされましたよ。スーパーアイドルを出したのに、安上がりで出来たと担当者も泣いて喜びましたし。それにマスコミからも一切叩かれませんでしたし」

舞はもとトップアイドルだけあって、現在でも強いコネを業界内に持っている。765プロと876プロは現在人気上昇中のアイドル事務所だが、舞の力添えで前回のCM製作ではその両事務所からアイドルを出してもらえた。

「元Sランクスーパーアイドルをなめないでよね。で、どう私の提案は？」

春川は一瞬だけ頭の中で計算する。悪い話ではないと思った。

「内容にもよりますが、確かに今の鬱屈した空気を変えるには丁度良いかもしれませんね」

転移して3週間。状況は前に進みつつあるが、国民の不安と鬱憤はかなり大きく成りつつある。しかしながら、現状の大幅打開は未だ見込めない。そんな状況だからこそ、舞の提案はいけるかもしれない。

しかも。

「内容なら心配しないで。高木社長と石川社長へのお願いですれば、一流アイドルをすぐにも集められるから。それに、さっきも言ったとおり今皆暇しているし。マスコミ対策も私がなんとかするから。それに私も出たいしね。」

「本音はそこですか・・・まあ、良いでしょう。午後にも関係者と話し合っておきます」

「さすがキヨン君！話のわかる総理大臣で助かるわ」

「細かい話については、後日また連絡します」

「そうして頂戴。で、次のお願いなんだけど・・・」

舞の言葉を聞いた時、春川は彼女の大胆な提案に啞然としてしまった。

18日目夕方 トリステイン王都トリスタニア

王都トリスタニアにある豪華な宿が、トリステイン王政府から日本使節団に提供された宿舎となっていた。昨日予想外の戦闘に巻き込まれ、女王らと共に一足早く王都へとやってきた使節団は、団長の本多指揮の下で、これまで得られた情報を精査していた。

「この国の産業の主体は農業ですが、育てられている品種や使用されている肥料などの質はあまり高くはありません。我が国で使っているものを提供すれば、生産力は飛躍的にアップするでしょうし、さらに機械力を持ち込めばより多くの収穫も期待できます。作付け面積についても、現状で既に全国民を賄える程なので、問題はありません。」

農水省から派遣された団員が、報告する。これまでに、使節団の要望で農業や水産業の現状を見る機会がトリステイン側から提供されていた。

「ただし、どうやら元の世界での気候と現状の気候がミスマッチなので、今年の農民生産はあまり見込めませんし、むしろ早めに改善しないと今後飢饉が発生するやもしれません。」

続いて経済産業省の人間が報告する。

「経済については、中世のヨーロッパレベルのそれしか発展していません。国の富を王家や貴族、一部のギルドや商會が独占している状態です。また王政府には財務卿と言うポストがありますが、これまで得た反応から見て、現代的な経済には対応できるとはとても思えません。産業についても、家内制手工業中心で、工場での大量生

産と言う概念は全くありませんね」

また国土交通省の人間も言う。

「社会的なインフラもほとんどありません。交通網や郵便制度もありませんので、情報も荷物も届くのに時間が掛かりますね。貴族は魔法や『マジック・アイテム』を使えるようですが、それが逆に国全体の発展を阻害しているようなものです」

さらに文部科学省の人間が言う。

「教育レベルも非常に低いです。教育機関がほとんどないため、『メイジ』以外の平民で読み書きできる人間はかなり限定されている状況ですし、教育を受けている人間でさえ、かなり偏った知識しか有していません」

留めは防衛省の人間の報告である。

「軍事力も、極めて劣悪ですね。昨日の戦闘を見ても分かるとおり、その武器の主体は剣や弓、槍に加えて魔法が存在するだけです。魔法の威力は大きいようですが、現代兵器と比べれば月とスッポンくらいに差が有ります。また文科省の方の意見と合わせれば、軍事力の近代化の前に教育からやり直す必要があるでしょうね」

全員の報告が出揃った所で、本多が発言する。

「つまり、この国は総合的に見て非常に遅れていて、発展するにも時間が掛かると言うことですね。ククク・・・」

彼女の言葉に、団員たちが顔を見合わせる。そして1人が恐る恐

る意見を口にした。

「それは確かに否定できないことです。ですが魔法の一部には有益な物もありますし、まだ国内をくまなく見たわけではありませんから、有望な資源だってあるかもしれませぬよ」

「それは希望的観測です。短期的に得られる利益はほとんどないじゃないですか？今の日本に必要な物が何か、皆さんも分からないわけじゃありませんよね？」

真つ白な顔と、冷静すぎる目が彼女の恐ろしさに凄みを増させていた。

「では、トリステインとは縁を切るべきだとでも言うのですか？」

短絡的な意見ではあるが、ある意味妥当な意見が出る。日本と言う国の存亡が掛かっているこの時期に、お荷物となる国と手結ぶ必要性などない。むしろ手を切ったほうが得策と言えなくもない。

「それは無理でしょう。いまさら手を切るなど出来ません。諸外国の目もありますからね。」

「では、団長としてはどうお思いなのですか？」

「物は使いようと言うでしょ？悪い要素満載の情報だって、使い方一つで黄金に値する価値を持ちます。」

この言葉で、団員たちは何となく彼女の言わんとしているところがわかった。

（（また強請る気か！？）（）

今回の報告をトリステイン王室に突きつけて、日本側に有利な条件を引き出すことは、彼女の性格なら充分に考えられた。

実際、この後彼女が主導して技術支援などの見返りに日本の漁業基地と海上警備機構の基地設置、さらに自衛隊の駐留に関する条約が結ばれることとなる。

「強請るなんて人聞きの悪い。この報告書を使って交渉するだけです。」

（（見透かされた！？）（）

「ククク・・・」

慄然とする団員たちに向けて、本多は無気味に笑っていた。

新たななる（物語への）参戦者（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

と言うわけで、今回からアイマスネタが入ります。なお、作者は原作ゲームはやったことがなく、主に漫画や二次創作から情報を得ている人間です。

次なる一手

18日目午後日本・東京首相官邸

午後の閣議一番で、春川首相は日高舞よりあった政府広報のCM政策を提案し、あっさりと大臣たちの賛成をゲットした。彼らも閉塞感に包まれている現状を打開する方法として、認めたのである。

続いて話し合われたのが、諸島と諸島に対する処遇であった。有望な資源の埋蔵の可能性が高いにも関わらず、現状において大きな危険の存在が確認されている両島に対して如何に対応するか、さらにその両島の調査、領有に絡む形でロクシエとの外交関係や、在日米軍からの提案にどう対処するかも話し合われた。

諸島に関しては、調査部隊と共に巨大トカゲに対向する意味からどうしても護衛の軍力が必要であった。しかしながら、それを運び護衛するための護衛艦隊は既に各方面へ出払うか、本土の防衛で精一杯なので使用不能である。

残る戦力は在日米軍と第七艦隊であるが、在日米軍司令官ならびに在日アメリカ大使より出された提案、すなわち艦隊と海兵隊の派遣見返りとしての自治領の要求が問題であった。

確かに、寄る辺の無い異世界で自分たちのアイデンティティーを確保する意味から、新たな故郷を作りたいのは、春川ら閣僚たちにもわからないでもない。しかしながら、日本から見れば領土の活動、もしくは一部地域の離反と言う形を採ることとなる。

さて、明治維新以降日本から独立した地域があったかと言えば答

えはノーである。しかしながら、では独立を望む、もしくは独立の根拠がある民族や地域があるかと言えば、イエスとなる。沖縄（琉球）や北海道（アイヌ民族）、小笠原（海外移民の子孫が多い）なんかがそうである。さらに言えば、日本国内には万単位で在日韓国・朝鮮人、在日華人、日系ブラジル人などを抱えている。

下手に自治を許可して、これらの一部でも焚き付ける材料となるのはマズイどころではない。ただでさえ、元いた地球から切り離されて難しい舵取りを迫られている時期に、余計な問題を抱え込むなど論外である。

しかし、実際の所この問題は避けて通れない。少なくとも民族問題はなんらかの形で解決する必要がある。手っ取り早いのは、強制的な日本国籍への編入であり、元いた世界から切り離された現在これが一番現実的であろう。何せ彼らにとっての故郷となる国が消えているのだから。

だが現実がそうであろうと、感情的にそれを受け入れられない人だつて多い可能性がある。結局これに関しては、より深く研究する必要がある、結論は保留となった。

在日米軍に関しても、諸島への艦隊と海兵隊派遣を要請しつつ、自治領についてはその事情を理解しつつも今後協議していくと言う、日本流のお茶を濁して後回しにする以外どうしようもなかった。

また 諸島に関しては、こちらも護衛の戦力がなくロクシエもしばらくは手を出さないと見られるため保留となった。

すなわち、この議題に関しては協議や研究と言う名目の元で、決定を先送りすることしか決まらなかった。

「2時間話し込んだ結果がこれかよ！」

「まあ、難しい問題ですから仕方ありませんよ。」

と春川が嘆き、小泉副首相がなぐさめる場面もあった。

次に話題に上ったのが、サクラス帝国との外交問題である。日本はまだ直接かの国と接触したわけではなく、ロクシエ経由の間接的な接触しか果たしていない。しかしながら、その課程で得られた情報によれば、大陸国家でありトリステインよりは遙かに科学力が進んでいるらしい。さらにサクラス帝国自身も日本との早期の交流を望んでいると言う。

調査の意味からも、早急に人員を派遣するのがベストと言える。しかしながら、これから新たな使節を送り込もうとすると時間が掛かってしまう。艦船を使って移動している現状では、移動だけで3〜4日をロスしてしまう。

ロクシエ使節団の荒木からは、そのままロクシエ使節団をサクラスに派遣する案が飛び出したが、これは当然却下された。ロクシエ国内を見て回り、直にその空気を肌で触れた人間の経験と報告は貴重である。日本に戻り次第、すぐにそれを伝えてもらうべき人間に余計なことをさせている余裕は無かった。

そうになると、新しい使節団を編成し送り込むのが妥当である。そこでこんな提案が出された。

「いつそ飛行機で送ってしまうのはどうでしょうか？」

発言したのは石川防衛大臣であった。

「飛行機で送るって、ロクシエはジェット機がないんだろ？飛んでいけるのか？」

春川が当然の質問をすると、石川は得意げに返す。

「その通りです。確かに燃料の補給と整備に問題が出ます。が、逆に言えば問題はそれだけなんです。飛行場はレシプロ対応でも、大型機用の飛行場さえあれば充分です。航空自衛隊の輸送機と燃料給油機を使えば整備班と燃料ごとサクラスへの使節団をロクシエに送り込めます。そこから先は、サクラスのロクシエの使節団が帰還するのにくっついて行けば良いのです。帰りはこちらから改めて船を出せばなんとかなるでしょう。」

「その案を採用したとして、実現までに掛かる時間は？」

「そうですね、1日あればなんとか。後はロクシエ側の許可と、向こうの飛行場を使えるかどうかです。」

「よし、ならその線で行こう。防衛大臣は至急輸送機と空中給油機など、必要な物の手配を。それから外務大臣は使節団の編成と、防衛大臣と協力して飛行場の手配とロクシエ側から許可を取り付けてくれ。」

「わかりました。」

「至急取り掛かります。」

こうして、この問題に関しては一定の成果を出すことが出来、春

川も満足げな表情を浮かべた。

しかしながら、その他の問題はまだまだ山積みであり、これが翌日さらなる大問題を引起すこととなる。

同時刻日本・津軽海峡

この日、ロクシエとトリステインから日本に派遣されてきた使節団の面々は、日本政府がチャーターしたフェリーに載って津軽海峡へとやって来ていた。

早朝、東北新幹線で東京を発った一行は新青森まで新幹線を使い、その後は在来線の特急に乗り換えて青函トンネルを潜って函館へと移動した。この行程においては、時速320kmの最高速度を誇る最新型新幹線、そして日本の優れた土木技術を両国に誇示する狙いがあった。

この内新幹線に関しては、予想通り両国関係者をまたも大いに驚かせることとなった。特に新幹線初体験のトリステイン使節団は、信じられないスピードと快適な乗り心地に、それこそ度肝を抜かれる想いであった。

ただ青函トンネルについては、列車に乗っているだけでは海の下を潜ったと言う実感がわかないであろうため、わざわざ函館で一旦下車し、フェリーにのって津軽海峡を見てもらい、さらにその後工事用坑道を改造した博物館を見てもらうと言う、念の入れようであった。

「うーん。海の下にトンネルを掘るとは。エレオノール女史、どう思う?」

トリスティン使節団団長のモンモランシ伯爵がエレオノールに訪ねる。

「もはや言葉も出ません。今まで見せられてきた物もすごいこもばかりでしたが、ここまで差があると、もう笑うことしか出来ません。ついこの間までの自分がバカみたいに思えます。」

つい1月前まで、彼女は魔法こそ最高の力だと思っていたが、その考えは根本から吹き飛んでしまっていた。

「だが、これが現実なのだ。我々は彼らとどう付き合っていくべきなのか。」

「女王陛下はどうお考えなのでしょう? 国内の動きも気になりますし。」

この時点で、昨日のトリスティンにおける一軒は既に使節団の耳にも伝えられていた。

「それについては、国に帰ってからの問題だよ。我々にはどうすることも出来ない。ま、国内のことは君のお父上がいるかぎり何とかなろう。我々は今学べることを色々と学んでおかなければ。ここでは我々もただの人にしか過ぎない。」

モンモランシ伯爵が自嘲気味に言う。日本に来てからも、魔法を使えるようになる兆候は一切なく、彼らは現在平民と同じ立場に置

かかっていた。

「そうですね。それに、彼らの科学は魔法以上の力を持っています。我々はその力を真摯に学ばなければなりません。どんな苦勞をしてもです・・・もつとも、私としては魔法もそれなりに使える物だと考えています。」

性格は少々問題がある・・・もといキツイ彼女であるが、さすがに公爵家長女だけあって頭は良い。既に魔法と科学の短所と長所を見通しつつあった。

「そうだね。確かに科学と魔法を掛け合わせれば、最強かもしれないね。私としては特に医療分野に生かせると思っているよ。」

「それだけではありません。私としては『錬金』や金属加工など、数え上げれば切が無いほどに有効だと思っています。」

トリステイン使節団は、日本と自国の力の差に圧倒されはした。一方で、やはり魔法を使う者としてのプライドを捨てることは出来なかった。しかしながら、今回に限ってはそれは決して間違いではなかったのだ。

次なる一手（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

友来る

19日目朝　ロクシエ連邦・連邦首都　首都中央駅

この日朝、シュルツ家の3人（アリソンも一時帰宅中）と居候のトレイズは、ある人物たちの出迎えに、首都中央駅に来ていた。ここは首都近郊を走る路線から、連邦内各国へ向かう長距離列車が乗り入れるターミナル駅だ。つい3週間前までは、ルト二河を挟んだスー・バー・イルに向かう国際列車も走っていたが、同国の消失により列車も運行を停止している。

さて、アリソンらシュルツ親娘とトレイズの4人が駅について少してしてから、彼らが待つホームにエリテサ市発連邦首都行きの長距離寝台列車が入ってきた。

ロクシエの列車は基本的に機関車が客車か貨車を引く動力集中方式である。後に日本から技術輸出された動力分散式の列車が増えることとなるが、この時期は前者の方式の列車が当たり前だった。

それはさて置き、列車が入線し停車すると、次々とお客が客車から降りてきた。アリソンらはその中に、自分たちと会う予定の人物がいないか探す。

「いたよ。あそこだ。」

ヴィルがその人物らを見つけた。アリソンたちもそちらに顔を向ける。

「本当ね。おーい！こっちょ。」

アリソンが手を上げ、大きな声で呼んだ。すると、ヴィルは苦笑し、リリアは呆れながら言う。

「ママ、もつと場所を考えたらどう？」

「いいじゃない。これ位声を上げなきゃわからないんだから。」

と母親と娘が言い合っている間に、相手は4人に気がついて歩いてきた。1人は40代前半と思しきサングラスを掛けた男性、もう1人はリリアとトレイズの同年代と見える少女だ。

「やあアリソン君、ヴィル君、それにリリアちゃんにトレイズ、出迎えありがとう。さすがに首都は人が多いね。」

「お久しぶりです。で・・・じゃなくて、ベネディクトさん。それにメリエルさんも。」

ヴィルが目の前に現われた男、友人にしてトレイズの父親にして、イクストーヴァ王国のカー・ベネディクト殿下に挨拶する。

「お久しぶり、ベネディクトさん。フィーは元気？」

アリソンの言うフィーとは、ベネディクトの奥さん、つまりはトレイズの母親で現イクストーバ王国女王フランチェスカを名乗るフィオナのことだ。

ヴィル、アリソン、ベネディクト、フィオナの4人は20年来の親友である。ベネディクトは2人に会うため、そして息子の様子を見るためお忍びでやって来ていた。

ちなみに、この訪問は1ヶ月前に互いに決めていたものである。ロクシエの場合は「転移」による生活への影響はあまりなかったから、予定を変更する必要もなかった。

「ああ。今日も一緒に来たかったらしいが、さすがに何の理由も無く、2人とも国外にいるのは差しさわりがあるからね。俺としても残念だったけど、代わりにメリエルを連れてきたから。ほら、メリエルも挨拶しないか。」

「初めまして。」

ベネディクトの隣に立つ黒髪の少女が頭を下げ、型どおりの挨拶をする。一応形にはなっているが、どこか元気が無い。

「父上、メリエルに何かあったの？元気がないけど。」

トレイズがそつとベネディクトに尋ねる。

トレイズの双子の姉であるメリエルは、男勝りとも言える一面を持つ勝気な女の子だ。トレイズはこの世で頭の上がない女性が2人いるが、1人は恋人のリリアで、もう1人がこのメリエルである。

ちなみにイクストーヴァの王室規範では、子供は1人だけと規定されているので、姉のメリエルが次期女王として発表されており、弟のトレイズはその存在自体一部の人間以外知らない。

それはさて置き、普段とは違う状態のメリエルを見て、トレイズが不安を覚えるのは当然であった。

「ああ、実は今回の件（転移のこと）でスー・ベー・イルが消えた
だろ？だからマチルダ王女ともう会えなくなった。それ以上は言わ
なくてもわかるだろ？」

「なるほどね。」

イクストーヴァはロクシエ連邦で唯一の王室を持つ国家である。
そのため、スー・ベー・イルの王室ともロイヤル外交を行っており、
メリエルは同国のマチルダ王女を「お姉さま」と呼ぶほど仲が良か
った。

その彼女と二度と会えないとなれば、大きなショックであること
に変わりはない。

「メリエルを連れてきたのも、ヴィル君たちに会わせたいのもそう
だが、本当はメリエルの気持ち但至少でも良くなればと思っ
てな。ま、そう言うわけだからトレイズ、メリエルに優しくしてやっ
てくれ。」

「わかった。」

「頼むぞ。それにしても、元気そうで何よりだ。1人だけで首都に
行かせるは、正直心配だったが、どうやら大丈夫そうだな。リリア
ちゃんとも上手くやってるようだし。」

「お陰様で。」

久しぶりの親子の会話は弾む。

一方、リリアはメリエルと初めての会話をしていたが、メリエル

のテンションが最悪であるため、リリアとしてはどこかぎこちない会話をせざるを得なかった。

「ええと、初めましてメリエルさん。リリアーヌ・シュルツです。よろしく。」

「初めまして、よろしく。」

(うー・・・話し難い。何でこの人こんなに暗いのよ!?!トレイズの話と全然違うじゃない!!)

と心の中でトレイズに文句を言っていた。

「さ、いつまでもホームの上で話すのもなんですし、家へ行きましよう。」

「そうだね。それじゃあ、メリエル共々世話になるよ。」

「遠慮せずに楽しんでいてね。」

久しぶりに揃ったこともあって、ヴィルとアリソン、ベネディクトの表情はこの上なく明るかった。

同日日本・東京首相官邸

「何!?!国土交通大臣が倒れた!?!」

春川首相の声が響く。

「はい。先日の巡視船の事件からこの方、色々と激務続きだったので。ついに過労が祟ってしまったようで。」

小泉副首相も、めずらしく少々困り顔だ。

「全く、この大事な時にそれじゃあ困るな。」

現在の日本は大混乱の真っ只中にある。そんな時に、大臣が欠けることは当然歓迎されない事態である。

「そうは言いますが、皆本当にギリギリの所でがんばっているんですよ。首相だって、もう少し休まないと不味いんじゃないんですか？」

「転移」が起こってからと言うもの、内閣の官僚はそれこそ冗談抜きで「72時間働けますか？」状態である。むしろ今まで過労者が出なかった方が不思議である。

しかし、春川はまるで気にしていないとばかりに返す。

「俺はまだまだ行けるぞ。何せ高校時代に、あいつ（春日）に散々色々な目に遭わされて、ちょっとのことじゃ倒れない体になったからな。」

「けど、皆首相と同じと言っただけでもありませんし。それに、今後仕事が増えるのは必至です。ですから、僭越ながら新しく秘書を1人配属しました。」

「秘書を雇うのは構わないけど、ちゃんとした人間だろうか？」

「身元はちゃんとしていますから御安心を。それに直接会うことも可能ですよ？」

「じゃあ会わせてくれよ・・・なんか微妙な予感がするんだがな。」

数分後、小泉に呼ばれた新しい秘書である人物がやってきた。

「お久しぶりです、キヨン君。」

「・・・」

やって来たのは、春川や小泉と同年代の女性だった。美女と言って差し支えない。しかしその姿を見て、春川は絶句してしまった。

「何で朝日奈さんが秘書なんだよ!?!」

「やはり知り合いの方が良いかなと思ひまして。」

「お前絶対ふざけてるだろ!」

やってきた新しい秘書と言うのは、彼らの高校時代同じ部活に所属していた朝日奈みくるだった。当時は春川の妻によって強制的に部活に入れられたり、メイド服装せられたりと大変な苦勞人であった。

「あ、あの。キヨン君は私が秘書では不満なんでしょうか？」

みくるが哀しそうな表情をする。

(止めて、そんな表情をするのは。強く出られないじゃないか。)
心の中で叫ぶが、もちろん口には出さない。

そして彼は妥協する。

「不満と言うことはないけど、知り合いばかりで固まるのもどうか
と思っただけです。何か作務的な物が感じられて仕方が無い、それ
だけです。」

「なら良かったです。」

「それから、公務中は俺のことは苗字で読んで下さい。」

「え？どうしてですか？」

「キョンじゃ首相として示しが付かないからです。」

そう言うと、春川は溜息を吐いた。

「これ以上気苦労したくないな。」

絶対に不可能なことを愚痴りながらも、早速春川は書類仕事の一
部をみくるに任せるのであった。

そして、彼の願いはものの30分後には裏切られることとなる。
それは国土交通大臣の代理者が決まり、春川と会うためにやってき
ることによる。そこで顔を合わせた人物を見て、もはや春川は何も言
う気が起きなかった。

「大臣代理を勤めることとなりました長戸有希です……お久しぶり。」

やってきたのは、寡黙そうなやはり同年代の女性だった。そして彼女も、みくると同じかつての同窓生にして、同じ部活に所属していた仲間の1人だった。

春川はあり得ない現実に、頭を抱えそうになった。

「国家公務員第一種に受かったとは聞いていたけど、まさか国交省だったとはな。と言うか何でお前が大臣代理なんだよ！？副大臣がいただける、確か？」

「……皆やる気がなかったから私が代わりにやることになった。」

「何だそのいい加減な理由は！？」

今度こそ、春川は思わず叫んでしまった。

ちなみに、彼女の場合は履歴などはさて置き、有能ではあったので後に正式な国土交通大臣となる。もちろん、春川が「日本の政治大丈夫か！？」と思ったのは言うまでもない。

友来る（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

進展

19日目昼 トリステイン王国・王都トリスタニア

この日、王都に住む人々の注目はトリスタニアの大通りに向けられていた。

2日前、王宮に見たことも無い乗り物（海自のヘリコプター）が空に現われ、降りていく光景も王都の人々にとっては驚きであったが、この日直接目の前にやってきた物体は、近くで見られる分より大きな興味を引いた。

そのやって来た物体と言うのは、日本からの使節団の護衛として派遣された陸上自衛隊の1個小隊であった。

先日の襲撃事件で、使節団一行とアンリエッタ女王らは海上自衛隊が差し回したヘリでその日の内にトリスタニアへと移動したが、自動車を主体とする陸自部隊は陸上に走ってくるしかなかった。しかも、襲撃事件の首班であった貴族と銃士隊との間に起きた戦闘に巻き込まれた分も含めて、到着が遅れてしまった。

それでも、幸いにも死傷者ゼロで済んだのは不幸中の幸い、いや奇跡と言えた。

その陸自部隊の編成はバイク、自動車、トラックでありいずれもトリステインの人々が見たことのない文明の利器であった。注目を浴びて当然である。

トリスタニアに近づいた陸自1個小隊は、王宮から派遣された衛

士の案内のもと、王宮に程近い使節団が使用している迎賓館へと向かった。この際に街の中に入りトリアスタニアの大通りを通ることとなったが、これが相当骨の折れる事態となった。

王都トリアスタニアの大通りと聞くだけなら、日本で言う所の数車線分の幅の路を思い浮かべそうである。しかしながら、実際のトリアスタニアの大通りは日本人から見れば名ばかりの大通りで、幅が5m程度しかなく、そこを多くの人が行きかっている。しかもこの日は通過する異世界の軍隊を見ようとする人々で、ただでさえ狭い通りがもつと狭くなってしまった。その中を王宮派遣の衛士の案内を受けているとはいえ、通るのは大変だ。

運転する兵士は人が飛び出してこないか常に神経を払って運転せねばならず、またその他の兵士も予想していた以上の人々の数と、自分たちに向けられる好奇の視線の多さに戸惑ってしまった。

「すごい数だな。轢かないように注意しろ！」

「わかっています！」

上官から注意を受けた運転主の兵士が、真剣その物の声で答える。

「いつもはこんなんじゃないんですけどね」

「こんなに人が集まるのは、姫様が通る時位ね」

73式小型トラックに同乗させてもらっている才人とルイズが、窓の外の人々の姿を眺めながら零す。

ちなみに2人が使節団を案内していた時と同じく、そのまま陸自

の車両に乗っているのは、彼らも王宮から呼び出しを受け、便乗させてもらったからである。

「その迎賓館までは、まだ距離はあるんですか？」

のろのろとしか進まず、気を揉んでいる隊員がルイズに尋ねる。

「いいえ、もうすぐ着くわ。ただ、これだけの人がいるからね。いつもより時間が掛かるのは間違いないわね」

「帰る時もこんな感じになるのかな？ そうなったら堪らんな」

トリスタニアから戻る時の事を考えた指揮官は、それだけでげんなりとしていた。

「自衛隊も大変ですね」

あまりにもがっかりとしているので、才人が同情の言葉をかける。

「なあに。君の境遇に比べたら大したこと無いさ。しかし、本当に魔法と言うのもすごいものだね。一昨日の戦いを見て恐れ入ったよ。君もルイズさんも、凄まじかったな」

自衛隊員たちは戦闘に巻き込まれた際、才人とルイズが戦うシーンを見る機会があった。もちろんそこで見たのは、『ガンダールヴ』の力を発揮してデルフを振るう才人と、『虚無』魔法で相手を吹き飛ばしていく2人の姿だった。

「一体どこのゲームかと、一瞬我が目を疑ったよ」

「まあ、普通の人が見ればそう思うでしょうね」

「何よ才人、まるで私たちが人間じゃないようなセリフね」

「違うって。何度も言うけど俺たちの国じゃ魔法もなければ魔法使
いもないし、使い魔もないんだって。そう言うのは御伽噺とか
ラノベとかの中だけの話なのさ。だから物珍しくて仕方が無いんだ
よ」

「ゲームとかラノベとかはよくわからないけど、あんたの国に魔法
がないのとメイジがないのはわかったわ。ただ、どうしても信じ
られないのよね」

「長年常識と思い込んできたことが全否定されれば、誰だって戸惑
うものである。」

「まあ、異文化やそこに住む人々のことを理解することは難しいこ
とですから。今後少しずつ慣れていくと良いでしょう。それに日本
と貴国が正式に友好関係を結べば、交流する機会も自然に増えるで
しょうし」

「難しいだろうけど、ルイズにもいつか日本に来て欲しいから、が
んばって慣れてくれよな」

「そうよね。才人の国、ニホンに行くことを考えれば・・・」

「実を言えば、ルイズは日本に行って才人の家族に会うことを楽し
みにしている。最初は才人を引き離れた事実を前に怖がっていたの
だが、才人が「大丈夫俺がちゃんと説明するから」と力強く言った
ため、今は何も心配していなかった。」

もつとも、現状ではそれが何時になるかは未知数であったが。

トリスタニアの街の中を四苦八苦しながら通り抜け、自衛隊の車列はなんとか日本使節団に用意された迎賓館の前へと到着した。そしてそこでは、1人の人物が一行の到着を待ち構えていた。

「お待ちしておりましたよ、平賀君にルイスさん、そして自衛隊の皆さん。ククク・・・」

（（出たな！白い悪魔め！！））

外務省の白い悪魔こと、日本使節団団長の本多聡子が一行を出迎えた。その眼鏡の奥の瞳が無気味に光る。

「白い悪魔で悪かったですね？ククク・・・」

（（見透かされた！？））

以前にもどこかで見られたような遣り取りを行いつつ、冷たい笑みを浮かべた彼女は才人の元へと近づいた。

「ひ！？」

「怖がる必要はありませんよ。今は何もする気ありませんから。ククク・・・」

（ ）（ ）つまり、何時か何かするのか！？（ ）（ ）

「実はあなたの知人と言う方が先ほど来られましたね。」

「え！？俺にですか？魔法学院の誰かですか？」

「直接会って見るとよろしいですよ。ククク・・・」

そう言うと、彼女はまたも不敵に笑うのであった。

同日 日本・東京首相官邸 総理大臣執務室

「ロクシエへ派遣する機体ですが、使節団を運ぶ人間基地のC2輸送機1機と同じく整備員と交換部品を積んだ1機、それから小牧基地のKC767空中燃料給油機1機、そして護衛戦闘機として九州築城基地のF15戦闘機2機となります。」

石川防衛大臣が報告する。

「ロクシエ側がこうもあっさりと提案を受け入れてくれるとは、正直思わなかったよ。」

春川は久々に事が順調に行ったことに笑みを浮かべた。

昨日、日本政府はサクラス帝国への使節団派遣のため、同国を経由しての移動とその為の飛行場使用を求めた。もちろん時間短縮などの理由と、さらにジェット機であるため着陸するための条件が幾

つかあることも打診内容につけた。

軍用機（自衛隊機）の派遣を提案した（軍用機でなければ空中給油が行えない上に国としての責任が持てないため）ことにより、断られる可能性も高かったのであるが、意外にもロクシエ側はわずか半日でイエスの返事を返してきた。

もちろん、その返電には日本側が示した条件に合致する飛行場まで書かれていた。日本政府は早速これに飛びついたのであった。

防衛省の方でも突貫で計画を進め、使節団を運ぶための輸送機と護衛の戦闘機、また現地での整備に必要な物資と人間を運ぶ輸送機に戦闘機と輸送機に給油する給油機まで用意した。

計画ではこの部隊は九州の築城基地で合流し、そこから7000km離れたロクシエ連邦の首都郊外にある国際空港までノンストップで飛行する予定であった。もちろん、時間短縮のためである。

「向こうとしては、なるべく我が国のことを探っておきたいのでしょう。もっとも、現状でわかっている限りでは、ロクシエでは複製など不可能でしょうけど。」

「何にしる、相手が良いと言っているんだ。素直にその好意をいただいておこう。それよりも・・・」

春川の表情が急に堅くなった。彼は木戸外務大臣が持ってきた書類を手に持つ。

「まさか使節団の団長がまた俺たちの知人とはね。本当に作為的と思えないぜ。」

「しかし総理、別にこちらも総理の知り合いと知って人選したわけではありませんから、返答に困るんですけど。」

「わかつてるよ木戸大臣。だけど本当に大丈夫なのか？あいつで？」

「彼女・・・朝倉亮子に何か問題でもあるんですか？外務省の調べでは、入省以来特に問題はなく、むしろ仕事面では有能なんですけど・・・」

「うーん・・・」

昨日入閣した長戸もそうだが、春川としてはどこか釈然としない部分がある。ただし、それは政治家や外交官としての資質に関する物というより、性格面や過去のいざこざに起因する物であり、あまり強く反論できないことも事実であった。

「ま、仕方が無いか。では木戸大臣、そちらの方よろしく願います。」

「承知しました。」

「それから防衛大臣、まだ話したい事があるそうですが？」

「はい。先日出た日本の今後の軍事力整備に関する研究書です。まだそこまで煮詰めていませんが、簡単な物が本日出来上がったので提出しておきます。」

「ほう。そっちも早いな。」

「防衛省の人間は今張り切っています。何せ我々がようやく必要とされる時が来たと考えていますから。」

「それは結構。ただあまり行き過ぎないようにだけ、注意してくださいよ。」

「心得ています。」

春川は提出された研究所をパラパラと捲り目を通した。

「ふむ。やっぱり現状の防衛力ではマズイか・・・」

「その研究は、あくまで現在の日本の状況を踏まえた結果です。その点については何とも。」

「わかってるよ。しかし、短期間でよく調べたな・・・海保の武装強化の必要性・・・兵器開発の根本的な改革、質より量・・・これも課題が多いな。防衛省は引き続き研究頼むよ。ある程度まとまったら、閣議に図ろう。やれやれ、本当に休ませてもらそうにないな。」

もう何度目になるかわからないセリフを吐く春川。さすがに不眠不休ではないが、転移してこの方彼は睡眠以外碌な休みを取っていないかった。

「明日1日、いえ半日だけでも良いですから、気晴らしでもしたらどうです?」

「そうですね。キョン・・・いえ、総理は少し働きすぎです。半日ぐらいなら僕が何とかしますから、明日は休んだらどうです。」

「働きすぎはいけませんよ。」

木戸大臣と小泉副首相、さらに新しく秘書官となった朝日奈みくるが休みを薦める。だが春川は苦笑するだけだった。

「そりゃ無理だ。幾らなんでも対外的にマズイよ。それにたった半日で何ができる？そんな中途半端な休みを取るくらいなら、働いた方がマシだろ。」

そんなことを言ったとき、机の上の電話が鳴った。

「もしもし春川ですが？・・・ああ、昨日はどうも・・・ええ！！
??？」

春川の声に、部屋の中にいた4人は驚かすにはいらなかった。

進展（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

再会

19日目午後 トリステイン王国・王都トリスタニア 迎賓館

本多に案内された部屋で才人を待っていた人物は、予想していた人物とは違っていたが、才人がその行方を気にしていた人物であった。椅子に座っていた彼女は才人の顔を見るなり立ち上がり、以前と同じ笑顔を浮かべて口を開いた。

「久しぶり、平賀君。それにルイズさん。」

さらに見覚えのある少女が2人、椅子に座っていた。

「ヤツホー、2人とも。」

「お帰り。」

「春名！？それにキュルケにタバサも。」

いきなりのことに、才人とルイズは思わず声を上げてしまった。2人の前に現われた人物とは、才人の同級生にして同じようにハルケギニアに迷い込んだ高凧春名であった。

「良かった、見つかった。探したけど、中々手がかりが見つからなくて困ってたんだ。」

才人の顔に笑みが浮かぶ。

春名の搜索は才人や日本政府からトリステイン王政府に依頼をし

ていた。しかし、何分転移後の混乱を脱していない上に、さらに彼女は現在各地で公演する劇団に属しているので、通信手段が限られているハルケギニアでその行方を捜すのは容易ではなかった。

「ごめんなさい。実は私が今回のこと（転移やその後のゴタゴタ）について知ったのは先週だったの。それで平賀君に会おうと思って、団長に頼んでお休みを貰ったの。やっと昨日魔法学院に着いたんだけど、平賀君はもういなくて。取り敢えず手がかりが掴めるかもしれないと思ってトリスタニアまで来たんだけど、そしたら使節団の人たちに会えたの。」

「それはいいとして、なんであんたたちまでいるのよ?」

春名の事情は理解したが、どうしてキュルケとタバサまでいる理由がわからないルイズが2人に尋ねる。

「あら、私たちは彼女をここまで送っただけよ。タバサのシルフィードに頼んでね。」

コクコク。

キュルケが答え、タバサが頷く。

「けど、本当にびっくりしちゃった。最初トリステインが異世界に飛ばされたなんて聞いてもピンとこなかったけど、使節団や自衛隊の人に出会って本当なんだって実感しちゃった。」

「俺だってそうだよ。それで、春名はこれからどうするんだ?やっぱりすぐに日本へ帰るの?」

才人が問うと、途端に春名の表情が笑顔から困ったそれへと変わる。

「それがね、正直な所私も迷ってるんだ。そりやお父さんやお母さんに会いたいとは思うよ。けど、今日まで一緒に働いてきた劇団の人たちに悪いなとも思ってる。」

「春名は律儀なのね。お世話になった人のことを考えるなんて。」

キュルケが感心しながら言う。

「それなら才人だって同じよ。けど、春名。無理する必要は無いわ。あなただって家族や故郷は恋しいでしょ？」

ルイズの言葉に、春名は俯いた。

「まあ、それについてはあなた方の自由です。あなた達がこちらへの残留を希望するのなら、日本政府としても吝かではありません。住めば都と言つ言葉もあります。ただし、一度位は帰国して両親に元気な顔を見せてあげるべきだと思いますよ。平賀君はわかっているとは思いますが、御家族の方は随分心配しておられますから。」

それまで話を聞いていた本多が口を挟んだ。その表情は、彼女には珍しく明るい。

「はい。」

「そう言えば、日本とトリステインの交渉はあれからどうなったんですか？」

才人が問うと、途端に本多の表情が「悪魔」のそれになる。

「私たちはあくまで、相手国の実情を調査する使節団です。正規の条約はいずれ結ばれることとなるでしょう。それまではしばらく我慢して下さいね。まあ、我々なりの試案については一応提示させてもらいましたけどね。ククク・・・」

（（また良からぬ事を企んでいるなこの女・・・））

本多の不敵な笑みに、才人とルイズは内心で突っ込んだ。

「それはそうと高凧さん。あなたについては、色々と聞きたい事があるのです、今日はここに泊まって頂けますか？」

「あ、はい。わかりました。」

「お2人はこの後どうします？」

本多がキュルケとタバサに尋ねる。

「そうですね。用事も無いし、少しお喋りしたら帰ろつかしら。」

コクコク。

「そうですね。なんなら、夕食でも食べていきますか？今日は日本料理なので。」

そう本多が言った途端、タバサが目を輝かせる。

「ニホン料理？」

「ええ。」

すると才人が首を傾げた。

「日本料理って言っても、どうせ缶詰やインスタントばかりなんですよ?」

ここはトリステイン。当然ながら味噌や醤油、さらには米と言った日本料理に必要な食材は存在しない。だからこれまで、使節団は食事に関してはトリステイン王政府に全面委託していることもあり、日本料理が出ることなど有り得なかった。

日本製の料理が食べられないこともなくはなかったが、その多くは保存が利いて調理に手間を掛ける必要の無いレトルト製品に限られ、やっぱりちゃんとした日本料理が食べることは出来なかった。

2日前まで日本使節団と一緒に行動していた才人は、そのことをよく承知していた。

しかし。

「ククク・・・甘いですよ平賀君。そんな物を外国の方、特に貴族の方々に勧める筈がないでしょう?」

「ええ!?じゃあ本物が食べれるの?」

「もちろんですよ。実は護衛艦から調理兵を付けて貰って運んでもらいました。本当はアンリエッタ女王陛下らとの懇親会用に用意したのですが、陛下への襲撃事件で懇親会が中止になったので材料が

余ってしまったんですね。本土じゃ食糧不足の中でなんとか用意した材料を腐らせるわけにもいきませんから。今日の夕食は日本料理のフルコースです。」

「食べる！！」

タバサが早速食いついた。

「キュルケさんはどうですか？」

「もちろん、いただくわ。サイトの国の料理がどんなものか興味あるし。」

こうして、この日の夕食は予期せぬメンバーでの日本食パーティーとなった。もちろんハルケギニアの面々は、見たことも無い料理（一応気を利かせて洋風料理を中心にしたが）に驚き、味わったことのない味を楽しんでいた。また才人と春名は久しぶりに口にした本格的な日本料理に、日本のことを思い出し、思い出話に花を咲かせた。

ただし、はつきり言って割を食った人間、いや竜もいたが。

「お姉さま！ズルいのね！！」

シルフィードのことでした。

また、この後本多はいつも通りの不敵な笑みを浮かべてこう独り言を漏らしていた。

「公爵家令嬢と、ハルケギニアの他の国の貴族令嬢の方々との食事

なら、食事会として報告できますね。予算の無駄とかなんて言われなくても済みそうですね。ククク・・・」

20日目午前 日本・東京 某撮影スタジオ

この日の朝、春川の姿は首相官邸を離れて東京郊外にある撮影用のスタジオにあった。

「いやあ、まさかたった2日でアイドルの手配から脚本、スタジオの手配まで全て終わらせるなんて、舞さんも本当に凄い人だよな。」

昨日の午後、友人のアイドルである日高舞から掛かってきた電話、その内容はなんと政府広報用のCM撮影の準備が全て整ったというものだった。

「と言うか、俺以外の政府の人間まで抱きこめるあの人って、もう訳分からんよな。」

よく考えれば、政府広報のCMを作ろうとするならば、例え内閣で閣議決定しても関係する各部署における摺り合わせが必要となる。それを素っ飛ばして脚本から撮影、BGMなど全てを決めてしまったのだから、日高舞の影響力がわかるというものだ。

「まったくあの人も人外な部分甚だしいよな。」

思わずそんなセリフを漏らす。

「ま、それはともかくとして一応挨拶はしておかないとな。それに

先日の答えも伝えなきゃいけないし。ええと、13番スタジオでどこだ？」

春川は今日から撮影が行われるスタジオを探す。しかし初めてきたスタジオで、しかも友人に会うためなのでSPも付けずに1人で来ていたので、色々と戸惑ってしまう。

そのため、いかにも迷ったと言う感じでキョロキョロと辺りを見回していると、声を掛けられた。

「あの、大丈夫ですか？」

「うん？」

春川が振り向くと、そこには眼鏡をかけた人物が立っていた。その人物に、春川はどこかで見た覚えがあった。記憶の糸を辿り、名前を思い出す。

「君は・・・たしかアイドルの？」

「はい。秋月涼です。さつきから何をキョロキョロ見ていたんですか？」

秋月涼。最近デビューアイドルが次々と成功している新興の876プロ所属のアイドル。FVSで分けられるアイドルランキングにおいてAランクにランクされる人気アイドルだ。スタイル抜群で、その歌も評判が高い。先日とある大事件を引起したが、それでも未だに老若男女から支持を集めている。

「へえ、君がね・・・あ、すまない。13号スタジオを探している

「んだが。」

「あ、それだったら僕も今から行く所です。ええと、見かけない顔ですけど、スタジオの方ですか？」

「いいや、スタジオの人間じゃないよ。今回のCM撮影の関係者だよ。」

「そうですか。じゃあ、案内しますね。」

「悪いね。」

春川は涼について13号スタジオに移動した。

スタジオは13号以外にも何個もあったが、いずれも今は使用されておらず閑散としている。そんな中で、13号スタジオだけは活気付いていた。スタッフや沢山のアイドルらしい少女たちが動き回っている。

(これだけの雇用を生めたと喜ぶべきか、これだけしか生めなかったと嘆くべきか)

心の中で自問自答する春川。そんな彼に、涼が声をかける。

「ここが13号スタジオです。」

「ああ、ありがとう。それじゃあ、が「涼さん!!」

春川が言い終わらないうちに、誰かがとてつもなく元気の良い声をかけてきた。

「この声は？」

「あ、愛ちゃん。ちょっと声大きすぎだよ。」

涼が苦笑いしている。やってきたのは涼の同期生にしてアイドルの日高愛。春川の友人である日高舞の娘だ。彼女は可愛らしい笑顔を涼に向ける。

「えへへ。あれ、この人？」

愛が春川の実在に気づいた。

「久しぶりだね、愛ちゃん。いや、今は愛さんって呼んだ方がいいかな？大きくなったね。」

「あ！？お母さんの友達の春川さんですか？うわあ、こんな所で会えるなんて驚きです！」

「あの、愛ちゃん。知り合いの人？」

2人が親しげに話すので、涼が尋ねる。

「はい涼さん。この人は春川響さんと言って、ママの友達なんです。」

「ふーん、春川響……え！？ま、まさか……！」

名前を口にした涼が固まる。

「春川響で、もしかして首相の？」

そのセリフに、今度は春川が苦笑いをした。

「ああ。申し遅れたね。春川響だ。一応内閣総理大臣なんて肩書き
ついているけど、よろしく。」

再会（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次回辺りアイマスキャラとの絡みに一話使いそう。

ちなみに作者はアイマスについては二次創作と漫画でしかしりません。

異世界進出！？（前書き）

すみません。本当に1話丸々アイマスネタになりました。この調子だと次の話も1話分アイマスネタになりそうです。

ただし、1話辺りの容量は普段の4000文字前後から3000文字前後としています。

異世界進出！？

20日目午前 日本・東京 某撮影スタジオ

「ええ！！？？総理大臣！？どうしてそんな偉い人がここに！？と言つか舞さん、どんだけ交友関係広いんだよ！？」

秋月涼が絶叫する様子に春川は苦笑しつつ、愛に尋ねる。

「で、舞さんはどこかな？」

「ママなら今社長たちとお話しています。すぐに来ると思いますよ。」

彼女の言うとおり、間もなく舞が3人の人間と共にやってきた。

「ヤッホー、キョン君。わざわざ来てもらって悪かったわね。」

「いえいえ、こちらもちょうど息抜きをしたかったので。もつとも時間が空いたのは午前中だけですけど。午後には官邸へ戻らなければならぬので。」

「そう。さすがに総理ともなれば忙しいわね。ああ、紹介するわ。今回のCM製作に協力してくれた高木社長と石川社長、それに私のマネージャーの岡本まなみさんよ。」

彼女に紹介されて、まず50代前半と思われる男が口を開いた。

「初めまして春川首相。私は765プロ社長の高木雄一郎です。よ

るしく。」

「こちらこそ。」

2人が握手すると、続いて30代前半と思しき女性が挨拶する。

「同じく初めまして。876プロ社長の石川実です。よろしくお願
いします。」

「こちらこそ、よろしくお願います。」

最後に20代前半と見える若い眼鏡を掛けた女性が答える。

「岡本まなみです。舞さんのマネージャーをさせていただいていま
す。お会いできて光栄です。」

彼女の言葉に、春川は苦笑いした。

「私はそんな大した人間じゃありませんよ。とにかく、こちらこそ
よろしくお願います。」

「それにしても、舞さんがすごいのは知っていましたけど、まさか
首相と知り合いだなんて想像すら出来ませんでした。」

まなみのセリフに、涼が頷く。

「本当ですよ。舞さんただけすごいんですか!?!というかどつや
って知り合っただんですか?」

「まあ色々あったのよ。何はともあれ、彼のお陰で今回の仕事を貰

えたんだから、皆キヨン君には感謝しなさいね。」

「いやいや、感謝するべきはこっちですよ。まさかたった2日でごまで持ってこれるなんて、正直考えもみませんでした。」

「私に掛ければこれくらい朝飯前よ。この業界で私に逆らえる人なんていないからね。」

舞がそう言ったとき、春川は高木・石川両社長が明らかに口元を歪めたのを見たが、それに関しては見なかったことにする。彼は2人に向かって声を掛ける。

「今回は色々とお無理をおかけしたようで。」

「いやいや。こちらもアイドル含めてどうせ暇でしたから。こと・
・家の事務員も、仕事が無くてずっと夏コミ用の同人誌を描いていましたし。」

(それはちょっと問題じゃないのかな?)

高木に続いて石川も言う。

「この3週間、全くと言って良いほど仕事がありませんでしたので。多少の無理は我慢しますよ。せつかく涼も男性アイドルとしての地位を確立して、愛や絵里もAランクになったって言うのに。ハア・
」

石川が溜息を吐く。

「すみませんね。御迷惑を掛けて。」

頭を下げる春川。

「いやいや、首相のせいではないでしょう。」

「そうです。」

「2人の言うとおりよ。今回のことは天災みたいな物でしょう。キヨン君が謝る必要なんてないじゃない。」

「けど、この国の責任は政府にありますから。」

実際の所、政府でどうにかなる問題のレベルを超えているのは事実ではある。しかし、そうは言っても国の舵取りをしているのは政府であるから、責任はそのトップである首相が負う必要がある。高い地位に就くことは、それ相応の覚悟と責任が必要なのだ。

「もうやめましようよ、そんな辛気臭い話は。それよりもキヨン君。例のお願いの返事はどうなったの?」

「「「例のお願い?」「」」

舞と春川以外の人間が一斉に疑問の声をあげる。この最強アイドルが一体首相にどんな要求を吹っつけたのか、誰だって気にするだろう。

「ママどんなお願いしたの?」

「うん?それはね・・・」

「ロクシエ、トリステイン、サクラス帝国、どの国かはわからないけど国交を結んで渡航可能になったらライブツアーが出来る様に便宜を図れ、でしょ？」

「ええ！？本気ですか舞さん？」

マネージャーのまなみが素っ頓狂な声を上げる。それはそうだろう。まだ断片的な情報しか入ってきていない国へライブしに行きたいなどは、常人が考えることではない。

「本気も本気。本気と書いてマジよ。」

「でも、どの国も僕たちがほとんど知らないような国なんですよ。そんなところでライブを開いても意味無いんじゃない？」

涼がそう問うが、舞は不敵な笑みを浮かべて答える。

「だからこそよ。これから私たちはそう言う国と付き合っていくのよ。それにまだ誰も行ったことのない国に一番乗りしてライブできるなんて、すごいことじゃない。涼君もまだまだね。」

「いや、そうじゃなくて。」

「で、キョン君。答えはどうなの？」

「まあ、まだ正式に国交を開けるかわからない状況なので、何ともただ正式に結ばれたらそれなりに便宜を図りますよ。そうですね、現地の情報とかビザの発給とかでそれとなく働きかけておきます。まあ、いずれも俺が首相のままならという話ですけど。」

「それでいいわ。キヨン君のことだから、任期はちゃんと務められるだろうから……」

と、その時。

「ティンと来たああ!!」

それまで会話の外にいた765プロの高木社長が声を上げた。

「何よ高木社長、人が話をしている時に邪魔しないでよね。」

「ああ、申し訳ない。しかし今の話の内容に、大変引かれる部分がありましたね。」

「一体どこに引かれたんですか?」

「もちろん、海外でのライブツアーに決まっているじゃないですか、石川社長。日本人の誰もがまだ見ぬ異国において、ステージにたつアイドルたち。絵になるでしょ? 春川首相、どうか我が765プロのこともよろしく願います。」

「どっちにしる、まだずっと先の話ですよ。まあ、今回作る広報用のCMは対外向けの宣伝用の分も作ると言う話なので、どっちにしるあなた方のアイドルが海外に対して初めて顔見せするアイドルになることは間違いありませんよ。」

「だったら尚更、我が765プロは逸早い海外進出を視野にいれなければ。」

高木社長はやる気満々のようだった。その様子を見て、涼は少し

ばかりホツとしていた。

「律子姉ちゃんや真さんも大変だな。僕は876だから関係ないけど。」

しかし。

「何言っているの涼、こんな面白い話見逃す手はないでしょ？」

「そうです涼さん！私たちも外国へ行つてがんばりましょう！」

「ええ！！！？？」

「どうせなら、涼はまた女装してやらない？」

石川がトンデモナイことを言い始めた。もっとも、つい数ヶ月前まで涼は本当に女装して少女アイドルをしており、最高ランクのSランクまで行っている。

もっとも、本人にとっては黒歴史だが。

「ぎゃおおおん！！それだけは勘弁して！！！」

その様子尻目に、春川は高木や舞らと喋り続けた。

「とにかく、その時になったらよろしく頼むわね。」

「はいはい。」

「こちらこそよろしくお願ひしますぞ、春川首相。ところで、せつ

かくここに来たんですから、是非ともアイドルたちに挨拶して
いて下さい。そうすればアイドルたちのやる気も増すでしょうから。」

「ハア……」

高木の提案を聞いて、春川はどこにでもいそうな自分の顔を見て、
逆に失望させるのではと思った。しかし別にアイドルに会って損は
ないので、その願いを受け入れることにした。

「わかりました。じゃあ……」

その時。

どんがらがっしゅーん！！

異世界進出！？（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ちなみに、キャラクターの性格についてはニコニコ動画のノベマ
スやアイマス架空戦記（八八艦隊愚像物語とか蒼海の歌姫シリーズ
とか）を参考にしています。

ついでに言えば、春川らハルヒシリーズのキャラもニコニコ動画
の涼宮ハルヒコの憂鬱シリーズに拠る所大です。

色々な風景

20日目午前 日本・東京某撮影スタジオ

「なんですか？今の音は？」

「多分、あの音は恐らく春香君だろう。」

春川の問いに、高木がもはや恒例行事と言わんばかりに言う。

「春香？あの天海春香ですか？」

「そうです。」

高木が頷く。

「春香先輩、相変わらずのようですね。」

春香との縁が深い愛が溜息交じりで言う。

「取り敢えず、春川さんに家のアイドルたちを紹介したいので、行ってみましょうか。」

「はあ。」

状況があまり良く掴めていなかったが、春川はとにかく高木の言うとおりにすることにした。

「じゃあキヨン君、また後でね。」

春川は舞たちと別れ、高木社長と2人で先ほど音がした方へと歩いた。

まもなく、そこに1人の男性と若い女性が数名集まっているのが見えた。辺りには鞆やその中身が散乱しており、そして赤いリボンをつけた少女が他の少女や青年から声を掛けられている。

「おい、大丈夫かね春香君？プロデューサー君、一体何があったのかね？」

「あ、社長。いいえ、大したことじゃありません。ちょっと春香が転びまして。ケガとかはしていませんから。御安心を。」

「そうかね。なら良いが、気をつけてくれよ、春香君。スタジオ内には、倒したりしたら大変な物が一杯あるんだからね。よく注意するように。」

「うっ、ごめんなさい。」

春香と呼ばれた少女が頭を垂れる。

「ところで社長、そちらにいる方は誰ですか？」

「ああ、彼は今回の仕事の関係者で春川君だよ。家のアイドルたちを紹介しようと思ってるね。」

高木が笑顔で春川を紹介するが、驚かせようとしているのか彼が首相であることをぼかしていた。

(中々茶目つ気のある社長じゃないか。ま、別に言う必要も無いし、付き合うか。)

「初めまして、春川響と申します。」

「こちらこそ初めまして、765プロのプロデューサーです。んで、今転んだのが天海春香です。」

「プロデューサーさん、そりやないですよ・・・初めまして、アイドルの天海春香です。よろしくお願いします。」

「どうも。天海さんの顔はテレビなどで何度も拝見しました。今回の仕事もがんばって下さいね。」

「ありがとうございます！がんばります！」

春川の激励が余程うれしかったのか、彼女はぺこぺこ頭を下げる。

(ネットじゃ閣下だのハーデルとかすごいあだ名が出てたけど、真面目そうな娘じゃないか。)

春香との挨拶を終えると、高木がその場に集まっていた他のアイドルを紹介する。

「他のアイドルたちも紹介しましょう。右から三浦あずさ君。如月千早君。水瀬伊織君、そして星井美希君です。」

高木が紹介すると、1人ずつ春川に向かって挨拶してきた。

「三浦あずさです。よろしくお願いしますね。」

「「こちらこそ、よろしく申し上げます。」

765プロでは最年長にして、最もスタイルの良い三浦あずさは独特のおっとりした口調で挨拶する。表情も笑顔だ。

(ふうん。至って問題なさそうだけだな。確か物凄い方向音痴で、あと「ババア」とか面白半分で言ったファンを締め上げたとかって噂があるけど、見る限りそんな様子はないな。ま、触らぬ神に祟り無しか)

続いてその隣にいた、蒼い髪が特徴的な少女が口を開いた。

「如月千早です。よろしく。」

「ええ、よろしく。」

三浦あずさとは対照的に、スタイル面(特に胸)でコンプレックスを抱えていると言う如月千早は淡々とした口調で挨拶してきた。

(うーん、たしかにお隣があれじゃあ、コンプレックスを持つのも仕方が無いかな。)

続いてこれまでの2人より少しばかり年下、と言うか子供っぽい少女が答える。

「水瀬伊織よ。よろしく。」

「ああ、よろしく。」

(態度が大きいな。けど確かこの娘はあの水瀬財閥のお嬢さんだっ
たよな・・・それでよくアイドルなんかやってられるな。)

そして最後に、茶髪の眠そうな表情をした少女が口を開いた。

「ミキは星井美希なの。よろしくなの。ファー・・・」

(ゆとりアイドルと言うあだ名そのまんまだな。まあ、やる時はやる
タイプって聞くし、じゃなきゃAランクアイドルなんかやってな
いだろうな。)

「こちらこそよろしく。他にもアイドルは？」

「いますよ。ところで、春川さんはスタジオ関係者ではないですよ
ね？」

「ええ、違います。」

プロデューサーの質問を春川は否定した。

(と言うか、誰も俺が首相だって知らないのかな?)

ちょっとばかり自分の知名度が足りないことに危機感を覚える春
川。

「じゃあ芸能記者かなんかですか？」

春香が指を頭に当てて問うが、それを伊織が否定する。

「こんな奴見たこと無いわよ。それに、どう見ても記者って柄じゃ

ないじゃない。」

「でこちゃんの言うとおりなの。」

「でこって言うな!」

美希の言葉に伊織が激昂する。

「私は、春川という名前をどこかで聞いた覚えがあるんですけど?」

「あらあら、千早ちゃんも。実は私も最近どこかで聞いたような覚えがあるのよね。どこだったかしら?」

千早とあずさは、春川の名前に聞き覚えがあるらしかった。

(けど、ちゃんと覚えられているわけじゃないんだな。)

と、そこへ新たに2人の人間がやってきた。

「遅くなってごめんなさい。」

「プロデューサー遅くなりました。あ、社長も御一緒でしたか。」

「ああ小鳥さんに律子、御苦労様。」

プロデューサーがやってきた事務服の女性と眼鏡をかけた少女に声を掛ける。

「そちらは?」

「家の事務の音無小鳥君と、アイドルの秋月律子君です。知っているかもしれませんが、律子君は876プロの秋月涼の従姉弟です・
・小鳥君に律子君。こちらは今回の撮影の関係者の春川響さんだ。」

高木が春川を2人に紹介する。

「初めまして、音無小鳥です。」

と、小鳥の方は普通に挨拶したが、律子の方は何やら考え込んでいた。

「春川響?・・・ああ!!??」

律子は素っ頓狂な声を上げた。

「な、何なのよ律子?」

「大声上げて、どうしたの?」

千早と春香の声を無視して、律子は春川を指差して呻くように言った。

「もしかして、総理大臣の春川響!??」

(ようやく気づいてもらった。けど、しかしさっきの涼君と良い、俺のことに気づけたと言うことは秋月の血はあなどれないのかな?)

ふとそんなことを考えてしまう春川であった。

同時刻　ロクシアーク連邦・連邦首都郊外　シュルツ邸

この日はロクシエでは平日であったので、トレイズとリリアの2人は学校である。制服に着替えた2人は、リビングで朝食を摂るわけだが、アリソンはまたも早朝から軍の任務に狩りだされておらず、代わりに2人の客人が席についていた。

「おはようリリア。」

「おはようございます。メリエルさん。」

昨日、やってきたばかりの時とは打って変わって明るい笑顔で、トレイズの姉であるメリエルはリリアに朝の挨拶をする。

スー・ベー・イル消失によってショックを受け、元気を無くしていたメリエルであったが、その日の内にリリアと意気投合、昨晚も飛行機に関して遅くまで語り合っていた。

ちなみに、リリアとトレイズの2人は親の影響で飛行機の操縦が出来る。しかも、軍のパイロット顔負けの腕を持っている。

対してメリエルは飛行機の操縦にこそ関心は無いが、代わりに機械弄りが好きという、普通の王女だったらありえざる趣味を持っている。

なお、トレイズはメリエルからへたれと常日頃からバカにされているが、実際今でもリリアには頭が上がらない。そして、姉であるメリエルには生まれてから喧嘩で勝ったことがない。つまり、余計

頭が上がらない人物と言うことで、そんな2人がタッグを組んでしまったのだから、大変である。

食事が始まると、リリアとメリエルは昨日に引き続いて飛行機の話題で話し込み、男たちには入り込む余地が全くなくなってしまった。

「トレイズ、お気の毒にな。」

彼女と全く話すことの出来ない息子に、父親であるベネディクトは慰めの言葉をかける。

「いいんだよ父上。メリエルが元気になってくれたんなら。」

「殿下がお元気になってくれて、僕も何よりだと思います。」

リリアの父ヴィルもそう言う。

「まあ、その点に関しては俺も同意見だけどね。はつきりいつてあそこまで意気投合するとは思わなかったよ。メリエルは、どっちかというとリリアちゃんを目の仇にしていたからね。一度も会ったことがないと言うのに。」

「メリエルさんにとって、それほどマティルダ殿下が好きだったんでしょう。だからこそ、トレイズ君との結婚を強く望んだのでしよう。」

「俺としてははた迷惑でしたけどね。」

トレイズは、以前さんざんメリエルに結婚を薦められていた。そ

れはもう、くどいほどにである。

「けど、二度と会えないかと思うと、メリエルの落ち込みようもわかります。」

「そうだな。俺も両親と二度と会えないと思うと、憂鬱になるよ。ヴィル君もそうだろ？」

ベネディクトは両親が、そしてヴィルは義理の母親スー・ベールにいたので、もはや二度と会えない可能性が高かった。

転移という予想も出来ない事態のために、大切な人と二度と会えなくなってしまうた人はこの世界に多数いた。ただし、当然ながらその反応は様々である。

「そうですね・・・確かに二度と会えないのは哀しいことです。しかし、僕には今家族がいます。彼らを守り、前に進むしか道は残されていません。ずっと家族と離れていた僕にとって、それが今唯一成すべきことだと思っています。」

「・・・強いですね。ヴィルさんは。」

「ああ。だからこそ、アリソン君も惚れたんだろうね。」

「2人とも止めて下さい。それよりも、早く食べないと時間がなくなりますよ。メリエル殿下とリリアも、いつまでもしゃべっていないで、早く食べて下さいね。」

「「はい。」」

この後、トレイズとリリアは通っている上級学校へ向かい、ヴェルも同じく勤めている上級学校へ向かった。夕方まで暇なベネディクトとメリエルは、首都を散策する予定であった。

元の世界と切り離されて、苦難の道を歩む人、大いに悩んで前へ進む人、そして以前と同じように家族を思って前へ突き進む人。様々な人たちの思いが交錯する中、新しい世界の時間も着実に進んでいく。

色々な風景（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

骨休みは終わり・・・

20日目午前 日本・東京某撮影スタジオ

アイドルの秋月律子によって、ようやく765プロのアイドルたちに首相だと気づいてもらえた春川であったが、当のアイドルたちの反応はと言うと。

「ええ、この人が総理大臣！？嘘でしょ！？」

「何かの性質の悪い冗談じゃないでしょうね？こんなどこにでも居そうな平凡男が日本のトップだなんて。」

「とても偉い人には見えないのー。」

上から春香、伊織、美希のセリフだが容赦ない。春川のことをコテンパンである。

「あんたたち、ニュースぐらいちゃんと見なさい！」

そんな3人に律子が突っ込む。

「けど、確かに首相がどうしてこんな所に来ているのか私も不思議でしょうがないんですけど。」

「今回のCM撮影は政府直々に依頼したことだから。それから、俺が今回の出演者の1人である日高舞さんと知り合いだからだよ。」

「あの人、首相とも知り合いだったんですか？ドンだけ凄いのよ？」

その姿に、春川は苦笑してしまった。

「さすが血縁者だけあるね。従姉弟とそっくりな反応示している。」

「涼と会ったんですか？」

「ええ、先ほど。中々良さそうな少年でしたよ。」

すると、春川はどこから怪しい雰囲気を感じた。見ると、事務員の小鳥が顔を赤くして妙な表情をしていた。目がキラキラと光っている。

「？」

春川は何か小鳥がよからぬ事を考えているのではと、直感的にわかった。そんな小鳥を呆れ顔で見ながら、律子が話しかける。

「あ、あれは気にしないで下さい・・・小鳥さん、妄想していないでちゃんと仕事なさい！・・・失礼、そう言っていただけですがとうございます。あの子は秋月一族の生み出した最高傑作ですから。」

「そうなんですか・・・高木社長、御宅のアイドルたちは中々個性的なメンバーが揃っていますね。」

「ええ、それが売りと言えなくもないですが。ちなみに後5人います。それで律子君、亜美君や貴音君はどうしたのかね？」

「あ！？そうだった。春香たちを呼びに来たんだった。皆、そろそ

る行かないと撮影に間に合わなくなるわよ。」

「はい。」

「わかったのー」

「わかりました。」

「「わかったわ。」

「それじゃあ、社長。それに首相。私も着替えなどありますので、これで失礼します。」

「ああ、諸君がんばってくれたまえ！」

高木社長の激励を受け、アイドルたちはそれぞれの準備へと向かって行った。

「あの律子と言う子は、歳の割にしっかりしていますね。」

「ええ。受験勉強と事務所の事務、そしてアイドルの3つを同時にこなしていますから。」

「是非とも内の政府に引き抜きたい人材ですよ。」

「ハハハ・・・いくら首相のお願いでもそれだけは出来ませんよ。」

高木は笑いながら答えたが、春川はそれが冗談の類ではないと直感した。

それから2時間後、春川は765プロの高木社長や合流した876の石川社長らと共に撮影風景を見学していた。

楽屋で綺麗に化粧をして着飾ったアイドルたちは、先ほどまでの一癖も二癖もある少女たちから一転して、ステージ舞台の天使となっていた。

「さすがアイドル。ステージ舞台上がればさすがという所ですね。」

「そうですね。何しろ、我が765プロのアイドルなんですから。」

「あら、我が876のアイドルたちだって、負けてはいませんよ。」

高木と石川の視線が空中で火花を散らす。そんな2人に、春川は無難な言葉を口にする。

「まあまあ2人とも、私としては皆それぞれに味があって甲乙付け難いと思いますよ。それにあなた方には、これから日本を世界にPRするためのCMを作ってもらう訳です。つまり、お2人の事務所のアイドルたちが日本の顔になるわけです。恥を掻かないように、双方ともしっかり協力し合うべきなのは？」

「確かに、その通りですな。」

「わかりましたわ、首相。」

「よろしくお願ひしますね。さてと、では私はそろそろ帰るとしますか。」

「え！？もう行っちゃうんですか？まだやよいや貴音に会ってないじゃないですか？会って行ってからでどうです？首相に会えば、あいつらのモチベーションも上がるでしょうから。」

「ありがとうございますプロデューサー。しかし、悪いけど昼から予定があるんだ。それにそろそろ戻らないと、SPの連中を怒らせることになるかもしれないからね。」

「そうですか。」

「その内どこかで会えますよ。では高木社長、石川社長。CMの方はよろしくお願いしますね。それから、舞さんにもよろしくとお伝え下さい。そしてプロデューサー君、アイドルたちをしっかりと導くんだぞ！」

「ええ。」

「わかりました。」

「首相も、お仕事がんばって下さい。」

「ありがとうございます。それでは、またお会いしましょう。」

と、挨拶をして春川は撮影スタジオを出て官邸へと戻ったのであるが、この時の何気なく社交儀礼として言った言葉が、短期間の内に現実の物となるのは、春川には想像すらできなかった。

春川が官邸へと戻った時、一部の仕事は予め決められたとおりに小泉副首相や朝日奈秘書官らの手によって片付けられていた。

しかしながら、どうしても首相に目を通してもらいたい書類というのも当然あるわけで、春川はさっそくそれらの処理に取り掛かった。

その中で、春川の興味を特に引いたものがあった。

「これは財務省からか？」

「それは先日話に出てきた、自衛隊の海外派兵に関する予算の試算案ですね。」

「早いな。素案とは言えまだ2日しか経ってないぞ。」

「昨日防衛省が早々と新しい防衛計画に関する素案を提出しましたからね。それに負けじと、対抗意識から出したのでしょう。国土交通省と法務省からも提出されていますし。」

「成る程。どっちにしろ仕事が早いのは良いことだ。どれどれ・・・」

春川は書類に目を通していく。ところが、それを見ている彼の表情は段々険しさを増していった。

「覚悟していたが、やっぱりかなり高くつくな。」

「まあ、自衛隊を大規模派遣するとなれば、高くつくのは当然でしょうね。」

「世論調査の限りでは、自衛隊を海外派遣するのはそれほど難しいことじゃないんだがな。」

日本が孤立している現在、国民感情はある程度手荒なマネを許容する物となっている。トリステインの現状を公開し、トリステイン側の同意を取り付けているとなれば、進駐することは簡単に認められるだろう。

「法務省の調査によれば、法改正は議会次第だそうです。憲法解釈もかなりややこしいですが、不可能ではないとか。現状を考えれば、法改正や派遣に関する新法の制定も、革新系の一部政治家を除いて確実に賛成票を取れると思われれます。」

「だけど、金の問題は切実だからな。」

ちなみに春川は憲法を改正する意志を持っていない。これは持てないと言った方が良く、何故なら現在の段階で、他国へ日本に関して紹介する際、国の基本となるべき憲法に関する話を必ずしているからだ。その憲法をこの大事な時に改正しようものなら、今後の外交は難しい物となるのは必至だった。

ただし、9条は国権の発動たる戦争や陸海空その他の戦力を保持しないと明記しているものの、国権の発動ではない戦争（内戦）や、陸海空その他の戦力に当らない物（装備とかへの言い換え）など、何とでも解釈出来るとも言えなくも無いが。

そうした法律面での問題をクリアしても、予算面での問題をクリアできなかった。

「それに関して何ですが、外務省からこんな報告が。」

小泉は別の書類を春川に手渡した。

「これは？・・・トリステイン使節団からの報告か、条約に関する試案。作成者は使節団の団長か・・・ほうほう。なるほどね、あまり気乗りしないがこれならなんとかなるかも知れないな。ただし、財務省を説き伏せられるかな？」

トリステインへ向かった使節団団長である本多から出された意見とは、自衛隊の進駐や現地軍隊への軍事援助やその他の技術援助と引き換えに、トリステイン近海における自由操業や資源調査と資源発掘権の提供、自衛隊への港や演習場の提供を行わせるなど、長期的に見て日本に大きな利益を出すと同時に、トリステインからふんだくる方策であった。

「金の回収に目処が立てば、いくら財務省と言えど首を縦に振ると思いますよ。」

「そうかもしれないな。」

ちなみに、トリステインへの進駐に関してはこの後齎される情報によってさらに加速することとなる。

「それから、国土交通省からの書類には、海上保安庁の強化プランが出されています。」

「あれ？それって防衛省からも出ていなかったか？」

防衛省からは、新世界における防衛戦力の整備に関する現状における素案と言う物が既に出されていた。その中には、海上保安庁について言及する物もあった。

「国土交通省としては、勝手に海保に関する意見を出されることは、我慢ならなかったようです。」

「全く、こんな時でも縦割り行政か・・・ま、せつかく作ったんだから目を通すくらいはしておかないとな。」

春川はまたも書類に目を通し始める。

「うーん。確か防衛省から出された案だと海上自衛隊を大幅に強化して、国境警備任務や漁業監視任務を付加するって意見で、海保の権限や装備を縮小するだったよな？」

「ええと、確かそうです。」

「これはそれと真逆だな。海上保安庁の武装の更なる強化、艦船と航空隊の更なる強化となっている。」

「どちらも自分の組織を上位に考えたいんでしょうね。」

「しかし防衛省からの報告には、現状の武装じゃ周辺国の予想される軍事力に対して過剰、逆に海上保安庁では遠洋派遣や新たな脅威となった怪獣への対抗戦力としては、不安だったよな？」

「ええ。ですから防衛省は、装備の大幅な見直しを提案しています。」

「この時点ではまだ素案だったが、後に防衛省は少数の現代型兵器と、現代型兵器よりもローテク、第二次大戦よりもハイテクで、なおかつ廉価で数を揃えられる兵器を開発して多数装備する方針を採る。」

それはさて置き、海自にしろ海保にしろある程度（この程度が問題）の敵と戦う上での国境警備や漁業監視などそもそも前例が無い。

「そんな風に両者がいがみ合う位なら、いつそ新組織でも立ち上げた方が良くないか？」

「そうですね。それも一手ですね。」

春川は軽い気持ちでそう言ったが、実際に防衛省と国土交通省の確執から、後に農林水産省管轄下の日本海上警備機構が組織されることとなる。

「これに関しては、両者による協議や、より進んだ研究の結果待ちだな。」

「そうなりますね。」

こんな感じで、2人は限られた時間の中で書類仕事を進めて行った。

骨休みは終わり・・・（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

アイマスシーンをだらだら続けるのも何なので、一旦切り上げました。なお、今回出せなかったやよいや貴音もいずれどこかで出すつもりです。

そして彼らは留まり、戻る

20日目夕方 日本・東京首相官邸

「では、それでいいかな？」

「異議なし！」

「それで構いません。」

春川首相の言葉に、内閣のメンバーが次々と賛成の声を挙げる。少なくとも、反対意見を言う者はいなかった。

「では木戸大臣、早速だが各国政府並びに使節団に今回の件を打診してくれ。今回の件は一分一秒でも早い方がよい。」

「わかりました首相。」

「それでは、今日の閣議はここまでにしておこう。意見のある人間はもういないな？」

その問いに、口を開く閣僚は誰もいなかった。

「それでは解散。皆連日御苦労様。」

こうして、この日の閣議は終了した。もちろん、首相をはじめとする大臣は閣議終了後も仕事を続けることとなる。特に外務大臣はその中でも最も忙しい人間の一人と言えた。

その木戸大臣、官邸を出て外務省へと戻ると、先ほど閣議で決まったある電文を現在連絡の取れている各国政府と、派遣中の使節団に向けて発信した。

内容は要約すると以下のような物である。

各国政府向け

「日本国政府は今後の各国政府との連絡確保のために、現在派遣中の使節団を再編し、今後の国交樹立までの期間の暫定大使として、各国への残留許可ならびに本国との連絡手段設置許可を望む。なお、暫定大使駐留期間中の諸経費は、国交樹立後に全額我が国政府が支払うものとす。」

使節団向け

「各使節団は、今後の現地政府との連絡確保のため人員の一部より、現地残留の暫定大使ならびに随員を選抜されたし。ただし、人数は最大で使節団の半数までとす。」

「さてさて、各国政府はどう反応するやら。」

執務室に戻った春川がそう漏らした。

「まあ、今になって拒む国などないでしょう。」

と小泉副首相は言ったが、春川はそこまで樂觀していなかった。

「わからないぞ。どこの国にだって愛国者を名乗る連中の1人や2人はいるだろうからな。トリステインだって、最初は自衛隊を軍事力で排除しようとしたって言うじゃないか。最初は友好的でも、後になって関係を絶とうと考えないとは言い切れない。油断は禁物だ。」

「そうですね。ま、そう言っても我々に出来ることはもはやありません。後は祈ることくらいしか出来ませんよ・・・ところで、トリステインと言えば、あの国の使節団は明日東京に帰ってくるんですよ？」

トリステインの使節団は、ロクシエの使節団と共に北海道と東北を回り、日本の寒冷地対策や地方における開発状況を視察していた。そして明日には東京へ戻ってくる予定であった。

「そうだ。移動手段やルートは既に国交省の方が決めてあるし、警察がしっかりとガードしているから、少なくとも我が国のそう言う連中が付け入る隙はないと思いたいよ。」

「じゃあ、移動手段とルートの急な変更も？」

「その意味もあるかもしれないけど、表向きは我が国の都市交通の視察をついでに行うとなっている。もっとも、あの長戸のことだから、裏の目的を重視したのかもな。」

春川は無口ながら、知識も豊富で頭の良い友人の顔を思い出しながら言った。

ちなみに、上記の使節団宛の通信に対するトリステインに派遣された使節団団長本多聡子の反応は・・・

「ククク・・・これはまた色々面白いことが出来そうですね。ククク・・・」

と悪魔の笑みを浮かべながら呟き、見ていた団員たちの心を寒くさせた。そしてそのまま残留メンバーを選抜したのであるが、もちろん選ばれる側は「貧乏籤を引かされた」と心の底から思ったことは、言うまでもない。

一方ロクシエに派遣された使節団団長荒木仁の反応はと言えば・・・

「本国政府も無茶言ってくるな。これじゃあ、いつ日本に帰れるやら。」

と本国に家族を残した人間らしい、全うな反応を示した。それでも、彼も公僕である。公私混同はせず、すぐに肅々と使節団の残留メンバーをちゃんと選抜したのであった。

そしてロクシエ連邦を打診の5時間後には、早々と受け入れ受諾の返電を寄越してきた。そしてトリステインはそれに遅れること半日あまり、21日目の正午近くになってようやく返電を送ってきた。こちらも可であった。ただし、人員は一度総交代させたらどうかと言っ意見をつけてきたが。

とにかく、こうして日本はロクシエとトリステインに、それぞれ

連絡を取れる組織作りに成功したのであった。

ちなみに、ロクシエもトリステインもその後日本と同様に、使節団から暫定大使を分派し駐留させてもらえるように日本へと打診している。もちろん、春川がそれを許可したのは言うまでもない。

21日目昼 日本・千葉 西船橋駅東京メトロ東西線ホーム

この日、東北経由で帰ってきたトリステインとロクシエの使節団は何故か千葉の西船橋へとやって来ていた。朝仙台を出発した一行は、通常ならそのまま東京まで新幹線を使い、一直線で帰るのが妥当なのだが、大宮で一旦下車となった。そして、そこから今度は埼京線と武蔵野線を経由してわざわざ迂回している。

これには、郊外型鉄道と都心部直通型の地下鉄を視察してもらうと言う、尤もらしい理由によるものだった。

埼京線と武蔵野線は、共に元が貨物線であった路線を流用した全線複線の、高架線を含む踏み切りがほとんど無い高速路線である。開業年月も首都圏の鉄道としては、比較的新しい。

また、地下鉄東西線は古くからJR線と直通運転を行い、千葉から都心中心部まで一本で行くことが可能、しかも快速運転まで行っている。

ちなみに、これまで東京メトロ東西線は朝のラッシュの凄まじさでも知られる路線であった。ところが、現在は転移に伴う企業活動の萎縮により、出勤する人間が激減したこと。さらに、エネルギー

統制によって東京メトロ側も運転本数を半分から3分の1にまで減少させたため、朝夕のラッシュは完全に過去の物となってしまった。

だから、団体列車を1編成ダイヤに割り込ませることなど造作のないことだった。それは、本来列車の運航頻度が大きい埼京線でも言えた事であった。

東西線の列車は運行する東京メトロ、乗り入れしているJR東日本、東葉高速鉄道いずれの車両も20mの長さで4扉、10両編成の通勤型電車である。走行性能はともかく、車内設備は本来外国からの使節を乗せるような車両とは言い難い。

しかし、今回ルートの選定と移動手段を用意した国土交通省側は、「外国の使節にありのままを見てもらうだけで、何の問題も無い。」と答えている。

さらに手が込んでいるのが、その「ありのまま」を見てもらうために、団体列車と言う種別でこそ運転するが、停車駅や車内放送に關しては全て既存の快速電車のダイヤに合わせて運転すると言う周到振りであった。

さて、トリスティンやロクシエの使節団もこれまで日本の様々な物と直に接し驚かされたり、また自分たちなりに気づいた欠点を申すなど、精力的に活動していた。そんな彼らでも、今回が東京の地下鉄に乗るのは初めてであった。

以前の東京近辺の視察の際は、主にバスや車が使用されたため、公共交通に關しては地上を走っているそれらしか見る機会がなかった。ただし、地下鉄に關しては既に北海道を視察した際に札幌市の地下鉄に乗車しており、経験済みであった。

しかし、やはり東京の地下鉄はスケールが違った。

「この東西線は東葉高速鉄道とJR東日本の中央・総武緩行線と直通運転しており、最も長い列車は50km近い距離を走ります。またこの路線は特に混雑の激しい路線として知られており、終日10両編成での運転を行っていますが、転移前の平日朝には1時間当たり27本の運転を行っていました。」

列車が入線する前、ホーム上で東京メトロの職員が使節団一行に東西線に関する説明を行っていたが、両使節団の人間はメモを取りつつ、改めて日本の技術力や国力の凄さと言う物を知らされ、驚愕の表情をしていた。

そうこうしている間に、ホームに使節団を乗せるための列車が入線してきた。今回のためにわざわざ最新型の車両が用意されている。

チャイムと共に電車の扉が開く光景は、既に両使節団にとって見慣れた光景であり、一行は次々と電車に乗り込んだ。また車内に配置されたロングシートも、既に札幌で経験済みなので、特に混乱無く座れた。ただし、ロクシェ使節団はきつちりと座るのに対して、トリステイン使節団は貴族出身者ばかりであるせいか、1人分の間を空けるといって感じで座り、どこことなく滑稽であった。

それでも、使節団団員の数はそんなに多くないから、1両に全員が納まってしまった。

間もなく、独特の発車合図の音が流れ、車掌が笛を鳴らす。チャイムと共に扉が閉まり、電車が走り始めた。

「東京メトロ東西線を御利用いただきありがとうございます。この電車は快速中野行きです。停車駅は浦安、東陽町、東陽町から先の各駅です。」

自動放送の女性の声が流れる。日本では既に御馴染みの物であるが、これも最初はロクシエやトリステインの使節団を驚かせた物の一つである。彼らは当初、真面目に普通に人が喋っていると信じていたのだ。ところが、同じ声が流れて疑問に思い、質問したことでようやく真実を知ったのである。

西船橋駅を出た電車は、構内を出ると高架線をグングン加速していく。快速電車であるため、浦安までは止まらない。途中3つの駅を通過する。

東西線は新興の住宅地の間を走りぬけ、途中鉄橋を渡る箇所もある。使節団の面々はそうした中で流れていく窓の外の風景を見ているが、東京（厳密には千葉）の家の多さ、そして街の大きさに改めて戦慄を覚えていた。

「人口1300万人が暮らせるはずなんて無いと思っただけど、これなら納得ね。」

エレオノールは眼前に広がるどこまで続いているかわからない街の風景に、この国に来て何度目になるかわからない感慨を抱く。日本と言う国の底力への恐怖である。

しかし、逆にこんな感想を抱いた。

「平和で技術もこんなに進んでいるのに、なんでわざわざすし詰めになってまで乗っていくのかしら？」

エレオノールとしては、ラッシュに関して口頭で説明を受けただけであったが、それでもある程度の情景は思い浮かべることが出来た。そして、自分たちより遙かに優れた技術を持つ日本人が、どうしてそんな家畜のような真似までしてする通勤に我慢できるのか不思議で仕方が無かった。

またその感慨は、モンモランシ伯爵らも浮かべたものだった。

この点ロクシエ側は、ラッシュという現象が自国にもあるので理解できないことはなかったが、それでも10両編成にすし詰めで、しかも2分間隔で電車を運転するなど正気ではないと思っていた。

それはともかくとして、電車はそのまま浦安駅に運転停車し、さらに都心目指して走る。

一方ロクシエの使節団は、住宅地の広がりには驚く一方で、東西線の電車の韋駄天振りと、さらに高速運転しながら高頻度運転を行う日本の技術力に舌を巻いていた。

様々な想いを乗せて、電車は東陽町の手前で地下へと入る。そしてそこからは、降りる予定の大手町まで電車は各駅に運転停車を行っていった。

そして彼らは留まり、戻る（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

日本文化は海を渡り・・・

21日目午前 トリステイン王国 トリスタニア 日本使節団滞在
迎賓館

「と言うわけで、私は今後もしばらくこの国に滞在することになり
そうなので、今後ともよろしくお願いしますね。ルイズさんに平賀
君。ククク・・・」

日本使節団が滞在する部屋の一室で、相変わらずの本多聡子の無
気味な笑い声が響く。彼女と面を向かい合わせている才人とルイズ
は、げんなりとした表情になっていた。

才人とルイズは日本使節団との仲介役と言う名目で、この日まで
トリスタニアに滞在していた。しかし、才人と同じくハルケギニア
を知る日本人である高凧春名がその務めを一時的に請け負うことと
なり、ルイズは魔法学院の生徒であることもあり、一旦2人は魔法
学院へ戻ることとなった。

その事を本多に伝えたのであるが、その後彼女から昨日日本政府
が使節団の中から暫定大使と随員を抽出し、留まらせると言う方針
を取り、団長の本多がその暫定大使となることを聞かされた。

((勘弁して欲しいな))

今後ともこの悪魔と縁を切れなさそうなことに、2人の目は死ん
だイカのようになっていた。

「それで、お2人は今日にも学院へ戻るわけですね？」

「はい。さすがにこれ以上学院を離れているのはマズイので。女王陛下からも許可を頂きましたから。」

ルイズは本多に対する心の内を億尾にも出さず、貴族らしく挨拶する。

「そうですか。学業に励んで下さい。」

「はい、心遣い感謝します。」

一方才人は、春名に声を掛ける。

「それじゃあ春名、ちよつとの間よろしく頼むよ。もし何かあったら呼んでくれ。」

「うん、ありがとう平賀君。」

こうして挨拶も終わり2人は帰るだけとなったが、本多が才人を引き止める。

「あ、それから平賀君。」

突然『白い悪魔』に名指しされ、才人がビクツとなる。

「な、何ですか？」

「そんなに怯える必要はありませんよ。ククク・・・別に採って喰ったりはしませんから。実はあなたにちよつとしたプレゼントをしようと思ひまして。」

「プレゼントですか？」

（一体何を今さらプレゼントしてくれるって言うんだ？この人。）

「ええ。あなた確かパソコンを持っていましたよね？それに自衛隊の哨戒機から投下した充電器とかプロジェクターもまだ持っていますね？」

「ええ。持ってますけど。それが何か？」

「折角日本と結びつきが出来たのに、日本へ帰れないのも可愛そうですから、使節団の団員が娯楽用に持ち込んだDVDやCDを貸してあげようかと思っただんです。」

「え！？本当ですか？」

日本に帰れる見込みが未だ立たないのは確かに残念なことであったが、懐かしい日本の映画や音楽に触れられるのは、才人としても嬉しい限りであった。

と、喜ぶ才人だけに聞こえるよう、本多は彼の耳元で囁く。

「はい。ただし・・・若い男性の欲求を満たすような物はありませんから悪しからず。ククク・・・」

「うわ！？何言ってるんですか！？」

「ククク・・・ジョークですよ。あなたの場合既にお相手がいまももんね・・・リアル充死ね。」

「何か今物騒なこと言いませんでした？」

「いいえ、何も。」

「たく。」

と言いつつも、内心そう言うの（エ ビデオとか）があったら嬉しかったな、とも思う才人だった。

「才人？一体何の話をしたのよ？声なんか上げて？」

才人の様子を不思議に思ったルイズが聞いてきた。

「何でもないよ。それよりも、本多さんがDVDやCDを貸してくれるんだってさ。」

「シーディー？ディーヴィディー？何よそれ？」

「見ればわかるよ。で本多さん、一体どんなのがあるんですか？」

「そうですね。使節団員が暇つぶし用にそれぞれ持ち込んだ物ですから。色々ですね。全部は無理ですが、2、3本選んでください。」

「わかりました。」

数分後、才人は持ち込まれていたDVDやCDの中から、魔法学院へ持っていく物を物色していた。

「……ええと、あ！踊る 捜査線だ！すげえ、3が出たんだ。そ

れから・・・あ！スタジオ ブリの新作に、海猿も2・3まで出たんだ。うわあ、俺がいない間に新作が一杯出たんだな。」

「でしようね。あなたが行方不明になってから、日本では10年近い時間が経っていますから。その間に色々な映画が公開されましたよ。それで、どれにしますか？」

「うーん迷うな。」

一方ついて来たルイズは、DVDのケースを開けて中身を見ていた。

「この円盤で、確か最初に日本政府からのメッセージが入っていたのと似ているわね。」

「基本的には同じです。中身が違うだけです。」

「ふーん。じゃあ、この中にはあの動く絵が入っているってこと？この箱に描かれた絵は？」

「それは中の映画や歌を説明するためのものなんだ。ま、ルイズには読めないだろうから、観るのが一番だろうけど。」

言葉は通じるが、生憎と文字は読めないため、ルイズにはパッケージに書かれている日本語のタイトルや説明文を読むことは出来ない。

「で、決めましたか？」

「はい、それじゃあ・・・」

才人は持つていくDVDとCDを手にした。

21日目午前　ロクシアーク連邦首都　日本使節団滞在ホテル

この日、日本の荒木仁特使は、サクラス帝国のアステル特使と共に日本のサクラスへの使節団について話し合っていた。

日本からサクラスへ向かうこととなった朝倉亮子団長を中心とする使節団は、今日の夜日本を出発し、明日の朝一番に連邦首都郊外にある空港へと到着する予定であった。

もちろん、サクラス行きであるからそこで終点ではない。彼らはロクシエに1泊した後、今度はサクラス使節団から分派した本国へ帰還する一団と一緒にルト二河河口のロル共和国へ向かい、そこからサクラスへの船便に乗る予定であった。

なおロクシエ側の要請を受けて、ロクシエ国内に留まっていた日本の護衛艦「おおなみ」がロル共和国へ回航されて、サクラスまでの護衛任務に当ることとなった。「おおなみ」は明日ロル共和国へ入港する予定だった。

既にロクシエ側とのすり合わせは前日までに終わらせており、残るはサクラス帝国へ着いたあとの行動に関してであり、2人はそのことについて話し合った。

ただし、アステル曰く「平和的に友好関係を望むのならば、誰であるかと聖女メイベルをはじめとして我が国国民は歓迎するでしょう。」と言っている。

そんな感じで大丈夫なのかと、少しばかり不安を持った荒木であったが、相手国が歓迎の意志を表明しているのならば、素直にその好意は受けるべきと考えた。また彼自身、彼女と付き合ってみて、彼女が腹黒い策を弄するような人間ではないことは確認済みであった。

さて、その使節団派遣に関する打ち合わせが終わると雑談になった。会話の内容は、2人の今後の予定に関するものだった。

「じゃあ、荒木特使もこの国に残られるんですね？」

荒木から、しばらく彼がロクシエに留まることを聞かされ、アステルは少しばかり嬉しそうな表情でそう言った。

「ええ。暫定大使に横滑りとなりました。それで、もと言うことはアステルさんも？」

「はい。使節団の半分を日本からの使節団の案内と、本国への連絡のために戻しますが、私はあなたと同じく暫定大使としてこの国に残ることとなりました。」

「そうですか。お互い大変ですね。」

荒木としては家族にしばらく会えないので、そうした感想を口にしたのだが、アステルの方は違っていた。

「あら、私はとてもこれからが楽しみです。この国から吸収できることはまだまだありますし、それにまだ見ぬ日本にも行ってみたいですし。」

「ハハハ・・・そうですか。私は家族を国に残しているので、少しばかり恋しいですよ。アステルさんは家族は？」

「私はまだ独身なので。両親は田舎にいますし、もう一人暮らしに慣れっこになりました。まあ、彼氏が欲しいと思うときはありますけどね。特にメイベルとナバルのお惚気を見せられた時とか・・・彼氏持ちなんて、死ねばいいんだ。」

「今何か少し物騒なこと言いませんでした？」

「まさか・・・」

アステルは笑って誤魔化した。そして話題を変える。

「ところで、日本の使節団は日本から直接飛んでくるんですよね？」

「ええ。そうですよ。飛行機で来ます。」

「私の国でも飛行機は既に飛んでいますけど、そちらの飛行機は確かロクシエのものとも違っていましたよね？映像でちょっと見ましたけど、プロペラのない、確かジェット機でしたよね？」

「あなた本当に機械とかが好きなんですね？」

「とんでもない。め、失礼。聖女メイベル方がもっとすごいですよ。」

「ふーん。是非とも会ってみたいですね。」

「彼女が私たちの国を大きく変えたといっても過言ではありませんから。」

「そうなんですか。それにしても、20歳にも満たない少女が国の英雄で、しかも大統領と公王を兼任しているなんて。最初はどのラノベだっと思っていましたよ。」

「ラノベ？」

荒木から初めて聞いた単語に、アステルが首を捻る。

「我が国で人気のある本の分野の一つです。正式にはライトノベルと言う、小説の一種です。若い人向けの軽い文体と萌え系の挿絵のおかげで、すごく人気があるんですよ。」

「萌え？」

「うーん・・・可愛いとかそういうことでしょうかね。我が国はアニメや映画、そしてそうしたライトノベルがここ数年は非常に重要な産業となっていましたね。ようやく政府も本腰を入れ始めたと思つた時に、今回の転移ですよ。」

そう言うと荒木は苦笑した。しかし、アステルは怪訝な表情をす
る。

「アニメや映画が重要な産業とはどう言うことですか？」

アニメも映画も、製品という点では実感が薄い物だ。工場で大量生産される工業製品とは一線を大きく画する。アステルはアニメも映画も、知識として既に知っていた。しかし、その認識はサクラス帝国で始まったラジオ番組や同じく彼女の国でも売られている小説のようなものの延長戦に過ぎず、産業として成り立つと言う自覚はあまりなかった。

こうした点で言えば、知的財産権などが発達し、映画やアニメ、漫画と言った文化コンテンツが世界に対して売れる産業となっている日本は異質に感じられるだろう。

「我が国ではそうした文化コンテンツが、非常に重要な輸出商品になっていたんですよ。場合に拠ればの話ですが、そうした作品は億単位の人に見てもらい、それこそ凄い額の金を生み出すかもしれないからね。」

「ええ！？その話、もっと詳しく聞かせて下さい。」

「はいはい。いいですよ。」

既にアステルの性格を熟知している荒木は、またも苦笑いしながら彼女に話しはじめた。

その後、彼は日本の文化コンテンツやそれが以前の世界で与えていた影響などを延々2時間喋ることとなった。

日本文化は海を渡り・・・(後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

初体験

22日目午後 トリステイン・魔法学院 学院内のある教室

「本当にこれで、その動く絵と言うのが映るのかい？信じられないな。」

机の上に置かれた箱を見ながら、半信半疑と言った表情で言うのはギーシュである。

「信じられないかもしれないがミスタ・グラモン。これが映るんですよ。才人君に国の技術力は本当にすごい。」

コルベールが諭すように言う。

階段式の教室には、現在ルイズや才人と親しい人間たちが集まっていた。タバサ、キュルケは言うまでも無く、ギーシュにマリコルヌ、モンモランシーにアニエスもいた。

アニエスは学院関係者ではないが、2人が学院に戻る際に、万が一のことを考慮してわざわざアンリエッタが護衛としてつけたのであった。これは2人が今後の日本との外交に必要な人物と認定されたからであり、アニエスはしばらくそんな2人の護衛を行う。

2人と顔馴染みとはいえ、わざわざ銃士隊長をつけたのだから、アンリエッタが才人らに掛けている期待の大きさが窺える。

そんな重要人物と見做されたにも関わらず、才人はパソコンでDVDが見れるか試そうとした。ところが、そうは問屋が卸さなかつ

た。彼の帰りを待ち侘びていたタバサ、シエスタらが早速興味を持ち、吊られる形でキュルケやコルベールと言った面々も映画を見たいと言ったので、急遽才人は空いている教室を借りて、トリスタニアから持ち帰ったプロジェクターで上映会を開くこととなった。

「よし、準備完了と。」

上映をするため、プロジェクターと回線を接続したパソコンを弄っていた才人が準備を終えた。

「それじゃあ、映すとしますか。うーん、せつかくこれだけ広い場所で見るとポップコーンかジュースが欲しい所だよな・・・ま、無い物ねだりか。」

「才人、ぶつぶつ言っていないでさっさと映しなさいよ。」

ルイズがせかす。

「はいはい。じゃあ皆、映すから席に座ってくれ。」

「わかった。」

「はい。」

才人に言われて、それまでぶらぶらと教室内で待っていた面々が椅子に座る。

才人は借りてきたDVDの中から「スカイ・クロラ」を選んだ。彼が今回借りたDVDは計3本で、残る2本の内1本はスタジオジブリの「崖の上のポニョ」、もう1本は「踊る大捜査線3」であっ

た。

いずれもまだ見ていない作品だけに、才人としても楽しみであった。

才人は映画を再生させた。

映画は1人の少年パイロットを主人公として進行していく。才人は予めパッケージに書かれていたあらすじを読んでおり、また物語内で描かれている様々な物品も理解できた。車やテレビなど、才人には懐かしさを感じさせる物ばかりであった。

一方、ルイズたちハルケギニア人の視点からしてみれば、自分たちに馴染みの無い物ばかりが出てくるから、ストーリーについてもくだけでも一苦勞である。時折才人に内容等に関して質問するが、それでも完全に理解できているかと言えば、そうではなかった。

やはりその文化を実体験した者とそうでない者の隔たりは大きかった。

ただそれでも、見ている者にこれまで体験したことのない感覚を覚えさせると言う点では、凄まじい物があった。絵が長時間に渡って動く（しかも魔法を使うことなく）と言うのも然ることながら、絵の出来栄え（何人かは最初、作り物の絵とは信じられなかった）や音響など、初めて見る者を啞然とさせるに充分であった。

またこの作品、戦闘機パイロットを主人公としているから空戦シーンがそれなりに含まれている。そうした部分には、軍人であるコルベールやアエスが大きな興味を示した。映像の中の戦争は、彼らが知っている戦争とは全く次元の違うものであったからだ。

確かに、ハルケギニアでも飛行艦船や竜騎士を使った空の戦いはあるにはある。しかし、その進行スピードははつきり言って数日単位のダラダラした戦いだ。作中にあるような、1日の間に数百キロを飛んで行って敵の中枢を空から破壊することや、百単位の数で竜騎士の倍するスピードで戦闘機が空中戦を行うなど、有り得なかった。

さらにコルベールたちを驚かせたのは才人とのこんな会話であった。

「才人君、君の世界での戦争とはあのような形のものなのかね？」

「うん・・・厳密には違いますね。あの飛行機、プロペラを使った戦闘機って言うのはもう何十年も前に廃れていて、今は音よりも速いスピードで飛ぶジェット機が使われていますから。」

「音よりも速く飛ぶ!？」

以前ルイズも驚いたが、当然コルベールも驚いた。

「そんな凄い兵器を持っているということは、ニホンと言う国はとてつもない軍事大国ということなのかな？」

軍人の家系出身であるギーシュも興味を持ち、そんなことを聞いた。

ところが、才人の答えは予想を裏切る物だった。

「んなわけないだろ。俺の国の軍隊は自衛隊って言って、国を守る

ためだけの軍隊なんだぞ。大した軍事力なんか持ってないよ。」

才人は少し誤解していたが、日本の防衛力、特に海上自衛隊の戦力は世界的に見ても空母と原潜が無い以外はトップクラスである。

「君のいた世界はどうかしている!？」

「うん、それは俺もそう思う。」

ギーシュの指摘に、才人はただ頷くのみだった。

ちなみに、ルイズやシエスタと言った女性たちは空戦シーンや軍事的な要素よりも、主人公とヒロインの恋愛に関するシーンに専らの関心を示していた。

「スカイ・クロラ」の気はやはり理解されない部分が多いせい
か、パツとしなかった。

「ようし、じゃあちよつと休んで「崖の上のポニョ」見ようぜ!」

才人はDVDを入れなおし、次の上映の準備を始めた。

この上映会、その後何度か繰り返されて日本文化をトリスティンに伝える一端を担うこととなる。ちなみに一番人気の作品は「崖の上のポニョ」であったが、コルベールやアニメスは実写である「踊る大捜査線」に強い興味を示したらしい。

「サクラス帝国への使節団は、予定通りに出発しました。」

首相執務室で、小泉副首相が春川首相に報告する。

「そうか。団長が朝倉で言うのがちよつと気に食わんが、まあ外務省が推薦したんだから大丈夫だろう。」

「キヨンさん、そこまで邪険にする必要ないんじゃ。」

秘書の朝日奈みくるが戸惑った表情で言う。

「けどなあ、あいつには高校時代えらい目に遭わされたからな。笑顔でナイフを手にしながら「じゃあ、死んで」なんて言われた時には生きた心地がしなかつたぞ。邪険するなって方が難しいよ。」

「トラウマと言う物は中々消えませんか。ところで、その使節団なんです、護衛戦闘機のパイロットに関して、面白いことがわかりましたよ。」

「おもしろいこと?」

疑問を口にする、春川は湯飲みのお茶を啜った。

「ええ。防衛大臣が教えてくれたんですが、護衛戦闘機隊の隊長はひだかただみち日高正道二等空佐だそうです。」

小泉の言葉に、春川は一瞬お茶を噴出しそうになった。

「何!?! おいおい、そりゃ出来すぎだぞ!」

叫ばずにはいられない、春川首相であった。

23日目午前　ロクシアーク連邦・連邦首都郊外上空

首都から50km程西に行った高度6000m上空で、アリソン・シユルツ少佐は、愛機の最新鋭戦闘機の操縦桿を握りながら、東の空を凝視していた。

「さてさて、日本の戦闘機はどんな性能なのかしら？」

この日、連邦首都郊外の国際空港に日本からサクララス帝国へ向かう使節団を運んでくる輸送機と、その護衛である戦闘機が着陸する予定になっていた。アリソンは部下3機を引き連れて、日本使節団一行を出迎えるよう命令されていた。

「物凄く速いって話だけど、どんだけ速いのかしら？この機だって700kmは出るけど、それよりも速いのかしら？」

アリソンが搭乗しているのは、最近実戦配備されたばかりの最新鋭戦闘機だった。もし日本のミリタリーマニアか、多少第二次大戦時の戦闘機に精通している人間が見たら、Fw190DかTa152に似ていると答えるだろう。

後の調査で、ロクシエに存在する航空機や戦車、艦艇の多くは地球にかつて存在したそれらに非常に（外観から中身）似通っている物が多く、さらに武器のみならず文化面でも非常に共通している物が多く発見され、異世界同士の類似性に関する議論を巻き起こす一

因となる。

それはともかくとして、アリソンは日本からやって来る戦闘機と輸送機に関して十分な情報を知らなかった。軍幹部であったなら、日本から提供された映像でジェット機やミサイルに関する情報をある程度得ていたが、生憎と一介のパイロットに過ぎない彼女は、そんな超重要情報はほとんど知らされていなかった。

一応海自のヘリパイロットや日本の外交官と喋る機会を得た彼女であったが、空自に関する情報はほとんど得られていなかった。

だから彼女はロクシエでスタンダードなプロペラ機を予想していた。

ところが。

「うん？何かしら？」

東の空に、芥子粒のような影が視界内に入ってきた。その影は急速に大きくなっていく。

「どうやら現われたようね。」

アリソンは各機に自分について接近するよう命令した。

ところが、彼女の予想よりも速いスピードで相手は迫ってきた。しかも、その影は見る見る大きくなり、終いには自分たちの戦闘機より遥かに大きな影となった。

「ええ！？」

その機影は一瞬でアリソンらの横を通り過ぎた。今まで見たことも無い機体のフォルムに、アリソンは度肝を抜かれる思いだった。

「何よあれ!？」

やたら尖った機首に巨大な翼、その下にはタンクらしきものとロケット弾^{ミサイル}らしき物がぶら下げられている。しかし何より驚くべきは、プロペラがないこととそのスピードであった。軽く800km以上は出ていた。

それでもアリソンはその蒼い瞳に、なんとか日本の国章と知らされた小さな赤い丸を捉えていた。

「あ、あれが日本の戦闘機？」

「少佐、さらに4機を確認！」

部下の言葉に、アリソンがハツとして目を再び東の空に向けると、先ほどの戦闘機と同型と思しき小型機が1機、その後方に大型機3機が確認できた。

啞然とする彼女の耳に、無線を介して通信が入る。

「こちらは日本国航空自衛隊。使節団輸送部隊の護衛戦闘機隊長だ。貴機の所属を答えよ。」

「こちらロクシアーク連邦空軍、臨時首都防空隊隊長のアリソン・シュルツ少佐です。貴部隊の出迎えを命じられました。」

「了解。こちらは日本国航空自衛隊第304飛行隊所属の日高正道三佐です。出迎え感謝します。」

初体験（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ニコニコ動画の日本鬼子のイメージソング、毎日万単位で再生数が増えているってどう言うこと？

運命は自ら切り開く・・・だけではない

23日目午前 ロクシアーク連邦・連邦首都第四上級学校

この日は平日であつたので、人々はそれぞれの勤め先で働き、或いは学校で学んでいた。それは何気ない日常の一コマである。

資源の無い日本、他国から完全に切り離され孤立したトリステインと違い、ロクシアーク連邦は転移したことで起きた混乱は最小限度に過ぎないものであつた。そのため、人々の生活等への影響も、スー・バー・イルと繋がりを持つ人々を除けば極々小さいものであつた。

しかしながら、転移による影響はここロクシエの一般人にも目に見える形で影響を与え始めていた。

上級学校生であるリリアとトレイズの2人も、いつも通りに学校へと登校していた。しかし2人の心の中では、あることがとても気になつていた。

(ママいいな、日本からの使節団を戦闘機に乗って出迎えられるなんて。)

(今頃父上とメリエルは国際空港か・・・やっぱり休めば良かったかな?)

この日日本からサクラスへ向かう使節団が連邦首都の国際空港へ空路やってくることは、既に新聞やテレビを通して市民に知らされていた。

日本人は一体どんな飛行機でやってくるのか、多くの市民が注目している。もちろん、飛行機大好きな2人も大いに心惹かれるものがあつた。

トレイズの父親であるベネディクトと姉のメリエルの2人は勤め人でも学生でもない身分の特権を使って、空港へと行っている筈だつた。またリアの父のヴィルも教師の職を休んで付き添つていつた。元特殊部隊の彼は護衛も2人の兼ねていた。

つまり言えば、リアとトレイズの2人だけが国際空港へ行けない立場となつてしまい、2人が内心不満を持つのも当然と言えた。

しかし、そんな不満など簡単に吹き飛ばしてしまう事態が発生するなど、2人には予想さえ出来ないことであつた。

それはいきなりやつて来た。突然、ゴーと言う重々しい音が辺りに響き渡つた。

「な、何だ？」

「地震!？」

「雷!？」

いきなり聞いたことも無い音が聞こえてきたので、生徒たちが騒ぎ出した。最初は数人だったが、瞬く間に教室中に伝染してしまつた。

「ちょ、ちょっと皆さん落ち着きなさい!!! 一体何だつて言つたよ

「？」

生徒に加えて、授業を担当していた女教師までもが慌てだした。もう授業どころではなかった。

「外だ!？」

トレイズは音源がどこかを突き止め、窓際に駆け寄った。

「待ちなさいよトレイズ！」

リリアも彼に続き、終いにはほぼ教室内の全員が窓に駆け寄っていた。この時、謎の音は先ほどよりも大きくなっていった。

「どこだ?」

生徒たちが外をキョロキョロ見回す中、1人の生徒が気づいた。

「あそこ!?!空!?!」

全員の視線が空へと向けられる。

「な、何あれ!？」

リリアはそう叫ばずにはいられなかった。それほどまでに、突如首都上空に現われたジェット戦闘機のインパクトは大きかったのだ。

「あ、あれがあなたの国の戦闘機ですか!？」

空港上空をフライド・パスしたジェット戦闘機の機影を見て、サ
クラス帝国暫定大使のアステルが声を上げる。

フォルティアース大陸にも飛行機はあるが、それはプロペラ推進
式の物で今飛び去った戦闘機のような轟音を出すことも無く、スピ
ードも遅い。それに形も全く違う。

彼女だけでなく、一緒に空港までやってきた随員や付き添いの口
クシエ側の人間たちも、あまりに自分たちの使っている飛行機と掛
け離れていた機影にドギモを抜かれていた。

対照的に、その戦闘機を見慣れている荒木仁暫定大使率いる日本
側のメンバーは冷静どころか、笑みを浮かべる余裕さえあった。

「ええ、そうです。あれが我が航空自衛隊のF15J戦闘機です。
現在の我が国の主力戦闘機です。」

「す、すごい。」

「あれ位で驚いていたらまだまだですよ。もうすぐ後続の輸送機と
空中給油機も見えてくる筈ですから。」

彼の言うとおり、戦闘機に続いて、別のジェットエンジンの音が
段々と近づいてきた。東の空に、先ほどの戦闘機よりも巨大な機影
が3機現われた。

「お、大きい!」

「あ、あれが輸送機だと言うのかね？」

ロクシエ空軍の人間もその大きさに唖然としていた。ロクシエ空軍で一番大きな最新鋭爆撃機はレシプロ4発式で、地球のB17似の機体である。しかし今まさに接近している空自の輸送機と空中給油機は同見てもそれより2回りは大きそうであった。

誘導役と思われるロクシエ空軍の戦闘機が付き添っているが、まるで子供のようにであった。

「その通りです。そして後ろの機体は空中給油機で、言ってみれば空中タンカーです。ただ、元となったのは旅客機です。」

「旅客機であの大きさなのか・・・」

「あれよりももっと大きな、500人の人間を一度に運べる機体もありますよ。」

「・・・」

もはや言葉も出ないようだった。

やってきた戦闘機、輸送機、空中給油機のいずれもが一旦飛行場を通り過ぎる。滑走路の様子を確認するためだ。日本の空港とは違うので、いきなり着陸は危険と考えられたからだ。

各機は飛行場上空を低空で通過して滑走路を確認すると、一旦高度を上げて市街地上空へ出て旋回し、今度こそ着陸態勢へと入る。

リリアたちが見たのは、この旋回中のシーンであった。もちろん、

上級学校だけではなくほぼ首都全域の市民によってそのシーンは見られた。

ちなみに、この日警察と空軍、さらに国際空港には市民からの苦情電話が殺到したらしい。

同日午前 トリステイン王国 とある鉱山跡

「なあ、新しい仕事見つかった？」

「いいんや、まだだ。」

鉱山の入り口で、2人の男が愚痴を零しあっていた。

「畜生！このままじゃ本当におまんまの食い上げだ！」

「けどよ、領主様は今ほそれどころじゃないらしいしな。俺たちみたいな平民の世話をしている暇なんかないだろうぜ。それに子供の頃から鉱山で働いている俺たちに、今さら他の仕事しろって言われてもな。」

「全く！何が鉱山だ。『風石』が出ないんじやただの洞窟じゃねえか！！」

2人が働いていた鉱山は、つい1月前まで『風石』を掘っていた。アルビオンやガリア、サハラが主たる産地であったが、トリステインもそれらに比べが少ないが一応産出されていた。

一部に魔法を使った機械が投入されていたが、浅い部分や一度機
会で掘られた部分を掘り進めるのは主に平民の労働者が従事してい
た。危険な仕事だが、平民の仕事としてはそこそこの収入が約束さ
れていた。

ところが、先日の転移によって『風石』は鉱脈ごと消失してしま
い、掘っても掘っても出てこなくなってしまうた。

最初はもつと深く掘れば何とかなると思われ、掘削が続けられた
が10日目にはついに鉱山側が根を上げ掘削は中止となり、その翌
日には事実上の休業に追い込まれた。当然、働いていた労働者は全
員職を失ってしまった。

もちろん、労働者側はなんとか助けしてくれるよう領主やさらに上
の王政府に相談したが、転移後の混乱の嵐の中では彼らを助ける余
裕は無く、未だ芳しい答えは出ていなかった。

「けどよ、この間二ホンとか言う国の連中が来て調べて行ったじゃ
ないか？と言うことは何かあるかもしれないぞ。」

「けどあの後は音沙汰無しだ。第一得体の知れない連中に期待する
もんじゃないぜ。」

「そうだよな……一体どうなっちまうんだろうかね？」

「知るか！……はあ……」

2人は何もすることもなく、ただポツカリト口を開けている鉱山
の入り口を空しく見ているだけだった。

同時刻 ラ・ロシエール沖合 護衛艦「さわぎり」

第一護衛隊群の艦艇は、使節団の派遣と共に再びトリステインにやって来ていたが、その後は現地使節団のバックアップのため、補給艦から補給を受けて半数はラ・ロシエール沖に待機していた。残り半数は、トリステイン政府の許可を受けて、トリステイン近海の調査に当たっていた。

一応許可を貰ったのは、地球には領海と言う概念があり、日本としてはトリステイン王政府を国家として非公式に認証していることを、内外にアピールするためだった。

さて、それとは別に輸送艦の護衛として1隻が既に日本へ帰還していた。そして今日「さわぎり」が調査任務を解除され、新たに本土への連絡任務として硫黄島へと向かうこととなった。

硫黄島到着後は、現地飛行場に待機している輸送機に運んできた荷物と人員を乗せ変えて、本土へ送る予定だった。

その「さわぎり」のヘリコプター格納庫には、使節団から運ぶよう以来を受けた資料や物資が箱に入れられて積み重ねられていた。

「これを日本に持ち帰るんですか？」

「ああ、何でも本多大使からの強い要望らしい。」

乗員たちが積み込まれた物資をネタに喋っていた。

「これ一体何が入っているんですかね？」

「さあな？俺たち下っ端にはわからんよ。」

荷物を前にして、ベテランの海曹が笑う。

「まさかとは思いますが、トリステインはファンタジーな国ですから変な物でも入っているとかないですよね？」

ある海士がそんな事を言った。ちなみに第一護衛隊群の乗員はこれまで回数トリステイン政府の協力でラ・ロシエールに上陸しており、魔法やら地球にはない産物に既に触れていた。

「変な物って？」

「声を上げる植物とか、1000の味がするビーンズとか。」

「お前なあ、映画の見すぎだぞ。まあ、完全に否定することも出来ないがな。」

海曹が半ば呆れながら言うと、今度は別の海士が自分の考えを披露する。

「もしかしたら、ウランとかプルトニウムかもしれませんよ。トリステインにはそう言う鉱物資源もあるかもしれませんし。」

「そのネタはやめろ。硫黄島に着いて、その後艦が沈められるようなことになったら縁起でもない。」

「え!?!どづいつことです?」

「わからないならわからないでいい。まあ、一度映画の「ジョーズ」を見直すんだな。」

「?」

海士は海曹が何を言っているのか、本気で分からないようだった。

この日正午過ぎ「さわぎり」は何事も無く出港し、2日後には硫黄島に到着している。そしてそこで無事に荷物を降ろし、そのままトリステインへと取って返している。

幸いなことに、「さわぎり」は嵐に巻き込まれてタイムスリップしたり、破片一つ残さず行方不明になったりするようなことは無かった。

だが、「さわぎり」が本土へと送った荷物の中に、トリステインの進む道を大きく左右する物が積まれているなど、海士や海曹たちには全くわからなかった。

運命は自ら切り開く・・・だけではない（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

最後の会話のネタわかる人いるかな？

あと最近Mixi始めましたYADAMONで山梨在住で探せば出ると思います。

異世界を飛ぶ者たち

23日目午前 ロクシアーク連邦・連邦首都 国際空港

国際空港にいる人々の視線は、今降り立ったばかりの5機の飛行機に注がれていた。サクラス帝国へ向かう日本使節団を乗せた2機の輸送機、続いて旅客機を原型とする空中給油機、最後に護衛戦闘機である2機のF15がそれぞれ着陸した。

輸送機と空中給油機の大きさは、ロクシエで標準となっている旅客機のそれよりも2回りも大きいため、2機分の駐機スペースが使われることとなり、3機はロクシエ側の誘導の元、所定の位置に停止した。

加えて2機のF15も、同じくロクシエ側の誘導の元で停止した。

機体が停止すると、まず輸送機の扉が開けられ、中からタラップが降ろされた。既に機の前には兵士たちに護衛されたロクシエ大統領が、降りて来る人物を出迎えるために待ち構えていた。

そして降りてきたのは、スカートタイプのスーツを着込んだ若い女性だった。長い蒼みがかった髪が特徴的である。

彼女はロクシエ大統領と挨拶し、2、3の社交儀礼の言葉を交わす。もちろん、その瞬間多数の報道のフラッシュが焚かれた。

そして彼女は大統領との挨拶を終えると、その後ろで待っていた人物に歩み寄った。

「遠路遙々御苦労様でした。朝倉団長。」

「こちらこそ。暫定大使の任お疲れ様、荒木大使。」

日本国使節団団長の朝倉亮子と暫定大使の荒木仁は握手する。

「朝倉さん、紹介します。サクラス帝国の駐ロクシエ連邦暫定大使のアステルさんです。」

「アステル・ラガナンです。よろしく。」

「朝倉亮子です。よろしく。」

こちらも握手を交わす。

3人が挨拶を終えたのを見計らって、ロクシエ側の人間が声を掛けてきた。

「歓迎式典がありますので、皆様どうぞこちらへ。」

「お気遣い感謝します。それじゃあ、朝倉さん、アステルさん、我々も行きましょう。」

するとアステルが少々不満げな声で言う。

「えー！もう少しあの飛行機を見たいのですが？」

すると朝倉は少し怪訝な表情をし、荒木は苦笑した。

「これらの機体は数日間こちらにいますから、また見る機会があり

ますよ。」

「そうですか・・・仕方が無いなあ。」

口惜しそうに、彼女は歩き始めた。

3人が車に乗り込んだのと前後して、輸送機からは朝倉の随員が降り、こちらにも歓迎の式典に出るためロクシエ側の用意した車へと乗り込んでいった。

一方ここまで操縦してきた自衛隊のパイロットや乗員は、ロクシエ側の人間と格納する場所や今後の整備に関しての打ち合わせに入ったり、輸送機に搭載されてきた各種装備を降ろす作業に入っていた。

今回輸送機には、使節団員や彼らの持ち物以外にロクシエやサラス帝国へのプレゼント、戦闘機や輸送機の整備に必要な部品などが満載されており、それらを積み降ろす必要があった。

その様子を横目に見ながら、3人の人間が少し離れた所に止まったF15の方へと歩いていった。

「悪いねアリソン君。手間を取らせて。」

イクストーバ王国のベネディクト殿下は、親友でありロクシエ空軍の女性パイロット、アリソン・シウルツ少佐に詫びの言葉を掛ける。しかし、アリソンはそんな言葉全く気にしていないようだった。

「いいのよ。ベネディクトさん。私もあの戦闘機にはすごく興味があるから。」

「けどお父様、これって権力の濫用じゃ？」

と突っ込むのは、ベネディクトの娘で真面目な性格なメリエル。将来のイクストーバの女王となる人物は、ルーズな両親が反面教師となっているのか、今回のことを気にしたようだ。

ベネディクトはイクストーバ王室の一員であることと、アリソンとのコネを使って無理やり間近でニホンの戦闘機を見る機会を手に入れたのであった。

「大丈夫大丈夫。ロクシエ大統領にも話は通してあるから。」

「本当に大丈夫かしら？」

「それにメリエルだって、あの戦闘機に興味あるだろ？」

「それは・・・まあ。」

実際の所、メリエルは物凄く興味があった。ちなみにメリエルの場合はパイロットである父親やアリソン、そして弟とその恋人と違ってエンジニアとしての興味があった。

しかし、根は真面目であるからその本心を押し殺していた。

「あ、見えてきたわよ。」

3人の眼前に、2機の異形の戦闘機が姿を現した。未だジェット機が登場していないロクシエでは、後退翼やプロペラのないデザインは、新鮮さを通り越してこの世の物とは思えない物であった。

事実、この日F15の姿をニュースでみた国民の多くは、F15が本当に飛行機なのかと疑ったそうだ。

それはともかく、着陸したF15の側ではロクシエ空軍の人間と航空自衛隊のパイロットや派遣されてきた整備員が何事か話し合っていた。

アリソンは比較的手の空いていそうな整備兵に声を掛けた。

「ちよつと、そこのあなた！」

「え！？・・・あ！？何でしょうか少佐殿？」

「一体今何を話し合っているのかしら？」

「はあ、あの日本の戦闘機を格納庫へ移す段取りを話し合っているのです！とところで少佐殿、一応ここから先は関係者以外立ち入り禁止なので・・・その、そちらの方たちはどう見ても民間人ですし。お引取り願えますか？」

整備兵がベネディクトとメリエルに怪訝な視線を向けて言う。ベネディクトはともかくとして、メリエルは16歳。あまりにも場違いである。

「それなら大丈夫よ。既に上の許可は取ってあるから。これがその書類。」

アリソンが懐から書類を出して、整備兵に見せる。

「はい!？」

整備兵は目を丸くした。空軍の総司令官やなんと大統領のサインまであった。

「ええ!？」

「そう言うわけだから、通るわね。あ、あとこの2人についてはそこにも書いてある通り他言無用でお願いするわね。」

「ハア・・・わかりました。」

整備兵はいまだ目の前の現実が信じられないのか、夢でも見ているような表情をしていた。

「あーあ。本当にこんなことしちゃって良いのかしら?」

「いいのいいの。メリエルちゃん、そんなに細かいことばかり気にしていると、お母さんのような良い女王様にはなれないわよ。」

「それは何か間違っていると思いますけど・・・」

アリソンの言葉に、メリエルは顔を歪ませたまま答えるしかなかった。

その後も近づいてきた兵士や整備兵を書類で黙らせると、3人は機体のすぐ側まで進んだ。

「近くで見るとやっぱり大きいわね。」

アリソンが見上げながら言う。

「ロクシエやスー・バー・イルの戦闘機とは次元が違うな。」

アリソンは現役軍人だが、ベネディクトも元航空兵である。戦闘機に対する知識はそれなりだ。そんな二人にしても、目の前の戦闘機は驚きの塊だった。

そんな関心している2人に、またも声が掛けられる。

「ちょっとそこのお三方。あんまり近づきすぎないで下さいね。」

やってきたのは、見たことも無い服を着込んだ30代前半と思いき男だった。

「あなたは？」

「失礼した。日本国航空自衛隊の日高正道3佐です。」

「ロクシアーヌク連邦空軍のアリソン・シュルツ少佐です・・・て、あなたさっき空中で答えた？」

「あ！？ああ、あの時のパイロットか。」

「ええ。」

「本来ならあんまり機体には近づいて欲しくないんだけどね。ロクシエの兵士から、そちらの2人を含めて便宜を図ってくれって言われたから。」

「いやあ、御迷惑をお掛けしました。私はベネディクトと申します。こっちは娘のメリエルです。私もパイロットなので、見たことも無い機体には興味が湧いて仕方が無いんです。娘も機械に興味がありますので。」

元軍人であり、相手の気持ちがかかるからか、ベネディクトが謝る。

「はあ。まあ、こちらの指示に従って下さる範囲でなら、見てもらって結構ですよ。とにかく、それ以上は近づかないで下さい。」

「ありがとう、三佐・・・ところで、三佐と言うのは？」

「三佐は確か少佐で良かったわよね？」

「ええ、アリソン少佐の言うとおりです。」

「ほう。その歳で少佐とは、さぞや優秀なんでしょうね？」

「いえいえ。私は防大、つまりは士官学校出だから出世が早いだけですよ。」

「それでも大したものだ。それで日高三佐、よろしければこの戦闘機に関してお教え願いたいのだが？」

「ええ、話せる範囲内でしたら構いませんよ。」

日高は3人にF15の性能などについて話し始めた。

F15J戦闘機は既に30年近く飛んでいること。最高速度は2

000kmを超えていること。主兵装はミサイルというロケット誘導兵器であること、機関銃も装備していること、全天候型の機体であることなど、日本人からすれば市販の本でわかる程度の情報だけであった。

しかしながら、もちろんロクシエの2人にはビックリの連続である。速度、武装、爆装などどれをとっても現在ロクシエにある戦闘機とは次元が違っていた。

「凄いですね。こんな戦闘機が主力戦闘機なんですか？」

「他にも数タイプ違う機体はありますが、基本的にはこのようなジェット戦闘機が主力です。まあ、数はそんなにありませんがね。」

「あの、日高三佐。この飛行機はジェット・エンジンで飛ぶって言いましたよね？いったいどんなエンジンなんですか？それにさっきリーダーって言いましたよね？それって何ですか？」

メリエルが目を輝かせながら尋ねる。日高は彼女の質問に簡潔に答える。ちなみに彼女が質問した両者とも、ロクシエにはまだない。

「すごい！それだけの物を実用化しているなんて。あの日高少佐、もう少し近づいて見て良いですか？」

「おい、メリエル。」

ベネディクトが止めようとするが、日高は笑って言った。

「じゃあ、少しだけだよ。他の人の迷惑にならない範囲でね。」

「ありがとうございます！」

メリエルは飛び上がらばかりに喜び、じつくりと機体を見始めた。

「すみませんね、三佐。娘が迷惑を掛けて。」

「いえいえ。子供は元気が一番です。」

「もしや、三佐にも子供が？」

「ええ。半年程会っていませんけど。声の大きな元気が取り柄の女の子です。」

すると、彼は懐から財布を出して、中から写真を取り出した。それを見せられて、アリソンとベネディクトはカラー写真に驚きつつも、彼と共に写っている家族に目をやる。

「あら、可愛い！」

「ほお、確かに元気そうな娘さんですね。」

「ありがとうございます。」

「娘さん、なんと言うお名前なんですか？」

アリソンが聞く。

「愛です。ちなみに、妻は舞です。」

「是非とも一度会ってみたいですね。」

すると日高はこう答えた。

「会うのは無理ですが、2人の声なら聞けますよ。」

この言葉に、アリソンとベネディクトは意味がわからず、キョトンとした。

異世界を飛ぶ者たち（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それから2度目になりますが、Mixiをやっています。YAD AMONで船の写真が目印です。よろしく。

前途と秘密

24日午前 日本・東京 首相官邸

「まさかたった4日で完成するとは思わなかったな。」

春川首相は目の前に置かれたDVDのディスクに目をやる。その中身は、先日製作が始まったばかりの政府広報用のCMだった。

「今日の午後から放送開始らしいですよ。」

「舞さん、どんだけ完成を急かしたんだ？」

「あの人らしいですね。」

小泉副首相も苦笑いするしかなかった。

「13歳でトップアイドルになったと思ったら15で電撃引退。16歳で子供生んで、そして29で電撃復活・・・思いつきで生きていくようにしか思えない人だからな。旦那さんもああ言う性格じゃなきゃやってられないだろうに。」

「とにかく、せっかく完成品を送ってきてくれたんですから、早速見てみましょう。」

「だな。」

2人はパソコンにDVDをセットして、再生した。

CMは数タイプ作られていた。765プロ単体と876プロ単体、そして両者合同バージョンがあり、さらにそれぞれ1分版と30秒版があった。

内容はそれぞれの事務所のアイドルがステージ用の煌びやかな衣装に身を包み、「まつすぐ!」と「HELLO!」と言う明るい曲調の歌を歌いながら踊り、最後に政府側が提示した字幕が付くと言う、出演者の数が多い割りには、意外とシンプルな内容だった。

それでも、現在転移後の混乱下にあつて全く新しいCMが流されていない状況であるから、注目されるのは間違いなかった。

「うん。舞さんやアイドルたちは、がんばってくれたな。曲も元気が湧く曲だから、塞ぎこんでいる国民を勇気付けてくれるだろうな。」

「そう願いたい物です。」

「国内向けはこれで良いとして、舞さんたち今度は海外向けのCM作りか。」

「何でも今日から数グループにわかれて沖縄から北海道に回るそうですよ。」

小泉の言葉に、春川はあの高木社長や石川社長、そして舞さんらに扱き使われるアイドルたちの情景を思い浮かべた。

「彼女らも大変だな。あのプロデューサー君なんか過労で倒れなければ良いけど。」

「ですね。・・・ところで、話は変わりますが首相、実は複数の商社から今後の貿易に関する問い合わせが外務省や経産省に来ているそうです。」

「だろうね。ロクシエとの交渉は比較的早く進んでいるし、今のところ外交面でも大きな問題は無い。トリスティンと違って治安も良く、技術力も進んでいるからマーケットとしても魅力的だ。それに向こう（ロクシエ）の企業からも、既に大使館へのアプローチが来ているらしいからね。けどなあ、こればかりは国交が結ばれないとな。」

「国交がなくても貿易をした例はありますが・・・」

転移前の日本でも、国交の無い台湾や北朝鮮（かなり昔）と貿易していた例がないはない。しかし、あの時とは状況が違いすぎる。まず日本もロクシエも最近接触したばかりの未知の国家なのだ。お互いの文字を訳すシステムが無いから、文章で合意を交わすことさえ出来ない。

「ロクシエ政府の出方もあるしな。とにかく、ロクシエに派遣している使節団の帰国待ちだな。それと、現地とこっちでの交渉か。」

日本からロクシエへ派遣した使節団の内、残留しない半数は間もなくロクシエを引き揚げて、サクラスへの使節団を運んだ輸送機（当初は護衛艦を使う予定を変更）で帰国する予定だった。

また日本へ派遣されているロクシエ側の使節団も、日本側から許可を受けて半数を暫定大使と大使館要員として残し、間もなく博多港から船で帰国の途に着く予定だった。

ちなみに、同様にトリスティン使節団も同様に日本国内の視察を終えて、今度は硫黄島経由で帰国する予定であった。

「ロクシエの方はかなり前向きだそうです。先ほども申したとおり、既に向こうの貿易会社から接触がありましたし。それに・・・」

「わかってる。ロクシエ政府からもね・・・だが急ぎすぎも考え物だ。とにかく、ロクシエに関しての情報をもう少し得てからだな。じゃないと俺たちもそうだけど、何より国民や議会が納得しない。」

「ええ。」

「やれやれ。諸島や 諸島の調査も頓挫したままだし、在日外国人の問題も未だ解決の糸口さえ見えない有様だ。」

「けど、そろそろマズイですよ。特に答えをはぐらかしている在日米軍なんかカンカンですよ。」

「だけどなあ、いくら自衛隊の戦力が足りないからと言って在日米軍を派遣するとなると。しかも今後の独立国設置の提案付きだ。簡単には決められない。」

「ですね・・・」

2人は溜息を吐いた。

一件順調そうに見えて、全然順調ではないのが今の日本であった。先ほどの政府広報のCM完成と、早朝にもたらされたサクラス帝国への使節団が、無事に経由地であるロクシエ連邦首都に到着したと言うのが、数少ない明るい材料だった。

24日午前 ロクシアーク連邦・連邦首都 国際空港

アリソンとベネディクト、メリエルの3人はこの日何度目になるかわからない、驚くべき事態にまたも直面していた。

日高三佐が私物を入れたバツクから、小さな板のようなものと、それに附属する形で繋がっている細いケーブルのようなゴム地で包まれた物。3人は最初、それが一体何であるのか全くわからなかった。

「あの、日高三佐。それは一体何ですか？」

ベネディクトが興味津々で訪ねる。

「これはI Podと言う音楽を聴く機械です。」

「つまり、ラジオですか？」

アリソンは音楽を聴くという言葉と、目の前の物体の大きさからラジオではないかと思った。これまでの日本人と会った経験や、娘のリリアやその恋人であるトレイズの話を総合して、彼女は技術が進んだ日本人が極端に小型化したラジオではないかと思ったのだ。

ところが、日高の答えは予想を斜め上行くものだった。

「いいえ、ラジオではありませんよ・・・そうですね、この国には音を収録して聴く機械・・・レコードってありますか？」

「ええ、ありますよ。」

このベネディクトの答えに、日高は説明が楽で済んだと内心思った。

「そいつは助かる。この機械は、そのレコードと同じような物です。」

「

「え！？つまり、その中に音楽が録音できると言うことですか？」

アリソンが驚きの声を上げる。当たり前と言えば当たり前だ。彼女の知るレコードは直径が30cm近くもある円盤なのだ。さらに、音を出すためのプレーヤーを含めればかなり嵩張るものとなる。

しかし目の前の板状の機械は、どうみてもポケットに入るサイズだった。

「ええ。しかも再生も出来ますよ。このイヤホンを通して聞くんです。こんな感じで。」

日高はイヤホンを自分の耳へと持って行き、見本を示してみせる。

「それ、本当に聴けるんですか？」

どこか嘘くさそうな表情でメリエルが聞く。日本人の技術は色々と聞いているし、戦闘機を見てもわかるが、幾らなんでもそんな機械は無理だろうと思ってしまったようだ。

しかし、日高は笑いながら返す。

「じゃあメリエルさん、このイヤホンを両耳につけてください。」

「え！？はい。」

彼女は言われるまま、イヤホンを両耳につけた。そして日高はボタンを操作して、音楽を再生する。もっとも、再生前に操作した時に発生する電子音を聞き、メリエルは内心驚いていたのだが。

「じゃ、再生と。」

メリエルが耳を澄ます。

『今目指してく、私だけのストーリー！・・・』

「嘘！？すごい、本当に歌が聴こえる！」

思わず声を上げてしまうほど、メリエルはビックリした。さらに彼女は耳を澄ませて歌を聴く。

『さあ笑顔になろう！ずっと・・・』

雑音のない、クリーンな音だ。レコードよりも数段上の音である。そして聴こえてくる曲もこれまでに聴いたことのないようなメロディである。

「聴いたことのないメロディ・・・けど、何か元気が出るようないい歌ね。」の歌ってる女子の声も心に響いてくるような。」

「そう言ってもらえると嬉しい。実はその歌を歌っているのは私の

娘なんだ。」

「え？じゃあ、娘さんは歌手か何か何ですか？」

「いや、アイドル。」

「「「アイドル!?!?!」」」

3人とも声を上げる。

転移後の各国では、言葉はちゃんと通じる。しかしながら、通じない言葉もあるようだった。例えば相手の言葉に、それに該当する単語が無い場合だ。

「あ、そうか。アイドルって日本語だよな。英語のそれとも意味が違うし・・・そうですね、アイドルって言うのは歌も踊りも演技も出来る、若い芸能人を指す言葉とでも言いましょうか。」

「なるほど。覚えておきましょう。」

ベネディクトが意味を理解し、フンフンと頷く。

「妻も昔は一世を風靡したアイドルでしてね。愛・・・娘はそんな妻に憧れ、そして追い抜くことを目指していました。先日その夢を叶えたばかりでしてね。父親としても鼻が高いです。けど、何より実際に娘の才能を認めてもらえることが何よりも嬉しいです。」

「娘さんは今何歳ですか？」

「13ですよ。」

「へえー。じゃあ私よりも3つも年下なんだ。」

メリエルが感心する。自分よりも若い女の子が売れっ子の歌手であることに、感じるところがあつたのだ。

と、そこでアリソンがあることに気づいた。

「あら？日高三佐は今何歳ですか？」

「えー！？31ですけど？」

「奥さんは？」

「29ですが？それが何か？」

「それで娘さんは13なんですよね？・・・て、それじゃあ奥さんは16、あなたは18の時に子供を作ったんですか？」

「ああ・・・まあ、そう言うことになりますね。」

日高が視線を不自然にずらす。それを見て、アリソンが意地悪そうな顔をする。

「ふーん・・・日本の士官さんも意外とやるんですね？」

「そう言う勘繰り方は止めて下さい！だったら、アリソンさんはそう言う浮ついた話が一切ないって言うんですか？」

「うー！？」

アリソンは正直痛いところを衝かれたと思った。

そんな2人の低レベルな遣り取りを見て、ベネディクトが両手を広げる。

「やれやれ。お2人とも子供もいるんですから、その辺りにしておきましょう。それよりも日高三佐、私にも娘さんの歌を聞かせていただいてよろしいですか？」

「どうぞ。ちなみに、この機械には1000曲近く入ってますから、何か別の歌でも良いですよ。」

「何と！？いやはや、今日は驚かされてばかりだ。こんなに驚いたのは、あの壁画を発見した時並だ。」

「それは一体どういうことですか？」

その瞬間、ベネディクトがしまったと言う表情をし、メリエルが呆れ顔になった。

「ええとですね。」

「ベネディクトさんたら・・・」

アリソンも苦笑いするしかない。そして訪れる沈黙。

「あ・・・アハハ・・・」

部屋の中に、ベネディクトの乾いた笑い声だけが響いた。

前途と秘密（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

最後のシーンは、もしかしたら書き直すかもしれません。

去る者と来る者

25日目午後 日本・首相官邸

「それ本当なのか？」

首相執務室内に春川の声が響く。彼が驚いたのはある報告による物であった。

「はい。トリステインの鉱山にて採取されたサンプルから、タンタルなどのレアアース数種類が確認されました。」

書類を読むのは、もはや御馴染み、春川の相棒となっている小泉副首相だ。

その報告は、経済意図産業省からもたらされた物であった。先日トリステインへ派遣した使節団が他国へ向かった使節団より一足先に帰還した際に、トリステイン政府からの贈り物（ほとんどが美術品）と多数の文物を持ち帰っている。

その中にはメイジが作った『ポーション』なども含まれていたが、日本政府がとも知りたいトリステインで算出される物資や収穫される植物などのサンプルもあった。

ただし、この内植物のサンプルも実際にはトリステインの気候が激変したことで、あまり約に立たないと言える。

しかしながら、鉱物資源となれば話は別である。これは気候の影響などは受けないからだ。

現地使節団からの報告によれば、それらレアメタル（報告書内ではそれらしき物とされていた）は、いずれも『風石』と言う船を飛ばすために必要な石を掘っていた鉱山で見つかったらしい。

現地に派遣された専門家の人数が限られているので、具体的な埋蔵量などはわからないが、鉱山の規模から見て、それなりに見込めるとのこと。

「そうか・・・しかしそうなるとまた色々と厄介なことになりそうだな。」

「ええ。経団連あたりが黙っていないでしょう。しかも、相手はトリスティンですからね。」

トリスティンに関しての報道は、現在の所政府発表に限られている。それでもトリスティンという国の情報はそれなりに流出している。だから一般国民でも、トリスティンが魔法を使う人間が使えない人間に対して貴族制度（つまりは支配制度）を敷いていることや、科学レベルとしては地球の中世程度しかないと位は知ることが出来た。

これまで、転移直後の混乱によって自分たちのことで精一杯であった日本国内の人々も、食料や資源に当座の目処がついたことが分かると、心に余裕が出来ていた。すなわち、他のことに頭を回すことができるようになったことだ。

その対象が日本の外に向くのは当然のことであった。現在発見されている外国のうち、ロクシェ連邦は多少科学力が劣っているものの、日本より大きな国で外交力もある国だと言うのが大方の見方で

あつた。

しかしトリステインの場合は、リアルファンタジーの国と言う見方は良いとして、自分たちより遙かに遅れた野蛮な国と言う見方が出ていた。

「ネット上では、既にトリステインへの強硬論が噴出しているそうです。」

「勝手なことを言ってくれるな。そんなに俺を悪役に仕立てたいのかな？」

半ば自嘲気味に春川は言った。

「冗談はともかくとして、どっちにしるトリステインが今後我が国の有力なレアメタル輸入先となる可能性が出てきた以上、交渉を加速させるべきです。」

「そうだな。だが、どちらにしる向こうの使節団が帰国した後じゃなきゃ話は進まない・・・それまでに打てる手は打っておかないな。」

「トリステインとロクシエの使節団が帰国するのは明日です。そうになると、少なくともさらに数日は掛かりますね。」

「そうだな。やれやれ、正式に国交を結んで貿易出来るようになるまで、一体どれだけ時間が掛かるやら？」

「少なくとも、後2〜3ヶ月は掛かるんじゃないんですか？」

小泉の答えに、春川は溜息を吐いた。

「だよな」。ま、愚痴を言っても仕方が無い。出来ることからやろう・・・そろそろ閣議の時間だしな。やれやれ、行くとするか。」

春川はそう言つと、席から立ち上がった。

26日目午前 日本・横須賀港

「それでは伯爵、陛下と家族にくれぐれもよろしくお伝え下さい。」

横須賀港の海上自衛隊用の埠頭。そこに着岸している輸送艦「おすみ」に、これから帰国するモンモランシ伯爵率いるトリスティン使節団は乗り込まんとしていた。

海外からの使節と言つことで、外務省の役人や自衛官も正装で並び、彼らを見送る。未だ正式な国交は結ばれていないが、こうした演出はそれを目指す上で重要である。

そんな見送りの人々の中に、エレオノールの姿もあった。彼女は暫定駐日大使として他に数名の随員と共に、日本に居残るのである。だから、これから先に帰国するモンモランシ伯爵たちに、家族への手紙と挨拶を託した。

そんな彼女を、モンモランシは少しばかり不憫そうに見ていた。

「うむ。しかし、エレオノール女史。本当に大丈夫かね？」

「何がですか？私には大使は務まらないということでしょうか？」

「違う。遠い異国の地に残ることだ。他に随員がいるとは言え、それ以外は見ず知らずの人間ばかり。色々と不安もあるのではないか？」

若い女性が1人、つい一ヶ月前までその存在すら知らなかった国に残るのである、不安で押しつぶされやしないか、モンモランシはそのあたりを心配していた。

しかし、エレオノールは自身たっぷりに答える。

「確かに、不安がないと言えば嘘になりますが、これも我が国のため、陛下のため。それくらいの事で気後れしてはいただけません。それに、不安はありませんが、これからの日本駐在は私としては非常に楽しみにしています。ほんの10日間程見ただけですが、この国には興味深いものがたくさんあります。それをじっくりと見てみたいのです。」

「・・・そうかね。ならよろしく頼むよ。家族への手紙は私が責任を持って届けるから安心するように。」

「はい。よろしく願います。」

「それでは伯爵、出港時間が近づいているのでお乗り下さい。」

「うん。」

自衛隊員に案内されて、モンモランシ以下トリスティン使節団の人間は「おおすみ」に乗り込んでいった。

そして30分後、同艦は汽笛を鳴らしながら埠頭を離れた。

「伯爵、お元気で！」

「君もな！！」

「エレオノール女史！お体にお気をつけて！！」

「がんばってください！」

最後の挨拶の時間が過ぎ、「おおすみ」は東京湾へと走り出した。

こうして、トリステインからの使節団はエレオノールを残して帰国の途に付いた。また同時刻、九州の博多港からもロクシエ使節団を乗せた客船がロクシエ海軍と海上自衛隊の護衛の元出港、ロクシエ本国への帰途に付いている。

彼らが本国へと持ち帰る情報や報告によって、日本の運命は大きく変わるといえた。

春川は、首相官邸で両使節団が無事に出発したことを知り、安堵の息をつきつつ今後の日本がやるべきことを考えていた。

28日目午後 サクラス帝国西部・サンウーヌス

サンウーヌスの港は、久方ぶりの熱気に包まれていた。この日口

クシエ連邦へと向かった使節団が帰還したからである。

しかしながら、住民たちが興奮しているのはそれだけではなかった。

ロクシエへと向かった使節団が乗り込んだ客船、さらにそれを護衛してきたと思われるロクシエ連邦の槍の国旗を掲げた軍艦。ここまでは良い。ところが、1隻全く見慣れない軍艦らしい艦影がくっついて来ていた。

その艦はロクシエの軍艦と同じく、艦体を灰色のような暗い色で塗装している。しかし、そのデザインは明らかにロクシエの軍艦とは違っていた。さらに艦首には白地に赤い円、艦尾には同じく白地に赤い円と16条の赤い線が描かれた旗を掲げていた。

その姿を見て、狂喜乱舞したのはやはりこの人であった。

「見てみてナバル、あの艦は随分と面白い形をしているわ！大砲を積んでいるから軍艦みたいだけど、たった1門なんてとても軍艦には見えないわ。それにマストに付いている色々な機械や後ろの平べったい甲板は何なのかしら？あ！？待って、その前に煙突からほとんど煙が出てないわ！一体どんなエンジンで動いているのかしら？」

「あのなメイベル。少しは静かにしたらどうだ？それに俺にそんなこと聞かれたって知るわけ無いだろ。」

「だってー。」

久々の登場、メイベルとナバルの2人組みだった。

「まあまあナバルさん、メイベルの暴走はいつものことですから。」

「そうそう。何を今更よ。気にしたら負けよ。」

パセラとレジーナのコンビがナバルを窘める。

「ありがとう。けど、さりげなく2人ともひどいこと言ってない？」

「ひどいも何も、間違っではないと思いますけど。」

「そうよ。メイベルも少しは自重と言っ言葉をしりなさい。」

「はい・・・」

友人2人に言われて、メイベルはシュンとしてしまう。

「けど、本当にあの船は一体どこの船かしらね？」

「さあな。けど、大砲をこっちに向けているわけでもないし、ロクシエの軍艦と一緒に来たんだから別に危険じゃないだろ。」

ナバルは相変わらず、さっくらばんな意見を口にする。

「ナバル、もう少し緊張感を持ったら？」

メイベルは彼の緊張感のない姿に呆れてしまった。

「今は持つ必要はないだろ。もちろん、あれが侵略者だったら俺も容赦せず戦っけどな。」

「まあ、後先考えずに戦ってもらうのも困るけど・・・」

極端なナバルの考えに、メイベルはまたも呆れてしまった。

それから間もなくして、まず使節団が客船から降りてきた。そして、挨拶に出たメイベルに対して先ほどの艦の接岸許可を求めた。

「ニホン？それがあの艦の国なの？」

「はい、そうです聖女様。彼らは我が国に友好と貿易を求めてやってきたのです。あの軍艦、護衛艦と言っそうですが。あの艦には、かの国の使節団が乗船しています。」

「ふーん・・・まあ、そう言うことなら断る理由は無いわね。わかりました。」

メイベルは関係者に取り計らって、ニホンの軍艦の接岸を認めさせた。

その30分後、ようやくニホンの軍艦も遅ればせながら着岸した。メイベルはその姿を間近に見て、先ほどの興味が再び湧き上がって来るのを感じた。

しかし、これから相手の大使が降りてくるのでなんとか自重した。

まもなく、タラップが降ろされ軍人らしき男が先頭を切って下りてきた。その後ろに、女性が一人続く。

「初めまして、あなたが聖女様ですね。日本国海上自衛隊、護衛艦「おおなみ」艦長の坂本良馬一佐です。」

「メイベル・ヴァイスです。ようこそ、サクラス帝国へ。」

「歓迎感謝します。ミス・メイベル、紹介します。我が国の使節団団長の朝倉亮子女史です。」

「初めまして、聖女メイベル。使節団団長の朝倉亮子です。よろしく。」

「メイベルです。よろしく。」

2人の女性は笑顔で握手を交わした。

去る者と来る者（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

2人の姫君

28日目午後 サクラス帝国西部・サンウーヌス 海上自衛隊護衛艦「おおなみ」

「すごいすごい！」

護衛艦「おおなみ」の艦内で、1人騒いでいる少女がいた。他ならぬ聖女メイベルである。

「あの、失礼ですが本当に彼女が南アルテース連邦の大統領で、西アルテースの女王なんですか？」

日本使節団の随員が、サクラス側の関係者に尋ねる。ちなみに、メイベルやサクラス帝国に関する情報は、一通りロクシエに滞在していたアステルらサクラス帝国使節団から伝えられていた。

「ええ。それは間違いありません。」

聞かれた側も苦笑いしている。

「はあ。この国大丈夫なのか？」

すると、そんな随員の言葉を聞いた人間が口を開いた。

「あら、アステル大使もそうだけど、私はああ言うキャラの元首がいてもいいと思うわ。むしろ楽しいし。」

「朝倉団長。まあ、そりゃ面白くないことはないですけど。あれで

本当に国を修められるんですかね？」

「そんなこと言ったら、我が国の首相だって同じでしょ。頼りなさじゃこの世界の指導者でトップじゃないかしら？」

「ああ、なるほど。」

随員もウンウンと頷いた。

ちなみに、頷かれてしまった側は同じ頃。

「ヘックション！！」

「首相風邪ですか？」

「いや、誰かが噂してるんだと思う。恐らく春日ハルヒか春彦あたりだな。」

春川首相は自分の噂をしている人間が誰であろうか、間違った目星を付けていた。

閑話休題。

「けどアステルさんに聞いたとおりね。あれはもうオタクね。」

坂本艦長や乗員に手当たり次第に質問しまくっているメイベルを見て、朝倉はそんな事を呟く。

「オタク？」

「我が国の言葉で、病的なまでに熱中する人間とでも言いましょうか。」

「なるほど。勉強になります。」

1人エキサイティングしているメイベルを尻目に、日本とサクラスの外交関係者はそれぞれ腹の探りあいをしつつも、交流を行っていた。

「おおなみ」が埠頭に接岸し、挨拶を終えると日本側の使節団团长である朝倉は、まずアステルからの紹介状を手渡した。さらに、朝倉はアステルに協力してもらって録ったビデオレターまで持ってきていた。

もちろん、それらを見てメイベルが狂喜乱舞したのは言うまでもない。

これはメイベルが機械好き、新しい物好きということのアステルから教えられていたこともあるが、朝倉曰く「ただの手紙だけじゃ面白くないわね。」という考えの元思いついたらしい。

さらに彼女は大胆にも「おおなみ」の艦内を案内することを提案したのだ。日本側関係者は、さすがに一国（実際には2国）の代表が得体の知れない国の軍艦に乗り込むわけないと予測していた。

ところが。

「ええ！？いいんですか！じゃあよろしくお願いします！」

と即答したことに、朝倉以外の日本側関係者は啞然としてしまっ

た。

ただし、さすがにサクラス側もこれには慌てて、結局メイベルに警備の人間をつけると言う条件付で乗り込んでいる。

なお、日本側も本当に重要な所を見せたりはしない。だからCIは公開されていないし、艦橋や機関室もサラッと遠めに見せただけだ。それでも、メイベルには新鮮な所が多かったらしく、彼女は終始ご機嫌であった。

また艦の外も通常日本で民間人に公開出来る範囲の物は公開した。

「こちらが後部ヘリコプター甲板です。」

「ヘリコプター？」

この日何度目になるかわからない疑問の言葉を、メイベルは坂本艦長に対して言った。

「回天翼機のことです。ご覧になればわかります。」

格納庫の扉が開けられ、搭載されているSH60Kヘリが姿を現す。

「ああ、垂直離着陸機のことだったのね。へえ、近くで見てもよろしいですか？」

「どうぞ。」

メイベルは格納庫へと入り、機体を見る。

「こいつはラクスで見た奴よりもカッコいいな。」

メイベルと違う視点からへりを見ている人間がいた。警備役のナバルである。

「こいつは、軍艦に積んで一体どんなことに使うんだ？」

ナバルは手近な乗員を呼び止めて訪ねた。

「この機体は主に対潜・対艦そして輸送任務につかいます。」

「うーん、対潜と対艦と言われてもよくわからんから、もう少し詳しく頼む。」

ナバルははつきり言って頭がよろしくない。考えるより先に体を動かすタイプだ。計算が得意という一面もあるが、それにしても、考えてやると言うより体を動かしているに近い感覚でやっている。

ただし、それを差し引いても聞いたことの無い言葉だったので先ほどのセリフとなったわけだ。

「対潜は潜水艦攻撃、海の中に潜っている敵艦を攻撃することです。対艦は敵の軍艦を攻撃することです。」

「海の中を潜る？そんなこと出来るのか？」

ロクシエやトリステインと同じく、サクラスにも潜水機能を備えた艦船はない。そもそも海軍や海運も沿岸部の限られた物しかなく、むしろ河川や湖を使った交通の方が発達している。

「我々の元いた世界では、もう何十年も前からある技術ですよ。」

「その話私にも聞かせて!!」

「わああ!?!」

どこから聞きつけたか、メイベルが何時に間にか自衛隊の側に立っていた。

「メイベル、お前何時の間に?」

「うーんと、海を潜るあたりから。」

凄まじい地獄耳ぶりに、ナバルは呆れかえっていた。

「お前ってやつは。」

「メイベルさん、よろしければ私がお教えしますよ。」

メイベルの後ろから坂本が声を掛ける。

「あ、艦長さん。是非とも教えてください。」

メイベルは目を輝かせて言った。

「だめたこりゃ。」

ナバルはもはや処置なしと言った表情であった。

一連の光景を見て、朝倉が呟いた。

「これなら暇しないで済みそうね。」

同日午後 トリステイン王国・王都トリスタニア王宮

「長旅御苦労様でした、モンモランシ伯爵。」

王宮内の会議室において、女王アンリエッタは日本から帰ってきたモンモランシ伯爵を出迎えていた。この場には、その他の重臣たちも集まっていた。

ちなみに、海自の護衛艦隊への攻撃を独断で行った挙句、艦隊自滅を招いたゴンドラン、アカデミー長官とその一派が失脚したため、現在のトリステイン政府は比較的穏健な人物たちで固められている。

アンリエッタにしてみれば、転移前に起きたレコン・キスタとの戦争で裏切った高等法務院長のリッシュモンに続いての裏切りであったため、慎重に人選をして固めたメンバーである。

「お気遣いありがとうございます。」

「早速ですが伯爵、日本に付いての報告をお願いいたします。」

「は、それでは・・・」

モンモランシは2週間の視察、さらには往復の移動時を含めて体

験したことを、包み隠さず報告した。そこから語られるのは、映像だけでは決してしることの出来ない日本と言う国、そしてそこに住む人々の情報であった。さらに、この時点でトリスティンが極僅かしか得られていなかったロクシエに関する情報や、全くその存在を感知していなかった 諸島、そしてサクラス帝国に関する情報も彼の口から語られた。

モンモランシ伯爵の話は1時間ほどの長きに渡ったが、参加者全員真剣に聞いていた。

そして、彼が話し終わると場は沈黙に包まれた。日本をはじめ、新たに得られた国も含めて自分たちよりも大きな国ばかりであるという事実、また魔法ではない科学技術の恐ろしさを彼らは改めて認識したのであった。

「日本だけでも脅威であるのに、我が国よりも遥かに大きな国が他に2つもあるというのか・・・」

「下手をすれば亡国の危機だ。彼らが使う科学という力は魔法を圧倒している。あのジエイタイという部隊はたった30名で火竜を撃退したと言うではないか。侵攻されれば一溜まりもない。」

「これは一刻も早く、日本の求めている国交を樹立して、彼らが求める貿易を始めた方が良いのではないのか？」

「しかし、それでは日本に舐められっ放しだ。伯爵の言った島や未確認の国について、日本政府は何もこちらに報告してきていないではないか？何のために暫定大使を認めただ？我が国は別に領土を欲するわけではないが、一言くらいあつてしかるべきだろう？」

「外交において都合の悪くなることを言わないのは常道だ。そんなこと気にすることではない。それよりも、日本と有効に取引できる材料を見つけるべきだ。我が国が一方的に不利になる状況だけは避けねばならん。本当に内乱が起きるぞ。」

「そうとも。今年は作物が育ちそうに無い。先日の反乱騒ぎは抑えたが、いつ再び起こらんとも言えない。」

大臣たちから次々に意見が出る。

「ちよつと皆さん、それで話がまとまりません。議題を決めて話し合っていきましょう。」

財務大臣であるテムリの言葉で、一旦場が静けさを取り戻す。

「どなたか、意見のある方は？」

すると軍務大臣のグラモン元帥が手を挙げた。

「どうぞ、元帥。」

「私としては、早急に日本と国交は結ぶべきだと考えます。伯爵の言葉通りなら、日本と言う国はちゃんと条約を守る律儀な国のようです。不可侵条約を結べば良いと存じます。しかしながら、貿易に関しましてはそれなりに制限をつけるべきと思います。彼らの国には王はいるものの、実権のない象徴であり貴族制もない。そんな国と好き勝手に取引しては、あのミス・ホンダが言ったとおりの結果になってしまふ。」

すると今度はヴァリエール公爵が手を挙げる。

「私も同感だ。彼らが我々より優れている技術を持ち、魔法を超えているのは、認めたくないが事実のようだ。我々も一定の評価はしなければならぬ。だからと言って、我が国に対して不利になるようなことを好き勝手されるのは到底認められない。幸いにも、彼らは我が国より資源を買いたいと昨日打診して来ている。それを取引材料にすれば良い。」

「つまり、お二人は日本との交渉は進めるべきだと考えていると受け取ってよろしいのですか？」

アンリエッタの質問に、二人は頷いた。

「その通りでございます。ただ、相手の力を恐れるあまり、弱腰や一方的な受身になってはいけないということです。言うなれば、今後の交渉次第と言うことです。」

ヴァリエール公爵はそう断言した。

そして、アンリエッタの側近中の側近であるマザリーニ枢機卿も口を開く。

「そしてその交渉は可及的速やかに進めるべきと考えます。残念ながら、先ほどの話でもありましたが、我が国には時間があまりありません。早め早めに手を打たなければ、手遅れになります。」

アンリエッタは目を瞑ってしばらく考えていたが、決断した。

「わかりました枢機卿。日本との早急な交渉の場を設けましょう。すぐにホンダ大使を呼び出して下さい。」

「かしこまりました。」

こうして、トリスティンも動き始めた。

2人の姫君（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

カレーと交渉術（前書き）

ジョン・ドー先生からの指摘で、2011年10月26日に一部を変更しています。

カレーと交渉術

28日目夕方 サクラス帝国・サンウーヌス 海上自衛隊護衛艦「
おおなみ」

「本当に良いのですか？」

「はい、私は一向に構いません。」

厳しい表情の坂本艦長の言葉に、メイベルは笑顔で答える。そんな彼女を見て、ナバルやパセラ、レジーナと言った面々は呆れ顔になっていた。

この日、本来メイベルのスケジュールはロクシエから帰ってきた使節団の一部を出迎え、そのまま大統領専用機でサクラスへと戻るといふ物であった。

ところが、急に寄港した日本の護衛艦を見ている内について陽が沈んでしまい、夜となってしまった。生憎サクラス帝国の航空機は夜は飛べないので、結局メイベルたちはサンウーヌスに1泊する羽目に陥った。

メイベル自身は全く気にしていなかったが、担当者が色々と不便を強いられたのは言うまでもない。

そして、メイベルたちはそのまま「おおなみ」から降りてホテルに入るのが本来筋である。ところが、ここでまたも彼女の好奇心をうずかせる事態が発生した。

それは坂本艦長のこんな一言。

「今日はもうこの辺りでよろしいのではないですか？もうすぐ夕食の時間ですし。」

メイベルの我侭に振り回されているサクラス側の人間を気遣って、お引取り願うための発言であったが、その真意はメイベルに全く伝わらなかった。それどころか。

「夕食？そう言えば、日本の水兵さんたちはどんな食事を摂っているんですか？さっき厨房を見た限りだと、随分調理用品は整っていたようですけど。」

メイベルは、護衛艦の調理施設に感心していた。

「今日はカレーですね。」

「カレー？」

坂本の言葉にメイベルが首を傾げた。サクラス帝国にはカレーと言う料理はなかった。

「日本人なら誰もが愛している料理です。そして我が海上自衛隊では、海上での曜日感覚を失わないようにということから、本来は毎週金曜日に必ず出ます。しかし、今日のは単に材料が揃ったの作りやすいからそうしたそうです」

「カレー・・・あの、坂本艦長？」

「はい？」

坂本は大いに嫌な予感がした。そしてそれは的中した。

「私もいただいでいいですか？そのカレーという料理を。」

この発言に、坂本艦長や周りの人間は啞然としてしまった。今日出会ったばかりの国の、しかも軍隊にここまで友好的に接する国家元首など、普通にあり得ない。

もつとも、そんなことを言えば国王と大統領を兼務し、さらに修道女の癖に自分の宗教の根幹を否定するようなメイベルの存在自体が、有り得ないとも言えるのだが。

「あらあら。」

1人朝倉だけは彼女を見て笑っていた。

そして冒頭のシーンへと戻る。結局、坂本はメイベルの要請を受け入れることとなった。サクラス側関係者も渋々許可し、さらに使節団団長の朝倉から「友好のためだし、協力してくださらないかしら？」とまで言われては仕方が無い。

こうしてメイベルは「おおなみ」の艦内で食事をすることとなった。さらに坂本たち艦の士官を驚かせたことは、彼女が士官用ではなく土や曹が利用する食堂での食事を希望したことだった。

「普通に兵隊さんが食べている物を食べてみたいんです。」

彼女はニツコリと笑顔で言った。もちろん、ナバルやパセラたちもその巻き添えを食らうし、坂本艦長も艦長と言う立場上、一緒に

食事せざるを得ない。なお、朝倉だけは何も気にしていないようだった。

「本当に面白い女王様ね。」

朝倉はこの風変わりな女王兼大統領を、気に入ったようだった。

それはさて置き、メイベルは「おおなみ」の乗員たちが好奇の視線を向けるのも気にせず（ちなみにナバルたちは大いに気にしたが）、付き添いの乗員からトレーに料理をどう取っていくかのレクチャ―を受けた。

主食の米ライスにカレーをかけ、さらにサラダとパックに入った牛乳を受け取る。

「へえ、これがカレーか。いい匂い。米を炊くなんて変わってるわね。それに、このカレーも興味深いけど、この紙のパックに入った牛乳も面白いわね。」

「あの、メイベルさん。後ろが詰まりますので、そう言うのは座ってからお願いします。」

案内をしている乗員に言われ、メイベルはハツとする。

「あ、ごめんなさい。」

メイベルは慌てて前へ進んだ。そして今度は、使う食器について聞かれる。

「スプーンとフォークで良いですか？」

「ええ・・・あら？」

メイベルは用意されている食器の中に、二本の棒のような物を見つけた。

「やっぱり、外国の方にはお箸は珍しいですか？」

「お箸！？日本人はお箸を使うの？」

「え！？まあ、フォークやスプーンも使いますが、お箸は伝統的な食器ですね。けど、日本以外でも使っていましたよ。まさかここまで驚くとは、こっちもビックリですけど。」

「いや、そうじゃなくて。ドラゴンが使うお箸を使っている人がいるのが驚きで。」

「へ！？ドラゴン？」

メイベルのセリフに、朝倉を覗く日本人全員が目を見張っていた。

「ドラゴンが箸を使うんですか？冗談じゃなくて？」

「ええ、本当ですけど。」

これはドラゴンに対する認識の差としか言いようが無い。一心、日本側もロクシエにいるアステル経由で、フォルティアース大陸にはドラゴンがおり、その知能は人間並みとは知らされていた。しかしながら、やはり日本人が想像するドラゴンは、どちらかというトリステインで陸自を襲ったような、凶暴なものを思い浮かべてし

まう。箸を使つて食事をするなど、よつぱどの想像力ある人間で無ければ受け入れられないだろう。

坂本艦長ら「おおなみ」の乗員が驚いて当然と言えた。

「それは興味深い話ですね。是非とも聞かせて下さい、メイベルさん。」

ただ1人、朝倉だけはそう返すだけの余裕を持っていた。

同日夕方 トリステイン王国・王都トリスタニア 日本国暫定大使館

「案の定、トリステイン側から交渉を求めてきましたね。ククク・・」

暫定大使の本多聡子が、いつも通りの無気味な笑い声をあげている。そんな彼女に、恐る恐る質問をする人物がいた。

「あ、あの本多さん？」

「なんででしょうか？高風さん。」

質問したのは高風春名だった。彼女は現在、日本大使館に雇われる形で文書の通訳などをしている。また、本多らの求めに応じて辞書作りも手伝っていた。

話す方は、原因は不明だがどの国のどの民族とも何故か通じる。ところが、文書の方はそうはいかない。そのため、日本政府は早速

辞書作りを始めていた。文書が作れなければ、条約や契約締結を円滑に進めることなど出来ないからだ。

この作業には言語学者や、古代文字の専門家なども動員されているが、やはり未知の文字であるから色々と手間取っていた。ところが、トリステインに限って言えば日本語とトリステイン語を解せる人間が2人もいる。

生憎と1人はルイズと言う貴族様と主従関係にある以上、簡単に勧誘など出来なかったが、一平民として生活していた春名の方はなんとか確保できていた。彼女は現在、わずか18歳の少女であるにも関わらず、日本大使館にとって欠くことのできない存在になっていた。

そして、元々地球にいたところは秀才だったこともあり、仕事の飲み込みも早く、本多らの本職（外交）に関しても学びつつあった。

「案の定と言うことは、つまり予測の範疇だったと言うことですよね？」

「ええ。一昨日情報をリークしましたから。そして今日王室では日本から帰国したモンモランシ伯爵を出迎えての御前会議があったそうです。その席上でレアメタルの件が審議されて、向こうから我が国に交渉を求めてくるのは簡単に予測出来ることです。」

「何でそんな回りくどいことをするんですか？こっちから交渉したいんだから、そう言えばいいじゃないですか？」

「まあ、確かにそうするのがベストでしょうね。首相からも、積極的に交渉を行うよう指示されていますから。」

「だったらどうして？」

本多は『風石』の鉦山からレアメタルが出た事実をトリステイン政府に伝えた際、日本としてはその資源を多用している。すなわち、必要としていると遠まわしに伝えはしたが、それが是が非でも欲しいという表現はしなかった。

「第一に、日本側から弱みを見せなくなかったからです。こちらから幾ら金を積んでも欲しいという態度を取れば、足元を見られてしまいます。もちろん、自国の国益を最優先するのが外交ですから、トリステインがそうしても文句は言えません。ですがそれが予測出来るなら、私は日本国外務省職員として回避するだけです。」

「第一にってことは、他にも理由が？」

「ええ。第二にトリステインの外交能力を少しばかり探ってみたかっただけです。こちらがレアメタルの事実を開陳し、さらにモンモラソン伯爵が日本から帰国。これだけの材料が揃ってから、我が国に接触するまで、どの程度時間を置くか。もちろん、遅ければ遅いほど決断が遅いと言わざるを得ません。拙速が良いとは言えませんが、この状況で時間を掛けすぎてもらうのも問題です。そんな政府と付き合っていくのも、一考の余地が生まれたでしょう。」

そこで一旦言葉を区切ると、彼女は春名を一瞥した。

「ですが、トリステイン政府はわずか数時間で決断を下し、我が政府との交渉を望んできた。どうやら、アンリエッタ女王と取り巻きの人々はそれなりに出来る人物のようです。」

「試したってことですか？」

「ええ。今の政府はアンリエッタ女王の肝いりでようやく出来上がった政府です。つまり実力は未知数。無能では困りますから。そんな政府では、今後我が国のパートナーとなってもらうの価値などこれっぽちもないでしょうから。あ、もちろん有能すぎるのも困りますけど、さすがにそれはどうにもなりません。ククク・・・」

「それで、本多さんとしては今後どんな感じで交渉を。」

「それは身内であるあなたと言えど言えません。どこに目や耳があるかわかりませんから。ただ一言言っておきますけど、私は日本人です。日本の国益を考えています。しかし、日本だけの利益では長続きしませんからね。最大の果実をもぎ取りつつ、相手にもそれ相応の餌を与える。そういう交渉で行きたいと思っています。」

「・・・本多さんは本当に強かんですね。」

「いえいえ。こんなの外交の常識です。と言うよりも、交渉の常識でしょう。相手から一方的にもぎ取るだけでは上手く行かないことは、当然のことですから。高凧さんも、交渉術を身につけると良いですよ。もしかしたら、平賀君を奪えるかもしれませぬ。ククク・・・」

「な!？」

真つ赤になつた彼女を尻目に、本多は立ち上がって窓の外からみえるトリスタニアの街を眺める。

「ま、私がこの国に愛着を感じているからでもあるんですけどね。」

彼女は誰にも聞こえない声で、呟いた。

カレーと交渉術（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

最初は後半に日高三佐がシュルツ家の夕食に招待される話を考えていました。ところが、時系列的に既に彼は日本へ帰国したため、急遽差し替えました。

日本は外交下手と言われますが、個々の外交官を見れば優秀な人々がいたことは忘れてはなりません。ユダヤ人を救った杉原千畝領事、そして大韓航空機爆破実行犯を素早く捕捉したアブダビの大使館員たちです。

フォルティアースの車窓から

29日目午前 サクラス帝国 サンウーヌス〜ケオシイ間鉄道線上

日本国使節団の一行は、帝都サクラスへ向かうためサンウーヌスから途中のケオシイへと走る列車に乗り込んでいた。予定では、そのケオシイで船に乗り換えてサクラスへ向かう。

その日本使節団は本来サクラスにとってイレギュラーのお客であり、当然受け入れ準備など整っていなかった。それどころか、本来なら警戒されても良い存在である。

ところが、その日本使節団の内団長の朝倉他数名はなんと、聖女メイベルが乗る御召列車に乗車し、他の団員より（それどころか帰国したサクラス側の使節団よりも）早く一路ケオシイへと目指していた。

何でこんなことになったのかと言えば、全てメイベルのせいと言える。昨日護衛艦「おおなみ」乗艦し、半日以上も見学し、さらに兵隊用食堂で食事し、さらにその後彼女はカレーの作り方を延々1時間近くに渡って「おおなみ」の厨房員に聞くと言う、国家元首にあるまじき行動を起こした。

さらにそこで止まらないのがメイベルのクオリティである。日本と言う国とその技術力に興味を持った彼女は、サクラスに着くまでにその話を是非聞きたいと言い出したのである。

もちろんサクラス側も日本側もこの唐突な提案に驚いたわけだが、日本側の朝倉はあっさりとそれを了承した。ただし、乗車する人間

の定員などの関係から全員とは行かず、朝倉と彼女から選抜を受けた団員2名が乗り込んだ。

「これが我々の国、日本が以前いた世界の世界地図です。」

列車が発発すると、早速お互いの情報交換がスタートした。貴賓室内にはメイベルとナバル、パセラの3人と日本側の4人が入り、また日本側が用意した資料が置かれている。それ以上入ると狭くなるため、他の人間は締め出されている。

「へえ。これが・・・日本はどこですか？」

「ここです。この大陸の端っこにある島国です。小さいですよ？」

朝倉が地図の一点を指差す。

「確かに小さな国ですね。それにしても、随分と沢山の国があるんですね。」

「そうですね。転移・・・あ、異世界に飛ばされたと言う現象のことを我が国ではそう言ってるんですけど。その直前には200近い国がありました。」

「へえ。すごく多いのね。」

ちなみに、朝倉たちは既にアステルからフォルティアース大陸の国家や政治体制についてレクチャーを受けているので、メイベルに尋ね返すことはしない。

なお、メイベルたちの世界は基本的にこのフォルティアース大陸

(この場合東大陸)内の国家が中心だった。サクラス帝国は正式名を連合帝国と言う通り、複数の国家が集まって形成されているが、さすがに200なんて言う数にはならない。

一応その外にも別の大陸(フォルティアース大陸は東西と南の3つにわかれていた)や国家はあったのだが、貿易などは行われていなかった。

そのため、メイベルは朝倉の次の発言にも驚いた。

「日本は元いた世界で8割以上の国と貿易をしていました。」

「ええ！？それはすごいですね。」

すると朝倉に随行している団員が発言する。経産省から派遣された吉川清と言う男だ。

「これは我が国の地理的な宿命なんです。我が国では資源がほとんど出ませんでした。また食料生産量も限界がありました。そのため海外から原料や食料を輸入する必要がありました。そのため、我が国では特産品や原料を加工した工業製品を輸出し外貨を得て、それを元手に原料や食料を買うと言うサイクルを作っていました。ですから、より多くの国と貿易した方が有利と言うわけです。」

「なるほどねえ。あれ、そうすると・・・」

メイベルが何かに気づき、それを朝倉は見逃さなかった。

「さすがは頭が良いだけありますね。そう、我が日本は現在非常に苦しい状況に置かれています。だって国家の根幹を支える部分が消

えてしまったんですから。そのため、我が国は現在同じように転移した国々と早く国交を結び、貿易を求めているんです。」

「それは大変ですね。」

「まあ、それを克服するために、私たち外交官が各国に派遣されているんですよ。幸い今すぐに国民が飢えるような事態だけはなんとか避けられていますので。」

「私たちの国はそう言う心配しなくて良いですけど、取り敢えず御同情申し上げます。」

「そう言っただけでもありがたいです。」

「ところで、さっき国々で言いましたよね？日本は今のところどれくらい国と接触したんですか？」

メイベルはこの新しい世界に他に国がどれくらいあるのか全く想像できなかった。

もともと海洋技術があまり発展しておらず、大陸内の自己完結型経済を営んできたサクラス帝国はこの転移後の世界において周辺の搜索はほとんど行っていない。と言うよりも出来ず、ロクシエのように相手が接触してこなければわからない状況であった。

「現在分かっている所で、御国を含めて3カ国です。ロクシエとトリステイン王国です。」

「ロクシエはわかりますが、トリステインとは？」

「我が国の東方にあらわれた小さな国です。既に互いに使節団を派遣していて、国交締結へ向けて交渉中です。」

「まだ他にも国があるのね。」

彼女の言葉に、吉川が発言する。

「全く、人工衛星さえあれば楽なんですけどね。」

「人工衛星！？何ですかそれは！！！？？」

メイベルが激しく反応した。

「あーあ。また始まったよ。」

「ああなると大変です。」

後ろで見ていたナバルとパセラが呆れながら言う。

「そうですね・・・簡単に言えば人工的に打ち上げた月といえますよ。まあ、大きさはせいぜい2〜3m四方程度ですが。」

「打ち上げる？」

メイベルはその意味を図りかねた。そんな彼女の狼狽振りに笑みを浮かべながら、吉川が問う。

「この国にはロケットはありますか？」

「ええと、あります。グライダーの加速用なんかに使っています。」

「そうなんですか。我が国ではそのロケットの技術を使って、人工衛星を宇宙空間へ打ち上げているんです。そうして打ち上げた人工衛星は、地上を撮影して気象観測に使ったりしています。また電波を中継するのにも使ったりしています。」

「宇宙！？宇宙空間にいける技術があるんですか？」

「ええ。現在の所、我が国単体では宇宙へ人を送り出してはおりません。ですが、他国では既に50年近く前から有人宇宙飛行を行っています。」

「すごいすごい！それについてもっと詳しく教えてくださいませんか？」

ところが、その質問に吉川が困った表情をした。

「教えてあげたいんですが、私はそこまで専門家ではないので、これ以上詳しい説明は出来ませんね。」

「そうですか、それは残念。」

メイベルは心の底から残念そうな表情をした。

「申し訳ない。」

「いえ、お気になさらず。」

会話が途切れた時、後ろのパセラがおずおずと言つ。

「あのうっ？」

「パセラさん・・・でしたね。どうかされました?」

朝倉が言うと、彼女は少々心配そうな表情で告げる。

「そちらの方、大丈夫ですか?気分が悪そうですが?」

「「「え?」「」」

パセラが言ったのは、もう1人の日本側使節団員のことだった。国交省から派遣された松本と言う男だったが、確かに全員が彼の顔をみると蒼白い表情をしており、明らかに気分が悪そうだ。

「ちよつと、どうしたのよ?」

朝倉が問いかけると、松本が口を開く。

「すみません。乗り物酔いです。私弱いんです。」

「あら?けど行きの飛行機も船も大丈夫だったんじゃない?」

「あの時は酔い止めを飲んでいましたので。けどあまり持ってきてなくて、列車なら大丈夫だろうと思ってたんですが・・・」

「そう言えば、この列車それなりに揺れるわね。」

「そうですね?」

「俺にはそこまでひどくは感じられないが。」

パセラとナバルが言うが、これは元々の生活環境に由来するものだからしょうがない。サクラスではついこの間まで馬車や馬が交通の主流であった。鉄道が普及したのはここ最近のことだ。それに対して、鉄道の開通から130年以上経ち、軌道・車両ともに改良に改良を重ねているのが日本の鉄道である。比べる方が可笑しい。

「私たちの国を走る列車に比べたら揺れるんですよ。お国の鉄道は確か開通して1年程度のものでしょうか？しかし、我が国では鉄道は130年以上前から使われています。技術に差が出て当然です。例えば、我が国では新幹線という鉄道がありますが、そちらでは現在時速320kmでの営業運転を行っています。」

「ええ！？320km!？」

朝倉の言葉に、メイベルが素っ頓狂な声をあげる。さらに。

「はい。それに、この列車は機関車が貨車と客車を牽引する方式ですよね？このような方式は我が国ではごく一部の列車だけです。主力は電車とディーゼルカーです。」

松本が言う。話すことで気を紛らわせているのか、多少顔色が良くなっている。

「デンシャにディーゼルカー？」

メイベルが知らない単語を聞かされ首を傾げる。

「電車は電気を動力にして走る列車で、ディーゼルカーはディーゼルエンジンを積んだ車両です。ディーゼルエンジンはこちらの国にもありますか？軽油と言う燃料を使うエンジンです。」

「ディーゼルエンジンはわかりました。けど、デンシャの方は電気を動力にするってことは、電池で走るんですか？」

メイベルは日本人が言った軽油を珪油の間違いだと思い、電車の方に話題を移す。実際はかなり重要な間違いだったのだが、松本や朝倉も気にしなかった。

「違いますよ。架線もしくは第三軌条から電気を取るんです。」

サクラス帝国で走っている列車の動力は蒸気もしくはディーゼルである。電車は今のところない。他に路面電車で水力で動くケーブルカーがあるが、これも電車ではない。

「うーん、ちょっと想像つかないな。」

「あ、ならパソコンで映像資料を見えますか。確か日本の鉄道を紹介する映像もあったはず。」

「じゃあ早速見せてあげなさいよ。」

朝倉に促され、松本は持ってきたノートパソコンの電源を入れてディスクを挿入した。余談だが、メイベルたちは既に昨日の内にそれらを見ているので、多少驚くが声を上げるような事はしない。

松本はチャプターから東京の鉄道に関する映像を出した。するとそこには東京都内を走るJRの通勤型車両が映し出された。

「これですね。この屋根に付いているパンタグラフと言う集電装置から電気を取り入れて、モーターで走るんです。」

「なるほど・・・けど凄い人ね。」

メイベルは、電車に乗っているその乗客の多さに驚いていた。

「まあ東京だけで人口は1200万人ですから。この電車だって10両編成ですが、朝のラッシュでは2分程度の間隔で走っていますよ。」

「それはまたすごい。」

メイベルが感嘆の声を漏らす。一方、映像を覗き込んで見たナバルは違う感想を口にした。

「カッコいいな。これ運転できないかな？」

「それは無理ですね。我が国では列車を運転するには免許がいります。学科試験や実技試験に受からないと無理ですよ。」

「うーん・・・だったらいいや。」

「ナバル・・・そんなあっさり言わないですよ。」

メイベルは想い人の短絡さにあきれ返ってしまった。

この後、ケオシイに着くまでメイベルたちは日本に関する情報を教えられ、逆にサクラスに関する情報を朝倉たちに教えて情報の交換を図った。

朝倉たちはメイベルのテンションに振り回されつつも、自分たち

の交渉に有利になると考えて終点までそれに付き合っただけであった。

フォルティアースの車窓から（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

人は意外な所で繋がっている

29日目夕方 日本・東京郊外 日高家

「日高さん、今回は遠路の任務御苦労様でした。」

「それに帰った早々に九州から東京に召喚でしたからね。お疲れでしょう?」

「いえいえ、これも自衛官としての務めと割り切っていますので。それに、久しぶりに妻や娘と会える機会を得られましたし。」

一昨日ロクシエから帰還したばかりの空自パイロットである日高正道三佐と、首相である春川と副首相である小泉がソファーに座って談笑していた。

本来一介の自衛官に過ぎない日高と日本のトップに座る2人が顔を合わせる機会などあり得ない。

しかし、それは公人としての場合である。私人としては知り合いであるのだから、会っても別に不自然なことではなかった。

「お父さんが帰ってきてくれて、私もすごく嬉しいです!!」

相変わらずの元気な声で言うのは、日高愛。正道の娘である。

「愛ちゃんも舞さんも運がいいね。撮影地が近場で。」

政府から頼まれる形で、日本のことを海外に紹介するCMを作る

ため、国内向けのCM製作が終わった765プロ、876プロのアイドルたちはそれぞれ各地へ撮影のため散っている。

愛の場合は撮影地が長野、舞の場合は青森と、東京と日帰りできる範囲での撮影だったため、早めに戻ってることができた。これが沖縄や北海道だったら撮影期間が延びたかもしれない。

「はい、料理できたわよ。魚ばかりだけど、今はこれしか手に入らないから我慢してね。」

キッチンで料理を作っていた舞がやってきた。食卓の上に次々と皿が並べられるが、彼女の言うとおり魚料理ばかりだ。肉はほとんど見当たらない。さらに、煮物など味付けの濃いものも少なく刺身や焼き魚、サラダなどが目立つ。

「しかたがないですよ。肉は輸入出来ませんし、国産も飼料の輸入が途絶えてしまって高騰していますからね。」

小泉が真剣な表情で言う。

「そうなのよね。小麦も高くてうどんやパン、ソバも簡単には食べられなくなっただわ。まあ、パンは米粉パンでなんとか代用してるけど。」

「私も、行きつけのお店が皆休業しちゃって、友達と気軽にお菓子を食べるなんてことも出来なくて・・・コンビニもめっきり物がなくなっちゃいましたし。春香先輩や涼さんも困っているようでした。」

愛の先輩アイドル天海春香はお菓子作り、同期の秋月涼は料理が

それぞれ趣味であるのは有名な話だ。たしかに、食材がなければその趣味も楽しめないだろう。

もつとも、今は日本全体が趣味を楽しんでいる余裕などないのであるが。

「我が国で自給できるのは米と魚と野菜だけですからね。生きるだけならなんとかありますけど・・・」

幸いにも米は昨年が豊作だったことに加えて、政府の備蓄米が相当量あるから1年以上国民を養えると思込まれていた。また魚も、日本が転移した先が元々豊かな漁場だったらしく、転移前より漁獲高が増加しているくらいだ。

だがそれ以外の食料は、どうにもならない。輸入がストップしたことで国内のストックのみに頼らざるを得ず、価格が軒並み急上昇していた。そのため、肉や味噌、小麦製品など転移前まで当たり前のように食べられていた物が食べられない、もしくは食べる回数を極端に制限される事態に陥っていた。

幸い転移したのが春先であったので、急遽農水省が農家に対して大豆や小麦、ソバなどの作付け面積を増やすよう指導したが、これも結果が出るのは収穫期を迎える半年後だ。

どちらにしろ、日本人はしばらく質素な食生活を送る必要があった。

「これまでのような贅沢は無理、だな。少なくともどこかから輸入できるようになるまでは。」

「だったらキヨン君たちががんばってよ。日本の行く末はあなたたちに掛かってるんだから。」

「舞さんに言われるまでも無く、がんばってますよ。さすがにすぐには無理でしょうけど、各国との交渉は進んでいますから。まあ、宛にしない程度に期待しててください。」

ところが、その春川のセリフに愛が反応する。

「そんなああ。困りますよ。こんな生活が続くなんて考えたくありません。」

「まあ、それが大方の日本人の思いでしょうね。」

「これが高度経済成長時代だったらまだなんとかなったかもしれないけど、物が溢れる生活に慣れきった今の日本人じゃ、長くは持たないでしょうね。」

小泉の言葉に、正道も頷く。

「もう、そんな暗い話はやめなさいよ。それよりも、食事にしましよ。」

「そうですね！せっかくパパもいるんだから、楽しく行きましょう！」

舞と愛の言葉に、3人は居心地の悪そうな表情をする。確かに、舞はともかく子供の愛でそうした夢も希望も無い現実的な話ばかりするのもどうかしている。

「いや、すいません。舞さん。」

「確かに、食事の時くらい明るい話題で行きましょう。」

「ですね。」

「じゃあ、早速食べましょうー!」

愛が元気を取り戻して音頭を取る。

「」「」「」「」「」「」「」

2時間後。

「それじゃあ、ゆっくりして行ってね。何か必要になったら呼んでちょうだい。」

「ありがとうございます。舞さん。」

春川と小泉が舞に会釈する。それを見届けた彼女は扉を閉めた。

食事を終えた春川と小泉は、正道と共に客間に移動して3人だけになった。

「それでは改めまして。日高さん、今回は任務御苦労様でした。内閣総理大臣としてお礼を言わせて下さい。」

「いえいえ。こちらこそ、貴重な体験が出来たと思っています。」

「それで、日高さんとしてはロクシエを見てきてどう思いましたか？」

小泉の質問に、日高が彼を見つめる。

「報告書だけでは物足りませんでしたか？」

「そうは言いませんよ。ただ知り合いに行つて来た人間がいるんです。だったら、直に聞きたいじゃないですか。当事者にしかわからない部分で結構あるでしょ？それに首相として、少しでも情報収集はしておくべきだとも思いますしね。」

「・・・そうですか。いやあ、首相があなたで良かった。さすがはあの春日^{ハルヒ}さんの旦那さんだけある。」

「いえいえ。」

「で、正直な所どうだったんですか？」

「日本に対する風当たりは悪くはありませんでした。むしろ駆逐艦の救出の件もありますし、またロクシエ自体が今回の転移の影響をほとんど受けていませんので、話した限りでは良さそうです。」

「ふむ。暫定大使の荒木大使からも同様の報告が上がっていましたね。」

「そうになると、やはり有望な貿易相手はロクシエかな？」

「そうですね。向こうの人も日本の製品には目を見張っていましたから。現地使用に改造さえすれば、売れると思いますよ。あと私が

感じたところでは、地球のヨーロッパに近い文化や街並みでしたから、観光の相手としてもやっつけていけると思っています。」

「言葉が通じるのは大きいですからね。日本人としても行き易い場所になるでしょう。」

「ええ。あと、やはりと申しましょうか。あちらの人たちは相当日本の軍事技術に興味を持っています。」

「それは我々も報告を受けていますが、一体どの程度なんですか？」

「軍民間わず相当としか言えませんね。聞けばロクシエにはまだジェット機ありませんし、ヘリコプターもあります。そして潜水艦もないですから、我が国が持っている軍事テクノロジーに相当な興味を持って当然だと思います。」

「そうですか・・・これは内密にお願いしますが、実は政府としては今後貿易するにあたって武器の輸出も視野に入れていきます。もちろん、何でもかんでも売れるわけじゃありませんし、売って良いわけがありません。ロクシエはそれに対して信頼に値する国だと思えましたか？」

「一自衛官にすぎない私が言って良いものでしょうか？」

「構いません。むしろ、お願いします。」

小泉の言葉に、日高は頷いた。

「私としては十分に値する国だと思います。確かに、科学力こそ地球の1940年代から50年代に近いそれでしたが、思想的な面や

法概念に対する考え方も特に問題ないように感じられませんでした。まあ、あくまで今のところは話ですが。それから、これはあちらのパイロットにも言ったのですが、我が国から軍事技術を供与したり、武器を輸出しても、向こうは使いこなすのが精一杯で自力で開発するには20〜30年は掛かると思います。そうした面から見ても、問題はないと思います。」

「なるほど・・・他の方の報告でも、同様なことが書かれていました。しかし、直接聞いて良かった。色々と今後の参考になりそうです。」

「いえいえ。こちらこそお役に立てたのなら幸いです。」

3人は舞が置いて行ったお茶を口に含み、一旦会話を中断した。そして場が和んだ所で、先ほどの真剣さとは打って変わって、砕けた雰囲気の中再び会話をスタートさせる。

「ところで、私が留守にしている間にどうやら妻が御迷惑をお掛けしたようです。」

「いえいえ。舞さんはああ言う人だと割り切ってますから。」

「しかし、まさか異世界に進出したいと自分から申し出たのは驚きでした。」

「あいつは頭に浮かんだら即効実行する人間ですから。」

「その結果が愛ちゃんですもんね。」

春川が笑いながら言うと、正道は苦笑した。

「そのネタは勘弁して下さい。お陰で私、あいつに頭が上がらないんですから。」

「そう言っておいて、奥さん一筋の親バカなんですよね。」

「小泉さんまで・・・否定できないのがもどかしい。ただ親バカを抜いても、愛は素晴らしいアイドルだと思っています。ロクシエの人も認めてくれましたし。」

「へえ。どんな反応だったんですか？」

「元気が出て心に響くような声。そう言ってもらえました。いやあ、嬉しかったですよ。」

「でしょうねえ。」

「それから面白かったのはその聞いてもらった人、ロクシエ空軍の女性パイロットのアリソン少佐なんですけどね、娘さんとそのお相手の男の子が共にパイロットなんですよ。」

「そりやまたすごい話ですね。」

「でしょう？2日目に自宅に招かれて夕食を貰って聞いたんですが、驚きましたよ。しかも、2人ともF15にも興味を持ってくれましたね。是非日本に操縦を習いに来たいと言っていました。」

「実現すれば面白そうですね。」

小泉が楽しそうに言う。

3人はそれから30分あまり、情報交換をかねたお喋りを楽しんだ。

人は意外な所で繋がっている（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お勉強の前に

30日目 トリステイン王国 魔法学院

「才人さーん!!!」

この日全ての授業が終わった頃、才人をよぶシエスタの声がルイズの部屋に響いた。

「何だよシエスタ？」

「シエスタ、何の用？大した用事で無いならさっさと出てっくれる？」

シエスタはルイズの言葉を華麗にスルーすると、才人に駆け寄った。

「才人さん宛にトリスタニアから荷物が届いていますよ。」

「俺に？」

「はい。日本の大使館から。送り主は本多さんと言う方の名前で。」

「ほ、本多さんから・・・」

暫定日本大使の本多聡子は、才人が苦手とする人間の1人だ。

「い、一体何かしら？」

同じく彼女が苦手なルイズも心なしか、表情が硬くなっている。

「あの、取り敢えず荷物を運び込んでよろしいでしょうか？」

2人の真意を理解できないシエスタは、笑顔のまま許可を求める。

「ああ。俺も手伝うよ。」

「そんな才人さんの手を煩わせるなんて、私1人で出来ますから。こつこつ仕事は私たちにお任せ下さい。じゃあ、すぐに持ってきますので。」

と、シエスタは自信満々で出て行った。が、数分後。

「うーん・・・重いです。」

ダンボール二箱をよろよろと抱えたシエスタが部屋に戻ってきた。

「ちよつと、本当に大丈夫か!？」

才人も思わず声を上げてしまった。

「な、何のこれしき・・・とりゃあ!！」

何とか部屋の中まで持ち込み、彼女は段ボール箱を床に置いた。しかしながら、肩でせえせえと息をしている。

「だから無理するなって言ったのに。それにしても、何を送りつけてきたんだあの人は？」

「シエスタがこれだけへばる位に重いものって、一体何かしら？」

「とにかく開けてみるぞ。」

才人はビリビリと、段ボール箱に封をしているガムテープを剥がした。その様子を、シエスタが興味深げに見守る。

「あの、その箱は一体何で出来ているんですか？木じゃないですよ
ね？」

シエスタはまだ日本人とあまり接触していないので、日本のものに触れる機会もほとんどこれまでなかった。だから段ボール箱やガムテープが物珍しいのである。

「これは段ボール箱って言って、紙で出来ているんだよ。」

「ええ！？紙で出来ているなんて信じられません！」

「シエスタ、これが才人の国、ニホンの技術力なのよ。だいたいこんな物で驚いてちゃ、この先体が持たないわよ。」

ルイズがピシヤリと言う。

「曾お爺さんや才さんが生まれた国は本当にすごいんですね。」

「そりゃ、こんなファンタジーな世界の人が見たら驚くしかないだろうね・・・よし、開いた。て、何だこりゃ？」

才人は箱の中身を取り出した。

「歴史の教科書じゃないか！？それに理科とかもあるぞ。」

入っていたのは、歴史や理科の教科書だった。

「これが才人の国の学校の教科書？」

「ああ、けど何でこんな物を送ってきたんだろう？」

「あ、手紙が付いています。けど、これなんて書いてあるんですか？」

シエスタが箱の中から一通の大きな封筒を取り出した。そこには日本語で「平賀才人君へ」と書かれている。

「俺宛だ。貸して。」

才人はシエスタから手紙を受け取ると、封を開いた。すると、中から1枚の手紙と1枚のDVDディスクが出てきた。才人はまず手紙を開いて読んだ。

「ええと・・・平賀君へ。間もなくトリステインと日本間で本格的な交渉が始まります。その際に、あなたにも色々手伝ってもらおうことになるでしょう。ですから、そのために必要な知識をちゃんと身につけてくださいね。本土から日本や世界史の歴史教科書、それに簡単な理科や社会に関する教科書を取り寄せておきました。心置きなく勉強して下さい・・・て、うわああ。これ全部読めってことかよ！？」

「大変そうですね。」

教科書は箱の中一杯にあった。

「勘弁して欲しいな・・・あれ、まだ続きがある。・・・日本で見
た、あなたの学校の成績と高凧さんの証言から、読む気力が起きな
いかも知れませぬ・・・て、春名余計なことを！！て、2人も笑
うな！！」

才人は後ろでクスクスと笑っているルイズとシエスタに文句を言
う。

「アハハ・・・けど、伝説の『ガンダールヴ』も形無しね・・・」

「ご、ごめんなさい。プププ・・・」

「たく・・・だから、もう一つのダンボールにはDVDを入れて
おきました。・・・あ、よかった。映像ならまだ見る気になるな。
どれどれ。」

才人はもう1個のダンボールを開けた。すると、中にはビツシリ
と数十枚のDVDが入っていた。その上にはメモが一枚。

教科書を読むのが嫌なら、これ全部見てくださいね by本多

「・・・何の嫌がらせだよ！！」

才人の脳裏に、トリスタニアの大使館でクククと不気味な笑い声
をあげる彼女の姿が思い浮かんだ。

「よくわかんないけど、大変そうね。」

「がんばってください。」

「勘弁して欲しいよ。ハァー……」

才人は溜息を吐きながら、手紙の残りを読んだ。

「P.S. 本土から届いた御家族からのビデオレターも一緒に送ります。……え!?これ、母さんや父さんからの手紙!?!」

「才人の御両親からですって!?!」

「早速見ましょう。」

「お、おう。」

才人は早速パソコンを用意してDVDを再生した。すると、3人の人物が浮かび上がった。1人は40代前半と思しい男性、そして男性と同年代の女性に、2人に挟まれる形で7〜8歳前後の女の子である。

「親父、お袋……」

紙の手紙は既に受け取っていたが、動く映像で家族を見るのはこれが初めてであった。

「才人、元気にしているか?お前がいなくなって10年近く経ったけど、元気そうで何よりだ。本当に良かった。」

「まさか異世界にいたなんてね。最初はちょっと信じられなかったけど、政府の人から写真を見せられて、母さん本当に嬉しかった……」

」

才人の母親は涙を流して言葉に窮した。

「お袋……」

「……」

ルイズが思わず俯いた。

「ごめんね。本当に母さん嬉しくて。それからあんたがいない間に家族も増えたのよ。才香、お兄ちゃんに挨拶しなさい。」

「初めまして、お兄ちゃん。平賀才香です。」

女の子が画面に向かって手を振る。

「うわあ、可愛い妹さんですね。」

「うーん、けど全然実感がわかない。」

さらに映像は進む。

「取り敢えず、そっちで上手くやっているようで父さんも母さんも一安心した。日本に帰ってくる日を楽しみにしているぞ。」

「早く帰ってきてねー!!」

才人の妹が無邪気に手を振る。才人も思わず手を振ってしまう。

と、ここまでなら感動的なビデオレターだったのだが。

「そうそう。本多さんという人から聞いたんだけど、アンタ彼女がいるんだってね？モグラ顔で取り柄も特にないあんたにお相手が見つかるなんて、母さんとっても嬉しいよ。」

「早く俺たちにも嫁さんの顔を見せてくれ！！」

「え！？」

才人が両親の言葉にギョツとする。さらに。

「お兄ちゃん！可愛いお嫁さん連れてきてね！！」

「そう言うわけだから、しっかりやりなさいよ。帰ってきたら、あなたの好きな料理つくってあげるからね。お嫁さんのためにも腕によりをかけるからね。」

「バイバーイ！！」

妹の言葉と共に、ビデオレターは終わった。

「……………」

3人とも思わぬ状況に直面して無言だが、顔は真っ赤だった。

「さ、才人。お、おもしろい御両親ね。」

「あ、ああそうだろ？」

「そ、その才人は約束忘れてないわよね？私と一緒に帰るって言う。」

「もちろんだよ。けど・・・」

「ええ！？ミス・ヴァリエールです！才人さん、是非私も一緒に連れて行って下さい。そして私をお嫁さんとして御両親に紹介して下さい！」

「ちよつとシエスタ！何であんたまで付いて来るのよ。あんたは学院に残つてジャガイモの皮でも剥いてなさい！！・・・才人のお嫁さんは私なんだから。」

最後のセリフは小声であったが、シエスタは聞き逃さなかった。

「そんなこと絶対にさせません！」

「あんた貴族に刃向かう気！？」

「才人さんの国ならそんなことは関係ないです。そうですね、才人さん？」

「あ、ああ。」

「そういうことです。ミス・ヴァリエールだけ抜け駆けするのは、絶対に許しません！」

2人の口論が激しくなってきたので、才人はさりげなくDVDの入った段ボール箱とパソコンを持って退避する。

「あんだ、『メイジ』に本気で逆らう気？」

ルイズが杖を握り締める。

「ふふん！杖が無ければ『メイジ』もただの人です！タア！！」

そう言うとシエスタは先手を取ってルイズの杖を弾き飛ばした。そして彼女に襲い掛かる。

「や、やったわね！！」

「あーあ・・・」

呆れながら二人の取っ組み合いを見ている才人の袖を誰かが引いた。

「才人。」

「あ、タバサ。何時の間に？」

「ここにいたら危険。私の部屋に退避するのがいい。」

「おお、じゃあお言葉に甘えて。」

「ねえ才人・・・その、才人が帰る時は私も一緒にいい？」

タバサが顔を真っ赤にして上目遣いに尋ねる。その破壊力は抜群だ。

「えー？あ、ああ。い」「そのチビ！！ちょっと待ったああ！！」

才人が承諾しそうになったところで、ルイズとシエスタが乱入した。

「チツ!!」

タバサが舌打ちした。

「下がって。」

タバサは才人に退避を促すと、すぐに杖を構えて臨戦態勢に入った。そして『風』を放つ。

「させるか!!」

何時の間にか杖を取り返したルイズも『虚無』で反撃。

「才人さんのお嫁さんには私になるんです!!」

「・・・負けない!!」

ついに3つ巴の戦いになってしまった。

「どうするんだよこれ?とにかく、一旦ここを離れよう。」

才人はスタスタとその場を足早に離れた。

「やあ才人君!!」

「あ、コルベール先生。」

女子寮から出たところで、コルベールと鉢合わせした。

「どうしたんだい？こんな所で？」

「いや、部屋の中で怪獣大戦争が起きています。」

「ああ、そう言うことが。君も大変だね。」

「今日は運良く、何とか逃れられました。」

「ハハハ・・・ところで、それはなんだい？」

「あ、本多大使から勉強用に歴史や理科のDVDが送られてきたんです。交渉に備えて勉強しておけて。」

「ほう・・・君の世界の歴史か。そう言えば、まだ私も簡単にしか聞いていなかったな。どうかね、先日の映画みたいに開いている教室を借り切って見せてくれないかい？」

「わかりました。けど、その前に上映用の機械はルイズの部屋にあるんで。」

「わかった。止めるのを手伝おう。」

「ありがとうございます。」

ちなみに、2人がルイズの部屋に戻るとそこにはガチの取っ組み

合いの末力尽きている3人が倒れていた。

「一体どんな戦いが繰り広げられたんだろう？」

それが才人とコルベールの偽りない感想だった。

お勉強の前に（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お勉強中 1 (前書き)

新年おめでとございます。今年もよろしくお願いいたします。

お勉強中 1

30日目午後 トリスティン王国・魔法学院

魔法学院の階段状の教室に、以前映画を流した時と同じく才人は映像を映し出すためのパソコンとプロジェクターをセッティングして、本多から送られてきた歴史のDVDを映し出そうとしていた。

本当だったら、見るのは才人とコルベールだけの筈であったが。

「結局こうなるんだな・・・」

「連れないこと言うなよサイト、僕たちは友達じゃないか。」

ギーシュをはじめ、ルイズやシエスタ、キュルケにタバサ、そしてモンモランシーなどいつも通りのメンバーが何時の間にか集まっていた。また彼らに付いてきたのか、他にも数人の姿が見える。

「はいはい。わかってるよ。よし、セット完了と。それにしても本多さん、これだけは最低でも見ろっていう指示まで出してくるなんて。」

難しい本を読めという程ではないが、それでも歴史など才人のあまり得意ではない分野のDVDを見なければならぬのは、やはり嫌であった。

「で、今から何を見る訳？」

「ええとだな、「映像の世紀」て言う歴史のDVD。20世紀、1

00年くらいの歴史を纏めたやつだつて。」

「たったの100年！？それで何がわかると云うんだい？」

ギーシュが思わず口にした。ハルケギニアは始祖ブリミルが降臨してから6000年以上の歴史を歩んでいる。そのため、1000年などという歴史はわずかな時間でしかない。つまり、歴史が変化する感覚が長い。

「そりゃハルケギニアからしたらたつたかもしれないけど、地球で100年もあれば色々と変わるぞ。けど、確かに何でこれから見ろつて指示してきたんだろう？もつとむかしの江戸とか戦国時代の歴史から見てもいいのに。」

本多の指示には、この歴史に関してはこのDVDを優先して見ると書かれていた。さらに全11巻の内、特定の巻だけは絶対に見るとまで書かれていた。

「ま、俺も見たことないし、とにかく見てみるか。それじゃあ、映すぞー！」

「よろしく頼むよ。」

コルベールが楽しそうな表情で言う。これから流れる映像を待ちわびているのだ。

「んじゃ、再生と・・・」

才人はDVDをスタートさせた。

映像は衝撃的なOPからスタートし、いきなり才人を含む見た側を驚かせた。特にコルベールはほんの一瞬であるが出てきた宇宙の映像を見て、目を輝かせた。それと同時に、戦争の映像も多く含まれていることに、渋い表情にもなった。

作品は1910年代のヨーロッパに関する説明から進んでいく。ヨーロッパの地図が出て、それぞれの国の名前が出ると、魔法学院の面々は「ハルケギニアに似ている」とか「あのドイツと言う国はまるでゲルマニアだ」と口々に呟いていた。

一方才人は、「ああ、そう言えばこんなこと習ったような気がする」と言う高校生らしい感想を口にしていた。

映像はサラエボにおけるオーストリア皇太子暗殺を契機に勃発し、1914年から1918年まで続いた第一次世界大戦へと進んでいった。

各国で兵士が動員され、多くの人々の見送りを受けて行進して戦場へ出向いていく。カラフルな制服、馬に乗った兵士や馬車が引く大砲などは、細部こそ違えどハルケギニアでも見られるものなので、この辺りの映像は皆冷めた反応しか示さなかった。

しかしながら、まず機関銃が登場する場面でギーシュやコルベールが強い関心を示した。ギーシュは軍人の家系出身であり、またコルベールは元軍人であるから当然と言えば当然であった。

走ってくる兵士が、バタバタと撃ち倒されていく。魔法を使えば不可能ではないものの、しかしながら2人とも才人のいた世界には平民しかいなかったと言うことは、既に才人から聞いて知っている。またコルベールの場合はゼロ戦に装備されていた実物やその威力を

見たことがある。彼の場合は、むしろ100年近く前に既にあれ程の兵器を持っていたことに驚いていた。

さらに場面が進むと、映像には第一次大戦で登場した多数の新兵器が所狭しと出てくる。キャタピラを装備した怪物にさえ見える戦車、海中に潜り敵の船を葬り去っていく潜水艦、さらに火炎放射器や毒ガスまで登場する。

才人からしてみれば、いずれも100年以上前の超旧式兵器だ。白黒の映像と合わせて、「ああ、この時代にこの兵器は登場したんだ。」位の認識しか持たない。

しかしながら、魔法学院の面々は映像が進むに従って言葉を失っていく。

また映像には、社会主義革命で倒れたロシア帝国の姿も出てくる。ルイズはそのシーンに、「レコン・キスタは才人の世界にもいたんだ・・・」と漏らした。後に彼女は、本多から当時のソビエトの考え方を聞かされ、腰を抜かすこととなる。

そして映像は、ドイツ帝国とオーストリア・ハンガリー帝国の崩壊と第一次大戦の終結、荒廃した大地の映像と物悲しいBGMのEDで終わる。

「才人君・・・君の世界では100年前にあんな凄まじい戦争が？」

「ええと、詳しいことはわかりませんが、映像の通りだと思えます。けど、この後に起きた第二次世界大戦てのはもつとすごい戦争でしたよ。確か・・・5千万だか6千万の人が死んだって・・・」

「そんなにかね!？」

「それを平民だけにするなんて、もう次元が違いすぎる・・・武器もすごかったし。」

ギーシュが溜息を吐きながら言うが、才人は追い討ちを掛けるように言った。

「けど、さっきのは100年前の超旧式兵器だぞ。俺の時代の兵器はもっと凄いで。」

「あ、あれが超旧式だって!?!本当に君のいた世界はどうなっていたんだい？」

「それは続きのDVDを見ていけばわかるって。言っておくけど、俺たちの世界は年中年から戦争をしているわけじゃないからな。て・・・皆固まっちゃってるよ。」

ルイズをはじめ、見ていたほぼ全員の様子は青ざめている。地球の戦争の恐ろしさのレベルはハルケギニアのその数百倍だと感じ取ってしまっただろう。

(まさか本多さん、これ狙ったのか?・・・あ、けど俺に見ろって言ったんだから違うか・・・まさか、お姫様あたりに見せて、また脅迫するために勉強させたんじゃないだろうな?)

才人の予想は、大方当たっていたりした。

この後才人は2日ほど掛けて、残りの映像も見通したわけだが、その後も第二次大戦やベトナム戦争、湾岸戦争などの映像をルイズ

たちに見せることとなり、彼らに地球の恐ろしさを存分にわからせることとなった。

それでも、他に見た理科のビデオなどはコルベールの興味を大いに掻き立てたり、日本について紹介した現代社会などの映像もすっかりと混ぜられていて、地球の恐ろしさを見せ付けつつ、地球の先進性や日本の豊かさなどを見せ付けるなど、一定の工夫がなされていた。

「あの人、絶対にわざとやってやがる！！」

才人はそう言わずにはいられなかった。

30日目　ロクシエ連邦・連邦首都　暫定日本国大使館

「ようこそ、リリアさんにトレイズ君。先日は日高三佐共々お世話になったね。」

暫定日本大使の荒木が、本日やって来た客人を出迎えていた。

「い、いえ、こちらこそ。大使館に呼んでいただきありがとうございます。ございます。」

リリアががちがちに緊張しながら答える。

「リリア、少し落ち着いたらどう？」

「だって、外国の大使館に来るのなんて初めてだから。」

「大使館で言っても、暫定が付くけどね。まあ、そんなに緊張しないで。まだ大使館としては殆ど機能していないし、大使館員も少ないから。気楽にしていよ。」

「けど、本当に良かったんですか？僕たちなんかを招待して？」

「いいのいいの。これは先日、日高さんと一緒に夕食に誘ってもらった御礼だから。むしろこっちとしては、アリソンさんたちを誘えなくて申し訳ない。日高さんも、今日は外に出て行っているからいないんだ。本人も残念そうだったけどね」

「こちらこそ、ごめんなさい。ママは今日任務で、パパも用があつて来られなかったんです」

リリアが両親の代わりに謝る。

「いや、別に謝ってもらう必要はないよ。とにかく、どうぞ」

「「お邪魔します」」

荒木に促され、2人は大使館の中へと進んでいった。もつとも、大使館と言っても荒木が言ったとおり暫定的な物であり、ビルの1階を借り切っているに過ぎない。

各部屋では大使館員が忙しなく働いていた。日本人の姿だけではなく、ロクシエ人の姿も見える。もちろん、双方共に忙しそうだ。

「とても慌しいですね？」

トレイズが素直に疑問を口にした。

「何せ送り込まれた人数が少ないからね。それに今は、辞書作りに忙しいんだ。」

「辞書？」

リリアが首を傾げる。

「ロクシエ語は日本人にとって見たことも聞いたこともない言語だからね。理由は分からないけど、話す分には困らない。けど、文書を書く上ではどうしても相手の言葉を理解しなければいけないからね。特にこれから条約とか様々な契約をする上で必要不可欠だから。そのために、まずは辞書作り。」

「けど、全くわからない言葉をどうやって辞書にするんです？」

「うーん・・・全くわからないことはないんだ。」

「どういうことですか？」

リリアが再び首を傾げる。

「確かに、ロクシエ語を見るのは初めてだよ。だけどね、日本が元いた世界には数千の言語があった。だから、その中から比較的ロクシエに近い言語を探ってきて、当てはめていつているんだ。もつとも、それだけじゃ追いつかないから、ロクシエ政府に頼んで人を送ってもらって、色々と手助けしてもらっているけどね。」

「あ、だからロクシエの人もいるんですね？」

トレイズが納得する。

「そう言うこと。」

「けど、そんなに忙しいときに呼んでもらうなんて、悪い気が・・・」

「

「だからリアさんはそんなこと気にしないでいいんだよ。呼びたくて呼んだのはこっちなんだから。と、この部屋だった。」

荒木はある部屋の前で止まった。そこは大使館でもかなり奥まった所だった。

「ここは？」

「食堂だよ。今日は2人にささやかだけど、日本料理をご馳走しようと思って。それから、プレゼントもあるから。」

「プレゼント？」

2人が顔を見合わせる。そんな2人を、楽しそうに見ながら荒木は言う。

「さ、とにかく入った入った。」

お勉強中 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

リアルがマジでヤバイ状況です。その気晴らしに書いていますが、本当に色々と迷っています。去年の夏よりはマシですが、それでも決断するって本当に難しいですね。

お勉強中 2 (前書き)

書いていたらボタン押し間違えて最後の1000文字くらいが飛んで、書き直しました。

お勉強中 2

30日目 ロクシエ連邦・連邦首都 暫定日本国大使館

「ああ、おいしかった。」

「リリア、行儀が悪いよ。」

「いいじゃない、素直に料理の感想を口にただけじゃない。」

昼食後、そんなリリアとトレイズの遣り取りを荒木は笑いながら見ていた。

「気に入っていただけで良かった。日本料理はこちらでは全く知られていないものだから、正直嫌な顔をされるんじゃないかと心配したんだけど。」

「いいえ、とてもおいしかったです。特に、あのチャワンムシと言う料理。最初はプリンみたいって思いましたが、全く違う味で面白かったです。」

「俺はカレーライスが美味しかったです。それに、ライスを炊くのも驚きでした。」

「日本じゃあれが普通だよ。と言うより米が主食だから。」

「じゃあ、パンはないんですか?」

「いや、パンもあるよ。最近じゃ米よりも人気かな。ただし、日本

の場合国産できる小麦の量が少ないから、最近じゃ米粉パンなんて言うのも出てきているよ。それに、私が見た限りじゃロクシエで食べられる料理のほとんどは日本でも食べられたよ。もしくは地球、これは日本が元あった星だけど、その地球上にあった料理だった。だからロクシエの料理は、ほとんど日本人でも知っている物だと思うよ。」

ロクシエに來た荒木たち日本人にとって、意外だったのはロクシエにある文化はいずれも、現代日本人からすれば見たことのあるものばかりだった。日本の物でこそないが、少なくとも映画やドラマなどで見る欧米の文化そのまま、魔法使いで貴族が存在するトリステイン、さらに魔法と科学が上手くミックスしているサクラスなどに比べると、新鮮差という点では雲泥の差があった。

もつとも、知っている文化が多いとなれば付き合っていく上では有利である。相手に合わせる事が容易に出来るからだ。

ちなみに、各国から見た日本の文化は、彼らにとって全く触れたことのない未知な物であった。

「それは興味深いですね。」

「まあ、まだお互いに出会って一月も経っていないから、詳しいことは今後の研究結果待ちだね。ただ、私としてはなるべく早く、ロクシエの人たちや文化について知り尽くしておきたい。無知故にお互いの関係が悪化するのには、良くあることだから。」

「無知故にですか・・・この国もそうでしたからね。」

トレイズが半ば自嘲気味に言う。

「そう言えば、この国はスー・ベー・イルて言う国と長く戦いを続けていたんだっただね。」

ロクシエがかつていた世界では、陸地はロクシエとスー・ベー・イルを要する1つだけだった。両国の間には人の接近を許さない山脈とルト二河があり、そのルト二河を挟んで両国はつい30年前まで延々と戦争を続けていたのである。

「そう。しかも、どっちが先に生まれたかなんて言う下らない理由で。そんなことで延々と何千年も戦っていたんだから、呆れますよね?」

「いやいや、それでも戦いを終わらせたのは立派だよ。日本が元いた世界では、未だに戦争はなくなっていないませんし、戦争は終わっても同じ民族が分断したままと言うようなことが、そこら中であつたからね。」

「荒木さんのいた世界でもですか?」

「ああ。生憎ね。科学技術が進んでも、人間が根本から変わらないとダメなのかもね・・・辛気臭い話はここらで止めておこう。」

これ以上話すと鬱展開になってしまいそうなので、荒木は適当なところで話を切り上げた。

「じゃあ、行こうか。」

「行くってどこに?」

「私の部屋だよ。そこに2人へのプレゼントが置いてあるから。」

リリアとトレイズは、彼と共に移動した。

「悪いね。まだ片づけが済んでなくて。」

荒木の部屋は、大使用の部屋としては小さかった。ベッドと小さな衣装箆笥に執務用の机と椅子、それに本棚だけである。しかし床には私物だろうか、何個もの段ボール箱が置かれており、足の踏み場もない。

「随分と小さな部屋なんですね。」

「人と会うのに使う貴賓室は、別に用意してもらっているから。ここはあくまで、私の執務用の部屋でしかない。だからこれでいいんだよ。」

そう言うと、彼は無造作に積み上げられている段ボール箱の一つを開けて中身を取り出した。

「本当なら、この間会った新聞部の人たちの分も揃えたかったんだけど。あんまりたくさん物の持ち込むこともできなくてね。まずは2人だけに。」

申し訳なさそうに、彼は2つの小箱を2人に渡した。綺麗なカラ印刷がなされているその箱の表面には、先日2人が荒木に見せられたデジタルカメラであった。

「これって!？」

「あの時のカメラ!？」

「そう。外務省に頼んで運んでもらった。2つが精一杯だったけどね。」

「けど、これ使い方が・・・」

トレイズが至極全うな疑問を口にした。彼らはデジタルカメラの使い方など知らない。ついこの間までその存在すら知らなかったからだ。さらに、説明書が付いていても日本語がわからないのだから、当然読めない。

しかし、荒木は心配無用とばかりに笑う。

「大丈夫。ちゃんと私が教えるから。ついでに、充電器とか変圧器も持ってきたから、家へ持って帰ることも出来るよ。印刷機はさすがに無理だったから、私のところまで来てもらう必要があるけど。」

荒木は2人と初めて会った時、学校での約束を守ったわけだ。ちなみに、彼の言う変圧器とは日本とロクシエでの家庭用使用電圧が違い、そのまま充電できないために、必要となる。幸いだったのは、ロクシエでの使用電圧、コンセントの形が海外で使われているそれと、互換できたことだった。

「けど、本当にもらっちゃっていいんですか？」

リリアが申し訳なさそうに言う。

「いいんだよ。私が言ったことだから。」

「そうですか。じゃあ、遠慮なくもらいます。ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

2人は荒木に向かって頭を下げた。

「じゃあ、早速だけど使い方を教えるよ。」

「うわあ、楽しみねトレイズ。」

「ああ・・・うん？」

「どうしたのよ？」

「あの荒木さん、この本は一体？」

トレイズが見つけたのは、段ボール箱の蓋から姿を覗かせている本であった。表紙に書いてある題名と思しき文字は全く理解できなかったが、イラストには飛行機が描かれていた。

「ああ、それ？それは勉強用の本。『飛行機入門』という初心者向けの奴。こっちじゃジェット機がないって言うけど、実はそのジェットエンジンとかの仕組みはさっぱりだから、少しくらい勉強しておこうと思って。その箱に入っているのは、そう言う勉強用の本なんだ。」

「へえ、荒木さんて勉強家なんですね。」

リリアが感心するように言う。

「いやいや、本当に軽くかじるだけだから。それにこの間の夕食で、そっちの知識があまりにもなくて話に付いていけなかったから。さ、本のことは置いといて、カメラの使い方を教えるよ。」

同日 サクラス帝国内・サンウーヌス〜ケオシイ間鉄道線上 日本使節団乗車列車内

帝都サクラスまでの旅は5日間もかかる。そのため、朝倉亮子率いる日本使節団は。この時間を有効に使って聖女メイベルと話す時間を持ち、同国の情報を引き出すと共に、今後の交渉で有利になる状況作りに勤しんでいた。

そんな日本側使節団の思惑を知ってか知らずか、メイベルは日本側との話し合いの時間になると、終始目を輝かせ、様々な質問を朝倉たちにぶつけていた。

日本側使節団は公王と大統領を兼任し、帝国議会でも大きな影響力を持つと言う、ロクシエやサクラス側から伝えられたメイベルの肩書きと、目の前の少女とのギャップに当初は多少面喰ったが、「異世界の国だからこんな王様の1人や2人いてもおかしくないだろ。」と自分たちを無理やり納得させ、懇切丁寧に、出来る範囲で彼女の質問に答えていた。

メイベルの知識は凄まじい。だからこそ、これま様々な発明品を
発明し、さらに戦争を勝利に持っていったと言える。しかしながら
その彼女からしても、日本の持つ科学力や知識は驚くべきものであ
った。

「・・・それで2010年、つまり4年前に我が国の探査機「はや
ぶさ」は小惑星「イトカワ」から微粒子の回収に成功し、地球へと
戻りました。これによって「イトカワ」の微粒子が回収され、その
構成物質の解析に成功したわけです。」

「すごいすごい！衛星を地球から打ち上げるだけのすごいのに、何
百万キロも離れた小惑星に着陸させて地球に戻すなんて。この国じ
やとてもマネできないわ。コンピューターどころか無線機さえない
んだから。トホホ・・・」

メイベルは深々と溜息をついた。今彼女は、文部科学省から派遣
された人間から、4年前小惑星「イトカワ」の微粒子回収に成功し
た探査機「はやぶさ」の話を、打ち上げから地球への帰還まで聞い
ていた。その全てが彼女にとっては凄まじい衝撃を与えるものであ
った。

現在サクラス帝国はようやく飛行機を飛ばし、ジェットエンジンの
試作に掛かったところで、宇宙空間への挑戦はまだまだ先のこと
であった。コンピューターも原始的な物を開発している最中で、無
線機など開発すらされていないかった。

そんな状況であるから、メイベルが日本の技術レベルを聞いて落
胆するのは当然と言えた。

もつとも、メイベルが本気を出せばそうした物を短期間で実用化

してしまったかもしれない。後年の歴史学者たちは、日本の接触はメイベルから多くの発明の機会を奪い、代わりに流入した技術を劇的に発展させたと評している。

落胆するメイベルを見て、使節団団長の朝倉が声を掛ける。

「フフフ・・・そんなに落胆することはありませんよ。遅れているなら、抜いてしまえば良いんです。サクラスが日本の技術を吸収して追い抜くことは、日本にとっても嬉しい限りですから。」

「おいおい、どうして抜かれることが嬉しいんだ？普通逆だろ？」

それまで話についていけず蚊帳の外に置かれていたナバルが口を開いた。

「ナバルさん。日本には恩返しという言葉があります。師にとって弟子が自分を追い抜くことは最大の恩返しであると言う考え方です。だからサクラスが私たちの技術を吸収して、いつか追い抜くことは望む所なんです。」

すると、メイベルがパツと表情を明るくした。

「日本の諺は面白いですよね。私は午前中に聞いた情けは人のためにならずが面白かったです。」

「なんだ、情けは他人のためにならないってことじゃないのか？」

ナバルの言葉に、メイベルがずっとこけそうになる。そして呆れながら言った。

「ナバル、話聞いてなかったの！情けは人のためならずは、情けをかけるのは人のためじゃなくて、廻り廻って自分のためになるということよ！もう！！」

「いや、すまん。あの時ウトウトしていて。」

「もう！！しっかりしてよ！！！！」

そんな2人の掛け合い漫才を見て、日本側使節を含む貴賓車両に乗り合わせた全員が苦笑していた。もちろん、メイベルは顔を真っ赤にした。

「ナバルのバカ！！！！」

そんな喜劇もあつたが、彼女たちは熱心に勉強中であつた。

お勉強中 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お勉強中 3

30日目午後 日本・東京 トリスティン王国暫定大使館

「はー。」

暫定大使であるエレオノールは、盛大な溜息をついていた。

「大使、溜息を吐いてもどうにもなりませんよ。」

トリスティン人の大使館員が、彼女に背に向かって声を掛ける。それが彼女を余計苛立たせる。

「わかってるわよ。もう、日本語ってどうしても難しいのよ！」

エレオノールは現在日本語の修得に苦戦中だった。トリスティンがハルケギニアにあった頃は、使う言葉は基本的にハルケギニア語のみであった。そのため、文字の修得はハルケギニア語のみで事足りた。

ところが、この転移後の世界ではそれは通じない。会話は通じることが、文字については通じないので、互いの言葉を理解しなければならぬ。

エレオノールとしても、日本に溢れている多くの情報や知識をトリスティンに持ち帰れたかった。そのために、日本語を覚えることは重要であった。

しかしながら、長年ハルケギニア語のみを使ってきたエレオノールにとって、日本語は強敵であった。

元いた世界においても、日本語は外国人にとって難しい、クレージーとさえ呼ばれる言葉であった。文法が違う（SVOではなくSOVなど）のはともかくとして、漢字・平仮名・片仮名の3種類の文字を使い分け、さらに俗に和製英語（アイドルとかサラリーマンと言ったカタカナ語）とさえ呼ばれる言葉まであるのだから、覚え難いことこの上ない。

エレオノールは駐日大使として、早速日本語を覚え始めたのだが、すぐにその難しさに辟易してしまった。それでも、投げ出さない所が負けず嫌いな性格であり、トリステイン貴族としての矜持を持ち合わせている彼女である所以だろう。

それでも、これまで秀才で通ってきた彼女にとって、この上なく大きな壁であることに変わりは無かった。

「大使、休憩が終わったら続きを始めますよ。」

そんな彼女に、1人の日本人男性が声を掛ける。

「・・・わかってるわ、ミスタ・オザキ。」

声を掛けたのは、トリステイン語研究と大使館員の生活補助のために入った尾崎英雄と言う男性だった。

トリステインの大使館には、日本政府の厚意で様々な生活に必要な物品が置かれている。しかしながら、そうした物品の多くはトリステイン人にとって未知の道具であり、容易には使えない。また日

々の物資の調達などにおいても、同様である。

そのため、日本政府から数名の人間が大使館員の生活を手助けするため送り込まれていた。もっとも、その任務には大使館員の監視も当然ながら含まれていたが。

ただし、これに関しては各国が行っていることであり、御相子である。

尾崎もそんな中の1人であった。

「それじゃあ、午前中の続きから参りましょうか。それが終わったら、今度はそちらの言語について教えてくださいね。トリスティン語はオランダ語やフランス語に似てはいますが、細部が違うので私もまだまだ完全にはいきませから。」

「そうかしら？私から見れば、あなたの方が上達しているように見えますけど。」

エレオノールは、尾崎の言葉を皮肉と受け取ったようだ。しかし、尾崎は笑顔のまま答える。

「結果が出ていない内に、決め付けるのは早計ですよ。」

「……そうね。」

同時刻 首相官邸・首相執務室

「へえ、じゃあ石油の採掘開始は予定より早く出来そうなんだな？」

春川は秋田や新潟などで進められている油田の再開発に関するレポートを読みながら、それを持ってきた経済産業大臣に笑顔を見せる。

「はい、早ければ3週間後には可能かと。各社が突貫工事でやってくれましたので。」

「まあ、議会が潤沢に予算つけてくれたお陰でもあるけどな・・・後で回収するのが面倒なことになりそうだけど。各国との貿易で何とかなるかなあ？」

春川の表情が、一転して渋い物となる。転移後、国民の生活保持のため、様々な特措法が可決され、それと並行して臨時予算も次々と可決されていた。国民が死ぬか生きるかなので、かなり大々的に行われているが、その財源の裏づけは当然ながらなく、今後深刻な問題を起こす可能性があった。

「ロクシエの企業は、我が国の技術にかなりいい値をつけてくれそうですね。サクラスからも同様の報告が来ています。」

「まだ、ちゃんとした条約も結べていないんじゃないか・・・それに、我が国とロクシエやサクラスじゃあ、技術力に差が付きすぎていて、輸出は困難じゃないのか？」

「確かに、それは正しい指摘です。ですが、彼らが持っている技術や情報を持っている時点で、我々には大きなアドバンテージになります。それに、すぐにはいきませんが、スペックダウンした商

品を開発するのは可能です。」

技術の供与は、今の日本にとって簡単であった。印刷して手渡すだけでも可能である。しかしながら、商品などの開発は別である。一から生産ラインを立ち上げなければならぬからだ。

21世紀の地球用商品を作るラインで、20世紀中盤の技術レベルに合わせた商品を作ることは出来ない。もつとも、相次ぐ産業の海外移転で、日本の場合国内で消費する家電でさえ、既に生産不可能となっているものが多く、各企業はその代替ラインを造るのに躍りになっていた。

こんな状況であるから、貿易開始時にその主力となるのは主に技術や情報になるというのが、経済産業省等の見方であった。もつとも、いきなり21世紀の最先端の技術を渡しても意味が無いので、少しずつ渡していくこととなるだろう。

それでも、日本がこれまでに得てきた様々な分野（特に工業や医療）における情報の価値は、大きい。この部分を如何にして売り込むかが、鍵となるだろう。

「まあ、最初は物々交換になるでしょうけどね。それでも、不足している小麦や穀物を輸入できれば御の字ですけど。」

経産大臣が言う。その言葉に、農林水産大臣も深く頷いている。

「それには同感ですね。国民はなんとか我慢していますが、早くしないと取り返しの付かないことになりそうですからね。特に、在日外国人はパンが食べれなくなったことで、デモまで起こしていますよ。」

「さらにそうした団体と日本人団体の衝突まで起きていて、警視庁は暇していないらしいですよ。」

小泉副首相が言う。

その言葉に、春川は頭を抱えなくなつた。在日朝鮮人やブラジル人程ではないが、他の国々の人々も日本には大勢いる。伊達に前の世界で200近い国と付き合いをしていたわけではない。

その中には、小麦を主食とする国も多いわけで、その主食たる小麦粉が突然奪われてしまった（ないことはないが、配給制プラスべらぼうに値上がった）ことに怒るのは当然と言えた。

もちろん、自分勝手と言えば自分勝手であるが、生きることの根本である食に関する事だから、皆必死の想いなのだろう。

余談であるが、3週間前に政府が北海道沖や小笠原沖で大規模な捕鯨を行うことを発表した際、オーストラリアやニュージーランド等の反捕鯨国の大使館や団体の日本支部が政府に対して抗議し、それに対してそれら大使館や事務所に抗議の電話が殺到し、投石騒ぎまで起きている。

「ない物はないんだが・・・一刻も早く輸入出来る体制を整えないとな・・・そう言えば、トリステインの方は大丈夫なのかな？」

「現地に派遣した人間の言葉を信じるなら、多分今年の小麦をはじめとする農産物の出来は、悪くなるだろうと報告が来ています。現地の気候と、植えられている農産物が完全にミスマッチだそうで・・・」

「・・・他人の心配をしている余裕は無いけど、放っておくことも出来ないしな。」

「それに、トリステインの危機を救援すれば、恩を売れますしね。」

「小泉、あんまり生々しい発言をするのはやめて欲しいが、まあその通りだな。あの国の存在価値は大きい。例の薬に関する件で、それは確認済みだ。」

トリステインからは、付き合い始めた当初からポーションと言う魔法薬が日本に向けて送られている。様々な病気や怪我に効くと言う触れ込みで送られたそれらであったが、使用している薬品の種類も定かではないそれら薬を、人間に使えるほど現代国家日本は甘くない。

そうして送られた薬は、厚生省や各医科大学の研究施設に送られて解析が行われている。しかしながら、幾ら科学的な解析を行っても、成分は判然としなかった。つまりは、謎である。

本来なら、この時点で廃棄されてもおかしくなかったが、物好きな研究者たちは、ファンタジーな魔法の国の薬を、マウスで実験してみた。

この結果が驚くべきもので、トリステイン側が報せて来た通りの効果を発揮したのである。もちろん、研究者たちはそのメカニズムが全く特定できず、首を捻っている。また、その効果にも大きなバラつきがあった。

効果のバラつきは、後に製作者のメイジのレベルによる差異と判断されることとなるが、どうしてそうなるかの科学的な説明は、判

明しなかった。

またこのポーションの一件から、トリステインのメイジは魔法自体を発動させるのはトリステイン国内でしか出来ない（後にサクラスの場合も同じと判明）、魔法によって作り上げた産物自体はそのままの状態で維持されると言う事実が確認された。

ポーションは生産量も少なく、その品質もバラつきがあるという大きな欠点を抱えてこそいたが、各種病気への即効性があり、大いに注目の的となっていた。また『固定化』の魔法など、科学国家日本から見ても、有用性のある魔法の存在が、トリステインの価値を引き上げていた。

加えて、同国の『風石』鉱山跡で見つかった各種レアメタルの鉱脈も、日本にとっては大いに注目すべき存在となっていた。

そう言うわけで、トリステインが崩壊、少なくとも現在日本との関係を模索している王政府が倒れるような事態は、日本政府としても望むべきものではなかった。

「その点は、我が国ではどうにもなりません。トリステインも既にロクシエと接触していますし、今後サクラスとも接触するでしょうから、あの国の努力次第とも言えます。ですが、かの国の力単独では色々と不都合なのは間違いありません。」

木戸外務大臣の言葉に、春川は頷く。

「やれやれ・・・まだまだ休ませてもらえそうにはないな。」

彼はそう言うと、盛大に溜息を吐いた。

お勉強中 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

本編を8話連続更新したので、次回は外伝をやりたいと思います。

共に歩む道 1

35日目午前 トリステイン・トリスタニア 王宮

この日は日本の歴史から見て、大いに意義ある一日となった。遠くアルテース大陸のサクラス帝国では、日本使節団がついにサクラスに入り、またロクシエでは日本政府からの命を受けた日本大使とロクシエ政府要人が、正式な国交締結と通商条約締結に向けての交渉に入っていた。

そして、ここトリステインでも本多聡子大使を中心とする日本大使館のメンバーと、アンリエッタを含むトリステイン政府の間で、同じく国交と通商条約締結に向けての交渉が始まるうとしていた。

「おはようございます。アンリエッタ女王陛下。」

会議が行われる部屋で、日本側代表の本多聡子は入ってきたアンリエッタに頭を下げる。そんな彼女に、アンリエッタも微笑みながら挨拶を返す。

「おはようございます。本多大使。」

お互いに一言ずつ、言葉を交わしたに過ぎないのに、部屋の空気は重苦しい。両国それぞれが自分たちの利益のために、これより言葉による戦いを行うのだから、当然と言えば当然であった。何より、本多はこの国に来ていらい、喰えない女として認識されていたから、尚更とも言えた。

その様子を、才人、ルイズ、春名の3人は戦々恐々で見つめてい

た。

今回才人は、トリステイン側に座って日本語の文書の確認ならびに、オブザーバーとなっている。「外交交渉なんですから、みつともない格好では困ります」と言われ、日本側大使館員から借りたスーツを着こんでの参加である。

彼の場合、まるで入社1年目の新人社員が、取締役会議に出ているようで、滑稽な光景であった。

またルイズもトリステイン側に座って書記官をしている。ちなみに、彼女の父親であるヴァリエール公爵はトリステイン王政府の重臣として交渉に参加する。

そして春名は、日本側のトリステイン語の文書確認ならびにオブザーバーとして参加している。彼女も才人と同じくスーツ姿だが、こちらはキャリアウーマンのような貫禄があり、才人とは好対照であった。

まあ、それはともかくとして、どこかギスギスした空気が漂う中、日本とトリステインの国交締結ならびに通商条約締結のための交渉がスタートしたのであった。

日本側としては、トリステイン近海における漁業資源確保や地下資源の調査、そしてトリステイン国内で見つかったレアメタルの産出と日本への輸出を可能ならしむることであった。

一方のアンリエッタとしては、日本からの軍事援助の引き出しや、農業技術の提供を受けたいと考えていた。

双方共に、自国の思惑を心の内に秘めながら、交渉はスタートした。

35日目午前　ロクシエ連邦・連邦首都　連邦議会大会議室

「もうすぐね・・・それにしても、幾ら芸能ニュースがないからって、まさか私がこんな仕事をすることになるなんて。」

腕時計を眺めながら、日本の帝都新聞から派遣された善永栞記者は呟いた。彼女はつい1ヶ月少し前まで敏腕芸能記者として活躍していた。ところが、転移によって芸能界自体が開店休業状態となり、さらに新聞社も行動を大幅に縮小せざる得なくなったため、転移後は暇を持て余していた。

そんな時に振って湧いたように上から指示されたのが、ロクシエへの派遣であった。

実は今回の交渉、なんと日本とロクシエに存在する主要な通信社に全内容をオープンにするという、異例の交渉となっている。

これを提案したのは、日本の荒木大使であった。提案理由は「一刻も早い交渉締結が望まれる現状で、両国間の文書合意が不完全にしか行えない。その代わりに、メディアに交渉内容の承認になってもらう。しかも、数は多ければ多いほど説得力あるものになる。」であった。

ロクシエ側は最初この提案に面食らい、通信社は完全に排除し、

双方が録音と録画を行う方法を逆提案した。しかし、荒木はそれに対して反発した。

「それでは双方の国民の理解を得られ難い。最低でも、公開した方がいい。」

結局双方の話し合いの末に、記者の数を制限すること、交渉中はフラッシュを焚かないなどの制限をつけることで、公開することになった。

それでも記者の数は相当数になり、当初予定していた大統領官邸の会議室では手狭となってしまい、急遽連邦議会の大会議室で行われることとなった。

これに伴い、急遽日本から多数の記者やカメラマンがロクシエ入りした。何せロクシエと日本の間で交渉公開の件がまとまったのは、4日前のことなのである。そして通達が出たのもその日だ。

各地の新聞社やテレビ局は、あまりに急なことに、大慌てとなった。しかも、日本側のマスメディアにとって困ったことは、移動時間が3日（船で2日＋飛行機で1日）のため、通達が出たその日の内に人選を決めなければならなかったこと。そして、こうした海外への特派員経験を持つ者の多くが、転移によって前の世界に置いてきぼりとなっていたことであった。

そのため、分野に関係なく実績ある記者が送り込まれることとなった。

善永も、慌てて荷造りして新幹線に飛び乗って博多へ移動。博多港から他の記者たちと一緒に、護衛艦「ゆきかぜ」に乗り込み、2

日間の航海の後ロクシエへ上陸。そこからはロクシエ国内の、国内線の飛行機で首都へ飛ぶと言う、過密スケジュールであった。

「文句を言うもんじゃないぜ。費用は全て国持ちで、外国に来させてもらっているんだからな。」

善永の隣に立つ男が、タバコを吸いながら言う。20代で若さに満ち溢れている善永とは対照的な、50代前半のどこか暗い感じの男だ。

「悪徳記者……」

「お互いオマンマの食い上げ状態だったんだ。仕事貰えただけでもありがたいと思うんだな。」

「あなたからそんな全うな言葉聞くとは思いませんでした。」

悪徳記者は善永と同じ芸能記者だったが、主にゴシップを扱うので業界や同業者からさえ嫌われていた。

だが、善永はそんな悪徳の表情に、普段とは何か違うものがあるように感じられた。

「久しぶりに記者としての血が騒ぐんだよ。こう見えても、駆け出しの頃は政治部配属だったんだぞ。まあ、上司と喧嘩した拳句失敗の責任擦り付けられて、ゴシップに回されたがな。」

「つまり、今回の取材は若い頃の雪辱戦だと？」

「そこまでは言わないね。今更、全うな道に戻ろうなんて気はない

しな。だがそれを差っぴいても、今回の取材は面白いつてことだ。」

「まあ、こんな外交交渉なんて珍しいですから。」

「それだけじゃねえ。あのパツとしない春川首相が今回の交渉を仕組んだなら、首相は中々の食わせ者だぜ。あるいはあの荒木って言う若い大使が仕組んだなら、それはそれでおもしろえ。」

悪徳は笑顔でそう言った。その表情は、善永がこれまでに見たこと無いほど綺麗だった。

35日目午前 サクラス帝国・サクラス

「ようやく着いたわね。」

日本使節団団長朝倉亮子は、停車した水力鉄道の車両から降りると、伸びをした。丸5日間の行程で、使節団一行はようやくサクラス帝国の首都に到着したのである。

「長旅御苦労様でした。」

同じく車両から降りたメイベルが済まなさそうに言う。

「別にあなたが謝ることじゃないでしょう?」

「たく、メイベルは本当に物好きだよな。飛行機で飛べば2日もしない内に着けたのに。」

文句タラタラなのは、メイベルの片思いの恋人であるナバルだ。

「だって、日本のこと色々聞いたかったんだもん！列車や船の中で聞けた話だけでも、すごいことばかりだったのよ！？ナバルは感動が無さ過ぎよ！」

「俺には興味ない話ばかりだったし。ああ、けど日本の軍隊に関する話はちよつとばかり面白かったかな。」

「ナバルさん、軍隊じゃなくて自衛隊です。」

日本側の団員が訂正する。

「その話から付いていけなくなっただけだ。何で軍隊を持たないんだよ？」

「ナバル、ちゃんと説明されたじゃない。日本は憲法で軍隊の保有を禁止しているって。」

「けど、ならどうして言い方を変えて、そのジエイタイとか言う軍隊を持っているんだよ？憲法を変えちまえばいいじゃないか？」

「ナバルー、それについても聞いたじゃない。」

「あれ？そうだったっけ？」

「ごめんなさい、ナバルの頭が弱いせいで御迷惑をお掛けして。」

大統領と国王を兼務している聖女が、ぺこぺこ頭を下げている姿はなんと滑稽であった。

「いいえ。そのことは私たち日本人自身の課題ですから。それに、前の世界でも同様の疑問を持たれる外国の方はいましたから。お気になさらず。」

「メイベル、何時までもこんな所で立ち話をしているのは、迷惑です。そろそろ移動しませんか。」

「あ、そうだった。それじゃあ日本の皆さん、行きましょう。」

メイベルたちに案内されて日本使節団は移動した。事前に聞かされた所では、移動先は帝国議会の議事堂であった。そこでまず、連合帝国皇帝であるサンクトウス8世と会う予定であった。

ちなみに、この帝国議会の議事堂は聖サクラス教会の内部にある。サクラス帝国では、フォルティアース大陸最大の宗教であるソルティス教が事実上の国教となっている。そのため、皇帝もソルティス教の皇帝が兼任している。

ドラゴンを神とするドラゴン教もあるが、そちらは少数宗教に過ぎない。

ちなみに、ソルティス教は「くじびきを神の啓示と考え、運命を神に任せて無駄な努力を減らす」という考え方の宗教である。

またその教えはそこまで厳格ではなく、例をあげるならそのソルティス教の聖女であるメイベル自身が「くじびきなんか大キツライ！！」と公言して憚らず、また国内にはドラゴン教のような少数宗教もある。

こうした情報を、朝倉たちはメイベルらから教わっていた。またその事を知らされた日本の春川首相は「宗教上の問題で、いざこざは起こさずに済みそうだ」とぼやいている。

何はともあれ、日本使節団の一行は聖サクラス教会へと足を踏み入れた。

到着後は教会によって用意された部屋に荷物を置き、一旦着替えた後に皇帝との謁見に臨んだ。この謁見は恙無く終わる。サンクトウス8世大司教は人の良い初老の男性で、日本使節団の来訪を歓迎し、その長旅を労った。

この日は皇帝への謁見と、一部の議員との顔合わせのみが行われ、具体的な話は翌日以降にされることとなった。

日本使節団は暇を持て余すこととなったが、そんな彼らにサンクトウス8世はこんな提案をした。

「よろしければ、サクラスを見て回ってはいかがですか？案内の者をつけます。短い時間で申し訳ないが、我が国を少しでも知ってもらえれば幸いです。」

もちろん、その申し出を受け入れないわけがなかった。

共に歩む道 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

サクラス帝国に関する設定は、原作者である清水文化氏のホームページで公開されているものを、そのまま引用しております。

共に歩む道 2 (前書き)

ようやく、更新できました。お待たせして申し訳ありません。

共に歩む道 2

35日目午後 サクラス帝国 首都サクラス 下町の一角

「賑やかね、こう言う風景は、どんな国や世界でも変わらないものなのね。」

日本使節団団長の朝倉亮子は、大司教の厚意によって、サクラス側の案内人であるパセラと共にサクラスの下町を散策していた。

ちなみに、朝倉は到着した時と同じく、女性用のスーツを着ている。そのため、目立つことこの上ない。道行く人が彼女に好奇の視線を向けてくるが、彼女はそんなもの気にせず、サクラス観光を楽しんでいた。

「日本の街もこんな感じなんですか？」

「まあ、街並みとか行きかう人の姿は違うけど、多くの人が集まる雰囲気、要するに活気かしら？それはどこの世界も変わらないわ。転移前は色々な国に行ったけど、人がいて活気のある場所は必ずどこの国でもある物だったから。」

そんな感じで女2人組みが楽しく会話している中、1人護衛役として配属された近衛兵士は所在無さげであった。

「はー。パセラさん1人だけならともかく、2人で会話している所に口を挟むなんて出来ませんね。」

近衛中隊長のクラウである。メイベルにゾッコンな彼、もしこの

場にメイベルがいれば、迷惑も考えずに会話に口出しすること間違いないのだが、その彼女がいないのでテンションがハイになることもなく、そつなく護衛の仕事をこなしていた。

「少し休憩でもしますか？」

「そうね。歩き始めて1時間位経ったかしら？」

朝倉は腕時計を眺めた。電波式の腕時計は、3人が中央教会を出発してきっかり1時間が経過していることを示していた。

ちなみに、当然時差があるので、サクラス帝国に上陸後手動で調整している。また、電波機能も使えないため、教会にある時計などで誤差を修正している。

「じゃあ、あそこのお店でお茶にでもしましょう。」

パセラが指差す先には、通りに机と椅子を置いたカフェのような店があった。4つある机の内、既に3つは人が座っているが、ちょうどいいことに4人掛けの席が一つ残っていた。

「それじゃあ、一休みしましょう。」

「そうしましょう。」

朝倉もクラウもパセラの提案を快諾し、3人は席に着いた。そして間もなく、店の人間がやって来てメニューを聞く。3人は渡されたメニューを読み、それぞれ飲み物と軽食を注文した。

店の人間が離れると、クラウが朝倉に質問した。

「朝倉さんは、こちらの文字が読めるんですか？」

「ええ。この国の言葉は、私たちのいた世界にあった英語と言う言葉と、かなり似ているのよ。そして英語は私たち外交官にとって必須の言葉だったから、難なく読めたわ。」

ちなみに、サクラス語は21文字のアルファベットから構成されており、地球の英語のそれからJ K Q W Xが抜けている。抜けている分はXとCのように、別の語で当てはめられている。

後は基本英語と同じだから、英語をマスターしている人間なら覚えるのは楽であった。朝倉は外交官なので、当然英語はマスターしていたし、また5日間の移動時間を使ってサクラス語と英語の違いを飲み込むことが出来た。

「ふーん。じゃあ、僕たちもあなたの国の言葉を簡単に読むことが出来るのか？」

「あ、それ無理。」

笑顔で一刀両断する朝倉。

「やっぱり、そう上手くは行きませんか？」

「なんなら、やってみる？・・・ほら、あなたに読めるかしら？」

朝倉はメモに簡単な日本語（といっても平仮名に漢字を混ぜている）を書くと、クラウに見せてみた。もちろん、クラウに読めるわけがなかった。

「うーん・・・読めません。と言うか、これ本当に文字なんですか？シヴル文字の方が、よっぽど簡単に見えます。」

「だから言ったじゃない。」

「私も最初見たとき、クラウさんと同じ気持ちになりました。」

そんな事を話している内に、店員が注文した物を持ってやって来た。

「お待たせしました。」

店員はカップと皿をテーブルの上に乗せた。

「お客さん。実は他のお客様が席が空くのを待っているんですが、合席となってしまうがよろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。お二人も構いませんよね？」

クラウが言うと、2人も頷いた。

「ええ。」

「私は構わないわ。」

「ありがとうございます。お客さん、こちらへどうぞ。」

店員に呼ばれて、1人の黒髪の小柄な女性がやって来た。

「失礼します。」

「いいえ、構いませんよ。」

クラウドが言うが、女性が彼には何も言わず、朝倉の方に目をやった。

「そちらの方は、随分と変わった格好をされていますね？」

「この人はニホンと言う国からいらつしやたんですよ。」

クラウドが紹介すると、女性は目を輝かせた。

「ニホン？・・・ああ、ソロリエンス新聞に載っていた。あ、けどあれ本当だったんですか？何でもサクラスに不当な条約を押し付けようとしているとか。」

「あ、それは嘘ですよ。ニホンとはまだ交渉すら始まっていませんから。」

すると、朝倉が凄まじい視線を彼に向けた。

「クラウドさん、何交渉内容を漏らしているんですか？」

「あ!？」

慌てて口を塞ぐが、もう遅い。

「まあいいでしょう。それは知られて不味いことはありませんし。ただし、他言無用に願いますね・・・あ、申し遅れました。日本使

節団団長の朝倉亮子です。」

「エリーです。よろしく。」

35日目午後　ロクシアーク連邦　連邦首都　連邦議会大会議室

「さてさて、もうすぐ午後の交渉がスタートだな。」

昼食を終え、大会議室へと戻ってきた日本から派遣された記者の悪徳が腕時計を眺める。

「それにしても、悪徳さんの予想が見事に当りましたね。あの荒木って言う大使、中々のやり手みたいですね。」

同じく日本から派遣された記者の善永が、感心するように言った。日本側の代表である荒木は、交渉をリードするまでには至らなかったが、流れを大分日本寄りにはしていた。

日本ロクシエ双方共に、国交の締結を行うことは午前中の早い段階で決定した。しかしながら、そこから先の通商条約の締結や、双方の国境をどうするかは未だ決まっておらず、当然ながら両国は少しでも自国に有利なようになるよう交渉を進めた。

日本側は技術力でロクシエを圧倒している反面、食料不足と言う致命的とまで言える弱点があった。そしてその弱点は、既にロクシエ側の知る所であった。

荒木はその弱点を衝かれると、上手く交わり、ロクシエ側が日本

にあまり大きな態度に出ないようにさせていた。一方で、日本側が科学力の優位（それによる軍事力での優位）を背景に、出過ぎた態度になるような場面もなかった。

「ああ。ユーモアを交えて軽い口調で話しながら、重要な部分はしっかりと見抜いている。春川首相と同じタイプだな。中々に交渉上手だ。ただ、ロクシエ側もしっかりと外交を弁えてるな。日本の弱い部分をしっかりと衝いてきている。ま、お互いに妥協する部分もちゃんと弁えているようだから、最後には纏るだろうな。」

「それにしても、一体あの荒木って言う大使はどんな経歴をしているのかしら？」

荒木については、簡単な経歴を説明されただけで、詳細は一切不明であった。

分かっているのは、彼が未だ30にも行っていない非常に若いながら、交渉を上手く進めていることだけであった。

「さあな。日本じゃ充分に調べている暇がなかったし、かと言ってここには衛星電話もインターネットもないからな。たく、今更ながら元いた世界がどれくらい便利だったか、つくづく思い知らされるぜ」

「本当ですね。それにしても、このロクシエは昔の地球そのままですね。さつき外で会った記者の人なんか、タイプライターを使っていましたよ。一体何時の時代ですか？て言いたいですよ」

「他にも、肩からぶら下げる大型の録音機を持っている奴もいたな。ICレコーダーを見たあちらさんの驚いた顔と言ったら傑作だった

ぜ。これじゃあ、ロクシエ側が朝から日本の技術供与に言及するの
もわかるぜ」

2人を含めて、日本から来た記者やカメラマンたちは、ロクシエ
の記者と出会って、その装備の古さに啞然とした。ロクシエの記者
たちは、メモ帳とペンと言った現代でも変わらない装備は良いとし
て、他の装備は1950年代以前のそれであった。

カメラのほとんどはモノクロのフィルム式で、デジタルカメラを
持っている者など1人もいない。それどころか、カラーフィルムを
持っている者も、大手新聞社など極限られた記者だけであった。音
声記録媒体も、日本側がICレコーダーなど片手で持てる超小型な
物なのに対して、肩からぶら下げる大型のフィルム式の物だった。

また会議室の外で待機している記者の中には、タイプライターを
使って原稿を打ち込んでいる者がいた。

もつとも、ロクシエ側からすれば日本の記者が使うフィルムを使
わないデジタルカメラや、小型の録音機材、さらにその場で写真の
編集から原稿書きまで出来るパソコンなどの方が啞然を通り越して、
呆然としてしまう物であった。

だから、双方の記者には今回の交渉だけでなく、相手国の記者に
取材する者までいた。

「けど、技術と言ったら軍事技術もあるんですよね？」

「当然だろうな。むしろ、あちらさんの一番の目的はそっちだろう
な」

「でも、そうになると核とかにも話が及ぶんじゃない？」

善永が声のトーンを落として言った。

「そうだったら偉いことだな。ただ、朝の交渉を見ていた限りじゃ、あちらさんは核に付いてはまだ知らないようだったけどな。知っていれば、いの一番に議題に上げるだろうからな」

「けど、向こうもいずれ知る問題ですよね？」

「だろうな。これくらい科学が発達していれば原理位はわかるだろうし、日本に来れば原発がそこら中であって、核に関する本だっただくさん出回っているんだ。嫌でもいつか知るだろうさ」

日本には多数の原発があり、広島と長崎には原爆に関する展示をした平和祈念資料館がある。さらに本屋や図書館に行けば原爆や核に関して書いてある本の1冊や2冊は置いてある。そうした環境下で、今更原子力に関する事実を隠すなど不可能であった。

「でもまあ、相手が言及してこないなら無理に言う必要もあるまいさ。お、大使たちが入室するぞ。」

午後の交渉に臨む、両国の代表が入室してきた。2人はカメラを構えた。

共に歩む道 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお前話から登場している2人の記者は、いずれもアイマスシリーズからの登場です。

また宣伝ですが、自分の1発ネタを元に八幡先生がアイマス系の架空戦記「独立アイドル艦隊奮闘記」を連載中、私も先生との遣り取りをまとめた「裏独立アイドル艦隊奮闘記」を連載開始しました。よろしければ、そちらもどうぞ。

共に歩む道 3

35日目午後 サクラス帝国首都サクラス 下町の一角

日本使節団団長朝倉と案内役のパセラ、そして護衛役のクラウの3人は急遽相席となったエリーと言う女性と共に、小1時間程お茶を飲みながらお喋りを楽しんでいた。

「へえ、それじゃあエリーさんは作家を目指していらっしやるんですか？」

「作家とはちよつと違いますね、クラウさん。私の場合やりたいのは、物語を絵で描く作品なんです。」

「物語を絵でですか？」

パセラが首を傾げる。サクラス帝国の場合、本は基本的に活字と僅かな挿絵が含まれた物だけだ。写真やイラストを多用した物もあるにはあるが、漫画のように絵を中心にしてストーリーを進めて行く形態の物はなかった。

「ふーん。つまり漫画のことですね。」

「マンガ？」

朝倉の言葉に、エリーが反応を示す。

「あら、この国には漫画に当る物が無いのですか？コマで割った絵に、噴出してセリフを入れたものなただけ。我が国では大人から

子供までに親しまれているものなんですよ。こんな感じに。」

朝倉は再びメモ用紙を取り出すと、適当にコマ割りの図と簡単な絵、そして噴出しを描いてみせる。すると、エリーが目を剥かんばかりに驚いた。

「こ、これです！私が描いているのは当まにこれなんです！！」

「あらそう。この国にもマンガがあるのね。」

と、朝倉が感心したように言うが、すぐにエリーが否定する。

「いいえ、厳密にはありません。だって、これは私がオリジナルでやっている方法ですから・・・二ホンでは、そのマンガと言う物が普及しているのですか？」

「普及しているも何も、我が国では何十年も前から存在しているポピュラーな娯楽ですよ。先ほども言いましたけど、大人から子供にまで親しまれています。人気の作品だと、シリーズ累計で2億部の売り上げの物だってあるんですよ。」

「・・・2億！？」「」

あまりに桁違いの数に、3人が素っ頓狂な声を上げた。

「別に、私がいた世界では珍しいことではありません。日本が元いた世界の人口は60億以上だったんですから。世界的なベストセラーなら、それこそ何十億部という単位で発行されていましたよ。」

「それは興味深い話ですね。よろしければ、詳しく聞かせてもらえ

「ませんか？」

エリーの質問に、朝倉はチラッと彼女を見つめた。

「ええ、構いませんよ。けど、条件があります。」

「何でしょうか？」

朝倉は不敵な笑みを浮かべて、言い放った。

「あなたの、本当の名前を教えてくださいませんか？」

35日目夕方　ロクシエ連邦・連邦首都連邦議会大会議室外の廊下

「さあて、ホテルに帰るとするか。」

日本から派遣された記者の一人である悪徳が、荷物を纏める。その隣では、同じく記者の善永が荷物を纏めていた。

「結局、通商条約の方はあまり進展しませんでしたね。」

「当たり前だ。つい1ヶ月前までお互いの存在すら知らなかった国だぞ。為替レートやら防疫やら、それこそ上げれば切が無いほど色々なことを決めなきゃならんだぞ。国同士の遣り取りってのはただでさえ厄介なんだ。どこぞの無茶なアイドルのように、色々と素っ飛ばして何かする、なんてわけには行かないんだぞ。むしろ、俺としてはそれなりのテンポで進んでいるように感じられたぜ。」

「そうなんですか？」

「荒木大使も、ロクシェのクラークと言う大統領も、お互いに大まかな話の内容が噛み合ってたからな。それぞれ事前に色々やっておいたんだろうさ。やっぱりあの大使、若いくせにやりやがる。まるで765のPみたいだぜ・・・ま、とにかく今日は終わったことだし、帰って写真の確認や原稿作りだな。今日中に作らないと、日本に着くのが遅れちまう。」

「記事が日本に着くのが1週間後だなんて、泣けてきますね。」

「ハハハ、言ってるな。」

2人は荷物をまとめ終え、歩き始めた。

「うん？」

悪徳が立ち止まった。

「どうしました？」

「こいつは驚いた。まさかこんな所に、あの人がいるとはな。」

善永は悪徳が視線を向けている先を見た。するとそこには、1人の制服を着た男が、別の制服を着た男と喋っていた。

「あの人は、自衛隊の人ですか？」

「ああ。あの青い制服は空自だな。おそらく駐在防衛官だろうさ。」

「で、あの人が何なんです？」

「直にわかる。」

その自衛官は、しばらく別の軍人（ロクシエ軍の将校）と会話していたが、間もなく別の軍人が話を終えて離れた。すかさず、悪徳は声を掛けた。

「こんな所でお会いするのは奇遇ですね。」

その自衛官は悪徳を見るなり、目を見開いた。

「あんた！どうしてここにいるんだ！？確かあんたは芸能記者だろ！？」

「芸能記者は今開店休業状態なんでね、こっちの派遣組にされたわけですよ。しかし、まさかあなたが駐在武官とは思いませんでしたよ。」

「こっちも、まさかあなたにこんな所で会うとは思いませんでしたよ。また俺のことを記事にするつもりですか？」

「とんでもねえ。あの人に喧嘩をもう一度売るなんて、真っ平ごめんですぜ。」

「あの、悪徳さん。この人と知り合いなんですか？」

事情を把握できない善永がオズオズと尋ねる。

「その人は？」

「記者仲間ですよ。」

「善永栞と申します。悪徳さんとはどう言う関係で？」

「……ま、いずれバレルからいいかな。失礼しました。日本国暫定大使館付駐在防衛官の日高正道二等空佐です。よろしく。」

「よろしく……え！？日高？そして悪徳さんと顔見知り？……まさか！？」

善永が目を見開いた。そんな彼女に、悪徳がそつと耳打ちする。

「そつよ……この人はあの、日高舞の夫で日高愛の父親だぜ。」

35日目夕方 トリステイン王国トリスタニア・王宮内の一室

「つ、疲れた。」

「同感。」

1日目の交渉が終了し、オブザーバーとして参加していた才人と書記官として参加していたルイズは、ぐったりと宛がわれた部屋のソファアーに腰を降ろしていた。

2人がここまで疲れている理由。言うまでも無く、その原因は「外務省の白い悪魔」である日本大使の本多聡子であった。半ば脅迫

とも思える言葉を連発する彼女に、日本側もトリステイン側双方共に大いに神経をすり減らすこととなった。

ただし、アンリエッタ女王と高凧春名の両名だけは最後まで何事も無かった様に振舞っていた。

「春名の奴、どうしてあんな状況で大丈夫だったんだ？」

「それを言うなら姫様もよ。どうしてあんなに気丈に振舞えるのかしら？私だったら最初の1時間でギブアップよ。」

と、そんな感じに2人が愚痴を零していた所へ、部屋のドアがノックされた。

トントン

「はい、どうぞ。」

「失礼します。」

「お邪魔します。」

噂をすればなんとやら、やってきたのはなんとアンリエッタと春名の2人であった。

「あれ、姫様に春名、2人揃ってどうしたの？」

「私は今日の交渉に協力していただいたお2人に、感謝の言葉を伝えに来ました。ありがとうございます。それから、今後もよろしく願います。」

アンリエッタに続いて、春名が口を開いた。

「私は本多さんからの伝言を伝えに。今日は慣れないスーツで御苦労様でした。まだまだ続きますが、引き続きよろしくおねがいします。だって。」

「うわあ、わかっているけど、辛いな。」

と、才人は2人が口にした表向きの言葉を真に受けた感想を口にする。

しかしながら、ルイズの中の女の感は、2人の言葉にある物をしっかりと感知していた。

（この2人。今言った言葉は嘘じゃないけど、あくまで才人と話すための口実ね・・・才人はおバカだからわからないでしょうけど、私は誤魔かせないわよ。けど、まさか大声で怒る訳にも行かないし、こっちも自然に行かないとね。）

「それで姫様、それに春名、用件はそれだけでしょうか？でしたら、私達（ここを強調）今日の慣れない交渉で疲れていますの。夕食まで少しばかり時間がありますし、休ませていただけませんか？」

（さすがはルイズさん。）

（私の考えを読みましたね。）

（けど、才人君の御主人だからと言って・・・）

(独り占めは・・・)

((許しません!!))

乙女たちの静かな戦いが今始まる・・・かに見えたが。

「ククク・・・面白いことになっているじゃないですか。」

((この声は!?)))

4人が部屋の入り口を見ると、「外務省の白い悪魔」が相も変わらずの不敵な笑みを浮かべて立っていた。

「ちよつと、何で本多さんがここにいますか!？」

「そうよ!あなた春名に伝言を託したくせに、なんで自分で来てるのよ!!!」

春名とルイズが「訳がわからんよこの人」と言わんばかりに抗議する。しかしながら、そんなものど吹く風と言わんばかりにスル―して、本多は言った。

「ここに来れば面白いことがあると、誰かが囁いたのですよ。ククク・・・本当に単なる気まぐれですよ。ククク・・・」

その笑みは、白々しいにも程があった。

((嘘吐け!)))

ルイズ、春名、アンリエッタの3人は内心でそう吐き捨てる。

ちなみに、事實は本多がアンリエッタが才人たちの部屋の方へと歩いていくのを偶然見つけて、春名と共に修羅場になりそうであるのを予測したと言うことだった。

3人が勘繰ったようなことはなかったわけだが、どちらにしろ3人組が才人を巡ってリアル昼ドラ寸前のシーンを楽しもうとしたのは否めない。

「あの、一体何がどうなっているの？」

「『才人（さん、君）は黙っていて（下さい）！！』」

「・・・はい。」

すると、本多が手で3人にこっち来いと合図する。

3人が渋々、と言うか文句の一つでも言っただろうと近づくと、彼女は突如真剣な表情になって言った。

「3人とも、恋に狂うのは勝手ですけど、あなた方3人は現在日本とトリステインの未来を決める重要な交渉を行っている当事者なんですよ。私は、あなた方の誰が才人君を持ち帰ろうが知ったことじやありませんが、クレグレも今後の交渉に不利益になる事態を招くことだけは避けて欲しいんですね・・・」

最後の方は、何やら冷たさを含んでいた。もちろん、3人が一瞬ゾツとしたのは言うまでもない。冷たい手で心臓を鷲づかみにされたと言った方が良いだろうか。

「わかりましたか？」

「はい……」

「そう言うわけで、3人とも交渉の終わりまでは自重してくださいね。ククク……」

「あの、何を話しているんですか？」

全く事態を把握できない才人が尋ねると、本多が極々普通の口調で返した。

「何でもありませんよ。あなたが気にすることじゃありませんから。ククク……」

触らぬ神に祟りなし。その言葉通り、才人はそれ以上追及はしなかった。

そして残る3人は、その後お通夜のように必要最低限の言葉しか喋らなかつた。

共に歩む道 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

アイマス短編やゼロ魔二次創作なども並行更新中、さらに大学卒業によるゴタゴタで執筆が滞りがちになっております。申し訳ありません。

共に歩む道 4 (前書き)

ロクシエでのシーンを期待した方、ごめんなさい。

共に歩む道 4

35日目午後 サクラス帝国首都サクラス 下町の一角

「あなたの、本当の名前を教えてくださいませんか?」

「「え!?!」」

朝倉の唐突な言葉に、パセラとクラウが目を丸くする。一方、声を掛けられたエリーの方は表情一つ変えない。

「どう言うことでしょうか、朝倉さん?言っていることの意味がよくわからないのですが?」

「だから、あなたの本当の名前を教えてくださいのよ、自称エリーさん。だって、エリーと言う名前は偽名でしょ?」

朝倉は砕けた口調で、殊更に「自称」の部分強調した。

「あ、朝倉さん、何を言っているんですか?」

訳のわからないクラウが問うが、朝倉は彼を無視してエリーに向かってさらに言う。

「だってそうよね?まさかスパイが本名を言う筈がないし。」

「スパイ!?!」

「スパイで、あの敵のいる所に潜入して、偉い人を暗殺とかしてく

るあれですか？」

「パセラさん、それはちょっと違います。それではただの暗殺者です。スパイは確かに破壊工作もしますが、主な仕事は諜報、すなわち情報収集です。」

パセラの言葉に、クラウが訂正を加える。

「どうして私がスパイだと思っんですか？」

「だって、あなた会話している最中、さりげなくだけど、やたら日本の政治とか外交に付いて聞こうとするじゃない。傍から見れば自然だったけど、私から言わせれば少しばかり不自然だったわ。それに。」

「それに？」

「エリーと名乗った時とか、口調に演技しているような感じがしたしね。」

「朝倉さん、そんなことまでわかるんですか？」

パセラが感心している。

「フフフ・・・こう見えても、前の世界で随分と危ない橋渡ったから。それに、色々な国で色々な人と話し合えば、自然とそう言うのもわかるようになるわ。さて、それでどうかしら？あ、もちろんこれは唯の私の推測。全否定されて、そうね、罵声を浴びせられても文句は言えないわね。それにさっきの会話の中で重要な部分は、ちやんとはぐらかしたし。」

「危ない橋」と言う単語が少しばかり気になったが、パセラとクラウは突っ込まなかった。何故なら、それ以上にエリーがどんな反応をするか、気になったからだ。

「・・・どうやら日本の外交官さんは、かなり優秀なようね。」

エミーは苦笑いし、両手を広げる。降参の合図だ。

「御名答。エリーは偽名よ。私の本当の名前は、エミー・アサッシニオよ。」

「アサッシニオで、ドラゴン教のトップの!？」

クラウが声を上げる。

「そうよ、近衛小隊長のクラウさん。私はそのドラゴン教トップのブルーノ・アサッシニオの妻よ。」

「ドラゴン教は確か、南部で一大勢力を誇る宗教だったわね。なるほど、つまりあなたはドラゴン教という立場から、日本のことを独自に調べようとしたわけね。」

「まあ、そんなところね。それで、あなたを私をどうするの?」

エミーが訪ねると、朝倉は笑顔のまま、いや先ほどよりも面白そうな表情で答えた。

「別に。面が割れたあなたがスパイ行動をこれ以上する筈が無いし、私は外交官だから司法権もない。それに、得体の知れない国につい

て調べるのは別に可笑しいことじゃない。さすがに「暴力」に出たなら、私もそれ相応の「報復」をさせてもらうけど、そう言うわけでもないしね。つまりは、何もしいないと言うことね。」

パセラとクラウは、「暴力」と「報復」という単語に、何かしらの意図があるように感じられたが、それを聞くだけの勇氣は無かった。

「それは感謝ね。どうせ、あなたとは数日後に会うんでしょうから。」

「それはどう言うことですか？」

パセラが首を傾げる。

「パセラさん、我が国は連合帝国です。確かに国全体の政治はここサクラスの議会在握していますが、一応連合を形成する各国にも自治権があり、政府があります。日本が今後条約などを結ぶ場合、各国と個別で結ぶべき条項も出てきます。そうになると、個別で挨拶する必要もあると言うわけです。確か、ブルーノ・アサツシニオももうすぐ明後日くらいにサクラスに着くはずですよ。」

「あ、なるほど。」

「上手いことチャンスを見つけて、色々聞き出そうとしたんですけど、まさかこうもあっさりと思破られるとは思いませんでした。」

エミーは苦笑いしながら言った。

「そうになると、さっきのは全部お芝居だったんですか？」

パセラがエミーに尋ねるが、それを朝倉が否定した。

「それはないわね。だって、あの話をしていた時の彼女はとても生き生きしていたもの。あれは演技じゃなくて、どうみても地ね。」

「あははは・・・」

今度は空笑いするエミー。任務をすっかり忘れて、熱く語ったことを恥じているらしい。

「けどそんなに漫画が好きなら、明日くらいに私たちの所にいらっしやい。見せてあげるわよ。」

「はあ!？」

エミーは啞然としてしまった。スパイ行為をした人間を招き入れるなど、信じられなかったからだ。

「フッフ・・・貴方が畏か何かと感じているようね。そんなつもりは全く無いわ。本当の貴方が楽しめるようにしたいだけだから。」

そう言つと、朝倉はそれまでにない程極上の笑みを彼女に向けた。

ちなみに、翌日エミーは朝倉たちの元へと行き、日本の漫画とアニメを見せられている。いずれも使節団の団員が娯楽用に持ち込んだものであったが、もちろんそれらが与えたインパクトは、彼女に一生分の驚きを与える物であった。しかも、書籍の形で持っているものは1人もいなく、電子書籍の形で見せられたので、輪をかけて彼女は驚くこととなった。

その翌日、エミーは夫ブルーノ・アサツシニオに日本との友好関係を一刻も早く作り、特に書籍マンガの輸入を行うべきと説いて、彼を大いに驚かせる（というかドン引きさせる）こととなる。

35日目午後 日本・東京首相官邸 閣議室。

「では、在日米軍ならびに在日外国人に対する扱いは今後そのような方針で行きたいと思う。」

春川はそう言って、午後の閣議を締めくくった。

各国で始まった国交締結と通商条約の締結は、概ね順調に進んでいた。日本国内も、なんとか転移直後の混乱は一先ず落ち着き、国民も物不足の生活に次第に慣れつつあった。またその物不足も、石油の採掘開始や各国との通商条約締結による緩和が現実味を帯びたことで、打破できる可能性が高くなった。

取り合えず第一関門突破と言えたが、まだまだ問題は山積している。

例えば海自、海保につぐ3番目の海上防衛組織の設立は、やはりと言おうか海自と海保双方の抵抗に遭った。また、その管轄官庁を財務省（米国の沿岸警備隊にならって）か農林水産省にするかで揉めていた。

この問題は、後に新設組織が海自・海保とも違う任務になる可能性が高いこと、さらに財務省のやる気のなさや農林水産省の暑苦しいまでの懇願によって、結局農林水産省内の組織となる。名前もこ

の1カ月後に「日本海上警備機構」という名称が決定する。

農林水産省がやるきであったのは、これまで散々韓国等の密漁船や環境テロ団体にバカにされながら、放水銃でしか対向できなかったことに、怒り心頭であったからだ。

なおこの組織、警備機構と言う公営の警備会社みたいな名前であるが、装備面では海上保安庁を上回る重武装組織として編成されることとなる。これは海保以上に広い海域での活動を前提としたためと、転移直後に海保の巡視船が意図も簡単に怪獣によって撃沈されたため、さらに有事の際に海自の補助戦力として使用するためであった。

もつとも、この組織が設立されるのはこの2カ月後、実際に稼働するのはそれからさらに半年後のことである。

この問題と共に、日本政府を悩ませているのが在日外国人の問題であった。既に在日米軍が、日本への協力の見返りに、発見された諸島に独立した国家の建設を提案したのは既に述べた。

この問題を、日本政府は「今は国内の混乱を抑えるのが先だから」、「周囲の状況確認を優先するから」、「食料はちゃんと供給するから」と言つて、各国大使館にその扱いを丸投げして、はぐらかし続けてきたが、さすがに国内の混乱が収まってきた現状では、これ以上先に延ばすのは不可能であった。

そこで在日外国人の扱いをどうするかについての議論が本格化した。

まず最初に出た解決案は「日本への強制的な国籍帰化」であった。

と言つよりも、常識的には諸外国が認める国家として体を成しているのが、日本だけしかないと言つ現状では、最も現実的な策であった。

しかしながら、個々人が持つナシヨナリズムをバカにしてはいけない。後に国営放送が行つた在日外国人向けアンケートでは、この時点で日本への国籍帰化を受け入れた者の割合は50%であった。

帰化を受け入れられない者に言わせれば「例え故郷に永遠に帰ることが出来なくとも、その故郷への愛着（一部の人間は忠誠等と言つた）を捨て去ることなど出来ない！」であつた。

さらに、彼らは「ちゃんと我々の寄るべき、国としての領土は残つている。大使館がそうじゃないか！」と言つ無茶苦茶な理論を展開した。

ただ無茶かどうかは別として、帰化に反対する外国人の数はバカにならない。何せ元々日本に定住していた人間に加えて、旅行中や出張中で来ていた人間、それに日本近海を航行中、或いは飛行中に巻き込まれた船舶や飛行機のパイロットまで含まれているのだ。

加えて問題を複雑にするのは、在日米軍は自衛隊に次ぐ、見方を換えればそれ以上の戦力を保有している武装勢力であること。そして外国人の中には、技術者をはじめ今後日本にとって有益となる人間も多く混じっていることだつた。

つまり、無碍に出来ないと言つことであつた。

そこで日本が取るべき選択肢は以下のようになつた。

？ 問答無用で強制帰化。 在日米軍は武力をもって強制接收。

？ 帰化希望者は帰化受け入れ。 受け入れない者は追放、もしくは逮捕。

？ 帰化希望者は受け入れ。 受け入れない者に対しては新領土（諸島）を提供し、日本の保護国としての自治領を設置する。

？ は論外、？ は出来なくはないが今後の国際社会で日本がリーダーシップを発揮する上でマズイ。 となると、残るは？ であった。

？ の場合、新領土を手放すことでの日本国民からの反発、独自独立を考えている在日米軍、さらに自立した国家としての独立を求める人間の輦轡を買うことは、用意に予想できるが、？・？よりは実現性が高いので、結局春川ら日本政府は？の案を進めることとした。

共に歩む道 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

前半に登場したエミー・アサツシニオは、あきらたろう先生の「くじびき勇者さま」シリーズ二次創作「くじびき勇者さま 外伝ドラゴン教司教さま 誰がゲリラ戦の名手ですか!？」に登場する先生のオリジナルキャラです。

あきらたろう先生に感謝します。

共に歩む道 5

35日目夜 ロクシアーヌク連邦・連邦首都 日本記者団宿泊用ホテル

日高二佐、悪徳、善永の3人は、ホテル内のレストランで食事をしながら会話していた。

「へえ、それじゃあ日高さんは、悪徳さんとは因縁の中だったんですね。」

善永は、日高と悪徳の関係を2人から聞くことができた。2人によれば14年前、当時舞と結婚したばかりの日高は、電撃引退した舞のことを追っていた悪徳に、色々と嗅ぎ回られたそう。そしてその際に、互いに顔を合わせたらしい。

「まあな。」

「下手すれば、こっちは防衛大学から放逐される所でしたよ。あんなが、色々と嗅ぎ回ってくれましたからね。」

当時日高は18歳だったから、防衛大学の1年生であったはずである。確かに、スキャンダルは退学処分につながる材料となりえただろう。

だが、悪徳はそんなことどこ吹く風のようにだった。

「それくらいしなきゃ、こっちだって仕事になりませんからね。ま、良いじゃないですか。結局記事は世間に出なくて、あなたには何の

被害も出なかつたんですから。こっちは上から大目玉食らって、本
当にそのままゴシツプに永久就職ですよ。」

「悪徳さんが記事にしなかつたって、どう言うことですか？」

「善永、一言教えてやるぜ。触らぬ神に祟り無しだ。」

「それに関しては、私も同感だ。オーガとさえ呼ばれた人物に不用
意に手を出す物じゃないぞ。」

「ああ、ハイハイ、納得納得。」

オーガと言うのは日高の妻、すなわち日高舞の蔑称である。彼女
のあまりの恐ろしさから来ているらしい。

「冗談半分で聞いて欲しいけど、あいつ政界とも深いパイプ持つて
るから、下手に怒らせると社会から抹殺されるよ。」

「嘘ですよね？」

「.....」

善永の言葉に、日高も悪徳も沈黙した。肯定もしないが、否定も
しない。

(そんな人を妻にするなんて、この人もある意味凄いわね)

善永は心の底からそう思った。

「まあ、昔話はこの辺でよしましうや。で、日高さんとしては今

の両国の状況をどう思っているんです?」

「お、さっそく取材ですか。食事中だって言うのに、仕事熱心ですね。」

「そりゃ、久々に政治の記事書けるんですからね、やる気も出ますよ。で、どうなんです?」

「私の名前は伏せてもらえますよね?あ、出来るなら武官であることも。大使館関係者筋と言うことで。」

「もちろんです。それに、どうせ話しても何れ公表する内容なんですよ?」

「当然ですよ。情報は扱い方一つで、身の破滅を呼び寄せるので・・」

「そりゃそうですね。で、どうなんです?」

「まず、両国間の感情は悪くないでしょう。私がこっちに滞在を始めたのはほんの4日前からですが、市民の感情は悪くはありません。むしろ彼らは、我が国に注目しています。特に以前はスー・ベールと貿易をしていた商社や、軍はその筆頭です。不信感も、島近海での事件以降急速に沈静化しています。」

「そいつは有難い情報ですね。こっちは交渉の取材で掛かりきりだから、正直この国のことは良く分かん。」

「ついでにもう一つ。これはあくまで私の個人的な意見だけど、交渉は上手く行くと思いますよ。時間は多少掛かりますが、10日以

内には通商条約も結ばれる筈です。両国政府とも、まだ公にしていませんが、それぞれ今回の交渉前から互いに、念入りな下準備を行ってきた。それに、このロクシエは今回転移してきた国の中で、もっとも現代の地球に近い文化や意識を持っている国です。もちろん、色々細々したことか、詰めなきやいけない内容も多いので、さすがに2、3日じゃ無理でしょうけどね。」

「なるほど。そいつは興味深いねえ。で、その下準備で言うのは、首相の命令ですかい？それともあの荒木大使が根回ししたんですか？」

「それについては、何とも言えませんね。と言うか、さすがに防衛官であつて、外交官ではない私にはそこまではわかりませんよ。」

日高は笑つて、その質問をはぐらかした。

「あの日高さん、いいですか？」

悪徳に代わつて、善永が口を開いた。

「どうぞ。」

「日高さんは、今後条約が締結されたとして、この国と日本がどんな関係になると思えますか？」

「私個人の意見として言わせてもらえば、同義さえ守つて対等に付き合えば、上手くやつていけるでしょうね。それに、このロクシエは大陸国家であるので資源も市場も有望だ。対して、ロクシエ側も日本の技術に注視している。お互いの長所を活かせば、上手くやつていけると思いますよ。もっとも、懸念事項が無いとは言えません

が。」

「と言うと？」

「これはロクシエ側の政府関係者から聞いた話で、まだ日本のメディアにも露出していませんが、いずれ発表されることでしょう。実はロクシエにも地球の連邦にあつたのと同じく、分離独立を掲げる国家や勢力が無きにしもあらずなんだそうです。それに我が国、日本の軍事力に危機感を抱いている人間もいるらしいです。不信任は沈静化こそしましたが、払拭したわけではないのです・・・現在大使館やロクシエ政府が恐れているのは、そうした勢力による横槍です。」

日高の言葉に、善永と悪徳は顔を見合わせた。

40日目 世界

この日、新世界における歴史は大きな転換点を迎えた。日本・トリストイン、そして日本・ロクシエ間にそれぞれ国交の樹立と、通商条約の締結がなされた。もちろん、各国の安全保障や共通の法整備、それに急ごしらえの通商条約の改正など、今後行うべき課題は多い。しかしそれを差っぴいても、新しい国際秩序が形になったのは、大きな前進と言えた。

そしてこれら条約の締結は、その後ロクシエ・サクラス間、日本・サクラス間と言ったその他の国同士の条約締結に弾みを付けることとなる。

ちなみに、貿易の正式な開始はこの2週間後のことである。ロクシエから日本への最初の積み出し品は小麦と大豆、逆に日本からロクシエへは各種工業製品のサンプルであった。そしてその決済手段は、この時点では為替レートが決定していなかったため、金や貴金属による現物取引であった。

また、この日日本では先日の閣議に基づいた在日外国人特別帰化法、同臨時国籍法、そして在日米軍と自衛隊合同での 諸島調査法案が可決、即日施行に移された。

この内調査法案に基づき、早速横須賀の第七艦隊および沖縄の海兵隊からの戦力抽出が決まり、編成と準備が完了した10日後を目処に出発が決定した。

未知の世界に置かれてしまっているだけに、各国の政府は様々な手段を矢継ぎ早に打たなければならなかった。それが結果的に、平時には有り得ないほど早いスピードでの条約締結や、法案の可決と言う状況を生み出していた。

そうした一方で、こうした急進的な政策は一部の人間からは、反発を招く物であった。特に外交面では、各国が程度の差こそあれ抱えている極端な国粹主義者や保守派を、刺激すること間違い無しであった。

日本はそもそも、そのような思想を持つ人間こそ少なくは無いが、国家権力に刃向かえる程の武力を持ち合わせている者などおらず、加えて転移後強化された政府による治安維持活動や国内の物資統制で満足に動けるはずが無く、無視してよい問題だった。

しかし連邦制を取っているロクシエ、連合帝国のサクラス、そし

て保守派の多いトリステインではそうした人間の活動が活発化しつつあった。それがどのような形で表に出るかは、未だ誰にもわからなかった。

そしてそうしたことにはあまりにも無関心なお姫様と、関心は持っても家臣の言うことをあまり聞かない2人の女王様が、行動を起こしたのもこの日であった。

40日目昼 トリステイン王国・トリスタニア 王宮

「今日ここに、私アンリエッタ・ド・トリステインは、トリステイン王国女王として、日本国との国交締結と、通商条約の締結を宣言し、サインいたします。」

「同じく、私本多聡子は日本国代表として、トリステイン王国との国交締結と、通商条約の締結を宣言し、その正式な文書にサインいたします。」

アンリエッタ女王と、暫定日本大使の本多はそれぞれに宣言を行うと、用意された文書にサインした。

「才人さん、春名さん、文書の確認をお願いします。」

「はい！」

文書のサインはアンリエッタはトリステイン語、本多は日本語で行っている。そしてそれぞれの言葉で文書が書かれている。才人と春名は、既に何度も2枚の紙に書かれている文書の内容に相異がな

いか確認していたが、ここで改めて確認を行った。

「間違いありません。」

「こつちも、間違いありません。」

2人が宣言した。

「ここに条約は締結されました。今後トリスティンと日本が、良き隣人として付き合っていけることを、切に願います。」

「こちらこそ、この友誼が長く続くことを願います。」

アンリエッタと本多が挨拶を行い、握手する。こちらはロクシエと違ってメディアはいないが、その様子は大使館員によって、動画と静止画でそれぞれ記録された。

「一先ずこれでなんとになったな。」

その様子を見て、才人は呟いた。

「それは違うわ平賀君。むしろ、ここからよ。」

「そうか・・・そうだよな、本当に大変なのはこれからなんだよな。」

春名の言葉に、才人は頷いた。

「特に、政府の皆様の場合はね。」

「そうだね。」

2人のそんな呟きは、誰にも聞かれることが無かった。

本当なら、交渉はこれで終わりなので、双方共にお開きになる筈であった。ところがこの交渉、これで終わりにはならなかった。

「ところで本多大使。」

「はい。何でしょうか?」

「今後互いに良きパートナーとして付き合っていくのです。互いの国の代表が、お互いの国を知らないのも問題でしょう。そこで、私としては早期の日本訪問を希望します。」

「ほう。」

「「「な!?!??」「」」

アンリエッタのいきなりの発言に、そのことを知らなかった面々は、一様に驚きの声をあげた。

同日 サクラス帝国・帝都サクラス

「日本への使節団の団長は、私がやります!」

「聖女様、それだけは止めて下さい!」

海の向こうのアンリエッタ女王が日本への早期訪問を打診したその日、サクラス帝国では日本への使節団派遣が正式に決定したが、その団長にいの一番でメイベルが手を挙げていた。

それを慌てて議員たちが引きとめようとするが、彼女のパートナーであるナバルやパセラは、呆れた表情でこう言うしかなかった。

「絶対に止めるのは無理だな。」

「ああなつたメイベルを止めようと思うなら、柱に縛り付けとく必要があります。」

共に歩む道 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

そしてごめんなさい。交渉シーンは面倒くさいのと、作者の知識不足などで、概略と伏線だけ貼って飛ばしました。本当にごめんなさい。

新たな世界へ 1

50日目 日本国・横須賀 海上自衛隊横須賀基地

この日、編成が完了した 諸島調査部隊が横須賀ならびに佐世保港から出港した。日本の自衛隊からは海上自衛隊の護衛艦2隻に輸送艦「しもきた」「くにさき」そして補給艦「おつみ」、民間から借上げたタンカーが1隻。在日米軍からは強襲揚陸艦「ワスプ」、ドック型揚陸艦「トーテュガ」、イージス巡洋艦「シャイロー」、駆逐艦1隻の計10隻の艦隊であった。

この艦隊は横須賀、ならびに佐世保から出港し海上にて会合、その後 諸島を目指す。到着は横須賀出港の6日後の予定であった。

また同艦隊には臨時に第99任務部隊という、米軍式の番号が割り振られていた。対して米軍はあくまで、日本の調査に対する協力を行う立場と言うことで、指揮権は自衛隊側が握った。

ただし万が一戦闘を行う場合、自衛目的であるならば、米軍側は独自の判断で行動することが許可されていた。

各輸送艦や揚陸艦には、民間から派遣された調査チームと観測機器、現地でその存在が確認された大型獣への対応に備えて陸自や米海兵隊から抽出された戦車・装甲車を含む護衛部隊、さらには現地における拠点設営を行う自衛隊の施設科部隊など、総勢1000名にもなる上陸部隊が搭載されていた。

この部隊が横須賀から出発していく様子を、石川防衛大臣は埠頭から見送った。

「ようやくの調査部隊派遣部隊ですね。」

石川は隣に立つ、中村海上幕僚長に話しかける。2人以外にも、埠頭には陸上幕僚長や横須賀地方総監部の幹部、また在日米軍の幹部の姿もあつた。

石川の方は無事送り出せたことに安堵に近い表情を浮かべていたが、対して中村は少しばかり不安げであつた。

「無事に帰つて来るといいのですが。急ごしらえの艦隊ですし、何より言葉が楽に通じるとは言え、米軍との合同です。民間人も含んでいますし、現地ですぐい事にならなきゃいいんですがね。」

「幕僚長、それについては議論し尽くしたことだろ？」

「それはそうですが、準備期間がわずか10日間ですよ。相手がトカゲの化け物とは言え、やはり不安は付きません。本来なら一月位じっくり時間をかけるべきだったんです。」

「今の日本にそんな時間は残されていないよ。大丈夫。彼らを信じようじゃないか。」

「はあ・・・ところで、首相は相変わらずお忙しいようで。今日の式典も大臣が代理でしたね。」

「君も聞いただろ、トリステインの女王様が早期の日本を希望されている。早ければ再来週には受け入れだ。そのために、先週から首相官邸と外務省はてんやわんやだ。サクラスの使節団も受け入れなければならなりませんからね。」

「国を背負うと言うのは、大変なことですね。」

「……そうですね。あれでも首相ですから。」

50日目 日本国・東京 首相官邸首相執務室

「……じゃあ、それで頼む。はあ。」

電話を終えた春川首相は、受話器を置きながらため息をついた。

「キヨン君、じゃなくて首相。少し休んだ方が良くないですか？」

連日の激務を見かねて、秘書官の朝日奈みくるが心配そうな声を掛ける。

「ありがとうございます、朝日奈さん。けどそうも言ってもらえないから。」

「再来週にトリスティンのアンリエッタ女王、それにサクラスの使節団を急遽受け入れることになりましたからね。」

相棒にして副首相の小泉が、いつもどおりの表情で言う。そして春川が苦笑しながら付け加える。

「しかもその使節団には、例の聖女様が付いてくるらしいからな。」

「一応報告は見ていますが、一体どんな人なのか楽しみですな。」

「ロクシエの荒木大使や、サクラスに派遣中の朝倉の情報によれば、若くて聡明な人物だそうだが・・・にしても、トリステインの女王様といい、まさか10代とはな。」

「閣僚たちも啞然としていましたからね。」

「議員たちもな。」

春川は、閣議で見た閣僚や議会での報告で見た衆参両議院の議員たちの顔を思い出し、1人小さく笑った。やはり、2人の元首が同時に、しかも少女であると言うことは相当なインパクトのあることだった。

「私もビツクリですう。」

「あと、そうそう。ネットでアンリエッタ女王と聖女メイベルのことが早速話題になっているとか。しかも、これが面白いんですよ。」

「何が面白いんだ?」

「まだお2人の写真が出ていないでしょ?だから、若いお姫様たちの姿に、そっち系の好きな人から期待の声が上がっているそうです。」

この時点において、アンリエッタの場合は肖像権の関係から、またサクラスからはメイベルを単体で映した写真が届いておらず、名前と歳こそメディアに対してや議会における説明で発表されたが、その姿は公表されていなかった。

「期待するのは勝手だけど、本人が来てから「俺の嫁!」なんて言

「だったら、いらぬ誤解を招きそうだな。相手の国が不敬罪を堅く守っているのなら、外交問題になっちまう。」

日本をはじめ、現在では王室を持っている国でも大分薄らいでしまったが、

「トリステインの場合は、その色が強そうなので、記者会見を通じて警告を与えた方が良いでしょうね。」

「そのあたりは任せるよ。それと、トリステインと言えば、例の平賀少年も帰って来るんだったよな？」

「ええ。トリステインの随行員と言う形で。」

「日本にそのまま帰ってくれば良いのにとと思うが、よっぽど向こうに愛着があるのか。もしくは、例の本多大使の報告は本当かもしれないな。」

「私も最初は驚きましたが・・・まあ、ファンタジーの世界ですから。ライトノベルみたいに、リア充な状況に置かれるみたいなことも起きるのでは？」

「・・・我が国の法律を重婚を認めるように改正するか？」

春川が冗談めかして言う。

「キヨ、キヨン君。さすがにそれは。」

「冗談ですよ。朝日奈さん。」

50日目 サクラス帝国・帝都サクラス中央教会

「聖女様、もう一度お考え直してもらえませんか？」

メイベルの部屋に押しかけてきた中央議会の議員が、メイベルに懇願している。そんな彼を、メイベルは覚めた目で見ながら返す。

「しつこいですね。もう決めまったことです。。誰が何と言おうと、私は訪問団の団長として日本を訪問します。これはクリプトン卿たちからも許可を採りました。それに、大司教も「見聞を広めることは良いことだ」と仰いました。」

メイベルの言葉に、議員はうな垂れながら、部屋から出て行った。

「全く、ちゃんと正式な許可を受けたのに、どうしてこつも皆反対するのかしら？」

「それはメイベルさん、あなたが聖女様だからですよ。今のサクラスの発展はあなたのお陰なんですから。」

と優雅にお茶を飲みながら言うのは、エミー・アサツシニオだ。が、元々幼児体型なので、どうしても滑稽な「そこ、突っ込み禁止！」

「エミーさん、誰に言ってるの？」

「あ、気にしないで下さい。」

メイベルの突込みを華麗にスルーするエミー。

「まあそれはともかくとして、エミーさんの言うことは正しいと思うぞメイベル。」

「そうです。メイベルは南アルテースの大統領で、西アルテースの女王様なんですから。」

「そんな重要人物が、長期不在になったら困るだろ。しかも、得体のわからない国に行くとなれば、誰だつて心配するだろうが。」

「でもでも、朝倉さんの話じゃ二ホンは平和でいい国らしいし、サクラスよりもすつごく技術も進んでいるみたいだし、食文化も独特みたいだし。」

つまりは、メイベルが興味あるものの宝庫と言うわけだ。

「それに、西アルテースの方は女王がいなくてもちゃんと機能しているし、南の方だつて信頼できる人を代理に立てればいいだけじゃない。そうだわ、市長さんあたりに頼めばバッチリよ！」

メイベルの言う市長さんとは、メイベルが連邦大統領を勤める南アルテースの都市、ラクスの市長のことだ。市長でありながら、メイベルと同じく発明家気質の男で、メイベルの多くの発明の手助けをしている、影に隠れた功労者であった。もちろん、メイベルとも知己である。

しかしながら、メイベルがその市長のことを評価しているにしても、ここまで簡単に自らの権力を委譲しようとするなど、普通だつたらあり得ない。そもそも、メイベルは西アルテースの女王を止め

たいと言って憚らないほどだ。

ここまで権力に無頓着な政治家、日本やロクシエどころから、サクラス帝国内の基準に照らし合わせても「有り得ん！」であった。そもそも、17歳の少女が大統領と女王を兼任していることこそ、そもそも破天荒なことである。

もつとも、だからこそ国民の人気も厚く、止めたいと言っても止められない状況に置かれていると言えるかもしれない。

「あのなあ、メイベル。もう無駄だとは思っけど、もう少し大統領と女王としての自覚を持ったらどうだ？」

と言うナバルの言葉に対して、メイベルは。

「やりたくてやっているわけじゃないのに、そんな物持てるわけないでしょ。むしろ持ちたくもないわ。」

と一刀両断した。

「こりやだめだ。」

「処置無しです。」

そんな遣り取りを見て、エミーがクスツと笑った。

「今更何を言っても無駄ですよ。メイベルさんは決めたらドンドン行っちゃうタイプですから。それに彼女の言っていることも一理あるじゃないですか。」

「そりゃあ、まあな。」

「でも……」

「いいじゃないですか。それに、あなたたちも日本に興味がお有りなんでしょう？」

エミーが意地悪な笑みを浮かべて問うと、2人とも答えに窮してしまっただ。

「ええと……」

「それを言われると……」

実際の所、2人は2人で日本へ行ってみたいとは思っていた。

「だったら良いじゃないですか。それに、南西アルテース間の戦争も終わって、ドラゴンとも和解した今、サクラス帝国内に懸念する材料はほとんどありませんよ。むしろ今までになかった、外の世界とどう付き合っていくか、難しい舵取りをする必要があるんです。だったら、むしろメイベルさんには外の世界に行つて、実際に見たほうが有益だと思いますよ。」

「そうよ！エミーさん、良いこと言っじゃないですか！とにかく、そう言うわけで私は誰が何と言おうと、日本へ行くから。」

笑顔一杯のメイベルを見て、ナバルとパセラは「ダメだこりゃ。」と心底思った。

そして、エミーはと言つた。

「まあ、私も日本へ行きたいし。」

と、呟いていた。

新たな世界へ 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たな世界へ 2

50日目 ロクシアーク連邦 連邦首都郊外 空軍基地

「やっぱり、この機も地球に昔あった戦闘機そのままだな。」

日本国大使館駐在防衛官である日高正道二等空佐は、この日ロクシエ空軍の招きで首都郊外の空軍基地に来ていた。

これまでに、日高はロクシエ空軍の機材を見せられる機会があったものの、全ての機体を調べている程の余裕は無かった。国交と通商条約が結ばれ、少しばかり落ち着いた今日になってようやく、念入りに調べられるようになった。

「これは我が軍の主力戦闘機なんだけど、やっぱりあなたのいた世界にもあったの？」

付き添っているのは、アリソン少佐だ。本来ならアリソンは敬語を使うべきだが、日高の方が年下（アリソンは35、対して日高は32）なので、日高のほうから気軽に話すようにした。アリソンも元々堅苦しいのは好きではないので、すぐに素のまままで話すようになった。

「うん。これは確か、イギリスの「ハリケーン」戦闘機だよ。ほら、この本と照らし合わせても、そっくりだ。」

日高がアリソンに、日本から持ってきた○栄社の航空機名鑑を見せる。実際その本に乗っている図と、目の前の機体は瓜二つだった。

「性能はどうかしら？外見だけ、似ているだけとか。」

「「ハリケーン」戦闘機は全長9.82m、全幅12.19m、自重3311kgで最高速度は550km。武装は7.7mm機関銃8基となっているが、幾つかバリエーションがあったようで、それぞれに細かい差異がかなりあるようだ。エンジンは液冷の1260馬力「マリーン」エンジン。」

「機体の寸法は、ほぼそのままね。最高速度もほとんど変わらないわ。エンジンも名前こそ違うけど、ほぼ同じ馬力の液冷エンジンだし。」

本来だったらこんなことはあり得ない。曲がりなりにとも自国の軍備の性能を、他国の軍人に教えるのならばもつと制限が付く物である。

ところが、ロクシエ側にとって予想外だったのは、日本側が自分たちの兵器についてほとんど「知っている」と言う事実であった。

もちろん、機体の外見や公表するレベルの情報が知られているなら構わない。ところが、大使館付き武官や日本へ派遣した武官からロクシエ軍上層部はそうした性能以上の細かい癖や、特性まで全てが知られていると知り、恐慌状態となった。それではお話にならないからだ。

そこで、それを直接確かめるため、日本からやって来ている駐在防衛官たちに、自分たちが持っている兵器をかなりオープンにして公開し、そこから情報を聞き出そうとした。

駐在防衛官の派遣については、陸自からの防衛官は陸軍、海自か

らの防衛官は海軍、そして空自からの防衛官である日高は空軍に、と言った具合にそれぞれ派遣されていた。

日高は空自の防衛駐在官なので、当然空軍へ派遣された。そして派遣先は、首都郊外のロクシエ空軍の首都防空戦闘機隊、ならびに新型機のテストをする試験飛行隊が駐屯する基地であった。

また日高にとってありがたかったのは、ロクシエ側の案内役がテストパイロットとして、機体の性能に精通しているアリソンであることだった。既に何度も顔を合わせ、互いに食事に誘い合う仲だけに、色々と話し易い。

「これじゃあ、こつちが言うことなんて何も無いわね。それ、日本じゃ普通に市販されている資料なんでしょ？」

「まあ、どの程度流通しているかは知らんが、普通に一般人が買えるレベルの物だよ。それどころか、インターネット・・・これは情報を検索するシステムなんだけど、それを使えば何時でも、どこでも、無料で情報を探し出すことができるよ。まあ、ガセが多いのが難点だけど、漁れば幾らでも探し出せる。何せ、我々から見ればこの戦闘機は80年前に設計された機体なんだから。」

「日本があらわれたせいで、軍の上層部はパニックになっているって噂よ。今まで整備してきた軍備が軒並み役立たずになったって。」

「そりゃあ、第二次大戦時の兵器と我が国の兵器じゃ70年近い差があるけど、日本だって最強無敵じゃないし、それに戦争する気はないんだから。」

「そう言えば、あなたの国は憲法で戦争を禁じているのよね？それ

なのに、あんなスゴイ兵器を持っているなんて、何時考えてもおかしな物ね。」

「その矛盾があつてこそその、自衛隊だから。一時期改憲の議論も起きたけど、結局世論の反応や諸外国からの反発で進まなかった。」

「あなた自身はどう思っているの?」

「ノーコメント。自衛官が政治にあまり口出しするもんじゃないだろ・・・ま、憲法なんか解釈次第でどうとでも出来るけどね。」

彼は小声で呟いた。

「何ですって?」

「何も。」

「そう。それにしても、日本で面白そうな所ね。一度行ってみたいわ。」

アリソンは、日高との会話を通じて、日本への興味を大きくしていた。

「国交も結ばれたし、直に両軍の人事交流も始まるだろうから、その内幾らでも行けるようになるって。」

「なるべく早く行きたいんだけどね。日本に行って、あのジェット戦闘機を操縦したいわ!!」

アリソンの蒼い瞳が輝く。

「・・・本当にあなた娘さんとそっくりだわ。」

同日 日本・東京 首相官邸 首相執務室

「ねー、国交も結ばれたんだし、行ってもイイでしょ？」

「ダメに決まっているでしょ。」

春川首相が、苦笑しながら受話器の先の人物、日高舞に対して言う。

「国交が結ばれたとは言え、民間人の行き来が自由化されたわけではないんですよ。旅券の制度とか、ビザの問題とか、色々とクリアしなければならぬ問題は多いんですよ。現在の所大使館関係者、一部報道関係者、そして貿易関係者以外に許可は出せません。」

「もう、ケチケチ言わないで、私一人位ならなんとかなるでしょ！？」

「ダメです。規則は規則です。」

「ほー。この日高舞に本気で喧嘩を売るつもりかしら？首相と言えども、容赦しないわよ。私が本気を出せば、首相の首を挿げ替えることくらい、造作ないわよ。」

「それだけは勘弁して下さい。あなたの場合、否定できませんから。それに、別に喧嘩を売るつもりなんかありませんよ。と言うか、1

人で行く気なんですか？」

「正確には、1人でも行くつもりよ。愛ならもう13歳だから心配しなくてもいいでしょ。それに、1人で1ヶ月くらい留守番できるわよ。」

「それは親として養育する義務を放棄すると受け取ってよろしいんですか？」

「別にそんなつもりじゃないわよ。けど、冗談でも私にそうさせたくないなら、何とかロクシエへ行かせなさい。正道さんもいることだし。」

「そう言えば、日高さんはロクシエ大使館付き防衛官でしたね。」

「そうよ。せっかく家に帰ってきたと思ったら、すぐに行っちゃうんだもん。・・・子作りしている暇もないわ。」

「今何か後半、変なこと言いませんでした？」

「別にー。」

（本当にフリーダムな人だな。）

苦笑しながら、春川はそんなことを考えていた。

「そんなにロクシエへ行きたいんですか？」

「行きたい。」

舞は即答した。

「・・・だったら、駐在防衛官の家族と言うことで、ロクシエ側に問い合わせてみましょうか？」

「え！？いいの？」

「まずは問い合わせるだけですよ。本来なら大使館の職員の家族も現地へ行くのが普通です。しかしながら、今回は互いに特殊すぎる事態です。国交締結を最優先にしたため、今のところ日本もロクシエも大使館職員しか派遣していません。ですが、今後もそのままと言うわけにも行かんでしょう。外務省でも既に進めているようですし、とにかく聞くだけ聞いてみましょう。」

「わーい！さすが首相、頼りになるわね。」

「ただし、絶対に行けるといふ約束は出来ませんからね。」

「ふーん・・・まあいいわ。今回はこれ位で見逃してあげる。じゃあ良い返事を待っているわ。」

ブチ！

電話は一方的に切られた。

「全く、あの人は本当にやりたい放題だな。」

「まあ、謙虚な舞さんなんて気持ち悪いだけですけど。」

相棒の古泉副首相が言う。

「で、外務省には。」

「首相が電話中に問い合わせました。調整中だそうです。」

「だわな。これまでとにかく国交の締結と通商条約の締結だけに集中してきたし、今もアンリエッタ女王とメイベル女王の受け入れ準備で大童だもんな。」

転移直後から、外務省は外交ならびに在日外国人問題で忙しかった。もつとも、実際の所各省ともに転移後の大混乱から今に至るまで、大忙しであるから、どこの省が特に忙しいと言うわけではない。

「ですが、大使館職員の家族については、我が国でもいずれ受け入れなどを考えるべき事象ですよ。」

「うーん。そうだよな・・・木戸外務大臣や外務省には悪いけど、もつとがんばってもらう必要があると思うな。」

「その通りです。」

「早速木戸大臣に来てもらおう。」

春川は卓上の電話機の受話器を取ると、外務省の番号をプッシュした。この電話で、春川は木戸から予想外の話を聞かされることになる。

ロクシアーク連邦 連邦首都郊外 空軍基地

「む!？」

「どうかしたの？」

突然難しい顔つきをした日高を見て、アリソンが首を傾げる。

「ちょっと不穏な空気を感じたもので……これは恐らく、舞の奴が何かをやらかしたんだと思う。」

「奥さんが？」

「ええ。舞の奴と来たら、一度決めたことはとことん突っ走るタイプだからなあ。」

「ふーん。今までも何度か話を聞いたけど……」

「アリソンは、もしかして冗談だと思っていた？」

「ええ。そりゃあ、民間人が戦車を持ち出すとか、首相を脅すとか、あり得ない話だから。」

そのセリフに、日高がイジワルな笑みを浮かべる。

「ふーん……勝手に飛行機を持ち出して、敵国に密入国して、さらに歴史を変える大発見をした人が、どの口でそんなこと言えるんですか？」

日高が、ワザとらしく言う。明らかにおちよくっている。

「ちよ、ちよつと止めてよ！誰かに聞かれたらどうするのよ！？」

アリソンと夫のヴィル、そして彼らの親友であるベネディクトが、かつて歴史を変えた壁画を発見したことは、3人とベネディクトの夫であるイクストーヴァ女王のフィオナ、そして彼らに親しい数人だけが知る話であった。

「はいはい。まあ、つまりはこれまで話した妻に関する話は、皆事実だと言っことだよ。」

「たく。けど、一体どんな人なのかしら？興味湧くわ。」

「多分、近々会えると思うよ。」

「何でそんな事言えるの？」

「勘かな。」

日高はただ一言、それだけ言った。

新たな世界へ 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たな世界へ 3

52日目 サクラス帝国 帝都サクラス中央教会

「いやあ、疲れましたね。」

「こんなに疲れたの、何時振りだろう？」

「そうね。まあ、この広い大陸をたったの2週間で見る弾丸視察だったから、仕方が無いわよね。」

口々に疲れた疲れたと言う使節団団員に対して、団長の朝倉亮子はケロッツとしていた。

(ば、化け物だ)

それが他の団員達の偽らざる感想であった。

彼らは、今日に至るまで2週間に渡るフォルティアース大陸の旅をしていたのである。もちろん、単なる観光旅行ではなく、日本国使節としての視察である。

しかしながら、その視察は過酷なものとなった。何せ巨大な大陸国家をたったの2週間で回るのである。1箇所にとまわっていられる時間は長くても1日。場合によっては半日にも満たなかった。

これまで日本が接触してきた国の内、トリスティンは小さな島国(元は大陸の国だったが)、ロクシエはサクラスと同じく大陸国家だったが、鉄道、^{アウトバーン}高速道路、空路などが比較的整備されており、そ

れらを組み合わせせての移動が出来た。

ところが、サクラス帝国の場合は確かに鉄路と水路があるもの、いずれもロクシエや日本のそれに比べて大きく劣る水準のレベルであった。そのため、必然的にロクシエに比べて移動速度や移動効率が落ちる。

つまるところ、朝倉率いる日本使節団一行は、弾丸視察をやってきたのであった。クタクタにならない方がおかし。

それでも、それに見合うだけの成果を彼女らは得てきたと言つてよい。サクラス帝国の工業力や文化について学ぶことが出来たし、映像に収めることも出来た。

特にサクラス訪問前から噂程度に聞いていた南アルテースで造られる珪油（軽油ではない）や、クモの糸から造られた布等の実物は、日本使節団を驚かせるに充分な産品だった。

日本でも植物を原料とする油の精製は数年前から本格化した、アルテースでは既に確立した技術で、国内の需要をはるかに上回る量を生産しており、むしろ持て余し気味であった。

無論、国民一人当たりの需要量を比較すると言つ点を勘案していないし、近年急速に技術の進歩を見たと言つ点などもあるにはある。それでも、科学力では日本どころかロクシエにさえ劣っている（日本の推測では地球の第一次大戦以前のレベル）と見積もっていた日本としては驚異であったと言わざるを得ない。

特に、クモの糸から布を作り出す技術は今の日本にさえない、夢の技術と言つてよかつた。

また、竜の山脈近郊の街をはじめとして、ドラゴンと接触したのも大きな収穫であった。ちなみにこのドラゴンとの接触も、日本側には少しばかり予期せぬ物となった。

当たり前のことだが、日本にはドラゴンはいない。そしてロクシエにもいない。そしてこれまで日本が遭遇したドラゴンは、トリステイン王国の火竜だけだが、それは特に高い知能を有しているわけでもなく、それどころか火を吐いて人を襲う危ない動物であった。

だから、日本側としてはサクラス帝国側からいくら「安全ですよ」と言われても、最後まで不安要素を払拭できなかった。

しかしながら、現実には日本使節団の斜め上を行っていた。

数日前　グレイシー地方ヴァーレ

竜の山脈に程近いヴァーレの街で、日本使節団はドラゴンと会談する機会を持った。

「お初にお目にかかる、異邦人の使者よ。わらわは、マウンテン・ドラゴンのフェレラ・コップじゃ。今日は何分急なことゆえ、お爺上が出られずわらわが代理として参った次第だ。」

「「本当に喋った！！」」

身長8m近いドラゴンが丁寧な挨拶をしてきたことに、日本使節団の面々は、文字通り面喰い、声を上げてしまった。

「何じゃ？ドラゴンが喋るのがそんなに珍しいのう？」

「部下が失礼いたしました。何分我が国にはドラゴンもおりませんでしたし、喋る動物もいませんでしたので。使節団団長の朝倉亮子です。お会い出来光栄です。」

挨拶した朝倉を、フェレラがジッと見る。

「ふむ・・・お主からは何かしら不思議な力を感じるのう。」

ドラゴンの場合、外見から人間の判別（例えば顔などから）が出来ない。そのため、人間が出す雰囲気などから識別する。フェレラは朝倉に対して、何かしら不思議な雰囲気を感じ取った。

しかし、本人はそんな指摘を笑い飛ばした。

「御冗談を。私はただの外交官に過ぎませんわ。」

（（ウソこけ！！））

後に立つ使節団団員は、内心そう突っ込まずにはいらなかった。

余談だが、もしここにトリステイン大使となった本多聡子がいたら、もっと面白いことを言われたかもしれない。逆に春川首相だったら、目立たな過ぎて困ったかもしれない。

それはともかくとして、その後は世間話のような感じで、互いの部族や国についての話に終始した。もっとも、世間話のようであった、その実日本にとってはドラゴンと言う人間外の知的生命体との

ファースト・コンタクトであったということ、その生態に触れられたと言うことで、真にもって意義深い話し合いであった。

この時の話し合いの様子は、しばらく後に録画された映像が日本でも放送されたが、多くの人間の興味を引いたのは言うまでもないことだ。

もっとも、それ以上に日本人を驚かせたのは、その後の夕食でのこと。

「「本当にお箸を使ってる・・・」」

8 m近いドラゴンが、その体格に見合ったお箸を片手に、もう一方の手に御椀を持っている滑稽以外の何物でもない光景に、日本使節団の一行はまたも目を点にしてしまっていた。

「何じゃ？最初にメイベルに会った時もそうであったが、そんなにお箸を使うのが珍しいか？」

「まあ、ドラゴンが食器を使うと言うのも珍しいけど、私達と同じお箸を使うと言うのがもっと驚きです。」

1人の使節団団員の言葉に、フェレラは首を傾げる。

「しかし、そなたらはナイフとフォークを普通に使っているではないか？」

「それは、この国にはお箸がありませんから。ある物を使わないと。ただ、日本の一般的な食器は御箸です。」

「ほう、それは面白いの、異邦人がわらわたちと同じ、お箸を使っているとは。」

「でしたら、今度一緒にどちらがお箸の使い方が上手いか、勝負でもしてみます？」

朝倉の提案に、フェレラは笑った。

「それは面白そうなの。」

そう言うと、2人は再び笑った。これをきっかけに、場はさらに和んだ物となった。

最終的に、ドラゴンとの話し合いで得られた物質的な成果はほとんどなかった。しかしながら、友好を育んだと言う点では、予想以上の成果であった。

余談ではあるが日本とサクラスの国交が正常化し、交流が活発化した後、朝倉が提案した日本人とドラゴンのお箸対決は、双方の友好関係強化のために本当に行われることとなる。そして長く続く伝統行事となる。また日本の鉄ODOSHとと言う番組では、竜の大きさの漆塗りの箸を作ると言う企画を行い、その友好関係に華を添えると言うエピソードまで生まれることとなる。

朝倉がそんなことを回想していると、扉がノックされた。

「エピソード。」

「失礼します。」

入ってきたのはメイベルとナバルの2人であった。

「これはこれは聖女様。」

「もう、止めてくださいよ。メイベルでいいです。」

「ウフフ、ごめんなさい。それでメイベルさん、何の御用。と言いたい所ですが、あなたが来る理由なんて分かっています。日本への視察についてですね。」

「はい。いよいよ明日出発でしょ？だから楽しみで楽しみです。」

そんなメイベルを、ナバルは呆れながら見ている。

「ずっとこの調子なんだよな。」

「そんなこと言う物じゃないわよナバルさん。人生死ぬまで勉強よ。探究心を持つのは良いことよ。」

「そうよナバル。ナバルも少しくらい、前もって勉強しようとか、考えなさいよ。」

「うーん、俺そう言うの苦手だし。」

「日本じゃあなた見たいたいな人のことを、脳筋と言うのよ。」

「どう言う意味だ？」

「脳まで筋肉で出来ているということよ。」

「脳まで筋肉？・・・プ、ククク・・・」

突然メイベルがお腹を押さえて笑い始めた。

「「え!?!」」

朝倉を除く使節団の団員が、目を丸くする。

「ククク・・・ハハハ・・・脳まで筋肉!ああ、ダメ!可笑しい!笑いが止まらない。ハハハ・・・」

「あらあら、壺に嵌ったようね。」

「あ、前にもあったな。こんなこと。ありや確か救世の旅の時だったよな。まさか、今更こんなことで笑うなんて。」

朝倉は微笑みながら、ナバルは呆れながら、他の人間は啞然としながら見ている前で、メイベルはついに膝を付いて、床をドンドンと叩きながら笑っていた。

10分後

「はー、やっと収まった。お見苦しい所をお見せしました。」

「いいのよ別に。中々面白い物を見せてもらったわ。」

「メイベル、バカにされているぞ。」

「あつあつ。」

メイベルが顔を真っ赤にして俯く。それを、使節団の男達はニヤニヤと見ていた。

「何だかんだ言っつて、まだまだ子供ですね。」

「本当だよ。いやあ、しかし聖女様のあの姿。中々見てて楽しかったね。」

「ですね。あれが萌えてやつでしょうか？」

ストツ！！

小声で話していた団員の側の床に、ボールペンが突き刺さっている。

「はいそこ、私語は慎みなさい。」

朝倉が恐怖の笑みを浮かべながら言い、団員達は顔を蒼くした。もちろん、メイベルたちも若干引き気味である。

「「「「「はい。」」」」」

「失礼したわね。あら？別にあなたたちまで顔を蒼くしなくてもいいのに。」

「いや、そりゃ無理だろ。」

ナバルが冷静に突っ込む。

「フフフ。安心して、別に私はあなたたちに何かしようとか、そう言うつもりはないから。」

「はあ。」

「じゃ、気を取り直して。話の続きと行きましょうか。」

「そ、そうね。ええと、それじゃあ日本の文化について、もっとお聞きしたいんですが。」

メイベルは先ほどまでのことを忘れるかのように、話を変えた。その後饒舌になったメイベルが、いつものごとくのめり込み、その後の予定を危うくすっぱかしそうになるのだが、それは別の話である。

新たな世界へ 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たな世界へ 4 (前書き)

「輸送艦をネタのために、「くにさき」から「おおすみ」に変更しました。

新たな世界へ 4

56日目 諸島近海 海上自衛隊輸送艦「おおすみ」

「上陸部隊、発進！！」

海上自衛隊の誇る大型輸送艦「おおすみ」の艦尾にある大型ハッチが開き、そこから車両と自衛隊員を載せたLCC（ホバークラフト型輸送艇）が陸地目指して、出撃して行った。

「おおすみ」だけではない。その同型艦である「くにさき」に加えて、米軍の輸送艦からも搭載輸送艇や水陸両用車両が発進する。

これらの部隊は、艦隊の目の前に広がる 諸島に上陸し、同島を徹底搜索するのである。

ただし、既にこの世界において未知の巨大生物の存在が確認されているだけに、ここまで来るまでの間、護衛艦と米軍の駆逐艦は常にソナーや対潜ヘリを使って海中に目を光らせていた。加えて到着後は、上陸部隊を支援するため、76mmや127mmの艦砲、一部のミサイルの照準を陸地へと指向させていた。

この 諸島には、既に巨大な人食いトカゲらしき生物の存在も確認されていた。そのため、上陸する第一陣は調査チームも含んでいるが、実質的に戦車やミサイル搭載の装甲車を含む陸自と海兵隊の有力な戦闘部隊となっている。

この第一陣と、艦隊より発進した偵察ヘリや無人偵察機によって、上陸地点の安全が確認出来次第、続いて施設科部隊と海兵隊の工兵

部隊が上陸する予定であった。

そのため、「おおすみ」の艦内と甲板には、まだ多数の施設科用の車両と隊員が待機状態で待っていた。

「何事も起きなければ良いのですがねえ。」

「おおすみ」艦橋から、第一陣を心配そうに見つめるのは、今回自衛隊の施設科部隊を率いる陸自の神谷望一佐である。

「神谷一佐、皆もそう思っていますよ。しかしながら、もはや何が起きてもおかしくないのがこの世界なんですよ。」

と神谷に語りかけるのは、「おおすみ」艦長の水島准一佐だ。

「水島一佐、それはわかっているんですがね。その何と言いますか、やはりこの様な状況となると、色々と心配になってしまいましたね。」

「部下の前ではそんな態度とってませんよね？士気に関わりますよ。」

水島の言葉に、神谷は苦笑いした。

「部下の前ではとりたくてもとれませんよ。うちの隊には、濃い面子が揃っていますからね。」

そんな感じで2人が話していると、神谷のもとに陸自の二尉の階級を付けた男がやってきた。

「失礼します。司令、装備の点検完了しました。」

「ああ、御苦勞様松来二尉。相変わらず、君は御機嫌ですね。」

「そりゃそうですよ。怪獣ですよ怪獣！映画やアニメの中にしかいなかった生き物が、あの島にはいるかもしれないんですよ。期待して当然じゃないですか!？」

その言葉に、神谷は今度は呆れた表情となる。

「松来二尉。君がアニメや特撮大好きなのはわかっていますが、お願いですから、もう少しテンションを下げてもらえませんか？」

「どうして？一佐こそ、もう少しテンションを上げてはいかがです？我々は今、かの水木しげるや宮崎駿でさえ成し遂げられなかった、未確認生物との接触を行えるかもしれないですよ!!！」

「そんなこと行いたくもありませんよ。その未確認生物のおかげで、海保の巡視船が沈んで多くの犠牲者が出たことを、忘れてはいけませんよ。」

「そりゃ、忘れてはいませんがね。神谷一佐はもう少しロマンを持つべきです。」

「ロマンのために、命を掛けてどうするんですか？」

自衛官にしては、何とも低レベルな言い争いを始めた2人を見て、水島は呆れると共に、仲裁に入った。

「はいはい2人とも、喧嘩なら艦橋の外でお願いします。そんなこ

としている間に、万が一があつたらどうするんですか？」

その言葉に、2人は言い争いを止める。そしてそのまま「失礼します」と言つと、艦橋から出て行つた。

「やれやれ。」

水島は溜息を吐くと、双眼鏡で陸地の方を眺めた。既に舟艇の中には海岸に上陸しているものも確認できる。今のところ、異常なさそうであつた。

しかしながら、彼自身が言つたように、いつ何時不測の事態が起これないとも限らなかつた。

同日 お昼前 ロクシアーヌク連邦 連邦首都 日本大使館

「たく、片付けても片付けても、次から次に。」

自分の執務室で悪態を吐きながら、駐ロクシエ大使の荒木仁は仕事をテキパキと片付けていた。

日本とロクシエが国交を樹立して以後も、彼らの仕事は終わらない。むしろ増えていた。国交が結ばれたとは言え、刷り合わせなければならぬ法などはごまんとあるし、日本とロクシエ間での貿易が始まつたことで、両国の貿易会社による貿易許可の申請や、仲介申請が増えたためだ。

もちろんそれ以外にも、両国間で渡航を申し出た人間も多数おり、これも両国の大使館を悩ませていた。

何せ、まだ互いに文字が完全に通じていない状況のために、パスポートをはじめとする書類が通用しないのだ。そのため、個人単位での渡航は未だに見合わせていた。

荒木をはじめとする大使館員も、ひたすらロクシエ語の猛勉強の最中であつた。ただし、彼らにとって幸運だったのは、ロクシエ語は確かに未知の言語であつたが、言語学者らによる必死の調査研究の結果、ロクシエ語は文法などでの面では、地球の英語に近いことが判明したのだ。

そのため、独特の文字さえ覚えてしまえば、後は比較的楽であつた。これはサクララス語が同じく英語の派生型に近い言語、トリスティン語がオランダ語に近い言語であつたことなどと、共通する点とであつた、

逆に、日本語を覚えることとなつた各国の人間は相当な苦勞を強いられることとなつた。文法だけでなく、文字の種類が3種類もある日本語は、悪夢そのものであつた。

それはともかく、ようやく少しずつロクシエ語を理解してきた荒木たち大使は、オリジナルで日ロ（ロクシエ）辞典を造るなどして、書類の作成にも入っていた。

ただし、実際の所交渉などで使う記録媒体の主力は、相変わらずレコーダーやカメラとなつている。

忙しなく働く荒木であつたが、楽しみなこともないわけではなか

った。

トントン！

「どうぞ。」

「失礼します。荒木大使、シュトラスキー氏がまた来ていますよ。入り口で待ってもらっています。」

大使館員が来客を告げる。

「ああ。わかった。」

荒木は手を止めペンを置くと、部屋から出て来客が待つ場所へと向かった。

荒木が大使館の入り口まで行くと、目的の男はもう一人の男と談笑していた。

「これはこれは、日高さんも一緒でしたか。」

「ええ。ちょうど昼休みに入るので、どこかへ食べに行こうと思っ
て出てきました。そしたらちょうど、彼がいましたね。」

「荒木大使、お呼びだてして申し訳ない。」

「いいえ、ちょうど良い時間でした。どうです、一緒に昼食でも？」

「私もそのために来ました。お昼を取りながら、お話をしたいと思
いまして。」

「いいでしょう。では、どこか近くのレストランへでも行きましようか。日高さんもいいですよね？」

「もちろん。」

「お子さん達はお元気ですか？」

大使館の近くのレストランに入った3人は、奥まった席に座って料理の注文をすると、すぐに会話を始めた。

「ええ。最初は皆混乱していましたが、今は3人も元気にやっています。ロクシエの国籍も取得出来ましたし、今後は新しい祖国で家族全員がんばりますよ。」

シュトラスキーはスー・ベール・イル人であったが、祖国が消失してしまったため、早い段階で家族全員ロクシエ国籍の申請を行った。これは、ロクシエの場合日本と違って二重国籍が認められているゆえに、決断出来たそうだ。

そして彼の本業は、貿易商。以前はロクシエで買い付けた品物をスー・ベール・イルに輸出し、その逆の商売もしていたが、スー・ベール・イル消失に伴い、素早く新たな取引先として日本との接触を図っていた。

ちなみに、ロクシエとサクラス間には未だに国交が樹立されていない。これはサクラスに無電技術がなく、ロクシエ本国と同国との連絡が不自由していたからだ。

そのため、サクラス帝国の港に電信装置を積んだ軍艦もしくは商船を派遣し、そこからは有線や飛行機による手紙での連絡を行うよう、ロクシエ政府は取り計らっていたが、それでも連絡が面倒なことに変わりなかった。

現在駐サクラスの暫定大使館に電信機や発電機の設置を行い、ようやく本国との素早いやり取りが可能となったが、それまでのブランクは大きく、国交締結はもうしばらく待つことになりそうだった。

もつとも、ロクシエ側にしてみれば、日本と違って直ちに外国と交易を行う必要は特にないので、サクラスとの条約締結が遅れていることは、さほど問題とはなっていないかった。

やはり同国と、その国民の関心は日本に大きく傾いており、シュトラスキーが日本大使館に通っていることから、頷ける。

そして忙しい荒木が、スー・ベール・イル人とは言え、一介の貿易商であるシュトラスキーと一緒に食事をするのかと言えば、実はこれは人の縁と言う奴だ。

最初に彼が日本大使館を訪ねた時、本来だったら他の貿易会社の人間と同じく、短時間で追い返される筈であった。

ところが、その時荒木は彼の名字が頭の中で引っかかった。

「シュトラスキー……どこかで聞いたような名前だけど……あ！？思い出した！！確か、上級学校で会った。」

以前彼が上級学校に行った際出合ったメグミカと言う少女と、彼

は苗字が一緒であった。そこで、半ば冗談でその事について尋ねると、彼女の父親であった。

お互いに繋がりがあるとわかると、話が弾んだ。その時は、商売関係の話に関して言えば、実のある内容ではなかったが、互いに相手の人となりについて知ることができた。

その後ロクシエと日本間に正式に国交が結ばれ、暫定通商条約も締結されたことで、貿易もスタートした。その規模は微々たるものであったが、シユトラスキーは日本大使館とのコネを作ることで、民間人としては早い段階で貿易事業を行える目処を付けていた。

また、彼の娘のメグは日高が良く会うリリアの親友であったので、最近では日高までもが一緒に食事をしていた。

もちろん、食事をするだけだから、仕事の話はあまりしない。しかしながら、3人もそれぞれに家庭があり、ロクシエとは違う国の出自であるだけに、気が合う仲間となっていた。

この日の会話も、それぞれ自慢の家族の話となっていた。

「そうそう。実は今度家族をこちらに呼び寄せようかと思ひましてね。」

日高が嬉しそうに言う。

「ほう、ロクシエ政府の許可が出たのですか？」

「はい、昨日。ロクシエ側から大使館職員の家族に限ってですが、民間人の受け入れが可能と打診を受けましてね。」

シュトラスキーの間に、荒木が答える。

「そうですね。来たら是非、家族ぐるみの付き合いをさせて欲しい物です。」

「ええ。」

「荒木さんは、呼ばないのですか？」

「正直迷ってます。娘がまだ小さいので。一応、日本から教師を何人か呼んで、大使館内に日本人学校を設けると言う連絡を外務省から受け取りましたが、娘はようやく幼稚園に入ったばかりなので。とにかく、一度妻に連絡して、それから決めようかと。」

「それが良いですね。私も家族でこちらに来ようか、大分迷いましたから、じっくり奥さんと話合っのがよろしいでしょう。」

「そうさせていただきます。」

荒木は少しばかり、寂しさを帯びた顔で答えた。

その後、短い時間だが3人は楽しくランチの時間を過ごした。

こうした本当に小さな交流が、その後どんな芽を出し、花を咲かせるのか、知る者はいない。

新たな世界へ 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

新たに「超空自衛隊」を元ネタにくわえました。

また原作ではセリフさえない、メグの父親に登場していただきま
した。

新たな世界へ 5

57日目 正午過ぎ トリステイン王国 ラ・ロシエール郊外

「それではマザリーニ、行って参ります」

「陛下、行ってらっしゃいませ。くれぐれもお気をつけて」

ラ・ロシエールから少し離れた小さな港町で、ランチに乗り込んだアンリエッタ女王を見送るマザリーニ以下、トリステイン政府の重臣達は不安そうな表情を隠せない。

この日、トリステイン王国女王であるアンリエッタは日本への表敬訪問へと出発する。しかしながら、トリステインには彼女を日本まで送ることの出来る船も飛行機もない。

船はないことはない。しかしながら、トリステインの場合遠距離航行に使える船は『風石』を使った飛行艦船である。しかしそれは現在、『風石』の採掘が停止したのに加えて、トリステインから離れた所では作用しなくなると言うことで、在庫分も使えない。

水上を走れる船もないことはないが、これまでトリステインを含むハルケギニアは遠洋航路開拓をしてこなかったため、当然ながら遠くまで走れる船も技術もなかった。

そのため、今回アンリエッタは日本政府が差し回した護衛艦に乗り込んで硫黄島へと向かい、そこから飛行機に乗り換えて、日本へ行く事になった。

つまり、日本政府に移動手段の全てを丸投げするわけで、穿った味方をすれば日本政府に貸しを作りつ放しとなる。

それでも、アンリエッタは早期の日本への訪問を希望した。日本との国交は締結し、本格的に通商条約と安全保障条約の締結へ向けての交渉も進みつつあるが、彼女自身は自分の目で日本を見たこともなければ、そのリーダーである春川首相に会ったこともなかった。だからこそ、早く日本へ行って、日本と言う国を出来るだけ知っておきたかった。

そんな彼女の強い願いに押されて、マザリーニら政府重臣も彼女の日本訪問を渋々認めた。

今回彼女の日本への訪問は、公式なものではあった。しかし様々な事情から、随員は最小限に抑えられて、たったの3人である。護衛役の銃士隊長のアニエス、書記官のルイズ・フランソワーズ、そして日本における案内役と調整役を兼ねた平賀才人であった。

この人選は、最後の最後まで揉めに揉めた。まず護衛役のアニエスは、平民出身の女性、しかも1人だけであること。せめて魔法衛士隊の隊長クラス（つまりは『メイジ』）の派遣と、後2〜3人の護衛の追加をトリステイン政府は望んだ。

しかしながら、そもそも日本では魔法が使えないので、『メイジ』云々は無意味と言われた。加えて貴族と平民と言う区別もない。そのため、身分の面での問題は問題とならない。

また人数の方は、今回彼女達を運ぶ手段と準備期間の観点からこれ以上増やせないと、断られた。足りない分は、既に派遣されている大使館員で補うこととなった。

ルイズに関しても、いざと言う時王位継承第二位の人間が国内にいないと言うのはマズイと言うことで止められたが、彼女も頑として日本に行くと言って聞かなかった。

これはアンリエッタが彼を随行者として指名したことで、ルイズが危機感を抱いたからだ。

「才人だけ行くなんで、絶対に認めないんだから!!」

ルイズはこう言って一步も譲らなかった。と言うわけで、彼女も付いて行くこととなった。

なお、日本大使であった本多聡子はこの騒動を巡ってこんな発言をしている。

「常識的に言えば、見栄えもよくて聡明な高風嬢を薦めるべきなんでしょうが、平賀少年の方が何かと面白いことを起こしてくれそうですからね。ククク・・・」

その発言はともかくとして、実際には春名やタバサ、さらにはシエスタも色々と理由をつけて日本へ行きたがったが、最終的に随員3名の枠とトリステインの女王、公爵の娘と言う強敵の前に、諦めざるを得なかった。

「悪いな春名。俺だけ先に日本へ帰って」

見送りに来た春名に、才人は申し訳なさそうに言う。

「うんうん。気にしないで。それよりも、気をつけてね。・・・特

に姫様とルイズさんの誘惑に（ボソ）

「何か言った？」

「うんうん、何にも」

春名は笑顔で答える。

「あらあら、面白い光景ですね。ククク・・・」

そんな2人を見ながら、本多はいつも通りの無気味な笑い声を出していた。

ところで、何で随員含めて4名とやたら少ないかと言えば、これは準備期間に時間が避けなかったこともあるが、移動手段にも問題があったからだ。

現在トリステインと日本を結ぶ定期航空路はまだない。日本政府はトリステイン政府の許可を得て、飛行場の建設を目指しているのだが、土地の問題（トリステインはまだ領邦制。貴族との調整が必要となる。改革が進むのはこの後のこと。）もあって一向に進展していなかった。

そのため、日本へ向かうには船舶を使うしかない。しかし、客船を横付け出来る設備はトリステインにはない。先日の暫定通商条約の締結で、ようやく建設が始まったばかりだ。加えて客船では足が遅いし、万が一の安全を保障できない。

だから使用されるのは海上自衛隊の護衛艦「さざなみ」となった。以前訪問した大型護衛艦の「ひゅうが」は、現在横須賀で整備中で

あつた。

アンリエッタや才人らは、陸地からランチで沖合いに停泊する「さざなみ」へと乗り込む。そして硫黄島までは同艦で行き、そこからは飛行機に乗り換える予定であつた。

「それでは、艇を出しますので。お座り下さい」

ランチを指揮する海上自衛隊の尉官がアンリエッタに告げる。

「わかりました。よろしくお願い致します」

アンリエッタをはじめとして、乗り込んだ全員が着席し、安全が確認されると、ランチはエンジン音を奏でて、動き始めた。

「陛下……どうかご無事で」

沖に向かうランチを見ながら、マザリーニ枢機卿はアンリエッタの無事な帰還と、その間のトリスティンの平穏を願わずにはいられなかつた。

しかし、その願いを神は聞いてはくれなかつた。

同日午後　ロクシエ連邦　ラプトア共和国

ロクシエ連邦の西端を流れるルト二河。かつては大陸を東西に分割する大河であつたが、転移によって対岸のスー・ベー・イルが消失したため、ルト二河は海に飲み込まれてしまい、河原だつた場所

は完全に海岸線になっている。

その旧ルト二河沿いには幾つかの国があり、転移前まではスー・ベール・イルとの鉄道連絡橋が架かって国際連絡列車が行きかい、あるいはスー・ベール・イルとの間を繋ぐ航路のための港があり、多くの乗客や貨物で賑わっていた。

その港の一つに、この日一隻の客船が入港した。遠洋航路用の大型船である。

客船が棧橋に付き、タラップが降ろされると、一人の少女が勢いよく降り立った。

「やっと着いたわね！ここがロクシエか」

船から降り立った外国人の少女、メイベルは初めて踏みしめるロクシエの地に興味津々であった。

「メイベルは本当に元気ですよね」

目をキラキラ輝かせているメイベルをみながら、親友のパセラが呆れ顔で見る。

「本当。3日間船の中でも騒ぎつ放しだったって言うのに、よくあそこまで元気が有り余っているもんだぜ」

続いて降りてきたナバルも、やはり呆れ顔だ。既に見慣れている光景のはずだが、メイベルの度を過ぎた興奮ぶりに、彼も辟易していたのだ。

サクラス帝国西にあるサンウーヌスの港を出港して以来、メイベルはずっと騒ぎっ放しであった。船の航海用機器、通信機器、機関エンジンなど全てに興味を持ち、ロクシエ側の随行員や船の乗員に質問を浴びせまくっていたのだ。

「まあまあ、ナバル君もパセラも大目に見たらどうだ？彼女はそうやってこれまで多くのことを学んできたのだ。彼女にとっては、あわせておくのが一番いいんだよ」

と愚痴を言う若い2人を諷めるのは、今回の使節団の本来なら团长であったクリプトン卿であった。卵のように肥満した体を揺らしながらも、メイベルにとって何が一番いいかということをしつかりと見抜いていた。

そしてもう1人、蒼みがかった長髪の女性が口を開く。

「本当に面白い人ね。メイベルさんは。ああ言う性格だからこそ、サクラスで聖女と呼ばれるだけのことが出来たのね」

日本国サクラス使節団团长を勤めていた朝倉だ。彼女は暫定大使館任務を部下に任せて、わずかな随員と共に、メイベルたちに付いてきていた。道中で出来るだけ、日本の文化や習慣についてレクチャーするためだ。

連邦首都までは彼女が随行し、そこからはロクシエ大使館の人間に引き継ぐ予定であった。

「けど、野放しにするのも考え物だぞ。」

ナバルの言葉に、クリプトン卿が笑う。

「ハハハ。ま、行き過ぎそうになったら止めればいい。」

その後サクララスからの一行は、簡単な検疫を受けた。その後、あの人物と対面した。

「メイベル、長旅お疲れ様！そしてようこそ、ロクシエへ。」

「アステル先輩！？」

メイベルを出迎えたのは、駐ロクシエ、サクラス暫定大使のアステルであった。

「久しぶり！」

「お久しぶりです！お元気そうですね。」

「まあね。色々大変だけど、この国は全く暇しないから。」

「アステル先輩が暇しないか・・・これは期待できそうですね！」

メイベルの目が先ほど以上に輝く。何かのスイッチが入ってしまったようだ。

「興奮するのはいいけど、とにかく行くわよ。早くしないと、列車の時間に間に合わないからね。乗り遅れたら、日本へ行けなくなっちゃうわよ。」

使節団はここから首都まで鉄道で移動して、大統領以下のロクシエ重臣に挨拶した後、そこからは日本まで、飛行機で移動する予定

であった。

「あ、そうでした。」

「やれやれ、あなたは本当に変わらないわね。まさか使節団に加わるとは思わなかったわ。まともにお祈りもしない癖に、本当に好きなことにはだけは、突っ走るわね。」

アステルが、自分のことを棚に上げて言う。もちろん、メイベルにとっては面白くない。そこで、彼女は反撃に出た。

「アステル先輩だって、どうなんですか？」

すると、アステルは視線を逸らして、質問などなかったかのように大きな声で言った。

「……さあ、行くわよ。」

（誤魔化したな）

（誤魔化しましたね）

（誤魔化したわねえ）

（誤魔化したのう）

アステルが自分の行ったことを棚上げしたのを見て、ナバルたちはそう思わずにはいられなかった。

一方メイベルは、アステルに呆れながらも、ロクシェと日本と言

う、先日まで存在さえしなかった国への期待を、さらに膨らませていた。

ちなみに、彼女がその後駅までの送迎用の車に乗り、さらに列車に乗り換えて首都に着くまでの間、ずっと質問しっ放しであったことは、言うまでもない。

新たな世界へ 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

明日よりアルバイトを始めることとなりました。実際にどう働くかはシフト如何なのですが、多分フルタイムなので、今後小説の更新間隔が大きく延びる可能性があります。悪しからず。

さて、御意見の中に新たに登場させて欲しい国家を書き込んでくれている方が多くいらっしやり、作者としても嬉しい限りです。

しかしながら、実際に読んだり見たりした話で無いとどうにもならず、それにやたらと国を増やすのもどうかしていますし……

ちなみに、出そうと思って没にした国家もあります。

トルステイン公国・・・吉岡平先生の「北海の墮天使」に登場する北欧の国家。トリステインと発音が似ているので、出そうかと考えましたが、イメージや時代設定がロクシエと東露西亞帝国に被るので、中止しました。

ファイアリーランド王国・・・うるぶ先生の「Nシップ」に登場するアイルランドにある架空王国。亜人が人種の多くを占めている点が面白かったのですが、やはり時代設定が被るので没。

某南十字星国家・・・作者様御本人から許可を得られなかったので没。

しかし、日本無双にしているつもりなのに、そう見られている

ので、日本より進んでいる国を考え中。けど出てきたのが以下の2国で、どう言うことだろう？

1 ムウ帝国（サブマリン707） 2 レムリア王国（新海底軍艦）

新たな世界へ 6

58日目昼 諸島 仮称2番島密林内

「出たああー!!」

「撃て!!」

ダダダ・・・

密林内に自衛隊の89式小銃と、米軍のM16小銃の発射音が木霊した。

諸島調査隊は昨日最初の島に上陸し、現地に橋頭堡を築いた。

諸島は諸島と名が付くとおり、幾つかの島の集合体で、最初に調査隊が上陸した島は諸島の中で最西端に位置しており、日本の淡路大島より少しばかり大きい程度の島だった。

島には西側から1番、2番と番号が振られた。

そちらの島には地球の始祖鳥に似た鳥とか、幾つか未確認の昆虫などが確認されたものの、人に害を及ぼす危険生物の数は限られたものであり、調査隊と護衛の自衛隊、米軍に出た損害はサソリとクモによる中毒患者2名のみであった。いずれもすぐに治療を施したので無事であった。

そして調査2日目を迎えて、調査隊は次に5km程離れた東隣の2号島に上陸し、調査を開始した。この島は、1号島の3倍はある大きな島で、P3Cの偵察で超大型トカゲの存在が確認された島で

あつた。

だから調査隊は、戦々恐々と言った具合で上陸した。護衛する自衛隊と米軍も、さすがに戦車をすぐに持ち込むことは出来なかったが、重M A Tなど強力な携帯火器で武装していた。

午前中は何事もなく進んだが、午後ついにそいつは姿を現した。全長15mはありそうな巨大トカゲである。外見はどう見ても、地球のインドネシアにいたコモドオオトカゲである。

バケトカゲは、調査隊の姿を見つけると、ギョロツト一瞬彼らを見つめるや否や、大きな口を開けて迫ってきた。

「ひい！」

「逃げろ」

民間出身で武器を持っていない隊員が、真つ先に逃げる。そして護衛役の自衛隊兵士や米軍兵士が、撤退の時間を稼ぐために銃撃戦に移った。相手はバカデカイだけあって、銃弾は面白いくらいに吸い込まれていく。しかし、いくら隊員たちが必死の形相で銃撃したところで、オオトカゲはケロツとしていた。

「ダメだ！！全然利かない！！」

「撤収！撤収！」

自衛隊員と米軍兵士は銃撃を止めて、慌てて後退を始めた。が、そんな彼らの頭上にバケトカゲの口が迫る。

「ひい!？」

「喰われる!!！」

喰われてはたまらないので、皆必死だ。

「これでも喰らえ!!！」

1人の隊員が、トカゲの大きな口目掛けて手榴弾を投げ込んだ。

トカゲの口元で爆発が起き、一瞬その動きが止まった。しかし、煙が晴れて首を1〜2回振ると、何事も無かったかのように、また自衛隊員たちを追い始める。

「畜生！異世界のオオトカゲは化け物か!？」

「84だ！無反動持って来い!!！」

こんなこともあるのかと、84mmの無反動砲を持っていた隊員が前へ出る。

「照準よし！後方の安全よし!!！撃て!!！」

ドウ!!！」

複合装甲で守られる戦車さえ貫通する弾体が発射され、コンマ数秒後には隊員達の目前まで迫っていたオオトカゲに直撃する。命中した弾体が炸裂し、オオトケガが一瞬爆炎に隠れる。

「やったか!？」

「どうだ？」

兵士達は、今度こそと期待を寄せる。やがて煙が晴れた。

「ダメです！動いています！！」

「無反動も利かないなんて、どこのゴ○ラだ！？それともラド○か！？バ○ンか！？」

「こいつは戦車か、艦砲を要請しないとダメだぜ」

と自衛隊員が半ば諦めかけた時、1人の隊員が気づいた。

「いえ、効果あり！あのトカゲ野郎、出血しています！！」

「何？」

全員が目を凝らすと、確かに無反動砲の命中したあたりから、青い血のような物が流れ出ていた。そして、トカゲは向きを変えて森の中へと消えていった。

「た、助かった・・・」

命からがら、何とか逃げ切れた自衛隊員や米軍兵士たちは、思わずその場にへたり込んだ。訓練やこれまでの戦訓から、「撃たれる」とか「殺される」と言うことに対する覚悟は、皆ある程度持っていた。しかしながら、「喰われる」などと言うことに対する心構えなど、つい2ヶ月前には想像すらできないことであった。

「あんなバケモノがまだ何匹もいるんだよね？・・・勘弁して欲しいな」

これまでには思いも抛らなかつた苦勞が、調査隊員に押し掛かつていた。

58日目 日本国東京 876プロ事務所

「・・・そう言うわけで、誰でもいいから私がロクシエに行っている間、愛の面倒を見て欲しいんだけど？」

「いきなり全ての仕事をキャンセルした拳句に、そんなことを言いますかあなたは？」

「舞さん、もう少し大人になってください」

日高舞の言葉に溜息を吐いているのは、876プロ社長の石川実と彼女のマネージャーである岡本まなみだ。

現在876プロには所属するアイドル5名（舞は除く）と、3人の従業員が全員勢揃いしていた。厳密には、させられていたが。舞によって・・・

非番の者まで突然呼び出されて、事務所に集合させられたかと思えば、舞の口から出た言葉は「自分はロクシエに行くから、しばらくの間日本で学校と芸能活動がある愛を、誰か預かってくれ」と言う無茶苦茶な要求であった。

「何よ！？まるで私が聞き分けのない子供みたいじゃない！」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

「と言うか、どうしてそんな話になったんですか！？確か民間人はまだロクシエへ渡航できない筈じゃ？」

涼が冷静に突っ込む。それに対して舞は怒らず、逆に不敵な笑みを浮かべて涼を見据える。

「さすが涼君、するどいわね。秋月一族の最高傑作と呼ばれるだけあるわ。アイドルアルティメイトで見せた実力もすごかったし。アイドルとしても優良株、是非とも愛の婿に欲しいわね」

「「な！？」」

「ええ！！何言ってるんですか！？」

舞の爆弾発言に、876所属アイドルの桜井夢子と水谷絵里が驚愕の、そして当の涼は困惑の声を上げる。

「ちょっと待ってくださいよ！何で涼が愛の婿にならなくちゃいけないのよ！！りよ、涼は・・・」

「幾らなんでも、反則過ぎる？涼さんは・・・」

そんな2人に対して、愛の方は満更でもない表情で。

「涼さんがお婿さんなら、私も嬉しいかな？」

と言っ。

3人とも、顔を赤らめて言っているあたり、明らかに涼を狙っているのがわかる。しかし、涼はその手の話題について、全くの奥手だった。

「ちょ、ちょっと3人まで、何冗談言ってるの!？」

()(出たよ。このリア充鈍感男)()

絵理のプロデューサーである尾崎、アイドルの鈴木彩音、そしてまなみが醒めた視線を涼に向ける。

「ええ!？何このプレッシャー!？僕何か悪いこと、いい加減にしない!！話が前に進まないじゃない!！」

話がドンドンずれて行くのを見かねた石川が、ついに切れた。

「何よみのりん。折角面白いところだったのに」

舞が残念そうな表情をするが、石川はピシヤリと言い放つ。

「あなたもそうやって、皆を煽らないで下さい!！」

「はいはい」

舞がいい加減な返事をする。その態度に呆れながらも、石川が話の内容を戻す。

「で、どうして民間人である舞さんがロクシエに行けるんですか？」

「まさか、また首相にお願いして何とかしてもらったとか？」

「さすが涼君。いい線行ってるわね。やっぱり愛「舞さん！」」

話を脱線させようとする舞を、石川が黒いオーラを発散させながら止める。

「はいはい、わかったわよ。ええとねキョン君、つまり春川首相に對して、確かにお願いしたのは間違いないけど、元々大使館職員家族の定住についての話は進んでいたらしいわ。で、5日前にようやく許可が下りて、晴れて私もロクシエへ行けるようになったわけ」

「え？舞さんの旦那さんで、外交官なんですか？」

涼が素直に疑問を口にした。実は舞の夫がどんな人物であるかは、世間には全く知られていなかった。

「外交官じゃないけど、大使館関係者よ。だから私にはロクシエへ行く権利があるってわけ。いやあ、あの人は新婚旅行にも行けなかったから、ワクワクしてしょうがないわ」

（（（こんなハチャメチャな人を嫁にした人・・・よっぽど変わった趣味でも持っているのかな？）（（（

「皆、今何か言ったかしら？」

「『『『いいえ、何も』』』」

「言っておくけど。私はともかく、あの人の悪口言ったら、芸能界

から永久追放だからね」

舞の声は普通の声であったが、全員の心の中に凄まじい重圧を加えるのに、必要な何かを含んでいた。少なくとも、本当にそれ位のことではしでかすぞと言うメッセージが籠っていた。

（（この人マジだ！！））

「ま、そう言うわけで、私は今晚の飛行機でロクシエへ旅立つから、とにかく誰でも良いから愛の面倒を見て欲しいんだけど？」

「全く、もっと早くに話してくれれば良かったのに」

石川が溜息を吐く。

「そうですね。それに愛ちゃん1人だけ置いていくなんて可哀想ですよ」

「涼さんもつと言ってやってください！私が行きたい行きたい言っても、ダメの一点張りなんです」

「当たり前でしょ愛。あなたはこっちで学校と仕事があるんだから。まあ、今日になって頼むことになったのは、悪いと思っっているわ。急に決まった話で、私も舞い上がっちゃったから。もちろん、タダでは言わないわ。預かってくれた人にはそれ相応の礼をさせてもらうから」

「そう言う問題じゃないでしょう。親として子供だけを置いて行くのが問題なんですよ。愛ちゃんはまだ14歳なんですよ！もっと母親としての自覚を持ったらどうなんですか！？」

「・・・ふ、まさか涼君にそこまで言われるとは思わなかったわ」

「じゃあ、愛ちゃんを「あなたに預けるわ!」!

「ぎゃおおおん!..!どうしてそうなるの!?!」

「どうしてって、本気で言ってるのかしらあの子?」

「そりゃ、あれだけ男らしい所を見せれば、そうなりマスヨ」

尾崎と彩音の2人が、処置無しとばかりに言う。

「て、言っている間に時間だわ。と言っわけで涼君、愛のことお願いね。これが当座の生活資金よ。御家族によろしくね」

「あの、僕まだ引き受けると」「じゃあ、よろしくね」

そして舞は、素敵な笑顔を涼に向けるやいなや、疾風のごとく去っていった。

「舞さー!ー!ーん!..!..!」

涼の叫びは、空しく事務所内に響くだけであった。

厄介ごとを押し付けられて、真っ白になった涼の腕に、愛が抱きつく。

「涼さん、その・・・よ、よろしくお願いしますね」

新たな世界へ 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

アルバイトが3日連休なので、明日出来ればもう1話UPしたいです。その後は4日連続勤務なので。

前半部は、怪獣対自衛隊の戦い。東宝自衛隊のテーマを脳内BG Mにして良いかもしれませんねwww

ただし、施設科の皆さんを出したかったです、ダメでした。ごめんなさい。

そして後半部。舞のロクシエ行きと、愛の日本残留を書きたかったのですが、結局涼が不憫な事態に・・・どうしてこうなった!？

あと、タグに涼愛とか付けた方が良いかな？

新たな世界へ 7 (前書き)

なんかグダグダですいません。

次回の更新は、来週以降になると思います。

新たな世界へ 7

59日目昼 ロクシエ連邦 連邦首都中央駅

多くの人が利用し活気のある連邦首都中央駅はこの日、大勢の警官によって囲まれ、物々しい雰囲気にも包まれていた。その理由は、外国からの重要なゲストが到着したからであった。

「ようこそロクシエへ、外務大臣のロイド・イーディンです。皆様を心より歓迎いたします」

「今使節団の団長を勤めておりますバロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。短い時間の滞在中にも関わらず出迎えていただき、感謝致します」

最初に列車から降りたサクラス帝国日本派遣使節団団長のクリプトン卿は、出迎えにやってきたロクシエの外務大臣と挨拶を交わす。彼の後からホームに降り立ったメイベルは、挨拶などを彼に任せ、駅の観察をしようとしたが、それ以上に物々しい警備に圧倒されてしまう。

「なんか、もの凄く物々しいわね」

ホームに降り立ったメイベルが少々引き気味に言うが、後から降りたアステルはそんな彼女に呆れる。

「当たり前でしょ、あんたは西アルテースの女王様で、南アルテースの大統領なのよ。本来だったら国賓なのよ。今回はあくまで通過

のために立ち寄ったから、この程度で済んでいるだけなのよ。もう少し自分の立場を弁えたらどう？」

「うー、改めて自分の立場が嫌になってくる」

女王と大統領の自覚を持つ前に、自分の立場が嫌になるメイベルであった。

「はいはい、悩むなら後にしなさい。私たちはこれから日本大使館へ行って、大使たちに挨拶しなくちゃいけないんだから」

「そうだぞ、メイベル。それに、列車の中での元気はどこへ行ったんだ？」

アステルに続いてナバルまでそんな事を言う。

「わかってるわよ！！あーあ、堅苦しいことは嫌なんだけどな」

嫌々ではあったが、メイベルはそう答えざるを得なかった。

「メイベルにも困ったものですう」

「ナバルの言うとおり、列車の中では信じられないほど元気だったのに」

パセラとクラウも苦笑いしている。彼女は首都に着くまでの丸1日、列車内ではしゃぎ通していた。サクラスにも鉄道はあるにはあったが、開通したのはごく最近のことで、ロクシエの物に比べて歴史は浅い。だから、メイベルとしては学ぶ点が多かった。

そのため、メイベルは首都に着くまでの間、ロクシエの人間に質問ばかりしていた。

「それでは皆様、お車を用意しましたので、こちらへどうぞ」

「感謝します。さあ、皆行くぞ」

クリプトン卿が一向を呼ぶ。

「ハイー！それじゃあ、行くとしますか。うーん…船と汽車が連続だとさすがに少し疲れたわね」

「では、メイベル先にホテルへ行って休むか？日本大使への挨拶は私がしておくから、安心しておけ」

そんなクリプトン卿の有り難い申し出に、メイベルは喜ぶどころか焦った。

「行きます行きます！日本大使館へは私も行きたいですから！だから置いていかないで下さい！」

メイベルの一転した態度に、再びナバルたちは呆れかえり、ロクシエの人間は啞然としてしまう。そんな中で、ただ一人日本人の随行員である朝倉だけが、楽しそうに笑っていた。

30分後、サクラスの御一行は日本大使館へと到着していた。

この道中も、メイベルはロクシエ首都の街並みや、自分が乗り込んだ乗用車について、運転手や同乗したアステルに対して質問しまくりであった。ただし、アステルの方は苦笑いしつつもしっかりと

彼女の質問に答えていたが。

ところが、出迎えに出て来たのは大使ではなかった。

「申し訳ありません。大使は現在、空港の方へ出ております。本来でしたら、既に戻っている予定だったのですが、どうやら渋滞に巻き込まれたようでして、戻るのが遅れております」

大使館員はペコペコお辞儀し、非礼を詫びた。

「渋滞とは何ですか？」

クリプトンよりも早く、メイベルが反応した。そんな彼女の頭に、ナバルが拳骨を落とす。

バシ！

「な、何するのよナバル！？いきなり叩くなんてひどいじゃない！」

「バカ！今はクリプトン卿が話してるだろうが！」

そんな遣り取りを、日本大使館員は一瞬目を点にしまったが、すぐに我に返るとクリプトンに尋ねる。

「ええと、彼女は!？」

「彼女はメイベル・ヴァイス。南アルテース連邦大統領であり、西アルテース王国女王にして、今使節団員の一人です」

「では、例の聖女様ですか…こ、これは失礼しました！本当にお若

いので、驚きました」

「あ、お気になさらず。と言つか、その呼び方はここでも知れ渡っちゃっているんですね・・・」

「ええ、凡そのことはアステル大使から聞かされていますので」

「そうですか・・・先輩！余計なこと言わなくても良いのに！！」

「だって、あんたの説明をするには避けて通れないことじゃない！」

片や女王兼大統領、片や大使である筈の人間が女子高生さながらの口喧嘩をはじめ、出迎えた大使館員らは、またも啞然としてしまった。

そんな彼らに、朝倉が笑みを浮かべながら言う。

「こんなことで驚いてちゃ、この後持たないわよ」

「はあ・・・」

「それにしても、大使が遅刻なんて。もう少し時間に余裕を持てなかったのかしら？」

朝倉が溜息を吐く。

その光景に、彼女と行動を共にしてきたメイベルたちは少しばかり驚いた。もちろん、ロクシェ大使館員たちはそんなこと気づく筈もなく、彼女に大使の事情を話す。

「それについては、あまり責めないでください。今日大使館職員の家
族の第一陣が到着したんです。ですが、途中幾つかトラブルがあり
まして。それで出迎えの時間も遅れてしまい・・・大使も間に合
うように急ぐとは言われたのですが、不可抗力の面もあるので。そ
れに、大使の奥さんと子供さんも一緒なので、我々が行くように強
く薦めました。ですから」

そんな会話をしていると、大使館前に数台の車がやってきた。

「あ、大使が戻ってきました」

その集団が日本大使館の車であることは、すぐにわかった。日の丸の旗を掲げているのもあるが、それ以上に先頭を進む2台は、明らかに日本車であった。

「あれって、日本の車ですか？」

早速興味を引かれたメイベルが、大使館員に尋ねる。

「ええ。この国での移動用と、今後の販売に備えてのデモンストレーション用に3台だけですが、この国に持ち込んだんです。1台は既に、ロクシエ政府に寄贈しているので、大使館で使っているのはあの2台だけです」

「映像で見た車そのままね。けど、本当に変わった形をしているわね。エンジンとかはどうなっているのかし？それから、足回りとかも・・・」

メイベルはブツブツと1人考察を始めた。その様子を見てナバルたちは、皆こう思わずにはいられなかった。

((始まったよ。メイベルの悪い癖が))

そんな一行の内心を他所に、日本車が止まり、扉が開いた。

「ああ！やっぱりに合わなかったか！？」

「荒木大使、家族が大事なのはわかりますが、国賓級のお客様を待たせするなんて、失礼ですよ」

「悪い朝倉さん。出来るだけ急いだんだけど」

「まあ、私に謝るより、サクラスからのお客様たちに謝る方が先決でしょ。こちらが、サクラス帝国日本派遣使節団団長のクリプトン卿よ」

朝倉がクリプトンを紹介する。

「これはとんだ御無礼を。日本国駐ロクシエ大使の荒木仁です」

「今使節団の団長を勤めておりますバロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。遅れたことはお気になさらず。事情は聞きました。家族と久しぶりに会われたのなら仕方ありません。こちらこそ、短い時間の、それも急な訪問であったにも関わらず、手を煩わせて申し訳ない」

「いえいえ・・・お！？そちらの方は、例の聖女様ですか？」

「え、ええ。(また聖女！？勘弁して欲しいな)メイベル・ヴァイスです。よろしく、荒木大使」

「こちらこそ、あなたのことはアステル大使から窺っております。若いのに、色々と功績を上げられているそうですね。尊敬に値します。どうぞよろしく。短い時間ですが、あなたの質問には出来るだけ答えられるよう努力します。」

「あ、ありがとうございます・・・ちょっと先輩！一体私のこと何て触れ回ったのよ!？」

「アハハ、ごめんごめん！」

メイベルは荒木との会話を終えるや否や、アステルに詰め寄った。

「ええと、あれは？」

「ああ、お気になさらず。それで、そちらは奥様かな？」

「え？」

何時の間にか、荒木の隣には赤ん坊を抱えた女性が立っていた。

「あ!？シエラ、降りてたのか？」

「当たり前でしょ！何時までも車の中で待てるわけないでしょ!・・・あ、失礼しました。荒木の妻の紫シエラです。以後お見知りおきを。そしてこっちは、娘の杏アンです」

荒木の妻の紫は、そう言つと美しい笑顔を作る。

「御丁寧な挨拶ありがとうございます。素敵な奥様ですな、荒木大

使

そのクリプトン卿の言葉は、単なる社交儀礼でもおだてでもない、正直な部類の言葉であった。

「「ありがとうございます」

実際、その場にいる多くに人間が、紫に見とれていた。

「綺麗」

「絵本の中から飛び出してきたみたいですよ」

端正な顔立ち、スラットした体型、腰まで伸びたサラサラの長い髪は実際の所、美しかった。

「若いつて本当にいいわね、私もあと10年若ければ外見でもタメをはれる自信があるんだけど」

紫の美しさに見とれていた全員の意識をひっくり返すように、尊大な態度を感じさせる女性の声が入ってきた。

全員がそちらに目をやると、1人の女性が制服を着た男性と共に車から降りてやって来た。

「おいおい舞、降りるなりそんなライバル心剥き出しなセリフ吐くなよ」

「別にいいでしょ。これくらい？」

「日高さん、それに舞さん。こんな所で言い合いは止めてください。クリプトン卿、それにメイベルさん。紹介します。駐在防衛官の日高二佐と、奥さんの舞さんです」

「日高正道二等空佐です」

「その妻の日高舞です。よろしく」

日高はピシッと敬礼を決めた。対して舞は、先ほどのような尊大さはなりをひそめ、如何にもな形で彼に挨拶した。

新たな世界へ 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

新たな世界へ 8 (前書き)

あれええ、またアイマス成分が濃くなりすぎ・・・どっつしてこっつ
なっただ！？

新たな世界へ 8

59日目昼 日本国・東京 首相官邸・首相執務室

「それじゃあ、諸島にはやっぱり有望な鉱脈があると言っことか？」

春川は目の前で報告を行っている文部大臣に問う。

「はい。まだ初歩的な調査しか出来ていませんが、1号島と3号島ではそれぞれ土壌に露出した金・銀・マンガン・銅等の鉱脈を確認したとのことですよ」

「それは朗報だな。けど、埋蔵量はどの位なんだ？」

すると、文科大臣は顔をしかめた。

「それは何とも言えませんね。鉱脈が直接地表に露出しているので、相当な量があるとは思いますが・・・具体的な数値については、今後の調査研究を待つしかありませんね」

「だわな。たった1日の調査でわかったら苦労しないよな。それで、採掘開始までにどれくらいの時間が掛かるんだ？」

「それについても何とも言えませんね。採掘のための資材や機器を現地に運ぶ必要もありますし、積み出し用の施設も必要となります。どんなに急いでも、数ヶ月は掛かると思われます。それも順調に進んでの話ですよ」

「例のバケトカゲか？」

諸島の仮称2号島で、化け物人食いトカゲが発見されたのは、既にニュースでも放送している内容であった。現在の所幸いにも喰われた人間は出ていないが、早速この怪物に対する不安の声が出ている。その他に問答無用で退治するべきという意見や、保護するためにも島から撤退するべきという意見まで出ていた。

特に日本が誇る古生物学の権威である山根博士をはじめとする生物学者の多くが、島の調査よりもトカゲの調査を優先するべきというコメントを出し、物議を醸していた。

「それもあります、他にも幾つか危険な生物が確認されましたので」

現在の所、バケトカゲの存在は2号島以外に確認されておらず、調査隊は5つの島に上陸して調査を進めていた。しかしながら、他の島にはバケトカゲこそいなかったが、地球にはいなかった生物や植物が幾つか確認されており、安全という観点から見れば、おいそれと開発できる状況ではなかった。

余談ではあるが、この数日後陸自の施設科部隊が仮称3号島で大型トカゲに遭遇し、同部隊の二尉がチェンソーを振り回して追っ払ったり、さらに坑道掘削機で地中から攻撃を行い、さらにその様子が従軍記者によって記事にされて話題となった。

「そうになると、危険の少ない島から開発することになるのかな？」

「恐らくそうなるかと」

「わかった。引き続きよろしく頼むよ」

文科大臣は報告を終えると、帰っていった。

「やれやれ、資源が大量に眠っているってわかったのに、それを掘り出せないんじゃないかな」

「まあまあ首相。拙速の結果大事故を起こすようなことになっては目も当てられません。ここはジツクリ行きましょう。石油も出ましたし、資源の一部はロクシェからの輸入で目処が立っただんですから」

傍らに控えていた小泉副首相が慰めの言葉をかける。

「そりゃそうだけど、色々と期待していたからな。ま、気長に待つしかないんだろうな」

「はい」

「ところで、明日はサクラスの使節団とトリステインの女王様が同時に来るわけだが、大丈夫だよな？急なことだったから、どこかで無理が出ていなければいいんだが」

「時間があまりなかったのは否定しませんが、受け入れ予定の静岡・仙台両空港とも問題はないそうです。東京までの移動手段の確保、東京到着後の宿泊場所についても問題ありません」

「本来なら成田か羽田まで直行して欲しかったんだが」

「それは仕方ありません。両空港とももう一杯ですから」

羽田空港と成田空港には、現在転移に巻き込まれた航空機が多数着陸しており、このため既に駐機場は満杯であった。何せ日本に離着陸していた機体だけではなく、転移範囲内を通過中だった全ての航空機が集中したのである。

それでも、幸いにも日本の場合地方の空港だけはやたら数があるので、着陸場所がなくて不時着という事態だけは避けられたが。

余談ではあるが、この転移に巻き込まれてやってきたのは何も民間の船舶や飛行機だけではない。尖閣諸島近海では中国の漁業監視船や台湾の巡視艇、さらに潜水艦や航空機。また北海道近海ではロシアの国境警備隊の警備艇やロシア空軍の航空機。そして太平洋上ではオーストラリア海軍の駆逐艦や中国海軍のフリゲートが転移に巻き込まれていた。

最終的に艦船だけで20隻、航空機も10機近い数に上っている。これらはいずれも日本の港や空港に避難し、直ちに抑留の上で武装封印となっている。

日本にとって幸いだったのは、暴走した艦艇や航空機が皆無であったことだった。ただし、燃料切れを来たして漂流や不時着水ということは起きていたが。

それはともかくとして、ロクシエとトリステインからの使節と女王の受け入れは、短期間の準備期間しかなかったものの、両国との外交関係を考慮した政府の決断と、諸機関の努力によって何とか間に合っていた。

「間に合わせてくれた関係者に、本当に感謝だな」

「ですね」

2人が安堵の表情を浮かべたその時、扉がノックされた。入ってきたのは秘書の朝日奈みくるだった。

「キヨン君。また色々な企業から面談のお願いが来てますよ」

その言葉に、春川の顔が露骨に不快なものとなる。

「またかよ！？そう言うのは担当官庁に、任せちゃって下さいよ」

「けど、首相に直接って言うのも多いですし」

「全く、利権に群がる連中は本当に鬱陶しいな。特にこの間の黒井とか言う芸能プロの社長は、本当にしつこかったよな？」

転移直後に、政府が作った広報用のCM。765プロと876プロの2つのプロダクションのアイドル総出演のこのCMは、国民から好評だった。のみならず、両プロの名前を全国規模に知らしめることとなった。

その結果、同様の利益に預かりたい他のプロダクションが、自分たちのアイドルも出せと陳情を出してくるようになった。

しかしながら、そもそもあのCMは首相とアイドルの日高舞が知り合いだったと言う特異なパイプがあったからこそ出来た物だった。

そのため、体力のない事務所から順に次々と脱落していった。最終的に961プロと東豪寺プロの2社だけが残った。しかし、東豪寺プロは親元の財閥の経営不振で体力切れとなった。

残る961にしても、既に765と876で充分アイドルは確保できていたので、CMを作った内閣府も首相の春川も採用する気はサラサラなかった。

「でしたね。まあ、舞さんの言ったとおり典型的な悪徳業者でしたけど」

「あんまり鬱陶しいから、公安と内調に色々調べてさせたけど、まさかあんなことになるとは思わなかったよな？」

「ええ。私も最初はやりすぎだと思ったんですけど、まさかあそこまで酷い企業だったとは」

「まあ出るわ出るわ。巧妙に隠されていた不正が山ほどに」

961プロを突っついて見たところ、不正経理や労働基準法違反、収賄等々の犯罪のオンパレードであった。もちろん、社長の黒井は逮捕され、同プロは倒産した。

「公安委員長の話では巧妙に偽装されていて、念入りに調べなければ警察でもわからなかったそうです」

「ああ。あの社長、そう言う部分だけには長けていたらしいからな。ついでにな、白州官房の話じゃ笑うに笑えない話もあったそうだが」

「と言つと？」

「なんでも両方（公安委員と内調）とも、最初はやる気がなかったらしいんだ。まあ、内容が内容だからな。だが、内調の方にプロジ

エクト・フェアリーのファンがいたらしくてな。そいつが糸口を掴んだらしい」

プロジェクト・フェアリーとは、少し前に大ブレイクした現在765プロに所属している3人のアイドルユニットの名前だ。961プロのユニットだったが突如解散し、色々話題となった。

「確かに、笑うに笑えない話ですね」

「なんでもその調査員口頃から「詐胸とか言うやつは許さん!!」とか公言していたらしいから。まあ、仕事ぶりは中々有能だそうだけど・・・今度舞さんに頼んで765プロのアイドルに会わせてやろうかな?」

「それはおススメ出来ない話ですね」

「だな。それに、その舞さんも今はロクシエだし」

「彼女上手くやれるでしょうかね?」

「うーん・・・」

春川は腕を組んで考え込んでしまった。

(舞さん、何か悪いことしてなきゃいいけど。被害者が可哀想すぎる)

同時刻 ロクシエ連邦・連邦首都 日本大使館

「む!？」

日高舞は顔をしかめた。それを見て、隣に立つ夫の正道が怪訝な顔をする。

「どうした舞？」

「いやね、どこかで誰かが私の悪い噂をしたような気がして」

「気のせいだろうか？」

「だといけど。もししている奴がわかったら、絶対に絞める！」

舞が半目になりながら言う。それを見て、正道は呆れながらも注意する。

「そう言う物騒な発言は止めてくれ。女王様の前だぞ」

「わかってるわよ。あなたにしか聞こえていないから心配しないで。それにしても、本当にビックリよね。あの歳で女王様にして大統領だなんて。若干嫉妬しちゃうわ」

「いや、そこで何で嫉妬するのか訳がわからない」

2人の視線の先では、荒木大使と歓談・・・しているように見えて一方的に質問の機関銃射撃を加えるメイベルの姿があった。

「もう、せっかく久しぶりに愛する妻に会えたんだから、少しくら

「いハツチャケなさいよ」

「お前の夫であると同時に、俺は航空自衛官なんだぞ？ちゃんと規律は守らなきゃいけないし、外交官の1人として振舞わなきゃいけないんだぞ！」

「ハイハイ。全く、そう言うところは昔から変わらないわね・・・けど、そう言うあなたも素敵よ」

突然甘い声でそんなセリフを掛けられたため、正道は顔を真っ赤にする。

「ば、バカ！」

「うふふ・・・」

そんなバカツプルぶりを発揮している2人に気づいた荒木が、メイベルの質問の嵐から抜け出すように近づいてきた。

「どうも舞さん。空港では軽いあいさつしか出来ず、失礼しました。改めまして、駐ロクシエ大使の荒木仁です」

「日高舞です。夫共々よろしく」

「舞さんは、今晚のパーティーには出席なさるんで良かったですよね？」

「ええ、もちろん！そんな面白そうなこと、見逃すわけにはいきませんから」

その答えに荒木は面食らい、正道は頭を抱える。

「そ、そうですね。それでしたら、是非ともお願いがあるのですがよろしいですか？」

「ええ。出来る範囲でなら答えますよ。」

「では、お願いします。ロクシエ使節団と大使館員とその家族のため、1曲歌っていただきたいのです」

新たな世界へ 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

今回も色々ネタを仕込んでいます。特に前半のネタ2つは、分かった人はスゴイかも・・・

新たな世界へ 9

59日目昼 太平洋（便宜的な呼称）上 護衛艦「さざなみ」艦橋
「うーん！やっぱり外はいいですね」

晴天の太平洋上を航行する「さざなみ」の艦橋左舷側にある張り出しで、トリステイン女王アンリエッタは体を延ばした。

「陛下、はしたないですよ。」

「そうは言わないで下さいアニエス。船の中ではどうしても体が鈍ってしまいますので」

「そうですね。甲板で体操の一つでも出来れば良いのですが？」

「だったら、午後ヘリ甲板でランニングする連中がいるから、騎士の嬢ちゃんも一緒にやるかい？」

アニエスの後ろから、海自の作業服に身を包んだ男が出てきた。

「キャプテン。その嬢ちゃんというのはやめていただけないだろうか？」

やってきたのは「さざなみ」艦長の千葉斎人一佐だった。

最初才人を除く3人は、千葉が通常課業時に水兵とほぼ同じ格好をしているのに驚かされた。彼女らの知っているキャプテン（空軍艦艇の艦長）は豪華な格好に身を包むのが当たり前であったからだ。

千葉はアンリエッタを迎えた時こそ第一種礼装であったが、出港してからはずっと作業着に身を包んでいた。さすがに2日も経つと、2人も慣れてしまった。

「俺から見たら、あんたは嬢ちゃんで充分なんだよ。それで、どうする？」

「生憎だが、遠慮させていただく。私は陛下の警護という大事な任務を担っているのだ」

「そうかい。まあ、明日には硫黄島に到着だ。それまではどうか御辛抱願いたい」

「こちらこそ、色々と尽くしていただいて感謝しております。お料理もおいしいですし、服も貸していただきましたし」

そう言うとアンリエッタは腕を広げた。今彼女とアニエスが着ているのは、海上自衛隊の女性自衛官用の作業着であった。ただし、千葉と違いヘルメットと救命胴衣は付けていない。

当初アンリエッタはいつも通りにドレスを着ていたが、狭い艦内では引つかかるなど危険であった。他にも数種類、彼女は服は持ち込んでいたがいずれもスカート系でやはり狭い艦内を動き回るには使い勝手が悪かった。

万が一にもこけて負傷されてはたまらないので、千葉は彼女たちに予備として搭載されていた作業着の貸与を申し出た。

これに対して、アンリエッタよりも先にアニエスが猛抗議した。

彼女曰く「高貴あるトリステインの王族が他国の軍服を着るなど恥以外の何物でもない！」と。

しかし、当のアンリエッタが服を渡された途端に気に入ってしまった。ドレスに比べて動きやすいズボンタイプで、生地もドレスに比べて遥かに良質のように感じられたからだ。もちろん、階級章などは予め剥ぎ取られていた。

外国の軍服を嬉々と着込むアンリエッタに、当初アニエスは顔を手で覆ってしまう程のシヨックを受けたが、程なく才人やルイズまでもが借りた制服を着込み、さらに動きやすそうにしていたことから、結局最後は彼女も同様に服を貸与してもらっていた。

「女王陛下にそう言っただけなのなら嬉しいですね。食事もお口に合って良かった」

「まさか船の中で温かくてあんな美味しい料理を食べられるなんて思いも扱りませんでした」

地球の大航海時代もそうであったが、調理施設が極端に限られていた船の上で上等な食事を探るのは非常に難しいことであった。この問題が大きく改善されるのは、蒸気機関が発達して以降のことだ。

この辺りにも、日本とトリステインの科学力の差が如実に現われていると言える。

「ところで千葉キャプテン。トリステインを出てから既に2日目。ずっと何も無い海の上を進んでいるが、この船はちゃんと目的地に向かっているのか？」

現在「さざなみ」は大洋のど真ん中を走っている。もちろん、周囲は水平線しか見えない。嵐やスクールに遭遇することもなく順調に進んではいるが、これはこれでアニエスは不安に感じているようだった。

ハルケギニアでは基本的に船は地上目標を参考にして航行する地文式の航法で航行していたため、このような長距離を目標無しで航行することなどなかった。当然、それに必要な技術もなかった。

ところが、千葉はそれを一笑に付した。

「大丈夫大丈夫。確かにGPSはなくなっただけど、定時にはちゃんと天測をやっているし、硫黄島をはじめとする各基地からの電波を拾いながら進んでいるから。よっぽどのことがない限り迷子にならないよ」

「そのジーピーエスとか、デンパとかは私にはさっぱりわからん」

理解できない単語の連発に、アニエスが頭を抱える。一応自衛官達から簡単な説明を受けているのだが、電気についてせいぜい「雷のあれ」位しか知らなかった人間に、早々理解しろと言う方が難しい。

「これからじっくり勉強するんだな」

「そうですね、キャプテンの言うとおりです。私たちももっとしっかり勉強しないと。魔法に頼る時代は終わりを告げたのですから」

アンリエッタは自らメイジであり、始祖の血を引く者でありながらその点を確認していた。

「魔法ね・・・我々から見たら御伽噺の中の話でしたけど。全く、人生何が起きるかわかりませんな」

「これも神のお導きなんでしょう・・・あ！？そう言えばキャプテンは神を信じていらっしやいませんでしたね？」

千葉は自他共に認める無神論者であった。アンリエッタとアニエスは既にその事を乗艦直後に聞かされていた。

「全く、神を信じないとは信じられませんか」

アニエスが呆れ、と言うより無気味な表情で千葉を見るが、彼はそんな物どこ吹く風とであった。それどころか、アニエスに不敵な表情で言い返した。

「神を信じない人間がいる位で驚いているんじゃない、まだまだだぞ。日本に行ったら腰抜かすぞ」

「・・・」

アニエスはあまり深く考えなかったが、日本に到着後彼女は彼の言葉どおりの洗礼を受けまくることとなる。

ちなみに、この時残る2人（才人とルイズ）は何をしていたかと言つと。

「オラオラ！」

「あ！？才人、ハメワザなんてズルイわよ！・・・て、ああやられた！キー！！これで10連敗だわ。才人に負け続けるのがこんな屈辱だなんて！」

「認めたくないもんだな、自分自身の若さゆえの過ちを」

宛がわれた士官室内で、乗員から借りた任天堂ODDで対戦ゲームに熱を上げていた。

59日目夕方　ロクシエ連邦・連邦首都　日本大使館

日本大使館ではこの日到着した職員の家族や、サクラス使節団らを招いた歓迎パーティーが開かれていた。大使や代表者の挨拶の後は、立ち食形式で参加者は思い思いに飲食しながら交流を深めていた。

その中で、見境なく日本大使館の人間に質問しまくるメイベルは目立っていた。そして彼女とは違う意味で目立っている人物もいた。

「いやあ、こんな事もあるつかとステージ衣装を持ってきておいて良かったわ」

「ステージ衣装だけじゃなくて、持ち歌のCDまで持ってきているんだから恐れ入るよ」

華やかなステージ衣装に身を包んだ舞の隣で、同じく空自の礼装

に身を包んだ夫の正道が呆れ顔で言う。

「フフフ。どう、久しぶりにこんな姿の私を見た感想は？」

「とても綺麗だよ。舞」

「ありがとう」

年甲斐もなく顔を赤らめる舞。日本の芸能関係者が見たら、卒倒すること間違い無しだ。

「けど、くれぐれも相手は女王様兼大統領の国賓だからな。失礼の無いように頼むぞ」

「当たり前よ。どんな時でも手加減する気なんかないし。特にあなたがいる前じゃね」

「バ、バカ！」

そんな2人の様子を遠巻きに見ている人物がいた。

「何か、あの人たちを見ていると殺意が湧いてくるんですが」

サクラス使節団の1人であるクラウが、不穏なことを言う。しかも、目が座っている。

「く、クラウさん。そう言う発言は慎んでください」

パセラがクラウから発せられる黒い何かに気づき、落ち着かせようとする。彼女に続いてナバルも注意するが、彼の注意はどこか火

に油を注ぐような内容だった。

「そつだぞバカ！そんなに羨ましいなら、とつとと恋人の一人位作ればいいじゃないか？」

ナバルの言葉に、クラウはカチンと来た。

「うるさいです！そもそも、いつもメイベルちゃんといチャイチャイしているナバルがそんな言葉言う資格なんてないです！！」

「ナバルさん、さすがに今は私も無神経すぎると思いますう」

「はあ？何で今の言葉がクラウを怒らせるんだ？そもそもイチャイチャやって何だ？」

本気でそう言うナバルを見て、パセラは処置無しとばかりに溜息を吐く。

「もういいですう」

クラウなど、怒りのボルテージがもはやMAXだった。

「この鈍感男め！絶対にこゝろ3人して何やってるの？」

ギヤーギヤーと騒いでいた3人の側に、何時の間にかメイベルと日本の荒木大使が立っていた。

「あ、メイベルちゃん！それに荒木大使も！？し、失礼しました」

「メイベル、話の方は終わったのか？」

「まだよ。けど、何かこつちから色々と声が聞こえたから」

「御迷惑お掛けしてごめんなさいですう」

そんな4人を見て、荒木は苦笑した。

「いいよいいよ。俺も君達の頃はそんな感じだったから。いやあ、若いっていいね」

「荒木大使もまだ20代ですよね？」

「10代と20代には超えられない壁があるんですよ、メイベルさん。で、そろそろ余興が始まるので皆さんお静かにお願いしますね」

「余興で、確かあのマイと言う人が歌うんですよ？そんなにあの人が上手いんですか？どう見てもただのバカップルにしか見えませんでしたが？・・・う！？」

突然クラウの顔色が悪くなる。

「どうしたクラウ？」

「いや、ちよつと悪寒が」

ナバルに返事しつつも、彼の表情は冴えない。

「大丈夫かい？」

荒木も声を掛ける。

「だ、大丈夫です。続きをどうぞ」

「ああ。あの人は10年以上前、日本中にその名を轟かしたアイドルだからね」

「……アイドル？」

「あれ、通じないか。そうだね、若い芸能人のことかな。」

「はあ。とにかく、歌が上手いってことですね？」

「そう言うことですメイベルさん。あ、始まりますよ」

荒木が持っていたグラスの飲み物に口をつけながら、司会者の方を見る。

「それではここで、航空自衛隊駐在武官の日高二等空佐の奥様で、元アイドルの日高舞氏に1曲歌っていただきたいと思います」

司会者に紹介され、舞が会場の前に出て来た。

「どうも。御紹介に預かった日高舞です。まさかこんな所で、しかも異世界の人たちの前で最初に歌うことになるとは思わなかったけど、精一杯歌わしてもらいます。楽しんでいてね」

舞がウィンクした。その仕草には、何ともいえない色気があった。

「へえ」

「不思議ですう」

「こんな気持ちは初めてです」

メイベルやパセラ、クラウと言ったサクラスからの参加者も歌う前にも関わらず、彼女の言葉にも表せない魅力に引き込まれていた。

「では、「ALIVE」行きます！」

舞が宣言すると、急ごしらえのスピーカーから曲が流れ始めた。

新たな世界へ 9 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

W e l c o m e t o J a p a n ! 1

59日目夕方 ロクシエ連邦・連邦首都 日本大使館

「~~~~~!」

舞が歌い踊る姿に、パーティーの参加者全員が目が釘付けとなっていた。

「綺麗」

「スゴイ・・・歌が心の中にまで響き渡るみたい」

メイベルも舞の歌に聞き惚れていた。

「へえ」

「こんな歌を歌う人は初めてです」

ナバルとクラウも舞の歌を感心しながら見ていた。

そして彼女の夫の正道だけが、他の参加者とは違う視線で彼女を見ていた。

（これがアイドルとしての舞か・・・）

従兄妹として妻としての舞の顔は普段から見ている彼だが、アイドルとしての舞を直に見るのは始めてのことだった。

そして舞が「ALIVE」を歌い終わると、割れんばかりの拍手が起きた。

「ありがとう。いやあ、何時聞いても観客の拍手はたまらないわね・
・それじゃあ私は失礼します」

舞は華麗に退場し、夫の元へと向かった。

「お疲れ様。掛け値無しに良かったよ舞」

正道の言葉に、舞が驚く。

「!?!」

「どうした舞？」

「いえ。よく考えたら、あなたから直接そんなことを言われたことはまだなかったなあ、と思って」

「そう言えばそうだな。結局、俺が現役時代のお前のコンサートを
見に行ったことはなかったし。お前の歌を聴いたのは、家で愛に歌
ってやっていた子守唄位だったもんな」

「そう。だからさっきの言葉が、あなたがアイドルとしての私を褒
めてくれた最初の言葉・・やっぱり歌って良かったわ。私にとっ
ては1万人の観客の拍手や声援以上の価値があるわ」

舞が少々顔を赤らめながら言ったのに対して、正道の方は少しばかり呆れた声で答えた。

「おいおい。そりゃ言い過ぎだろ」

「全く、本当に乙女心の分からない人ね。そんなんだから、私があるあなたを「それ以上言うな。ここは大使館だぞ」

危うく放送禁止用語と自分たちの黒歴史を言おうとする舞を、正道は全力で止めた。

「冗談よ冗談」

「たく」

と激甘空間を作り上げている2人に対して、周囲からは厳しい視線と生温かい視線が注がれていた。そんな中で、彼女に近づく少女が1人いた。

「あ、あの？いいですか？」

「え！？あ、メイベルさん！？」

正道が声を上げた。声を掛けてきたのは聖女メイベルだった。

「あら、何かしら？」

「お礼を言いに来ました。素敵な歌をありがとうございました。」

「女王様に褒めていただけなんて光栄だわ。さすがトップアイドルの私」

「だから、自画自賛はやめろって・・・失礼しました。妻の歌を褒

めていただきありがとうございます」

「とっても素敵ないい歌でした。まるで心の中にまで染み渡るよう
で……」

「フフフ、ありがとう」

「舞さんは、アイドルでしたよね？」

「ええそうよ」

「じゃあ、日本にはあなたみたいに歌も踊りも上手い人がたくさん
いるってことですか？」

「そうね……アイドルと一口に言っても色々な人がいるわ。その
中でも私と同レベルの人間は、娘の愛を含めても一握りだわ」

「そうなんですか」

と、そこでメイベルはある単語に気づいた。

「うん？娘？……え！？お2人の娘さんて何歳ですか？」

「13歳です。いや、もうすぐ14かな？」

正道の言葉に、メイベルが驚愕の表情をする。

「ええ！？お2人ってどうみてもまだ30歳位ですよ？じゃあ、
結婚したのって」

「あ、それについて」そうよ！愛は私が16、正道さんが18の時の子供よ！！」

正道がぼかそうとしたのだが、舞が全てぶち壊した。

「くるあああ！？何女王様の前で堂々と言っんだ！！」

「いいじゃない。いずれわかることでしょう？」

ペロツと舌を出し、可愛げを出しながら返答をする舞。どこからどうみても子供である。

「お前のそのフリーダムさが俺には信じられねえ」

「え、ええと・・・」

「まあ、ぶつちゃければ私たちは10代で結婚して子供を授かった。そしてその子供は今やトップアイドルってことね。メイベルさんはこれから日本へ行くのよね？」

「は、はい」

舞のテンションに、メイベルもたじたじた。

「だったら娘に会うかもしれないわね。もし会ったらよろしく。娘は今頃彼氏といちゃいちゃしているだろうから」

「ええ！？」

「お前芸能記者が聞いたら卒倒するような発言の連発は止める！」

ちなみに舞はああ言ったが実際の所、愛と彼女を引き受けることとなった涼はまだ彼氏彼女の関係ではない・・・まだだ。

「いいじゃない・・・そう言えば、メイベルさんは恋人がいるのかしら?」

「え!?!わ、私は・・・」

メイベルは少し離れた場所にいるナバルをチラツと見た。

「はーん。あの子ね。格好良さそうな子ね・・・けど、正道さんと同じような雰囲気・・・鈍感臭がビンビン感じられるわ」

「!?!」

「図星みたいね。あなたも相当困ってるんじゃないの」

「アウアウ」

想定外過ぎる事態に、メイベルはの頭の中はショート寸前であった。そんな彼女に、舞が留めの一撃を放つ。彼女はメイベルの耳元に近づくと、囁いた。

「人生の先輩としてアドバイスをしてあげるわ。もっと積極的になりなさい。それでもダメなら・・・押し倒しちゃえばいいのよ」

ボン!?!?

ついにメイベルの精神回路がオーバーヒートし、彼女は放心状態

となった。

「め、メイベルさん！？おい舞！お前一体何を吹き込んだんだ！？」

「別に」

この後メイベルが復活するまでに10分ほど掛かった。

60日目早朝　ロクシエ連邦首都郊外　国際空港

「うわああ！？これが日本の飛行機なんですね？大きいなあ」

メイベルが目の前に止まっている飛行機を見て目を輝かせる。

「へえ、格好いいな」

乗り物大好きなナバルの評価も上々であった。

「これが我が国の国産旅客機MRJです。聖女メイベル」

操縦を担当する空自のパイロットが説明をする。

今回サクラス使節団が乗り込むのは、日本から遙々飛んできた国産ジェット旅客機のMRJの政府専用機だった。

「しかし、先ほど大きいと言われましたが、この飛行機は我が国が所有する旅客機としては小型に属する部類です」

メイベルはその言葉に、一瞬戸惑いを覚えたが、すぐに記憶の中からある事実を引っ張り出した。

「あ、そう言えば記録映像にももつと大きな飛行機が映っていたわよね・・・今回どうしてこの飛行機が使われることになったんですか？」

「それはロクシエの飛行場と我が国の飛行場に大きな差が有るためです。我が国の飛行場は基本的にジェット機・・・ジェット機の意味はわかりますか？」

「ええ。サクラスでも研究が進んでいますから」

「それなら話が早い。このジェットエンジンはピストンエンジンに比べて高速かつ高高度での飛行が可能です。しかしながら、後方への噴流のために滑走路はコンクリートで舗装されていなければならず、またその長さもプロペラ機に比べて着陸速度が速い分長くなります。このため、大型ジェット機ではロクシエの飛行場に着陸出来ないのです」

「なるほど」

「それに加えて、騒音の問題もあります。ジェットエンジンは騒音が大きく、以前この国へ飛んできた我が国の戦闘機や空中給油機のジェットエンジンの騒音に対して、ロクシエ市民から抗議が起きました。そのため比較的騒音の小さい飛行機を選ぶ必要があり、この機が選ばれたのです」

「そう言うことだったんですか」

技術に明るいメイベルはウンウンと頷く。しかし、あまりそちらの方に關心のないナバルは。

「うーん。小難しい単語ばかり並べ立てられると付いていけないなあ」

「ナバルウー」

自分の想い人の情けなさに、メイベルが声をあげる。

「まあいいわ。それで、予定では1回給油のために着陸するんですけどよな？」

「はい。この機は長距離型なんですが、それでも航続距離は3000kmですから。さすがに日本までは飛んでいけません。幸いロクシエ政府の厚意で、着陸可能な飛行場と燃料を用意していただけなので。日本への到着は、昼過ぎの予定です」

「わかりました。よろしく頼みますね。キャプテン」

「こちらこそ、聖女メイベルをお乗せ出来て光栄です」

「あの、その聖女メイベルというのは恥ずかしいので、名前だけで呼んでいただけますか？」

「はあ？・・・まあ、いいですが。それでよろしいのですか？」

「ええ、一行に構いません。むしろそうして下さい」

「わかりました。本当に日高君の言ったとおり、気さくな人だな・・・」

・では、乗ってください」

「はい」

メイベルたちサクラス使節団はMRJへと乗り込んだ。この際、体の大きなクリプトン卿が座席に座るのに苦労し、仕方がなく2人分の座席を1人分にして座ってもらおうと言う事態が起きた。

そんなハプニングがあったものの、サクラス使節団を乗せたMRJは予定通りの時刻に、荒木や日高ら日本大使館のメンバー、そしてロクシエ政府の人間の見送りを受けて東の空へと飛び立った。

MRJに乗り込んでからも、メイベルは目を輝かせていた。そして離陸の瞬間、メイベルのテンションはMAXに達した。

「うわあ！スゴイ加速！」

「ああ」

離陸の際の加速は、メイベルが知っているプロペラ機の物とは比べ物にならなかった。さらに、その後の上昇も凄まじいまでの急角度であるように彼女には感じられた。

「スゴイ、あつと言う間に雲の上へ抜けたわ」

「うちの国の飛行機とは大違いだな」

隣の座席に座るナバルも、素直に驚いていた。

「やっぱり日本の技術力は凄いわ・・・早く着かないかな」

「出発したばっかだぞ」

「もう。一々水を差さないでよ」

「わかったって・・・それにしても、まだ立てないのかな？」

「あのランプが消えるまではダメだって言われたでしょ。それまで待ちましよう。ほらほら、外の景色がとても綺麗よ」

メイベルは年甲斐もなく、キャキャとはしゃいでいた。

「うー。メイベルちゃんの隣が良かったです」

「クラウさんはいい加減諦めた方がよいですよ」

メイベルの一つ後の席ではあいも変わらずのクラウに、パセラが突っ込んでいた。

その後シートベルトのランプが消え、自衛隊員（乗員）が飲み物を乗客に振舞ったが、その際に通路を挟んで反対側の座っていたエミーが。

「お嬢ちゃんはジュースでいいかな？」

と言われてへこんだりしたが、一行を乗せたMRJは平穩無事な飛行を続け、途中給油をした後日本へと向かった。

W e l c o m e t o J a p a n ! 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

サブマリン876に氣をとられてしまい、パツとしない内容になりました。ごめんなさい。

W e l c o m e t o J a p a n ! 2 (前書き)

おかげさまで一周年。読者の皆様には感謝以外に言葉がみつかりません。

しかし、就活のストレス発散程度に考えていた小説がまさかの一番人気とは・・・どうしてこうなった!?

Welcome to Japan! 2

60日目早朝 小笠原諸島硫黄島 海上自衛隊航空基地

「ここがイオウトウですか？」

「殺風景で小さな島だな」

この日、トリステイン王国の女王アンリエッタとそのお供の人間たちは、硫黄島にある自衛隊の基地にいた。早朝に護衛艦「さざなみ」のヘリコプターで、同艦を離れて飛んできたのである。

硫黄島からは日本政府差し回しの飛行機で仙台空港へ向かう予定なのだが、それまでの待ち時間の間4人は基地の自衛官に連れられて、硫黄島を案内されていた。案内と言っても、基地から見える範囲で島を説明されただけであつたが。

さて、小笠原諸島の硫黄島はアンリエッタとアニエスが言ったとおり、殺風景な島である。島の南端に擂鉢山があるが、それ以外は荒涼とした土地が続ぎ、その中に今4人が立っている自衛隊基地があるだけだ。

「それに暑いし、なんか変な腐つたような臭いもするし」

「こいつは硫黄の臭いだな。昔家族旅行で行った温泉で嗅いだ臭いと同じだ。懐かしいな」

島内に漂う強烈な硫黄の臭いに、ルイズは顔をゆがめた。それに対して、才人は嗅ぎなれたわけではないが、嗅いだ経験があつたの

でそこまで強烈な忌避感は覚えなかった。

「この硫黄島は火山活動によって形成された島で、大きさは東西に8 km、南北に4 kmしかない小さな島です。本土からも1200 km離れており、水も出ないような島です。民間人はおらず、現在は自衛隊の基地しかありません」

付き添いの自衛官が、4人に硫黄島に関する説明をする。

「しかし、この島は70年近く前には我が国と太平洋を挟んだアメリカ合衆国との激戦地になった島なんですよ」

「本当に？こんな小さな島が？」

「特に何かあるわけでもないようだが・・・」

ルイズもアニエスも、こんな絶海の孤島なんか攻略して何の意味があるのか理解に苦しむ所であった。

「この島は日本本土から1200 kmの距離にあり、日本本土を攻撃するための前線基地としては絶好の位置にあっただんです。」

「ちよつとまで？1200 kmと言ったら、1200リーグだろ？そんなに離れた場所が前線基地？」

「まあ、そちらの常識ではそうでしょうが、70年前の戦争・・・太平洋戦争と呼ばれていますが、その時の戦争ではそれ位の距離を隔てて戦うのが普通だったのです。現に我が国を焼け野原にしたアメリカ軍のB29爆撃機・・・これは爆弾を積んだ飛行機ですが、その発進場所は日本本土から2500 km近くも離れたマリアナ諸

島と言う島でした」

「そんな距離から日本を攻撃出来たというのですか？」

「はい。そしてこの島の戦闘では、我が軍の兵士約2万1千名と上陸してきた米軍の兵士6万1千名が激しい戦闘を行い、双方合わせて4万名近い死傷者を出しました。特に我が軍は参加兵力の99%が戦死し、文字通り最後の一人まで戦って全滅したのです」

「……」

自衛官の言葉に、3人は驚きを超えて戦慄を覚えたようだ。このちっぽけで荒涼とした島で8万人の兵士が戦闘を繰り広げた拳句、4万人が死傷したなどは少しばかり信じられなかった。

「と言っても、もう70年近く前の話です。今は何もない火山島ですよ。もっとも、今後は国境の最前線に位置する島として、クロージアップされるかもしれませんが」

その自衛官はそう言うと笑った。

「俺も歴史の授業で習った覚えが少しあるけど……ここが戦場だったなんて想像が付きませんね」

同じ日本人である才人としても、硫黄島と言われてもピンとこない。

「だったら日本に帰ったらレンタルビデオ店で『硫黄島の手紙』と言うクリスト・イーストウッド監督の映画を見るといいよ。あれはいい映画だよ……と、そろそろ時間ですね。では、4人ともこち

らへ」

「もう、出発か。せっかく来たのに、これじゃあゆつくり観光も出来ないなあ」

「ハハハ、平賀君。この島で観光なんて無理だよ、見るものなんて過去の戦跡と慰霊碑位しかないんだからね。それに、この島には大戦中の不発弾がそこかしこに残っていて、歩き回るなんて危険すぎるよ」

「え！？マジですか！？」

「マジだよ・・・それに、お姫様方は早い所この島から離れたいみたいだしね」

アニエスはそれ程でもなかったが、アンリエッタとルイズは島の話聞いてから、表情が優れなかった。ただでさえ、硫黄の臭いや暑さで不快だと言うのに、数万の兵士が死んだ場所と聞けば、長居したいとは思わないだろう。

「ああ、なるほど」

才人も納得するかなかった。

60日目午後 日本 静岡空港

「やっと着いた！！ここが日本なのね！？」

ロクシエ首都を飛び立ってから8時間（途中給油で2時間ほど着陸）メイベルは記念すべき日本上陸第一歩を静岡空港に記した。

大統領兼女王が地方空港に舞い降りると言うのもおかしな話であるが、東京に近い位置で他に降りられる空港がなかったのだからしょうがない。

使節団の団長がクリプトン卿であり、彼が日本政府の人間と挨拶しているのをいいことに、メイベルはきよきよしながら、案内された空港ターミナルを見ていた。これでは完全なおのぼりさんである。

ただし、幸か不幸かこの時日本のマスメディアのカメラは出迎えた小泉副首相と挨拶するクリプトン卿に照準を合わせており、おのぼりさん状態のメイベルに気を向けるカメラはほとんどなかった。

彼女にカメラの照準が合わせられたのは、一行が移動を開始してからだ。

「メイベル、行くぞ！」

メイベルが色々なものに興味を示している間に、クリプトン卿は挨拶を終えていた。ナバルの声に、ようやく彼女はそれに気づいた。

「あーん！待ってよ！！」

移動を開始した一行に、新聞社やテレビのカメラが向けられる。

「スゴイ数の記者ね」

ところが、付き添いの外務省職員の言葉にメイベルは驚かされる。

「それでも、防犯上の理由から入場に大きな制限を掛けているんですよ。もし入場に制限がなかったら、おそらくこの3倍は集まっていますよ」

「ええ！？日本にはそんなに新聞社があるんですか？」

「まあ、集まっているのは新聞社だけではないでしょうけど。結構な数があるのは間違いありませんね」

空港を出ると、一行は日本政府が用意した車で移動を開始する。

「確か、私たちはこれから鉄道の駅へ行くのよね？」

メイベルの間に、同乗している外務省の職員が答える。

「そうです。皆さんにはこれから掛川駅で新幹線に乗車していただき、そこから首都の東京へ向かっていただきます」

「新幹線は時速200km以上で走る高速鉄道でしたね・・・楽しみだなあ」

メイベルもナバルも、新幹線については朝倉（日本国サクラス使節団団長）から説明を受けていたので、知識として知っていた。

しかし、ナバルは懐疑的であった。

「けど、本当にそんなスピードで走れるのか？脱線するような気がするぞ」

それに対して、外務省の職員は余裕であった。

「それは実際に乗っていただければわかりますよ」

一行が掛川駅に到着したのは30分後であった。

ちなみに、この時の移動経路などはテロや妨害に備えて事前には一切公表されず、さらに先導するパトカーや一行を乗せた車のドライバーに事前に予告されていたコースを、出発直前に2回も変更する念の入れようであった。

日本政府としては、ここで外交的な失態に繋がる可能性は排除しておきたかったのだ。

掛川駅に到着したサクラス使節団の一行は、ここでも数多い記者や市民に出迎えられた。もちろん、彼らが通る道はちゃんと確保されており、何の問題もなく駅構内に入り東京方面の新幹線ホームに上がることが出来た。

既にエスカレーターや電光掲示板、自動改札機と言った施設は空港で見えていたが、メイベルたちはここでもそれらに驚かされた。

そしてホームに上がったところで、メイベルはある物に気づいた。

「この壁みたいな物はなんですか？」

その質問に、駅の職員が答える。

「これはお客様がホームに転落するのを防止するためのものです」

「けど、これじゃあ列車に乗れないんじゃない？」

「大丈夫です。列車が到着したときは、入り口の部分が開きますから・・・そろそろ東京行きなのぞみが通過する頃です」

「のぞみ？」

「この東海道新幹線には最速の「のぞみ」そして「ひかり」と各駅停車の「こだま」の3種類の列車があります。この駅には基本的に「こだま」しか停車しませんので、通過列車の「のぞみ」は真ん中の通過線を通過します」

まもなく、風きり音と共に通過線を「のぞみ」が通過していった。16両編成の長い列車があつと言つ間に通過していく光景に、サクラスから来た面々は目を丸くする。

「は、速い!？」

「これはスゴイ」

さすがのナバルやクリプトン卿も驚きだった。

「皆さんも間もなく体験できますよ」

駅員の言葉通り、すぐにホームに列車の入線を告げるアナウンスがなった。

一行が乗るのは、もちろん今回のために日本政府とJRが用意した団体列車である。

列車が停車するとまずはホームドアが開き、続いて車両のドアが開いた。

「では、どうぞ皆さん。御乗車ください」

サクラス使節団の一行が案内されたのは、グリーン車であった。

「この緑のマークはなんですか？」

メイベルが扉横のマークを指差す。

「この車両はグリーン車と言って、他の車両よりも良い車両なので
す」

「そうなんですか」

列車にはサクラス使節団の他に、外務省の随員や護衛役の人間も
乗り込んだ。もちろん、その中には一部監視役の人間も乗り込んで
いた。

特に、エミーのことは朝倉からロクシエ大使館経由で情報がもた
らされており、彼女はマークされていた。

他にメイベルやナバルも当然最初はマーク対象であったのだが、
既にこの時点で日本政府は危険な人物とはみなしていなかった。何
故ならサクラスでもロクシエでも、彼女は天衣無縫の少女に過ぎな
かったからだ。はつきり言って、監視するだけ無駄であった。

日本のみならず、ロクシエのスパイ関係者も「どうして彼女が聖

女と呼ばれるのか、非常に理解に苦しむ」とコメントしている位であった。

しかし、その無邪気さこそが彼女の原動力であったのだ。

それはともかくとして、サクラス帝国の使節団の一部メンバーの動きを内調をはじめとする情報機関がマークしていたのは事実である。

そんなことになっているとは露知らず、メイベルは新幹線に乗り込むなりはしゃぎ、動き出すとその興奮はMAXに達した。

「見てみてナバル！動き出したわよ・・・うわ！スゴイ加速！！それに、この音も独特ね。サクラスでも電車の研究を進めたほうがいかもね・・・」

しかし、付き添う側はもううんざりであった。

「黙れ！！」

シューン・・・

(そこまで言わなくてもいいのに)

出鼻を挫かれたものの、メイベルをはじめとするサクラス使節団は東京へと向かった。

W e l c o m e t o J a p a n ! 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

さて、今回も数箇所ネタを仕込んでいます。わかった人にはスゴイと言ってあげましょう。

あと、思った以上に舞さんに反響が!? 凄いで、さすがオーガ!

ちなみに、その舞さんはロクシェでの初めての夜に旦那さんと・
・これ以上は明言を避けましょう。

そして活動報告にもあったとおり、メイベルとゼロ魔関係者の平賀家訪問と京王線乗車シーンを妄想・ゲフンゲフン。構想中です。

あと、外伝も早く書き進めたい所です。

Welcome to Japan! 3

60日昼前 日本 仙台空港

硫黄島を予定通りMRJの政府専用機で出発したトリステインからの一行は、無事に仙台空港に到着していた。こちらでも、彼らは外務省の職員と、待ち構えていた記者たちの歓迎を受けることとなった。

「ようこそアンリエッタ女王陛下、日本へ。皆様を心より歓迎いたします」

「こちらこそ、お世話になります」

職員とアンリエッタが握手した瞬間、一斉にシャッターを切る音がターミナル内に響き渡った。

「ねえ才人、一体何なのよあの連中？」

ルイズが不機嫌そうに尋ねた。

「ありゃ、新聞社やTV局だね。そうになると、もしかして俺たち全国に顔を知られることになるかも」

「どつ言っことよそれ？」

ルイズは既にカメラの存在は知っていたが、そのカメラを自分たちに向けてくるマスコミという存在は知らなかった。やたら自分たちに視線とカメラを向けてくる彼らを、彼女は不快に感じていた。

これでフラッシュが焚かれていたら、もっと彼女は不快に感じたかもしれない。しかしながら、静岡に付いたサクラス使節団とは違い、こちらでは入場規制に加えてカメラのフラッシュも規制されていた。

もちろん、これは既にトリステインから同国の技術レベルが報告されたことによる対策である。アンリエッタたちを刺激しないようにしたのだ。

そんなことは露知らず、才人はルイズに新聞やTV等について説明する。トリステインの出発前に一応勉強はしていたのだが、早々簡単に覚えられる物ではなかった。

アンリエッタとの挨拶が済んだ外務省職員は、続いて才人に声を掛けた。

「お帰りなさい平賀才人君」

「ありがとうございます。けど、なんか浦島太郎にでもなった気分です」

才人がトリステインで過ごした時間は1年あまり。対して日本の時間は自分が消えてから10年も進んでいる。仙台空港にある物だけ見ても、才人にとっては文字通り浦島太郎の気分であった。

「まあ、これから少しずつ慣れていけばいいよ。時間はたっぷりあるんだし」

「そうします」

「ではアンリエッタ陛下に皆さん、移動しますのでこちらへどうぞ」

外務省職員や空港関係者に案内されて、4人は空港のターミナルビルから隣接する仙台空港鉄道の仙台空港駅へ移動した。ホームには団体のマークを出している2両編成の電車が止まっていた。

「我々はこちらの電車で、まず仙台駅へと移動します」

初めて見る鉄道車両の姿を、アンリエッタは興味深げに見る。

「まあ！これがデンシャと言う乗り物なのですね？大きいですね」

陸上を走る乗り物としては馬車や日本から持ち込まれた自動車しか見たことの無いアンリエッタには、2両編成の電車も大きく見えた。

一方東京出身の才人はといえば。

「うわあ、2両だなんて田舎だな」

と全く違う感想を口にしていた。

「それでは御乗車下さい」

仙台空港鉄道の職員に案内される形で、4人は青色の車体の電車に乗り込んだ。乗り込むと、4人は2つのボックスシートに案内された。ボックスシートは2人掛けの座席が対面式に配置されており、進行方向に対してトリストインから来た4人が、反対側には案内役の外務省職員と仙台空港鉄道の職員が乗り込んだ。

ちなみに、座り方はアンリエッタとアニエス。そして才人とルイズだ。さすがに護衛役のアニエスを側に置かないのはマズイと言う判断だった。

「この椅子、なんか硬いわね？」

腰掛けたルイズが文句を言う。

「仕方が無いよ。何時間も乗るわけじゃないんだし」

「仙台駅まではおよそ20分ほどの行程です。しばし御辛抱ください」

相対する形で座った外務省の人間がとりなした。

まもなく、ホームに発車を知らせるチャイムがなる。いきなり音楽が鳴り始めたので、アンリエッタら3人は目を丸くした。対して才人は。

「あ、あつたなこんなの。懐かしいな」

程度の感想であつた。

まもなく、チャイムと共に扉が閉まった。そして電車はモーター音を響かせながら動き始めた。ここでもアンリエッタらは驚いた表情をする。

「随分と静かですね」

「それに乗り心地もよい。先ほど乗ってきたヒコウキと言う乗り物も良かったが、こちらはそれ以上だな」

さらに2人を驚かしたのは、列車が出発してすぐに真っ暗な空間へと入ったことだった。

「え!？」

「御心配なく。滑走路を超えるためのトンネルを走っているだけです。すぐに地上へ出ます」

空港鉄道の職員が言ったとおり、列車はすぐにトンネルを抜けて高架線へと上った。そして列車はスピードを上げていく。

「随分速いですね。空港がもうあんな所に」

アンリエッタが窓の外を見ると、出発した仙台空港から短時間で随分と離れていた。

「そうですね陛下。乗り心地もそうですが、馬や馬車などとは比較になりません」

「我々が元いた世界では、馬車は50年以上も前に主要な交通機関としては廃れてしまった存在でした。ロクシェやサクラスでは馬車を使っている所もあるようですが、両国とも既に鉄道や車が普及し始めています」

外務省職員の言葉に、アンリエッタは表情を曇らせる。

「そうなる、我が国だけが出遅れてしまっていることでしょうか」

「？」

「そうですね。少々失礼なことですが・・・」

「構いません」

「日本から見ればトリスティンは魔法こそ持っていますが、それ以外で見れば数百年も遅れた後進国です」

「・・・そうなるでしょうね」

それについては、アンリエッタも出発前から覚悟していたことであり、既に本多からも言われていることだった。しかし、日本でもそう思われていることにショックは隠せなかった。

「陛下」

「よいのですアニエス。遅れているのならば、国を上げて追いつくだけです」

「そうですね。日本もそうやって発展してきた国です。トリスティンもきつと発展できますよ」

外務省職員はそう言った。彼にしてみれば単なる社交儀礼か応援の積りであったのだろうが、アンリエッタが後に起こす行動は、こうした言葉が引き金になったのかもしれない。

一方通路を挟んで反対側の座席に座る才人とルイズとは言えば。

「随分家がたくさんあるのね」

「この付近は、この鉄道の開通に合わせて再開発が進んだ地域ですから。現在も宅地開発が進んでいますよ」

連絡鉄道の職員がルイズに言う。

「けどルイズ、東京はもつと凄いなだぞ。高いビルも多いし、家だつて今見えている数の何倍もあるんだぞ」

「そ、そう言えばあのエイゾウで見たトウキョウはそうだったわね。けど、ちよつと信じられないわね。今見えている家の数だつて、トリストニアより多そうじゃない？」

「そりゃまあ、東京ほどじゃないけど仙台だつて大きな街だし」

こちらは外の風景見物が中心であった。

列車は名取の駅で東北本線に入り、そのまま仙台駅へと向かった。もちろん団体列車であったためノンストップで、20分ほどで仙台駅のホームへと滑り込んだ。

「それでは、ここからは新幹線へと乗り換えます。どうぞこちらへ」

外務省職員に案内されて、一行は在来線ホームから新幹線ホームへと移動した。

この移動の際に大変だったのは、アンリエッタたちが慣れないエスカレーターに中々乗れないことであった。案内したJRの職員は階段を極力使わせない（ホームから在来線コンコース。さらに新幹線ホームと高低差が激しいため）ためにこうしたのだが、アンリエ

ツタモルイズもアニエスまでもが動く階段に驚き、最初立ち止まっていた。

それでも才人をはじめとする他の人間が手本を見せたことで、何とか乗れた。

そんなトラブルもあったものの、一行は無事に新幹線ホームへと移動した。そこには既に、緑色も鮮やかな列車が待っていた。

「うわあ！これは初めて見るな」

見たことも無い新幹線の姿に、才人が感嘆の声を上げる。そんな彼に、外務省職員が説明する。

「この列車は最新型のE5系新幹線だよ。今日はないけど、一部の区間では320kmで運転する国内最速の列車だよ」

「スゲー、そんなのに乗れるんだ」

「しかも君たちが乗るのはグランクラス・・・飛行機で言えばファーストクラスだよ。普通だったら余程のことがない限り乗れないよ。運が良いね」

「ファーストクラス！？それは楽しみだなあ」

「才人！」

「うん？何？」

「座る場所なんだけど、私の隣でいいわよね？」

「ああ」

と才人は答えたが、するとアンリエッタから冷たい視線が。

「陛下、どうか堪えてください」

と言うアニエスの言葉ですぐにアンリエッタはその視線を向けなくなつたが、才人としてはどうにも居心地の悪さを感じざるを得なかつた。

「き、君も大変だね」

外務省職員も思わず気遣いの言葉を掛けてしまう。

「ええ」

そんな感じで、小さなトラブルが幾つかあつたもののトリスティン一行を乗せた東北新幹線は当初のダイヤ通りに仙台を離れて東京へと向かつた。

その道中アンリエッタやルイズは新幹線の速度に驚き、さらに豪華なグランクラスの旅に満足そうであつた。そして首都圏に入ると、仙台以上の家やビルの多さに驚いていた。

60日目午後 東京駅 東海道新幹線ホーム

「ここが東京！？列車からも見えたけど、本当に大きな街ね！駅も

大きいし、ビルも多いし！」

駅に降りてもメイベルは元気一杯であった。彼女は散々車内でハシヤイでいたにも関わらず、その元気は衰えという言葉を知らない。

ちなみに、ただはしゃいでいるようでしっかりと見て考えているのが彼女の凄い所だ。車内で見たトイレやリクライニング席などの諸設備などをしっかり見逃さず、後にサクラスに帰った時には早速それを生かすよう計らっている。

「お前って奴はなあ」

だが相棒のナバルからしてみれば、いい加減にしてほしい所であった。その時、彼の視線がある物に止まった。

「あっちのホームは何だ？」

「あれは東北新幹線のホームですね。東京から北へ向かう新幹線のホームです」

「何で別々なんだ？」

東海道新幹線と東北新幹線のホームは完全に分けられており、ナバルにはそれが気になった。すぐに付き添いのJRの人間が説明する。

「運営している会社が違いますし、ここより北は大きく気候も変わってしまうので、設備や車両が全く違うからです」

「ふーん・・・それにしても、あの緑の奴は格好いいな」

ナバルが指を指したのは、E5系であった。

「あれは最新型ですね。多分、トリステインの女王陛下を乗せてきた電車だと思います」

その言葉に、メイベルが反応した。

「トリステイン？確か日本の南に現われたって言う……そう言えばほとんど同じ時刻に着くとか」

「ええ。さ、コンコースへ移動しますよ。お2人ともこちらへ」

既に他のメンバーは日本側の案内の元、階段のほうへと向かっていた。

「はい」

職員に促されて、2人も慌てて後を追った。

W e l c o m e t o J a p a n ! 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

なお作中の仙台空港鉄道は、東北大震災で仙台空港駅やトンネルが被害を受けて現在も運休中だそうです。1日も早い運行再開を願います。

次回2人の姫様の邂逅です。

「目と目が逢う瞬間好きだと気づいた」

W e l c o m e t o J a p a n ! 4 (前書き)

なんとか気持ちを切り替えて書きました。なお、後半のA・Hさんのキャラについては、苦情などは一切受け付けないのでよろしく
お願いします。

Welcome to Japan! 4

60日目午後 日本 東京駅丸の内口

この日、東京駅丸の内口は久しぶりの活気に包まれていた。転移後相次いだ企業の休業等の影響で、丸の内のビル街に本社する人間の数が目に見えて減ってしまっていた。（と言うよりも東京自体、外部への流出で大分人が減った）

しかしながら今日は多くの報道関係者や政府関係者、そして警備のための警官や野次馬が丸の内口周辺を埋めていた。もちろんその要因は、サクラスからの使節団とトリステインのアンリエッタ女王たちがここに降り立つからだ。

静岡経由でやってきたサクラス使節団は東海道新幹線の改札口から、そして仙台経由でやってきたアンリエッタ女王一行は東北新幹線の改札口からそれぞれ出てきた。

東海道新幹線はJR東海、東北新幹線はJR東日本とそれぞれ別会社であるため、改札口は別々となっている。なお駅長もそれぞれ別々にいるので、双方共に駅長が出迎えている。

先に丸の内口に着いたのはサクラスからの使節団であった。

「ようこそ皆様。東京へ。私は日本国政府の外務大臣である木戸孝允です。遠路遙々御苦労様でした」

「使節団長のバロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。こちらこそ、これから短い間でしょうが、世

話になりますぞ」

まず2人が歴史的な握手を交わした。

その光景をメイベルは・・・チラッと見ただけでその視線は周辺の建物や施設、さらには人々の姿に注がれていた。

「すごいわ！こんなに大きなビルばかり建っていて、しかも人も多いわね」

「メイベル、今クリプトン卿が挨拶しているんだから、静かにしているよ！」

「わかってるって・・・あら？」

「どうした？・・・で、あれは？」

メイベルとナバルが見つけたのは、自分たちと同じく案内役の人間と護衛役の人間に囲まれてやってくる集団（と言っても4人だけの姿であった）。

「お！トリステインのアンリエッタ女王陛下も到着されたようです」

木戸の声に、サクラス使節団の視線は追いついてきたアンリエッタたちに注がれた。

「アンリエッタ女王陛下、お待ちいたしておりました。日本国外務大臣の木戸孝允です」

木戸が名乗ると、アンリエッタは着ているドレスの両端を摘み、

膝を少し折って挨拶する。

「お初にお目にかかります木戸大臣。トリステイン王国女王のアンリエッタ・ド・トリステインです。この度はお世話になります」

彼女の動作一つ一つに気品があり、アンリエッタがこの如何にもお姫様の動作をした瞬間を撮影した写真は翌日の朝刊を飾り、映像はニュースでも取り上げられることとなる。

木戸大臣は若い（日本では未成年）彼女が気品漂う動作を行ったことに感心していた。また、一緒に見ていたクリプトン卿も「これは」とアンリエッタの動きに思わず声をあげていた。

「アンリエッタ陛下、御紹介します。こちらはサクラス帝国使節団団長のクリプトン卿です」

「バロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。お目に掛かれて光栄です。以後お見知りおきを」

「こちらこそ、よろしく申し上げます」

2人も握手を交わした。

その様子を見ていたナバルはメイベルに向かって言う。

「お前とは大違いな位に、女王様らしい人だな」

「た、確かに自覚しているけど、何も言わなくてもいいのに・・・
けど、本当に綺麗な人だね。白いドレスが良く似合ってるわ」

メイベルも思わず溜息を吐いてしまうほど、アンリエッタのドレス姿は輝いて見えた。

パセラや他の随員たちもメイベルと同じように、まるで本から出てきたようなアンリエッタの容姿に見とれていた。ただしクラウダだけは「やっぱりメイベルちゃんの方が可愛いです」と歪み無い発言をしていた。またエミーは「羨ましい・・・」と別の意味でアンリエッタに見とれていた。

一方トリステインの随員である才人らの反応はと言えば。

「またスゴイ人だな」

「まるで卵ね」

「あんなのが代表で大丈夫か？」

とクリプトン卿を扱き下ろしていた。そのため、すぐに興味は失せてしまった。アニエスだけは護衛役のため付近を警戒していたが、才人とルイズは見慣れぬ格好のサクラス使節団の随員達に視線を移していた。

そして、すぐに2人は随員の中に自分たちと同じ位の年恰好の間を見つけた。

「へえ、向こうにも俺たち位の人がいるんだ」

「本当ね。あの剣を持っている2人は服も格好言いし、才人よりも男前ね」

「やかましい！たく、こんなことなら俺も『デルフ』を持ってくるんだっ」

才人は自身が武器を持っていないことを嘆いた。

今回の旅の前に、才人は相棒である喋る剣の『デルフリンガー』を持ってこようか迷った。『デルフ』の方は散々行きたいと嘆願したが、既に外の世界では魔法が通じないことがわかっており、どんな悪影響があるかわからないので、結局置いてきた。

「一生恨んでやる！！」

と言う『デルフ』の声を無視して日本へと帰ってきたが、今更ながら持ってきたほうが格好良かったのではと思わずにいられなかった。才人が現在持っている武器は、腰に差した短刀だけである。

なお、サクラスもトリステインも護衛役の武器はそれぞれ持ち込みを許可されている。もちろん、日本側からは無闇に出さないこと、特に民間人が見ている前で出さないと言う条件が付けられていたが。

トリステインのアニエスはこれに不満で最後まで抵抗したが、結局アンリエッタのとりなしで諦めている。彼女は日本に銃刀法と言う法律があり、民間人が武器を持ってないと聞いて「それでどうやって身を守るんだ？！」と本気で心配した位だ。

それはともかくとして、才人とルイズはサクラス使節団の若いメンバーを見ていたが、すぐに相手も自分たちに視線を注がれていることに気づいた。その瞬間、才人とナバル、ルイズとメイベルの視線が逢った。

「「!？」」

「「!？」」

(こいつ!?)

(出来る!?)

互いに剣士として戦場を潜り抜けてきた才人とナバルは、一瞬の内に相手がそれなりのやり手だと感じた。なお、実際の所2人も出来る剣士だ。

ナバルは剣術大会で上位入賞したのみならず、フライパンだけで10人近い敵を撃破した経験を持つ。また才人も『ガンダールヴ』と言う魔法ワザを借りこそしたが、7万の敵に単身突撃した経験を持ち、またアニエスから剣の手ほどきも受けているので、今なら『ガンダールヴ』なしでも戦える。

一方ルイズとメイベルはと言えば。

(な、なんのかしら?今まで会ったことのない目をしてるわね)

(へえ、私と同じ髪の色の人がいるんだ)

と互いに頓珍漢な感想を浮かべていた。ちなみにルイズの感想はメイベルが純粹無垢すぎる目をしていたため出たものだ。

そんな感じで数秒ほど睨みあい(?)していたが、好奇心旺盛なメイベルが行動を起こした。

「初めまして。私はメイベル・ヴァイスと言います。よろしく」

「え！？あ、御丁寧にどうも。平賀才人です」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブ・ランド・ラ・ヴァリエールよ、よろしく」

さらにメイベルが続いてナバルもやってきた。

「メイベル勝手に行くなよ？」

「いいじゃない。いずれ挨拶するんでしょうから。ナバルも自己紹介なさいよ」

「わかったよ。ナバル・フェオールだ。近衛中隊長で、今はここにいるメイベルの護衛をやっている」

「近衛ですって！？なんでそんな人が守ってるのよ」

「女王で大統領だからだろ？」

「「は！？」」

才人とルイズが意味がわからず、首を傾げる。

「だから、このメイベルは西アルテースの女王で南アルテースの大統領なんだ。俺はその護衛」

「「……ええ！？」」

2人の叫びに、周囲の人間が何事とばかりに振り向いた。

60日目午後 東京とある住宅地

住宅地の中を、1人のブレザーを着た少年が家路に着いていた。そんな彼らの後ろから、猛スピードで走ってくるセーラー服の少女が1人。

「涼さん!!」

「あ、愛ちゃん。お帰りなさい」

秋月涼は後からやってきた日高愛と並んで歩く。

「えへへへ、涼さんと一緒に帰りたくて慌てて走ってきました」

「アハハハ。愛ちゃんは本当に元気だね」

「それが取り柄ですから!さ、一緒に帰りましょう!」

「う、うん」

愛のテンションに振り回されながらも、涼は笑顔を絶やさない。

「それにしても、涼さんと一緒に毎日登下校できるなんて夢みたい
です」

母親の日高舞が大使館員となった夫と共にロクシエへ行ったため、

現在愛は涼の家に居候中であつた。そのため、途中までの道を共に登下校することとなつた。

「まさか愛ちゃんが家に来るなんて思わなかつたしね」

すると、愛が表情を暗くする。

「・・・涼さんは、私が一緒に家にいるのは迷惑ですか？」

「え！？迷惑だなんて！？そんなことはないよ。妹が出来たみたいで楽しいよ」

「そ、そうですか・・・」

(妹か・・・涼さんはそつちの方面奥手だからなあ・・・ここはやつぱり、涼さんのお父さんとお母さんが居ない所を見計らつて、ママに言われたとおりにするしかないかなあ)

「愛ちゃん、今何か不穏なこと考えてなかつた？」

「え！？な、何も考えてませんよ。きつと涼さんの気のせいですよ」

「だつたらいいんだけど」

その後2人は歩きながらお喋りをはじめた。愛が先に口火を切り、今日学校であつたことを話した。そして愛の話が終わると、涼が自分の学校の話をしはじめた。

「今日先生が言つてただけど、明日僕の学校に転校生が来るらしいんだ。だからクラスの皆が喜んだんだ。ずっと出て行くばかり

だったから」

「私の学校も、転移の後で友達が結構転校しちゃいました」

転移後都市圏では燃料や食料に対する不安と、多くの企業が軒並み開店休業となったため、地方の実家や親戚を頼って流出する人々が後を絶たなかった。このため、ヒドイ所ではクラスの4割が転校すると言う異常事態まで起きた。

燃料と食料が比較的落ち着いてきた現在、東京へ戻る人もポツポツと増えてきてはいるが、そうした不安が払拭されてはいないので、全ての人が戻るまでいましばらく時間が掛かりそうであった。

「それにしても今6月ですよね？こんな時期に転校生なんて珍しいですね」

愛が首を傾げる。

「うん。なんでも急な受け入れだったんだって。ちなみに、女の子2人らしいよ」

その途端、愛の脳髄に電撃が走った。

(何かとても厄介な予感がする・・・強力な敵が現われる予感が・・・ここは先手を打たないと)

「あの涼さん？」

「うん。何？」

「今度のお休み、一緒に出かけてもらっても良いですか？」

「うん。その日は特に予定もないし。いいけど」

「ありがとうございます！」

（やった！）

愛は心の中でVサインを作った。

W e l c o m e t o J a p a n ! 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

W e l c o m e t o J a p a n ! 5 (前書き)

またもや舞さんのターン。そしてAさんのキャラは、アニメ版のあるシーンは延長した妄想です。さすがに原作でもあんな発言はしていませんからね。

Welcome to Japan! 5

60日目午後 日本 東京

「ああ、恥ずかしかった」

「一生分の恥を搔いたような気分だわ」

東京駅からホテルへ向かう車中で、才人とルイズは先ほどのことを思い出しながら顔を赤くした。メイベルの言葉に驚いた2人の叫びによって、あの場にいた多くの人々の視線を浴びてしまった。もちろんアンリエッタやアニエスにもだ。

「多分明日の朝には・・・いや、もしかしたら夕方の方のニュースでやるかも。ハー・・・全国のお茶の間に醜態をさらしたかも」

「言っている意味はよく分からないけど、つまりさらに恥ずかしいことになるかもしれないってことはわかったわ」

「あー、家に帰るのが憂鬱になってきた」

と2人は己の失敗を嘆いていたが、実際の所2人の失敗は無駄にはならなかった。これがわかるのは、もう少し後のことだ。

「取りあえず、後で姫様やあのメイベルと言う人にも謝っておきましょっ」

あの後、すぐに移動となってしまうメイベルやナバルと話すどころか、驚いたアンリエッタたちにも満足に謝ることが出来なかった。

「うん、そうしよう」

2人は互いに頷いた。

アンリエッタらとサクラスからの使節団が泊まるのは、同じホテルであった。これは警備と準備期間の結果であった。

「それではルイズさん、何かありましたらその電話でお呼び下さい。係りの者がすぐに参りますので」

「ありがとうございます」

「では」

ホテルの客室係はそう言うと、扉を閉めた。

「ふう・・・ここが東京なのね。本当にスゴイ街ね。トリスタニアなんか目じゃないわ」

窓の外に見える高層ビル群を見ながら、ルイズは溜息をついた。

「それにしても、今日は色々な意味で疲れたわ」

そう呟くと、ルイズはベットに倒れこんだ。船と飛行機を乗り継いででの長旅、東京駅での醜態、さらにホテルに着いたあと色々な細々な設備に関する説明を受けたのだから、疲れないはずがなかった。

何時の間にかルイズは眠ってしまい、次に起きたのは部屋の電話が鳴った時だった。

「うっん？・・・うるさいわね。ええと、確かこのジュワキを上げるんだったわよね？」

ルイズは先ほど受けた説明を思い出し、電話を取り上げた。

「誰？」

日本人ならもしもしと言うところだろうが、電話を使うのは初めてだったのでもちろんそんな言葉を彼女は知らなかった。

「あ、やっと出た。ルイズ、寝てたのか？」

受話器の向こうから才人の声が伝わってきた。

「そうだけど？」

「起こしちゃって悪いけど、これから夕食だっさ」

「え！？嘘？」

ルイズは部屋の中に設置されている時計を見た。

「いけない！すぐに支度するから！」

「ああ。部屋の前で待ってるから」

ルイズは受話器を置くと、洗面台の鏡の前に行くと言っている間に、乱れた服を簡単に直した。さらに、顔を洗おうとするが。

「ええと……どうすれば水が出るんだっけ？」

水の出し方がわからない。行きに乗ってきた護衛艦や飛行機の中のそれとは違うタイプであるため、戸惑ってしまった。

「うーん……しょうがない、省略！」

ルイズはそのまま部屋の入り口へと走り、扉を開けた。するとそこには、才人とアンリエッタにアニエス、そして案内役のホテルの客室係が立っていた。

「ごめんなさい！遅くなりました」

「いや、大丈夫だよ」

「眠っていたそうですね。起こして申し訳ありません」

「さ、行くぞ。相手を待たせては失礼だからな？」

「相手？」

アニエスの言葉に、ルイズが首を捻る。

「我々の来訪を歓迎してくれる日本政府の人間と、サクラスの使節団だ」

「え！？あの人たちも一緒なの？」

「ええ。本来は別々に食事を摂る予定だったのですが、私が無理言
つて頼みました。そしたら日本政府もロクシエ使節団も快く諒解し
てくれました」

アンリエッタが満面の笑みを浮かべながら言う。

「そうだったんですか」

「さ、陛下。行きましょう。案内お願いする」

「はい、こちらへどうぞ」

客室係の案内を受けて、4人は食堂へと移動する。

ちょうど同じ頃。2階上のサクラス使節団のメイベルの部屋では。

「メイベル、早く行きましょうよ！」

「うん、ちょっと待って。これ見終わったらすぐ行くから」

メイベルは先ほどからテレビに釘付けだった。テレビと言っても
ブラウン管のそれではなく、日本では既に実用化されて日が経って
いる液晶テレビだ。メイベルのその構造に興味深々であった。さら
に、ちょうどやっていた夕方のニュースの特集が「新世界で活かせ
る日本の技術力！」であったから、余計離れたくないらしい。

もし数分程ズレしていたら、メイベルたちの来訪を告げるニュース
がやっていたのだが。

「日本の技術はやっぱりすごいわね。あのシールドマシーンて言う機械は是非とも欲しいわね。それに汚れた水を綺麗に出来るシートとか、人工的に野菜を作る技術とか、凄すぎるわ。これは小麦や大豆を彼らが欲しいだけ売っても買っべきね」

テレビ番組を見ながら1人興奮するメイベルを見て、パセラは天を仰ぎたくなった。

「またメイベルの悪い癖が出たですう。もう、これじゃあ何時まで経っても行けないじゃないですか！」

5分後、パセラが呼んだナバルによって拳骨を喰らうまで、メイベルは1人興奮していた。

60日目午後　ロクシエ　連邦首都郊外　シュルツ邸

「お待ちしていました日高さん」

「奥さんもようこそ！」

「こんばんわヴィルさん、それにアリソン。夕食に呼んでいただきありがとうございます」

シュルツ邸の玄関に立った日高正道二佐は、出迎えたヴィルとアリソンに礼を言う。この日彼と舞は、シュルツ夫妻から夕食の誘いを受けたのであった。

「あら、奥さんのこと呼び捨てなの？」

「そう呼んでくれて言われたから」

「初めまして。アリソン・シュルツよ。よければ奥様もアリソンと呼んでくれていいわよ」

「あら。こちらこそ初めまして。日高正道の妻の日高舞です。しばらくこちらに住むので、今後ともよろしくお願いします。そして私のことも、別に呼び捨てでもいいわよ。特に奥さんは」

アリソンと舞の目が逢う。

「・・・」

「・・・」

2人視線を数秒合わせていたが、すぐに互いに不敵な笑みを浮かべて瞳を輝かせる。

(アリソンの瞳がキラキラしている・・・)

(舞が何か面白そうな物を見つけた表情している・・・)

(嫌な予感しかしない！)

夫である2人は、妻達から感じられる良からぬ空気に警戒した。

内心の不安から逃げるように、正道は話題を変えた。

「ところでヴィルさん、トレイズ君とリリアさんは？」

「2人はまだ学校から帰ってきてませんよ」

「確かリリアさんが娘さんで、トレイズ君は居候中だったわよね？」

舞が正道に聞いたことを思い出す。

「そうよ」

「ふーん。早く会ってみたいわね」

「すぐに会えますよ。さ、お2人ともどうぞ」

「「お邪魔します」」

客間に通された2人は、トレイズとリリアが帰って来るまでの間、お茶を飲みながら時間を潰す。

「へえ、アリソンはパイロットなの？」

「そうよ」

「しかも戦闘機パイロットだそうだ。日本でもまだ女性の戦闘機パイロットは出ていないって言うのに、大したもんだぜ。オマケに階級もこの歳で少佐だそうだぞ」

「つまり、あの赤い彗星と同じって言うことね？」

「「赤い彗星？」」

舞の言葉に、当然ながらアリソンとヴィルは首を傾げる。

「こいつの言うことは、あまり気にしないで下さい」

「はあ。けど、階級のことを言ったら日高二佐の方が上じゃないですか？」

「俺の場合は防衛大学・・・つまり士官学校を出ているし、今回偶々防衛駐在官を命じられて昇進しただけだから。アリソンのように叩き上げで来たわけじゃないし」

「それでも大したものよ。士官学校に入るにはそれなりに頭が良くなきゃいけないんだから・・・それに、こんな綺麗な奥さんと10代で結婚してるし。いやあ、大したものだわ」

「アハハ・・・」

アリソンの言葉に、正道は乾いた笑いをするしかなかった。

「ちよ、ちよっとアリソン。失礼だよ」

ヴィルがアリソンの発言を咎める。

「そうよ。正道さんはそんな人じゃないわよ。だって、私の方から迫ってやったんだから!!」

「「ブー!!!??」」

ヴィルと正道が同時に紅茶を噴いた。

「いやあ、懐かしいわね。あの時の正道さんたら　で、　して
くるんだから！」

「舞！お前昨日に引き続いて、人様の前で何を言っているんだ！？
と言っか、明らかに今放送禁止用語が聞こえたぞ」

色々な意味で恥ずかしさ爆発の正道の顔は真っ赤だ。

「と、とても個性的な奥さんですね」

ヴィルが少しばかり引き気味である。

「すみませんヴィルさん。たく、お前ってやつは」

「だって事実じゃない。それにほら、アリソンも笑ってるし」

「ええ。だって私も同じだから」

その言葉に、再びヴィルと正道が固まる。

「は？」

正道はこう思わずにはいられなかった。

（まさか？）

「私もヴィルを寝台車の中で〇〇して、それから××したから」

ドッガンー！！

ヴィルと正道が今度はズツこけた。

「アリソン！？」

「いいじゃない。まあ、さすがにリアアちゃんたちの前じゃはばかられるけどね」

「前々からどこか舞と通じるものがあるなあとは思っていたけど、まさかここまでとは」

「いやあ、異世界にも私と波長が合う人がいるなんて嬉しいわね」

「こっちこそ。舞とは楽しくやって行けそう楽しんでたわ」

「アハハハ・・・」

2人は可笑しそうに笑った。

一方、美人な癖してトンデモ発言を余裕でする妻達に振り回される旦那さんたちはといえは。

「ヴィルさん」

「日高さん」

「お互い苦労しそうですね」

まるで長年の戦友のように慰めの言葉を、互いにかけてあった。

「まああんな無茶苦茶で傍若無人な奴ですが、根はいいやつなんです。仲良くしてやってください」

「こちらもです。アリソンは、昔から無茶ばかりしていますけど、こうして出会えたのも何かの縁です」

「そうですね。それに、何だかんだ言って、あいつを好きで仕方が無いですから」

「私もですよ。」

「ハハハ・・・」

2人も一緒に笑い声を上げた。

そんな折。

「ただいま！」

「戻りました！」

「あ、リリアちゃんたちが帰ってきたわね。それじゃあ少し遅くなっただけど、夕食会と行きましようか」

「おう！楽しく行こう！」

アリソンと舞のテンションは天井知らずであった。

W e l c o m e t o J a p a n ! 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

W e l c o m e t o J a p a n ! 6 (前書き)

御免なさい。迎賓館はやっぱやめにしました。滅茶苦茶御都合主義な言い訳となりましたが、悪しからず。

Welcome to Japan! 6

60日目午後 日本 東京

「女王陛下、ようこそ日本へ。お出迎えが遅れましたことをお詫び申し上げます」

ホテルのロビーへ降りたトリスティン一行の前に、予想外の人物が現われた。

「エ、エレオノールお姉さま!？」

駐日トリスティン大使であり、ルイズの姉のエレオノールであった。

「エレオノール大使、確か東京への到着は明日と聞いておりましたか？」

アンリエッタが突然の彼女の到着に、怪訝な表情をする。

「女王陛下の到着と言うのに、悠長なことをしている余裕はありません。日本政府には迷惑をお掛けしましたが、予定を少しばかり前倒しして帰ってまいりました」

「あら、もっとゆっくり視察してれば良かったのに」

実はエレオノールは、この日日本政府の案内で山梨県の農園や太陽光発電施設、富士山麓の温泉地へと視察に出かけていた。これはアンリエッタの日本訪問前に決定していた事項であった。

もちろん、常識的に考えれば「女王陛下のお出迎え」の方が優先事項である。ところが、アンリエッタは「私の出迎えよりも視察の方が、今後考えると重要です」と発言し、エレオノールに視察の方を優先させた。

これは前述のアンリエッタの言葉も理由の一つだが、他に堅苦しい貴族に付きまとわれるのが嫌であり、尚且つ護衛役のアニエスと才人を信頼しているというアンリエッタの本心ゆえの命令だった。

もっとも、当たり前のことだがその「本音」は隠していた。

「女王陛下の身に何かがあつてからでは遅いですから。もちろん、視察はちゃんとしたので御安心を・・・それからルイズ？」

「ひゃ、ひゃい!？」

苦手なエレオノールが、しかも少しばかり重々しく言ったものだから、ルイズは怯えた。

「後で少し、お姉ちゃんとお話しましょうね？もちろん、拒否権はないからね」

表情は笑っていたが、目は笑っていなかった。

「・・・はい」

「あ、あのお姉さん？」

才人が口を開くが、途端にエレオノールが鋭い視線を向ける。

「う……」

「……何かしら？」

（あれ、想像していたのと違う。けど、まあいいか）

「後にいる人は誰ですか？」

エレオノールの後には、日本人の若い男性が1人立っていた。

「あ、いけない。女王陛下、こちらは日本大使館で私をサポートして下さっている日本の外務省のミスター・オザキです」

「尾崎英雄です。トリステイン大使館でお手伝いさせていただきました。以後お見知りおきを」

「アンリエッタ・ド・トリステインです。こちらこそ、エレオノール大使ともどもお世話になります」

アンリエッタが礼をとる。

「アニエス・ミランだ。女王陛下の護衛役をしている」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエールです。姉がお世話になっています。この度は陛下の侍従と書記官を務めさせていただいています」

「えと、平賀才人です。よろしく」

「「こちらこそよろしく。では、参りましょうか」

尾崎とエレオノールも含めて、トリステインからの一行は移動した。

夕食の会場となったのは、本来なら結婚式などが開催される宴会場であった。アンリエッタたちが会場へ入ると、既に日本政府の人間が到着していた。

そして2人の男が一行に近づいてきた。スーツを着てはいるが、1人はどこにでもいそうな30歳前後の平凡な顔で、もう1人も同年代に見えた。

だから、アンリエッタたちは日本政府の案内の人間が来たのかと考えた。

しかし。

「ようこそアンリエッタ女王陛下、そしてトリステインの皆さん。あと平賀君はおかえりなさい。日本国首相の、春川響です」

「同じく、日本国副首相の小泉一樹です」

「「「「え!?!」」」」

まさかの首相の登場に、4人とも声を上げた。

(こ、この方が日本のトップ?)

(どこにでもいそうな男じゃないか!?)

(やっぱり才人の国って理解できない)

(あ、そう言えばどこかで見たと思ったら。平凡すぎてわからなかった)

4人ともそれぞれの感想を内心で述べたが、総じて春川に対するイメージは「トップらしくない!」であった。4人とも日本から送られた映像で春川の顔は先に見ていたはずだが、あまりにも印象に残らなかったのか、こうなったらしい。

「失礼いたしました。トリステイン王国女王のアンリエッタ・ド・トリステインです」

「護衛のアニエス・ミランです」

「書記官兼侍従のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです」

「平賀才人です」

「ハハハ、そう緊張なさらずに。今日はお互い顔合わせ程度なものですから」

(うーん、本当に若いなあ。しかも、如何にもお姫様と言う感じだな)

(スタイルもいいですし、中々の美人ですね。成る程、ネットの掲示板が炎上するわけです)

自分たちが軽く評価されるのは慣れていたので、アンリエッタらが驚いたことには一切反応をしめすことなく、春川と小泉は自分たちなりのアンリエッタへの評価を心の中で呟いた。

と、そこで春川が宴会場の入り口に一瞬視線をやる。

「サクラス側の使節団も到着されましたね」

「初めまして、クリプトン卿。日本国首相の春川響です」

「ほう、あなたが・・・ああ、失礼した。使節団長のバロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。よろしく」

（うーん、お約束になっちゃったな）

春川が自分が政治家に見られないことに、そしてそのことに慣れてしまった自分に、内心で苦笑するしかなかった。

クリプトン卿との挨拶を終えると、春川はサクラス帝国使節団の中で最も注目すべき人物、メイベル・ヴァイスの前へと歩み寄った。

「あなたが聖女メイベルですね？首相の春川です。あなたの噂は大使経由で窺っています。若いのに大したものです」

「メイベルです。皆そう言いますが、大統領になつたのも女王に

され・・・失礼。女王になったのも、本当に偶々そうだっただけです。あなたのように、なりたくてなかったわけじゃありませんし」

メイベルは極自然にそう言ったが。

(俺もなりたくてなかったって言うわけじゃないんだけどな)

春川の場合周囲に頼まれて議員に立候補し、何時の間にか首相になつていたような人物だ。立候補したのは事実だが、彼自身が政治家を熱望したわけではないし、首相にされたのも最終的に国会における選挙の結果だ。

世襲議員ではなく、なおかつ喋る事に説得力がある。すなわち頭の良し悪しは別として、物事を正確に捉えられるかと言う能力があり、国民からの受けが良かった故に、首相になったと言ってよい。本来なら人気がなくなった所で代わる短命内閣の筈が、ここ数年の政治的停滞に今回の転移騒ぎが加わったため、未だに続いている。

しかも、外交や内政面での諸政策の結果支持率は落ちていないと来ているから、当分辞める必要もなさそうであった。

(まだ広成議員や自民党の仙露議員の方が首相にあってるんだろうな)

春川は自分と同年代の議員たちの顔を思い浮かべた。

「はあ、そうですね。それでも、様々な物を発明しているんですけど？ だったらスゴイことに代わりはないと思いますよ」

「けど、我が国の技術力は日本に比べればまだまだです。これから

は、日本から様々なことを学ばなければならないと思っています」

「それは立派な志ですね」

「ただの興味本位ですよ」

（その純粋な興味本位が発展の原動力なんだろうな・・・朝倉が言っていたとおり、純粋なやる気はバカに出来ないってことだな）

「何にしろ、日本滞在を楽しんで行ってくださいね」

「はい！ありがとうございます」

春川は5割の期待と4割の不安、そして1割のメイベルに対する応援を心の中に抱きながら、彼女との挨拶を終えた。

「首相、それでは挨拶をお願いします」

「おう、わかってるよ小泉」

「それでは今日ここに、皆さんと集えたことを祝して、乾杯！」

「」「乾杯！」「」

春川が音頭を取って、参加者が一斉にグラスを持った。ちなみに、大人も子供も注がれているのはタダのジュースだ。これが一番公平だからだ。

食事はそれぞれが交流しやすいよう、立ち食形式となっている。本来は普通にテーブルに座るスタイルだったが、トリスティン側の要望を入れて急遽変更した。

（ホテル側の関係者には感謝だな。もし迎賓館だったらこうはいかなかったかもしれない・・・それにしても、工事中で使えないのでしまったと思ったが、災い転じて福となすとはこのことだな）

グラスのジューズを口に含みながら、春川は内心ホツとしていた。本来ならトリスティン・サクラス共に王族を含んでいるのだから、泊まるべき場所は赤坂の迎賓館であるのが妥当であった。

ところが、赤坂の迎賓館はこの時ちょうど一部の施設が改装作業中であった。本来だったらその工事が終わっているはずが、転移後の資材供給ストップによる影響で未だ終わっていないかった。

そこで、急遽日比谷にあるこのホテルが手配されたのであった。幸いにも外国から入ってくる人間がいなくなつたため、ホテル側もちょうど暇していた。唯一夕食会の食材の手配のみが不安材料であったが、これは内閣側がなんとか手配して間に合わせた。

日本政府としては、両国政府の機嫌をそこねるようなマネは避けなかった。トリスティンは今後水産資源や鉱物資源の供給地として期待されていたし、また科学力が発展しているサクラスは日本製品の市場、少なくとも日本の技術の売り手として期待されていた。

もちろん、これに加えて新世界における平和の構築という目的もある。だが政治とは、大概綺麗ごとだけではすまないことである。このような打算も当然含まれていたのだ。

さて、春川は一通り挨拶をし終わると会場の片隅に立った。

「いいんですか？首相がこんな目立たない所において？」

相棒の小泉が隣に立つと訪ねてきた。

「俺はこう言うのはどうも苦手だね・・・他の大臣達に任せるよ」

「それもそうですね・・・ですが、それ以上に面白いものが見れそうですよ。アンリエッタ女王が、メイベルさんに話しかけています」

「うん。そうだな・・・確かに、全くの異世界。しかも王族同士・・・一体どんなことを話しているのやら」

「聞いてみますか？」

「ああ」

2人はこっそりと、アンリエッタとメイベルの近くへと回り込んだ。

W e l c o m e t o J a p a n ! 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

Welcome to Japan! 7

60日目 日本 東京 とあるホテル

「改めまして、私はトリスティン王国女王のアンリエッタ・リ・トリスティンと申します。お見知りおきを」

メイベルの前へとやって来たアンリエッタがドレスの裾をつまみ、膝を曲げて挨拶する。如何にも王族という感じの高貴な動作だ。

ちなみに、アンリエッタの後少し離れた所にアニエスが立っている。また才人とルイズはさらに離れた所で、日本側の関係者と話し込んでいた。

一方、突然声を掛けられたメイベルと言えば。

「ええと、メイベル・ヴァイスです。こちらこそ、よろしくお願ひします」

と極々普通に挨拶して、御辞儀した。

「先ほどは簡単な挨拶しか出来ず失礼いたしました」

「いいえ、こちらこそ。わざわざありがとうございます」

「そんな緊張なさらなくてもいいのに」

「すみません。その、アンリエッタ陛下がとても眩しくて」

絵に描いたようなお姫様のアンリエッタに対して、メイベルの動作は比べるべくもないし、その格好も修道服だ。メイベル自身は美形でスタイルも良いのだが、気後れを感じてしまうのは致し方ないだろう。

「可笑しなことを言いますね。あなたも女王であられるのでしょうか？」

「まあ、成りたくてなったわけじゃないんですけどね」

メイベルが恐縮しながらそんな事を言った。

「私だつてそうです。他に後継者がいなかったから、王位を継いだに過ぎません」

アンリエッタはメイベルが女王兼大統領と言う地位にあるのは知っていたが、どうしてその地位にあるのかまでは、まだ知らなかった。そのため、メイベルの次のセリフに驚嘆を通り過ぎて、固まってしまった。

「私の場合は、別にそう言うことじゃなくて。くじびきでそう決まっただけですから」

「は？」

アンリエッタはしばし放心状態となった。

「ええと、アンリエッタ陛下？」

「……え！？あ、はい。す、すいません。私としたことが……」

あの、くじびきで女王になったと言うのは、どう言うことでしょうか？」

「説明すれば長くなるんですが、私が女王になった西アルテース公国は南アルテース連邦と戦争をして負けたんですね。そして前公王のビーズマス卿は王宮から姿を消して、行方不明となりました。そのため、新たな公王を決めるために、候補者を集めてのくじびきが行われたわけです。私は候補者になるのは嫌だったんですけどね。そもそも王様なんて言う柄じゃないし。そして、くじびきで女王に選ばれてしまったわけです・・・これだからくじびきはなんて大嫌い」

「けど、候補者に選ばれたと言うことは、メイベルさんも貴族が王族だったのでしょうか？」

しかし、アンリエッタの言葉はまたもメイベルによって裏切られる。

「トンデモナイ！私の家はごく普通の平民でしたし、私もつい2年前まではただの修道女でしたから」

「そ、それでどうして今のようなことに？」

王になると言う事は、神聖なる『始祖』の血を引くことが条件であり、生まれも高貴な貴族の『メイジ』でなければならぬハルケギニア（トリステイン）の常識しか知らないアンリエッタにとって、メイベルの言葉は冗談にしか聞こえなかった。

「まあ、成り行きでしょうか？」

メイベルが笑いながら言うが、それを否定するかのように後から声が掛かる。

「成り行きだけで女王になれるわけないだろ、バカ」

「ナバル」

バカ扱いされたため、メイベルが情けない声をあげる。

「あの、そちらは？」

「失礼した女王陛下。俺は近衛中隊長兼メイベルの護衛を勤めているナバル・フェオールです。よろしく」

「まあ、近衛中隊長なのですか？さぞかし立派な魔法剣士なんですよ
うね」

この時も、アンリエッタは自分の常識で言葉を発してしまった。
つい今の今、自分の常識は通じないと分かった筈なのに。

「俺は魔法は使えませんよ」

ナバルの何気ないセリフに、アンリエッタはまたも驚く。

「え！？魔法が使えないのに、近衛中隊長なのですか！？」

「そうですね。そもそも、どうして魔法が使えられなきゃ近衛中隊長になれないということになるんです？」

「そう言えば、確かトリスティンは『メイジ』と言う魔法使いが社

会の中核を成しているって、日本の外務省の方が言っていたわね」

「サクラスでは違うのですか？」

「確かに、魔法使いが貴族や王族という場合もありますけど、使えない人も普通に貴族や王族でいます。そもそも、魔法は確かに出来るにこしたことはないんですけど、使えるから偉いなんてことはありません」

この言葉に、アンリエツタは大きな衝撃を覚えた。魔法がそもそもない日本人が『メイジ』を評価しないのならまだ理解できる。しかしながら、同じ魔法を持ちながらそれによって線引きされない世界など、アンリエツタには想像すらつかないことだった。

「そんな・・・魔法は『始祖』から授かった神聖な力であるのに・・・」

アンリエツタは頭を金槌で殴られたような想いであつた。また少し離れた所で会話を聞いていたアニエスも、同様に驚いていた。

「それはそちらの常識でしょうか？私達の世界では、魔法は筋肉の振動によって行われる物です。ですから、普通に腕や足を動かして運動するのと、何ら変わらないものなんですよ・・・そうになると、サクラスとトリステインの魔法は全く違う物かも知れませんね。これは調べてみると面白いかも」

「こらメイベル、こんな所で悪い癖を出すんじゃない！少しは我慢しろ！」

「う、ごめんなさい」

メイベルとナバルがいつもどおりの掛け合いをしているが、アンリエッタの目には入ってなかった。彼女はサクラスの魔法と、魔法に対するあまりにも違いすぎる考え方に、激しいショックを覚えていたのだ。

これならまだ、魔法のない日本の方が受け入れやすかっただろう。

「陛下、大丈夫ですか？」

アンリエッタの異変に気づいたアニエスが傍らに寄り添うと声を掛けた。

「だ、大丈夫ですアニエス。ちょっと、頭なながぐちゃぐちゃになってしまつて」

「ええと、確かあなたはアンリエッタ陛下の護衛の？」

「アニエス・ミランです。陛下に直属する銃士隊の隊長を務めています」

「ふーん、じゃあ俺と同じようなもんか。けど、女の剣士とは珍しいな」

ナバルは背に剣を担いでいるアニエスの姿に、興味を持った。

対して、アニエスの方はこのナバルの発言に苛立ちを覚える。

「女が剣を持つのはいけないことでしょうか？」

「別にそんなことは言っていないぞ。ただ珍しいって言ったただけだ。それとも、あんた自身は女が剣士をやるのは可笑しいと思っているのか？」

ナバルの単純だが思わぬ反撃に、アニエスは焦る。

「い、いや。別にそう言うことではない」

「そうか。けど、それなら後で1回模擬戦をやってみるか？」

ナバルの提案に、アニエスの目が輝く。

「ほう。それは中々魅力的な提案ではあるな……だが、その前に陛下、少し休まれては？」

何気にアンリエッタを気にかけているのはさすがであった。

「いいえ、結構です……メイベルさん？」

「はい？」

「あなたの国のこと、もっとよく教えていただけませんか？」

「もちろんです。私もアンリエッタ陛下の国のこと」「アンとお呼びください」

「え？」

「陛下？」

「その方が呼びやすいでしょう？歳も近いようですし、気軽に呼んでください」

「わかりました。じゃあ、私のこともメイベルと呼び捨てでいいですよ」

「ありがとう、メイベル」

「ほう。こいつは意外な展開になったな」

「どつやらのアンリエッタ女王も、ただのボンボンな姫様ではないようですね」

アンリエッタとメイベルに気づかれず、かつ声が聞こえる程度の距離にいた春川と小泉の2人は、アンリエッタをそれなりに評価する意見を言い合う。

「本多大使からの報告でも、中々骨のある姫様とあつたらしいからな」

「対照的に、聖女メイベルとお付のナバル君の方が少しばかり心配になりますね」

「まあ、伊達で高い役職に就ける筈はないから、もう少し様子を見よう」

「はい・・・おっと、どつやらもっと面白くなりそうです」

「何？」

春川が目をやると、それまで外務省の人間と話していた才人とルイズがアンリエッタたちに合流していた。

「姫様、申し訳ありません。日本の役人が中々放してくれなくて、才人ももう少し話を早く切り上げるようにしなさいよ」

「無茶言つな！相手は偉い人たちなんだぞ。それに、色々ややこしい問題があるんだから仕方が無いだろ」

と言い合いしながらやってきたのは、ルイズと才人の2人組だ。そして彼らはメイベルとナバルがいるのに気づくと、いの一歩に謝った。

「あ、メイベル女王陛下。先ほど東京駅では失礼いたしました」

「いきなり大声を出して、本当にすいませんでした」

「ああ、あれは別に気にしてませんからいいですよ。それよりもルイズさん、私のことは気軽にメイベルと呼んでください」

「え！？けど、女王陛下に対してそんな物言いをするのは」

「いいんですよ。どうせくじびきでなつた女王なんですから？」

「「・・・はあ！？」」

メイベルの言葉に、才人とルイズが再び大声をあげた。もちろん、会場内にいた参加者がビツクリして振り向いた。

一方メイベルは苦笑いしながら呟いた。

「結局そう言う反応されるんだ」

この後メイベルは、アンリエッタに対してしたのと同じ説明を2人にする事となった。

「信じられないわ。くじびきでそんな大事なことを決めるなんて。

それに『メイジ』（魔法使い）じゃなくても貴族や王族になれるなんて。日本以上に不思議だわ」

「言わせてもらうけどなルイズ。俺からしたらやっぱり、魔法使いがそうでない人間を支配しているほうが可笑しいと思うぞ」

「何でよ才人!？」

「そりゃあ、魔法がスゴイのは俺にもわかるけどさ。魔法使いにだって悪い奴やバカな奴はいるんだし、逆に魔法が使えない人間でも、頭の良い奴はたくさんいるぞ。じゃなかったら、日本がここまで発展することだって出来なかつたぜ」

「けど魔法は始祖ブリミルが与えられた神聖な物で、それを操ることのできるメイジがハルケギニアを支配するのは当然でしょ?そりゃあ、平民でも才人みたいにスゴイ人間がいるのは認めるし、日本が平民だけでここまで発展させたのも認めるけど」

ルイズは決して、平民を軽んじているわけではない。むしろ、ハルケギニアの貴族にあっては評価している方だ。ただしその評価は総じて自分の側にいる才人や、ハルケギニアに元々ある価値基準、そして彼女自身が見た日本の姿などから来ている。

日本には魔法使いがない。だからこそ、平民が科学力を発展させてここまでの国にしたということまでは理解できても、魔法使いとそうでない人間が混在している社会で魔法使いが確実に支配層にならないというのが、ピンとこないのだ。

だが才人は厳しく言う。

「これからはそんな常識は通用しないこと位、お前だってわかってるだろ？そのハルケギニアはもうないんだからな」

「うー!？」

「それに、サクラスがあつた世界はハルケギニアとも日本があつたのとも違う世界なんだから、常識なんか端から通用しないぞ。現にサクラスの魔法は、ハルケギニアのとは全く違うものみたいじゃないか?」

「才人さんの言うとおりね、私たちはそれぞれ全くの異世界から来ているんだから、互いの常識はつうようしないわ・・・けど、幸運にも言葉は通じるんだから、お互いに話し合っ理解していきましよう」

メイベルの言葉に、アンリエッタが頷く。

「メイベルの言うとおりです。オ人さんやルイズもきたことですし、もっと色々と話し合いましょう」

W e l c o m e t o J a p a n ! 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

次回、若人たちの夜の会話編ですWWW

Welcome to Japan! 8

60日目夜 東京 とあるホテル

夕食後、アンリエッタをはじめとするトリステイン組とメイベルをはじめとするサクラス組は、まだまだ話し足りなかった。そこで春川首相が「若い者は若い者同士で思い切り話し合ってください」と言い、ミーティングルームを提供してくれた。

一方で、彼は小泉を連れてクリプトン卿やエレオノールを交えて話す時間を設けていたのだが、若者グループにしてみればそれは別の話であった。

言葉が通じしかも同年代同士、色々と気兼ねせずにお喋りを続けることが出来る。その内容のほとんどは、自分たちの世界（国）に関する物だった。

「・・・と言う感じで、サクラス帝国にはソルティス教の代表者としての教皇陛下はいるけど、政治的な権限は持っていないわ。基本的に連合帝国の政治は議会を中心に運営されているわ。そしてそれはちゃんと、連合帝国憲章にも明記されているわ」

「するとあれか？立憲君主制でやつか？」

メイベルの説明に、才人が疑問を口にする。

「才人の言うとおりよ。けど、確か日本も同じじゃあなかったっけ？」

才人の質問に答えつつ、新たな問を持ち、すぐに質問し返すのがメイベルらしいと言えばメイベルらしい。もちろん、才人はすぐに返す。

「確かに日本には天皇がいるけど、天皇は国の象徴で憲法で書いてあるから、ちよつと違うんじゃないかな？・・・まさか本多さんに押し付けられたDVDの内容がここで生きるとは思わなかったな」

「日本もサクララスも、ハルケギニアでは考えられませんか」

アンリエッタは夕食の日以来、いや日本と初めて接触して以来感じていた外の世界と自分たちの世界との違いを、益々認識させられるしかなかった。

「むしろ、私達から見れば6000年も同じ王政が機能している方が不思議よ。どんだけ魔法に頼り切っている生活をしているのか、むしろそっちの方が興味深いわ」

アンリエッタの言葉に、メイベルが言う。

「それにしても、魔法使いが魔法を使えない人間を支配するって、嫌な国だな」

「それは聞き捨てならないわね！」

ナバルのストレートすぎる自国批判に、ルイズが声を荒げる。

「そうよナバル、幾らなんでも失礼すぎよ」

メイベルがナバルを諫めるが、才人がルイズに苦言を呈する。

「けどルイズ。言っちゃ悪いけど、多分日本人のほとんども今ナバルが言ったのと同じ感想を持っていると思うぞ。俺自身体験したことだけど、トリステインには人権のじの字もなかったからな」

トリステインに召喚されてからの1年近くを振り返る才人。今でこそルイズに認めてもらい、アンリエッタにさえ一目置かれているが、召喚されたばかりの頃は「散々」では済まされない思い出ばかりである。

ルイズとしても転移以後実際に日本を見て、才人の言っていた「貴族と平民に差がない」、「魔法を使えるだけが偉いことではない」と言うことを身にしみてわかっていているから、これに関しては後ろめたさを感じていた。

「あ、あの頃は才人のことを良く知らなかったからよ。それに、私達の世界じゃそれが常識だったんだから仕方がないでしょ！？他の世界の人間にとやかく言われるのは心外だわ」

「さっき自分の世界の常識は、この世界じゃ通用しないって言われて頷いたのは、どこのどいつだ？」

「うー!？」

才人の言葉に、ルイズは押し黙った。

「そりゃ確かに、他の世界にとやかく言うのはどうかと俺も思うぞ。皆それなりに自分たちの事情や歴史ってもんがあるんだろっからな。けど、これからお互いに付き合っていく必要があるんだから、自分の考え方を押し付けるようなやり方じゃやっていけないぞ」

「そうですね。才さんの言うとおり。これまでの常識や習慣を、私たちは見直さなければならぬようです」

「けど、中々身についた常識や習慣を変えるのは大変なのよね」

メイベルの言葉に、ナバルを除く全員が頷いた。残るナバルはと言えば、メイベルの言葉に冷や水を浴びせるような発言をする。

「その常識や習慣を破壊しまくっているメイベルが言っても、説得力のない言葉だけだな」

「ナバルさんの言うとおりですう。メイベルこそもっとも常識から離れていますう」

「2人とも、そこまで言わなくてもいいじゃない」

ナバルとパセラの言葉に、メイベルがまたも泣きそうな声を上げた。

「けど、さっき聞いた話が本当なら誰だってそう思うぞ」

才人を含めたトリスティン組はメイベル自身が言ったように、彼女がただ単にくじびきで決まった女王であり大統領であると言うことを信じかけた。

しかしながら、彼女にとって幸か不幸かすぐにパセラやクラウがそれを打ち消した。2人に加えてナバルまでもが、メイベルが先の南西アルテースにおける戦争での活躍や、様々な発明について話したからである。

メイベルが発明した（と言うのは少々語弊があるが）物は多岐に渡る。鉄道や航空機、機関銃やさらには初歩的なコンピューターと来ている。また南西アルテース戦争を少ない犠牲者で終わらせてしまったことも、見逃せない。

もちろん、その内容にアンリエッタや才人たちが度肝を抜かれたことは言うまでも無い。特に、才人の驚き具合はアンリエッタやルイズを超えていた。これは彼が鉄道や航空機、機関銃やコンピューターに対する知識を持っていたからだ。

一方アンリエッタは、発明品に関してはどの程度スゴイのか今一ピンとこなかったが、彼女が犠牲者を局限まで少なくして戦争を終わらせたことに驚いた。

アンリエッタ自身もつい先頃アルビオンとの戦争に勝利したのであるが、犠牲者を局限まで減らすと言うことに彼女が努力したかと言え、そうではない。トリステイン軍は大きな犠牲を強いられ、目の前にいる才人も一時は未帰還を伝えられた程だ。

だから、アンリエッタには目の前で屈託なく笑うメイベルが眩しくてしょうがなかった。

「けどけど、私が一から発明したわけじゃないし・・・」

「いやいや！そもそも17歳でそこまで出来るなんて日本じゃ絶対に有り得ないって！！」

「いや、サクラスでも今までなら有り得ないことだったぞ才人」

「トリステインでも・・・さすがに有り得ないわね」

「もう、ナバルも才人もルイズもやめてよ!!!」

メイベルはこの話題で盛り上がられるのが嫌なようだったが。

「いや、さすがに無理だと僕も思います」

彼女^{メイベル}一筋のクラウさえ、この件に関してはサジを投げざるを得なかった。

「て、もう9時過ぎか。やっぱ話し込むと時間が過ぎるのが早いな」

才人が部屋に設置された時計を見て言う。夕食会が午後5時に始まり7時に終わったので、かれこれ2時間近く話し込んでいたことになる。

「今日は木曜日か・・・トリステインへ行く前は家族でテレビを見たりしていた時間だな」

「テレビって、あの映像が移る箱よね？あれって、夜に見るものなの？」

テレビの存在はわかっているが、一体それが日常生活においてどのような位置づけであるのか、ルイズはまだよくわかっていなかった。

「いや、放送自体は24時間でやってるよ。あ、けど今節電しているからどうかな？」

その言葉に、ルイズとメイベルが強く反応した。しかし、それぞ
れ発した内容は全く違ったが。

「24時間で、一体誰が見るのよ!？」

「そんなに放送して、利益が上がるのかしら？」

「ルイズ、24時間ぶっ通しで見る奴なんかいないよ。そしてメイ
ベル、利益があらなきゃ放送なんかしないだろ？」

「じゃあどうして24時間ずつとなんてことになるのよ？」

「つまり朝昼晩、どの時間に放送しても見る人がいるってことね。
けど、そうなると日本人の生活はちよつと考えられないわね。深
夜や早朝でも、たくさんの人が起きているってことなんだから」

「まあ、皆が皆そう言うわけじゃないけど、夜遅くまで起きている
人はたくさんいるし、夜だけの仕事とかする人だっているから」

「サクラスでも、鉄道や電信の仕事をする人は夜遅くに働いたりす
るけど、まだまだその数は多くないわ。どうやら日本について、も
っと調べる必要があるそうね」

メイベルは1人そう言うと、頷いた。

「ところで、これどうやって付けるんだ？」

ナバルがテレビを付けようとするが、ボタンの位置がわからない
らしい。

「ボタン押すよりも、リモコン使った方が楽だぜ」

「「「リモコン?」「」」

操作をまだしっかりと覚えていないメンバーが声を上げる。

「そ、リモコン。ええと・・・あ、あった」

才人はテレビのリモコンを取ると、テレビに向けて主電源を入れた。もちろん、間髪いれずに液晶テレビが付き、画像が映って音声が出る。

「私もさっき使った時は驚いちゃった。サクラスじゃ電波を無線で飛ばす技術がないから、まだこう言うのを造るのは無理なのよね。トホホ・・・」

「そこまで落ち込まなくても良いと思うけど。それにさっきの話を考えれば、メイベルなら1年もしない内に作っちまいそうで怖い」

「1年どころか、1ヶ月あれば作ると思うぞ」

ナバルの言葉に、パセラとクラウがウンウンと頷いていた。

「私ってどんな風に見られてるのかしら・・・て、アンとルイズはどうしたの?」

「あの、テレビに私達が映っています」

「え!?!?」

アンリエッタの言葉に、他のメンバーもテレビの画面に視線を移した。映っていたのは、国营放送のチャンネルでちょうど夜9時からのニュースであった。

「あ、本当だ。トップニュースで流れてる。まあ、2人の女王様がこればそうなるわな」

「これって夕方の時のじゃない！？もうこんな風に映るの!？」

「まあ、トップニュースだからな」

ニュースはそのまま進んで行ったが、映像の多くは出迎えた木戸外務大臣と挨拶するアンリエッタやクリプトン卿の映像が占めていた。

「けど夕方のことが、もう全国区のニュースになるなんて、日本の情報伝達技術はやっぱりすごいわ」

「でも、多くの人に姿を見られるのはちょっと恥ずかしいですね」

アンリエッタが少々顔を赤らめて言う。

「まあ、それがテレビだから。だけど、それを商売にしてる人もいるし。アイドルとか芸能人とかはな」

「アイドルって何よ？」

ルイズが初めて聞く単語に、首を傾げる。それに答えたのは、メibelだった。

「確か、歌や踊りの上手い若い芸能人を指す言葉だったわよね？」

「そうそう、メイベルよく知ってるな。今はどうなっているかわからないけど、俺が召喚された頃は上戸彩とか長澤まさみとかが人気だったかな？・・・あ、けどその少し前にブレイクした日高舞ほどじゃなかったけど」

「え！？日高舞？」

その名前に、メイベルが素っ頓狂な声を上げた。

「どうかしたのか？」

「私達会ったのよ。その日高舞さんに」

「何だって!？」

今度は才人が素っ頓狂な声を上げた。

W e l c o m e t o J a p a n ! 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

Welcome to Japan! 9

60日目 ロクシエ 首都特別地域郊外 シュルツ邸

「へえ、それじゃありリアちゃんもトレイズ君も飛行機の操縦が出来るんだ。すごいわね」

リアとトレイズの話聞いていた舞が感心したように言う。

「まあ、ママのせいと言うか」

リアがアリソンの方をチラツと見る。彼女の場合、アリソンが軍用飛行機に勝手に乗せて操縦を覚えたと言う、人様には言えない事情があった。

一方のトレイズも、どこか遠い目をして答える。

「俺の場合は、父親のせいですね」

彼の場合は、父親であるイクス王国大公殿下のベネディクトから操縦を習っている。やはり世間一般には答えられない事情だ。

ちなみに既に正道はアリソンとヴィルから事情を聞かされていたし、舞も正道からそれとなく伝えられているので、事情を察することが出来た。

加えて彼女自身、世間一般の常識からはかなり掛け離れている人間であった。

「子供が親の影響を受けるのはしょうがないわ。うちの娘も私と同じ道を歩んでいるわけだし」

「だからと言って、子が親と同じ道を歩く必要もないよ。人生は自分で決めればいいさ。ヴィルさんもそう思うでしょ？」

「ええ。ただ、そのせいで私は妻や娘に随分と心配と迷惑を掛けましたから、これからはその分の穴埋めをしていこうと思っています」

「あら、別に私は全然そんなこと気にしてないわよ。ヴィルと一緒にいてくれるだけで満足よ」

「そうよパパ。変な気遣いしなくてもいいわ。むしろトレイズに言い聞かせたい言葉だわ」

リリアがジト目でトレイズを睨む。

「リリア、怖いよ」

「リリアちゃん、あまりトレイズ君をイジメルのはやめなさい」

そんな家族の団欒を、正道と舞は微笑みながら見る。

「あーあ、羨ましいな。これだったら愛を連れて来るんだった」

「あのな舞。親としてその発言はどうかと思うぞ。お前が愛に日本に留まっていると聞いたんだろ？」

舞のあまりにも無責任な発言に、正道は苦言を呈せざるを得ない。

「それはそうなんだけどね。こんな風に一家団欒の光景を見せつけられちゃつとね」

「たく、思いつきで娘に迷惑掛けるのはやめろ！」

「その気持ち、なんとなくわかるなあ」

と言うのは、リリアだ。彼女は子供の頃から母親のアリソンの都合に振り回されている面があったからだ。

「だったら、こっちに呼べば良いんじゃないですか？」

リリアが首を傾げるが、正道の顔が少しばかり困った表情になる。

「呼びたいのは山々なんだけどね。こっちにはまだ日本人学校もないし、愛の場合仕事もあるしね」

「あ、そう言えば芸能人だって言っていましたね」

「そうよ。私と同じアイドルよ、トレイズ君」

「仕事じゃ仕方が無いですね。けど、一人で大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ・・・彼氏によろしく頼んでおいたから」

舞の発言に、正道が噴出しそうになる。

「ブ！！・・・バカヤロウ！！お前何度言えばわかるんだ！そういう誤解を受けかねない発言は自重しろ！！」

「いいじゃない。それに、私としては愛が彼と子供作っても文句は言わないし、むしろ嬉しいから」

「お前なあ!!」

この発言には、アリソン以外ドン引きであった。

「だって、早く愛が子供つくってくれないと、孫との対決が出来ないじゃない」

「お前孫ともタメ貼る気か？」

「もちのろん！」

「たく・・・あ、妻がおかしなことばかり発言してすいません」

正道が4人に向かって頭を下げる。

「大丈夫よ、全く気にしていないから。けど、娘さんやその彼氏の子とも早く会ってみたいわね」

「せめて日本とロクシエの間で、自由に行き来できれば良いんですけどね」

アリソンの言葉に、正道も同調する。

「早く実現しないかしら。ロクシエでもツアーが出来るようになれば、他の皆もロクシエに来るだろうし」

「それはまだ無理だよ舞。少なくとも後1〜2ヶ月は掛かるね。ま

あ、ロクシエ政府も急いでいるみたいだから、少しは早くなるかもしれないけど。今すぐは無理だな」

「そうよね。残念」

2人の表情が少々曇ったのを見て、ヴィルが声を掛ける。

「まあまあお2人も。娘さんとまだ会えないのは残念ですが、今日はこうして集まったんです。楽しみましょう」

「そうですね、ヴィルさんの言つとおりだ」

正道の表情が再び明るくなる。

「じゃあ、お礼に何か1曲歌つてあげるわ」

「あ、是非聞かせてください!」

「任せて頂戴リアちゃん。Sランクアイドルの実力、しかと見せてあげるわ」

「程々にな」

背景に鬼を背負いかねない舞に、正道は釘を指すのを忘れなかった。

この日午前中、トリステインとサクラスからの一行はそれぞれ皇居に招かれ、春川首相ら日本政府首脳らの列席の元で、今上（平成）天皇皇后両陛下と挨拶を交わした。

トリステインのアンリエッタ女王も、そしてサクラスのメイベルも日本の皇族に会うと言うことで緊張していた。一方で、憲法で明文化された「象徴」と言う存在である天皇と言う物への疑問も併せ持っていた。

今年陛下は既に83歳。その高齢にも関わらず、矍鑠とした態度で一行の前に現われた。もちろん、アンリエッタやメイベルも硬くなった。

そして陛下は口を開いた。その言葉は2人の予想とは違うものだった。2人はてつきり、日本へ来たことへの歓迎の言葉を彼が言う物と考えていた。

ところが、陛下の第一声は。

「この度は、経験したこともない重大な事態に直面し、それぞれの国や国民が様々な苦勞をされていると聞いております。謹んで、お見舞いを申し上げるとともに、その様な状況の中で、遠く我が国を訪問していただけたことに、深く感謝致します」

と言う、トリステインとサクラスのことを案じた言葉を最初に持つてくる、2人からすれば異例なものであった。

その後は当たり前障りのない挨拶のやりとりが行われたが、アンリエッタとメイベルに対しては個人的に以下の様な言葉を付け加えている。

「お若いのに大したものです。ですが、若いからこそ出来ることもたくさんあります。今やりたいことを精一杯やってください」

「日本は蒸し暑くありませんか？何か不自由なことはありませんか、遠慮せず言って下さい」

若く、そして日本の気候になれていないことを見越した心遣い溢れる発言をなさり、2人に好印象を持たせた。

もつとも、好印象を持ったのは何も2人だけではなかったが。

最終的にこの挨拶は、陛下の健康を考慮した宮内庁によって短時間で終わったが、トリスティンとサクラス双方共に、日本の天皇家への好印象を持たせたことには間違いなかった。

宮城から戻る車の中で、陛下と言葉を交わした面々はそれぞれに感想を漏らした。

「とても優しい良い方でしたね、アニエス」

アンリエッタは同乗するアニエスに、自分が感じた感動を伝えた。

「全くです。それでいて、口では言えない高潔さを持っているように、私には感じられました」

「アニエスもですか？実は私もです・・・あのような純粹で、他人を思いやれる王を私はこれまで見たことがありません・・・春川首相の話では、陛下はよく憲法や社会のことを勉強なさり、世俗にも

通じ、国民を思いやるお方だそうです。私もあのような王になりました
いです」

「これからなれば良いのです、陛下」

「なれるといいのですが・・・」

アンリエッタは離れていく皇居を見つめると、そう漏らした。

「本当。天皇に言葉を掛けてもらえるなんて初めての体験だったけど、やっぱり感動するもんだな」

才人は今回通訳として同行したが、陛下から「遠い異世界で大変でしたでしょう」と言葉を掛けられていた。

一方ルイズは、そんな才人の少しばかり軽い言葉に怒りを覚える。

「才人、あんた自国の王様に向かってちょっと軽すぎじゃない！」

「け、けど向こうに行く前からあんまり天皇とか天皇帝とかには興味なかったし・・・今日会ってみてもそこまで敬うような気持ちにはなれなかったな」

「呆れた。優しくして気遣いのあるいい王様だったのに、臣民がこれじゃあ気の毒だね。と言うか不敬罪じゃない」

「悪かったな・・・けど、とっても親しみのある人ってのは俺にもわかった」

「？」

才人の言葉に、ルイズは怪訝な表情をする。

「やっぱり、俺には国民の側にいてくれる天皇の方がいいなあってそりゃあ、姫様みたいに如何にも偉いお姫様や王様と違って、そこまで敬う気は起きないけど・・・なんかこう、偉くて日本にとってはなくならない人だなって思った」

「ふーん・・・私には理解できないわね」

「まあ、理解してもらおうなんて考えてないから」

「やっぱり、日本ておかしな国だわ」

ルイズは才人の言っていることが良く理解できなかった。

最後に、メイベルはと言えば。

「会う前はどんな人が出てくるか心配だったけど、とっても優しそ
うな人でよかったわ」

「ああ。大司教みたいな人だったな」

「うーん、確かにそう言えなくも無いけど。けどねナバル、私は大
司教とはまた違うように見えな」

「どう言うことだ？」

「だって陛下は最初に、何よりも私達の国のことを慮ってくれたの
よ。日本は転移してから色々混乱して大変だって聞いているじゃない

？そんな中でも、あの人は私達の国のことを気にかけてくれたし、私達一人一人のことを気にかけてくれたわ。大司教でも、あそこまでの気遣い出来るかわからないわ。それに大司教よりも高齢だし」

「まあ、確かに。あの歳で一人一人に握手して挨拶するって言うのは驚きだったけどな・・・また機会があれば剣の腕を見せてもらいたいなんて言われたぞ」

「大司教は、やっぱりソルティス教のトップてことがあるから、どうも色眼鏡で見ちゃうのよね。けど日本の陛下はそうじゃない。とっても親しみやすく、それでいてどこか尊敬しちゃう。それも言われてじゃなくて、自然に。そんなような人に感じられたわ。あんな人を王様になっている日本は幸せね」

「確かにな。けど、今まで会ってきた日本人からはあんまり敬われているように感じられなかったぞ」

「やっぱりあれでしょ、天皇は象徴だからでしょ？絶対的な君主ではない。国民をまとめる役目なのよ。だから政治にも干渉しないし、その分色々気にかえられるんじゃないかしら？・・・西アルテースの女王も国家の象徴にしちゃうかしら？」

「それは絶対に無理だ」

ナバルが即答する。

「どうして？」

「お前が政治に介入しないなんてありえないから」

「あ・・・確かに」

と、それぞれ色々感想をいただいたわけだが、とにかく結論付ければこの訪問は成功であった。

W e l c o m e t o J a p a n ! 9 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

今回ちょっと怖いです。陛下の言葉を自分なりに考えてみましたが、やっぱりどこか違うんじゃないかと思えて仕方ありません・

やっぱり今上陛下は偉大だなあとつくづく思います。

お家へ帰ろう 1

61日目 昼 トリスティン王国 日本大使館

「平賀君、今頃どうしているかな？」

大使館で働く少女、高凧春名は遠く祖国にいるであろう少年に想いを馳せる。

「高凧さん、平賀君が日本へ出発してからそればかりですね。よっぽど彼が好きなんですね。ククク・・・まあ、その心配する気持ちはわかりますが」

駐トリスティン日本大使にして、『外務省の白い悪魔』の異名を持つ女性、本多聡子が茶化す。相変わらずの色白で、その眼鏡の奥の瞳には何が映っているかわからない。しかし、春名は既に彼女に慣れてしまっており、恐れることなく返す。

「わかってるなら、私も日本へ帰してくださいよ。平賀君のことは抜きにしても、パパやママにも早く会いたいですから」

「もう少し待ってくださいね。大使館員がトリスティン語に習熟するまでは、あなたの力が必要ですからね。ククク・・・」

「まさかとは思いますが、私への嫌がらせじゃないですよね？」

「そんなことはありませんよ」

棒読みで言った所で、全く説得力がない。

「もう！」

2人の女性がそんな感じでお喋りしていた時、扉がノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは陸上自衛隊の制服を着た男だった。

「これは梶田一尉。どうかしましたか？」

入ってきたのは、現在大使館警備と邦人保護を名目に大使館に駐留している陸上自衛隊の特別派遣小隊指揮官の梶田幸一一等陸尉だった。

「いえ、特別緊急と言うことではないのですが。お忙しいなら、改めて窥いますが？」

「大丈夫です。で、用件は？」

「ハイ。銃の指導にあたっているあいつなのですが、問題ないでしょうか？」

「友澤三曹のことですね？ええ、別に何も問題はありませんよ。むしろこちらとしては、親しみ易いのでありがたいと思っておりますよ」

「それは良かった。あいつは腕は良いんですが、中々の厄介見です。この間も危うく刀傷沙汰に巻き込まれそうになりましたね」

「聞きました。何でも『魅惑の妖精亭』と言う店で、メイジと喧嘩寸前になったと」

「その時は店の店長が仲裁に入って事なきを得たんですが・・・あいつの場合本土にいた時から危なっかしくて困ってるんです」

「まあいいじゃないですか。実際彼は有能なんでしょう？私は彼に大いに期待していますよ。ククク・・・」

本多が無気味に笑う。

「あの。そのクククは何を意味しているんでしょうか？」

その間に答えたのは、本多ではなく春名だった。

「梶田さん。突っ込むだけ無駄ですよ」

「そうかい」

「まあそれはともかくとして、今の所実害は出ていませんが、トリステインの人間には私達に敵意を抱いている人はそれなりにいるようです」

本多が急にクソ真面目な表情となった。

しかし、春名も梶田も動じることなく本多の言葉に頷いた。

現在の所死者や負傷者は出ていないが、嫌がらせを受けた報告は既にかなりの数に上っていた。王都周辺は、王政府のバックアップ

があるので大したことはなかったが、地方の視察などに行くと、露骨に調査の妨害や低い扱いを行ってきた貴族もいた。

行ったのは、いずれも王都から遠い地方の貴族であった。

「ヴァリエール大臣によれば、それら貴族は王政府への反感も大きいとのこと。この国は先日戦争が終わったばかりだそう。それに加えて、気候や環境の変化で各領地は少なからぬ被害を被っているか」

「その話は私も聞き及んでいます・・・しかし、そうなると色々心配になりますね」

「ええ。だからこそ、あなた方には期待しているんですよ」

本多の表情に、不敵な笑みが戻ってきた。

「もしかして、あなたが本土に戦車の派遣を要請したのは、そのための伏線でしたか？」

「肯定もしないし、否定もしません。どっちにしろ、戦車の派遣は否決されましたからね」

「しかし、その代わりに歩兵戦闘車と偵察警戒車と装輪装甲車を1台ずつに派遣人員を30名から45名にまで増やした・・・これだけでもスゴイですよ」

大使館の広い庭には、警備や移動目的のために配備された自衛隊の車両が駐車しているが、その中に1両ずつ89式歩兵戦闘車と87式偵察警戒車、そして96式装輪装甲車が止められていた。

「戦国自衛隊以上ですか？」

「補給とヘリさえあればそれ以上ですね。空中支援がないのが残念です」

「まあ、いざと成ればラ・ロシエール沖の海上自衛隊の護衛艦か、硫黄島の基地から飛んできますよ」

「それまで籠城出来るかが鍵です・・・ひよつとして大使館の周りにセンサーを張り巡らせたのもそれを予期してですか？」

「さあ？どうでしょうね。ククク・・・」

（（喰えない女！？））

「今お2人とも何か失礼なこと考えたでしょ」

「「いいえ、何も」」

2人は全力で否定した。否定しなかったら、何かを失いそうな予感がしたのだ。

「とにかく、不測の事態に備えておくのは悪いことじゃないでしょうね。そのために、わざわざ拳銃の携帯許可まで貰ったんですから」

そう言つと、本多は腰につけたホルスターに入った拳銃をポンポンと叩いた。

同日夕方 日本 東京 とあるホテル

「お帰り平賀君。お疲れ様」

皇居での天皇との挨拶の後、首相官邸での会談などの予定を滞りなく終えたトリスティンとサクラスの一行がホテルに帰ってきた。もちろん、才人も一緒であったが、帰って来るなり彼は1人の男に出迎えられた。

駐日トリスティン大使館に出向中の尾崎であった。

「あ、確か外務省の？」

「尾崎だ」

「何かようですか？」

「ああ、外務省からのお達しを君に伝えに、ほら、先日言っていた君の帰宅に関しての話をしに来たんだ」

「ああ。じゃあ、家へ帰れるんですね!？」

「もちろんだとも」

その言葉を聞いた時、才人はもう何も言えなかった。ようやく自分の家へと帰れるのであるから、当然であった。

「嬉しそうだね？」

「あたりまえですよ。もう1年以上経つんですから」

「そうだね。両親に元気な顔を見せて、安心させるといいよ」

「はい！・・・あ、けど俺がいなくなつて大丈夫ですか？」

現在才人は通訳（主に文章の確認）としてアンリエッタらに付いている。

「まあ、1日位ならね。明日以降の3日程は主に都内や都周辺の視察だから、大丈夫と言つのがこちらの判断だ。それと、君は親御さんに顔を見せたらまた戻るんだよね？」

「はい。何だかんだ言つて、トリストインを、ルイズから離れたくありませんから」

「わかった。じゃあ、帰宅の際の詳しい手段についてはまた連絡するから。夕食後にラウンジに来てくれ。夕食までは部屋に戻つて休むといいよ」

「ありがとうございます！」

1時間後

「と言うわけで、明日家へ帰ることになった」

夕食の席上、才人は先ほどの話をルイズやアンリエッタたちに伝えていた。ちなみに今日はテーブルに座つての食事だが、昨日の夜と同じく「若い者同士で」と言う配慮から、メイベルらと同席だ。

「才人も大変だったのね」

「俺だったら多分逃げ出してたな」

「ぐ．．．」

メイベルとナバルが才人に気遣いの言葉を掛ける一方、彼を召喚したルイズは少しばかり肩身が重くなる。

それに気づいてか、才人はすぐに彼女の気持ちを和らげようとする。

「まあ、あれは事故みたいなものだったから。ルイズも気にするなよ」

「そう言うわけにはいかないわよ、才人を家族の元から引き離れたのは事実だし．．．ねえ、才人？」

「何？」

「私は一緒にいけないのかしら？」

「ああ、どうだろう？尾崎さんは何も言ってなかったしな．．．」

「そう言えば、まだ聞いてなかったけど、才人の家は何をやっているの？」

メイベルが質問する。

「家？父さんはサラリーマンだけど」

「……サラリーマン？」

全員が首を傾げる。

「うーん、何と云えばいいのか……平たく言えば会社勤めのことかな？極々普通の家だよ」

「へえ、じゃあ日本の一般的な家てことね？」

「まあ、そうなるかな？」

「それは興味深いわね……ねえ、私も行っちゃいけないかしら？」

「……え！？」

才人のみならず、アンリエッタやルイズが余りにも唐突な彼女の言葉に驚く。

当然と言えば当然である。どうして昨日あつたばかりのメイベルが、才人の家に行きたがるか理解に苦しむ。

「だって普通の日本人がどんな生活をしているか気になるんだもん。今まで見てきたものだけでも驚きの連続だったから、色々と期待しちゃうじゃない」

「メイベルらしい理由ですう」

パセラが呆れながら言う。

「確かに、民の生活がどんなものか知っておくのは悪くないでしょうね。私も興味が湧いてきます。こんなスゴイ国の民は、一体どのような生活を送っているのでしょうか？」

昨日からメイベルに影響受けっ放しのアンリエッタまでもが、このような発言をしてきた。

さすがに才人も、困った表情をする。

「ひ、姫様まで・・・けど、どうだろう？そんなにたくさん家に来ても狭いだけだし。だいいち、皆予定があるんじゃない？」

「だったら、日本政府の方と後で少しばかり話し合ってみましょう」

「いいわねアン。ナバルもいいでしょ？」

「俺は別に構わないぞ」

「じゃあ、そうしましょう！」

アンリエッタとメイベルは、ノリノリであった。

（あーあ。また厄介なことになりそう）

才人は心の中で、そう呟かすにはいられなかった。

1時間後

「何か、人数多くない？」

才人の元に再びやってきた尾崎は目を丸くしていた。当然である。才人とルイズあたりまではわかるが、アンリエッタやメイベルたちがいる理由が理解できないらしい。

「ハハハ・・・実はカクカクシカジカ・・・」

「なるほど・・・ルイズさんあたりはともかく、さすがに王族の皆様方は諦めて貰わないとなあ」

「やはりダメですか？」

「皆様の場合明日の予定もありますし、警備の人間も必要となるでしょうから。移動に関しても、車の手配がつきそうにないので、電車となりますから。さすがに王族の方は・・・」

「電車！？私あれにも乗りたいんです！」

メイベルが目を輝かせる。

（畜生、やぶ蛇だったか）

そこで尾崎はなんとか話を逸らそうと諮る。

「それに下っ端の私がどうこう出来る問題ではありませんし」

「じゃあ、外務大臣に取り次いでください」

メイベルがあっけらかんとした表情で、トンデモナイことを言う。

（この姫様、思考がぶっ飛んでないか？）

「いや、けど」

「取り次がないなら・・・今後の両国の交渉に支障を来たすかも」

「メイベルさんの言うとおりですね」

メイベルの物騒な言葉に、アンリエッタが同調した。もちろん、周りの人間は呆れるか軽く引き気味である。

「・・・わかりました」

結局尾崎は屈した。

お家へ帰ろう 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お家へ帰ろう 2

61日目夜 首相官邸 首相執務室

「さすがにそれは許可できないぞ！」

と声を荒げるのは、首相執務室の主である春川響首相だ。彼が声を荒げた理由は、言うまでもなくメイベルとアンリエッタの常識外の申し入れだった。

常識的に言えば、女王様が一民間人の家に行くなんて考えられない。

「しかし、2人は今後の外交交渉に揺さぶりを掛けています」

「むう……」

木戸外務大臣の言葉に、春川は超が付くほど真剣な表情となる。

普通の人間だったら「戯言」もしくは「聞き入れるに値しない妄言」と片付けそうだが、そう片付けられないのがメイベルとアンリエッタと言う人間であることを、彼は既に周囲の人間（クリプトン卿とかアニエス）から聞きだしていた。

さらに言うと、春川自身が常識など通用しないカミさんと15年以上も付き合っているせいで、「常識が通用しない人物がいるのは当たり前」「常識外のこと起きるのも当たり前」と言う意識を持つていたことだ。

これは副首相である小泉にも言えた事で、こつした意識を根底に持っているからこそ、転移などと言う常識から言えば、たわけた事態にも対処できたわけだ。

ちなみにこの日の朝、春川はそのカミさんから「どうして異世界人に会わせてくれないのよ!!」と延々30分も電話で文句を言われたばかりであった。

「2人とも若いし、色々は無茶をやってきたみたいだからな・・・多少のことには怖いもの知らずだろう」

メイベルはサクラスにおいて、若干17にして様々な発明を成してその発展に大いに貢献したが、それだけではなく奇病の感染防止ドラゴンとの和解、西南アルテース戦争の終結などその功績を数えれば枚挙に暇がない。

しかも彼女の場合、政治的な利権とか名声にはこれぼっちも興味がなく、純粹に本人が「そうしたいから」、もしくは「なり行き」で進めたことだ。

純粹な分、やりたいことはとことんやりたがるだろう。

一方のアンリエッタは、最近でこそ政治家としての自覚を見せているが、子供の頃から城を抜け出して家臣を慌てさせたらしい。それどころか、最近ではその城からの抜け出しを使って、反逆者の排除と言う危険極まりないことまでしたらしい。

さらに言えば、何故か平賀才人に惹かれていると言う情報も駐トリストイン大使館の白いあく・・・大使から届いていた。

「若いうちは誰でも無茶をやりたがるからなあ。それに、アンリエッタ女王は知らないが、メイベル嬢の方は日本に関するのなら、何でも知りたがりそうだし」

昨日顔を合わせた時のメイベルの様子を思い出しながら、春川は溜息を吐いた。

「じゃあ、許可するんですか？」

木戸の言葉に、春川は難しい表情をする。

「するにも、さすがに全員は無理だろ？それに平賀少年の家に迷惑掛けるし。何より移動と警備の問題があるぞ」

「さらに言えば、彼女らは外見からして目立ちます」

木戸が付け加える。

アンリエッタはいいとして、メイベルとルイズは髪の色がピンク色のブロンド、メイベルの友人であるパセラは緑のブロンドと言う、地球だったら有り得ない髪の色をしている。いくら現代日本人が無関心でも目立つことこの上ないだろう。

「髪の色は染めて貰えば何とかなるでしょう。ただし、やはり人数は問題ですから、絞ってもらうしかありません。警備の人間は大つぴらだと逆効果でしょうから、影から隠密裏に守れる人材の方が得策かと思います。それに、出来る限り内密にことを進める方が良いかと」

小泉の言葉に、春川が頷いた。

「それだったら、内調にいる警察関係機関からの出向者あたりに任せよう。それと、平賀君も東京を離れて10年になるから、万が一の場合の案内役も付けられないとな」

「関係諸機関への通達も必要ですね」

「絶対にマスコミに漏れないようにしなきゃな。それと、あくまで極自然に彼らが行動できるように配慮するようにしないと」

ノリノリで決め始めた2人に、木戸が不安げに問う。

「あのお2人とも。では許可なさるんですか？」

木戸の間に、春川は楽しそうに答える。

「許可は出す。ただし、時間や人数に制限をつけてな。特にアンリエッタ女王はな」

「メイベルさんは使節団の構成員の一員ですが、アンリエッタ女王は代表者ですからね。既に明日の午前の予定は組んでありますし、OKも貰っていますから」

「はあ・・・しかし、本当によろしいのですか？」

「相手が外交交渉をチラつかせているんじゃ、無下に断れないしな。それに発想の転換だ。「そんな程度のこと」で貸しを作れるなら、むしろこっちとしては喜ばしい」

トリスティンは今後レアメタルの産地や、漁業基地として有望で

ある。そしてサクラスは小麦やそば粉と言った穀物の輸入先となり
そうであった。その2つの国の代表の機嫌を損ねて、外交交渉に暗
雲をなげかけるよりも、貸しを作った方が得策だと春川は判断した。

随分バカらしいことが進んでいるように見えるが、これが現実で
あったし、何度も言うが春川はそんなバカらしいことが起きてもこ
れぼっちも驚かない人間だった。

「わかりました」

木戸もついに折れた。

「いいか。絶対にマスコミや野党には嗅ぎ付かれない様にな。それ
と、民間人にもばれないようにあらゆる手段を講じてくれ。東京の
市中ではれたら、それこそ銀ブラ事件じゃ済まないことになるかも
しれないぞ」

「わかりました」

62日目朝 日本 東京 使節団宿泊ホテル

「と言うわけで、条件付であるなら許可されるそうです」

「マジで！？今の日本政府何考えてるの！？」

政府からの回答を伝えに来た外務省職員の話に、才人が
素っ頓狂な声を上げた。

「実に同感だよ才人君・・・しかし、これは首相も認めた決定事項だから」

「やっぱり姫様とメイベルの脅しが効いたのかな？」

「かもしれない・・・しかし、君の家には御迷惑をお掛けすることになりそうだよ」

「ハハハ、帰った途端からこれかよ」

才人は嘆かずにはいらなかった。

一方、その嘆きの元凶たる二人はと言うと。

「やったわ！やっぱり頼んで損はなかったわね」

「私とても楽しみです」

「チツ！」

楽しそうに笑うアンリエッタとメイベルとは対照的に、ルイズは舌打ちしていた。

「ええと喜んでいる所悪いのですが、条件をちゃんと聞いてくださいね」

尾崎が示した日本政府より出された条件は以下の通り。ちなみに文書は、苦勞してトリストイン語とサクラス語に訳したものだ。外務省側としては、少しばかり自信なさげであったが、どうやら今回はちゃんと読んでもらえたらしい。

- 1・・・平賀家から同意を得られなかった場合は中止する
- 2・・・人数は最大4人まで（才人は含めない）
- 3・・・アンリエッタ女王は、本日参加が決定している午前中の視察には必ず参加すること
- 4・・・平賀家の人間以外には自分の身分を明かさないこと
- 5・・・日本側の案内人の指示に従うこと
- 6・・・必要な変装を行うこと

「4人ですか・・・」

「はい、さすがに大人数での移動は目立ちますし、迷惑にもなりませんから」

尾崎の言葉に、アンリエッタが表情を曇らせる。

「この平賀家の同意で何よ？才人の御両親には行くと伝えたんではないよ？」

ルイズはそちらに注目した。

「行くと伝えたのは才人君とせいぜいルイズさんあたりまで。それ以上の人数は想定外。だから、これから平賀君の御両親に連絡するんだ。それでもしダメって言われたら、ルイズさん以外は諦めてくださいね」

ただし、これに関してはこの直後の電話で「4人位ならなんとかありますよ。むしろ才人の友人なら歓迎です！」と才人の母親が電話で答えたので、問題なしとなった。

3については、アンリエッタが不満気味だったが、やはり元首としての最低限の良識は持っているから、「わかりました」と不承不承で受け入れた。

さて、平賀家の許可もとれたところで誰が行くかが問題となった。才人を召喚したルイズは「才人の両親に謝る」と言う正当な理由があるので、真っ先に決まった。そして同行を要請したアンリエッタとメイベルがこれに続いた。

残る1人の枠を巡って、アニエスとナバル、そしてメイベルにゾッコンラブ（死語）のクラウが揉めることとなった。

アニエスとナバルはそれぞれ「姫様の護衛として離れるわけには行かない」「俺の仕事はメイベルを守ることだ」と言って憚らず、残るクラウも近衛小隊長として譲らなかつた。

「こうなったら剣で勝負だ！」

「やってやるうじやないか!？」

「僕も負けませんよ！」

とついに夢の模擬戦寸々まで言ったが、「バランス的に見て男性の方がよろしいのですが」と言う尾崎の発言と、「私としてはナバルで構わないわ。クラウさんには悪いけど、慣れた人の方が安心できるし」と言うメイベルの発言により、最終的にナバルと決まった。

ちなみにクラウは燃え尽きて真っ白になった所を、逆に不完全燃焼気味のアニエスに模擬戦を申し入れられて、ボコボコにされてパ

セラの介抱を受けることとなったが、それは別の話だ。

と言うわけで、最終的に才人以外のメンバーはルイズ・アンリエッタ・メイベル・ナバルと決まった。ただしアンリエッタは先に入っていた公務があるので、後から合流となった。

朝食後、さつそく一行は出発の準備に掛かった。

日本人である才人は、服を着替えて眼鏡をする位で良かったが、ルイズとメイベルに関しては変装するにも一大事であった。

まず日本政府が用意した膨大な服の中から、サイズがあって一人で着替えができる服を見つけ出し、さらにカラーズプレーを使って髪をそれぞれ染めた。加えて髪型を少しばかり変えたりと、大変なことこの上ない。しかも女性相手だ。

それでも、日本政府が無駄に全力を出したおかげで1時間半と言う驚異の短時間で済ませた。

時刻は11時前であった。

「着替えの方はこれでいいですね」

と言うのは、何時の間にかスーツから私服に着替えた外務省の尾崎だった。

「あれ？尾崎さんが案内役なの？」

才人が首を傾げた。

「そうだよ。トリステインの大使館からもちゃんと許可は貰っているし・・・それに、エレオノール大使から「くれぐれも妹のことよろしく頼みます」てスゴイ気迫で言われたし」

「ハハハ・・・」

才人とルイズは苦笑いした。

「あとそうそう。皆さんに渡すものが」

「渡すもの?」

お家へ帰ろう 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

6月23日の日高愛、25日の秋月律子の誕生日にあわせて短編を企画中。単品ではネタが出ず、考えていたらネタが出たのはこのシリーズの発展版でしようオチ・・・

ちなみにキーワードは

ハワイ 飛行機 りょうあい 豪華なキャスト

の予定

お家へ帰ろう 3

6月2日 午前 日本・東京 使節団宿泊中ホテル

尾崎が渡したのは、携帯電話とICカードだった。

「ふーん、まあこれ位だったら荷物にならないからいいわね」

「スゴイ！これ本物ですか！？」

「ほー」

ルイズ・メイベル・ナバルの3人は支給された携帯電話に興味深々だった。もちろん、その使い方を日本側の関係者が説明する。

そんな中でただ1人だけ、不満顔になったのは才人だった。

「て、これ高齢者が使うような簡単なタイプじゃないですか！？」

渡された携帯は、画面も何もないボタンと電話機能のみの、所謂簡単携帯であった。才人としては、最新型を使いたいところである。

「悪いね。何せ他の携帯だと余計な機能も多いから。それに、皆曰本語はまだ読めないだろうし」

「俺は読めますけど？」

「そうは言うけどね。君がいない間に携帯も大分進化したし。多分もう見せてもらったと思うけど。あれ短時間で使いこなせる自身あ

る？」

「うー!？」

才人は言葉に詰まった。

才人が召喚されたのは西暦で見て2004年だ。そして現在は2014年。10年間に携帯電話をはじめとする各種電子機器の進化は目覚ましい。加えて才人自身の時間においても、1年近いブランクがある。

最新型の携帯を上手く活用しようとするならば、それなりに時間が必要だろう。

「それにどうせ今回だけの借り物なんだから、そう文句は言わないでくれ」

「わかりました」

才人は不満気であったが、上着のポケットに携帯をしまった。

そして次に話題をICカードに移す。

「これってsuicaですか？」

「いや、これは地下鉄や私鉄を中心としたPASMOだ。今日の移動は鉄道を使う予定だし、最大限度までチャージしてあるから、少しばかり寄り道することも出来るよ」

「へえ、JRだけじゃなくて他の鉄道にも出来たんですか? 便利に

なっ たな」

「今じゃ東京だけじゃなくて、名古屋や大阪、九州にも独自のカードがあるよ。昨年から相互利用範囲が拡大されたから、便利になったもんだよ」

「うわ！そこまで進んでるなんて。本当に浦島太郎になった気分だぜ」

才人が召喚された2004年において、ICカードはようやくJR東日本のsuicaが普及を始めた頃で、既に全国ネットとなった2014年とは大きな差があった。

携帯電話といい、自分のいた頃より遥かに進歩を遂げている所に、才人は大きなギャップを覚えずにはいられなかった。

一方アンリエッタやメイベルたちは、渡されたICカードを不思議そうに見ていた。

「こんな板切れみたいなのがお金の代わりに、本当になるの？」

ルイズはICカードを怪訝な表情で見つめていた。

「こんな小さなカードに情報を読み取らせてお金の代わりにするなんて・・・けど、そんなこと本当に出来るのかしら？」

さすがのメイベルも、小さなカードにそこまで情報を読み込ませられるのか半信半疑らしい。

そんな2人とは対照的に、ナバルは深く考えずに使い方だけ聞く

とポケットにしまっていた。

「まあ、百聞は一見に如かずと言います。では、出発するのでしょうか」

「案内は尾崎さん1人だけですか？」

「さすがにそれはないよ才人君。もし誰かが迷子になった時、1人じゃ対応できないからね。もう1人付くよ。そちらにいる八幡はちまんさんがそうだ」

彼が紹介したのは、ルイズたちに電話とカードの使い方をレクチャーしていた青年だ。彼も尾崎と同じく、スーツではなくラフな服装であった。

「内閣府より派遣されました八幡はちまん弘毅です。よろしく」

才人は視線を尾崎に戻す。

「才人君の家は、永福町で間違いないね？」

尾崎の言葉に、才人は頷く。

「はい。駅から歩いて5分位の所です」

「なら、こちらで確認した住所と同じだね。それじゃあ、行くところだろうか。」

全ての準備が整った所で、6人はホテルを出る。ちなみに、アンリエッタは午前中視察があるので後ほど別の者の案内によって合流

となった。

一行が歩いてホテルを出るのはこれが始めてだ。今までは外に出ると、すぐに日本政府差し回しの車に乗り込んでしまっていたからだ。

「なんかワクワクするわね！ねえ、ナバル」

「ああ」

「才人の御両親にようやく会えるのね」

とそれぞれ色々と期待を膨らませる。

「で尾崎さん、具体的にはどう言う風に行くんですか？」

「それについてはそっちの八幡君に聞いてくれ」

「え？」

すると、八幡が前へと出る。

「これから僕たちは、まず地下鉄の日比谷駅へと移動する。そこから三田線に乗って神保町へ行つて、都営の新宿線に乗り換える。さらに明大前で井の頭線に乗り換える予定だ。個人的には東京駅まで位だったら歩いていけるから、そこから中央快速線で吉祥寺へ出る方が、新宿駅を通して楽しいんだけどね。あ、霞ヶ関から丸の内線に乗るのも良いかも。あの路線は四ツ谷で地上に出るし、ワンマン運転だから・・・」

熱く語りだした八幡に、才人のみならず全員唾然としてしまう。

「はいはい八幡君。鉄ちゃんとしての血が騒ぐのは一行に構わんが、必要じゃないことまで喋らんでよろしい」

「え！？八幡さんて鉄オタなの！？」

才人が意外な一面に驚く。

「鉄ちゃんて何か悪いかな？」

「いや、別にそう言うわけじゃ」

尾崎が笑いながら仲裁に入る。

「まあ、彼は仕事は出来る人間だから。それに、東京は鉄道が発達しているから、彼のような人間の方が都合だ」

「ハア」

才人はそう答えるしかなかった。そしてルイズたちは、そのやりとりの意味を理解できずに、呆然としていた。

そんな彼らを見つめる目が幾つもあることに、彼ら自身は全く気づいていなかった。

同日 ロクシエ・首都特別地域内 日本大使館員向け宿舎

日本大使館員に対してロクシエ政府は、公営のアパートなどの空き部屋を当座の官舎として提供していた。日高正道・舞夫婦もこのアパートの一室に居を構えることとなった。

もつとも、昼間正道の方は駐在防衛官としてロクシエ空軍をはじめめとする各所から引つ張り嵐であるため、舞は時間を持て余すこととなった。

日本ではトップアイドルであっても、こちらでは当然ながら無名であるし、芸能界とのパイプすらない。

「だったらストリートライブでもやるうかしら？」

と言った所。

「頼むからやめてくれ！」

と正道から全力で反対されてしまったので、これは却下した。

「どうしようかしらね？まだこっちの文字もわからないから本とか新聞も読めないし。外に出歩くにも、地理がわからないし」

「だったら大使の奥さん、紫^{シヘリ}さんでも呼んでお喋りでもしたらどうだ？後、アリソンさんとか？」

「そうね。だったらそうしようかしら。電話番号は聞いておいたし。」

「電話を掛ける時は注意しろよ、この国じゃ直通じゃなくて一回交換台に繋がるからな」

「わかったわ。それにしても交換台なんて、本当に映画を見ているみたいね」

と言う夫婦間の会話によって、舞はとりあえずこの日の暇つぶしの方法を見つけたのであった。

電話した結果は、同じ官舎内に住んでいる荒木大使の奥さんの紫は即OKしてくれたが、アリスンの方はこの日は任務でいなかった。

と言うわけで、舞は紫と2人でお茶をすることにした。もっとも、厳密には紫が娘の杏^{アン}を連れて来たので3人であったが。

「お招きいただきありがとうございます。日高さん」

と見るからにお嬢様と言う感じで話しかけてきた紫に、舞は言い放った。

「そんな堅苦しい挨拶はいいわ。私のことも舞でいいから。地を出してもいいわよ」

その言葉に一瞬、紫は目をパチパチとさせたが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

「そう。じゃあ、私も舞と呼んでいい？」

途端に紫の言葉がぐだけたものになった。

「いいわよ。やっぱり猫被っていたのね？」

「ええ。けど、よくわかったわね？」

「今までいろんな人に会ってきたからね。その人がどんな人かは喋ればおおよそ検討がつくわ。あなたは上手いことかくしていたみたいだけどね」

「猫被るのも大変なだけどね」

「ふーん・・・色々と事情がありそうね。お茶を飲みながら、そう言うことも話そうじゃないの？」

「そうしましょう。あ、子供を寝かせる場所が欲しいんだけど」

「だったらそのソファーにでも寝かせておけばいいわ」

「ありがとう」

舞は紅茶を2人分入れて、茶菓子を出すと紫と向かい合うように座ってお喋りをはじめた。

「なるほどね、お金持ちの家に生まれたせいで、周囲からお嬢様って見られちゃって、それで猫を被るようになったと」

「そう言うわけ。猫を被っているってバレタのはあなたが初めて」

そう言うつと、紫はペロツと舌を出した。

「旦那さんはそのこと知ってるの？」

「当たり前よ。さすがに夫婦なのに知らないのはマズイじゃない。」

あいつには高校の時に、成り行きでばれちゃったんだけどね・・・
まあ、それが切欠で付き合い始めたんだけどね」

「ビュー、熱いわね」

舞が茶化す。

「やめてよ！大使館でイチャイチャしていたあなたに言われたくないわ」

しかし、その言葉にも舞はどこ吹く風だ。

「あらあら。向きになちゃって。けど、未だに猫かぶりだなんて難儀ね」

「一応今も財閥令嬢だし、旦那も大使だから」

「そう。けどそうになると、ストレスが貯まるんじゃない？」

「そうなのよ。猫被るのだって大変なんだから」

「だったら何時でも家に来て頂戴。私だったら地で話しても大丈夫でしょ？」

「ありがとう。実はこっちに来てからずっと心細かったの。心から話し合える友人は、日本にも数える位しかなくて。こっちに来てからは、旦那だけだったから」

「日本にも数える位って、少ないわね。まあ、友人の数は多い少ないじゃないけど」

ちなみに、人間の幸福度を測る際の基準となるのは、友人の数ではなくその友人との付き合いの深さだとか。

「それに、対等に付き合える友人がいるだけ幸せよ。一体どんな人？」

「一人は高校時代の友人。もう一人は、旦那の同僚よ。今は確かトリスティンの大使をしているはずだよ」

「ふーん」

「ねえねえ。舞はアイドルなのよね？」

「そうよ？」

「だったら舞の話も聞かせてよ。一方的に聞くだけじゃフェアじゃないわよ」

「いいわよ」

舞は喜んで、自分の身の上話を始めるのであった。

この奥様方のお茶会は、この後恒例行事となる。

お家へ帰ろう 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

紫の元ネタは「ぷいぷい」シリーズの座堂シエラです。魔法使ったり、メイドに変身したりはしません。出自や性格は原作そのままです。

大使館員で家族を呼び寄せたのは、今の所荒木大使と日高駐在武官のみと言つ設定です。

お家へ帰ろう 4

6月2日午前 日本・東京郊外 秋月涼の自宅

「涼さん涼さん！早く行きましょーよー！！」

家の玄関で、靴を履き終えた愛がまだ途中の涼を急かす。今日は土曜日。2人は以前約束した買い物へと出かけようとしていた。

「愛ちゃん、そんなに急かさなくても」

「だって涼さんと一緒にお出かけできるなんて、とっても嬉しくて」

「僕も愛ちゃんと一緒にお出かけ出来て嬉しいよ」

「！？あ、ありがとうございます」

愛の顔が赤らむ。涼としては何気なく言っただけなのだが。

「愛ちゃん大丈夫？顔が赤いよ」

「だ、大丈夫ですよ！さ、行きましょー！！」

と元気よく扉を開ける愛。

するど。

「おはようー！！」

「おはようございます?」

何故か玄関先に、桜井夢子と水谷絵理が待ち構えていた。

ズゴー!! (愛が盛大にこけた音)

「あ、愛ちゃん!? だ、大丈夫!？」

「大丈夫でしょ。何て言っても豆タンクなんだから」

「愛ちゃんの生命力は伊達じゃない?」

涼の絶叫に反比例して、夢子と絵理が醒めた声で言い放つ。

「ちょっと、2人とも愛ちゃんをどう見てるのさ!？と云うか、いきなり僕の学校に転校してきたと思ったら、何で今度は僕の家の前にいるのさ!？」

実は夢子と絵理、この数日前に涼の通う高校に突如として転校してきた。もちろん、涼はビックリした。そしてさらに、その2人がいきなり自宅の前に現れた。

涼の驚愕とは対象に、夢子と絵理は平然と言う。

「別に。土曜で学校も休みで暇だから、どこかへ買い物にでも行くうと思っつて。誘いに来たのよ」

「私も夢子さんと同じ?」

(けど・・・)

(実際は・・・)

(涼さん を手に入れるため!)

2人がそんな野心を秘めているとも露知らず、涼は苦りきった表情をしているだけであった。

そんな中、ようやく愛が復活した。

「そ、そうだったんですか?いきなりお2人がいるからビックリしました。けど悪いですね。今日涼さんは『私』と一緒に面白い物に行くんです」

愛はワザと私と言う部分を強調した。

(お2人も涼さんを自分のものになりたいんですね・・・けど、涼さんは私のものです)

(こ、こいつ!涼と一つ屋根の下で言うだけでも許せないのに。もう涼の恋人ぶっているっていうの!?)

(愛ちゃん調子乗りすぎ?)

3人の視線が空中でパチパチと火花を散らす。

「ちよ、ちよっと3人ともどうしたのさ?」

「「「涼さんは黙ってて!」「」」

「新宿か渋谷のあたりにでも行こうかなって」

夢子の疑問に涼が答える。

「じゃあ電車に乗るのね？」

「うん。下高井戸の駅から」

「そ。PASMOを持ってきて正解だったわ」

「さ、早く行きましょう、涼さん！」

愛が涼の腕に自分の腕を絡める。

「あ！？ズルイわよ！この豆タンク！」

「1人だけ楽しい想いはだめ？」

絵理と夢子がすぐに引き離し、或いは自分も同じことをしようと
する。もちろん、愛はそれに抵抗する。

「2人とも邪魔しないでください！」

また揉め始める3人娘。もちろん、涼としては溜まったものでは
ない。

「もう3人ともいい加減にしてよ！！」

同時刻 都営地下鉄三田線 日比谷駅入り口

「それじゃあ、今から地下鉄に乗りますよ。いいですか、私か八幡君のどちらかから絶対に離れないでください。もしはぐれたら最後、再び出会えないかもしれませんよ」

才人の家へと向かう御一行に対して、案内役の外務省職員尾崎が釘を指す。

「大袈裟だな。そんなことあつてたまるか」

と尾崎の言葉にナバルが言い返す。

「まあ、大袈裟なのは認めるけど。実際はぐれたら大変だよ」

「尾崎さんの言うとおりです。才人君は別として、全く文字が読めないに等しい皆さんがはぐれたら、どれだけ探すのに苦労するか想像つきません」

八幡も尾崎の言葉に同調した。

「それってつまり東京にはそれだけ駅があるってことかしら？」

メイベルが口を開く。

「それもありますが・・・とにかく、コンコースまで行きましょう」

尾崎を先頭にして、一行は地上の出口から地下へと入る。

「へえ、地下なのに明るいのね」

メイベルが言う。彼女にとって地下とは、ランプやまだ照度の弱い弱い電球に照らされた暗い空間と言うイメージしかなかった。

「ええ。それにしても、地下にデンシヤと言う乗り物を通すなんて」

ルイズには、何もかもが新鮮であった。一方、ある程度近代文明に触れている（と言うか自分で造った）メイベルは、彼女とは違う視点で物を見る。

「鉄道を作るだけでも大変なのに。わざわざ地下に造るなんて。どうしてそんなことをしたのかしら？」

彼女の疑問に、八幡が答える。

「それは仕方がないことなんです。メイベルさんも御存知のとおり、東京には既に多くのビルや建物が立ち並び、地上に鉄道を敷くのはほとんど不可能なんです。かつては道路上を走る路面電車が主流でしたが、車も増えましたし輸送力の大きい地下鉄が整備されたわけです」

「へえ」

「さ、付きましたよ。ここから駅構内に入ります」

一行は駅の改札口へと到着した。

「いいですか、先程渡したカードを使って乗ります。私が手本を見せますので、同じようにやってください」

まず尾崎が手本を見せた。と言っても、ICカードを改札機の所定の位置にタッチするだけだが。

「では、皆さんも」

八幡に促されて、一行も同じように改札機を抜けようとする。才人はもちろん苦もなく通り抜ける。後のメンバーも改札機にタッチするだけだから良かったのだが、ルイズはしっかりとタッチしなかつたため、バーが開かずバーに体が当たった。

「何で開かないのよ!？」

怒るルイズに、周辺にいた利用者や駅員が視線を釘付けにする。

「ルイズ。ちゃんと当てろ!」

才人に注意されて、2回目は無事に通れた。メイベル、ナバルも無事に通過する。

しかし、ここでメイベルが悪い癖を出す。

「すごい。これだけの大きさで瞬時に計算してバーを開け閉めするなんて。それに、この端の部分に数字が浮かび上がるし」メイベルさん。興味があるのは良いですが、他の人に迷惑ですから行きませよ」

尾崎に言われて、渋々メイベルは改札機から離れた。

「はい」

さらに。

ポカン！

「痛い！何するのよナバル！？」

「外国まで来て見つとも無いことするんじゃない！」

そんなこともあったが、一行はホームへと下る。日比谷駅はコンコースが地下1階、ホームが地下2階の構造だ。

「まだ降りるの？」

「随分と深いね」

地下の深さにルイズがげんなりとした声を、メイベルが驚きの声をあげる。

「これだけ深いと、工事するのも大変なんじゃないですか？」

「そうですね。最近の地下鉄は開通させるのに掘り始めから5年はかかりますからね」

八幡の説明に、メイベルが呆れたような表情をする。

「また気の長い話ですね」

「安全には代えられませんから。それからメイベルさん、今改札で貰った東京の地下鉄路線図です。見ます」

「あ！見ます見ます！」

メイベルは駅で配る簡素な案内図を、嬉しそうに見始めた。が、次の瞬間にはその表情が驚愕に染まる。

「な、何これ！？」

「どうしたんだよ？」

ナバルも慌てて彼女が見ていた紙を覗き込む。もちろん、彼の顔もすぐに固まる。

「どうしたのよ？」

ルイズも覗き込んだ。そして。

「何これ？蜘蛛の巣の絵？」

「違うよルイズ。それが東京の地下鉄の路線図だよ。それにしても、改めてみると本当に一杯あるよな・・・あ！？副都心線と言う路線が増えてるな」

「副都心線の開業は2008年だからね。最近是新規の開業はないけど、去年渋谷で副都心線と東急の東横線が直通を開始したから、今じゃ埼玉から横浜まで1本の電車で移動できるよ」

八幡が才人に説明する。

「本当に、ドンドン便利になるな」

「けど、これじゃあ何が何だかさっぱりわからないわ」

「だから言ったでしょ？あなたの方がはぐれたら大変なことになるって」

「確かに、こんな訳のわからない地図見ていたら余計に迷うだけね」

尾崎の言葉に、ルイズが納得する。

「そう言うわけですから。しっかりと付いてきて下さいね」

尾崎の念押し言葉に、才人を除く全員が頷いた。

一行がホームに到着する到着すると、ちょうどチャイムが鳴った。

「間もなく二番線に、各駅停車西高島平行き各駅停車の電車が到着します。扉から離れてお待ちください」

「お！いい具合に電車が来ましたね」

そしてトンネルを抜けて、青いラインの電車が進入してきた。

「うわあ！スゴイ音ですね！」

メイベルが地下鉄の騒音に顔をしかめる。

「地下では音が良く響きますからね。乗ってしまえばなんでもありません」

そして電車が止まり、チャイムと共に扉が開く。

「へえ、この地下鉄にもホームに扉が付いているのね。それだけ乗客が多いってことかしら？」

三田線には全駅にホームドアが設置されている。

「けど、そこまで客が多いようには見えないぞ」

ナバルの言うとおり、お客はいるにはいるのだが、混んでいると言う言葉を使うほどではなかった。

「既にラッシュも過ぎたし、今日は土曜日だからね。それに、東京から地方へ大分人が流出しちゃったから。それよりも乗りますよ」

6人は列車に乗り込んだ。

「うーん。さすがに6人分の座席はなさそうだな・・・申し訳ありません皆さん。5分ほどの御辛抱願います」

尾崎が小声でメイベルたちに言う。

「構いませんよ。お忍びなんですから」

というメイベルに対して、ルイズは。

「全く、貴族の私が立ち席なんて」

「あつちの2人は我慢しているんだから、お前も我慢しろ」

「わかってるわよ」

そしてメイベルとナバルは。

「へえ、扉の上に今電車がどこを走っているのかわかる案内表示機があるんだ。日本語がわかればいいのに」

「だったら勉強するんだな」

ナバルがばつさりと言い切るが、メイベルにとってはかなり不満の残る言葉であった。

「ナバルにだけは言われたくないわ!!」

ナバルは勉強が嫌いな人種だった。

お家へ帰ろう 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お家へ帰らう 5 (前書き)

とりあえず一言。ごめんなさい。

お家へ帰ろう 5

6 2 日 目 昼 前 日 本 ・ 東 京 地 下 鉄 神 保 町 駅

「次の電車は・・・新宿行きか」

尾崎が電光掲示板に表示されている先発の電車の行き先を見ながら言った。

三田線を降りた一行は、ここで都営新宿線へと乗り換えようとしていた。都営新宿線の終点は笹塚であり、才人の家へ手っ取り早く行くには、そこから京王線に直通する電車であればならない。

が、次に来る電車はその3つ手前の新宿止まりであった。

「新宿だと、途中ですね」

才人が言う。

「才人、一体どう言うことなの？」

理解できないルイズが説明を求めた。

「次に来る電車は、途中の駅までしか行かないんだよ」

「何で途中で止まっちゃうのよ？」

「いや、俺に聞かれても困るし」

ダイヤを組むのは東京都交通局であって才人ではない。

「どうする。次の電車で飛ばすか？」

尾崎が八幡に相談するが、彼としても判断に迷う所だった。

「そうですね。けど、その次も普通ですよ。ここで待っても、新宿で乗り換えても同じですね・・・いっそ、新宿で時間でも潰しますか？時間も予算も余裕があることですし」

八幡の言うとおり。新宿に寄る位の時間なら充分あるし、全員フルチャージしたPASMOを持っているので、1回ぐらい下車しても大丈夫だ。

「そうだな」

「それに新宿は日本を代表するターミナル駅ですよ。お姫様方に見てもらった方が、後々色々と有益かもしれません」

「なるほど。よし、ではそうしよう」

2人は今後の方針を決定した。

「せっかいですから、次の電車で新宿まで行って一度降りて新宿観光でもしましょうか？」

尾崎が提案する。

「あ、それ良いかも！」

メイベルがいの一番に賛成する。

「新宿か。懐かしいな」

才人も10年ぶりの新宿に瞳を輝かせる。

「新宿とはどんな場所ですか？」

メイベルが首を傾げる。

「新宿は日本最大のターミナル駅です。新幹線こそ通っていませんが、JR線。小田急線。京王線。西武線。地下鉄などが乗り入れており、1日の利用者数は350万人近い数で、前の世界ではギネス記録にも載っていました」

八幡が得意げに説明する。だが、その桁違いの数字にルイズが反応した。

「350万人！？冗談言わないでよ！トリスティンの全ての人間を合わせたってそんなにいないわ！」

「そんなこと言ったら、東京の人口は1200万人だぞルイズ」

「う！？」

そんな2人の遣り取りを見ると、尾崎は笑いながら答えた。

「まあ、実際の所今の東京には1200万人もいないけどね。それでも1000万人弱くらいはいるかな。それでも、新宿駅は何時でも混雑している場所だから、覚悟しておいてくださいな」

一方、ナバルはホームの端（この場合線路側）に顔を出していた。「ここにはあの扉はないんだな。線路が良く見えるな……で、ちょっと変だぞ。なんで砂利がないんだ？」

その言葉に、メイベルも線路を覗き込む。

「あ、本当だ。線路に砂利がないわね。それに、なんか線路の幅もこの間の新幹線と少し違うような……」

すると、その言葉に八幡が目ざとく反応した。

「ほう。2人とも、なかなかマニアックな所に注目しましたね。まず線路に砂利、すなわちバラストがないのはレールを直接道床にボルトで固定しているからです。本来でしたら、騒音が大きくなるのであまり採用されないので、地下鉄の場合は騒音を気にしなくても良い乗り物なので、砂利の無い専門用語で言う所のスラブ軌道になっているのです」

「つまり、砂利を敷く必要がないってことか？」

「極端に言えばそうですね。そしてメイベルさんのレールの幅も大正解です。実はこの路線とこの路線が直通している京王線は全国的に見ても珍しい軌間1372mmを採用しています」

「1372mm。それはまた中途半端ね。確かあの新幹線は1435mmで、JRの普通の線路は1067mmで言ってなかった？」

「メイベルさんは記憶力もいいですね。その通り、日本で主流なの

は1435mmと1067mmです。他に762mmと言う狭い幅のレールもありますが、それは三重県と富山県にあるだけです。こんな首都のど真ん中じゃありませんね」

「どうしてそんな幅のレールを採用しているの？」

メイベルが悪い癖を出した。疑問を持ったら知りたがると言う癖を。

「また始まった」

ナバルは呆れ。才人やルイズ、アンリエッタは話についていけず（才人は興味が無い。アンリエッタやルイズは文字通り付いていけない）啞然としていた。

しかし、その時間は短かった。何故なら、構内にチャイムと共に案内放送が響いたからだ。

「まもなく、2番線に各駅停車新宿行が10両編成で到着いたします。白線の内側までお下がりください」

「あ、列車が来た。メイベルさん、話の続きは車内で行しましょう」

「わかったわ」

「さ、危ないですからもう少し下がって」

線路側に寄って話していた3人に、尾崎が下がるよう促した。もちろん、3人も慌てて下がった。

間もなく、緑色のラインの電車がホームに入線してきた。

列車が止まりドアチャイムが鳴り、扉が開くと6人は乗り込んだ。先程の三田線と違って、こちらは比較的空いていた。

「これなら座れますね」

「座れるのはありがたいわ。降りたり昇ったりで、足が疲れてきたし」

「ええ、たしかに」

乗換えで階段を昇ったり降りたり連続だったので、メイベルやルイズは正直座れるのはありがたかった。

「ただし、バラけますけどね」

八幡が言う。さすがに6人が纏って座れそうにはなかった。

「しょうがない。二組にわかれよう」

結局、尾崎の提案で彼と才人、ルイズの3人、八幡とメイベル、ナバルの3人の2組に分かれて座った。

そして6人を乗せた電車は、神保町を出て新宿へ向かって走り始めた。

「本日は、都営新宿線に御乗車いただきありがとうございます。この電車は各駅停車新宿行きです。途中急行の追い抜きはございません。終点新宿まで、先に参ります。なお新宿より先の笹塚・調布方

面へお越しのお客様は、後から参ります各駅停車笹塚行きを御利用ください」

「何を言っているのかさっぱりわからないわ」

ルイズには案内用の放送もちんぷんかんぷんサツパリであった。

「まあそれが普通だろうな」

「お2人にはわからない単語も多いでしょうし、それに長年暮らしている日本人だって時折間違えるんですからね」

「説明されてもわからないの？」

「ええ。こうした電車などの案内放送も、世界一回数が多く親切と言われる位です。しかしながら、聞き流してしまう人の方が多いんですよ。人が多い分、周囲に対して無関心になってしまっただけでしょうね」

「ああ、言われてみればそうだな。俺もよく電車使っていたけど、案内放送をマトモに聞いたりしなかったな」

「それでやる意味あるの？」

ルイズが呆れ気味に言う。わざわざちゃんと聞く人間もいないのに言うなんて、彼女にはバカらしいこととしか映らなかつた。

「やらないよりマシと言うところですよ」

「どうにも理解に苦しむわ」

ルイズの言葉に、尾崎は苦笑したまま返した。

「前の世界でもそうでしたから。日本と言う国は……新しい世界でも、世界中から奇異に見られる文化は沢山ありますよ」

尾崎とトリステインからの一行が、何時の間にか文化に関する談義に入っていたのに対して、八幡とサクラスからの一行はホームで話していた話を再開していた。

「それで、どうしてこの路線は1372mmなんていう風変わりな線路の幅を採用したのかしら？」

「それはこの路線が直通している、京王線と言う路線に原因があります」

「ケイオウ線とこのシンジユク線とか言う路線は違うのか？」

「都営線は東京都が運営している路線です。いわば官営の鉄道。対して京王線は京王電鉄と言う株式会社の鉄道です。すなわち、民間会社の鉄道です。この両者はそれぞれに直通しています」

「なるほど。サクラスの国鉄とメルカトル商会の鉄道が一緒に走っているのと同じね」

「メルカトル商会？」

聞きなれない単語に、八幡が首を捻る。

「メルカトル夫妻がやっている商会だ」

ナバルが八幡の問に答えるが。

「？」

当然である。

「ナバル。メルカトル夫人をそもそも八幡さんは知らないから答えられるわけないでしょ!？」

「あ、そうか」

「お2人とも、お客さんがいるのでお静かに」

満席まではいかないが、3人の周囲にはそれなりに乗客がいた。

「あ、ごめんなさい」

「悪い」

「で、話の続きです。我が国の鉄道は基本的に海外の技術を吸収してきました。その結果線路の幅も幾つか違う物が各地で採用されました。昔の東京には路面電車が走っていました。その軌間は1372mmでした。そして当時その東京の路面電車と相互直通を考えいていたのが京王線、当時の京王電気軌道でした。そして京王電鉄は1372mmで線路を敷設しましたが、結局都電が先に廃止されてしまい、相互に直通はしませんでした。ところが、今度は地下鉄と直通運転する計画が持ち上がり、地下鉄側が1372mmの幅で敷かれました」

「地下鉄側が京王に合わせたってことですか？」

「そうです。本当は京王が地下鉄に合わせると言う話も出たのですが、莫大な工事費が掛かる上に長期に渡る工事によって輸送力が低下するのを避けるため、地下鉄側が合わせたのです」

「うわあ。随分と歴史のある話ですね」

「日本の鉄道は開業してから既に140年近く経過しています。そりゃ重みもありますよ」

「私たちの国じゃ、まだ開通して2年も経ってないのに」

ちなみにメイベルはこう言っているが、実際の所サクラスには聖都に水力を用いたケーブルカー式の鉄道が既にあるので、鉄道の歴史がそこまでないことはない。

「だから日本には私みたいな鉄道オタクがいるわけです」

「ふーん。オタクてやたら詳しい人のことですよ？確かにそうかも」

「しかも日本の鉄道オタクの場合は裾野が広いですよ。基本だけで乗り鉄、撮り鉄、模型鉄ですから」

「それは一体？」

「乗り鉄は主に鉄道に乗るのが好きな人。撮り鉄は写真を撮るのが好きな人。模型鉄は模型を集めるのが好きな人です」

「なるほど」

「しかもこれは基本です。もっと細かい分類もありますよ。聞きます?」

「はい、よろこんで」

と2人が鉄道談義に華を咲かせている中、ナバルと言えば。

「zzzzz」

話についていけず、眠っていた。

お家へ帰ろう 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

というわけで、趣味爆発です。ごめんなさい。

本当だったら明日がバイト休みだったのですが、明日は明治村で映画のエキストラ撮影に参加してくるので。ちなみにその映画は以下のような感じです。

<http://www.isoroku.jp/>

しかしカメラの前に立つのは、中学生日記に出ていたころ以来かな？

お家へ帰ろう 6

62日目 正午過ぎ 東京・首相官邸

「そうか。じゃあ、お姫さまたちは新宿に立ち寄ることにしたわけだな」

春川はやってきた内閣情報官（内調のトップから）の本郷昭義から、メイベル・ルイズら一行の動向について聞いていた。

「はい。八幡たちからそのように連絡が来ております。今の所心配されたトラブルは何も起きておりません。また感づいた報道関係者も、我々の手で丁重に退散してもらっています」

一体どんな手を使ったのか、春川としては興味あるところであったが、聞くとか何か人として大切な物を失いそうなので、それはやめて報告に関するのみ言及した。

「しかし、大丈夫なのか？東京の人口は減ったとは言え、休日の新宿ともなればそれなりに人も多いと思うが？」

春川の問に、本郷はよどみなく答える。

「御心配なく。八幡も尾崎もそれなりに優秀ですし、いざとなれば付かず離れず付いている護衛チームが何とかします」

今回のお忍びに直接同行しているのは尾崎と八幡の2人だけである。しかしながら、間接護衛の形で20人近い内調の関係者が付いていた。そのほとんどは警察や自衛隊からの出向者であった。

彼らの内10人ほどが距離を置いて付かず離れず護衛を行い、残る10人は八幡と尾崎の情報を元に先回りして危険がないか確認していた。

また帝国ホテル近くで張り込んでいた記者たちを、色々な方法で退散させてもいた。

それはともかくとして、2人の女王様たちに何かあってからでは大変である。チンピラに絡まれてケガしましたなんてことになったら、笑いごとではすまない。

「とにかく、ことが起きてからじゃ遅いからな。しっかりと守り通してくれ」

「心得ています」

「それから・・・お姫様たちは楽しんでくれているか？」

その間に、本郷は笑みを浮かべて答えた。

「もちろんです」

その返答に、春川の顔にも笑みが浮かぶ。

「なら結構。また何か連絡が入ったら頼むよ」

「はい。失礼します」

報告を終えると、本郷は部屋から出て行った。

「どうにか、つつがなく進んでいるようだな」

本郷が部屋から出て行くと、春川は副首相の小泉に話しかけた。

「ええ」

「それにしても新宿か。彼女らまた驚くだろうな」

春川の脳裏に、巨大な都庁や多くの人が溢れる駅を見て驚くであろうメイベルやアンリエッタたちの姿が目に見え浮かんだ。

「そうですね。いい意味で日本の色々なことを理解してくれると良いですね」

小泉の言葉に、春川が頷く。

「全くだ」

その時、部屋の電話が鳴った。秘書官の朝日奈みくるが受話器を取る。

「はい、首相執務室・・・ああ、お久しぶりです・・・ええ、はい・・・ちょっと待ってくださいね。キョンさんキョンさん」

「はいはい。誰からですか？」

「奥さんからです」

「!?!?」

春川が一瞬固まった。

「あ、あいつ。あんまりにも「異世界人会わせろ！」て煩いから携帯を着信拒否設定したのに！と言っか、どうやってこの番号調べた！？誰だ！入れ知恵したのは！？」

「僕じゃありません」

「私も言ってます」

春川の絶叫に、小泉とみくるが即座に否定する。

ちなみにその犯人はと言えば。

「……………」

「どうかされましたか？長門大臣？」

「何でもない」

国交省の大臣室で相変わらずの無表情顔で仕事中であった。

「あの、キョン君。どうしますか？」

「……………気が重いですけど出ます。こちらに回してください」

「わかりました」

みくるが回線を春川の机にある電話に繋ぐ。春川は溜息を付きな

がら、呼び出し音がなり始めた電話機の受話器を取った。

同時刻 新宿駅西口

「スゴイ!!」

地上に出てきたメイベルの第一声である。

「こ、ここが新宿!? スゴイ人!」

ルイズも目を瞪る。

都営新宿線で新宿に着いた時は「通ってきた駅とあまり変わらな
いじゃない」とか「本当にここが一番人が多い駅なんですか?」と
言っていた日本出身者を除く面々であったが、地上に出たことで、
一転して驚愕してしまった。

都営新宿線の駅は、島式ホーム1本に線路が2本だけの駅なので、
確かに「世界一人が使う駅」と言われても実感が湧かない。

しかしながら、地上に出て巨大な駅ビルや周囲を取り囲む百貨店
や様々な高層ビル、そして行きかう多くの人々を見れば、嫌でも実
感できる。

一方才人は。

「懐かしいな。1年前はほとんど毎日この光景を見てたんだな」

「才人君の学校は確か？」

尾崎が尋ねる。

「秋葉原の近くです。だから新宿は通り道で、友達とよく寄ったりしました」

「そうか。しかし、新宿も随分と変わったんじゃないか？」

「そうですね。周囲の景色はそこまで変わりませんが、駅は大分綺麗になりましたね」

才人に見れば1年ぶりだが、実際には10年振りである。当然そこかしこに変化している光景が見られた。

「またゆっくり見るといいよ」

「それで尾崎さん、これからどうしますか？」

八幡が今後の方針を求めてきた。

「そうだね。まあ、都庁まで歩いて行って戻って、少しばかり百貨店とか見るのが妥当だろ？あ、メイベルさんにはそれよりも電器店見せた方が良くもしいないな」

「了解です。じゃあ、まずは都庁へ行きますか？」

「だな。それじゃあ皆さん、行きますよ」

「「「はい」」」

同時刻 新宿駅京王線口

「着いた」

涼たち一行も新宿駅に到着していた。

「さあ涼さん。一緒にユ○クロ行きましょう！」

愛が涼の腕を掴んで先手を取る。もちろん、夢子と絵理が食って掛かる。

「こら豆タンク！涼を独り占めするんじゃない！」

「愛ちゃん独占はダメ」

だがそれくらいで怯む豆タンクではない。

「いいじゃないですか！？だいたい涼さんと買い物約束をしていたのは私なんですよ。後からおまけみたいに付いてきたお二人は黙っててください」

（こ、このチビー）

（愛ちゃん調子乗りすぎ！）

場の雰囲気嫌悪になりそうになったので、涼が場をとりなそう

とする。

「まあまあ3人も、まずは愛ちゃんの言つとおり、ユニ○口へ行
こう」

「……わかったよ」

「涼さんがそう言うなら」

「やったあ！」

「で、愛ちゃんの用が終わったら、今度は2人が行きたい所へ行こ
う」

「「え!?!」」

3人が驚きの声を上げる。

「え? 僕何か変なこと言った?」

「べ、別に。そうよね。後から行けば問題ないわよね」

「じゃあ、私ちよつとパソコンの部品が見たいから、後からヨドバ
○カメラへ行ってもいい?」

「うん。いいよ、絵理ちゃん……て愛ちゃん。どうしたの?」

涼は不機嫌な表情をした愛に聞くが、もちろん彼女が正直に答えるわけがなく。

「……別に何でもないです」

対して、絵理と夢子は嬉しそうだ。

（フフフ。豆タンク。もう勝った気でいた浅はかな自分を恨むといいわ）

（愛ちゃんに色々と教育してあげる？）

と、3人の真っ黒な腹の内に全くきづくことなく、涼はノホホんと3人に言う。

「じゃあ行こうか」

と涼がリアルにリア充ぶりを爆発させている後方では、柱の影に怪しさを爆発させて周囲から好奇の目で見られる2人組がいた。一人は20代後半の女性。もう1人はやたら目立つ衣装に身を包んだ10代後半の少女であった。

「絵理をたぶらかせたのみならず、3つ股かけるなんて。いくら絵理の同期アイドルでも許せないわ」

「全くデス。先輩を毒牙にかけるなんて許せません！すぐにでも叩き潰しましょー！」

「まあ待ちなさい鈴木さん。ここじゃ目立ちすぎるわ。このままこっそり追いかけて行って、タイミングを計りましょう」

「鈴木言つなこのマダオ!……まあ、あんたの言つとおりデスけどね」

「あなたこそ、マダオは止めてよ」

としようもない遣り取りをしているのはネットアイドルのサイネリアこと鈴木彩音と絵理のプロデューサーである尾崎玲子であった。

この2人はそれこそ文字通り絵理LOVEなのであるが、最近絵理が涼に気を向けているのが面白くないらしい。

「あ、4人が動き始めた!」

「早速追いまシヨウ!」

動き出した涼たちを追つて、2人も動いた。

その様子は、お姫様一行を間接護衛する人間たちからも見られていた。

「こちらアルファ。不審な女性2人組を発見したがどうする?」

「こちらベータ。護衛対象に関係ないのなら、ほつといても構わんさ」

「こちらアルファ。了解」

ほつとかれた。

1時間半後

都庁方面まで歩き、途中食事や本屋に立ち寄りたりと時間を潰したお姫様たち一行であったが、さすがにこれ以上長居するのはどうかと言うことで、後1ヶ所回って才人の家へ向かうことにした。

ただし、行きたい場所がわかれてしまったので、集合時間を決めて二手にわかれることにした。

「それじゃあ、私とメイベルさんとナバル君の3人は電器屋を見きます」

尾崎が言うと、続いて八幡が言う。

「私とアンリエッタ陛下、ルイズさんと才人君は近くの百貨店を見ています」

「よし。集合時間を間違えないようにな」

「わかってますよ尾崎さん。京王口に15時でしょ？」

「よろしい。それじゃあ、遅れないように。そしてはぐれないように。特に才人君以外の皆さんは」

「はい！」

「わかってます」

「それじゃあ、行きましょう。八幡、くれぐれも頼むぞ」

「わかってますって」

ここで一行は二手に分かれた。

その数分後、尾崎を中心としたグループはヨ○バシカメラへとや
つて来ていた。

「スゴイスゴイ！色々な見たことのない機械が一杯ね！」

店内に並べられた電化製品や、様々な部品を見てメイベルは目を
輝かせている。

ナバルも見たことの無い機械の数々に、少々興味を示していた。

「これはなんだ？」

ナバルがデジタルカメラの記録用のチップを手に取る。空かさず、
尾崎が説明をする。

「それはデジタルカメラのチップだね・・・昔のカメラのフィルム
みたいなものかな？」

「これがフィルムだって！？へえ、随分と小さいな」

「まあ、厳密にはフィルムとは違うけど。フィルムの役割をするの
は間違いないよ」

「うーん。細かいことはわからんが、これがスゴイてことは俺にもわかるな」

と、こんな感じで店内を見て回っていた。メイベルは見たことのない製品を見るたびにはしゃいで、尾崎や店員に説明を求めていたが、もちろん尾崎にしろ店員にしろそれに対応するのが仕事なので、ちゃんと説明してあげた。

ナバルの場合は、説明には興味をほとんど示さなかったが、パソコンやカメラなどの体験には対照的に興味を示していた。ただし、まだ日本語がわからないので使いきるのは無理であった。それでも、本人はそれなりに楽しんだようであった。

そして間もなく集合場所へと向かおうかと尾崎が思い始めた頃、彼は店の柱の影に隠れてコソコソやっている、良く知っている人間の姿を見つけた。

「あれは？」

「どうかしましたか？尾崎さん」

「いえ、ちょっと……姉さん！玲子姉さん！」

尾崎に声を掛けられた女性が振り向く。

「？……え！？英雄！？どうしてここに！？」

振り向いた彼女は目を見開き、思わず叫んでいた。

「姉さんこそ、こんな所で何やってるの？」

「ええと……それは」

「ちよ、ちよつとマダオ。誰なんでスカ？この人ハ？」

尾崎と一緒にいたサイネリアもいきなりの事態に声を上げる。

「ちよ、ちよつと待ってよ！」

混乱する彼女に、さらなる事態が追い討ちをかける。

「尾崎さん？」

「？」

尾崎とサイネリアがさらに新たに声が出た方に顔を向ける。

するとそこには、絵理たち一行がキョトンとした顔で立っていた。

お家へ帰ろう 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

と言うわけで、カオスです。

それから、昨日映画のエキストラに言ってきましたが、長袖長ズボンの国民服での撮影は暑かったです。汗ダクダクでした。

ただ私はいいほうで、巡査役の人とかスーツに外套を着ている人とか、和服の割烹着を着ている国防婦人会役の人はもっと暑そうでした。

関係者の方曰く

「真冬に真夏のシーン、アラスカでハワイのシーンを撮るのは日常茶飯事」

とのことでした。

お家へ帰ろう 7 (前書き)

話が進まない。そしてネタに走りすぎてアイマスに偏っています。

アイマスは本日深夜より放送開始とのこと。しかし、私が住む名古屋はCBCなので1週間遅れ・・・己!!

お家へ帰ろう 7

62日目 16時過ぎ 日本・新宿駅京王口

「尾崎さんたち遅いな。約束の時間を10分も過ぎてているぞ」

八幡が腕時計を眺めならば、多少苛立ち気味に言う。

「何かトラブルでもあったんでしょうか？」

才人がそう言うが、八幡としてはそんなことありえないと思えた。

「トラブルがあつたのなら、すぐにあの連中が助けしてくれるはずなんだが」

「あの連中？」

八幡がポロリと零した言葉に、ルイズが反応する。

「ああ、別になんでもないです。お気になさらずに」

と、その時。携帯の着信音が鳴る。

「お！？尾崎さんからだ・・・もしもし、尾崎さん？」

八幡が携帯に出ると、どこか乾いた感じの声で尾崎が出た。

「ああ、悪い八幡君。ちょっとトラブルが起きた」

「トラブル？ヤバイことですか？」

「まあ、ヤバイようでヤバくないような」

歯切れの悪い言葉で返答する尾崎。もちろん、八幡としては納得のいく答えではない。

「一体何があったんですか？」

と聞き返すが。

「とにかく。これからそっちに俺たちも行くけど。ちょっとばかり厄介な人たちが付いて行くから覚悟しておいてな」

言うだけ言って、尾崎からの電話は切れた。

「何だって言うんだ？」

「どうしたんですか？」

「それが、厄介な人たちが付いてくるって。マスコミにでも見つかったのかな？けどそれなら、あの連中が出てくるはずなんだが」

「だからあの連中って何よ？」

「こちらのことです。お気になさらず」

そして、それから5分後。

「あ、来ました・・・て、あれ!？」

「え!？」

「どうということなの？」

才人、八幡、ルイズが順に驚きの声を上げる。

何故ならば。

「どうも遅くなりました。そして、ごめんなさい」

「その人たちが厄介な人たちですか・・・確かに厄介だな」

八幡はそう言うしかなかった。メイベルとナバルがいるのは当然であるが、その後に先ほどまではいなかった人間が6人も付いていた。しかも、その内の4人は会ったことはないが有名人であることは間違いなかった。

「ごめん。振り切ろうとしたけど、振り切れなかった」

八幡に頭を下げる尾崎に、付いてきた中で一番年長の女性が声を掛ける。

「ねえ英雄、一体どう言うことなの？この人たちは？」

「説明するから。どこか、喫茶店でも入って話をしましょう」

10分後。一行は駅構内にある喫茶店の席に腰を落ち着けていた。

「で、どうということなんですか尾崎さん？この人たちは？そしてど

うしてアイドルたちが一緒についてきているんですか!？」

席に座るなり、八幡は尾崎に質問を浴びせる。入った喫茶店の配置は4人掛けの座席が最大なので、当然ながら全員が座れるわけもなく、八幡と尾崎と女性二人（玲子とサイネリア）。若い人たちは別の座席に各々座っていた。

「とりあえず、紹介するよ。俺の姉貴でアイドル水谷絵理のプロデュースーをしている尾崎玲子だ」

その言葉に、八幡の目が点になる。

「え!?!お姉さん?尾崎さんのお姉さんで、あの水谷絵理のプロデュースーだったんですか?」

「まあね。姉さん紹介するよ。今回の仕事で一緒に組んでいる内閣府の八幡君だ」

「尾崎玲子ですよろしく。それにしても、外務省のあんたがどうして内閣府の人と一緒に?それに、あの人たちは?」

「詳しくは突っ込まないで下さい。万が一下手なことすると、命の保障ないですよ」

八幡の物騒な言葉に、玲子がうろたえる。

「え?冗談よね英雄?」

「……………」

彼は視線を逸らして何も答えない。

「ちょっとマダオ、一体何がどういうことなんデス？」

ここでサイネリアが口を挟んできた。既にSランクアイドルである絵理はともかく、ネットアイドルである彼女のことを、八幡は知るはずもなかった。

「そう言えば、そちらの方は誰です？」

「彼女は鈴木彩音さん。最近までネットアイドルをしていたけど、今度絵里さんと同じ876プロからデビュー予定のアイドル・・・で良かったよね姉さん？」

「そうよ。ああ鈴木さん。こっちは私の弟の英雄」

「え！？マダオに弟がいたんですか？」

「うちは3人姉弟ですから。もう1人、亜由美と言う名の妹がいますよ。今は新聞社で記者の卵のはずです」

「そうだったんデスカ！あんた一言も言わなかったじゃないデスカ！？」

「べ、別に言う必要も無いし。それよりも、英雄。どうしてあの人たちがあんたと一緒にいて、新宿を歩いているのよ！？あの人たち、確かサクラスの「そうだよ。だから声は小さくね。詳しいことは言えないけど、お忍びでね。俺たちはその案内役だよ。それよりも姉さんと鈴木「サイネリアデス！」失礼。サイネリアさんこそ、なんでさっきあんなこそそと物陰に隠れていたんだ？」

「ええと。それは。ほら、絵理もSランクアイドルじゃない。男の子と一緒に行動すると色々と厄介じゃない？」

「だからストーカー？しかも、明らかにあの時殺気だってなかった？」

すると、玲子とサイネリアが途端に視線を逸らした。

大人たち（1人は？が付くが）が大人な会話をしているころ、若い者は若い者どうしで会話をしていた。

ちなみに彼らは全員4人席を確保したが、組み合わせは涼・愛・夢子・絵理と才人・ルイズ・メイベル・ナバルにわかれた。もっとも、席同士は隣合わせ（涼と才人、絵理とメイベルが隣同士）だから、会話するには全くの支障がない。

下手な座席の図

涼 愛 通 才人 ルイズ

夢子 絵理 路 メイベル ナバル

「と、とりあえず自己紹介をしましょうか？ええと、秋月涼と申します」

「日高愛です！よろしく！」

「桜井夢子です。よろしく」

「水谷絵理です？よろしく？」

「何でそこで疑問形なのよ？」

「……！」「」「」

ルイズが絵理の語尾に関して質問した途端、涼たちが固まる。

ちなみに、絵理の喋る言葉の語尾がやたらと疑問形になるのは、単なる口癖だ。

「え！？私何か変なこと言った？」

「いえ、そうじゃなくて」

涼が否定すると、絵理が答えを言う。

「伊織さんと声がそっくり？」

「イオリ？誰よそれ？」

「水瀬伊織。765プロのSランクアイドルの1人よ。そんなことも知らないのかしら？」

「何ですって？」

夢子の挑戦的な言葉に、ルイズが苛立つ。

「ルイズ、こらえろ」

「夢子ちゃんも初対面の人にいきなりそんなこと言わないでよ」

「こつちも自己紹介するよ。平賀才人だ。よろしく」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「な、長い名前ですね」

愛があまりにも長い（日本人から見ても）名前に、若干引き気味だ。

「まるでヨーロッパの貴族みたい」

「見たいじゃなくて本物なんだけど」

「「「は!?!?」「」」

絵理以外が驚きの声を上げる。

「そう言えば、トリステインから来ている使節団の1人に、そんな名前の人がいたような?」

「その使節団の1人が私よ」

「「「ええ!?!?」「」」

ちなみに、この時点でアイドル4人組はルイズやメイベルのことに全く気がついていなかった。せいぜい外国人程度にしか思っていなかった。

「確か今トリスティンとサクラスから女王様が来ているんだよね・
・ま、まさかそちらの人は？」

「ええと、私かしら？メイベル・ヴァイスよ。一応、西アルテース
の女王で南アルテースの大統領なんかをやらせてもっています」

「ナバル・フェオールだ。近衛中隊長で、メイベルの護衛だ」

「……」

もはや言葉すら出ない4人。

それに対して、メイベルが愛に向かって問いかける。

「ところで、あなた」

「はい？私ですか？」

「ええと、さつき日高って言ったわよね？」

「はい。日高愛ですけど」

「もしかして、日高舞さんの娘さん？」

「えー！？女王様はママのこと知っているんですか？」

「ええ。それから、そんな堅苦しく話さなくていいわ。私のことも
メイベルって呼んで」

「は、はい！」

日高舞と言う単語に、才人も反応した。

「え！？日高舞に娘がいたの！？しかもこんなに大きい子が？」

「ちょっと才人さんでしたよね？愛ちゃんが舞さんの娘だっていうのは、有名な話じゃないですか？」

涼が言う。彼は才人に関しての事情を知らなかった。

「涼だったよな？悪いけど、俺2004年までしか知らないからさ」

「あ、そう言えば10年前にトリスティンに召喚された少年がいるってニュースでいってましたね。じゃあ、その少年が才人さんってことですか？」

「まあな。それから、俺のことは才人でいいぞ」

「わかりました。それにしても、舞さんとメイベルさんがどうしてお知り合いに？」

「確かに気になるわね？あのオーガ、一体何をしているのかしら？」

涼と夢子がそう言うのと、メイベルはクスツと小さく笑って説明をはじめた。

「私と舞さんが会ったのは、ロクシエ首都の日本大使館だよ」

「そう言えば、ママとパパは今ロクシエにいるんだった」

「そうよ。その大使館で私たちの歓迎会が開かれたんだけど、駐在武官の旦那さんと一緒に参加していたわ」

「……駐在武官!?」「……」

才人・涼・夢子・絵理がまたも驚きの声を上げる。

「え!? 日高舞の旦那って軍人?」

「そ、そうなの愛ちゃん?」

才人と涼の言葉に、愛は屈託のない笑顔で答える。

「はい。パパは航空自衛隊のパイロットです。戦闘機に乗ってるんですよ」

「愛ちゃんの家は半端ない?」

「あのオーガと戦闘機パイロットの混血…あんたのキャラクターが納得できたわ」

「ええ!? 絵理さんも夢子さんもひどいですよ、そんな言い方」

そんなやりとりを、メイベルはあきれながら見ていた。

「ええと愛さん。話を戻して良いかしら?」

「あ、ごめんなさい」

「それでね、大使館での歓迎会で彼女に会ったんだけど、そこで彼女が歌と踊りを披露してくれたわけ。凄かったなあ」

「ま、ママそんなことしてたんですか？」

外国にまで行って何をやっているのかと言う呆れと、女王様に母親が認められていることに、愛は複雑な気持ちを抱いていた。

「お2人ともいい人だったわ……舞さんにはちよつと困ったけど」

「何かいいました？」

「いいえ何でもないわ。それでね、お二人からあなたのことも聞いたのよ。何でもあなたもアイドルなんだってね？」

「そうです！私だけじゃなくてここにいる涼さんや絵理さん、夢子さんもアイドルなんです！」

愛の言葉に、涼が慌てる。

「愛ちゃん、声が大きい！」

だが、幸いにも周囲から騒がれることはなかった。

「へえ、涼たちもアイドルなんだ」

才人が少しばかり先程とは違う目で4人を見る。

「才人さんは、10年前に召喚されて今回初めて日本に帰ってきたんですよね？それじゃあ、僕たちのことを知らなくても当然ですね」

涼の言葉に、才人が苦笑いしながら答える。

「うん。悪いな。俺が知っているアイドルと言ったら、有名どころだと日高舞だな。それから、あんまり売れてなかったけど、音無小鸟とかrioliaの尾崎玲子なんかも好きだったな」

才人の言葉にアイドル4人組とサイネリアは仰天し、玲子と英雄の姉弟は思わず振り向いていた。

「……………!?」「……………」

「え！？俺何か言った？」

お家へ帰ろう 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お家へ帰ろう 8

62日目16時過ぎ 日本・新宿駅京王口近くの喫茶店

才人の何気ない一言に、アイドルたち一行は凍りついた。

「俺、何かマズイこと言った？」

「ええと……」

涼が答えにくそうに口を開く。まさか目の前にいる尾崎がそのアイドルだった尾崎玲子だとは言えない。言つとややこしくなりそうだった。場の流れるに。

そんな空気を読んだのか、まず絵理が口を開いた。

「ちよつと驚いた？」

「え！？」

続いて愛が言う。

「そ、そうなんです。だってもう引退しちゃった人の名前ばかり出すから」

「そうそう。あまりにも懐かしい名前ばかり出すんで」

明らかにどこか齒切れの悪い部分を含んでいたが、才人はそれで納得してしまった。彼が単純と言ったらお終いだ、彼自身世情に

疎いと思い込んでいたからだ。

「そう言うことか。まあ、10年経てば色々変わるよな」

「」「そうそう」「」

そんな会話を聞いていた当の本人（玲子）はと言えば。

「良かったね姉さん」

「な、何がよ？」

「かつてファンだった少年の夢を壊さなくて」

弟から醒めた声で現実を指摘されていた。

玲子は確かにアイドルだったが、諸々の事情によって最終的に低ランクでの引退を余儀なくされた。また本人も10年で大分変わってしまっている。それを才人が知れば、それなりにショックを受けるかもしれない。

「そうね」

「」「・・・」「」

八幡とサイネリアはそんな2人の微妙な空気を感じ取り、無言となった。

「お待たせしました」

場の空気を吹き飛ばすように、店員が注文した商品を持ってやって来た。机の上に並んだのは、紅茶に緑茶、おにぎりに煎餅と言ったものであった。

「改めて喫茶店でこんな商品見ると、違和感しか感じられないわね」

「と言うか、場違い以外の何物でもないですよ」

玲子とサイネリアの言葉を気にすることなく、尾崎はコーヒー用のカップに注がれていた緑茶に口を付けていた。

こうした光景は別段珍しい物ではなくなっていた。転移によって食料品の輸入が不可能となったため、色々な店はあるもので代用しなければならなかった。

特に小麦や蕎麦、大豆、砂糖、コーヒー、肉（肉の場合は餌の飼料が深刻）など自給率の低い物は深刻であった。このため休止や閉店に追い込まれた店は数知れない。

営業中の店も例えばパンを小麦製から米製に変えたり、コーヒーを緑茶や紅茶にしたり、砂糖をブドウ糖にしたり、家畜の飼料を草中心にしたりと、あの手この手でなんとか営業していた。

もつとも、これは食料品に限ったことではなく、輸入に頼っていた様々な商品に言えることだが。そのため、各産業は国内に備蓄されている分を上手く放出し、さらには代替生産する方法を血眼で開発していた。

「ああ、コーヒーにパンが懐かしいわね」

玲子の言葉に、尾崎が返す。

「コーヒ―はまだわからないけど、パンのほうはロクシエから小麦の輸入が始まったし、砂糖やトウモロコシなんかも輸入予定だから、食卓も直ぐにまた華やかになるよ」

「そう願うわ」

と大人たちはかなりシリアスな会話をしていたが、一方子供達はと言つと。

「これがお菓子？」

メイベルは煎餅菓子を見ながら怪訝な表情をした。

「そう。お煎餅という、お米から作ったお菓子です」

涼が説明する。

「クッキーみたいなもの？」

「うーん。確かにライス・クラッカーとか言いますが……まあ、とりあえず食べてみてください」

「は、はい……あら？甘くない。むしろ辛い。けど、これはこれでおいしいわね」

「まあ、塩味ですから。甘くないのは当然ですけど」

「お菓子なのに甘くないなんて不思議ね」

「お煎餅は塩や醤油で味をつけますから、基本的に辛い味なんですよ」

「ふーん。けど、これはこれでおいしいから、国に帰ったら試しに作ってみるかな」

その言葉にナバルが反応した。

「そいつは楽しみだな。俺としては甘ったるい菓子より、こっちの方が好きだ」

「え！？ナバルがそう言うならがんばるわ！」

そんな2人の様子を見て、愛・絵理・夢子は内心面白くなかった。

（（何こいつら？リア充爆発しろ！））

また3人が想いを寄せる涼はと言えば。

「お2人とも仲がいいですね」

と、2人のリア充ぶりに全く気づいていない様子で、3人の輦蹙を余計に買っていたりする。

さて、机にならんだ煎餅や緑茶に才人も口をつけていたが、彼の場合は泣かんばかりに喜んでいた。

「懐かしくて涙出そう」

「そんなに美味しい？」

「うん。やっぱり故郷の味が一番だな」

その言葉に、ルイズが俯く。

「ルイズ、そんなしよげるなって。大丈夫だよ、こんなこと位で前のことを嫌いになったりなんかしないから」

「でも、今の才人とても嬉しそうだったから」

「そりゃ、懐かしい味だったから。だからお前が気に病むことじゃないよ。大丈夫、俺はお前から離れたりしないから」

「……ありがとう」

アンリエッタが同行できなかつたこともあり、才人はルイズの独占状態だ。おかげでルイズの機嫌もよく、彼女の行動もデレの方が先行していた。

しかし、もちろんそんな光景を見せ付けられた他の人たちはと言えば。

「うわあ」

「人目気にしろよ」

「見てるごつちが恥ずかしくなりますね」

とメイベルとナバル、涼から突っ込まれ。

（（こいつらもか！？）（））

と愛・絵理・夢子の怒りにさらなるガソリンをぶっ掛けていた。

少しばかり雲行きが怪しくなってきたのを感じ取った尾崎は、机の上の皿が空になったのを見計らっていった。

「さて、そろそろ行かないとさすがに遅くなってしまいます」

彼のセリフに、八幡も腕時計を見ながら同調する。

「そうですね。では、我々は行くとしますか？」

「英雄たちはこれからどこへ行くの？」

「取りあえず京王線に乗って明大前だけど」

すると涼が反応した。

「あ、だったら僕たちと同じ方向ですね。僕たちは下高井戸なんです。だったら一緒に駅まで行きますか？」

「私は別に構わないが、皆さんはいいですか？」

「構いません」

「別に問題なし」

「俺も構いません」

「構わないわ」

メイベルもナバルも才人もルイズも、誰も反対しなかった。

「じゃあ、一緒に行こうか」

と、その途端に涼のみならず他のメンバーまで立ったことに尾崎は驚いた。

「ちよつと待った！涼君はともかく、なんで他の人まで！？」

涼だけが付いてくると思っていただけに、尾崎も八幡も驚いた。

「私たちもそつちに行くからよ」

「あれ？けど姉さんの家て確か、豊島園の方じゃなかったっけ？だったら西武線だろ？」

「細かいことはいいのよ」

「よくないし！」

結局、すったもんだの挙句。色々と言い難い事情を抱えていた玲子、サイネリア、絵理、夢子はここで退場となった。最後まで彼女らは粘ったが。

「余計なことしてないで、さっさと帰れ！じゃないと、社会的に存在抹消するよ」

「それに、いつまでもこんな集団で行動していたら目だって仕方がありませんので」

という尾崎と八幡の半ば恫喝の混じった警告によって、引き下がらざるを得なかった。もちろん、彼女らは彼らに最後まで恨み混じりの視線を送っていたが。

それはともかく、新たに涼と愛を加えた一行は京王線のホームへとやって来ていた。

「うわあ！ここもスゴいわね」

メイベルは改札口を見て目を見張った。

「人も多いわね。本当に東京て人が多いのね」

ルイズが見飽きたとばかりに言う。

「まだこんなの序の口だぜルイズ。朝とか夕方とかこの3倍は人がいるぞ」

才人の言葉に、ルイズはもう口を開くのを止めた。

「さて、どの列車に乗るか」

尾崎と八幡がどの列車に乗るべきか話し合っていた。

「一番手っ取り早いのは1番線から出る準特急ですね。けど、秋月君たちにあわせるなら快速か普通じゃないと」

涼の家へ帰るためには、下高井戸の駅で下りなければならぬが、この駅は快速と普通しか停車しない。

「あ、僕たちは構いませんよ。明大前なら、普通がすぐに来るでしょうし」

「私も付いて行きます。メイベルさんからママたちについても少し聞きたいですから」

「涼君と愛さんがそう言うなら構わないだろ。それじゃあ、準特急に乗ろう」

一向はホームへと降りる。

「ところで尾崎さん」

「何ですかメイベルさん？」

「準特急とか快速とか一体何ですか？」

「おや？メイベルさんのお国の鉄道には、特急とか急行とかはないんですか？」

「ええ。貨物列車と旅客列車と大統領専用列車しか」

そこへ鉄道オタクの八幡が登場し、説明をはじめた。

「特急と言うのは列車の種別です。この鉄道の場合は停車駅の違いで特急、準特急、急行、快速、通勤快速、各駅停車とわかれていきます。JRなどでは高速で特別な列車として別料金がとられますが、

京王線の場合は同じ車両を使って停車駅の数が違うだけの話です」

「どうしてそんな風に区別する必要があるんですか？」

「遠方へ行く乗客への便宜を図る意味や、乗客を分散させるためです。それから所要時間の短縮です。この路線の終点である八王子や高尾山へ各駅停車で行ったら1時間以上は掛かりますが、特急なら途中の駅を通過するので40分程度で着きます。遠方から急ぐ客には特急や急行、近距離や近くの駅から乗る人は普通や快速と言う感じでわけているんです。ただし、実際には速い特急や急行に集中するので朝のラッシュ時には特急の運転を止めますが」

「なるほど」

するとホームにアナウンスが響く。

「まもなく。1番線に準特急京王八王子行きが参ります。黄色い線までお下がりください。この電車は明大前、調布、府中、分倍河原、聖蹟桜ヶ丘、高幡不動、京王八王子の順に停車いたします」

放送が終わると、8両編成の電車が入線してきた。

そして入ってきた電車は、まず一行がいるホームとは逆側の扉を開ける。

「何で向こうから先に開けるのよ？」

ルイズが文句を言う。

「降りる人を先に降ろすためだよ」

才人の言うとおり、すぐに才人たちの側の扉も開いた。

「さ、乗りましょう」

尾崎に促され、一行は電車に乗り込んだ。

「ねえねえメイベルさん」

「何かしら？」

「ロクシエでママはメイベルさんに何か迷惑をかけませんでした？」

席に座ると、メイベルの隣に座った愛がメイベルに尋ねる。

「うーん……め、迷惑と言えば迷惑だったし。迷惑じゃないと言え
ば迷惑じゃないかな？」

メイベルが顔を赤くしながら、歯切れの悪い答えをする。

「うー。やっぱり何かママやったんですね！もう、いい加減にして
よ。せめてパパといる時くらいは大人しくしていて欲しいな」

「多分それは無理だと思う」

「俺も同感」

メイベルとナバルがキツパリ言い切った。

「ええええ！！！？！？」

そんな会話を聞いていた才人は苦笑い。

「ハハハ……俺の中の日高舞像が跡形もなく崩れ去ったぜ」

ここから先は、もしかしたら削るかもしれませんが。一応ガイドラインには触れてない筈だけど。

同日夜 ロクシエ連邦連邦首都・日高家

「む!？」

「どうした舞？」

夕飯を食べ終えた頃、突如舞が声を上げた。

「いや、どこかで誰かが私のことを悪く言ってるような気がして」

ちなみに犯人は愛娘だ。

「まあ、お前の場合言われても不思議じゃないからな」

「何よ！？まるで私が歩く疫病神みたいじゃない！」

「みたいじゃなくて、そのままだろ？」

「むづ。腹立つわね・・・罰として、今夜は寝かさないわよ正道さん」

舞が得物を見つけた猛獣のような目で言う。

「おいおい。ここの所毎日じゃないか。いくら今俺が定時帰宅出来るからって、ちょっと激しすぎる・・・て、何でもう脱いでる！？
て、あ！？あああああ！！！！！？！？」

お家へ帰ろう 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

舞さんは旦那さんと毎日一緒に過ごせる、結婚以来の状況がとても嬉しいそうです。

ただいま！ 1（前書き）

イ・サン見たり、コクリコ坂見たり、アニメアイマスとか見ている内に時間が過ぎてしまいました。ごめんなさい。

ただいま！ 1

62日目 16時半 日本京王線明大前駅

新宿を出発した一行は、何事もなく井の頭線との乗換駅である明大前に到着した。ここで才人やメイベルたちは才人の家がある永福町に向かうため井の頭線へ乗り換える。また一緒に来た涼たちも、ここで下高井戸に停車する普通列車に乗り換える。

だからここでお別れである。

「それじゃあ、僕たちはこれで」

「おう。涼たちも気をつけてな」

「才人さんも、気をつけて」

15分にも満たない短い時間だったが、ここに来るまで涼と才人は一緒に話をしてきた。

「男に襲われないよう気をつけろよ」

「ぎゃおおおん！トラウマを思い出させないで下さいー！」

才人が冗談めかして言うと、涼が叫ぶ。

「才人、確かに涼はなんとなくイジメタクなるキャラだけど、あんまり人をイジメルもんじゃないわよ」

「悪い悪い」

「ルイズさんまで！しかも釘宮ボイスで言われると余計に哀しいです！」

涼涙目。

一方、メイベルとナバルは愛と話していた。

「メイベルさん。お話楽しかったです！」

「私もよ愛さん。また今度、ゆっくりお茶でもしながらお話ししよう。あなたや舞さん、それに涼さんや絵理さんについても知りたいいしね」

「はい！絶対にまた会いましょう！」

と再会を誓い合い、キャツキャとしている2人に、ナバルが冷静に突っ込む。

「お前達2人とも、楽しくおしゃべりするのはいいが、もうワントーン小さくして喋れ」

「「ごめんなさい」「」

実際2人の声とテンションはやたら高かったりする。

「それじゃあ愛さん。さようなら。今度は舞さんと一緒に是非サクラスに来てね」

「はい！」

と何気ない約束をしたが、この約束が後にトンデモナイことになるのを、この時点では誰も知らない。

「それじゃあ、皆さん行くよ」

尾崎が一行に声を掛ける。

「「「はい！」」」

こうして涼たちとわかれ、一行は井の頭線へと乗り換えた。

才人の家の最寄り駅の永福町は、ここから吉祥寺側に一駅である。もう目と鼻の先だ。

だがここで、またメイベルの悪い癖が出た。それは彼女たちが井の頭線のホームへと立った時のことである。

「あら？さっき乗った電車とはまた線路の幅が違うわね？」

京王井の頭線は吉祥寺と渋谷を結ぶ路線である。新宿と八王子・高尾を結ぶ本線とは明大前でクロスしているが、全く違う系統の路線だ。

メイベルの疑問に、空かさず八幡が前へ出る。

「さすがメイベルさん。その通り。さっきの京王本線は線路の幅が1372mmですが、こちらの井の頭線は1067mmなんです」

「けど、同じ会社ですよね？」

「今はですけどね。昔は違ってたんです。70年前の戦争が原因で今のようになっただんです」

「70年前の戦争ですか？」

「ええ。70年前の太平洋戦争では、多くの産業が政府の統制を受けました。鉄道もそうです。東京周辺の私鉄は国の命令で、幾つかの会社を集約されました。京王線と井の頭線も東京急行電鉄と言う会社に統合されました。ところが、戦争が終わって大きくなりすぎた会社を分割する際に、戦前とは違う枠組みで会社が分割されました。結果、京王線と井の頭線は全く違う会社が前身だったにも関わらず、1つの会社となりました」

「なるほど」

その光景を見て、一行は呆れる。

「あーあ」

「また始まった」

「こりずによく話すわね」

才人、ナバル、ルイズがもう諦め気味に言う。さすがに付き添いで護衛も兼ねている尾崎だけはそうもいかなかった。

「あれが彼女のアイデンティティーなんじゃないんですか？……2人とも！熱く話すのはいいですが、列車が来ますよ！」

「はい」

こんなこともあったものの、5分後には一行は永福町駅の出口に立っていた。

「本当に浦島太郎の気分だぜ」

「どうしたのよ才人？故郷に帰ってきて懐かしくないの？」

「懐かしくないことはないんだけど。駅が大分変わっててさ。本当に10年経ったんだなと改めて思って」

才人が慣れ親しんだ永福町駅は改装されたらしく（現実には2008年から改装工事が始まり、2011年に終了しました）、以前とは趣が大分変わっていた。

「そう……」

ルイズが視線を落とす。

場の雰囲気が変わりかけた時、尾崎が才人に促す。

「さ、早く行こう。才人君。ここからは君自身の意思で家まで戻るべきだ。道案内、よろしく頼むよ」

「あ！？はい。わかりました。それじゃあ、行くとするか。えーと、ここは信号を渡って」

才人は1年前の記憶を頼りに、自分の家に向かって歩き始めた。

「へえ、駅周辺は賑やかだったけど、少し離れるともう静かになるのね」

「家がビッシリだな」

メイベルとナバルが、見慣れぬ日本の街を見て目をキョロキョロさせる。

「日本では駅を周辺に街が出来て行くことが多いですよ。駅周辺に商店や公共施設が集中し、その外側に住宅街が広がるように発展する光景は珍しい物ではありませんでした。ただし、最近は少し変わってきましたけど、この辺りはその典型です」

八幡が説明する。

サクラスの場合、鉄道が開通して日が浅いため、駅の周辺が発展していくまでは想像できるだろうが、そこから先の光景まではまだ見ぬことは出来なかった。ましてや、鉄道会社が住宅を分譲するなど、想像もつかないことだろう。

それはともかくとして、才人は先頭を切って歩いていく。1年ぶりに歩く道を、我が家へと至る道筋を思い出しながら進んでいく。

「その交差点を左に入って……それで、自販機のある駐車場の角を右へ曲がって……公園を通り抜けてと」

そうして住宅街の中の道を進みながら、才人は住宅街の中に思い出深いその家を見つけ出した。

「ここだ！ここが俺の家だ！」

生まれた時からの住み慣れた家。あの朝秋葉原に出かけた時も、夕方には帰ってきて当然だと考え、振り向きさえしなかった。

しかし1年ぶりにその姿を見て、才人の心の内には言い知れぬ感慨が湧き上がってきた。表札の平賀の文字も、これまでになく眩しく見えた。

「帰ってきたんだ……」

「さ、才人君。君の家なんだから」

「はい！」

尾崎に促されて、才人はインターホンのボタンを押した。

ピンポン！

電子音が響く。

「はい。どちら様？……才人、才人ね？」

インターホンの向こうから、驚く女性の声が返ってきた。もちろん、その声に才人は聞き覚えがあった。

「そつだよ母さん！俺だよ！」

間もなく、ボタンと勢い良く玄関の扉が開いた。

「お兄ちゃん！」

出てきたのは、インターホンの声とは似ても似つかない声を発する小学校低学年と思しき少女であった。

出てくるのは母か父が最初だとおもっていただけに、才人としては拍子抜けしてしまう展開だった。

「ええと……もしかして、君が才香？」

「そつだよお兄ちゃん！平賀才香、7歳！初めまして」

「ああ。初めまして」

一応わかつてはいたことだが、いきなり現れた少女がいきなり妹と言われても、やはり実感のわかない才人であった。

「こら才香。お兄ちゃんが驚いているじゃない」

少女の後ろから1人の女性が出てきた。40代半ば位。才人の目から見て、記憶にあるその姿に比べて多少老け込んでしまっているが、間違いなく彼女は。

「か、母さん!？」

「そつよ才人。色々と言いたいことや聞きたいことはあるけど。まずはとにかく……お帰りなさい」

「……俺も色々と言いたいことがあるけど、ただいま母さん」

2人は無言で抱き合い、涙を流した。その様子を、才香はキョトンとした表情で見っていた。またルイズらは、空気を読んでジッと待っていた。

1分後。

「さて才人。その人たちが連絡のあったお客様かしら？」

「ああ、紹介するよ。まず俺の御主人様のルイズ」

才人はまずルイズを紹介する。ルイズはスカートの裾を持ち、膝を曲げて才人の母親に向かって挨拶する。

「初めまして才人のお母様。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ヴァリエールです。ルイズとお呼び下さい」

「初めまして、平賀瑞江です。あなたがルイズさんね。ようこそ平賀家へ。ほら、才香も挨拶しなさい」

「平賀才香です！はじめまして、ルイズお姉ちゃん！」

「はい、初めまして」

実に微笑ましい光景であった。が！

「お姉ちゃんがお兄ちゃんのお嫁さんになるの？」

「……！？」

いきなりのことに、才人らは言葉が出ない。ただし、才人とルイ

ズの顔が真っ赤になった。

「こら才香。何言ってるの！ごめんなさいルイズさん。子供の冗談だから気にしないで」

「あ！？ええ、そうですよね。冗談ですよね。アハハハ……」

と瑞江の言葉にルイズは笑うが、その表情は満更でもなさそうなものであった。

気を取り直して、才人は紹介を再会する。

「ええと、それからこっちの2人はサクラスから来たメイベルとナバル」

「メイベル・ヴァイスです。この度は急に押しかけてすみませんでした」

「ナバル・フェオールだ。よろしく」

2人も瑞江たちに頭を下げる。

「こちらこそ」

そして最後に、護衛役の2人が名乗る。

「日本政府から皆さんの案内と護衛を命じられました。外務省の尾崎です」

「同じく、内閣府の八幡です」

「この度は、色々とお迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした」

尾崎が政府代表として謝る。

「いえいえ。才人が帰ってきてくれたのなら、それでいいんです。あの人も喜んでいきますから」

あの人と言う単語に、才人は反応した。

「そう言えば母さん。父さんは？」

「それが今日は急な仕事が入って、今は会社に行ってるわよ。なんでも今度ロクシェとの交易をはじめから、色々やらなきゃいけないんですって」

「旦那さんは、貿易会社の副社長と聞いていますが？」

「え！？副社長！？確か俺がいた時は、部長じゃなかったっけ？」

「お父さん、才人がいなくなった時は体調を崩したんだけど、才香が出来た頃からバリバリ働き出してね」

「一体俺がいない間に何があつたんだ！？」

「まあ、積もる話もあるし。お客様を待たせすぎるのも問題だから、中に入りなさい」

「そうだね」

「じゃあ、我々はこの辺で」

突然の尾崎の言葉に、皆驚く。

「え！？尾崎さんたちはどうするんですか？」

メイベルの言葉に、尾崎と八幡は事も無げに言う。

「我々の任務は皆さんの道中の案内と護衛ですから。皆さんと一緒にいるのはここまでです。明日お迎えに上がりますので。それと、アンリエッタ姫もまもなく合流なさるということなので」

「もし何かあったら、遠慮なく連絡をしてください」

「そうですか。けど、良いんですか？」

「まあ、不安はなくはないが。家の中なら大丈夫だよ。ただし、彼らのことをちゃんとわかっているのは君だけだから。しっかり頼むよ才人君」

「わかりました！」

才人にそう忠告すると、2人は行ってしまった。

「それでは皆さん。中へどうぞ」

「「「お邪魔します！」「」」

ただいま！ 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ただいま！ 2（前書き）

外伝に構っている内に遅くなりました。ごめんなさい。

ただいま！ 2

62日目 夕方 東京・平賀家

「うわあ！俺の部屋あの時のままだ！」

才人は自宅の2階にある自分の部屋に入るなり、1年前（才人の両親の時間では10年前）と全く自分の部屋が変わっていないことに感嘆の声を上げた。

「当たり前でしょ。あんたが何時でも帰ってこられるようにしていたんだから」

「ありがとう、母さん」

「色々聞きたいことはあるけど、下のお客さんを待たせちゃ悪いからね。荷物を置いたらさっさとあんたも降りてらっしゃい」

「うん」

母親の心遣いに、才人はこれまでにない程に内心感謝した。

ルイズ・メイベル・ナバルのお客様3人は1階のリビングに通され、そこにあるソファで寛いで……いたかは微妙な所であった。何故なら。

「ねえねえ。ルイズお姉ちゃんは魔女なの？」

「もちろん。私はメイジよ」

ルイズはこれでもかとはばかりに、胸を張って言う。ここまで色々
と日本の科学技術に驚かされてきた分、才人の妹である才香が羨望
の眼差しでそう言って来たのが嬉しかったのだ。

しかし。

「だったら何か魔法見せて見せて！」

「え！？ちよ、ちよつと今は無理なのよね……」

つい一瞬前の勢いはどこへやら、途端に冷や汗を掻くルイズ。自
分の国では魔法を使えるが、一歩出るともう使えないので、現段階
では彼女もただの人だ。

「ええー！」

まだ7歳の少女らしく、才香が不満の声を上げる。それを見た瑞
江が、才香を叱る。

「こら才香！ルイズちゃんを困らせちゃダメでしょ！」

「い、ごめんなさい」

「すみませんねルイズさん。家の娘が御迷惑をお掛けして」

「いいえ、お気になさらず。それよりも、私お母様に言わなければ
いけないことが」

「こちらでも聞きたいことは山ほどありますけど、それは後にしまし

よう。今は寛いでいって下さい。もうすぐ夕飯ですから。才人、それまで皆さんの相手をしっかりとあげなさい」

「はいはい」

「じゃあ私は何か軽くお菓子と飲み物用意してくるから」

言つべきことを言うと、瑞江はキッチンへ行ってしまった。才香も「手伝う！」と言って付いていった。

「いいお母さんじゃない。ナバルもそう思うでしょ？」

「ああ」

とメイベルとナバルは才人の母親を褒めたが、才人には今一ピント来ない。

「そうかな？どこにでもいる普通の母さんだと思っけど」

「その普通が一番いいものよ」

「そう言つもんなのかな？……それよりルイズ、母さんに何を言おうとしたんだ？」

「決まってるでしょ。謝ろうとしたのよ。才人の御両親に迷惑をお掛けしたのは変わらないわ」

「ああ。もしかして、心配してるのか？……だったら安心しろよ。

母さんたちがなんと言おうと、俺はお前から離れるつもりはないか

ら」

「才人」

そんな2人を見て、メイベルは羨ましそうだ。

「いいわね。そう思わないナバル？」

「ああ。仲がいいのはいいことだ」

「そじゃなくて……」

ピントの外れた答えを返す想い人に、メイベルは溜息を吐くしかなかった。

そこへ、瑞江と才香が戻ってきた。

「お茶とお菓子です」

「どうぞ」

瑞江がお盆に乗った湯飲みと急須を、才香がお菓子の乗った大きな目のお皿を、それぞれリビングにあるテーブルの上へと載せた。

「これ何？ポットにしては随分と形が変わっているわね？」

「コップも変な形」

メイベルとルイズが初めて見る急須と湯飲みに興味を示す。ホテルや喫茶店では普通にポッドと洋式のカップしか見ていなかったの
で、急須と湯飲みを目の前で見るのはこれが初めてであった。

「これは急須。緑茶を入れる日本のポッドだよ。湯飲みも日本の伝統的なコップで言えばわかるかな？」

「緑茶？紅茶とは違うの？」

メイベルが違うお茶の種類があることに驚いたらしい。(この小説では、サクラスのお茶は基本的に紅茶設定です)

「うーんと、たしか同じお茶の葉から作っているんだけど、蒸し方とかが違うって聞いたことがあるな。日本じゃ明治くらいから紅茶とかコーヒーが入ってくるようになったけど、基本にお茶って言ったら今でも緑茶だから」

才人は急須の蓋を持って軽く振ると、それぞれの湯飲みにお茶を注ぎ始めた。

「ねえ才人。このカップ、何でやたら文字が書いてあるのかしら？何かの呪術？」

ルイズに回された湯飲みには、側面にビッシリと魚鱗の漢字が書き込まれていた。寿司屋などで見かけるあれである。

しかしながら、ルイズには漢字が読めないのと文字がビッシリと言う無気味さから、何か呪文でも書いてあるのかと思ってしまったのだ。

もちろん、才人はそれを笑い飛ばした。

「ああ、そいつは寿司屋にあるような奴だな。大丈夫、書いてある

のは魚の名前だよ。呪いなんか全く書いてないって」

「そう。それならいいんだけど」

「スシって言うのは日本の伝統料理だったわよね？」

寿司と言う単語を聞いて、メイベルが食いついてきた。

「そうだよ。お酢を混ぜた御飯を握ったシャリの上に、生の魚なんかのネタを載せたやつだよ」

「生魚を食うのか？そんなもん喰って大丈夫なのか？」

ナバルがどことなく、不快感を含んだ声で言う。

「まあ、確かに生で魚を食うのは前の世界でも珍しいことだったかな。けど、新鮮な魚なら大丈夫だぜ。日本じゃ魚を生で食べるのは、別に珍しいことじゃないからな」

「ふーん。その寿司とか刺身と言う料理も是非とも食べてみたいわね」

と雑談に耽り始めた才人に、才香が不満気に言う。

「ねえお兄ちゃん。早く食べようよ」

「あー！ごめんごめん」

「じゃあいただきますー！」

才香が先陣を切ってお菓子の皿に手を伸ばした。

「じゃあ、皆も食べなよ」

「それじゃあ遠慮なく」

「いただきます」

お皿の上に並んでいるお菓子の多くは、やはりと言おうか煎餅とかあられと言った米で出来た菓子が目立った。それでも、クッキーとかチョコも一応出されていた。

「チョコ食べるの久しぶり！」

と才香が喜んで口に運ぶ光景に、才人は少しばかり引いてしまった。

「才香。そんなにチョコとか食べてないのか？」

「うん。だって売ってないんだもん。売ってもすぐに売り切れちゃうし」

「うわ……たしかチョコってカカオから作るんだっただよな？どこからか輸入できればいいけど」

「確かカカオなら、家の国の南の方で栽培しているって聞いたわ。その内日本にも輸出できるかもしれないわね」

メイベルは才人の言葉から、瞬時に自国での状況を思い出して見込みを立てる。

一方ルイズは、初めて食べるチョコレートに興味津々だ。

「ま、真っ黒ね。毒とかじゃないわよね？」

どうやら黒いので怖いようだ。もちろん、才人からしたら何をバカなことをやっているんだと言いたくなる光景である。

「あのなあ、毒物を皿に出すわけないだろ。それに、さっき才香が普通に食べてたじゃないか。何言ってるんだよ？」

「そ、そうよね。じゃあ、いただきます」

まだ少々恐る恐ると言う感じであったが、ルイズはチョコを口の中に放り込んだ。そしてしばらく口の中で味を咀嚼する。

「あ、甘い。とってもおいしいわ！」

途端にルイズの表情に笑みが戻る。

「だろ？ 苦い奴もあるんだけどな」

「それってビターチョコレートのことね？ あれはあれでおいしいわよね」

「俺はどっちかというと、あっちの方が好きだな」

ナバルは甘い物がそこまで好きと言うわけではなさそうであった。

「甘いのは良いけど、口の中が甘くなり過ぎたわね」

ルイズは無意識に湯飲みに口をつけて、中の緑茶を口に含んだ。

「うー!? そう言えばこれリョクチャとか言ったわね。緑色も変だけど、味も変わってるわね」

「どれどれ?」

ナバルも極々とお茶を流し込んだ。

「確かに初めての味だが、そこまで不味くはないだろ。俺は嫌いじゃないぜ」

またメイベルと言えば。

「確かに。私たちの国にはない味だけど、そこまでマズイと言うこととはないわね。それにしても面白いわね。元は同じお茶の葉なのに加工する時の方法の違いだけでここまで変わるなんて。いろいろな食材を見てきたけど、お茶は盲点だったわ。帰ったらお茶にも凝ってみようかしら?」

「そうだな。凝るのはお茶だけにしといたらどうだ?」

日頃の悪い癖を皮肉ったナバルがメイベルに言い放った。

「ナバルー! そんな言い方すること無いじゃない!」

何時も通りの掛け合いになった。もっとも、他人から見ればいちやいちゃ劇なのだが。

「何かム力つくわね」

「ああ。止めようか」

と才人が止める前に、動いた人間がいた。

「ねえねえ、メイベルお姉ちゃん？」

才香だった。

「何かな才香さん？」

「メイベルお姉ちゃんとナバルお兄ちゃんは付き合ってるの？」

「え？……ええ！！？？」

「だって2人ともとっても仲がいいんだもん」

「ええとね、私とナバルは「別に付き合ってるとかそう言う仲じゃないぞ。俺はあくまでメイベルの護衛で、相棒として側にいるだけだからな」

メイベルの言葉を制するように、ナバルが言い放つ。

「そうなの？じゃあ2人は付き合わないの」

「それはまだわからん。俺は別にメイベルのことが嫌いじゃないし、メイベルも俺のことが嫌いってわけじゃないだろうからな。けど、今の俺は己を磨かなきゃならん時だからな。結婚とか付き合つとかそんなこと考えている時じゃないんだ」

「ふーん。そうなんだ」

と、小さな才香は無邪気であるから、ナバルの言ったことをそのまま受け入れた。

が、才人とルイズはそうとも行かなかった。

「うわあ」

「あそこまでキツパリ言っちゃうなんて……メイベル燃え尽きちゃってるわよ」

2人の視線の先では、メイベルが固まってしまっていた。完全に機能停止している。

「どうしよう才人？」

「どうしようもないだろ」

こればかりはメイベルとナバルの問題なので、2人にはどうしようもなかった。

「ねえ才人お兄ちゃん。メイベルお姉ちゃんどうかしたの？」

「才香にはまだ早い問題だ」

「？」

無邪気な才香は、ただ首を傾げるだけであった。

一方メイベルは。

(そこまでキツパリ言わなくても……けど今の言葉だと、ナバルが付き合ってくれるのは何年も先になりそうだし)

その時、メイベルの言葉に蘇ったのは。

「押し倒しちゃえばいいのよ」

と言う日高舞の言葉だった。

(こっぴなったら！)

「さ、才人！メイベルから何か変なオーラが！？」

「見なかった！俺たちは何も見なかった！！」

ただいま！ 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ただいま！ 3

62日目 夕方 日本・東京平賀家リビング

「お帰りなさいお父さん！」

才香が玄関で帰ってきたスーツ姿の父親を出迎えた。普段は才香1人であったが、今日はもう1人の人物が彼を出迎えていた。

「ただいま父さん」

「おお！ただいま、才香。そして……才人。よく帰ってきた」

心なしかその声には、深い感慨が含まれていた。

「父さん。俺、帰ってきたよ」

「ああ。ま、積もる話は後にしよう。まずはお客さんを出迎えないとな」

才人の父は、玄関にある複数の靴をチラリと見る。

「ああ、皆リビングに集まってるよ」

「わかった」

それから1分もしない内に、才人の父親はリビングへと入っていた。

「ようこそ皆さん。我が家に才人の父親の平賀才助です」

すると、まずルイズが立ち上がって挨拶した。

「は、初めまして才人のお父様。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します」

さらに残るメイベルとナバルも続くが、彼らの場合はルイズのよ
うに気兼ねする必要がないので極普通だ。

「初めまして。サクラスより参りましたメイベル・ヴァイスです」

「ナバル・フェオールだ。よろしく」

「御丁寧にどうも皆さん。何も無い家ですが、どうか寛いで行っ
てくださいね。私は着替えてきますので」

そう言うと、才助は一旦リビングから出て行った。

「ルイズ、お前緊張し過ぎだった」

「う、煩いわね！緊張しない筈がないじゃない」

ルイズの悩みはルイズ独特の物だから仕方が無い。

「へえ、あの方が才人のお父さんなんだ。いかにもどこかの会社で
働いているって感じね」

「うちの親父とは大違いだな」

「そう言えば、ナバルの父さんは何やってるの？」

「うちの親父は鍛冶屋だけ」

「へえ、鍛冶屋てことは職人なんだな。すげえな」

ナバルの間に、才人は少しばかり関心する。

「そんな褒めるもんじゃない。ただの頑固親父だよ」

と答えるものの、父親が褒められたとので多少嬉しそうであった。

一方。

「ねえねえお兄ちゃん。カジヤって何？火をつける仕事？」

意味を理解できない才香が首を傾げた。彼女は火事と言う言葉から、放火犯か何かと勘違いしているようだ。

「違うよ才香。カジって言っても火がつく火事じゃないぞ。鍛冶屋って言うのはだな……そうだな、簡単に言えば剣とかを作る仕事かな」

才人の説明を聞いても、才香には想像できないようだった。

「うーん。よくわかんない」

「まあ、今の日本に鍛冶屋なんか珍しいからな」

「日本には鍛冶屋がないのか？」

「ないことはないんだろうけど、あんまり見かける仕事じゃないね」
ナバルの言葉に、才人が答えるとメイベルが何かを納得したように頷いた。

「確かに。これだけ技術が進んでると色々な物を機械で作ってそう
だもんね」

「まあな」

「才人の国は何でもかんでも機械で作っているってこと？」

「いや、それはさすがに極論だぞ」

ルイズの言葉に、才人が顔をしかめる。

「その通りですよ」

「父さん？」

才人の言葉にあわせるように、父親の才助が戻ってきた。先ほどのスーツ姿から、ラフな格好に着替えていた。

「日本人が何でもかんでも機械で造るってのは、才人の言うとおり間違いです。そりゃ昔に比べて数は少なくなりましたが、手作りで作る人もたくさんいますよ。特に古くから伝わる織物とか陶器などの工芸品はそうですね。最近ではそうした技術を守るといふ運動も起きています。まあ、そうした問題に対する取り組みも端緒についたばかりのところ、今回の転移ですけどね」

「失礼ですけど、才人のお父さんは貿易商と聞きましたが？」

メイベルの質問に、才助は笑って頷いた。

「ええ。貿易会社の社員です。貿易会社と言っても丸〇とか〇井に比べればはるかに小さな会社です。それでも、転移前は各国に日本の工芸品や手芸品を輸出していましたが、今回の転移のお陰で一からやり直します」

「失礼ですけど、工芸品とか手芸品とは一体？」

「ああ、幾つかサンプルがあるので見せてあげますよ」

そう言うと、才助はまたも部屋から出て行った。しかし、今度は先程より短い時間で戻ってきた。

「お待たせしました。こう言うものです」

と才助が持つてきて見せたのは、なにやら織物の切れ端と思われるものや、小さな焼き物の類であった。

「こっちは多摩織と言う東京郊外で伝統的に造られている織物のサンプル。こっちは瀬戸焼と言う焼き物で造った風鈴です」

「フウリン？」

ルイズ・メイベル・ナバルの3人が首を傾げる。

「夏に軒先に吊り下げておいて、風が吹くと音が出るんです。こん

な感じに」

才助が振ると、チンチンと言つ心地よい音が聞こえてくる。

「確かに音は良いけど。何でそんなものを造るのか、よくわかんないわね」

すると才助は笑った。

「まあ、初めて接する外国の方はそんな反応をして当然でしょうね」
そんな中、才香が才助に言う。

「ねえお父さん。私この間見せてもらったやつ見たい」

「ああ、あれか。まあ、いいけど。皆さんちょっと待っていてください
いね」

才助は再びリビングから出て行った。しかし、今度は先程よりも短い時間で帰ってきた。手にトマトを持って。

「あら、おいしそうなトマトですね」

とメイベルが言うと、才助の顔がほころぶ。

「あ、騙されましたね」

「え!？」

「どいぞ」

才助はメイベルにいきなりトマトを投げた。

「わ！わ！？……え！？」

手にとったメイベルは首を傾げる。

「どうしたんだメイベル？」

「ねえ、ナバル。これ、本物じゃないわよね？」

「え！？……あ、本当だ。よく出来てるけど、これ堅いぞ」

手にとったナバルも、そのトマトが本物でないことにすぐに気づいた。

「実はそれ、食品サンプルなんです」

「」「食品サンプル？」「」

才人の頭に、パツと思ひ浮かぶものがあつた。

「それって、あれだろ？レストランとかでショーケースにはいつてる、料理の模型だろ」

「そうそう」

「何でそんなものがあるのよ？」

ルイズには食べ物を模型にする意味が理解出来なかった。

「お客に自分の店で売っている食品や料理がどんなものか教えるために置く物なんです。しかし、あまりに精巧なものですから、最近じゃ外国人がお土産目的に買っていくことがあって、うちの会社でもかなり少数ですが、輸出していたんです。結構映画会社とか、そう言うところからも好評でしたよ」

「日本人ってやっぱり理解できない部分があるわね」

「人間すぐに理解出切れれば苦労しませんよ。ましてや異なる文化の持ち主ならね」

自信の苦い経験もあり、才助は自嘲気味に言った。

その時、家のインターホンが鳴った。

同日夕方 トリステイン王国王都・トリスタニア 王宮

「暑いすな」

「暑いすね」

6月にも関わらず、小笠原とほぼ同じ緯度に転移してしまったトリステイン王国は、急激な気温上昇に悩まされていた。元がヨーロッパの気候であったのが、一転して南の島であるから、堪った物ではなかった。

こればかりは平民だろうがメイジだろうが、貴族だろうが平等に

襲い掛かってくるものだった。既に国内では熱中症による死者や負傷者が多数報告されていた。

トリステインの国民は薄手になるなり、外での活動時間を減らすなど生活スタイルを変えることで、この暑さを凌ぐのに躍起になっていた。もちろん中には伝統だからアードゴダ言っていた貴族などもいたが、そう言う人間は真つ先に洗礼を受けるだけであった。

加えて気候の変化は農作物に大打撃を与えていた。特に小麦は育たず、今年の秋以降の食料不足が現実のものとなっていた。

ちなみに、日本では既にトリステインのこうした現実から農作物を砂糖やコーヒー、サツマイモや米、パイナップルなどを育てるように薦めている。この計画は翌年以降、苗木などをサクラスが提供することで実現している。

そしてこの年に限っては、昨年の備蓄分とすぐに調達できる魚など代用できる物を総動員することで、糊口をしのぐとトリステイン政府は計画していた。

ただそうしたこの後の危機は置いておいて、トリステイン政府は目の前に迫っている危機とも対峙しなくてはならなかった。

王宮で話をしているのは、現在事実上国政を預かっているマザリ―二枢機卿と内務大臣のヴァリエール公爵。そして、日本大使館の本多大使と駐留自衛隊司令官の梶田一尉であった。なお書記官として高風春名も一緒だ。

「しかし、このカキ氷と言う物はおいしいですな」

そう言うと、マザリーニは蜂蜜が掛かったカキ氷を口に運ぶ。

「単純に氷を削っただけなのに、どうして。中々のものじゃないですか」

と高貴な貴族であるヴァリエール公爵さえそんな事を言う。それほどまでに、暑いのだ。

国家の最高責任者と大使がカキ氷を食べながら会談するのはどこか滑稽な場面であるが、こうでもしないとやってられないらしい。

そして、双方が今議題としている内容は、そんな光景とは裏腹に物騒なものであった。

「それで、一部の貴族間に怪しい動きがあるということなのですか？」

「はい。転移の後、ゴンドランをはじめとする反王室派の貴族は粛清したのですが、それも全てではありません。一部には未だに王室や日本を快く思わない貴族もいます。そしてその貴族らが、最近傭兵の募集や互いに活発なやりとりをしている兆候がありまして」

マザリーニの言葉に、本多が問う。

「取り締まりは出来ないのですか？」

「傭兵の募集は、領内の警備に必要なものと言い張っていますし、活発なやりとりも私的なものであると言い張っています。実際、傭兵の数はそれ程多いわけではありませんし、しかも昨今の状況であり集まっていけないようです。提出された手紙などにも怪しい点は

ありませんでした」

「では、そこまで過敏になる必要はないのでは？」

その本多の言葉に反論したのは、梶田だった。

「わかりませんぞ。上手く行っていないからこそ、暴発しないとも限りません。それに、例えばの話ですが、王政府と日本大使館のみにターゲットを絞れば、大した数はいらないと判断するかもしれませんが」

「梶田一尉の言うとおり。私もその点を懸念している。もちろん、我が政府もトリスタニア周辺の警戒を充分にしているが、そちらも油断しないよう頼みます」

さすがは元が軍事であるヴァリエール公爵の言葉に、本多は小さく頷くと。

「わかりました。まあ、もし襲われたとしても。ククク……」

笑っただけであった。

そんな滑稽かつ物騒な複雑な空気をはらんだ会談は日暮れ前には終了した。

会議終了後、ヴァリエールが本多に声を掛けた。

「ところで大使殿」

「なんででしょうか？」

「例のこと、しっかりお願いしますぞ。これ以上待たせると妻が煩いですし、何より……」

「わかっています。親が子を想う気持ちは万国共通ですから。大使館も大分落ち着きましたし、こちらはいつでも大丈夫です。」

それを聞いたヴァリエールは、会議の時とは一転して顔を綻ばせていた。

この会話の意味がなすことが現実のものとなるのは、それから間もなくのことであった。

ただいま！ 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ただいま！ 4

62日目夜 日本 東京 平賀家

「お初にお目にかかります。才さんの御家族の皆様。トリステイン王国女王のアンリエッタ・ド・トリステインです」

アンリエッタは深々と頭を下げる。お姫様が庶民に頭を下げるなど前代未聞だが、彼女は実際に対面した才人の両親に頭を下げた。

もともと、これには彼女なりの謝罪と期待（野望の間違えかも）があつたし、加えてここに来るまでの間に着替えたのか、彼女が来ているのは極普通の服だったから、違和感もそこまで大きくは無かつた。

「才人の父親の平賀才助です」

「母親の平賀瑞江です」

「妹の平賀才香です」

「この度は急な訪問で申し訳ありませんでした。しかしながら、才人さんに関してトリステインを代表して謝罪しなければならないと思ひ、参りました次第です」

アンリエッタがどこまで本音で言っているかはともかく、この一言はルイズにプレッシャーをあたえるものであつた。

（姫様。それは本音？私への宛てつけ？それとも才人の家族への取

り入り?)

ルイズの剣呑な空気が拡散される。

「なあメイベル。なんかルイズの様子がおかしくないか?」

小声でソツと言うと、メイベルは素っ気無く返す。

「女の戦いは怖いってことよ」

「はあ?」

そんな外野たちを気にすることなく、当事者たちは話を進めて行く。

「いえいえ。こちらこそ、わざわざ女王様にそう言っていたただけで光栄です」

「まあ、積もる話は後にして、もう夕飯の時間ですから、先に食事にしましょう。お姫様の口に合えばよいのですが」

「お気になさらずお母様。それから私のことはアンリエッタ、長ければアンとおよびください」

「それではアンさん。狭い家ですが、どうかごゆっくり。才人、才香、それにあなた。夕飯にするから手伝って」

「うん」「」

才人らが食事の準備のためにキッチンの方へと移動すると、アン

リエツタはルイズの横に腰を降ろした。

「姫様」

「何でしょうかルイズ？」

「言っておきますけど。才人は私のものです」

「あら。まだ確定したわけではありませんでしょ？勝負は最後までどうなるかわからないものです」

「と言うことはやっぱり、才人を狙っているんですね。だったらさっきの挨拶は私への当て付けですか？」

「その気持ちがないと言えば嘘になります「な!？」けどねルイズ。お詫びの気持ちは本物です。あなたも才人さんのお母様のお顔を見ただしよ。とても生き生きとしていらっしやいました。才人さんの御両親は10年も才人さんの身を案じていたのですから、当然ですようね」

「それは……」

「確かに、サモン・サーヴァントで彼を呼び出したのは仕方が無いことだったのかもしれませんが。でもルイズ。彼を呼び出して私たちの戦争に巻き込んでしまった責任は私にもあるの。だから、さっきの謝罪は嘘偽りのないものよ」

さすがにここまで言われてはルイズも強く言い返せない。

「わかりました。今回はそう言うことにしておきましょう。しかし

ですね陛下、さつきも言ったとおり才人は「私の物」ですからね！
奪える物なら奪ってみなさい！」

ルイズはちゃんと釘を指すのは忘れなかった。

「ええ。正々堂々と勝負しましょう」

2人とも口調こそ静かだが、明らかに単語一つ一つに何かが含まれていた。その何かに、外野のメイベルとナバルは恐怖を感じた。

（（怖！））

そんなこともあったが、その後平賀一家による夕飯の準備も終わり、夕飯の時間となった。

「異世界の皆さんのお口に合えば良いんですけどね」

「あの才人のお母様。それはいいんですけど、これは何ですか？」

ルイズが疑問を持ったのも当然だった。家にいる全員が車座になって囲んだテーブルの上に乗っているのは、鉄板のようなものだった。

もちろん才人には何かわかる。

「こいつは電器の熱で食材を焼くプレートだよ」

「へえ、家の中でバーベキューが出来るってことですか？」

「あ、サクラスにもバーベキューあるんだ」

メイベルの言葉に、才人は少しばかり驚きを感じた。

「それじゃあ食材を焼いていくので、ちょっとお待ちください」

「野菜ばかりだね」

才香が瑞江が持つ大皿に乗った野菜を見て言う。

「肉もあるけど、鳥や豚ばかりだね」

さらに才人が肉の乗った皿を見て言う。

そんな2人に才助がピシヤリと言う。

「2人とも贅沢言うな、これだけ食えるようになったただけでもありがたく思わないといけないぞ」

「そんなに大変だったの？」

「ああ。転移直後なんか、肉はおろか魚だって食えるかどうかだったからな」

自分の国が瀕していた事態に、才人は呆然となった。そんな彼を見て、才助が笑う。

「安心しろ。今じゃ石油も出るし、ロクシエからある程度物資が入ってくるようになったからな。すぐに国民が飢えるようなことはないさ。まあ、ビールは相変わらず飲めないのは残念だがな」

「ロクシエからはどのような物が入ってきているんですか？」

メイベルが少しばかり興味を抱き、会話に入り込んできた。

「今の所小麦とか大豆とか、日本で不足している食料品とかですね。日本はその見返りに技術の供与を行っているそうですが、いずれそれだけじゃ行き詰るのは目に見えていますからね、前の世界と同じく広く色々な物が取引されるでしょう」

「我が国も一刻も早く日本と正式な関係を築きたいですね。我が国じゃ食料品とかの輸出は余裕がありますし、早く日本から技術を取り入れたいし」

技術バカとも言えるメイベルはここでも以前からの願望を口にした。

「そうですね、そうなるといいですね。日本は無資源国ですが、輸出できる製品や技術はたくさんあると自負していますから」

そんな難しい会話がされる一方。

「ねえねえお母さん。テレビつけていい？」

「いいわよ。けど皆の邪魔にならないようにね」

「はい」

才香はテレビのスイッチを入れた。

それを見た才人は才助に聞く。

「デジタルって本当に綺麗だな。ところで父さん、才香はどんな番組が好きなの？」

「あいつはバラエティーや歌番組だな。ただ、今はどっちも製作がストップしているから、再放送ばかりだな。とにかく、転移のせいで新規の番組はニュースぐらいで、どこの番組も再放送ばかりになっちまった」

「それ、つまらなくない？」

「つまらなくても、他にやっているのがないんだから仕方が無いよ。ああ才香、1回でいいからチャンネルを回してくれ。どんな番組がやってるか見たい」

「うん」

才香がチャンネルを変える。その様子をメイベルが興味深そうに見る。

「やっぱり電波を飛ばすって便利ね」

「ああ、一々機械に取り付かなくてもいいからな……うん？今は？」

才香が変えていくチャンネルの中で、ナバルは何となく変わった映像を見つけた。それは再放送中の「水戸黄門」だった。ちょうどクライマックスのチャンバラシーンが終わり、あの印籠が出されている所だった。

「うわ！水戸黄門なんて懐かしいな」

才人は純粹に懐かしさだけ感じたが、異世界から来た一行には新鮮、と言うか異様だった。

「ねえ才人、あの人たちの格好おかしくないかしら？」

ルイズの質問に、才人は当然とばかりに答える。

「ああ、あれは数百年前の話だからな。昔の日本人はあんな格好していたのさ」

「ミトコウモンで言ったわよね、どんな話なの？」

「ええとだな、引退したお殿様が商人に変装して色々な国を旅するんだ。そして旅した先で悪人を見つけては、仲間と一緒に成敗するって話だ」

才人の説明に反応したのは、アンリエッタだった。

「まあ、面白そう。私もやってみようかしら？」

「「やめてください！！」」

即効でルイズと才人が突っ込んだ。

そんな会話はともかく、画面を見ていた才助は特に面白そうな番組を認められなかった。

「何にもやってないな。才香、お前が見ていた番組に戻していいぞ」

「うん」

才香は最初に見ていた歌番組に戻した。チャンネルに戻したとき、ちょうど2人組みのアイドルが歌を歌おうとしているところだった。

「あーやよいおりだ！」

才香が叫んだものだから、全員の視線がテレビに向いた。

「誰あれ？新しいアイドル？」

才人が才助に尋ねる。

「別に新しくは……ああ、才人にとつちや新しいか。右の娘が水瀬伊織。左の娘が高槻やよいだ。今売れっ子のアイドルだよ」

「ふーん」

一方叫んだ才香はルイズの服の袖を引っ張る。

「あのいおりんの声がルイズお姉ちゃんにそっくりなの」

「あら、そうなの？」

ルイズは半信半疑であった。

「あ、歌うみたいね」

メイベルが言ったとおり、間もなく画面の中の伊織とやよいが踊

りながら歌い始めた。

「あ、本当にそっくり」

「そっくりですね」

「気持ち悪いくらいにそっくりだな」

伊織の歌声を聞いてメイベルとアンリエッタ、ナバルが感想を口にする。そりゃそうだ。中の人と同じなのだから。

「へえ、た、たしかにそっくりね。けど、所詮はアイドルとか言う歌って踊るだけの娘でしょ？じゃあ、私と比べものになんか」

とルイズは言うが、そこに才人がピシャリと言う。

「ルイズ、前にも言ったけど日本じゃトリステインと違って、歌手や役者の地位は高いぞ。国民栄誉賞を与えられる位だぞ。つまり、憧れの仕事ってこと」

「え!?!」

トリステインでは役者や踊り子の地位は低い。下賤な仕事と違ってよい。しかしながら、転移してきた日本を筆頭にロクシエ、サクラス、後に転移してくる露西亞帝国やフェアリーランド王国でもそのような文化は無く、トリステイン人が海外へ留学するともっとも驚き、そしてもっとも早く変化した文化となる。

さらに才助が言う。

「才人の言うとおりですね。しかも水瀬伊織はあの「水瀬財閥」の娘で、家柄もかなりいいですから」

「ええ！？あの有名な「水瀬財閥」の娘なの？」

才人がさらに驚きの声を上げる。水瀬財閥はこの木は何の木、気になるのCMで全国民に知られる財閥だった。

「ちなみに、「萩原重工」の娘さんの萩原雪歩も同じ事務所のアイドルだぞ」

さらに才人は衝撃を受ける。

「げ！俺がいない間に芸能界はスゴイことになったもんだな！！」

才人は10年間のギャップを新たに認識した。

一方画面を見ていたメイベルは。

「スゴイスゴイ！あの舞台装置や衣装は一体どうなっているのかしらっ？」

技術屋らしい視点で釘付け。一方ナバルは。

「へえ、あれだけの踊りを歌いながらするなんて、相当練習したんだろうな」

と体力バカ的な発言をした。

そしてアンリエッタはと言えば。

「確かに、あれだけ輝ければ誰もがあこがれるでしょうね」
と純粹に感想を口にしていた。

ただいま！ 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

ただいま！ 5

6月2日夕方 日本・東京 首相官邸

「そうか、 諸島の主だった島への上陸は無事成功したか」

この日の夕方、使節団との合同視察から戻った春川首相は、防衛省からもたらされた情報に喜んだ。その情報とは、先週から調査に入った 諸島の島の内、人間の生存に適すかもしくは資源の存在が見込まれる島への上陸作戦が全て終了したと言うものであった。

諸島の島々は、最新の観測データによれば岩礁に近い小さなものも含めて40程度にまで数が増えている。しかしながら、その内ある程度人が済めるほどの大きさを有するのは10あまりとなっている。

「何せ在日米軍が協力してくれましたからね、調査のための人員や戦力に余裕を持つことが出来ました」

石川防衛大臣が嬉しそうに言う。バケトカゲ等の存在のため、当初は全ての島に上陸するのに2週間は掛かると予想されていたが、予定よりも早く上陸が成功したことに安堵したようだった。

「マーシャル大使とホイットモア中将には後で感謝しないといけない」

今回の作戦で在日米軍の参加が可能となったのは、ジェームズ・マーシャル駐日大使と在日米軍司令官兼空軍司令官であるトーマス・ホイットモア中将の協力が大きかった。

もちろん、艦艇や部隊を供出した海兵隊司令官や第七艦隊司令官にも感謝の意を伝える必要があるだろう。

「ですが全てが順長と言うわけではありませんよ首相。既に在日米軍、自衛隊員、民間からの調査員から1名ずつ死者が出ています」

小泉副首相が冷静に指摘する。何分未知の生物や植物がある場所だけに、犠牲が出てしまうのは止むを得ない事態と言える。

実際巡視船「りゅうきゆう」がシー・サーペントに撃沈されて乗員全員が殉職する事件が発生していこう、世論も「この世界ではどんなことが起きてもおかしくない」と言う考え方から、ある程度犠牲を容認する傾向があった。

ただし、その傾向は転移前と比較しての話しに過ぎない。実際に遺族からの攻撃や、野党からの突き上げもあるにはある。ただ野党からの突き上げに関しては、世論の反応を気にしてかここ最近は低調だ。

突き上げをした議員が猛抗議を受けてしまったのだから、仕方が無いと言えば仕方が無い。

もつとも、春川自身は首相としても人間としても良心の呵責と責任はちゃんと感じているし、遺族への救済処置をしっかりと行うよう厳命していた。

しかし問題はそれだけではない。すぐに木戸外務大臣が口を開いた。

「死者についての問題もありますが、今後の同島の開発についても問題です。マーシャル大使の提案する自治領化の方は良いのですが……」

「問題は他の国の政府か……」

新たに発見した 諸島を独立化を前提とした自治領として在日外国人に対して開放するという案は、在日アメリカ軍を中心としたアメリカ大使館より発案された。

当初新領土となりえる土地を手放すことに対して、政府や国民内でも意見が割れた。無資源国である日本としては、この新領土は魅力的であり、それをわざわざ外国人に引き渡すことに対する反対意見が出た。その一方で、外国人を厄介払い出来ると言う見方や、しばらくの間は建国直後の国固めの時期に日本政府が介入できるから資源などの優先調達はこの道可能だから大丈夫と言う意見まで、様々な意見が出た。

実際の所、 諸島を自治領として独立させたところで日本政府がその開発に介入するのは避けられないところであり、また国内にいる在日米軍を厄介払い出来るまたとない機会であった。

もちろん、日本政府としては空母「ジョージ・ワシントン」や各種過剰装備の一部引渡しや廃棄（これには核が含まれている）をはじめとする条件を提示しており、在日米軍はそれに前向きになっていた。

また世論も、自治領化に対して次第に容認しつつあった。

が、それに対して新たな懸念材料がたくさん出てきた。とくに

諸島にバケトカゲがいるということや、新世界における諸外国の承認（これについては既に各国間と交渉を進めつつあった）と言う問題以上に厄介な事案となったのが、アメリカ以外の各国大使館までもが自治領政府創設への介入を要求してきたからだ。

ちなみに露骨な介入を要求したのは、英仏露中と言った国々の大使館であった。それ以外の小国の大使館からも、当然ながら自治領政府創設に対する自国の介入要求があった。

春川ら日本政府としてもこれは予想できたことであつたし、予想していた。ただし、アメリカの場合は他国にはない在日米軍という強大な軍事力があるため、最終的にはアメリカが中心で創設となるだろうと楽観的に考えていた。だから、強固な各国からの要求に驚いた位だ。

日本政府は外務省を中心として、各国の大使館と協議を進めたが数が多く、しかも各国とも一行に譲歩の色を見せないため、お手上げであつた。

「たく、せつかく上手く行っていると思つたところで無茶なことばっかり言いやがって」

「しかしながら首相。祖国を失つた彼らの心情も慮つて下さい。我々日本人は物心ともに故郷があります。しかしながら、彼らはそのどちらも失いかねない状況なのです。自分たちのアイデンティティが危機に瀕している。これほど恐ろしいことはないでしょうに」

木戸の言葉に、春川は理解は出来るが納得まではできなかった。

「それはわかるが、転移と言うありえない事態に戸惑っているのは

自分たちだけじゃないと言つことを理解してもらわなきゃ困る！日本と言う国自体が、今瀬戸際にあるんだからな！！」

もしあまりにも事が混乱するようならば、日本政府としても強硬な態度に出なければならなくなる。もちろん、それは春川としては望むところではなかった。第一そんなことすれば、確実に諸外国からの印象が悪くなる。

ようやく仮初とは言え作り上げた各国との友好関係を瓦解させることだけは、避けなければならなかった。

「首相、各国との個別の話し合いでは限度があります。ここは在日米軍やアメリカ大使館を含む、全当事国を集めて大規模な会議を開くべきではないでしょうか？」

小泉の提案に、春川はしばらく考え込んだ後に決めた。

「そうだな。このままじゃ埒が開かない。どの道各国それぞれに妥協点を見出してもらわなきゃならんしな。小泉副首相、それに木戸外務大臣。この問題は早急に片付ける必要がある。各国大使館への打診と場所の設定を、出来るだけ急いでくれ」

「「わかりました」」

同日夕方 東京・平賀家リビング

夕食の時間、才人は一緒にやって来た友人たちを交えて両親や妹に、自分が今日帰ってくるまでに体験したことを話していた。

秋葉原での召喚やルイズとの契約、その後のトリステインでの出来事から、転移後のこと。幾ら話しても話し足りない位の内容であり、話している間に食事が終わって食後のお茶の時間まで話は続いた。

その内容に両親は時に笑い、時に泣きそうになった（才人が死線めぐりぬけたため）また才香は終始兄が話す冒険談に興奮しっぱなしであった。

一方で外野であるルイズやアンリエッタらも時折その話を捕捉する形で参加し、話に華を添える。一方でメイベルとナバルは興味深げにその話を聞いていた。

そして話が日本への帰国後、すなわち今日家に着くまでの話に移ると、途端にメイベルが話に割り込んできた。

「東京には本当に驚くものばかりでした。特に交通網やインフラには恐れ入りました。これは今後サクラスにおける都市計画に役立つと私は思うの。サクラスにはまだ都市交通という概念がないけど、今後人口が増え……ムググ！！？？」

「いい加減にしろ！才人が喋ってるだろ！」

ナバルがメイベルの口を塞いだ。

しかしながら、才人の父親である才助はメイベルのことを高く評価した。

「メイベルさんはなかなか博識なようですね。理解もあるみたいで

すし」

「こいつの場合それにバカがつくから困る」

ナバルにはコテンパンな言われようであった。

「メイベルって本当に知識欲の塊だよな。涼たちと会ったときもそうだったし」

「涼？お兄ちゃんそれ誰のこと？」

才人の何気ない一言に、才香が食いついた。

「ええと、確か秋月涼で言ってたな」

すると、途端に才香が目を輝かした。

「ええ！？お兄ちゃんあの秋月涼に会ったの？」

「ああ、あのかはわからないけど。アイドルとは言ってたな。そんなに有名なの？」

その問に答えたのは、才助だった。

「有名どころじゃないぞ。何せ彼はついこの間まで女性アイドルとして活動していたんだぞ」

「『『『『『女性！？』』』』』」

その単語を聞いた才人やルイズら客人組が一斉に声を上げた。

「今のは聞き間違いでしょうか？才人のお父様。女性と聞こえましたが？確か昼に会った彼は男性だった筈じゃ」

「いえ、間違いじゃありませんよルイズさん」

「つまりそれって、女装して女性として活動していたってことですか？」

メイベルが恐る恐る尋ねると、才助は躊躇せず答える。

「そうなんですよメイベルさん」

「と、父さん。そんなのありえないって。漫画やアニメじゃあるまいし」

「才人、お前信じていないな。なあ才香、秋月涼がカミングアウトした「オールド・ホイッスル」、まだ残っていたか？」

「うん。HDDに入れてあるよ」

「それ皆さんに見せてあげなさい」

「うん！」

才香はさっそくHDDの録画リストからお目当ての番組を探す。

「へえ、こうやって映像を記録できるんだ。興味深いわ」

とさっそくメイベルが食いつくが。

「少しは黙っている！」

すぐにナバルが黙らせる。

「これこれ」

そうしている間に才香がお目当ての番組を見つけ出し、再生した。

始まると、そこではステージの上で煌びやかな衣装に身を包んだ少女たちが踊っていた。

「今踊っているのは菊地真だな。次に出てくるのが秋月涼だ」

才助が言ったとおり、秋月涼と言うテロップと共に1人のアイドルが出てきた。が、ピンクを基調としたミニスカ衣装を来たその人物は、どう見ても少女だった。

「え！？あれがああ涼？嘘だろ！？」

「まあ、見てろ」

そしてしばらくした所で、涼が着替えて出てきた。その姿はまぎれもなく、眼鏡こそ掛けていないが昼間に会った秋月涼そのままだった。

「ええええ！！！？！？」

才人が絶叫した。

「だから言っただろ、本当だって」

驚いたのは何も才人だけではない、ルイズとアンリエッタもだ。

「へえ、本当に女の子かと思ったわ」

「私も本当に女性かと思ってしまいました」

ルイズもアンリエッタも見事に騙されたようだ。

一方、メイベルとナバルは比較的冷静だった。

「お二人はあまり驚かないんですね？」

才人の母親の瑞江が訪ねる。

「ええ、まあ」

「ああ言っつのが身近にいたからな」

「はあ？」

まさか瑞江も、サクラスの教会に男の娘がいるとは思ってもみなかったのだ。

なお、この後才助からより詳しい話を聞いてルイズが「あなたの国絶対おかしい」と言ったり、アンリエッタが「けど男性なのに女性として活動ですか……何かおもしろそうですね」と言ったりしたかは、定かではない。

ただいま！ 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

閑話 アイドルの親戚は(前書き)

更新しようとして話数を見て啞然とした。91話だど!?

閑話 アイドルの親戚は

6 2日目夕方 日本・7 6 5プロ近くの路上

「やっと終わったね！」

「疲れた」

「久しぶりにぶっ通しのレッスンだったものね」

芸能プロダクションである7 6 5プロが入るビルの近くの通りを、3人の少女たちが歩いていていた。7 6 5プロに所属する天海春香と菊地真、そして三浦あずさの3人であった。

この日3人は、仕事を終えて家へ帰ろうとしているところだった。

転移直後は混乱から仕事がなくなり、レッスンすら出来ない状況に陥った7 6 5プロのアイドル達であったが、その後政府広報用CMへの立て続けの出演に加えて、ようやくポツポツと番組などの製作が一部で再開されたため、各種のレッスンも次々と復活していた。

今日は久しぶりに丸一日潰してのダンスレッスンであったため、3人ともクタクタであった。

「けど明日は学校も事務所もお休みだから、のんびり出来ますね」

「けど春香ちゃんも大変ね。これから2時間も掛けてお家に帰るなんて」

あずさが春香を気遣う。春香は神奈川の家から東京の事務所まで片道2時間掛けて通勤している。

「もう慣れましたってあずささん。さすがに転移直後は困りましたけど」

転移直後、電力統制から電車の本数が大幅に減じられたため、春香は一時通勤困難のため事務所に泊まりこんだことがあった。さすがに今は統制が緩和されたので、通勤は楽になった。所要時間を除いては。

「けどどつちにしろ2時間近く掛けて帰るんでしょ？だったら今日は私の家に泊まっていかない？」

「ええ！？いいんですか？」

「もちろんよ。何にもないアパートだけど、寝る場所と食べる物だけならあるから」

「それじゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな。あずさんの私生活も気になるし」

「真ちゃんもどう？良かったら家に遊びに来ないかしら？」

あずさは真も誘う。ところが、真はすまなさそうに答える。

「ごめんなさい2人とも。今日は親戚の叔父さんが来て一緒に食事する予定なんだ。だからこのまま家に帰らないといけなくて」

「そう、それじゃあ仕方が無いわね」

あずさは無理強いはしない人だ。

「真の叔父さんでどんな人？まさかお父さんみたいな人じゃないよね？」

「父さんが2人もいるなんてゴメンだよ春香」

真が彼女らしからぬ情けない声を上げる。真の父親である真一は真を男の子のように育てた。そのため真の場合一人称が僕であるし、どこかやんちゃな部分がある。実際にドラマや劇で演じる役でも、少年とか王子を当てられるから泣けてくる。

「叔父さんは普通の人だよ。まあ仕事の関係で中々会えないんだけどね」

そんな話をしている内に、3人は広い通りへと出る。

秋田や新潟での油田復活により、ある程度石油の入手に目処が立ったとはいえ、未だ民間レベルでは石油統制（配給制）続いているため、通を走っている車は疎らだ。

石油を自由に使える車両は、警察や消防、救急や自衛隊に加えて自治体を持つ指定された車両と交通機関で指定された車両のみとなっている。

そのため、広い道路は以前では考えられないほど静かであった。

「早く前みたいに車で移動できるといいんだけどね」

「仕方が無いよ。プロデューサーたちも今は電車で来ているんだから我慢しなきゃ」

無気味な程に静かな道路を見ながら真と春香が言う。

だが、それからすぐに1台の車が走ってきた。

「なんか逆に車が走っているほうが怖いね」

「春香、驚かさないでよ」

「別に驚かしているつもりはないんだけど」

だが、その車が3人を通り過ぎるとすぐに止まった。

「え!?!」

マジで驚く春香。

「なんか、あまりにもタイミングよすぎるよね!?!」

今話していた話の内容が内容だけに、真もすこしばかり困惑する。

「あらあらどうしましょう」

あずさが場違いなほどのんびりとした声で言う。

そして間もなく、止まった車から黒い服を着た男が2人降りてきた。

「な、何！？まさか誘拐とか！？」

春香が1人興奮する。だが、すぐに前を歩く男が声を掛けてきた。しかも。

「やっぱり、真か！」

「「え！？」」

いきなり男が真の名前を呼んだので、春香とあずさの目が点になる。対して、真の方はそれまでと一転して嬉しそうに答える。

「おじさん！雅行おじさん！」

そして彼女は雅行と呼んだ男に駆け寄った。

「久しぶりだな真」

「久しぶり。どうしてここに！？」

「ちょっと防衛省の方に用があつてな。今その帰り道だ。そしたら窓からお前の姿が見えたから車を止めたんだ。それにしても、しばらく見ない間に女の子らしくなつたじゃないか」

「えへへへ。叔父さんにそう言ってもらえると嬉しいな。父さんなんか、まだ前みたいに戻れって言っただもん」

「全く真一にも困つたものだな。今日会ったら私からも注意してお
くよ」

「ありがとう」

勝手に盛り上がる2人に対して、春香とあずさは完全に蚊帳の外であった。

「あ、あの真？」

「うん！？何春香？」

話しこんでいた真が春香の方に振り向いた。

「その人は誰なの？さっき言っていた、叔父さんて言うのはわかるんだけど」

「あ、ごめん。おじさん紹介するよ、この2人は僕の同僚の天海春香と三浦あずささん」

真がまず2人を紹介した。すると、紹介された男も帽子を脱いで2人にあいさつする。

「それくらいは俺にもわかるよ。失礼しました。初めまして、真の叔父の菊地雅行と言います」

「天海春香です。こちらこそ初めまして」

「三浦あずさと申します。初めまして……雅行さんと言いましたね？失礼ですが、御職業は何をやっていらっしゃるのでしょうか？」

「警察官……じゃないよね？」

春香は雅行の着ている制服の正体がわからないらしい。

「私は海上自衛官です」

「まあ、自衛隊の方でしたか。と言うことは、船に乗っていらっしやるんですか？」

「ええ、まあ」

すると真が嬉しそうに言う。

「叔父さんは護衛艦の中で偉い人なんだよね」

「おい真、あまり茶化さないでくれ」

「えへへ。だって昔護衛艦に乗ったとき、叔父さんとっても格好良かったから」

「ありがとう。お前は仕事の帰りか？」

「うん。レッスンを終えて2人と一緒に帰る所だったんだ」

「そうか。姪がお世話になっているようで」

雅行が春香とあずさにそう言うと、2人とも多少気恥ずかしさを感じずにはいられなかった。

「いえいえ、こっちこそ真にはお世話になりっぱなしで」

「あらあら、そんな風に言われると少し気恥ずかしいです」

「ところで真、実は俺はこれから艦長と一緒に一旦横浜に行かなきゃならないんだ。だから、もしかしたら今日は顔を出すのは無理かもしれないと、真一に伝えておいてくれ」

「うん、それはいいけど。何かあったの？」

「さすがにそれは言えないな。だけど危ないことじゃないから、安心しろ」

「話は終わったかな？砲雷長」

話に一区切りついたと見たのか、それまでずっと黙っていた初老の男性が雅行に声をかける。雅行と同じ服を着ているので、真を含む3人にもその人物が海上自衛官だとすぐにわかった。

「はい艦長。艦長紹介します。私の姪の菊地真です。真、こちらは俺が乗っている艦の梅津艦装……じゃなくて艦長だ」

「か、艦長！？き、菊地真です！初めまして」

いきなり偉い人を紹介されたせいも、真が途端に緊張する。

「梅津三朗だ。君の活躍はかねがねテレビなどで窺っているよ。よろしく。しかし、砲雷長が彼女と親戚だとは知らなかったな」

「別に言う必要もないことなので……それじゃあ真。俺と艦長は行くぞ。さっきのことすっかり真一に伝えておいてくれ」

「うん。わかってる」

「頼むぞ。それじゃあ、失礼します」

菊池は最後に春香とあずさにも会釈すると、梅津と共に車に乗り込んで行ってしまった。

「真の叔父さん、自衛隊の人だったんだ。しかも結構偉い人みたいだったね」

「うん。僕の自慢のおじさんなんだ」

「いいなあ。しかも結構格好良かったし」

「あれ？春香はプロデューサー1本じゃなかったっけ？」

「ちょ、ちょっと止めてよ。けどそれは別としても、やっぱり制服を着ている人って格好いいよね。あの艦長さんも如何にも紳士って感じの人だったし。うちの社長にも見習って欲しいよね」

「全くだよ。ねえ、あずささん」

真があずさに声をかけるが。

「……………」

あずさは完全に上の空であった。

「あ、あずささん？」

「えー!?あー!ごめんなさい真ちゃん。ええと、何だったかしら?」

「いや、それよりもどうしたんですか？いきなり呆けて？」

「さ、さあ。私としたことが、どうしてかしらね？」

と本人は言うが、顔が赤い状況で呆けていたとなれば、同じ女である春香と真には、それが何を意味するのかすぐにわかった。

「あ、あずささん。もしかして、叔父さんに一目ぼれしちゃったんですか？」

「ちよつと真！それ直球過ぎない！？」

あまりにもドストレートな真の聞き方に、春香が慌てる。

「いやだって、他にどう言う風に聞けって言うの？」

「もう少しオブラートに包んで上げなよ！！ほら、あずささんが固まっちゃったじゃない！！」

春香の言うとおり、あずさは顔を真っ赤にして固まっていた。

「いや、そんなこと言われても困るよ！あずささん、大丈夫ですか？」

あずさのお頭が復旧するのに、5分を要した。

「じめんなさい！あずささん！！」

「いいのよ真ちゃん。多分、真ちゃんが言った通りだと思うから」

顔を真っ赤に、両手に顔をやるその姿はどう見ても恋する乙女だ。

「それにしても、真の叔父さんも罪深いね。まさかあずさんのハートを鷲掴みにするなんて」

「けど叔父さんは今34で、あずさんとは13歳も年上なんだよ。ちよつと不釣り合いだよ」

「あら真ちゃん。私は人を好きになるのに歳の差なんて無意味だと思うわ……けど、やっぱりもう結婚しちゃってるわよね？」

「いえ独身ですよ」

「……え!？」

「だから、雅行叔父さんは独身ですって。あれ?僕言ってませんでしたっけ?」

「言っていないよ真ちゃん!多分この話を読み返してもわからないって!」

「春香メタラないでよ!」

「けど、そうになると……」

春香と真があずさの顔をチラリと見る。

「フフフ。つまり、私にもチャンスがあると言っことね。フフフ……」

……」

「あーあ。あずさんが恋する乙女モードになっちゃった」

「明日から事務所の皆になんていえば良いんだろう」

これから起こるであろう厄介ごとが頭を過ぎり、春香と真は少しばかりブルーな気持ちになった。

一方あずさはと言うと、自分にもチャンスがあるとわかり御機嫌であった。

閑話 アイドルの親戚は（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

まさかアイマス×ジパングをやった人はこれまでにいるまい。

ちなみにジパングの菊池三佐は地ではなく池ですが、こちらでは地に統一して真の叔父設定としてみました。

和解

63日目夜 東京・平賀家

夕食も終わり、交代でお風呂に入っていく内に時刻は夜の10時を回っていた。

そんな中で、ルイズは才人の両親と3人だけで話し合える時間をようやく作ることが出来た。話をするのは、才人の両親の寝室である。他のメンバーはリビングにいたので、心置きなく話が出来ると言うわけだ。

「まずはお詫びを。本当に申し訳ありませんでした！才人のお父様、お母様！」

ルイズが謝罪の言葉を口にして、頭を深々と下げた。もちろん謝罪の理由は才人を召喚したことだ。

「ルイズさん、頭を上げなさい。君が才人を召喚したのは夕食の時にも聞きました。それに政府のほうからも説明は受けています。何でも召喚の儀式は相手を選べないとか。つまり、事故に近いことだったと聞いています。もちろん、あなたに責任がなかったとはいいたしません。ですが、そこまで深く思いつめることはないのでは？」

「いいえ！確かに召喚の義で相手を選べないのは事実です。けど……才人を召喚した後。私は彼に酷い仕打ちをしてしまいました……」

ルイズは召喚直後の才人に対する扱い、そしてアルビオンにおける才人の7万人への突撃について、最後には涙を流しながら話した。

「わかったわ。とりあえず、これで涙を拭きなさい」

話を聞き終えた所で、瑞江はそつとティッシュを差し出した。

「ありがとうございます」

彼女が目を拭き終えたところで、才助がルイズを見据えた。

「さてルイズさん。あなたの話はわかりました。そして単刀直入に言います。私はあなたを許さない」

「うー！」

「あ、あなた！」

あまりと言えばあまりの言葉に、瑞江は声を上げた。

「ルイズさん。あなたが過去の行いを反省し、謝罪する気持ちがあることは十分に理解しました。しかしながら、だからと言って我が家から才人を攫い、あまつさえ死の危機に瀕する行為にあわせたことは許しがたい。私自身才人が行方不明になつた直後、才人にもしものことがあつたら、それが何者かによるものであれば殺してやるうかと本気で思いました」

ルイズの顔が不安一色になる。

「もちろん、あなたの世界にはあなたの世界なりの常識があるでしょうし、我々の価値観を無理に押し付けてもダメなんでしょうが、例え頭でそれがわかっていても、心の中では許せない。特に、親と

してはね」

先ほどまでの優しい父親と言うイメージから一転して、才助の顔は本気のそれであった。

「それでも、あなたは償う気があるようだが。一体どんな風に、償ってくれるのかな？少なくとも、最大の被害者である才人には？」

才助の気迫と、後悔の念にルイズの心は折れる寸前であった。しかしながら、彼女の心が折れることはなかった。それ程までに、彼女の才人に対する想いは膨らんでいたのだ。

「私は、才人のことを想っています！誰が何と言おうと彼が好きです！だから、私は。彼のために……全てを才人のために捧げるつもりです！」

才人の両親の前にいると言う状況、さらには才人への謝罪と好きな気持ち。そうした色々なものがごちゃ混ぜになって、ルイズに今のセリフを言わせたのであった。

しかしながら、その言葉に嘘偽りは一欠片もなかった。

だが言ってしまうと、やはり恥ずかしさがこみ上げてくる。

（な、何言ってるのよ私！？今のじゃ全然謝罪になってないじゃない！もう何やってるのよ！？）

と自問自答したが、全ては後の祭りであった。しかしながら、才助から出たのは予想外の答えであった。

「わかりました」

「え？」

「あなたが今、才人をどう想っているのかよくわかりました。今後
もその気持ちで才人に接してやって下さい。それが私としてももっ
とも望むところです」

「私もルイズちゃん。普段はダメでスケベな所もあるけど、やる
時はやる子だから。これからもよろしくね。そしてあなたの謝罪の
言葉、しっかりと受け取りました。夫と同じく、その気持ちを忘れ
ないでね」

途端にルイズの表情が晴れる。

「はい！ありがとうございます！」

「それにしても、あなたがそこまで夢中になれるなんて。才人は一
体向こうで何をやっていたのやら」

瑞江が首を傾げる。

才助も瑞江も、才人とルイズが両思いなのは家に来てから見えてい
るだけでわかった。しかしながら、自分たちの息子が貴族の娘さん
にそこまで好意を寄せられるのか疑問の余地があったのだ。

「しかも、才人だけじゃなくてあのお姫様や他の女性からも好意を
寄せられてるなんて、一体どのゲームの主人公なんだか」

先ほどまでは打って変わって、半ば呆れ気味に言う才助。

なお才助が才人が数人の女性から好意を寄せられていると知っているのは、外務省の白い悪魔による差し金であった。

「アハハハ……」

ルイズも苦笑いするしかなかった。

しかしここで、彼女は先ほどの会話を反芻してあることに思い至った。

(とりあえず、才人の両親に認めてもらえて良かった……あれ？けど、さっきの言葉って、つまりは……)

その答えに思い当たった時、ルイズは内心飛び跳ねないばかりに嬉しかった。

数分後、ルイズと才人の両親の3人は皆が待っているリビングへと戻ったのだが、そこに入る際に一瞬ルイズが勝ち誇った表情を自分に向けたことに、アンリエッタは内心戸惑わずにはいられなかった。

この後才人たちは、夕食前と同じく寝るまでの時間をお喋りに費やしたわけだが、何故かルイズはずっと才人に寄り添うように座っていたとか。

その後それぞれの国について話し合ってお互いに驚きあったり、メイベルが1人で長話をはじめようとしてナバルから突っ込みを受けたり、才香が話を聞いている内に眠ってしまい瑞江に寝室まで運ばれたりと言った感じで、平賀家の夜は更けて行った。

翌朝、短い平賀家へのホームステイを終えて、一行は一端使節団が宿泊しているホテルに戻る。帰りはさすがに公共交通ではなく、日本政府差し回しの車での移動となった。

ただし、目立たないよう公用車ではなく職員の乗用車を使うあたりは念を入れていた。

「それではお世話になりました」

「お世話になりました」

「お世話になりました。妹さんにもよろしく」

「世話になり、礼を言う」

「皆さんもお気をつけて」

「才人のこと、お世話をかけるでしょうがよろしくお願いします」

才人もこのまま一行に付いて行く。彼は一応トリスティンからの使節団の一員となっているのだ。また才人自身、トリスティンへ戻る気満々であった。

「それでは皆さん、遅くなるので行きましょう」

丸一晚、平賀家の外で待っていた護衛役の尾崎が全員を促した。

ちなみに尾崎と八幡以外にも、数人の人間が交代で近くにあった空家を借りて、平賀家周辺を見張っていたのだ。そしてアニメスも、それに付き合っていたりした。

「それじゃあ父さん、母さん。行って来ます。才香にもよろしく言っておいて」

「わかってるよ。体に気をつけろよ。それから、ちゃんとルイズさんをエスコートしてやれよ」

「女の子にあんまり優しくしすぎないようにね」

「父さんも母さんも何言ってるんだよ？」

才人は怪訝な表情をするが、すぐにルイズが彼の腕に自分の腕を絡めてきた。

「さ、才人。行きましょう！」

「あ、ああ。じゃあ、行って来る！」

才人の言葉に、才助と瑞江は笑顔で返した。

そしてルイズは才人に気づかれないように、彼の両親に軽く会釈した。

その光景を、メイベルが羨ましそうに見ていた。

(いいなあ。私も早くナバルの両親からお墨付きをもらいたいなあ)

「どうしたメイベル？何か不安なのか？」

ナバルがメイベルの顔を覗き込み、問いかけてきた。

「え！？」

どうやら顔に出ていたようだ。

「ご、ごめん！なんでもないので。ちょっと考え事していただけ」

「そうなのか。それにしても、家族ってやっぱりいいな。親父たちともずつと会っていなかっだし、国に帰ったら会いに行くかな。お前も一緒に付いて来るか？」

「え！？いいの？」

「別にいけない理由はないからな。何だ、嫌か？」

「もちろん、行く行く！」

「変な奴」

そして残るアンリエッタは、ルイズの様子を見ると、近くに来たアニエスに一言。

「アニエス」

「何でしょうか、陛下？」

「私はまだ負けていませんよね？」

「……」

アニエスには答えようがなかった。

「さ、行きますよ。お2人も乗ってください」

「わかりました。行きましょう、アニエス」

「はい陛下」

全員が乗り込むと、車は動き始めた。

才人は窓を開けさせてもらい、両親に手を振って最後の挨拶を交わした。

「行って来ます！」

「行ってらっしゃい！！」「」

才人の顔は哀しさや寂しさは一切感じられない笑顔であった。

「才人、半日しか一緒にいられなかったけど、寂しくないの？」

「寂しくないって言ったら嘘だけど、もう二度と会えないわけじゃないんだし」

「そう。良かった」

「安心しろって。俺はそこまで弱い男じゃないよ」

そう笑って言う才人。普段ならバカにする所であったが、この日はそんな才人が頼もしくてしょうがないルイズであった。

一方メイベルたちが乗っている車では。

「そう言えば、今日の予定はヨコハマに行くんでしたよね？」

メイベルが車を運転している八幡に尋ねた。

「そうですね。今日は1日かけて横浜の観光地や港、工場地帯を見てもらう予定です」

「それは楽しみね」

「ヨコハマって言うのはどんな場所なんだ？」

「一言で言えば巨大な港です。東京にも港がありますが、横浜もそれに引けをとらない大きな港です。また歴史的な建物も多く残っています。そして今日の予定ではみなと・みらい線への乗車やIHIの造船所見学もありますから、きっとメイベルさんはあきませんよ」

「それは凄く楽しみだわ」

「俺としてはお前が暴走しないかだけが心配だ」

「そ、そこまで言わなくてもいいのに」

と何時も通りの会話が行われる。

一つのステップを越えても、それは決して終着点を意味しない。
むしろより大きな壁が待ち構えているかもしれない。しかしながら、
それでも時は未来へ向かってのみ進んでいく。

和解（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

6 4 日 目 午 後 ロクシエ連邦 首都郊外空軍基地

首都郊外にある空軍基地。ここではロクシエ軍の新鋭戦闘機や爆撃機の試験が行われていた。もし日本のミリタリー航空機マニアが見たら、Ta152（後の1年式戦闘機）やJu87（3年式爆撃機）、そしてB17そっくりの爆撃機が置いてあるので狂喜乱舞すること間違いなしであった。

その飛行場上空では、2機の1年式戦闘機が飛行中であった。2機はそれぞれ旋回や全力飛行など、一通りの飛行を終えると並んで広い滑走路へと着陸した。

滑走を終えて駐機場へとタキシングしてきた戦闘機からそれぞれパイロットが現れる。一人は操縦席で立ち上がるなり帽子を脱ぐが、そこから長い金髪が風にたなびく。

もう1機のパイロットも帽子を脱ぐが、そちらの方もロクシエではあまり見慣れない顔立ち、地球で言う所の東洋人の顔立ちをしていた。

2人は滑走路へと降りると顔を合わせる。

「どうかしら日高三佐？我が軍の最新鋭戦闘機の乗り心地は？」

「悪くは無いなアリソン。プロペラ機に乗るのは練習機以来だけど、これはこれで中々味があるね。もっとも飛行機としてはだけど、戦闘機としてはねえ」

アリソンの問いかけに、日高正道三佐は微妙な回答をした。それを聞いたアリソンも苦笑いする。

この日高はロクシエ側（アリソンが仲介した）の招きによって、ロクシエ空軍の最新鋭戦闘機の操縦桿を握る機会を得ていた。

レシプロの戦闘機を操縦したことが全く無い正道であったが、ロクシエ側から簡単な説明を受けただけで、見事に1発で飛ばしてしまった。

何だかんだ言って彼も日高舞の旦那。スゴイ人なのだ。

「やっぱりジェット戦闘機の方がいいの？」

「まあね。あのスピード感とかはレシプロ機じゃ体験できないからね。君も実際に体験すればわかるよ」

「それは楽しみね。はあ。早く乗りたいわ」

アリソンは早くジェット機に乗ってみたいくて堪らないようだった。以前正道がF15でロクシエまで飛んできたが、その時は残念ながら乗る機会は得られなかった。

「すぐに……とは言わないけど、もうすぐ乗れるだろ。それまでの辛抱だよ」

「そうね。楽しみだわ、日本行き。ワクワクするわね」

「まあ、だからと言ってあんまりはしゃぎ過ぎるのも問題だね」

「ヴィルみたいなこと言わないでくれるかしら。けど、あなたには感謝ね。日本への派遣人事に推薦してくれたんだから」

現在日本とロクシエは国交を築き、既に小規模ではあるが貿易や人事交流が開始されている。ロクシエ側としては、日本の進んだ技術の調査と速やかなる吸収を目指して、多くの人間の派遣計画を立てていた。

まだ国交が樹立されたばかりなので、その規模は小さい。しかしながら、日本は貿易を拡大したいし、ロクシエは日本の進んだ技術や様々な情報を手に入れたい。しかも早急に。

その結果、ロクシエからの人間の派遣計画は早いペースで進んでいた。日本としても、これまで様々な無理に近い国交の締結や条約の締結を進めた手前、拒否は出来なかった。むしろ、ロクシエ側により自国の技術などをアピールする絶好の機会と捉えられていた。

もちろんその情報は決して民間レベルに留まらない。軍事や警察に関する物も多い。

ロクシエが最後の戦争を経験したのは、実に30年近く前であった。それはルト二河河口に浮かぶ緑島を巡る戦いであった。この戦いでは毒ガスや特殊部隊の活躍などがあったが、結局の所地球で言うような大規模な国家間戦争、世界大戦とは程遠い。

だから前の世界で世界規模の大戦を経験し、なおかつ数十年分の情報を蓄積している（この点に関しては既に駐日本大使からある程度の情報を得ていた）日本は軍事的にも魅力的な国であった。極端な話、古本屋で売っている1000円の文庫本からですら、彼らは多

くの収穫を得られる可能性があった。

なお余談だが、日本政府は既に国内に氾濫している情報を全て封印するなど不可能なことから、核などに関する情報の公開を逆に積極的に進めて、禁止条約制定の際の主導権を握る方向に方針を定めていた。

こうした話は、正道やアリソンには遠い場所の話であった。いや、正道は既に気づいていたかもしれないが、もちろん彼女の前でそんなことを話す筈が無かった。自国の利益を損なう発言を、軽々しく行うほど彼は軽い人間ではなかったのだ。

互いに飛行機や、近いうちに行われるであろう日本への派遣（正道の場合帰国）に関する雑談を話ながら、2人は駐機場からパイロットの待機所へと移動した。

すると、1人の兵士が走ってきた。

「日高三佐！お電話が入っています！」

「電話？」

「ハイ！日本大使館のアラキ大使からです！」

「わかった。案内してくれ！」

「わかりました！」

「大使館からって、何か起きたのかしら？」

アリソンが疑問を口にしているが、正道にも心当たりはなかった。

「さあ？とりあえず行ってみるよ」

兵士に案内されて、正道は電話のある場所までやってきた。そして兵士に礼を言つと、受話器を取った。

「もしもし、日高です」

「あ、日高三佐ですか？荒木です」

受話器の向こうから聞きなれた荒木の声がしてきた。

「どうかしましたか？」

「ええ。実は予てからロクシエ側と交渉していたロクシエ国内の視察なんです、詳しい日程と人員が決まりました。つきましては、詳細を話したいので大使館まで戻って欲しいのですが」

「わかりました。すぐに向かいます」

「お願いします。では、後ほど大使館で。失礼します」

荒木が電話を切ったので、正道も受話器を下ろした。

「大使館に戻るの？」

「ああ。召集が掛かったんでね」

「だったら私が送っていくわ」

「いいのかい？」

「ええ。どうせもつすぐ上がり時間だし。それに、日本大使館の人間を送ったってことなら、上も何も言わないでしょうから」

「じゃあ、お願いするよ」

正道はアリソンが運転するスポーツカーに乗り込むと、すぐに首都の官庁街にある日本大使館へとむかった。

スポーツカーで、しかもパイロットのアリソンらしい荒っぽい運転であったが、そのお陰で大使館には早く到着することが出来た。

大使館入り口に到着すると、そこには別の車が到着していた。「先客がいるわね」

「あの車はサクラスの大使館の車だ」

大使館付き自衛官である関係から、正道はその車の所属をすぐに理解した。そしてその車から降りてくる、特徴的なサクラスの服を来た人物にも。

「なんとまあ、アステル大使じゃないか！」

サクラス大使館の車から降りてきたのは、駐ロクシエ・サクラス大使のアステルであった。

同日午前 日本 東急・副都心線渋谷駅

この日トリスティンとサクラスからの使節団一行は、日本政府の案内で横浜を視察することとなっていた。

横浜までは車での移動が考えられたが、日本政府（と言うより国交省や東急、東京メトロなど）が自国の技術力アピールのために、鉄道での移動に切り替えたのであった。

渋谷駅に乗り入れる路線は、JRと東京メトロ、そして東急線である。この内東急は田園都市線と東横線があるが、読んで字の如く横浜に向かうのは東横線だ。

東横線はかつて地上にホームがあつたが、2012年に東京メトロの副都心線と直通したために地下ホームへと移設されている。

この副都心線と東急線の直通によって、横浜から渋谷を通り埼玉県の和光市、さらにその先東武線とも直通運転を行っている。また途中の小竹向原駅からは西武線とも直通運転を行っており、路線内を走る電車は東京メトロ・東急・みなとみらい線・西武・東武と実に多種多彩である。

ただしこうした多重乗り入れは、東京では別に珍しい存在ではない。

どうしてここに彼らを案内したかと言えば、それは日本の地下利用技術を誇示する狙いからだった。

副都心線渋谷駅は国際的な建築家の設計によって施工されており、ホームからコンコースまでの吹き抜けが設置されており、地下に人

工的で巨大な空間が形成されるのが嫌でもわかる。

また目に見えない所では、機械を使用しない自然換気システムを取り入れ、冷水を循環させるシステムを採用していた。

前の世界において、世界でも随一の地下利用技術を持っていると言われた日本。それをトリステインとサクラスにも見せようと言うわけだった。

実際にこの技術は新世界でも日本の売れ筋技術となる。後にロクシエの連邦首都地下鉄やイクス王国における長距離トンネル建設、トリステインにおけるレアメタル鉱山開発においてその威力を發揮した。

もつとも、この時渋谷駅にやってきた使節団一行はそんなことは知るはずがなかった。ただただ、渋谷駅地下ホームのスケールに圧倒されるだけであった。

「スゴイスゴイ！昨日のシンジユク駅も凄かったけど、この駅はさらにスゴイわ！」

駅の外見に加えて、各種の設備の説明までされて喜んでいるのは、もちろんサクラスからの使節団の1人であるメイベル・ヴァイスその人であった。

相も変わらずハシャイていた。

「メイベル、もう少し静かにしたらどうですか？見られてるんですよ」

側にいるパセラが彼女を注意した。

現在東京の人口は大幅に減ったとは言え、渋谷駅は東京の交通の要所の一つである。トリスティンとサクラスの使節団がこの駅を使うにあたっては、当然ながら多数の警察官や警備員が一時的に駅を封鎖しているが、それでもその直外には多くの報道関係者や野次馬が詰め掛けており、メイベルがはしゃぐ姿も当然見られていた。

「あ、ごめん」

「たく、もう少し落ち着いたらどうだ」

ナバルまでそう言うが、使節団団長のクリプトン卿だけは笑顔であった。

「まあまあ。メイベルちゃんの性格はもう直らんよ。それに彼女は好きにさせておいた方が良さだろう」

彼はメイベルと言う人間がどうしたら生きるのか、ちゃんとわきまえていた。さらに彼女を慕うクラウも。

「そうですね。メイベルちゃんはメイベルちゃんですから」

だがナバルも負けてはいなかった。

「それはそうだけだな、側にいるこっちの身にもなれよ」

と最後にビシッと言うのだけは忘れなかった。

一方、トリスティンの一行はと言えば。

「おおい！大丈夫か？」

才人の言葉に、アンリエッタやルイズたちは言葉がでなかった。

「！！！」

ただただ驚くだけであった。

視察と…… 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

視察と…… 2 (前書き)

スペシャルサンクス八幡先生!!

視察と…… 2

6月3日深夜 日本・東京 平賀家近くの空家

案内兼護衛役の尾崎&八幡待機中。

「おい、八幡。起きろ」

尾崎と八幡他数名が監視所として使っている才人家近所の空き家の一室で、尾崎が仮眠中の八幡を揺り起こす。

「んあ？ ……異常、ありませんでしたか？」

「ああ。まだ交代まで幾らか時間があるから腹ごしらえしとけ」

流石というべきか、揺らされて数瞬で状況を把握した八幡に、尾崎がおにぎり二個の包みを投げて超越す。

「わあい、おにぎりなのー（裏声）」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………すみません」

その場を支配する気まずい沈黙に堪えきれず謝る八幡に歩み寄り、

持っていた携帯端末を尾崎が手渡す。

「どうやらまだ眠気が取れないようだな？ そうなんだろ？ よし、お前の好きそうなニュースがあつたから読んでみる」

「そんな可哀想な人を見る目で……………へえ、なるほど……………」

携帯端末の画面には、“在日米軍、日本へ空母『ジョージ・ワシントン』引渡しか”という記事が表示されていた。

「八幡君はそれ見ておかしいとは思わんか？」

「何が、ですか？」

「空母を手放す、ってことがだよ。アメリカ力程空母の力を解っている国もないし、戦力的にも外交的にも強力なカードだろう？」

どうやら尾崎はそれが聞きたくて八幡に話を振ったようだ。いつもの、彼は鉄オタだけでなく軍事オタクも併発しているのだ。流石に某アイドルを見て『カーデン・ロイド豆戦車云々』と思っても口に出さない程度の常識は持ち合わせているが。

「だからこそです。アメリカ力程“空母を解っている”“国”もないし、戦力的にも外交的にも“強力なカード”だから、そして指揮官在日米軍司令官か駐日大使か知りませんが が正気だから手放すんだと思いますよ」

「ほお。ではその根拠を聞かせて欲しいな」

「望むところな、です」

「ごほん、と咳払いして八幡が喋りだす。

「まず……そうですね、米軍が日本に対して武力に訴える可能性はほぼ無いと思います。短期的には優位に立てるかもしれませんが、物資の補給は不可能ですし、日本を制圧下におけるだけの人員もいません。」

平たく言えば、イラク以上に不利な状況でイラク以上の泥沼 億単位の民衆を徒に敵にまわす ようなことは望まんでしよう。あと、やるなら日本が混乱している隙にやっていたはずです」

あの首相が自衛隊の使い所を知らないような無能であれば話は別かもしれませんが、と続ける。

「まさか……とはいえ春川首相、日頃は自らのことを“凡人”と仰っていたが……」

「とんだ凡人詐欺ですよ。あそこまで非常時向きの人はそういないでしょ。……話、戻しますね。彼ら米軍は“国”を失った。それが一番大きいでしょう。軍隊というのは国家のシステムの一部であって単体でどうこうできる性質のものでは無いです。で、軍隊というものは大食いですから維持するためにはかなりの物資を必要とします。ましてや戦闘 はしなくても兵器は消耗してゆきます。そして燃料が切れれば戦車も軍艦も飛行機もタダの箱。 只でさえ補修部品や燃料は逼迫しているというのに、そんな状況で供給元に喧嘩売るとかあり得ないでしょう……それこそハルノート級の無茶言われないと」

あり得ないと言い切ってから、まさにそれをやらかした国があったことに気付き訂正する八幡。

「だが、『ワシントン』は原子力空母だろ？ 燃料切れの心配は無いんじゃないか？」

「はあ……これだから……まず『ジョージ・ワシントン』です。戦艦じゃないんですから。大体、空母が原子力でも周りの駆逐艦や巡洋艦は通常動力艦なんで油は必要ですし。……まさか周りの艦が飾りだなんて思ってますんよね？ 飛行機飛ばせるだけが取り柄のド貧乳俎板にエスコート無しで72が出来ると？ 空母というのは機動艦隊を構成するシステムの一つでしかないのです。単艦では自らの身を守ることすら困難ですそれに……原子力空母にも燃料切れはあるんですよ」

「な、なんだってー（棒読み）」

「……使い方、合ってます？」

「さあ？ で、それはマジなのか？」

「マジですよ。艦によっても違うのですが、『ジョージ・ワシントン』の場合20年程度で最初の分が切れる というよりは燃料棒の交換時期 ですね」

ほお、20年ももつのか、と感心する尾崎。

「……CVN-73『ジョージ・ワシントン』の竣工は1992年ですよ」

「えー、今西暦で2014年だから……あれ？けどそうになると2012年だろ？合わないぞ？」

「はい。普通に考えればそうですね。しかし、最近じゃそちらの技術も進んで炉心の交換期間が延びています。最初の艦なんか就役から3年でドック入りしてオーバーホールですから、それを考えたら大分違いますね。『G・ワシントン』の場合現在の所交換がまだで来年、すなわち2015年に大規模なドック入りしてのオーバーホールと燃料棒交換が計画されていたそうです。ちなみに核燃料棒の交換は入渠して船腹をかつさばくような大工事で、それを含めてオーバーホールが出来る能力を持つのはノース・アップ・グラマン社のニューポート・ニューズ造船所ただ一ヶ所だけです」

「……それは勿論、米国本土ごと……」

「消えましたね、確かヴァージニア州だったはずですよ。無論、横浜のI Iや長崎の三造船では無理ですからね。核燃料棒の交換や原子力艦の整備なんて、例え技術的には出来ても政治的に無理ですよ……」

まあお察しく下さい。

「なるほど、もうすぐ魔法のきれるカボチャの馬車か」

「無理すりゃオーバーホールせずつも持たせることは出来るでしょうがね。それに、原子力空母は外交カードとしては強力過ぎて恫喝にしかないんで……。それなら価値があるうちに切って自治区の件の交渉で優位に立ちたい、ってところですかね？」

「ああ、そこに繋げるか」

「あ、あくまでも私の勝手な想像ですからね」

違つてたらジャンピング土下座で勘弁してくださいね。と言いな
がらおにぎりの包みを畳む八幡。そして、八幡が片付け終わったの
を確認すると、尾崎が立ち上がり八幡を促す。

「さあ、そろそろ交代時間だ。往くぞ」

「了解。今日も何事もなく終えるよう努めましょう」

「……無理だろ」

「……努力目標です。どうせ作者がなんか起こすでしょう」

「だな……」

64日目午前 日本・横浜みなとみらい地区 ランドマークタワー
展望室

「綺麗……」

横浜みなとみらい21地区のシンボルとも言えるランドマークタ
ワー。その69階にある展望室に、サクラス・トリステインから来た
一行はいた。

渋谷駅を東急線の電車で出発した一行は、そのままみなとみらい
線に直通し、みなとみらい駅で下車した。

みなとみらい駅の吹き抜けに、またも度肝を抜かれつつ、地上へ

と出た一行が案内されたのが、ランドマークタワーの展望台であった。

ここが選ばれた理由は短い滞在時間（昼食を挟んで4時間ほどの予定）を有効に活用するためであった。

そもそも横浜が視察先として選定されたのは、東京に並ぶ大都市を見せることによる日本の技術力と国力の誇示であるとともに、再開発計画が一段落して調和の取れた港街として開発され、なおかつ歴史的な建造物や文化施設を抱えているためであった。

もともと、いくら纏っていると言っても、さすがに1日で回りきれぬ筈がない。そこで、じっくり見ていただくのは数施設に絞り、後はここランドマークタワーから概観を見てもらい、説明するだけにとどめることにした。

「今日は晴れていて幸いでした。雨だったららせつかくの景色が台無しですからね」

案内役兼護衛役の尾崎がメイベルの横から言う。

「本当ですね。ただちょっと日差しが強いかな？」

「もう6月ですから。ただ夏本番になればこれ位じゃ済まされませんよ」

「覚悟しておきます。それにしても、改めて日本と言う国の凄さに驚かされるわ。これだけの街を造っているなんて。東京も凄いけど、この街も劣らずに開発されているわ」

「この地区はかつて、造船所や貨物駅、貨物埠頭でした。その後文化・観光・商業・防災用地として再開発されています」

「つまり、複合的な機能を備えた都市に造りなおしたと言うことですか？」

「その通りです。無秩序な発展ではなく、地区全体を将来を見据えてデザインし直したんです」

「へえ。街の再開発か。興味深いわね」

「しかも、それはただ単に新しい物を造るだけじゃありません。このすぐ近くに、100年以上前に造られたドッグと帆船がメモリアルとして保存されていますし、古いレンガ造りの倉庫もあります。また博物館も多数あります。決して過去をないがしろにしているわけじゃないのです。あそこに見える汽車道と言う遊歩道も、廃線になった貨物線路を転用した物です」

尾崎の説明を受けて、メイベルは目を輝かす。

「博物館か、是非とも全部回りたいわね」

「今日は無理ですよ。いずれ国交が結ばれてからです」

「うーん、残念」

「まあ、昼食を挟んで2時間ほど街の見学が予定されていますのでさすがに全部じゃありませんが、1〜2箇所見て回れますよ」

「そうですか。楽しみね……あれ、ナバルは？」

「あつちで海保の基地をずっと眺めているようですよ」

見ると、ナバルは双眼鏡でジッと何かを見ていた。時折別の場所も見ていたようだが、ほぼ見ている場所は固定されていた。

「むう。なんだかんだ言ってナバルもそう言う方に興味があるのね」

「午後から予定されているIHIの見学も、あなたには退屈かもしれないませんが、どうか割り切って下さいね」

「それくらいはわかっていますよ」

もつとも、そうは言うがメイベルは聞くもの見るもの全てに興味を示しているので、退屈はしていないようであった。ただナバルが自分を差し置いて熱中しているのが、面白くなかったのである。

「一方才人とルイズ、アンリエッタと言ったトリステインからの一行はと言えば。」

「東京もそうでしたが、才人さんの国はスゴイですね」

「ほめてもらえるのは嬉しいけど、スゴイスゴイ言ってるだけじゃダメですよ姫様」

才人が忠告する。

「才人の言う通りね」

「お2人の言うとおり、私だってただスゴイとばかり言っているつ

もりはありません。日本から学べることは全て学ぶつもりです……
ただ、問題は我が国の国民達でしょうか」

「頭でっかちの保守的な貴族。マトモな教育さえ受けていない平民だからなあ……けど、日本の明治維新の頃もそんな感じだったから、とにかく今は少しずつ前に進めるしかないんじゃないかな？」

「そうですね……それにしても美しい街ですわ。ラ・ロシエールなどとは比較になりません」

「まあ、あそこはあそこでスゴイと思うけど」

才人はラ・ロシエールの巨大な空中艦船用棧橋を思い出しながら言った。

ただし、風石が消えてしまい空中艦船の使用価値がなくなった今、その棧橋は意味をなくしていたが。

ちなみに、その巨大な樹をくり貫いて造った棧橋は、後年ラ・ロシエールの街が再開発されるさい、一事は旧時代の遺物として撤去案も出たが、その後メモリアルとして活用されている。

その再開発案には、アンリエッタがかつて見た横浜の街づくりが生かされたと言われている。

「我が国は様々な面で改革が必要ですね、工業・教育・軍事・外交。それらをどう進めるべきか。課題は山積みです」

考え込むアンリエッタは、自分を見つめる視線に気づく。

「どうかしましたか？皆さん？」

「いや、姫様が随分たくましくなったなと思って」

「え！？そうですか才人さん？」

「うん」

さらにルイズも。

「君主としての實禄がついてきていると、私も思いますよ」

「ルイズまで」

そしてアニエスに至っては。

「陛下、私は今物凄く感動しています。あの我侭でひ弱な陛下がここまで成長なさるとは」

涙流して感動していた。

「ありがとうございます。けど……」

「？」

「我侭でひ弱は余計です」

「す、すいません！」

その光景を見て、才人とルイズは笑った。

視察と…… 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

前半の八幡と尾崎の会話は八幡先生提供です。本当に感謝です。

そして次回は……横浜散策にしようか、それともIHI造船所見学&トリステインでの〇〇にしようか、はたまたロクシエでのシーンにしようか。もしくはアイドル登場か!?

悩むなあ。

ただどちらにしろ、IFCON参加と仕事で来週の木曜あたりまで更新できる見込みがないんですけどね。

視察と…… 3

64日目お昼前 日本・横浜 山下公園

「どうしてこうなるのよおおお!!??」

「これも神聖な神の思し召しだ。諦めろ……あと作者の知識不足だろうな」

「ナバル、変なところでメタらないで」

と、何時も通りのやりとりをしているのは、メイベルとナバルの2人。

「まあまあ。2人とも落ち着いて」

「私たちが付き合っただけだから」

と励ますのは、才人とルイズの2人組。

どうしてメイベルが泣きそうな表情で己の不遇を嘆いているのか
と言えば、原因はこの20分ほど前の理不尽な（彼女から見てだが）
イベントにあった。

ランドマークタワーの展望台からみなとみらい地区を堪能したト
リステインとサクラスからの一行は、昼食を挟んで次の視察地に行
くまでの時間を博物館見学でつぶすことになった。

しかしながら全てを回すことは無理であるし、全員で行けば迷惑

になり兼ねない。そもそも、事前に日本側がそのコースを選定してあるべきであった。

ところが、来日後メイベルやアンリエッタたちの我侭……もとい要望に振り回された春川首相は、「事前に決めておいて文句言われるのも嫌だから、横浜にいたら適当な方法で決めさせればいいんじゃない？」と言って、横浜みなと地区の視察と言う漠然としたことのみ決定し、後の細かいことは現場で決めさせることにした。

しかしながら、横浜のみなど地区には博物館が数多い。パツと決められるものではなかった。もちろん、メイベルはすぐに三菱のみなどみらい技術館と横浜みなとミュージアムに行きたいと言った。しかし、他の参加者は決めあぐねってしまった。

そしてそこからが、籤引きこそ神の意志と考えるソルティス教の本領発揮となった。1人のサクラスからの参加者が「籤引きで決めてしまっっては？」と言い出し、「それだけは、やめてえええ！」と心の底から叫ぶメイベル以外の全員が賛成してしまったのである。

メイベルが反対したのは、彼女の場合籤引きによって成りたくもない修道女になったという、ある種のトラウマがあったせいだ。

もちろん、メイベルは抵抗を企てたが「時間がありませんから堪えて下さい！」「余計なことをしようとするな！」と言うパセラとナバルの妨害にあっってしまった、また日本側も「手っ取り早く終わらせようから、それで行きましょう」と賛成し、結局籤引きで行き先は決まってしまった。

その結果彼女はナバルと才人、ルイズと共に「氷川丸」と日本郵船歴史資料館を見るハメになってしまった。

ちなみにアンリエッタとアニエスも別の場所の籤を引いてしまい、アンリエッタは地団駄を踏んで悔しがったとかなかったとか。

なお各グループは最小3人、最多4人でそれぞれ2〜4人の警護がついた。才人たちのグループには直接護衛として顔なじみの尾崎と八幡、そして少し離れて同行する間接護衛の警官2人がついた。

「メイベルさん。気持ちはわかりますが、これは平等な結果なので、堪えて下さい」

案内役の尾崎も困ったような笑顔で彼女に言った。

「うー」

「さ、行きますよ」

未だ膨れっ面をするメイベルを無視して、尾崎は4人を中へと導く。

「これが才人の世界の船なのね……この間の軍艦もそうだったけど、鉄で出来ていて、帆が無いってやっぱり違和感しか感じられないわ」

「まあ、トリステインの場合あれだからな」

才人の言うあれとは、木造帆装の船を指す。

「才人がさつき姫様に言ったように、トリステインは色々と勉強しなくちゃいけないわね」

すると、才人が不思議そうな表情でルイズを見る。

「何よ？」

「いや、以前に比べて随分謙虚になったんだと思って」

「そりゃ嫌でも謙虚になるわよ」

ここまで圧倒的な差を見せ付けられれば、プライドの高い彼女も謙虚に成らざるを得ない。加えて、彼女が丸くなったのは、人との繋がりもあつただらう。

「平賀君。ルイズさん。行きますよ」

「「あ、はい」」

尾崎に呼ばれ、立ち止まっていた2人は慌てて3人を追いかけた。

「氷川丸」は1930年に竣工した貨客船である。太平洋横断航路の一つである横浜〜シアトル間に配船されていた。太平洋戦争中は病院船であつたため沈没を免れ、戦後も昭和35年まで航海を続けた。

その後母港である横浜で保存船となり、現在でもみなと横浜のシンボルとなっている。保存船になった後はホテルなどの宿泊施設としても用いられたが、現在は博物館となっている。

展示内容は往時の客室やラウンジ、機関室をそのままの姿で見られることなのだが、はつきり言って才人以外の3人はあまり興味を持たなかった。

メイベルにしてみれば、船体や機関、航行設備などはロクシエまでの往路で乗った客船とほぼ同じ構造であり、特に学ぶ点はなかったし、ナバルはそもそもあまりこう言うものに関心を寄せるわけでもなかったし、そしてルイズの場合は一等船室の意匠などに多少興味を向けたが、そこまで深く見たいと思えるものではなかったのだ。

唯一才人だけは、昔の船と言うことでそこそこ興味を示したが、結局他の3人に引きずられて見学は30分で終わってしまった。

これには付き添いの尾崎も困ってしまった。また軍事オタクの八幡は不完全燃焼であった。

だが無理に引き止めるわけにもいかないので、仕方がなく予定通り次の日本郵船歴史資料館に移動することとなった。

「それじゃあ、次へ行きましょう」

と「氷川丸」を降りて岸壁まで来た所で、尾崎と八幡が付けていたインカムに「少女が2人、そっちに走って行きます！注意してください！」と言う警官からの無線が入った。

彼が振り向くと、確かに前も見ずに2人の少女がキャツキヤと騒ぎながら一直線に走ってくるのが見えた。犯罪者とは思えないが、とにかく危なっかしい。

慌てて尾崎が走ってきた少女達と才人たちとの間に割って入った。

すると、少女達もようやく気づいたらしくストップをかけた。あと少しでぶつかる所であった。

「こら！危ないじゃないか！」

「おつとごめんね！」

「次からは気をつけるからね！」

と答える少女2人を見て、全員ナバルを除く全員目が点になった。

「え！？双子？」

「そっくり」

「気持ち悪いくらいに似てるわね」

才人、ルイズ、メイベルがギョツとしながら言った。しかし、それを聞いた当人たちは少々不機嫌な表情をする。

「ちょっとその兄ちゃんに姉ちゃん達、そこまで驚かなくてもいいんじゃない？」

「そつだよ、失礼だよ」

抗議する2人。

「あ、ごめん」

「「ごめんなさい」「

3人ともすぐに謝った。

一方ナバルは。

「それに全くの瓜二つじゃないぞ。髪を結ってる向きが逆だ。それに服も色違いだ」

すると、双子は嬉しそうな表情をした。

「お、その変わった格好の兄ちゃんはわかってるね！」

「亜美と真美を見て一発で見抜く人って珍しいからね」

双子の発言を聞いて、ティンと来たのは八幡だった。

「亜美と真美で、もしかしてアイドルの双海亜美と真美か？」

「「そっだよ」「」

「またアイドルか!？」

昨日からどうもアイドルに縁のある事態が立て続けに起きることに、尾崎は何か作画的なものを感じずにはいられなかった。

「けどバレちゃしょうがねえ」

「「ここじゃ人目が多いから亜美たちはもう行くぜ」」

「「さらばじゃ」「」

と現れた時と同様、2人は仲良く走って行ってしまった。

「なんだったのかしら今の？」

あつと言つ間に現れてあつと言つ間に消え去つた双子を見て、ルイズは啞然としていた。

「通りすがりのアイドル……かな？」

ルイズの間に、才人は齒切れの悪い答えしかできなかつた。

「それにしてもナバル、よくすぐに違いがわかつたわね」

「そうか？見分けること位簡単だろ？」

「そんなわけないでしょ！」

メイベルが突つ込む。ちなみにナバルが人の顔をすぐに見分けられるのは、剣士として色々な人間（含む犯罪者）と戦い、その結果多くの人間と顔を合わせたことによる。

「しかし、よくまあここまでアイドルに街中で出会うもんだ」

あまりのアイドル出現率（自分の身内は含まない）の高さに、尾崎はもはや呆れ気味であつた。

「まあまあ、尾崎さん。事実は小説より奇なりつて言うじゃないですか？それよりも、早く行きましょうよ」

「そつだな」

とか言う2人であったが、彼らとアイドルの奇妙な関係は後々益々複雑な様相を呈することなど、気づくはずもなかった。

「それにしてもあの2人アイドルだったのか、サイン貰っておくんだった」

「何バカなこと言ってるのよ」

ミィハーな発言をする才人に、ルイズが呆れながら言う。

「だってアイドルなんてそうそう会えるもんじゃないんだぜ」

「はいはい、わかったわ」

と言う2人であったが、ルイズに関して言えばこの後今会った2人と奇妙な縁になるのだから、世の中わかったものではなかった。もちろん、この時の彼女には微塵も感知できないことであったが。

こんなアクシデントがあったものの、一行は日本郵船歴史資料館へと移動した。

ここは日本を代表する商船会社、日本郵船の歴史に関する資料が展示されている。「氷川丸」とは違い、音声の説明やたくさんの模型や写真による展示があるため、こちらの方は4人の興味を惹くことが出来た。

もつともやはりそれぞれ興味を惹いた分野は違ったが。メイベルは明治維新後日本郵船と共に日本の海運界が歩んだ歴史に関して興味を持つとともに、各種技術分野にも興味を持った。

一方才人とナバルは第二次大戦に関する展示や、将来の海運に関する展示に興味の比重を置いていた。

そしてルイズの場合は、豪華客船に関する展示に興味を惹かれていた。

この見学を通して、メイベルは日本と言う国があらためて貿易で成り立っていた国と言うことを、しっかりと認識することができた。

一方で、これまで海を越えた貿易の経験がないサクラス帝国にとって、大きな示唆を得ることもなかった。何だかんだ言って、彼女は高い理解力を持っていたのだ。

出発する前はあんなに不機嫌であったのに、最後には資料館の図書室にある資料（英文資料は彼女にも何とか読めた）を読み始めて「あと少し」と懇願したメイベルであったが、もちろんナバルから「バカなこと言っただけで行くぞ」と引っぱり出されたのは言うまでもない。

こうして短い横浜の見学を終えた一行は、再びランドマークタワーに集合し、今度は日本政府差し回しの車で、少し離れた場所にあるIHI横浜造船所へと向かったのであった。

視察と…… 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

亜美・真美に関してはもっちのろんで伏線です。具体的にはKさんを通じてルイズと関わることになると思います。

このネタはJ先生から提供され、即刻採用OKしたのですが、そのシーンに持っていくまでに後1〜2ヶ月は掛かりそうなので、忘れないうちに伏線を張りました。

6月4日午後 日本・横浜 IHI横浜工場

横浜の中心部からやや南に行つた磯子区に、日本を代表する造船会社の一つであるIHIの横浜工場がある。かつて多くの帝国海軍艦艇を手がけた石川播磨造船所の流れを組むこの工場では、現在も護衛艦などの建造を行っている。

最近ではヘリ搭載護衛艦「いせ」、
「ひゅうが」の建造を行つた
ことで知られている。

サクラスとトリステイン御一行の横浜視察の終点は、ここIHI横浜工場にあつた。どうしてここが選ばれたかと言えば、日本で唯一の造船所ということもあつたが、それに加えて現在も大々的に稼働中であると言つたことであつた。

実を言うと転移後各国との貿易がストップしたためと、さらに燃料の高騰によつて外交航路の貨物船の行動は著しい制約を受けた。船を動かす燃料も、運ぶ物もないとすれば当然である。

その後日本海側の油田の再開や、ロクシエとの限定的な貿易が開始されたが、それで以前の需要が全て賄えるはずがなかつた。またロクシエとの貿易に関しても、相手先の港湾施設（ロクシエの港湾施設のレベルは地球の1940年代から1950年代）の関係から、受け入れられる船舶に大きな制約があつた。

そんな状況であるから、多くの船会社が船の建造をストップしてしまつた。そうでなくとも、海外から受注していた船の多くは発注

元が消失したため、完全に宙ぶらりん状態となってしまった。

各地にある名だたる造船所が、実質的な開店休業を余儀なくされていた。後に海上警備機構向け艦艇や海自のローテク艦艇が急速整備されたのは、これら造船所の救済処置もあつた。

なお余談となるが、漁船に関しては食料確保の観点から大量に必要とされており、そちら関係の造船所は潤っていた。むしろ、需要に供給が追いつかないと言う珍現象が発生していた。

それはともかくとして、IHI横浜造船所は未だに稼働中であつた。これは同造船所が自衛隊の艦艇を取り扱っていたのが大きい。

自衛隊や海上保安庁の巡視艇などは、転移直後からフル出勤しており、当然ながら船体や各種装備を酷使うこととなった。中には本来予定していた整備を繰り上げて出勤した物もあり、転移後2ヶ月した落ち着いた現在、整備のためにドッグ入りや岸壁繫留を行う艦艇が多数出ていた。

しかし現在の自衛隊には、旧陸海軍のように自前の工廠や整備廠はない。そうになると、それらを行うのは自然と民間会社となり、これまで自衛隊と契約を結んでいたIHI等の一部の造船所が大きなウェイトを占めるのは必至の事態であつた。

加えて2010年に起きた黄海事変以来の全世界における不安定な周辺状況に加えて、転移後も何時起きるかわからない武力使用事態に備えて海自や海保の艦船の建造や整備は、現在も急ピッチで行われていた。

このためIHIは現在に至るも平常運転中であつた。

そしてこの工場見学は、最初から一行の度肝を抜く事態になった。

「ではこれより工場へと入ります」

「工場へと入りますって……バスから降りないんですか？」

日本政府差し回しのバスで、正門から入った一行はバスから降ろされることなく工場の中へと入った。当然メイベルをはじめ数人が怪訝な表情をして質問する。

「降りたら不便なんですよ。ここから見学先の区画まで徒歩で移動していたら、時間を無駄にします」

「え！？もしかしてこの工場、そんなに広いの？」

すると、案内役の工場職員が答えた。

「はい。ここからは普通の工場労働者でも、ドックハウスと言う作業員詰め所まではチャーターしたバスで通勤するのが普通です。工場内の移動でも自動車や自転車を使うのは当たり前です。工場の端から端まで歩くなんて狂気の沙汰とは言いませんが、あまり好まれないことです」

「……ラクスとかメルキアの工場も結構大きかったけど、日本の工場はそれ以上ね」

メイベルが大統領を努める南アルテース連邦は最近急速な工業化が進んでいるが、まだ日本のような規模の工場は無かった。そして

「アルビオンのロサイスの空軍工廠でも、ここまでの大きさはなかったですし」

トリステインに至っては、何をいわんやだ。

と感嘆と驚嘆の声を上げるメイベルとアンリエッタに、案内の尾崎が言う。

「けど、この程度の工場なら日本国内には幾つもありますよ。それどころか、前いた世界ではもっと大きな工場は世界を探せば何箇所もありましたよ。まだ詳細な情報はないですが、ロクシエにも大規模な造船所や航空機工場はあると言っ話ですよ」

メイベルもアンリエッタも、またも目が点になる。

ちなみにメイベルはロクシエを通過こそしたが、その国内を回ったわけではない。

「そう言えば、アメリカには四方が何キロもある工場があるって聞いたことあるな。あの国は何でもスケールがでかかったからな」

「才人の世界の普通でありえないわね」

「だから、俺から見たらお前の世界の普通の方がありえないって言うてるだろ」

と才人とルイズは、これまでに何度も行った会話を繰り返していた。

もっとも驚いたのはメイベルやアンリエッタだけではなく、クリ

ブトン卿やアニエスと言った他のメンバーも同じであった。

工場内へと入った一行は、バスを降りてようやく操業中の工場を見ることが出来た。もちろん、安全のために全員ヘルメットをつけての見学である。

ここでメイベルとアンリエッタたちは、日本の重工業の底力と現実を見ることになった。工場内の様々な巨大施設は、技術方面に興味のあるメイベルだけでなく、アンリエッタら他の参加者にしても圧巻であった。

一方で工場内で細々とした作業をしている作業員たちを紹介されて、巨大な工場設備とは対照的に、多くの部分で所謂技術屋と呼ばれる職人達の技術や経験、勘を生かした作業が行われているのには、別の意味で驚かされていた。

修理中の艦艇から巨大なスクリーンを抜き取る際に、自動の作業ではなく作業員がチェインブロックを動かすという、人の目と手に頼ったローテクを生かしている部分には、メイベルもアンリエッタも感じるものがあった。

工場見学を終えて、最後に一行が案内されたのは最終艤装段階に進んでいた艦艇が繋がれている岸壁であった。

「これから皆様には、こちらの護衛艦「えちご」を見ていただきます」

そこに浮かんでいたのは、平らな甲板を持つ護衛艦であった。

「え！？空母？」

才人が驚きの声を上げた。

「空母って、確かあの飛行機を乗せる軍艦のことよね？」

ルイズがうる覚えの知識で聞き返す。

「そつだよ。けど、日本に空母はなかったんじゃない？」

すると、付き添いの内閣府職員でミリオタ属性を含む八幡が得意げに言う。

「2004年時点じゃね。けど、君がいない間にへり空母とも言うべき「ひゅうが」と「いせ」が竣工してね。どちらも本当の空母には程遠いけど、空母に近い形はしているし多数のへりを搭載することができる。この「えちご」はその流れを組む艦だよ。ただし、こっちはハリアーとかの戦闘機の運用も前提しているけど」

「へえ」

「ねえ八幡さん、クウボって？」

空母の単語の意味がわからないメイベルが八幡に尋ねる。

ちなみに空母を運用している（もしくは運用経験がある）国家はこの世界では日本とトリステインだけだ。

日本は旧海軍時代に世界初の航空機動艦隊を作り上げた。またト

リステインは、艦載機を竜に置き換えた竜母を保有していた。

ただし、トリステインの竜母は広義で言えば空母だが、地球のよ
うに何百キロや何千キロも先の目標へ攻撃機を飛ばすような概念で
はないし、そもそも竜自体の攻撃力が弱かったから、運用思想や戦
術などの面で地球のそれとは大きな隔たりがある。

なおロクシエの場合は地球の1940年代程度の技術力ではある
が、そもそも敵国が河を挟んだお隣さんであるし、歩んできた歴史
が違うので潜水艦と同じく、航空母艦に関する概念や技術は全く存
在していなかった。

またサクラスは、動力式の飛行機が登場してから日が浅く、加え
て海軍自体小規模なので、やはり航空母艦に関する概念や技術は存
在しなかった。

「正式には航空母艦という艦種の軍艦のことです。洋上飛行場みた
いなものですね。空母を保有すれば洋上遠くにいる敵艦隊や、艦隊
がいけない内陸部も航空機によって先制攻撃できるわけです」

「そんな軍艦があるんだ」

「たしかに。海の上から飛行機を発進させられれば便利そうだけど、
短い船体からどうやって発進するんだ？それに降りる方法だった？」

と疑問を呈するのは、自身も飛行機の操縦をするナバルだ。

「それについて」さ、時間です行きますよ」

八幡の言葉を遮るように、尾崎が皆を促した。

ナバルはしつかりとした答えを聞けないまま、仕方が無く他のメンバーと一緒に「えちご」に乗り込んだ。

「えちご」に乗り込んだ一行は、そのまま士官食堂に案内された。そこには白い礼服を纏った数人の人間が待っていた。彼らは一行が士官室に入ったところで立ち上がり、敬礼した。

「ようこそ皆様、護衛艦「えちご」に。皆様を歓迎致します。艦長の梅津三朗一等海佐です」

「副長の角松洋介二等海佐です」

「砲雷長の菊地雅行三等海佐です」

「航海長の尾栗康平三等海佐です」

「サクラス使節団団長のバロン・メルクリオ・パライナ・ド・クリプトン・アイルアルテースです。歓迎に感謝致します」

「トリステイン王国女王のアンリエッタ・ド・トリステインです。歓迎していただき、感謝いたします」

2人が一同を代表して挨拶する。

「どうぞおかけください」

梅津につながされて、一行は席に腰掛けた。

「この度は本艦への訪問を心より歓迎致します。今回当艦を見てい

ただくのは、本艦が我が国でも最新鋭の艦であり、我が日本の技術を結集して完成した艦であるからです」

続いて梅津の言葉を、角松が引き継いだ。

「これより皆様には、艦内を見学していただきます。夕食はここの当艦の士官食堂において席を設ける予定です。それまでごゆっくりと、艦内を見ていただきたい」

(ふーん、つまり砲艦外交の一種でわけね)

(あのハルカワ首相にしては、随分と露骨なマネに出ましたね)

とメイベルとアンリエッタはこの見学の意図をそう邪推した。

視察と…… 4 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

64日目夕方 日本・横浜 IHI横浜工場内岸壁 護衛艦「えちご」士官食堂

「……と言うのが、我が国が転移してくる前の周辺国との状況。そして防衛計画に関してです。その防衛計画に則り、この「えちご」は完成しています。当初計画されていた指揮能力の一部を見直し、戦闘力の強化を図るとともに……」

士官食堂に集められたトリスティンとサクラスの関係者の前で、「えちご」副長の角松二佐がビデオやホワイトボードを使って説明を行っていた。

彼が話しているのは、転移直前の東アジア情勢（つまり日本周辺の情勢）とそれに伴い改訂された防衛計画に関するものであった。

なお、外務省職員である尾崎や防衛省より派遣されていた人間なども適宜交代してパネリストとして発言していた。

しかしながら、話を聞かされている人間の多くは、どうしてこんなことを日本側がするのか、その意味がわからなかった。

「一体あんなこと話してどうなるって言うんだ？」

小さく欠伸をしながら、ナバルが言う。

「本当だよな。小難しい話をされても眠くなるだけだぜ」

才人も慣れない長話のせいで、少しばかり眠たげだ。

そんな2人を、クラウヤルイズたちが呆れながら見る。

「2人ともだらしないですよ」

「もっとしゃきっとしなさいよ！」

「はい」

さすがにこれには逃げようが無く、注意されると2人とも小さな声で素直に謝った。

一方、この場の流れを理解出来ていた人間もいた。老練な政治家であるクリプトン卿だ。

「なるほど」

「何がなるほどなのですか？」

クリプトン卿の呟きに、隣に座る随員が首を傾げる。

「日本政府の狙いじゃよ」

「え！？新鋭の軍艦を見せることでの、砲艦外交ではないのですか？」

「確かにそう見えなくもないが、先ほどの艦内視察の時にやたら見せすぎだったと思わないか？」

「え？」

「弾薬庫や機関室と言った、本来なら危険で見せたくない場所の奥深くまで見せていただろ？メイベルは素直に喜んでいたが、まだ正式な友好関係を結んでいない国にそこまで便宜を図るものだろうか？」

「た、確かに言われて見れば……」

「君の言うように、示威的な意図は多分に含まれているだろう。しかし、一方で我が国はここまで情報を公にすること、間接的にアピールすると言うことではないだろうか？」

「それは深読みのしすぎでは？」

随員の言葉に、クリプトン卿は意味ありげに微笑む。

「かもしれない。しかしながら先ほどからの説明で、やたらと関係者が前の世界における日本のことや外交と軍備に関して話しているだろ？つまり日本と言う国と、以前の世界での状況を良く知って欲しいと言うことだ」

「ですが仮にそうだとしても、どうしてこのような回りくどいマネを？」

「そこまではわからんな」

そう言つと、クリプトンはまた微笑んだ。

そして実際の所、彼の言うことはただしかった。日本政府は本来

だったら見られて不都合な所まで、積極的な公開に踏み切っていたのである。

「どうせ見られて困るもんじゃあるまい。相手が見たいって言う前に、先にこつちから見せちまおう……ついでに我が国の状況についても知ってもらおう。日本が置かれていた状況が、如何に複雑怪奇なものであったかをね」

この日の見学コース設定の際に、春川は関係者に対してそう笑いながら言っていたそうだ。

ただし、実際の所その真意を理解できた人間はクリプトン卿位であった。メイベルもアンリエッタも、単に砲艦外交の延長としか捉えなかつたし、そもそも外交とか軍備に全員が全員詳しいわけでもなかつた。

メイベルがその真意を知るのは、この後クリプトンから知らされたことである。またアンリエッタにしても、やはり随員のアニエスからそれとなく聞いて、春川の思惑をぼんやりとはあるがわかつたのであつた。

ただし、そうした思惑を抜きにしてもトリスティンやサクラスの関係者にとつて有益な話であり、日本への理解を深める一助になつたのは間違いないことであつた。

ただし、メイベルはやはり技術屋としての血が騒いだのか、興味を持ったのは電子技術や電波技術、そして潜水艦に関することであつたとか。

そのため、案内をした梅津艦長をはじめとする「えちご」乗組員

に質問をしまくり、皆を辟易させた。ただし。

「やれやれ、あそこまで好奇心旺盛な子は初めてだぜ。これだったら暴走族時代に、警察とやりあっていた時の方がまだマシだぜ」

と一国の大統領兼女王を暴走族以上の厄介者扱いしたのは、自身も元暴走族という風変わりな経歴を持つ航海長の尾栗三佐だ。彼はメイベルから質問された回数が一番多かった。

そんな彼を、副長の角松二佐が注意する。

「おい康平、口を慎め。仮にも相手は大統領兼女王陛下だぞ」

「そりゃわかってるけどさあ、あそこまで色々聞かれちゃ適わないぞ」

「それにしても、歳の割に博識な子だ。うちの姪と2歳違いとは思えん」

と感心するのは砲雷長の菊地三佐だ。

メイベルは数々の発明をただけあって、その知識力は半端ではない。しかしながら、サクラスと言う大陸国の人間らしく、海に関する知識はまだまだな面が多いようで、その結果航海長の尾栗への質問の集中と言う形になった。

ちなみに、一度その知識を覚えると即座に発展させて自分なりの意見を出すのもメイベルの特徴で、それもまた一回を驚かした。

例をあげると、角松が潜水艦についての話。サクラスには潜水艦

がないから、対潜戦闘の概念を伝える以前にそれを話さなければならぬから話したのだが、メイベルはそれを聞くなり「だったら海底の調査とか、そう言う分野でも日本は進んでいるんでしょうね」と言った。

角松は潜水艦と言う武器に関しての話をしただけなのに、彼女はそこから潜水艦の役割を見事に発展させて意見を口にしていた。

「確かに、あの歳であれだけ知っていればたいしたものだ。こちらとしても話していて飽きない」

そう言う梅津の口調は、出来の良い孫を見る祖父のようであった。

そして梅津たちはメイベルから次から次に質問されても、笑って彼女の問に答えていた。先ほど口を言った尾栗も、何だかんだ言っていてちゃんと答えている。

「そうですね。それに対して、トリステインのお姫様は少しばかり頼りないところですね」

メイベルに高評価をした菊地であったが当然と言おうか、アンリエッタに対する評価は対照的に低くなった。

彼女の場合は色々学び取ろうとすると言う熱意は感じられたが、知識量がメイベルに比べて少なく、さらに発展させていく能力でも劣っているように見受けられた。

もつとも、これはアンリエッタが近代的な教育とは程遠い教育しか受けておらず、しかもメイベルのように論理的に物事を考えることが出来る環境で育っていないと言う元からのハンデがある以上致

し方ないことであつた。またアンリエッタ自身も、そのことは自覚していた。

「まあ良いじゃないか砲雷長」

「艦長？」

「人が変わるには時間が必要だ。まだお互いに出会つて2ヶ月しか経っていない。そうそう簡単には変われんよ。君の姪御さんだつてそうだっただろ？むしろ、色々と学び取自分を変えようとする姿勢を評価するべきじゃないかな？」

「そうですね」

菊地は苦笑いしながら答えた。ただし、角松と尾栗はその話の意味についていけなかつたが。

一方彼らからあまり良い評価をされなかつたアンリエッタではあつたが、梅津の言つとおり何も学んでいないと言つわけではなかつた。むしろ日本の防衛に関する話を聞き、島国における海軍力の整備について何かしら感じる部分があつたらしい。このことが、後に海軍の整備を重点的に行う下地になつたかもしれない。

そして時は流れ、夕食の時間となつた。夕食はそのまま士官食堂でとることになつていた。

ところが、それでころではないようであるような摩訶不思議な情報アンリエッタの元にもたらされた。

「アンリエッタ陛下。ちょっとよろしいですか？」

「どうかされましたか？尾崎さん？」

「はい。少しばかりお話したいことがあるので、部屋の外へ出てく
ださい」

この一言で、何かが起きた事くらいわかる。すぐにアンリエッタ
は立ち上がった。そしてアニエスと共に士官食堂の外へと出た。

「今お国から届いた情報です……お国で叛乱が起きたそうです」

「！？」

少し前までだったら、彼女は叫んでいたかもしれない。しかし、
アンリエッタは慎重で冷静だった。

「……叛乱の規模は？具体的な情報は入っていないのですか？」

「それなんです……」

尾崎は少しばかり困った表情をする。何か悪いことを伝えようと
しているのではなく、伝えようとしていること事態に戸惑っている
ようであった。

「どうしたのです？早く言ってください」

「はあ。それが、叛乱は数ヶ所で同時に起きたらしいのですが……
数時間で鎮圧されたことです」

「え！？それは事実ですか？」

「ではたいした規模ではなかったということか？」

しかしアンリエッタとアニエスの質問に、尾崎は完全には答えきれない。

「はい。大使館から駐トリスティン大使名で送られてきた間違いな情報です。しかし、規模その他に関しては今の所全くわかりません」

「それ以外には何も伝わっていないと言ったことですか？」

アンリエッタの質問に、尾崎は頷く。

「今のところは……どうされますか？東京へ戻りますか？」

「そうですね……鎮圧されたと言つのは間違いないのですかね？」

「ええ。その点は間違いありません」

「では、アニエスだけを東京に戻しましょう」

「陛下？」

アニエスがアンリエッタを見つめる。どうしてそんな命令を出したのかわからないらしい。

「今ここで私が退席すれば、必ずサクラス側に気づかれます。今我

が国が不安定にあることを、印象付けるのは得策ではありません。鎮圧されたのが事実であるなら尚更です」

「しかし、万が一それが誤報だったらどうしますか？」

「大丈夫ですよ……あの国にいるのはあの人ですから。性格は褒められたものではないですが、嘘を吐くとも思えません」

あの人とは、もちろん駐トリスティン大使をやっている白い悪魔だ。

その言葉に、アニエスも何故か納得できてしまう。

「わかりました」

「ただし、もし私が直にでも出る事態であるなら、直ちにお呼びなさい」

「はい陛下！」

「ではアニエスさん、こちらへ」

「わかった」

アニエスはすぐに尾崎とともに艦外へと向かった。

一方アンリエッタは、何事もなかったかのように食堂へと戻った。

視察と…… 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

叛乱と治療 1 (前書き)

ちよつと日本編を止めて、番外編的な話を書きます。おそろしく3
話もあれば終わると思います。

叛乱と治療 1

63日目未明 トリステイン王国・王都トリスタニア郊外 日本大使館

日本大使館は以前貴族が使っていた屋敷を、トリステイン政府が貸与したものだ。その広い敷地（日本人の感覚で見ても）の周囲には塀があり、もし門を通らずに中へ入ろうとすると、この塀を突破しなければならぬ。

しかしながら、空中浮遊の魔法が使える『メイジ』にしてみれば大した障害にはならない。加えて、平民であつてもそうした「仕事」になれた人間なら、塀を越えるのは不可能ではなかつた。

この日の未明、10人ほどの人影が日本大使館の塀を乗り越えて侵入を図っていた。内4人は空中に浮いているので、『メイジ』であることが一目瞭然であつた。

大使館内の灯はほとんど点いておらず、外からだほとんどの人間が寝入っているようにしか見えない。

「よしよし。日本人はどうやら眠っているようだな」

「こいつは予想していたよりも早く終われるかも知れないぞ」

「ああ、出来れば朝の内に決着させたいからな。昼は暑くてかなわん」

「にしても、随分と無用心だな」

「連中はドラゴンを倒せる武器を持っているって話だが、それで油断しているんじゃないか？所詮『平民』しかない国の連中だろ？」

1人の『メイジ』が魔法至上主義を億尾にも出さずそう言った時であった。

「侵入者に告げる！ここは日本大使館の敷地である！ただちに退去せよ！」

「な！？」

「見つかった！？」

「どこだ！？」

だが辺りは相変わらず闇に包まれ、人の姿はない。しかしながら、同じ文句が何度と無く繰り返される。

「そこか！」

『メイジ』が声のした方向に『ファイアー・ボール』を放つ。そしてそれは確かに直撃した。だが、声を発しているであろう人ではなかった。何かの箱のようなものであった。

「何だこいつ？」

その疑問も解けぬうちに、突然彼らの周囲が昼間のように明るくなった。予め配置についていた大使館警備の自衛隊によるサーチライトの照射であった。

「お前たちは完全に包囲されているぞ！命が惜しかったら投降しろ！！抵抗すると容赦なく撃つぞ！」

拡声器で増幅された警備の自衛隊の司令官、梶田一尉の声が侵入者たちの耳に突き刺さった。

「ヤバイゾ！」

「逃げろ！」

「この！」

逃げ出した男たちの内、数人が魔法や持っていたマスケット銃で反撃してきた。その内の1発がサーチライトの一つに命中した。

「うわ！？」

操作していた隊員が悲鳴を上げる。幸い直撃寸前に離れたので怪我はない。

だが、これで自衛隊員も「本気」になった。

「撃て！」

ドガガガ・・・

「ギャ！？」

「ガッ！」

数名が89式小銃の射撃の前に倒れた。

さらに。魔法を使って逃げようとする『メイジ』には。

「はいはい、逃がさないよ」

バン！

「グー!?」

M24狙撃銃を操作する友澤文夫三等陸曹が、死なない程度に動けない傷を負わせて、叩き落した。

結局、賊が全滅するのに要した時間は20分もなかった。

「状況報告」

戦闘が終結したと見るや、梶田は部下に損害と戦果を報告させた。

「侵入した賊は計10名。内4名を射殺し6名を捕まえました。この内3名が重傷です。こちらはサーチライト1基とスピーカー1基全損。軽傷1名です」

「けが人は直に医務室へ運べ。くれぐれも殺すなよ。ついでに油断するなよ」

「了解です」

部下は敬礼すると、すぐにその場を離れた。

「状況は今の通りです。本多大使」

「御苦労様でした。ククク……さすがは自衛隊の精鋭だけありますね」

相変わらず無気味な笑みを浮かべながら言う本多。だが、梶田はそんなこと全く気にしなかった。いや、気に出来るわけがなかった。

「まさか本当にこんな形で戦闘を行うことになるとは」

日本大使館への襲撃の可能性は、以前からそれなりに警戒されていたことであった。しかしながら、実際に襲撃が起こり、駐留している自衛隊が戦闘を行うことは、やはり実戦経験がない人間（梶田はドラゴンとの戦闘時は赴任していなかった）にとっては、シヨックな出来事であった。

「仕方がありません。あのまま侵入を許すわけにもいきませんし、相手が先に手を出してきたのですから」

「そりゃそうですかね」

とそこへ1人の男がやって来た。

「おう友澤、御苦労だった」

「はい。ふう。初めての实战って言うのは、緊張するもんですね」

溜息を吐いた友澤は、ヘルメットを外して座り込んだ。

「俺もだよ。足が震えださなにか気が気じゃなかった……とにかく、大使館を守り切れたんだ。感謝してるぞ」

「どうも……で、この襲撃はうちだけでしょうかね？」

「多分違いますね。おそらく王宮に対しても何らかの襲撃があったと思いますよ。まあ、全力で阻止されたでしょうけど。ククク……」

実際の所、彼女の言うとおりであった。王宮に侵入を図ったのは、大使館襲撃グループの倍の人数であったが、予め配置されていた魔法衛士隊、銃士隊、さらに通常の衛士によって阻止された。しかも、実はこの時彼らが最大の目標としたマザリーニ枢機卿やヴァリエール大臣らは王宮にはおらず、例え襲撃に成功していたとしても、空振りに終わっていただろう。

「今回ばかりはトリステイン王室に感謝ですね。早めに計画を知ることが出来ましたから」

「ええ。ですが、これは序盤戦に過ぎません。敵の狙いは王宮と大使館への襲撃と、それによる混乱に乗じて軍勢をトリスタニアに突っ込ませて一気に政権の転覆を図ると言うものだそうですから」

「軍勢というのはどれくらいなんでしょうね？」

友澤の間に、珍しく本多が口元に手を当て考え込んだ。

「さあ？そればかりはなんとも。複数の貴族が演習名目で兵を動かしているそうですが、実際の所どの程度の兵を集められたかは不明だそうです。ただし、トリスタニア全域を制圧できる程度の兵は集

めたのでは？」

「となると、少なくとも1000か2000は必要ですな」

梶田はそうのように判断した。

「もしそれだけの兵士が攻めてきたら、止められますか？」

「場所と時間によれば大丈夫だと思いますよ」

梶田はそう言い切った。

と、その時。

グワーン……

「な、何だ？」

街のどこからか、強烈な風が吹く音が聞こえてきた。

さて、実際の所襲撃はトリスタニアの2ヶ所だけではなかった。

他にヴァリエール公爵の屋敷や、ラ・ロシエールに停泊中の海上自衛隊の護衛艦「さざなみ」などにも襲撃が加えられていた。

ただし、この2ヶ所への襲撃も結果は惨憺たるものであった。ヴァリエール公爵の屋敷への襲撃は半ば成功したと言ってよかったが、襲撃犯にとって幸か不幸かヴァリエール公爵を含む家人は全員不在。メイドや執事数名に犠牲が出ってしまったが、襲撃犯は駆けつけた衛

士の攻撃を受けて退散した。

「さざなみ」への襲撃犯は悲惨で、攻撃を仕掛ける前に乗っていた船ごと発見された。もちろん、大使館同様まずは音声による警告を受けた。だが、それに従わず攻撃を掛けたのが間違いだった。

「さざなみ」は主砲である127mm砲を発砲して犯人グループを乗っていた小船ごと吹っ飛ばした。結果、賊は全員死亡して、襲撃した中で唯一犯人が全滅となった。

そして、トリスタニアにあったヴァリエール公爵家の別邸も襲撃を受けたが、ここを襲撃した連中が一番悲惨だったかもしれない。泊まっていた『烈風カリン』こと公爵夫人のカリーヌの反撃を受けて、有無言わず吹っ飛ばされたからである。

梶田たちが戦闘終了後に聞いた強烈な風の音は、彼女が放った風魔法の音であった。

その他の地点にも襲撃はあったが、いずれも警戒されており尽く撃退された。もちろん、撃退した側にも被害は出たのであるが、少なくとも政府要人や重要拠点を失うようなことはなかった。

そして、残るトリスタニア制圧を目論む貴族の私兵集団を撃破することが課題となったが、実際の所これはそう難しい話ではなかった。

何故なら、実際の所この私兵集団の規模は1000人にも満たなかったからだ。転移後の経済の悪化や気候の変動の影響で兵が思うように集まらなかったのだ。これは蜂起した貴族が良くて中レベル、多くは小レベルの財力しか持たない貴族でしかなかったからだ。

彼らは日本と結び改革を進める姿勢をとったアンリエッタに反発こそしたが、それはヴァリエール家のように改革をやり過ぎせるだけの財力を持ち合わせていなかったことの裏返しであった。

そんな状況であったからこそ、短時間でトリスタニアをはじめとする要所や政府要人を少人数の襲撃で制圧し、小規模な兵力でトリスタニア攻略を目論んだ。

だが最初の襲撃が失敗した時点で、いやそもそもクーデターの情報が漏れていた時点で、クーデター自体の破局は決まっていたようなものであった。

大使館襲撃から1時間後、ようやく王宮への賊の侵入と撃退成功、そして叛乱を企てた貴族の軍勢がトリスタニアに接近していると言った情報が入った。

「我々は既に明確な侵略行為を受けています。またトリステイン政府からも出動要請が来ています。なので、自衛隊の皆さんには是非とも出動をお願いしたのですが？ククク……」

と、白い悪魔こと本多聡子は申ししたが、最終的に自衛隊の指揮官である梶田一尉は出動を決定し、日本から持ち込んでいた偵察警戒車や戦闘装甲車を出動させた。

もちろん、トリステイン政府側も王都トリスタニアに駐留していた兵力から出せるだけの兵力をだしている。

この時点で、既にクーデター軍は首謀者のレニン伯爵以下全員がトリスタニアに対する襲撃失敗を知っていたが、今さら引き下が

することも出来ず、王政府側の最初の投降勧告を無視した。

その結果は、自衛隊が持ち込んでいたMAT（新旧）や対戦車ミサイル、さらに無反動砲や迫撃砲における攻撃であった。地面に露出している兵士に対して、こうした兵器は威力過剰とも言えた。これだけで多くの兵士が戦意を喪失した。

さらに、マンティコア隊をはじめとするトリステイン軍が攻撃する構えを見せたことで、結局クーデター軍は降伏し、瓦解してしまった。

こうしてトリスタニアを騒がしたクーデター騒ぎは半日も経たずに収束した。

ちなみに、この時の戦闘がトリスタニア市民に日本軍（自衛隊）強しと言う印象を現実的なものとして与えたと言われている。

叛乱と治療 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

叛乱については、当初もつと大規模なものにしようかと考えていました。ところが、その必要性が小さくなったので半日で制圧にしました。

叛乱と治療 2 (前書き)

ジョン・ドー先生に感謝します。

叛乱と治療 2

65日目午前 トリステイン王国・トリスタニア 日本大使館

「この度は迷惑を掛けてばかりですまない、本多大使」

「いえいえ。こちらこそ、そちらからの情報提供のお陰で、色々助けられましたからね」

そう言つと、白い悪魔こと本多聡子は何時もの無気味な笑い声を漏ら……さなかつた。

どうして彼女が何時もの癖を止めたかと言えば、それは今話しているヴァリエール公爵と共にいる人物が関係していた。

今彼の後ろにはピンク色の髪を持つ2人の女性が歩いていた。一人はヴァリエール公爵夫人のカーリーヌ、そしてもう1人は次女のカタレアであつた。

どうしてこの2人が日本大使館に足を運んだかといえば、それは子供の頃から病弱なカタレアを日本の医者に診せるためであつた。

カタレアはこれまでに、多くの医者に診てもらつて来た。純然たる階級社会のハルケギニアにおいて、ヴァリエール公爵家は最高ランクの貴族だ。当然、彼女はその家柄に相応しい名医達に診てもらっている。

ところが、それにも関わらず病名は一切不明。加えて、どんな魔法薬を投与しても病状に改善の兆しが見られなかつた。つまり、八

ルケギニアの医療レベルではお手上げであり、医者たちは匙を投げてしまった。

ヴァリエール夫妻にとって、カトレアの病気は悩ましいことであった。そのために彼女は屋敷から出ることもままならず、また結婚すら出来ないでいた。

ヴァリエール公爵は自分の領地を彼女に分け与えて分家を作るなど気遣いを見せたが、それと病気が治るとは別問題である。

なんとかして彼女の病気を治してやりたい。それは2人にとっての願いであった。

そんな時に起きたのが異世界への転移である。そして日本との出会いであった。

ヴァリエール公爵は最初、日本についてあまり期待はしていなかったが、その後日本の技術を見せられるに従い、徐々にその医療技術にも興味を持ち始めた。特に日本の自衛隊がドラゴンとの戦闘で見せた救急能力は、ヴァリエール公爵にも伝わり、ひよっとしたら日本の技術ならカトレアを救えるのではと思い始めた。

そこで、妻カリーヌに連絡をとってなんとかカトレアを診せられないかと相談した。ここで問題となるのは、カリーヌが平民の技術を認めるかと、カトレアがトリスタニアに来られるかであった。

日本大使館の了解はすぐ得られたので、後はこの問題をクリアするだけであった。

この内カリーヌの方はすぐに了承した。彼女はどんな方法でもよ

いからカトレアを助けたかったのだ。

後はカトレアの体力の問題であったが、こちらは現在最速で移動できる竜籠にある工夫をして彼女にトリスタニアまで来てもらう方法を採った。大型の竜籠に特製の寝台を設えて、体を横にしたまま王都まで運べるようにしたのだ。

こうしてカトレアは王都に到着、後は診察と言う時に叛乱が起きてしまった。もちろん、診察はお預けである。何せ大使館に常駐する医師や看護師は、ケガ人の治療を行わなければならなかったからだ。

そのせいかわからないが、トリステイン王政府による叛乱軍狩りは熾烈を極めていた。「芋のつるの先まで掘り起こす！」と言わんばかりに、関係者をズルズルと釣り上げていた。

ただし、そこは大人。対外的な印象（つまりは日本に対する配慮）を良くするため、即決裁判による処刑などということはずせず、取あえず監獄にぶち込んでいた。もちろん、この時は容赦しない。

それはともかくとして、2日遅れでようやくカトレアは日本人医師に診察してもらったこととなった。

相手は現在内務大臣を努めていて、トリステインでも1・2を争う名門貴族の子女。当然ながらいい加減なこととはできない。そして何より、本多も『烈風カリン』を無用に怒らせたくはないので、彼女の御機嫌を損ねるようなマネは控えていた。

「こちらの部屋となります」

本多が一つの部屋の前で止まった。公爵たちには読めなかったが、扉には「医務室」と書かれた神が貼られていた。

本多が扉をノックする。

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開け中へと入る一行。

そこで待っていたのは、ヴァリエール公爵たちが予想していたのとは少々違う光景であった。

「占部先生、こちらが本日診察していただくカトレア嬢と御両親です」

「そうですね。はじめまして、本日診察させていただく占部久海です。よろしく」

女性医師が会釈すると、診察を受けるカトレアも笑顔で頭を下げる。

「よろしく申し上げます先生。カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ブル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌです。カトレアとお呼びください」

一方公爵とカーリー又は少々面喰っていた。

「女性の医師とは……」

「診てもらつたら、同じ女性の方がよろしいと思ひまして……女性では御不安でしょうか？」

本多の問を、ヴァリエールは慌てて否定する。

「いえ、そう言うわけではないのですが、男性の医師を予想していたので。それに随分とお若いようだが？」

「御安心を。彼女は民間人ですが優秀なお人です。まだ20代ですが、腕は確かです。それにどっちにしろ、今日他の先生方は出払っているのです」

本多が取り繕いの発言をする。占部が女性であり若いことを指摘されるのは、覚悟していたことだからだ。もちろん、それは占部も同じであった。

「それでは早速始めたいと思いますが、よろしいでしょうか？」

「あ、お待ちなさい」

すぐに診察に移ろうとした占部を止めたのは、カリィヌであった。

「何でしょうか？公爵夫人」

「カリィヌで結構です……娘のことを、宜しくお願いいたします」

「はい、わかっています。それでは、診察をスタートさせる前に……」

こうして、カトレアの治療はスタートした。

ただしカリー又はああ言ったが、実際の所彼女は不安を感じていた。これまでの治療の失敗によるトラウマもあったし、未知の技術への不安もあった。

それでも、一縷の望みがあるならそれに掛けることにしたのだ。

占部医師が最初に行ったのは、診察を開始する前に確認すること。すなわち本人の健康状態や体温などに関してだ。そしてこれまでの病状に関しての聞き取りも行われた。

それが済んで、ようやく通常の患者にやるのと同じく簡単な触診などを始めた。

これで1日目は終了した。

しかし、1日目の診察でははつきり言っても成果は出なかった。

「血圧、心拍数は正常。体温は若干低め以外、特に異常なし……これだけじゃ全くわからないわね。血液検査や尿検査とかもしてみないと」

こうして占部医師とカトレアの戦いが始まった。

彼女はその日から毎日大使館に通ってくるカトレアの診察を続けた。

その過程において行わなければならない検査では、ハルケギニアでは一般的ではない物もあり、その度に占部は懇切丁寧にカトレアや付き添いのヴァリエール夫妻に説明を行った。

そうして進めて行く中で、占部はようやく糸口になりそうなものを見つけた。それは彼女がよくする気管支喘息を思わせるせきや、時折体に出る発疹などから、一種のアレルギー性疾患ではないかという見立てであった。

「アレルギーならもしかしたら……ただここまで体力を奪う物かな？」

と不安に思ったが、異世界である以上何が起こるかわからない。あらゆる可能性を考慮しなければならなかった。

ちなみに、この時点で既に3日が過ぎており、彼女は持ち込んだ電子顕微鏡や検査器具での診断から、特に何かしら悪性の伝染病や病気を彼女が患っているとは思えなかった。

アレルギーが一番可能性が高いと思い、さらに一緒にいた医務官や看護師も賛成したので、占部は翌日からその線で行動に移った。

ヴァリエール家に遣えるメイドなどに彼女がとる食事の内容を聴取したり、彼女が住む環境から飼っている動物まで細かくチェックして、アレルギーの元になる物質をつかもうとした。

この作業にはもちろん、ヴァリエール公爵らが全力で支援したの
は言うまでも無い。

また治療を受けているカトレアも積極的に協力した。

だが、この仮説もすぐに暗礁に乗り上げることとなった。屋敷から離れて（つまりカトレアを王都住まいにした）食物を完全に切り替えても症状は治まることはなく、原因となる物質がなんであるかを突き止めることができなかった。

もちろん、占部自身もヴァリエール家へと行ったり、さらに日本から戻ってきたルイズにまで聞き取り調査をするなど、精力的に動いた。それでも、原因を特定出来なかった。

「うーん。どうしたものか？」

こうなると、占部としてもお手上げである。原因らしいものまでは突き止めたのに、その原因を掴めそうになかった。

「やはりこの設備では限界があるか……」

そもそも近代的な医療設備が無きに等しいトリスティンでは、日本から持ち込んだ医療器具が頼りになる。未知の国家での医療と言うことで、日本は高い水準の器具や医師を送り込んでいた。

しかしながら、やはり特設は特設である。自ずと限界というものがある。

カトレアの調子自体は以前より良くなっていた。占部がカトレアの今の状態に合致した食事や運動をとらせたからである。しかし、相変わらず突発的な眩暈やせきなどは止まる様子がなかった。

「私自身も余裕がなくなってきたし」

日本大使館の医師は全部で4人であるが、全員が全員治療を行うわけではなく、地方の衛生環境やこの国における医療の実態調査なども職掌に含まれていた。さらに、トリステインの医師に対して地球の医学を伝える仕事も新たに加わっていた。

こうなると、占部もカトレアに付きっ切りで何時までも治療をしてはられない。

「……仕方が無い。あの人に頼むか」

治療を開始して1ヶ月、占部はある決断をした。

「そうと決まれば、早速実行に移さない」と

彼女は早速その案を実行に移すべく動いた。まず自衛隊を介して日本へと連絡をとってもらおう。続いてカトレアとヴァリエール夫妻を呼び出して、自分の案への同意を取り付ける。

この内カトレアとヴァリエール夫妻の許可はすぐにとれた。

「先生がそう仰るのなら是非、お願いいたします」

「私たちには、あなた以外に頼れる人がいません。あなたがそう言うなら反対はしません」

「ヴァリエール家で出来ることがあったら言っして下さい」

カトレアたちは、占部を信頼してくれた。

そして、日本へ飛んだ要請の答えも、翌日返ってきた。

「……ありがとうございます。双海先生」

返信内容を見た瞬間、占部はホッと息を吐いた。

叛乱と治療 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2780/>

交差する世界

2011年10月28日19時21分発行